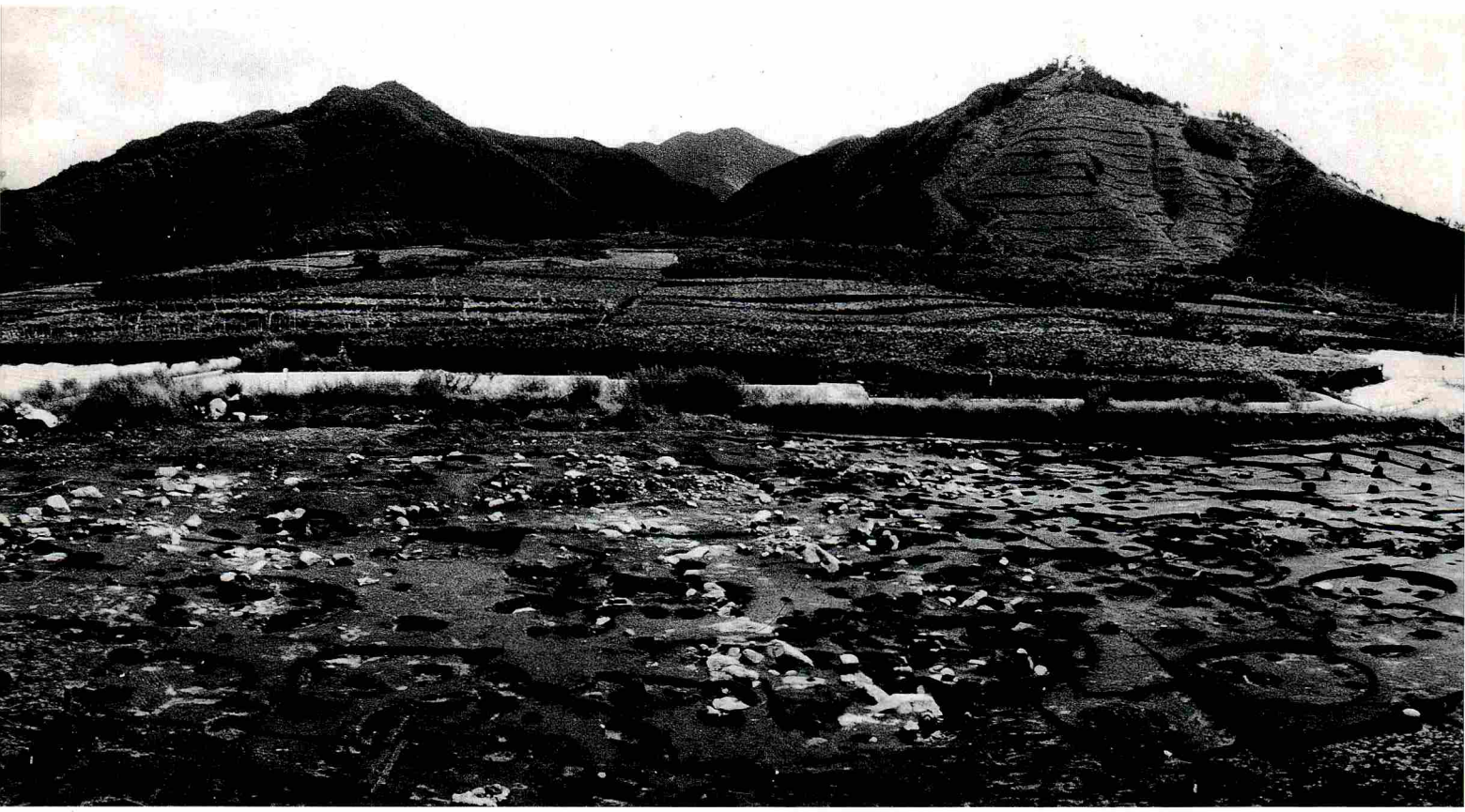
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集

釈迦堂 II

—本文編—

山梨県東山梨郡勝沼町三口神平地区

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書



1987. 3.
山梨県教育委員会
日本道路公団

序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち、山梨県東山梨郡勝沼町から東八代郡一宮町にかけて発掘調査された釈迦堂遺跡群のうち、勝沼町三口神平地区について、調査の結果をまとめたものであります。

釈迦堂遺跡群は1980・81両年度にわたって発掘された大遺跡群で、中央自動車道建設に伴う事前発掘は本遺跡群の発掘をもって終了し、1982年11月には中央自動車道西宮線が全線にわたって開通いたしました。

発掘調査の対象となったのは、京戸川扇状地上に点在する34か所の遺跡群のうち、5か所、約2万㎡に達する広大な地域であります。遺構や遺物は極めて豊富で、年代的にも先土器時代から平安時代に及びますが、質量ともに卓越するのは縄文時代であります。縄文時代の各期にわたって多数の住居址が発見され、大量の土器や石器が出土いたしましたが、特に中期の環状集落の遺構が検出されたことや一千体を越す土偶が発見されたことなどで注目を受けました。当埋蔵文化財センターにおきましては、これら発掘資料について鋭意整理作業を進めて参りましたが、昨年度は一宮町塚越A地区など3地区について、そして本年度は当三口神平地区及び一宮町野呂原地区について、それぞれその成果を刊行することができました。

三口神平地区の発掘面積は5か所中最も大きく、約10,000㎡に達しますが、これをさらに4地区に分けて発掘いたしました。発掘された遺構は、住居址172軒、土壙約800基、土器すてば3か所という大規模なものですが、住居址は平安時代の5軒を除きすべて縄文時代に属しております。住居址の形態や出土の土器・土偶・石器等によって綿密な編年を施した結果、前期初頭の下吉井式期の10軒を除くとすべてが中期に属し、それも井戸尻式期に至って増加の傾向を示し、曽利式期において爆発的に激増し、全体のほぼ7割がこの期に属することが判明いたしました。特に重要なことは集落の構造が明らかになったことで、中期中葉には集落が環状を呈し、その中央部を広場とし、その外側に土器すてばを伴う様相が認められ、後葉に至るとさらにその規模を拡大することが確認されました。これらの遺構のほか、土器・土偶・土製品・石器等のおびただしい出土品についても、地区別に整理して一覧表で示し、物心両面にわたる縄文時代人の生活の実相を追求する貴重な資料を提供しております。

釈迦堂遺跡群の調査も、このたび全3冊の報告書の刊行によって完了し、縄文時代を中心とするこの大遺跡群の全容が、はじめて詳細かつ組織的に解明されました。特に遺跡群中最も重要な地域を対象とする本報告書の刊行は、学界を裨益するところ少なくないと信じます。本報告書がより多くの方々にご利用いただけますよう念じてやみません。

本報告書が刊行されるまでには、直接発掘作業に参加された方々をはじめとして、大量の出土品を迅速かつ精確に整理された方々、専門の事項について種々ご教示・ご指導を賜わったり、執筆を分担されたりした方々など、実に大勢の方々のお世話になりました。また関係各機関や地元地区の皆様からは、終始多大のご援助・ご協力を賜わり、作業を円滑に推進することができました。

末筆ながら、お世話になった方々に改めて厚く御礼申し上げます。

１９８７年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1．遺跡の呼称は釈迦堂遺跡群とするのがよいが、一般に釈迦堂遺跡とも釈迦堂とも呼びならわされているので、煩雑さを避け釈迦堂とした。

2．本書は山梨県東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町に所在する釈迦堂遺跡群のうち、勝沼町三口神平（さんこうじんだいら）地区の報告書である。また本書は本文編、図版編、写真図版編の３分冊からなる。

3．調査は日本道路公団第二建設局から、山梨県教育委員会が委託を受け、1980年２月８日から1981年11月15日まで実施したものである。

4．発掘調査は田代　孝、小野正文が担当し、調査員として、一宮町教育委員会の猪股喜彦、勝沼町教育委員会の室伏　徹が加わった。また出土品の整理、報告書の作成は小野が担当した。

5．調査区域は中央自動車道のセンター杭のうち２点を延長して、南側をＳ区、北側をＮ区として、それぞれ100ｍごとにⅠ～Ⅴ区まで設定した。

6．調査区の名称は、Ｓ―Ⅰ区が東八代郡一宮町塚越北Ａ地区、Ｓ―Ⅱ区が同郡塚越北Ｂ地区、Ｎ―Ⅱ区が東山梨郡勝沼町釈迦堂地区、Ｓ―Ⅲ、Ｓ―Ⅳ、Ｎ―Ⅲ、Ｎ―Ⅳ区が勝沼町三口神平地区、Ｓ―Ⅴ区が一宮町野呂原地区となる。野呂原地区は一宮町の飛地である。

7．本書の遺構写真は田代　孝、小野正文が、遺物写真は佐野博基、小野が担当し、焼付は小野が行った。

8．本書の展開写真は小川忠博氏によるものである。

9．本書土器実測図と土偶実測図の大半はシン航空写真株式会社に委託した。

10．本書の執筆は、「土壙・土器すてば・グリッド出土の土器一覧表」と「土器すてばの研究」を山形真理子が担当し、他を小野正文が担当した。

11．調査にあたっては、日本道路公団をはじめ、一宮町、勝沼町等の関係機関から、多大の援助があった。また整理作業においては一宮町より施設の提供を受けた。合せて感謝申しあげる。

12．発掘調査から本書の作成に至るまで、実に100余名の方々から、多大の御教示、御指導を賜わった。本来なら御芳名を記し、謝意を表すべきであるが、別の方法をとりたい。

13．発掘調査にあたって、地元の千米寺地区、石地区、藤井地区の御協力を得た。また発掘作業員として、上記地区をはじめとする多数の方々の御協力があった。御芳名を記すべきであるが、延べ２万人以上という人名のため、やむなく断念した。

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次

第 1 章　調査とその概要

第 1 節　調査の経過…… 1
第 2 節　調査の組織…… 1
第 3 節　釈迦堂遺跡群の位置…… 3
第 4 節　調査の概要…… 3

第 2 章　S—Ⅲ区の調査

第 1 節　縄文時代前期の住居と出土遺物…… 11
第 2 節　縄文時代中期の住居と出土遺物…… 12
第 3 節　埋甕と不明遺構…… 24
第 4 節　土器すてばA…… 25
第 5 節　平安時代の住居と出土遺物…… 25
第 6 節　住居址一覧表…… 26
第 7 節　土壙一覧表…… 29
第 8 節　土器一覧表…… 38
第 9 節　石器一覧表…… 68
第 10 節　土偶一覧表…… 75
第 11 節　土製円盤一覧表…… 85
第 12 節　土製品一覧表…… 91
　A．把手
　B．耳栓
　C．有孔薄円盤
　D．土鈴
　E．その他
第 13 節　粘土塊一覧表…… 96
第 14 節　有孔鍔付土器一覧表…… 97
第 15 節　台形土器一覧表…… 99

第 3 章　S—Ⅳ区の調査

第 1 節　縄文時代前期の住居と出土遺物…… 101
第 2 節　縄文時代中期の住居と出土遺物…… 101
第 3 節　埋甕と不明遺構…… 110
第 4 節　土器すてばC…… 111
第 5 節　住居址一覧表…… 112

第 6 節　土壙一覧表…… 114
第 7 節　土器一覧表…… 120
第 8 節　石器一覧表…… 160
第 9 節　土偶一覧表…… 165
第 10 節　土製円盤一覧表…… 173
第 11 節　土製品一覧表…… 179
第 12 節　粘土塊一覧表…… 180
第 13 節　有孔鍔付土器一覧表…… 181
第 14 節　台形土器一覧表…… 184

第 4 章　N—Ⅲ区の調査

第 1 節　縄文時代中期の住居と出土遺物…… 187
第 2 節　土器すてばB…… 187
第 3 節　住居址一覧表…… 188
第 4 節　土壙一覧表…… 188
第 5 節　土器一覧表…… 188
第 6 節　石器一覧表…… 191
第 7 節　土偶一覧表…… 192
第 8 節　土製円盤一覧表…… 194
第 9 節　土製品一覧表…… 196
第 10 節　粘土塊一覧表…… 196
第 11 節　有孔鍔付土器一覧表…… 196
第 12 節　台形土器一覧表…… 197

第 5 章　N—Ⅳ区の調査

第 1 節　縄文時代中期の住居と出土遺物…… 199
第 2 節　土器すてばB…… 199
第 3 節　住居址一覧表…… 200
第 4 節　土壙一覧表…… 200
第 5 節　土器一覧表…… 201
第 6 節　石器一覧表…… 209
第 7 節　土偶一覧表…… 210
第 8 節　土製円盤一覧表…… 217
第 9 節　土製品一覧表…… 221
第 10 節　粘土塊一覧表…… 222
第 11 節　有孔鍔付土器一覧表…… 223
第 12 節　台形土器一覧表…… 226

第 6 章　ま と め

第 1 節　土器の概観…… 229
第 2 節　集　　落…… 241
第 3 節　土 製 品…… 269
第 4 節　土器すてばの研究…… 279

挿　図　目　次

挿図１　釈迦堂遺跡群の位置図（山梨県）
挿図２　釈迦堂遺跡群の位置（１／25000）
挿図３　釈迦堂遺跡群地区図
挿図４　中央自動車道路線図
挿図５　釈迦堂遺跡群遺跡分布図
挿図６　新道式土器の層位関係
挿図７　曽利式土器の縄文
挿図８　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区釈迦堂Ｚ２式期の集落
挿図９　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区五領ヶ台式期の集落
挿図10　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区狢沢式期の集落
挿図11　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区新道式期の集落
挿図12　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区藤内式期の集落
挿図13　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区井戸尻式期の集落
挿図14　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利期の集落
挿図15　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利古式第一段階の集落
挿図16　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利古式第二段階の集落
挿図17　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利古式第三段階の集落
挿図18　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新式第一段階の集落
挿図19　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新式第二段階の集落
挿図20　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新式第三段階の集落
挿図21　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新式第四段階の集落
挿図22　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新新式期の集落
挿図23　釈迦堂全区集落図
挿図24　埋甕分類型図（１）
挿図25　埋甕分類型図（２）
挿図26　狢沢井戸尻式期の土偶の形態分類
挿図27　曽利式期の土偶の形態分類
挿図28　接合同一土偶
挿図29　接合同一土偶
挿図30　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区土偶接合図
挿図31　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区グリット出土土偶分布図
挿図32　土器すてばＡ内土器接合関係図
挿図33　土器すてば関連の広域接合関係図
挿図34　土器すてばグリットの設定
挿図35　土器の重さ
挿図36　土器すてば内重量・個体数の変遷
挿図37　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区土製円盤分布図
挿図38　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区有孔鍔付土器分布図
挿図39　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区粘土塊分布図

挿図40　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区台形土器分布図
挿図41　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（１）
挿図42　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（２）
挿図43　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（３）
挿図44　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（４）
挿図45　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（５）
挿図46　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区土器重量表（６）
挿図47　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区　Ｓ－Ⅳ区　Ｎ－Ⅲ区　Ｎ－Ⅳ区石材重量表
挿図48　早期末～前期初頭の土器編年表
挿図49　前期の土器編年表（１）
挿図50　中期の土器編年表（２）
挿図51　中期の土器編年表（３）
挿図52　中期の土器編年表（４）
挿図53　中期の土器編年表（５）
挿図54　中期の土器編年表（６）
挿図55　中期の土器編年表（７）

付　　表

付表１　土器すてばＡ内土器接合関係図付表
付表２　土器重量・個体数基礎データ一覧表
付表３　土器すてば内時期別重量・個体数の割合

第１章　調査とその概要

第１節　調査の経過

1979年11月21日	文化庁に発掘通知を提出する。
12月18日	文化庁より県教育委員会に発掘通知の受理通知書が送付される。
1980年２月８日	東八代郡一宮町千米寺塚越北Ａ地区（Ｓ―Ⅰ）のクイ打ち作業開始。
２月12日	Ｓ―Ⅰ区の発掘調査開始。
11月２日	Ｓ―Ⅲ区～Ｓ―Ⅳ区の発掘調査を本格的に開始。冬期に入るため、精査を断念し、遺跡全域の試掘調査を開始。この間Ｎ―Ⅱ区の遺構を検出。
1981年11月15日	発掘作業を終了する。
11月16日	この日が日曜日であったため、最終的な確認作業を行う。
11月17日	発掘作業の終了したが、保存問題等もあり、Ｓ―Ⅲ区SB―108、Ｓ―Ⅳ区SB―32、SB―72のレプリカ作成を開始する。

第２節　調査組織

＜発掘調査＞

調査主体　山梨県教育委員会

調査担当　田代　孝（県文化財主事）

　　小野正文（　〃　）

調　査　員　猪股喜彦、室伏　徹、佐野勝広、横倉雅幸、外山泰久、山下孝司、日向千恵

調査補助員　青柳弘美、秋田かな子、秋山千恵、大橋瑠璞、奥山和久、河西佳子、勝田あけみ、川島園枝、櫛原功一、桑折礼子、小林宇壱、小林　斉、小林正彦、五味研治、斉木義一、佐藤美鈴、佐藤好枝、三五康司、志村和子、信藤祐仁、杉浦章一、高橋葉子、田村和幸、成島京子、広川珠美、藤田菜穂子、古谷健一郎、堀金　靖、三谷雅章、矢崎佐百合、山田周平、山田美作子、山根弘人

＜整理作業＞

整理担当　小野正文（県埋蔵文化財センター文化財主事）

調　査　員　横倉雅幸、奥山和久、佐野博基、山形真理子

調査補助員　秋田かな子、浅利　司、大橋瑠璞、北村玲子、櫛原功一、桑折礼子、古谷健一郎、森田安彦

整理作業員　雨宮照子、雨宮正人、飯島由美、岩間喜美枝、岩柳弘子、内田裕一、小河いつゑ、小川苗美、奥村澄江、笠原美登里、加藤　道、金子美枝、小宮山葉子、五味はるみ、三枝明仁、坂野恭子、里吉あつ子、佐野靖子、白沢多恵子、田草川かみ志、田中きくの、津田元栄、土屋浩司、鶴田成美、中川千春、早川きくえ、早川君子、樋川歌子、広瀬ます子、古屋香代子、保坂正美、松岡美恵子、丸山つぎ子、水上きよみ、武川明美、武藤　敏、八代米子、矢房静江、山下延子、

山下弘美、山村正光、依田ハル江、渡辺美代子、山内春美、奥山久子

＜土器洗浄・注記・接合・分類＞
雨宮、岩間、岩柳、小河、小川、奥村、笠原、金子、坂野、佐野（靖）、白沢、田草川、田中、早川、早川、樋川、広瀬、松岡、丸山、八代、矢房、山下、依田、渡辺

＜土器復元＞
浅利、櫛原、桑折、古谷、雨宮（正）、内田、加藤、津田、武藤、山村

＜分　　類＞
横倉、奥山、山形、秋田、浅利、大橋、北村、櫛原、桑折、古谷、森田、飯島、水上、武藤

＜土器拓影＞
山形、秋田、大橋、北村、桑折、森田、飯島、小川、小宮山、五味、坂野、里吉、佐野、鶴田、中川、古屋、保坂、水上、武川、武藤、八代、矢房、山下、山内、奥山

＜土器実測図＞
奥山、秋田、浅利、飯島、大橋、北村、櫛原、桑折、古谷、森田、山形、小川、小宮山、五味、里吉、中川、古屋、保坂、武川、武藤、矢房、山下、山内、奥山

＜土器トレース＞
秋田、桑折、飯島、小宮山、五味、里吉、佐野、鶴田、中川、古屋、武川、矢房、山下、山内、奥山

＜土器・土偶の補描とトレース＞
古屋

＜一覧表作成＞
飯島、小川、佐野、三枝、土屋

＜土器データ表＞
山形、秋田、浅利、櫛原、古谷、小川、小宮山、五味、里吉、中川、古屋、保坂、武川、武藤、矢房、山下、山口、奥山

＜土器・土偶整理カード＞
飯島（協力　早川清美）

＜写真撮影＞
佐野、小野

＜写真焼付＞
小野

＜図版作成＞

小野、飯島、里吉

＜執　　筆＞

小野、山形

第 3 節　　釈迦堂遺跡群の位置

釈迦堂遺跡群は山梨県東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町にまたがる京戸川扇状地（藤井扇状地）の扇央部に位置する。遺跡名のもととなった釈迦堂は、両町にまたがる字名で、現在も小さな杜が残っており、小さな祠と石棒が祀ってある。

この扇状地は地理学上著名で、かつては教科書にその地形図が掲載されたこともあった。蜂城山（標高738ｍ）と岩崎山（標高880ｍ）の間を流れる京戸川の押し出しによって形成されたこの扇状地は扇頂から扇端まで約2,500ｍを測り、広大面積となり、モモ、ブドウの栽培の適地となり、付近有数の果樹園地帯となっている。大まかに見れば一宮町側がモモ、勝沼町側がブドウということになる。遺跡はその間に立地していたことになる。

分布調査の成果によれば、この扇状地上に34ケ所の遺跡が点在している。

第 4 節　　調 査 の 概 要

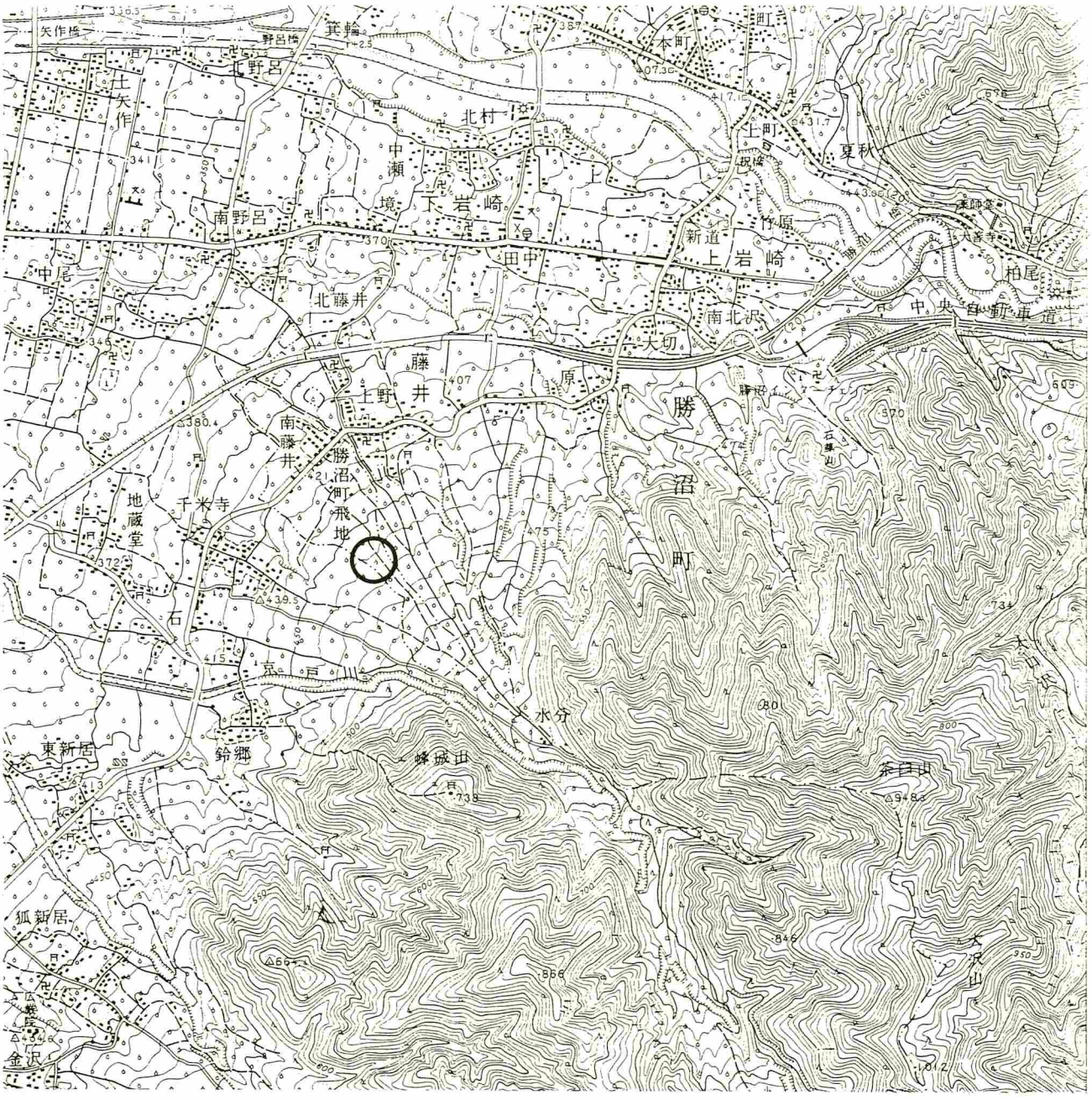
調査の概要

時　期	S—Ⅲ　SB　No.	S—Ⅳ　SB　No.	N—Ⅲ SB No.	N—Ⅳ SB No.	備　考
釈迦堂Ｚ２式	47、52、102、107、108、110、112	54、57、59			
五領ケ台式	29—1	41、（47・49）、48、51			
狢　沢　式	20	06、73			
新　道　式	18、78、95、111	53、68、69、80、81			
藤　内　式	49、84、87、100、106	32、52			
井戸尻式	09、26、27、29—2、33、35、38、36、48、65	18、34、40、60、83			
曽　利　式	04、05、06、07、08、10、11、12、13 15、16、17、19、21、22、23、24、25 29—3、30、34、37、39、40、41、43、 44、46、50、51、53、54、55、56、57 58、59、60、62、63、64、66、67、68 69、70、71、72、73、75、76、77、80 81、82、83、85、86、88、89、90、91 92、93、94、95、96、97、98、101、 103、105、109、113	01、02、03、04、05、07、08、09、10 11、12、17、20、21、23、24、25、27 28、30、31、33、44、50、55、56、62 63、64、65、66、67、70、71、72、74 75、76、77、78、79	01、02、03	01、02、03	
平　安	01、02、03、14、28				

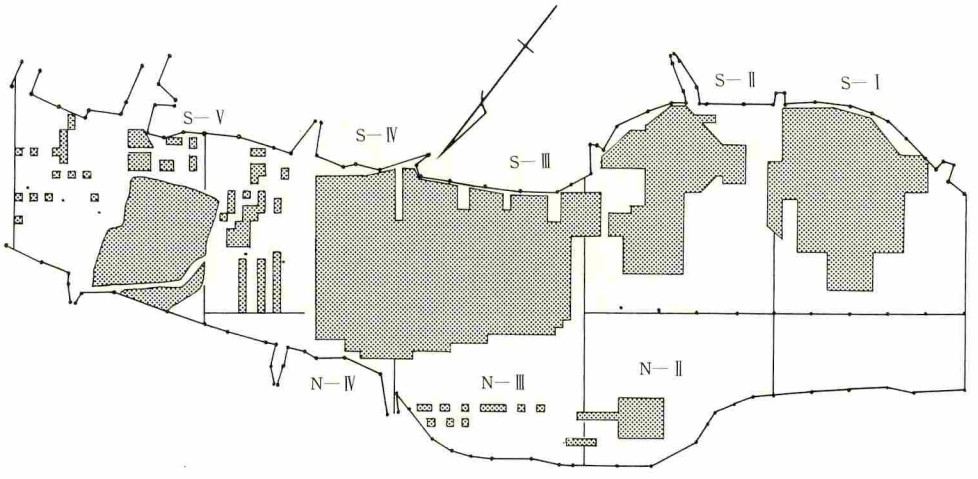
＜S—Ⅲ区＞

この地区では、前期初頭に位置する下吉井式期にあたる釈迦堂Ｚ２式期の住居址が、SB—47、52、102、107、108、110、112と、計７軒検出された。この中でSB—47からまとまった資料が出土した。中期では、五領ケ台式期はSB—

挿図１　釈迦堂遺跡群の位置図（山梨県）



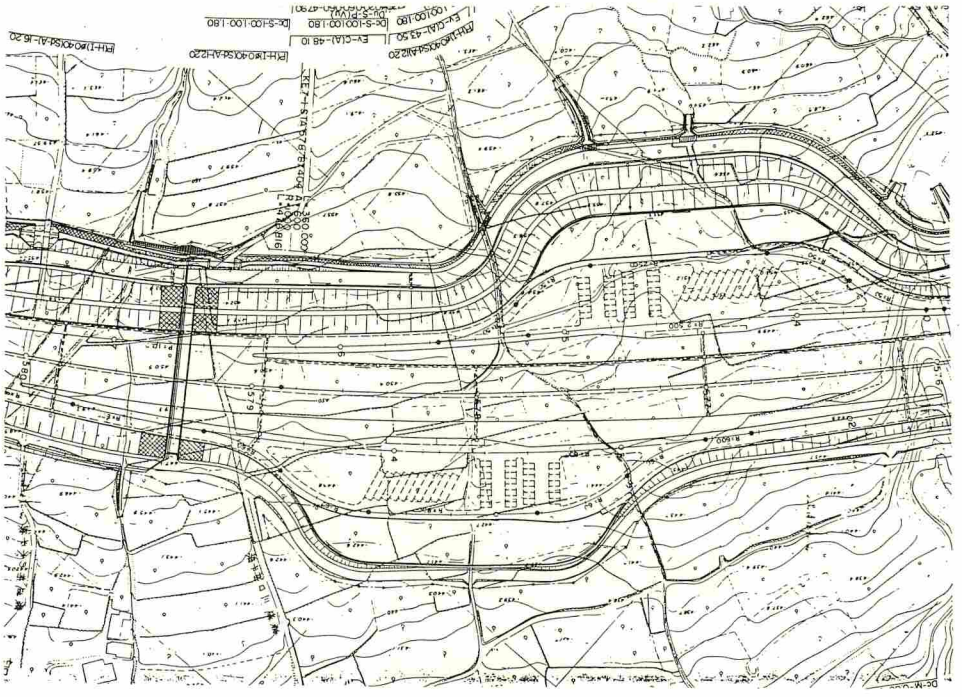
挿図２　釈迦堂遺跡群の位置（１／25000）



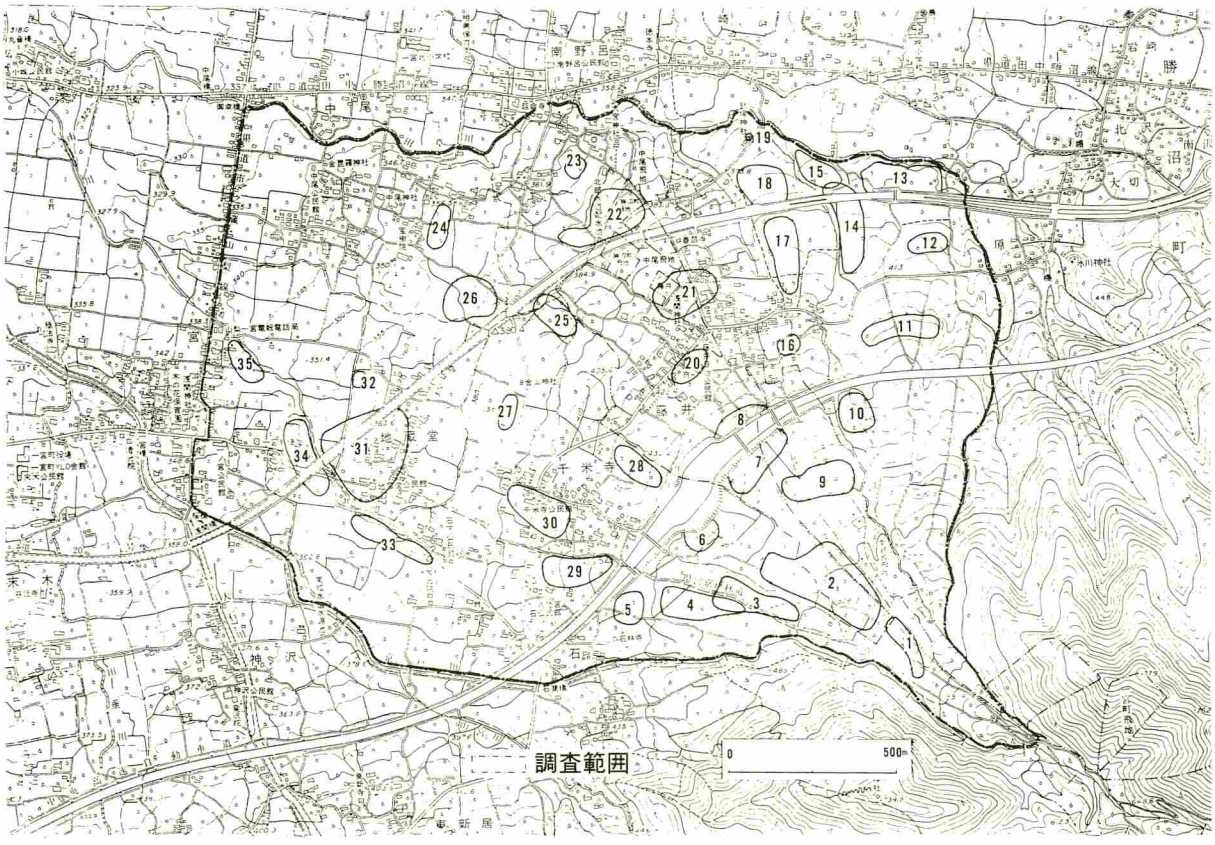
S—Ⅰ区　塚越北A地区　　S—Ⅱ区　塚越北B地区　　N—Ⅱ区　釈迦堂地区

S—Ⅲ・S—Ⅳ・N—Ⅲ・N—Ⅳ区　三口神平地区　　S—Ⅴ区　野呂原地区

挿図３　釈迦堂遺跡群地区図



挿図４　中央自動車道路線図



挿図５　釈迦堂遺跡群遺跡分布図

No.	遺跡名	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥～古	歴～中世	No.	遺跡名	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥～古	歴～中世
1	日向林	○		○	○				18	鉢塚古墳						○	
2	物見塚	○		○	○			○	19	藤井田			○				
3	山道添				○				20	松本			○				
4	鎧塚A						○	○	21	馬込						○	○
5	〃 B			○	○				22	宮田							○
6	塚越北A	○	○	○	○				23	地蔵久保1.			○				
7	三口神平			○					24	〃 2.			○				
8	野呂原			○					25	妻神							○
9	末新田		○	○	○				26	本木							○
10	西藤塚			○	○				27	釈迦堂	○					○	○
11	大築地		○	○	○			○	28	若宮			○			○	○
12	雁屋敷			○	○			○	29	南屋敷							○
13	岩崎館跡							○	30	西田						○	
14	御所畑							○	31	西田北							○
15	天神堂								32	十二社						○	
16	上野			○					33	田村						○	○
17-1	白川							○	34	桜坪						○	○
17-2	寺平			○													

29－1の１軒にすぎない。狢沢式期もSB—20の１軒である。

新道式期に入り、やや増加の傾向をもち、SB—18、78、95、111がある。この中でSB—95がよくまとまった資料で、新道式期の新しい部分のよい資料で、藤内式期のSB—84とも重複関係をもつことからも重要である。

藤内式期はSB—49、84、87、100、106がある。この中で、SB—49、84、87はそれぞれ埋甕をもっており、特異な例である。出土遺物はSB—84でまとまって出土している。

井戸尻式期に至って、住居の増加の傾向は著しいものがある。SB—09、26、27、29-2、33、35、38、36、48、65と10軒となる。いずれも重複等があり、まとまった好資料を出土した住居址は少ないが、SB—36がややまとまっている。

曽利式期に至るとまさに急激に増加する。これらはすべてで119軒となる。周知のように曽利式土器は一般に５型式に細別される。よって、これらの住居址も細別して、説明されなければならないが、ここでは、とりあえず119軒としておく。

曽利終末期と思われるものを抽出すれば、柄鏡形住居址のSB—55、85、86、98が見られる。この他にもSX—02、04、もこの期の住居址の残欠と考えられる。

縄文中期が終わると、後期の遺構はほとんど認められず、晩期はなく離れて平安時代末の住居址が、SB—01、02、03、14、28と認められた。

他に埋甕が数点あり、これらも何らかの遺構に伴ったと思われるが不明である。

土器すてばＡは、三口神平地区西端にあるもので、土器の移動等から、この地区の集落に伴うものと判断される。広さは約288㎡である。

土壙は407基検出されているが、時期の確定できるものは少ない。SK—271のように石匙を伴うもの、SK—48のように土偶頭部を埋設するもの、SK—01のように井戸尻式期の土器を埋設するものがあるが、Ｓ—Ⅳ区のように土器埋設の曽利式期のものはほとんどない。

＜Ｓ—Ⅳ区＞

この地区では、釈迦堂Ｚ２式期が、SB—54、57、59とあるが、いずれも攪乱の著しいものである。これらはＳ—Ⅲ区と合せて10軒となり、Ｓ—Ⅰ区が神之木台式期の釈迦堂Ｓ１式～Ｓ４式さらには釈迦堂Ｚ１式まで認められることから、Ｓ—Ⅰ区との連続性が窺える。

中期の五領ケ台式期ではSB—41、（47・49）、48がある。47と49は同一住居址と思われる。Ｓ—Ⅲ区と合せると５軒となる。ただし、時期的に分離されるので、釈迦堂遺跡群は五領ケ台式期の住居は、点在的といえる。

狢沢式期ではSB—06と73が見られる。従来山梨県下では狢沢式期の住居址と出土遺物はほとんどなかったが、このSB—73でよくまとまった資料に恵まれたことになる。

新道式期に至って、SB—53、68、69、80、81がある。このうち68、69、80、81はすべて重なっていたのである。そして貼床と埋甕の関係から、SB—81→80→69という古から新という関係が証明されたことになる。SB—53は深さが130㎝以上もある特異な住居で、土器、土偶、石器とも群を抜いている。

藤内式期は、数が減り、SB—32、52の２軒となる。特にSB—32は該期のまとまった資料として重要である。

井戸尻式期では、SB—18、34、40、60、83がある。いずれもまとまった資料に欠けている。この中でやや良好な資料はSB—83である。

曽利式期はＳ—Ⅲ区と同様にすこぶる多く、41軒を検出している。これも先述したように時期別に分離して説明すれば、一時期は、平均的な数値となろう。特に、SB—55、56でまとまった資料が出土し、Ｓ—Ⅲ区と対照的な様相を示すこともまた重要である。

土壙は、301基検出されており、重要なものが多い。SK—05、52、53、128等である。曽利式期のまとまった資料としては、数少ない例である。

なお、土器すてばＣとした曽利式期末の土器すてばが形成され始めていたことは、土器すてばの性格、機能を知

る上で重要と思われる。

＜N—Ⅲ区＞

この地区では曽利式期の住居址3軒が検出されている。ここでは、土器すてばBが中心であるが、この地区の土器すてばの堆積は薄く、N—Ⅳ区寄りに1つのブロックが認められた。ただV—19グリッドで土器すてばの中に逆位の底部欠損埋甕が検出されている。土器すてばはN—Ⅲ区で約368㎡。

＜N—Ⅳ区＞

この地区では、曽利式期と思われる炉址のSB—01、02があり、柄鏡形住居の残欠であるSB—03が検出されている。

土器すてばBのうち、この地区が中心で土器の出土量もすこぶる多い。またF—17グリッドでケルン状の石積みがあり、この土器すてば形成以前よりの存在だと思われる。土器すてばはN—Ⅳ区で384㎡ある。

第２章　Ｓ―Ⅲ区

第 １ 節　　縄文時代前期の住居と出土遺物

SB―47

Ｕ―７に位置する長径415cm、短径385cmの住居址である。柱穴は６個認められたが、すべてが柱穴とは思われない。住居址中央部に焼土が認められたので、地床炉と思われる。

盤状石皿も炉の南に認められた。該期の住居址としては異時期の土壙が２基切り込むのみで、よく原形をとどめている。石器は稜磨石が１、磨石が６、石皿１、ユーティライズドフレイク１である。黒曜石10.6ｇである。水晶がまったく出土を見ないことは、Ｓ―Ｉ区の早期末の住居址とは様相をまったく異にする。

SB―52

Ｍ―５にある住居址である。当所中期の住居址と思って、調査を進めたが、柱穴がほとんど認められない点、炉址がなく、住居址の南東寄りに焼土が認められることから、これを地床炉と考え、出土遺物からも前期初頭の住居址と認めた。土壙が２基と集石が１基この住居址に切り込んでいる。図の18、19の曽利式土器もまた曽利期の土壙が存在した可能性を示す。石器は水晶の石鏃１、ドリル１、ピエスエスキーユ１、打斧８、ハンマー（敲打石）１、使用痕のある剥片（以下ユーフレ)7、フレイク・スクレイパー１、水晶14.4ｇである。この住居址では、Ｓ―Ｉ区と同様水晶が認められる。

SB―102

Ｕ―３に位置する。住居址覆土中に２ケ所も焼土が認められ、地床炉と思われる焼土は住居址の南東に位置する。柱穴は住居址の内側に円形に並ぶ、P_{10}は焼土下に認められた。石器は、石鏃２、打斧８、磨石６、石皿２、このうち１個は盤状の住居設置である。礫器３、玉石１、ユーフレ３、黒曜石22ｇである。出土土器は完形のタガ状隆帯文土器が１個のみで、他は少片多数である。

SB―107

Ｔ―７に位置する。長径（470）ｍ、短径440ｍのほぼ円形プランをなす。中期の土壙がいくつか重複しているが、ほぼプランが確定できる。柱穴はプラン内側にめぐり、この期の柱穴らしく、大きく深いものはない。

出土遺物に無繊維のものは見あたらないが、１は極く少ない。石器は見あたらなかった。

SB―108

Ｕ―２に位置する。長径500cm、短径300cmである。出土遺物も多数あり、火災住居を思わせるほど多くの焼土の堆積と炭化材が見られた。またＰでは柱穴が炭化して残っていた。この柱は丸材で、深くは埋設されていなかった。住居址の中央部がややくぼむのが、この時期の住居址の特色と思われる。

出土遺物の図化が出来得なかったが、大多数は無文の含繊維土器の体部片である。１は口縁部を欠くが、口辺下に１条の隆帯をめぐらす。隆帯上に貝殻背圧痕地に沈線を加えている。口辺部に沈線で波状文を描いている。３は、タガ状隆帯文の土器で、この期の特徴的な土器である。

石器は石鏃１、打斧１、磨斧１、磨石９、石皿２、礫器２、玉石１、ユーフレ３、溶岩１、フレイク・スクレイパー２、黒曜石57ｇ。

SB—110

S—2に位置する。（450）m×（400）mのほぼ円形プランを示す。炉址の位置は確認できなかった。出土遺物は少量であり、第94図の1が時期を考え得る資料である。口縁部に貝殻圧痕地に結節沈線文を施している。他は含繊維の体部片である。石器は磨石1、ユーフレ2、黒曜石1.6g、水晶3.3gである。

SB—112

W—2に位置する。長軸380cm×短軸320cmの楕円形プランをなす。小型住居址で柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4、P_5、P_7、P_8がこれにあたる。地床炉は床面中央部をやや掘り込めた該期の特色である。炉の北に盤状のやや厚手の石皿がある。

時期的には下吉井式期にあたる釈迦堂Z2式期にあたる。石器は石鏃1、磨石3、黒曜石4.9gである。

SB—110

中期の攪乱の著しい、不鮮明な住居址であったが、長軸（450）cm、短軸（400）cmをなす。炉址は柱穴であると考えられる。出土遺物は1が無繊維土器で、口唇部に貝殻背圧痕を施し、さらに結節沈線を加えているもので、釈迦堂Z2式期に属するものである。石器は磨石1、ユーフレ、黒曜石1.6g、水晶3.3gと極く少ない。

第2節　縄文時代中期の住居と出土遺物

SB—29—1

Y—9に位置する。SB—29-3である曽利式期の埋甕炉があり、SB—29-2の井戸尻式期の石囲炉の残存があり、これにSB—65が重なるという著しい重複のあった住居で、遺物を精査中に次々と炉址が検出されるという状況であった。

SB—29—1は、五領ケ台式期の埋甕炉であった。石器等はいずれに時期に属するかは判別できないものである。

SB—20

Y—9に位置する。狢沢式期の埋甕炉のみ検出できた。埋甕炉のまわりに焼土が多く見られた。埋甕炉は29、36の破片が古い埋甕炉であり、これを切って新しい埋甕炉が設置されている。これは長楕円文帯が2段めぐり、一部無文帯に波状結節沈線文をめぐらしており、さらに楕円文帯がめぐる。狢沢式でもやや後出のものであろう。

石器は石鏃1、ドリル1、ユーフレ12、黒曜石73g、水晶2.5gである。

SB—18

W—11に位置する。これも埋設された埋甕炉と思われるが、特に焼土の堆積は認められなかった。

SB—78

T—11に位置する。新道式の埋設土器と石囲炉と思われる施設があり、これが炉址であれば、また別の住居址の存在を考えなくてはならないが、炉址とは確定できないが、新道式の埋甕炉と考えた。

SB—95

F—4に位置する。藤内式期のSB—84と重複する。長径550cm、短径450cmである。小型の石囲炉をもつ。柱穴は8個認められる。出土遺物は新道式期の最も新しい部分に属するものであり、特に46、50、51、53などはしばしば

藤内式の縦区画文土器などと伴出することがあるが、これがSB—84と重複することによって、一時期を画していたと認められることは重要である。

石器は石鏃２、ドリル２、打斧12、磨斧３、磨石８、礫器１、ユーフレ７、スクレイパー１、溶岩１、黒曜石107ｇである。

SB—111

Ｖ—２に位置する。長径（350）cm、短径300cmの小型円形プランをなす。炉は土器片囲炉である。26、28、29の土器が用いられていた。柱穴はＰ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ７の４本柱穴と思われる。土器は16からも新道式期の最も新しい部分に位置するものと思われる。これらの土器群の中に縦区画文土器が含まれないことは一つの時間的特色を表わしている。

SB—49

Ｐ—５に位置する。いくつかの住居址が重複しているがSB—49が藤内式期住居址で、５角形石囲炉で、出入口部に28の無文の深鉢が埋設されており埋甕と思われる。柱穴は確定し難いがＰ４、Ｐ２、Ｐ59、Ｐ20、Ｐ32、Ｐ49などがそれと思われる。

SB—84

Ｇ—３に位置する。長径505ｍ、短径440ｍの円形プランをなす。柱穴は６個と思われる。炉址の南に焼土が見られる。埋甕は縦区画文土器の底部を利用したもので、柱穴の一部の窪みに埋設されていた。出土遺物は縦区画文土器を主体としたもので、三角押文に似たキャタピラ文風の押引文を用いたものは26の浅鉢といくつかの小片に限られるようである。さらに31、41のような有孔鍔付土器を保有しているので、三口神平地区における１つの特異な住居であると思われる。また先述したSB—95と重複していることから、この時期の編年研究に一つの示唆を与えるものと思われる。

石器は石鏃５、石ヒ４、ドリル８、ピエス２、打斧15、磨斧２、磨石２、石皿２、礫器２、ユーフレ７、スクレイパー２、フレイク・スクレイパー３、溶岩１、黒曜石234ｇ、水晶3.4ｇ。

SB—87

Ｉ—11に位置する。石囲炉の残存と埋甕を検出している。埋甕は縄文RLの細かな藤内式期の特有な縄文であると思われる。炉と埋甕との位が中期後半とは違いやや近い位置にある。

SB—100

Ｌ—２に位置し、長径520ｍ、短径320ｍの楕円形プランをなし、中心部に地床炉がある。特にＰ６には第110図の１にある土器が埋設されていた。SB—106ともSB—05とも重複している。いずれも藤内式期の範ちゅうに入る土器群である。

石器は石鏃１、ピエス１、打斧９、磨石３、礫器１、玉石１、ユーフレ４、黒曜石38ｇである。

SB—106

Ｌ—２に位置し、SB—106と重複する。焼土の一部と床がSB—106に貼っていたので、SB—106より新しい時期のものと思われる。出土遺物も少量で、全体のプランもやや不明であるが、長径（315）cm、短径（220）cmのほぼ円形をなす小型の住居址である。

石器は角柱１である。

SB—26

R—7に位置する。長方形の石囲炉であり、この付近より井戸尻式土器片が多いので、石囲炉の時期を井戸尻式期としたが、炉形態からは、後出の曽利式期であると思われる。石器は石鏃1、ピエス1、磨石3、コア1、ユーフレ2、角柱3、黒曜石8.1gである。このうち角柱とは方形に加工した石材で、しばしば石柱としてあるいは、炉石として用いられるものである。

SB—27

T—6に位置する。ほぼ壊滅した石囲炉とその周辺にいくつかの土器片が見られた。出土遺物からは、井戸尻式期に比定される。

SB—29—2

先述したようにSB—29－2は3軒の重複があり、その中間の位置に属する。SB—29－1の上にあった石材が石囲炉のものと思われる。時期的には井戸尻式期に属するものと思われる。

SB—33

R—4に位置する。プランの南側のみ壁を確認したが、炉址は検出していない。柱穴もあるが不安定である。長径550cm、短径（500）cmをなすと思われる。出土遺物は井戸尻式期のものを中心としており、これに曽利式期のものが混入しており、住居址の時期は井戸尻式期と思われる。遺物の中に有孔鍔付土器があり、注目される。

石器はドリル1、打斧25、磨斧1、磨石4、石皿3、ユーフレ8、スクレイパー1、溶岩1、角柱1、黒曜石50gである。

SB—36

M—6に位置する。長径372cm、短径372cmをなす4柱穴の円形プランである。1を埋甕炉としており、これにかかるように4が出土し、床面よりやや浮いて6、7が出土した。2は底部の一部が、この住居址から出土しており、口辺部はM—7から出土している。3もまた体部の一部のみがこの住居址からの出土である。台形土器が2点もまとまって出土したことは注目される。

石器は石鏃1、石皿1、打斧12、磨斧2、玉石3、ユーフレ1、丸石1がある。

SB—35

T—7に位置する。長径600cm、短径（500）cmの円形プランをなす。石囲炉は本来石囲埋甕炉であったが、埋甕炉は調査中紛失。柱穴はいく認められたが、P_{6}、P_{19}、P_{16}、P_{13}、P_{7}がそれと思われる。住居址床面に見られる石は配石ではなく地山の石である。SB—38と重複しているので、出土遺物は所属が不明のものもある。石器は石鏃3、打斧19、磨斧3、磨石9、礫器1、ハンマー3、玉石2、ユーフレ14、ユーフレ水晶1、角柱1、溶岩2、スクレイパー1、黒曜石70g、水晶3.3gである。

この住居址で注目すべきは、44、45に見られるように関東系と思われような、円筒形の器形で口辺部に一帯の文様帯をもつ土器が出土していることである。

SB—38

T—7に位置する。プランの一部と石囲炉を検出している。柱穴も確定できるものはないが、P_{1}、P_{2}、P_{21}、P_{10}、P_{4}がそれにあたるであろう。石器はピエス1、ユーフレ1、黒曜石3.1gである。

SB—48

P—6に位置し、SB—49、50、58、59などと重複し、前後関係の不明な部分が多いので、井戸尻式期のものを抽出した。炉址は不明であるが、時期的な検討をすればSB—49の炉址としたものがあるいは、SB—48と炉址となる可能性が大きい。出土遺物はやはり井戸尻式期の後半の部分に属する。特に台形土器（7）はSK—09と接合関係をもつ。

石器ユーフレ2、黒曜石15.7g である。

SB—04

K—6に位置する。SB—43、32と重複関係をもつ。またI—5出土の逆位底部穿孔埋甕（193図—6）もあり、さらに住居址の重複が考えられる。炉址は方形石囲炉であり、完存していた。出土遺物は曽利新式第4段階のものと思われる。なかに加曽利E式系土器である（図124—10、11、12）があり注目される。

石器は磨石1、石皿1である。

SB—05

K—3に位置する。長径674m、短径564mの楕円形プランをなす。炉址は右囲炉であるが、1個を除いてすべて抜き去られていた。柱穴はP_1、P_3、P_5、P_7、P_9の5柱穴と思われる。ただし、この時期のものとしては、珍らしく、埋甕を持たない。あるいはP_{11}がそうした施設であろうか。壁溝は南側の部分のみに認められた。

出土遺物は豊富である。特に（125図—7）は吊手土器で、炉址の北側から検出され、S—II区SB—05と同様な出土状態である。また（126図15、18）は関東地方の加曽利E_3式土器に比定され、曽利式土器との伴出関係が注目される。曽利新式第3段階。

なお、この住居址はほぼ同時期のSB—71と重複関係をもつが、層位的な確認はできなかった。石器は石鏃2、ドリル1、打斧13、磨斧2、稜磨石1、磨石6、石皿2、礫器2、玉石4、ユーフレ7、フレック・スクレパー1、溶岩2、黒曜石80g、水晶2.3g であり、これに石皿のミニチュアが出土している。

SB—06

N—3に位置する。ほぼ円形の石囲炉のみを検出している。出土遺物は加曽利E_4式土器に併行する時期のものであるが、炉址の石組みからすれば、いわゆる曽利古式前後のものと思われる。

SB—07

W—3に位置する。石囲炉と埋甕が検出されている。石囲炉は曽利新式期のものと思われる。ただし埋甕はその位置から言って、このSB—07に伴うものとは考えられない別の住居址に付設されたものと考えられる。

SB—08

X—5に位置する。石囲炉のみを検出している。石囲炉の形態から曽利古3～曽利新式期に属するものと考えられる。

SB—10

N—7に位置する。石囲炉のみ検出されている。石組みの方法がS—IV区SB—05などに類似している。おそらく曽利古式期に属するものであろう。

SB—11

O—6に位置する。石囲炉の残欠が検出されている。炉形態もやや不明な部分があり、時期的にも不明である。

石器は打斧2、フレイク・スクレイパー1である。

SB—12

O—8に位置する。石囲炉の残欠のみ検出されている。炉形態も不明である。

SB—13

X—8に位置する。小型の五角形石囲炉である。このような小型の石囲炉は曽利式期の終末に位置するものと思われる。

石器は打斧1、磨石1、玉石1、ユーフレ3である。

SB—15

Y—6に位置する。石囲炉がほぼ残っており、石囲炉の形態から、おそらく曽利古式期のものと思われる。

SB—16

P—4に位置する。方形石囲炉がほぼ完存していた。炉形態より曽利新式期に比定されるものと思われる。

石器はユーフレ3である。

SB—17

X—3に位置する。石囲炉と埋甕を検出しているが、その位置関係より両者はそれぞれ別の住居址に属するものと思われる。埋甕は加曽利E_4式に属するもので、石囲炉は曽利古式期のものであろう。（図130—2）はこの地域では少ない直前段自結の結節縄文である。

SB—19

Q—5に位置する。方形石囲炉である。自然礫の上に構築された炉址である。炉形態より、曽利Ⅳ式期に前後する時期に位置するものと思われる。

石器は打斧1である。

SB—21

0—9に位置する。長径（570）cm、短径（530）cmの円形プランをなすと思われる。炉址は石囲炉で、埋甕は長胴大甕の胴部を利用したものである。なお（図40）にあるように、この埋甕は井戸尻式期の埋甕を切って埋設されたものであり、さらに南側に加曽利E_3式の埋甕が認められている。また炉址の脇にも埋甕の一部が検出されており、これらの埋甕はそれぞれ異時期のものと考えられる。柱穴はP_3、P_{10}、P_6、P_7、P_4ないしP_5がそれと思われるが、なお、いくつか柱穴と思われるものもあり、別時期の住居址の重複を考えなくてはならない。曽利古式第2段階。

またP_{13}からは曽利式の水煙把手が検出されている。石器は石鏃1、ドリル1、ピエス1、打斧2、磨1、磨石5、石皿1、ユーフレ3、黒曜石19.4g、水晶2.3gである。

SB—22

K—10に位置する。石囲炉の1部が検出されているるおそらく方形石囲炉であろう。出土遺物もなく時期不詳である。なお、炉址は図化されていない。曽利新新式に位置しよう。

SB—23

K—10に位置する。方形石囲炉である。出土遺物は少量であるが、炉形態より曽利古式前後の位置が与えられよう。

SB—24

X—6に位置する。炉はほとんど崩壊しているが、この炉址に伴うと思われる埋甕が検出されている。これは縄文地に粘土紐を貼付したものである。おそらく曽利古式第3段階に属するものであろう。

石器は打斧2、磨斧1、稜磨石1である。

SB—25

X—7に位置する。この炉址もまたほとんど崩壊したもので、時期の特定は困難である。

石器はユーフレ1である。

SB—27

T—6に位置する。この炉址もまたほとんど崩壊しており、時期の比定は困難であるが、この付近より井戸尻式期の土器の出土があり、あるいは、この時期に属するものかもしれない。

SB—29—3

Y—8に位置する。SB—29は重複の著しい住居址であった。最も新しい時期のものがSB—29－3である。炉址は石囲埋甕炉である。石囲埋甕炉は曽利古式期に用いられる炉形態である。S—Ⅲ区ではSB—78、S—Ⅳ区でSB—11などがある。また出土遺物等から曽利古式第2段階の範ちゅうとして考えておきたい。

石器はSB—29のいずれの時期に属するか不明だが、石鏃4、打斧8、磨石9、石皿1、丸石1、フレイクスクレイパー1、溶岩1である。

SB—30

R—6に位置する。ほとんど炉址の痕跡のみ認められた住居址である。出土遺物にはX把手付大甕がある。時期的には曽利古式第3段階に位置しよう。

石器は打斧1である。

SB—31

Y—6に位置する。石囲炉の奥の部分の石のみが残ったものである。炉形態より曽利古式に位置しよう。

石器は石鏃1、角柱1である。

SB—32

K—5に位置する。方形石囲炉の側壁の石のに残っていたもので、SB—04と重複するもので、おそらく曽利新第3段階前後の位置に属するものと思われる。

SB—34

M—8に位置する。長径570m、短径520mをなす。埋甕炉（134図—2）がある。より新しい時期であるSB—44と重複し、またほぼ同時期のSB—64とも重複している。SB—34のP_6に逆位に埋設されていた底部穿孔埋甕（図134—1）はSB—64に伴うものと考えられる。このSB—34も時期的には曽利古式第2段階に位置するものと思われる。

なお出土遺物に台形土器が3個体も見られる点は特徴的である。

石器は打斧6、磨斧2、磨石9、ハンマー3、玉石1、コア1、溶岩1、黒曜石30g である。

SB—37

L—7に位置する。長径500cm、短径407cmをなす。炉址は石囲炉の奥壁部の石のみが残存していたのみで、他は

抜き去られていた、柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4、P_5がこれにあたる。P_5は発掘時は不明で、住居を切り割って検出したものである。壁溝は南西側のみに検出されており、特に奥壁部では壁溝の中に小ピットが穿たれていた。埋甕は出入口部に逆位底部穿孔埋甕が2基直列して検出されている。

出土遺物は曽利新式第2段階に属するものと思われるが、特に（135図—6）は特異な縄文Lであり、注目される。

石器は石鏃1、打斧1、石皿1、ユーフレ5、溶岩1、黒曜石4gである。

SB—39

M—7に位置する。長径（540）cm、短径（480）cmである。石囲炉の側石が2個検出されている。出入口部に埋甕（136図—1）が検出されている。この埋甕の中からミニチュア土器が出土している。柱穴はP_1、P_2、P_3、P_5がそれに充当するものと思われるが、炉奥壁部の柱穴は確認できなかった。なお、ほぼ同時期のSB—77がこれに重複している。曽利古式第2段階。

石器は石鏃1、打斧3、磨石1、石皿1、ユーフレ4、黒曜石6.3g。

SB—40

R—4に位置する。プランは不明で、集石した石囲炉の周辺から出土した土器をこの住居址の出土遺物とした。この集石した石囲炉は釈迦堂遺跡群では他に例がないものである。出土遺物のうち（138図—10）はこの土器の口辺部の1部がSB—43からも出土しており、ほぼ同時期の所産と思われる。曽利新式第2段階。

石器は打斧4、稜磨石1、磨石1、ユーフレ1、黒曜石17.4gである。

SB—41

R—2に位置する。プランは不明、石囲炉は完存している。遺物は炉址周辺に多く分布している。土器は出土量が多く、肥厚口辺系土器（140図—44、45）が見られる（41、47）もこの系統の土器であろう。曽利新式第2段階。

石器は打斧2、磨石2、礫器1、ユーフレ2、スクレイパー2、黒曜石0.5gである。

SB—42

R—2に位置する。プラン不明。石囲炉は完存しており、出土遺物は極く少なく、炉の北側に集中していた。時期的には曽利新式第2段階に比定されよう。柱穴と思われるピットはP_1、P_2、P_3、P_4がある。

SB—43

L—6に位置する。長径560m、短径420cmである。壁溝が全周し、柱穴はP_1、P_2、P_4、P_5が認められるが、奥壁部の柱穴は調査の手順の誤りから検出されていない。炉址はほとんど抜きさられている。埋甕は壁溝にかかって検出されている。

出土遺物は豊富で、特にSB—40とも接合する土器が出土している。特に土鈴が検出されている。時期的は曽利新式第2段階に比定されよう。

石器は石鏃4、石ヒ1、ドリル1、ピエス4、打斧12、磨石8、石皿1、礫器1、玉石2、ユーフレ9、コア2、溶岩2、黒曜石85g、水晶2.8gである。

SB—44

K—8に位置する。SB—34、SB—70と重複する住居址である。炉址は壊わされているが、よくその石をとどめている。柱穴は奥壁部のものが不明だが、これは重複のためである。埋甕は頸部に刻目隆帯がめぐり、体部に縄文が施されるものである。他に肥厚口辺系土器烈点文系土器、斜行沈線文系土器とさまざまな系統の土器がある。時期的には曽利新式第1段階。

石器は打斧２、磨石22、石皿１、チャート１、黒曜石1.9ｇである。

SB—46

Ｊ—９に位置する。長径550ｍ、短径545ｍの楕円形プランをなす。壁溝は南西側にめぐる。石囲炉は完存１、柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ６である。埋甕は正位で、付近に土偶と耳栓がある。

出土遺物は曽利新式第４段階に位置するものであろう。特に肥厚口辺系土器の出土を見ない点は注目される。

SB—50、51、56、58

Ｐ—５に位置する。重複の著しい住居址である。SB—48、49はそれぞれ井戸尻式と藤内式期に比定されるが、SB—50、51、56、58は炉址のみが残る。SB—50は石囲炉が一部残り、SB—51はSB—50の炉址の上に設置され、SB—56は炉石の一部のみが残っている。またSB—58はややはなれて、Ｑ—５に位置する。またこれに近接してSB—83の炉址もある。おそらくSB—50は曽利古式の第２段階。

このように重複が著しく、前後関係や重複する柱穴の所属関係等不明な部分が多い。

SB—53

Ｎ—６に位置する。SB—03によって切られた石囲炉の残欠。

SB—55

Ｘ—７に位置する。柄鏡形の住居址で、円形プランの部分には周縁部に石をめぐらせていたと思われる。張り出し部には敷石があったと思われるが、崩れている。石囲炉である。柱穴と確定できるピットはない。

自然石の露頭の部分に、構築され、しかもSB—25、24等の重複が著しく不明な部分が多い。時期的にはSB—85やＮ—Ⅲ区SB—01などと同じような曽利新式第４段階期に位置しよう。

石鏃６（１点はホルンフェルス）、ドリル１、ピエス１、打斧５、磨石３、石皿１、玉石１、ユーフレ15、コア１、溶岩１、石棒１、黒曜石157ｇ、水晶21.2ｇである。

SB—57

Ｉ—７に位置する。楕円形プランと思われるが、壁溝の一部と炉址と埋甕を検出している。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ６と思われるが、炉の北側の柱穴は土壙があるため、確認できなかった。

時期的には曽利新式第２段階に比定されよう。出土土器の中に肥厚口辺系土器がないことも一つの特徴である。石器は石鏃３、磨石７、石皿１、ユーフレ５、黒曜石30ｇ、水晶0.7ｇである。

SB—59

Ｎ—10に位置する。プランは不明、石囲炉が、変形はしてはいるが完存し、柱穴は不明。炉址の南側の自然石の間に、逆位底部穿孔埋甕があった。これが位置的もこの炉址に伴うものと判断された。

なお、この住居址のまわりには、SB—21の埋甕等いくつかの埋甕もあり、別個の住居の可能性もあるが、その位置関係から、埋甕の所属を決定している。

住居の時期は埋甕より曽利新式第４段階に比定されよう。石器はユーフレ２、黒曜石0.9ｇ、水晶3.5ｇである。

SB—60

Ｍ—10に位置する。プラン不明だが、南東側に壁溝の一部を検出している。炉址は出入口部側を抜きとられている。また炉址の北側にＰ５があり、これは一部石囲いとなっているが、この上部に埋甕が設置されていた。出入口部埋甕は正位であり、そのまわりを調査すると一つの土壙となった。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ９がこれにあ

たると思われる。曽利新式第３段階。

これにSB—75、76、59が重複し、柱穴の中には、これらの住居址に属するものがある。

石器は石鏃１、ドリル１、打斧３、磨石３、ハンマー１、ユーフレ５、溶岩１、黒曜石15.7ｇである。

SB—62

M—８に位置する。プランは不定形である。SB—64、34と重複している。また炉址は検出していない。柱穴もP₁、P₂、P₃、P₄、P₅がそれと思われるが、整然としない。

出土土器は肥厚口辺系で、曽利新式第３段階に比定されよう。なお、（157図41、42）は異時期のものである。

石器は、ドリル１、打斧２、磨石４、玉石１、ユーフレ５、溶岩１、黒曜石15.7ｇである。

SB—63

O—10に位置する。石囲炉のみ確認している。炉石の側石が失なわれている。SB—80の上に構築された住居址で、プランは不明で、柱穴もまた確認できなかった。

石器もほとんどなく、礫器１点のみである。

SB—64

M—８に位置する。SB—34と重複するが、壁溝と東側の掘り込み部から、長径（560）cm、短径（480）cmの円形プランをなす。炉址は石囲炉で、出入口部と奥壁部の石を抜かれている。柱穴は５穴と思われる。曽利古式第１段階。

SB—66

N—４に位置する。長径470ｍ、短径460ｍの円形プランである。北側に壁溝がある。炉石はほとんど抜きさられている。埋甕は出入口部にあり、柱穴は５穴で、P₁、P₂、P₃、P₄、P₆がそれである。典型的な曽利後半期の住居形態である。時期的には曽利新式第１段階。

出土土器の中に肥厚口辺系を含まない。石器は石鏃１、打斧４、磨石２、ユーフレ２、石棒１、黒曜石17.6ｇである。

SB—67

R—７に位置する。石囲炉の側石のみ検出されている。炉址の付近に（158図—１）の土器が伏甕状態で検出されている。

時期的には曽利古式期前後に置かれよう。

SB—68、69

W—６に位置する。南側の壁の１部のみ検出された。炉址は石囲炉をSB—68とし、焼土と埋甕炉をSB—69の炉址とした。柱穴はP₁、P₂₅、P₂₆、P₁₂、P₁₉、P₆等がそれにあたる。出入口部のSK—79に正位の埋甕が２個直列して検出された。これをSB—68ないし69に伴うものと判断したが、位置的に断定し難い。曽利古式第１段階。

出土遺物は埋甕の遺物が無文で時期判定に苦しむが、胎土等から曽利式期に属するものと思われる。石器はユーフレ７、水晶ユーフレ１、黒曜石23ｇ、水晶0.4ｇである。

SB—70

J—７に位置する。長径約550ｍ、短径535ｍの円形プランをなす。炉址はほとんど壊わされ、炉石を一個のみ残しており、柱穴はP₁、P₃、P₆、P₇、P₉と思われる。ただし、SB—44、37が重複し、これらに属すると思われるものもある。埋甕は大甕の底部を利用したものである。曽利古式第２段階。

出土遺物は極く少ない。打斧１、スクレイパー１、黒曜石3.8ｇである。

SB—71

K—５に位置する。SB—05と重複関係をもつ。長径520cm、短径500cmである。炉址はほとんど壊わされている。柱穴は５柱穴である。なお、炉址の北東に石柱状の自然石がある。埋甕は出入口部に正位に埋設されていた。壁溝はない。

出土遺物は比較的豊富で、曽利新式第３段階のものと思われる。壺形土器（162図—71、72）は、S—Ⅳ区SB—55でも２個体出土しており好対照をなしている。石器は打斧１、磨斧１、稜磨石１、磨石１、玉石２、ユーフレ５、石棒１、黒曜石35ｇ、水晶4.7ｇである。

SB—72

G—６に位置する。三口神平地区の曽利式期の住居址としては最も西端に位置し、土器すてばAと接している。長径（540）cm、短径480cmの楕円形プランをなす。炉址は崩壊している。柱穴は他の曽利式後半期の住居と違い８柱穴でそれぞれがやや小さい。壁溝は南東側に認められた。なお、この住居址で最も問題とるのは、出入部に設置された石柱の帰属問題である。調査時には異時期のものとして取りあげたが、セクション図の検討等から、この住居に伴うものと考えても、おかしくない状態ではないかと思われる。むしろS—Ⅲ区とS—Ⅳ区のいくつかの対照的な様相から、伴うものと考えて集落を考えたい。

出土遺物は極く少ない。特殊遺物として土鈴の出土がある。石器は石鏃１、打斧５、磨石４、石皿３、玉石３、ユーフレ２、溶岩１、炉石１、黒曜石9.3ｇである。

SB—73

U—９に位置する。半壊した円形石囲炉のみ検出された。出土遺物もなく時期不詳だが、この炉形態からすれば、曽利古式の位置が与えられよう。

SB—75

M—10に位置する。五角形石囲炉のみ検出されている。SB—60の上に構築された住居で、この上にさらにSB—76が乗る。SB—75に伴う柱穴や埋甕は不明である。石器はユーフレ１、黒曜石22ｇである。曽利新式第４段階。

SB—76

M—11に位置する。SB—60、75の上に構築された住居で、若干の焼土の炉石の抜き取り痕を検出している。柱穴は炉址の北と東西のもののみを検出しているが、これもSB—60と重複している。石器はドリル１、打斧１、ユーフレ２、黒曜石6.5ｇである。

SB—77

M—７に位置する。長径（570）m、短径（550）mの円形プランと思われる。西側のみに壁溝を２本検出している。炉は全壊している。柱穴はP_1、P_3、P_2、P_4があり、未検出のものがある。SB—39と重複し、時期的にも、ほぼ同様の時期と思われる。石器としては磨石１である。

SB—80

O—10に位置する。長径（500）m、短径（400）mと思われる。SB—63の下部に検出された住居でSB—21とも重複関係をもち、この上に構築されたものと思われる。炉址はほぼ残っており、その形態を想定できる。壁溝東側のみに検出されている。この溝は花崗岩を削り込んでいる。さらにこの中に小さな穴を穿っている。この住居で問題

となるのは、埋甕である。埋甕の1は出入口部に通常に設置されていたが、埋甕2は調査を進めるとSK—266となった。埋甕を囲むように石が置かれている。埋甕と1のこのような例は管聞にして知らないので、あるいは別個の遺構とも考えられるが、相方の埋甕とも、ほぼ同時期のものと考えられるので、この両者ともこの住居に伴うものと考えておく。なお柱穴はやはり5柱穴と思われる。2穴がSB—21の中にある。石器は石鏃1、打斧1である。時期は曽利新式第1段階。

SB—81

O—10に位置する。SB—80の東に検出された石列である。この石列を炉址の一部と認定したが、焼土もなく、石も焼成痕がないので、住居址とは断定し難い。

SB—82

O—11に位置する。石囲炉の残欠であるが、焼土もあり、住居址の存在を考えた。SB—80とも重複するものである。

SB—83

P—4に位置する。小型の炉址で、クイの残土を撤去する時に検出された。このような小型の炉址は、中期終末に位置するものと考えられる。

SB—85

H—12に位置する。柄鏡形住居址である。鏡部は長径300cm、短径280cmをなす。柄部は幅165cm、長さ270cmである。鏡部には縁石をめぐらし、柄部は先端に敷石が見える。石囲炉はやや小型である。縁石には石棒、小型の丸石などが利用されている。曽利新式第4段階。

出土土器は曽利式から加曽利E_4式、後期初頭の土器まで見られる。石器は石鏃1、ピエス1、打斧1、石皿1、礫器1、ユーフレ1、溶岩1、黒曜石28g、水晶9.8gである。

SB—86

I—12に位置する。プラン不明。SB—85と同様な住居ではなかったかと思われる。出土土器も中期末である。石器は打斧2、黒曜石3.8gである。

SB—88

O—13に位置する。プラン不明。焼土と埋甕を検出している。炉は石が抜き取られており、焼土のみが残る。埋甕はハの字文土器の底部を利用したものである。石器はピエス1、ユーフレ1、黒曜石30gである。

SB—89

K—10に位置する。プラン不明、炉址の一部を検出している。炉の北側にSK—230があり、ここに土器が設置されており、埋甕であると思われる。こうした例はSB—60に見られる。時期的には曽利新式期に位置しよう。

SB—90

K—11に位置する。炉の石列のみを検出している。出土遺物もなく時期不詳である。石器は石鏃1、ユーフレ1、水晶8.1gである。

SB—91

L—11に位置する。炉はほぼ全壊し、石列が残存している。SB—90、91付近には、いくつかの遺物があるが、いずれに帰属するかは不明である。石器は打斧4、磨石2、玉石2である。

SB—92

Q—3に位置する。周溝の一部を確認している。柱穴はスクリーントーンで図示したもので、P_1、P_2、P_3、P_4、P_5がそれにあたる。炉址はSB—93の上に炉石が一部が残っている。石器は石鏃1、ユーフレ1、黒曜石8.8gである。

SB—93

Q—3に位置する。長径530m、短径520mの円形プランである。石囲炉は完存している。石囲炉は完存し、4隅に立石がある。柱穴はP_1、P_5、P_4、P_3、P_2がそれにあたる。埋甕は東側の壁溝の中にあり、正位に埋設されていた。

出土土器の中に加曽利E_3式土器が多く見られる。時期的には曽利新式第4段階に位置しよう。

SB—94、99

L—11に位置する。長径620cm、短径620cmの大型プランである。石囲炉は平石を置くタイプである。柱穴は6穴である。壁溝は全周する。埋甕はない。この住居に2つの番号を付けたのは写真図版で示したように厚さ約10cmの貼り床が存在したためである。炉址はSB—99ではやや浮いたような状態にある。

土器はほとんど完形品はほとんどないが、おそらく曽利古式第2段階に位置するものと思われる。石器は石鏃4、ドリル2、ピエス3、打斧3、磨斧1、磨石5、石皿1、ユーフレ12、黒曜石48gである。SB—99においては黒曜石6.1gである。

SB—96

J—11に位置する。プラン不明。柱穴は不明。炉址は石囲埋甕炉でこの西側に逆位の埋設土器がある。撚糸文地の土器はレベル的には石囲埋甕炉と一致するが、斜行沈線文土器はより低い位置にある。時間的には炉体土器と埋甕とが同時期とは考えられない。

住居址の時期は炉体土器で曽利古式第1段階で、埋甕を中心に見れば、曽利古式第3段階であろうか。石器は打斧2、磨石3、ユーフレ3、黒曜石0.2gである。

SB—97

R—2に位置する。長径585cm、短径460cmである。石囲炉は半壊している。柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4、P_5であるが、プランとかならずしも整合しない。時期的には曽利新式期に位置しよう。石器は石皿1、礫器1、ユーフレ3、黒曜石22g、水晶0.4gである。

SB—98

H—3に位置する。焼土と石敷を確認していたので、柄鏡形住居の残欠と認定した。出土遺物はほとんどない。時期的にも中期の終末に位置するもので、表土から浅い所に位置するため、攪乱が著しいものと思われる。

SB—101

H—1に位置する。石囲炉と壁溝の一部を確認している。柱穴と思われるものも4穴検出している。炉址は完存している。

出土遺物はない。おそらく曽利新式期のものであろう。S—Ⅲ区のSB—02、03と近接し、他の曽利式期の住居群

とは離れている。石器としてはユーフレ１のみである。

SB—103

U—３に位置する。石囲炉は完存し、プラン不明。出土遺物は極く少ない。ただし（198図—２）は吊手土器の一部でブリッヂの部分に人体を表現している。あたかも土偶が付いているようである。

SB—105

Ⅰ—11に位置する。長径680ｍ、短径650ｍの大型プランである。このような大型プランとなると６柱穴となるようで、P_1、P_2、P_4、P_5、P_7である。奥壁部の柱穴は土壙と重複して１穴不明となっている。埋甕はなく、出入口部の施設の痕跡であるP_{12}、P_{13}がある。時期的には曽利新式第１段階である。

出土土器は非常に多く、図化したものもその一部である。重孤文土器、肥厚口辺系土器、加曽利Ｅ系土器などがあり、バラエティに富んでいる。石器も多く、石鏃５（うち水晶１）、ドリル１、打斧10、磨石９、石皿１、ユーフレ20、スクレイパー２、溶岩２、丸石１、フレイク・スクレイパー１、黒曜石98ｇ、水晶1.3ｇである。

SB—109

Ⅰ—12に位置する。長径620ｍ、短径（580）ｍの円形プランである。壁溝は全周する。石囲炉は半壊し、炉石の一部が炉の北に置いてあった。柱穴は典型的な５柱穴である。埋甕は周溝内に正位に埋設されていた。

出土遺物は割合と少なく、曽利新式第３段階の後半に位置しよう。石器は石鏃２、ドリル２、ピエス１、打斧３、磨石９、石皿２、礫器２、玉石１、ユーフレ３、ユーフレ(水晶)１、溶岩１、フレイク・スクレイパー２、黒曜石57ｇである。

SB—113

H—９に位置する。はじめ埋甕を検出し、これは単独の屋外埋甕と考えていた。またSK—66を調査したところ土壙の壁に炉址が斜めに検出された。よって、この炉址は何らかの自然変異によって、炉址周辺部が陥没したものと考えられる。なおこの埋甕の中からは土偶の頭部が出土している。このような例は尖石遺跡のほか例が少ないと思われる。時期的には曽利新式第３段階。

第３節　埋甕と不明遺構

埋甕炉と思われる埋甕

R—６にある井戸尻式の埋甕は、埋甕と考えられたが、焼土を確認していないので、住居址番号を付さなかった。

X—６にある新道式の埋甕もまた焼土の確認ができなかったので、炉址とは断定できなかった。

Y—６にある井戸尻式の埋甕は復元図化できなかったが、これもまた上記のものと同様な理由で、住居番号を付けなかった。

SX—04

V—７に位置する。これも柄鏡形敷石住居址の残欠と思われる。鏡部の敷石の一部と思われる。

SX—02

U—５に位置する。柄鏡形敷石住居址の一部と思われる。おそらく出入口部のものと思われる。出入口部に石囲状の施設をもつものはこの時期にいくつか見られる。

SX—05

C—5に位置する。土器すてばの西に位置した礫群であり、中に焼石等が認められたが、この集石の性格は不明である。

第 4 節　土器すてばA

土器すてばA

三口神平地区の西端に位置する。調査の当初は〝土器すてば〟という概念はなく、調査を進め、下部から住居址が検出できるものと考えていたが、ついに何の遺構や検出できなかった。

立地的には、N—Ⅱ区から伸びてくる小谷に向う傾斜地の肩の部分という所である。全体的には三口神平地区の住居群とほぼ同様な平面にあることから、この住居群とは別個の土器すてばと考える調査員もいたが、整理作業の進展に伴い、三口神平地区の遺構やグリッド出土土器との接合関係が明らかにされたことによって、その有機的な関係が証明され、三口神平地区の集落に伴う土器すてばと確定できるに至った。出土遺物は実に豊富で、土器はもちろんのこと土偶、土製円盤が著しく多い。

なお土器すてばAおよびB、Cの性格については後述する。

第 5 節　平安時代の住居と出土遺物

SB—01（歴史時代の住居址）

H—9に位置する。一辺314cmの方形プランである。方形プランの一角にカマドを設けるのがこの時期の特色である。柱穴不詳。

出土遺物はカマドの中に土師質土器が検出されている。

SB—02

J—8に位置する。一辺485cmの方形プランで、やはりSB—01と同様に南側の一角にカマドを設けている。出土遺物はない。カマドはほとんど崩壊し、形状不明。

SB—03

K—6に位置する。長辺519cm、短辺480cmの長方形プランである。東側の一角にカマドを設けている。この時期の住居址としては珍らしく、柱穴を数穴確認しているが、主柱穴は4穴と思われるが、確定はできない。また北側の隅に、貯蔵穴と思われるような、土壙も存在する。

SB—28

N—7に位置する。一辺が463cmの方形プランをなす。住居址プランの中に黒色土が充満していた。柱穴は確定できなかったが、カマドもないことから、住居とは別な施設と考えられる。

SB—14

Q—5に位置する。長辺450cm、短辺400cmの長方形プランである。東側の一角にカマドを設けている。他の住居と違い粘土で構築したカマドである。この他に住居の中央部にも焼土の堆積があった。土師質土器が2点出土している。

第6節　住居址一覧表

S—Ⅲ区　住居址一覧表

SB№	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—01	H—9	314 × 280	方形	カマド			土偶	平安時代末の住居址
02	J—8	485 × 460	方形	カマド			土偶	平安時代末の住居址
03	M—5	519 × 480	方形	カマド				平安時代末の住居址
04	K—6			方形石囲炉	完存			
05	K—3	674 × 564	楕円形	石囲炉	側石1		吊手土器・土偶	
06	N—3			円形石囲炉	完存			
07	W—3			方形石囲炉	完存	正位		埋甕は別の遺構に伴うもの
08	X—5			方形石囲炉	側石欠			
09	X—9	(485)×(380)		長方形石囲炉	完存			
10	N—7			方形石囲炉	前石欠			
11	O—6			石囲炉				
12	O—8			石囲炉				
13	X—8			五角形石囲炉				
14	Q—5	450 × 400		カマド				平安時代末の住居址
15	Y—6			長方形石囲炉				
16	P—4			方形石囲炉	奥石欠			
17	X—3			方形石囲炉	側石欠	正位		埋甕は別の遺構のもの。
18	W—10			埋甕炉				
19	Q—5			方形石囲炉	完存			
20	Y—9			埋甕炉				埋甕炉が重複していた。
21	O—9	(570)×(530)		方形石囲炉	完存	正位	土偶	井戸尻式期の埋設土器を切った埋甕
22	K—10			方形石囲炉	前・奥石欠			
23	K—10			方形石囲炉	完存		土偶	
24	X—6			石囲炉		正位		
25	X—7			石囲炉				
26	R—6			長方形石囲炉	完存			
27	T—6			石囲炉				遺物不明
28	N—7	463 × 425		カマドなし			土偶	平安時代末、住居とは別の遺構であろう。
29-1	Y—8			埋甕炉	完存			
29-2	Y—8			石囲炉	側石のみ残存		土偶	
29-3	Y—8			石囲埋甕炉	完存		土偶	
30	R—6			石囲炉				
31	Y—6			石囲炉	奥石のみ残存			
32	K—5			石囲炉	側石のみ残存			
33	R—5	500 × (500)	円形	不明			土偶	
34	M—8	570 × 520	楕円形	埋甕炉	完存		土鈴・台形土器	
35	U—6	600 × (500)	楕円形	石囲埋甕炉	側石を欠			
36	M—5	372 × 372	円形	埋甕炉	完存		台形土器	
37	L—7	500 × 407	楕円形	石囲炉	奥石のみ残存	逆位底部穿孔2	土偶	
38	U—6			石囲炉				
39	M—7	(540)×(480)	楕円形	方形石囲炉	側石	正位	土偶	埋甕の中にミニチュア土器が遺存。
40	R—4			集石石囲炉	完存			
41	R—2			方形石囲炉	完存		土偶	

SB№	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—42	R—2			方形石囲炉	完存			
43	L—6	560 × 420	楕円形	石囲炉	奥石のみ完存	正位	土鈴・土偶	
44	K—8	(600)× 520	楕円形	石囲炉	全壊で形状不明	正位		
45	◎							
46	J—9	550 × 545	楕円形	方形石囲炉	完存	正位	土偶・耳栓	
47	U—7	415 × 385	楕円形	地床炉			盤状石皿	
48	P—5			不明				
49	P—5			五角形石囲炉	側石を欠く	正位	土偶	藤内式期の埋甕
50	P—5			石囲炉	前・側石を欠く			
51	P—5			方形石囲炉	完存？			
52	L—5	580 × 330	楕円形	地床炉				
53	N—6			石囲炉				
54	◎							
55	X—6	(450)×(270)	楕円形	方形石囲炉	側石欠			柄鏡形住居址
56	P—6			石囲炉	側石のみ残存			
57	I—7	(640)×(570)	楕円形	石囲炉	側石欠	正位		
58	P—5			石囲炉	側石のみ残存			
59	N—10	(450)×(420)	楕円形	方形石囲炉	完存だが変形	逆位底部穿孔		
60	M—10	(540)×(480)	楕円形	方形石囲炉	完存	正位		炉址の北にも埋甕あり。
61	◎							
62	M—8	(600)× 530	不定形	不明				
63	O—10			石囲炉	側石欠			
64	M—10	(560)×(480)	楕円形	石囲炉	前・奥石欠	逆位底部穿孔		
65	Y—8			五角形石囲炉	一部欠			
66	N—4	470 × 460	円形	石囲炉	全壊	正位		
67	R—7			石囲炉	側石のみ残存			
68	W—6	(620)×(570)	楕円形	石囲炉	両側石のみ残存	正位		SK—79の中に直列して検出
69	W—6			埋甕炉				
70	J—7	(550)× 535	楕円形	石囲炉	全壊	正位		
71	K—5	520 × 500	円形	石囲炉	全壊	正位	土偶	
72	G—6	(540)×(480)	楕円形	石囲炉	側石が残存		立石・土鈴	
73	U—9			円形石囲炉	側石が残存			
74	◎							
75	M—10			五角形石囲炉	完存			
76	M—11			石囲炉	全壊			炉に近接して伏甕あり。
77	M—10	(570)×(550)	円形	石囲炉	全壊			
79	◎							
80	O—10	(500)×(400)	楕円形	石囲炉	側石を欠く	正位2		正位の埋甕2個体直列して検出。
81	O—10			石囲炉				石囲炉とは認定し難い。
82	O—11			石囲炉	側石の残欠			
83	P—4			石囲炉	側・前石を欠			
84	G—3	505 × 440	楕円形	石囲炉	一部を欠く	正位	土偶	藤内式期の埋甕
85	H—12		柄鏡形	石囲炉	完存			
86	I—12		不明	不明				
87	H—10			石囲炉		正位		藤内式期の埋甕
88	O—13			不明		正位		

SBNo.	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—89	K—10			石囲炉		正位		炉北のSK—230内の土器は埋甕か？
90	K—11			石囲炉	側石のみ残存			
91	L—11			石囲炉	側石のみ残存		土偶	
92	Q—3	(540)×(520)		石囲炉				
93	Q—3	530 × 520	円形	石囲炉	完存	正位	土偶	
94	L—11	620 × 620	円形	方形石囲炉	完存		土偶	SB—99の土層住居址
95	F—4	550 × 450	楕円形	石囲炉	半壊			
96	J—11	(600)×(550)		石囲埋甕炉	完存	逆位2		
97	R—2	585 × 460	楕円形	方形石囲炉	半壊		土偶	
98	H—3							柄鏡形住居址
99	L—11							SB—94と重複
100	L—2	520 × 320		地床炉			土偶	
101	H—1			方形石囲炉	完存			
102	U—2	450 × 440	円形	地床炉			土偶	
103	U—3			方形石囲炉	完存		吊手土器	
104	◎							
105	I—11	680 × 650	円形	方形石囲炉	側・奥石欠			
106	K—2	(315)×(220)	楕円形	地床炉				
107	T—7	(470)× 440	楕円形	地床炉				
108	T—2	500 × 370	楕円形	地床炉			炭化種子多し	
109	I—12	620 ×(580)	円形	方形石囲炉	半壊			
110	S—2	(450)×(400)	楕円形	地床炉？				
111	V—2	(350)× 300	楕円形	土器片炉				
112	W—2	380 × 320	円形	地床炉			土偶	
113	H—9			方形石囲炉	側石を失う。	正位	土偶	埋甕の中に土偶あり

第7節　土壙一覧表

S—Ⅲ区　土壙

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－01	U－6	112×95×18	土偶、打斧2、稜磨石、焼土、石棒	井戸尻式深鉢、土偶	
	SK－02	V－9	104×98×11	甕、石皿、玉石、ユーフレ	曽利式大甕	
	SK－03	W－10	200×96×66	土偶2、打斧、磨石、礫器、ユーフレ	曽利式深鉢	遺物はSK－04に所属すると思われる。
	SK－04	W－10	84×74×42	土器、打斧		
	SK－05	P－7	×　×39			
	SK－06	P－7	×　×80	打斧		
	SK－07	T－10	93×80×16	土器		
	SK－08	T－10	116×110×39	土器、打斧、磨石		
	SK－09	U－9、10	123×113×110	台形土器	台形土器	S－Ⅲ SB－48台形土器と接合
	SK－10	N－7 SB－28内土壙	127×80×55		藤内式深鉢	
	SK－11	J－4	×　×85			
	SK－12	T－6、7 SB－35内				土壙番号を付けたが住居内ピットと理解すべきであろう。
	SK－13	T－7 SB－35内	80×52×	井戸尻式		〃
	SK－14	U－7 SB－35内	63×40×	〃		〃
	SK－15	U－5、6 SB－35内	74×55×	〃　、磨斧		〃
	SK－16	O－7	75×62×28			
	SK－17	O－7	120×115×57			
	SK－18	O－7	83×27×76	打斧6、稜磨石		
	SK－19	L－7、8	90×88×	打斧、稜磨石		
	SK－21	U－8	83×71×20	石皿、磨石		半割石皿が伏せてあった。
	SK－22		×　×104			
	SK－23		×　×53	曽利式大甕（逆位底部穿孔） 磨斧、磨石、コア	曽利式	SB－68、69の床面より20cmも高いので、この住居に伴うものではない。
	SK－24		×　×42	石鏃、打斧		
	SK－25	K－8	152×132×85	土偶、石鏃、打斧3、ハンマー、玉石2		
	SK－26		×　×58			
	SK－27		102×45×74			
	SK－28	K－8	54×31×50			
	SK－29	N－7	×　×53	土器、石ヒ		
	SK－30		×　×49	土器、石ヒ?、打斧、磨斧		
	SK－31		×　×65			
	SK－32	L－5 SB－52内	93×90×73	藤内式など、打斧	藤内式深鉢	
	SK－33		×　×54	土器赤色チャート、磨石、ハンマー		
	SK－34	X－9、10	122×106×61	土器、打斧1、磨斧4		3基の土壙の重複
	SK－35	X－9	108×90×30	石皿、打斧、玉石		
	SK－36	I－8	129×103×87	井戸尻式土器、土製円盤 石鏃、ドリル4、打斧5	井戸尻式土器、土製円盤	
	SK－37	S－6	85×74×47			

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－38	S－6	102×87×38			
	SK－39	S－6	96×86×			
	SK－40	M－4、5	155×94×17			
	SK－42	R－7		石皿		
	SK－44	U－4、5	140×103×65			
	SK－45	U－5	96×71×79			
	SK－46	J、K－2	×　×16	焼土、打斧3、磨石2、石皿		
	SK－47	F－3	97×67×12	埋甕（逆位）、焼石、台形土器、打斧	土器	
	SK－48	Q－7	101×85×51	土偶、打斧		
	SK－49	W、X－9		ミミズク把手、打斧3、磨石1、と石		
	SK－50			稜磨石		
	SK－51	M－8、9		台形土器	縄文土器、台形土器	
	SK－52	U－8	93×90×52	石鏃		
	SK－53	U－8	72×64×35			
	SK－54	U－5	100×83×			
	SK－55	W－9	90×75×24	打斧、粘土		
	SK－56		×　×80	石鏃		
	SK－57	W、X－6	×　×40			
	SK－58	X－6	×　×26			
	SK－59	X－6	111×88×20	石鏃、打斧		
	SK－60	X－7	146×88×29	土偶		
	SK－61	X－5	×　×34			
	SK－62	X－5	×　×32	土製円盤、磨石1	土製円盤	
	SK－63	X－9	62×58×42			
	SK－64	H、I－7	128×105×54	土偶、台形土器		
	SK－65	I－9	170×139×	打斧		
	SK－66	I－9	277×206×79	土偶、磨斧、磨石2		
	SK－67	Q－7	125×95×76			
	SK－68	J－9	128×118×33	土器		
	SK－69	H－7	110×84×38			SK－64を切っている。
	SK－70	H、I－7	135×122×48			
	SK－72	Y－4	92×90×	曽利式土器	曽利土器	
	SK－73	X－2	117×106×60	磨石		
	SK－74	V－5	73×60×21	石皿、ドリル		
	SK－75	V－5、6	101×81×16			
	SK－76	X－5	×　×52			
	SK－77	X－5	106×82×20			
	SK－78	X－5	×　×12			
	SK－79	V－7	196×141×	曽利式2個体、打斧3	曽利2個体	これをSB－68、69の埋甕と考えた。
	SK－80－1	I－8	95×82×66	石皿、土偶、打斧		
	SK－80－2	I－8	83×57×29			
	SK－81	H、I－8	84×78×44			
	SK－82	I－7	×　×31			SK－82～84まで重複した土壙あるいはSB－57内の土壙か。
	SK－83	I－7				
	SK－84	I、J－7				

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－85			打斧、石鏃1、磨石2		
	SK－88－1	Y－1	123×115×53	粘土塊		
	SK－88－2	Y－6	70×52×36			
	SK－89－1	Y－6、A－6(S－Ⅳ)		打斧		
	SK－89－2	W－7	124×92×			
	SK－90	K、L－8	223×115×	石鏃2、ピエス、打斧、ユーフレ3		
	SK－91	X、Y－5	115×100×54			
	SK－92	Y－6、7	152×130×81	磨石、ユーフレ3		
	SK－93	Y－5	125×92×30			SK－91と重複
	SK－94	Y－5、A－5(S－Ⅳ)	176×115×39	石鏃		
	SK－95	Y－6	139×116×48			
	SK－96	Y－6、A－6(S－Ⅳ)	102×52×46			土壙ではなく、柱穴様のもの
	SK－97	Y－6、A－6(S－Ⅳ)	61×53×53			
	SK－98	Y－5	118×60×74	スクレパー		
	SK－99－1	O－8	118×110×73	土製円盤、ユーフレ	土製円盤	
	SK－99－2	O－8	57×47×			
	SK－100	O－8	200×100×64	曽利式2個体、耳栓、ドリル、打斧、磨石、石皿	曽利式土器、耳栓	
	SK－101	Q－7	×　×51	粘土塊、土製円盤	土製円盤	
	SK－102	Q、R－7	×　×50			
	SK－103	R－7	×　×28			
	SK－104	R－7		ドリル1		
	SK－105	R－7				
	SK－106	R－7	×　×55			
	SK－107	R－7	×　×23			
	SK－108	M－7、8	×　×37			
	SK－109	Y－10	135×118×54	焼土、稜磨石		
	SK－110	Y－10	150×85×54	土偶、土製円盤、石ヒ	土偶、土製円盤	
	SK－111	J－4				
	SK－112	R－6	119×84×48			
	SK－113	Q、R－6	90×75×67			
	SK－114	Q、R－6	110×74×57			
	SK－115	J－5、6	179×133×38			
	SK－116	Q－6、7	×　×20			
	SK－117	Q－6	×　×23			
	SK－118	Q－6	×　×35			
	SK－119	Q－6	90×70×33			
	SK－120	J－6	148×116×29			
	SK－121	Q－7	×　×50			
	SK－122		×　×22			
	SK－123	R－6	×　×38	ユーフレ		
	SK－123－2	I、J－6	×　×26			
	SK－124	R－6	×　×43			
	SK－125	R－6	63×57×32			
	SK－126	R、S－6、7	×　×64	石鏃、ユーフレ2		
	SK－127		×　×58			

整理番号	土壙番号	グ.リッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－128	Ⅰ－5、6	125×116×56	角柱		
	SK－129	W、X－7	×　×47	土偶、土製円盤、石鏃2、ドリル、磨石	土偶、土製円盤	
	SK－130	T－4	105×96×27			
	SK－131	T、U－3、4	×91×82	打斧		
	SK－132	T－4	54×41×29			
	SK－133	T－4	76×55×26			
	SK－134	S、T－4	76×62×45			
	SK－134－2	S、T－4	38×23×20			
	SK－135	S、T－4、5	121×99×92	骨、炭化物出土、磨斧		
	SK－136	N－8	198×40×62			
	SK－137	N－8	88×83×97			
	SK－138	N－8	149×105×67			
	SK－139	N－8	98×77×35	土製円盤	土製円盤	
	SK－140	N、O－8	102×77×82			
	SK－141	O－6	×　×48	磨石、ユーフレ2		
	SK－142	O－6、7	×　×19			
	SK－143	O－7	×　×26	土偶		
	SK－144	Ⅰ、J－6、7	×　×34			
	SK－145	O－6	×　×64	石皿		
	SK－146		×　×59			
	SK－147		×　×53	打斧		
	SK－148	Ⅰ、J－6	139×110×38			
	SK－149	Ⅰ－6、7				
	SK－150		×　×18			
	SK－151	M－7	151×122×41			
	SK－152	Q－6、7				
	SK－153	R－7	×　×56			
	SK－154	R－7	×　×54			
	SK－155	G－6、7	×　×45			
	SK－156	Q－6		礫器		
	SK－156－2	O－8、9				
	SK－156－3	O－8	117×103×14			
	SK－157	O－7、8	160×69×20			
	SK－158		×　×35			
	SK－159		×　×46			
	SK－160		104×91×48	ユーフレ		
	SK－161		111×67×52			
	SK－162		×　×44	磨斧		
	SK－163		×　×54	石鏃		
	SK－164	K－2				
	SK－165	K－2				
	SK－166	O－6、7	×　×68			
	SK－167	M－7	156×62×55			
	SK－168	M、N－7	92×70×			
	SK－169A	J－6	159×122×	土製円盤	土製円盤	
	SK－169B		105×84×			
	SK－169－3	M－6、7				
	SK－170	◎				
	SK－171	S－11	127×105×57			

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－172	S、T－11	125×103×53			
	SK－173		60×53×28	土偶		
	SK－174	I、J－1、2		土製円盤、打斧3、ユーフレ	土製円盤	
	SK－175	M－6	101×67×45			
	SK－176	J－9	160×132×53	ユーフレ		
	SK－177	W－3	×　×40	台形土器		
	SK－177－2	V－4	74×64×			
	SK－178	H－8	×　×43			
	SK－179	H－8	×　×33			
	SK－180	N－11	114×113×40			
	SK－181	W－4	81×81×			
	SK－181－2	H－9	×　×21			
	SK－182	V－4	63×51×	打斧		
	SK－182－2	N－6	180×154×32			
	SK－183	N、O－6	189×166×92	ピエス		
	SK－184	N－6	84×77×30			
	SK－185	U、V－4、5	240×143×93			
	SK－187	H－8	×　×30			
	SK－188	P－10	195×98×27	台形土器	台形土器	
	SK－189	D、E－9	158×130×42	土製円盤	土製円盤	
	SK－190	G、H－4、5	276×241×22	ドリル	井戸尻式土器	
	SK－191	O－6	141×70×30	磨石		
	SK－192	O－10	94×74×40			
	SK－193	O－11	118×82×51	角柱		
	SK－194	G－5、6	192×133×37	角柱	藤内式土器	
	SK－195	N－11	143×105×46	打斧3		
	SK－196		×　×30			
	SK－197		×　×32			
	SK－198		×　×53			
	SK－199		×　×27	打斧		
	SK－200		×　×23	石鏃、打斧		
	SK－201	M－11	85×73×52	土偶		
	SK－202	T－4				
	SK－203	N－9、10	82×75×35			
	SK－204	N－9	105×97×38			
	SK－205	M－9	123×90×70			
	SK－206	O－10		土製円盤	土製円盤、曽利古式土器	
	SK－207	N－11	×　×26			
	SK－208	M－9	102×63×42			
	SK－209	M－9、10	66×53×27			
	SK－210	M－9、10	87×74×20			
	SK－211	M－11	117×85×36	打斧		
	SK－212	P－6	80×69×62			
	SK－213					
	SK－214	K－9	130×116×42	打斧		
	SK－215	O－6	115×110×	石鏃		
	SK－216		98×90×18			
	SK－217	I－3	142×105×32	土製円盤、打斧	土製円盤、曽利新式土器	

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－218	Ⅰ－3	126×112×56	打斧1、磨石、角柱、溶岩		
	SK－219	L－9	93×91×47			
	SK－220	L－9	64×58×58			
	SK－221	L－10	×　×36	ユーフレ		
	SK－222	L－10	106×105×56			
	SK－223	K－10	136×125×60	台形土器	台形土器	
	SK－224	K－10	109×77×52	打斧、ハンマー		
	SK－225	M－11	133×120×37			
	SK－226	L－10	×　×16			
	SK－227	L－10	×　×42			
	SK－228		123×110×13			
	SK－229		69×57×23			
	SK－230		×　×18	打斧、磨石	曽利新式土器	
	SK－231	L－12	109×90×38			
	SK－232	L－10	106×82×51			
	SK－233	P－6	104×94×52			
	SK－234		×　×28			
	SK－235	P－6、7	181×119×72			
	SK－236		296×267×39	打斧、磨石		
	SK－237	P－6	100×98×32			
	SK－238	Q－5	98×95×31			
	SK－239	Q－5	136×119×			
	SK－240	P－6、7	93×61×21			
	SK－241	P－6	73×66×44		井戸尻式浅鉢	
	SK－242	P－6	×　×52			
	SK－243	N－12、13	108×79×33	土製円盤	土製円盤	
	SK－244	Ⅰ－4	115×97×25			
	SK－245	Ⅰ－5	121×90×30			
	SK－246	Ⅰ－5	104×88×27			
	SK－247	S－3	122×107×58	石皿		
	SK－248	R、S－3	130×109×23	土製円盤	土製円盤	
	SK－249	N－12、13	×　×25			
	SK－250	R－5	105×94×91			
	SK－251	O－3				
	SK－252	N、O－12、13	117×101×90	土製円盤	土製円盤	
	SK－253	N－12、13	×　×52			
	SK－254	O－12、13	96×69×26			
	SK－255	Ⅰ－4、5	126×78×31			
	SK－256	L－12、13	×　×69	土製円盤	土製円盤、 井戸尻式土器片	
	SK－257	S－3、4	154×115×46			
	SK－258	R－5	×　×24			
	SK－259	K－12	161×113×	打斧、石皿、フレイク・スクレイパー	藤内式土器	
	SK－260	J－11	×　×74	打斧3	藤内式土器	
	SK－261	T－3	×　×44	石鏃		
	SK－262		×　×65			
	SK－263	K、L－11	×　×43			
	SK－264	M－11	×　×34			
	SK－265	M－11	×　×22			
	SK－266	F－10	105×92×23	石棒、打斧2	加E$_4$式、曽利新新式土器	

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－267	L、M－12、13	× ×40	打斧８、稜磨石、磨石、礫器、ユーフレ３	曽利新新式土器	
	SK－268	U－３	103×102×105			
	SK－269	P－12、13	× ×18			
	SK－270	J－12	127×100×			
	SK－271	J－５	132×120×32	石ヒ		
	SK－272	J－５	130×120×24			
	SK－273	J－５	109×103×24			
	SK－274	R－３、４				
	SK－275	J－11	× ×112			
	SK－276	V－２	154×127×			
	SK－276－２	T－３	144×129×			
	SK－277	V－４	× ×28	石鏃		
	SK－278	V－４	× ×45		曽利新式土器	
	SK－279	L－13	× ×78		曽利古式土器	
	SK－280	K、L－10、11	× ×46	磨石２		
	SK－281	W－４	× ×32			
	SK－282	V－４	× ×18			
	SK－283	R－４	95×93×99			
	SK－284	J－11	× ×110	土偶		
	SK－285	K－11				
	SK－286	S－３、４	× ×20			
	SK－287	V、W－３、４	168×158×52	土偶、土製円盤、石鏃、石ヒ、打斧２、石皿、ユーフレ１、溶岩	土偶、土製円盤、加E$_4$式	
	SK－288	◎				
	SK－289			打斧、磨斧、磨石３、ユーフレ２		
	SK－290	H－１		磨石	曽利新式	
	SK－291	W－３	120×105×45	土偶、打斧、礫器	井戸尻式土器	
	SK－292	W－４	95×72×19			
	SK－293	W－３、４	106×89×33			
	SK－294	W－４	56×55×14			
	SK－295	W－４	57×56×32			
	SK－296	M－12、13	× ×55	打斧		
	SK－297	M－12	× ×61	打斧、コア		
	SK－298		× ×55	土製円盤	土製円盤	
	SK－299	O、P－13	210×131×36			
	SK－300	O－13	× ×50			
	SK－301	O－13	× ×48			
	SK－302	N、O－13	153×95×48			
	SK－303	T－３	× ×80	ドリル、稜磨石、磨石、石棒		
	SK－304	Q－７	× ×54			
	SK－305	V－12	151×125×50	打斧、ユーフル３		
	SK－306		102×53×40			
	SK－307			玉石		
	SK－308	Q－７、８	109×92×40			
	SK－309	Q－８	109×83×25			
	SK－310	◎				
	SK－311	M－13	× ×44			
	SK－312	S－８	77×51×			
	SK－313	S－８	88×56×	石皿		

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－314	S－8				
	SK－315	◎				
	SK－316	U－7、8	101×72×34			
	SK－317	U－8	73×73×55			
	SK－318	Y－4	×　×34			
	SK－319	Y－4	×　×31			
	SK－320		×　×40	打斧		
	SK－321	U－5	×　×29			
	SK－322					
	SK－323	Y－4				
	SK－324	Y－4				
	SK－325					
	SK－326	T－8	56×51×58			
	SK－327	E－5	×　×23	ドリル、ユーフレ2		
	SK－328	Y－3、4	×　×82	土製円盤、打斧4、磨石、石皿、礫器4、ハンマー、溶岩、コア	土製円盤	
	SK－329	H－6、7	114×107×22			
	SK－330	◎				
	SK－331	X－4				
	SK－332	X－4				
	SK－333	J－2、3	158×148×20			
	SK－334	V－8	×　×28	玉石		
	SK－335	V－8	×　×22			
	SK－336	V－8	×　×22			
	SK－337	V、W－7、8	×　×22			
	SK－338	W－8	×　×19			
	SK－339	W－7	×　×30			
	SK－340		90×61×47			
	SK－341	U－2	74×45×25			
	SK－342	J－3	×　×27			
	SK－343	N－12、13				
	SK－344	M－12		打斧、ユーフレ		
	SK－345	I－11	×　×23	ドリル、打斧、ユーフレ		
	SK－346		131×104×36			
	SK－347		×　×39			
	SK－348	S－2	×　×38			
	SK－349		97×60×41			
	SK－350		84×70×33			
	SK－351	J－12	×　×30			
	SK－352	I、J－13				
	SK－353	W－3	×　×29			
	SK－354	S－2	×　×42			
	SK－355	Y－3、4	×　×55	獣面把手、土偶、打斧3		
	SK－356	Y－3	×　×46	打斧		
	SK－357	Y－2、3	×　×23	石鏃2、打斧3、ユーフレ		
	SK－358	W－2	97×65×33			
	SK－359	V－2		打斧4		
	SK－360	V－2	145×113×38	打斧5、稜磨石1、礫器	曽利新式	
	SK－361	J－12	70×67×			
	SK－362	Y－2、3	197×150×40	角柱		

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－363	◎				
	SK－364	X、Y－3	157×112×20			
	SK－365	X－3	52×43×20			
	SK－366	W、X－3	144×126×28			
	SK－367	W－3	97×90×29			
	SK－368	V－2	×　×26			
	SK－369	V－2	×　×18			
	SK－370	U－2	134×110×30			
	SK－371	U－2	91×85×26		曽利新式	
	SK－372	U－2	50×45×24			
	SK－373	V－2	×　×18			
	SK－374	X－2	72×71×17			
	SK－375	X－2	70×66×15			
	SK－376	X－2	55×49×14			
	SK－377	W－2	109×93×23			
	SK－378	W－2	73×69×20			
	SK－379	W－2	49×46×23			
	SK－380		148×147×46			
	SK－381	W－3				
	SK－382	Y－3	×　×17			
	SK－383	Y－3	×　×14			
	SK－384	Y－3	×　×14			
	SK－385	Y－3	×　×15			
	SK－386	X、Y－4	88×67×			
	SK－387	Y－4	120×45×			
	SK－388	X、Y－4				
	SK－389	X、Y－4				
	SK－390	Y－4	×　×35			
	SK－391	Y－4、5	88×68×43	土偶		
	SK－392	Y－5	66×58×24			
	SK－393	Y－5	96×87×12			
	SK－394	Y－5	62×35×10			
	SK－395	S－Ⅳ E－6	×　×93			
	SK－396	S－Ⅳ A－6	×　×45			
	SK－397	S－Ⅳ D－6	×　×37			
	SK－398	S－Ⅳ E－6	×　×97			
	SK－399	◎				
	SK－400	U－11	103×54×	磨石、石皿、溶岩		

土器一覧表分類番号

1．早期末葉～前期初頭
2．前期中葉～末葉
3．五領ヶ台式
4．狢沢式
5．新道式
6．藤内式
7．井戸尻式
8．曽利式
　8－1　曽利古式
　8－2　曽利新式
　8－3　曽利新新式
　8－4　曽利縄文式
　8－5　その他
9．加曽利E式
10．加曽利E式終末
11．称名寺式
12．堀之内式

第8節　土器一覧表

S—Ⅲ区　釈迦堂Z2式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
39	92	1	SB−47	1	口辺部に一条の結節沈線をめぐらし、その下に口辺部文様帯を区画する低隆帯をめぐらし、その上に条痕を施している。	14.6		
		2	SB−47	1	口辺部文様帯に縦の隆帯と口辺部文様帯下端の隆帯がある。隆帯上に結節沈線を施し、器面にも結節沈線を施している。	16.5		
		3	SB−47 No.21	1	口辺部文様帯下端の低隆帯があり、口辺部には2条の結節波状沈線をめぐらし、部分的に縦の結節沈線もある。	33.9		
		4	SB−47 No.5	1	口辺部文様帯下端の低隆帯上に貝殻背圧痕を施し、口辺部には、3条のほとんど沈線化した結節沈線を施す。	33.0		
	93	18	SB−52 No.2	8	曽利新式の土器	18.6		
		19	SB−52 No.41、42	9	曽利新式の土器	23.0		
	94	7	SB−102	1	含繊維土器で口辺部にタガ状隆帯をめぐらし、その上に右傾の刻目を施す。			
	95	1	SB−107 No.30	1	繊維をやや含む土器で、口辺部に3条の波状沈線を施している。結節化はほとんどない。			
		3	SB−108	1	含繊維土器　口辺部にタガ状隆帯をめぐらす。刻目は左傾である。			

S—Ⅲ区　五領ヶ台式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
40	96	1	SB—29—1 埋甕炉	3	口辺部に4単位の把手をもつ。正面は羊角状をなす。口縁下に交互刺突による連続コの字文をめぐらす。その下にY字状沈線を施す。一部は結節沈線	14		

S—Ⅲ区　狢沢式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
40	97	37	SB—20 埋甕炉 Y−9 No.20、22	4	口辺部に楕円区画帯を三段めぐらす。楕円区画の中も重走する結節沈線をめぐらすものと、波状結節沈線を施すものもある。	25		
		36	SB—20 埋甕炉 2	4	指頭圧痕を残した器面の上に隆帯が残る。36を切って37が埋設してあった。			

S—Ⅲ区　新道式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
40	98	1	SB—18 埋甕炉	5	新道式の胴上半部を利用した埋甕炉である。三角区画隆帯の脇にキャタピラ文、その脇に三角押文を付けている。			
		1	SB—78 埋甕炉	5	新道式の胴上半部を利用している。三角区画隆帯＋キャタピラ文＋三角押文である。			
		10	SB—78 No.89	5	口辺部に楕円区画帯をめぐらす。楕円区画帯の中はキャタピラ文と波状沈線			
		16	SB—78 No.1	5	底部			
	100	45	SB—95 No.17 20、21、97 108、116、122	5	口辺部に三角区画帯、胴部に区画帯、胴下に三角区画帯をめぐらす。口辺部、胴部、胴下部区画帯はそれぞれ、施文具をかえている。	31.5	7.4	
		46	SB—95 No.122 1—2 No.7	5	口辺部に変形の区画帯をめぐらす。区画帯は隆帯とキャタピラ文と三角押文を付けている。	10.7		
		47	SB—95 No.	5	口辺部三角区画帯、胴部も三角区画帯、胴下部に楕円区画帯をめぐらす。三角押文は用いず大小のキャタピラ文を用いている。	45.2		
		48	SB—95	5	口辺部三角区画帯に隆帯にキャタピラ文と区画の中に三角押文			
		49	SB—95	5	48と同様な文様構成であるが、口辺部の区画が異なる。	10.7		
		50	SB—95 No.14	5	抽象文土器である。縄文地に口辺下に楕円区画帯、胴部に抽象文、抽象文は隆帯にキャタピラと三角押文を加えている。	35.2	16.0	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	100	51	SB—95 No.52 74、100 SB—05 No.521	5	これも抽象文土器であろう。三角押文の施文は部分的である。			
		52	SB—95 F—4 No.7	5	区画帯の構成が不明、キャタピラ文と三角押文を利用、胴下半部は三角押文のみである。			
		53	SB—95 No.48、70	5	RLの斜縄文、新道式にしばしばみられる円筒形の縄文土器である。			
		54	SB—95 No.86	5	把手である。			
		55	SB—95 No.108 I—2 No.7、45 S—Ⅲ SB—43 No.103	5	浅鉢、4単位の突起を口縁にもつ、突起は粘土紐を口唇にまいて凹凸のある突起となっている。	18.6		
	101	85	No.72、45、54	5	無文の深鉢	31.5		
		86	No.23、24	5	口辺部に三角区画帯、中に退化した玉抱き三叉文、体部にも三角区画帯。			

S—Ⅲ区　藤内式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
41	103	26	SB—49	6	縄文　把手をもつ皿形土器			
		27	SB—49 No.31	6	円筒形の深鉢に0段3条の縄文RLの地文を三段に磨り消している。そして上段には円形磨消文をもっている。	21		
		28	SB—49 埋甕	6	胴部に輪積み痕と指頭圧痕を残している。	22.9	2.6	
		1	SB—87 埋甕	6	縄文　RLの斜縄文	23.1		
	104	14	SB—84 No.92 97、116、127、144	6	縦区画文、口唇部は4単位に分れており、その2つに文様がある。縦区画の中は単なる沈線ではなく、連続コの字文、玉抱き三叉文がある。	40.0		
		15	SB—84 No.149	6	縦区画文、口辺にひねりが付く、縦区画文は大型化する。	46.0		
		16	SB—84 No.90、91、92、 94、113、114	6	縦区画文、方形を組み合せた縦区画文と異なり、さまざまな形が組み込まれ、三叉文等が多用されている。	35.0		
		17	SB—84 No.82、119	6	縦区画文、縦区画の中にカエル（ヒト）文を組み込んでいる。	14.7		
		18	SB—84 No.41 46、50、93、111	6	縦区画文、典型的な縦区画文である。	19.9		
		19	SB—84 埋甕	6	縦区画文、区画の中に角押文、キャタピラ文がある。	11.4		
		20	SB—84 No.50、68、1125	6	縦区画文、縦区画文としては変則的で、縄文を施し、方形区画を積み重ね、入れ違いになっていない。	28.0	3.0	
	105	21	SB—84 No.33		縦区画文土器			
		22	SB—84 No.134		〃			
		23	SB—84		〃			
		24	SB—84	6	縦区画文			
		25	SB—84 No.62	6	無文地に隆帯とキャタピラ文で文様を描く。			
42		26	SB—84 No.41 46、50、93、111	6	浅鉢　口辺部区画帯の中にやや先のまるいキャタピラ文、胴部に縄文RL	18.0		
		27	SB—84 No.34 G—3 No.3	6	いわゆるゾウリ虫文が短隆帯とキャタピラ文で施される。	16.7		
		28	SB—84 No.89	6	口縁下にキャタピラ文と波状沈線をめぐらし、胴部は縄文RL	31.0		
		29	SB—84 F—3 No.14	6	0段3条のRLを消して文様を描く			
		30	SB—84 No.41 52、90、111	6	輪積痕指頭圧痕を残した深鉢	23.0	3.0	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		31	SB—84 No.28 84、131、132	6	有孔鍔付土器　底部にある２つの刻みは４単位である。東京都中原遺跡に類例あり。	16.1		
		32	SB—84		底部			
		33	SB—84		〃			
		34	SB—84 No.82		〃			
42	106	41	SB－84 G－3	6	有孔鍔付土器　縦区画文土器、区画と区画の間を削り取っている。	11.4		
		42	G－3	6	縦区画文土器、口辺部にメガネ状突起が付く。	36.0		
		43	G－3 No.21	6	口頸部に隆帯、体部に４単位の縦隆帯を施し、他を縄文で埋める。			
		44	SB－84 No.44	6	縦区画文土器の底部	7.9		
		45	SB－84 No.86、137	7	頸部は隆帯による楕円区画一帯をめぐらし、その下にさらに隆帯をめぐらし、体部はRLの０段３条	30.5		
		46	SB－84 F－4	7	口縁下に１条の沈線、体部は縦の縄文	24.9		
		47	SB－84 No.9、13 F－3	7	全縄文の土器　０段多条の縦位の縄文	21.0		
		48	SB－84 No.15、18	7	口縁部突起下の垂下渦巻文、頸部に楕円区画をめぐらす。	34.0		
		49	E－4 No.56 F－3 No.11、12	7	浅鉢、口縁部に隆帯による文様をめぐらす。（口径56.0）	19.0		
43	110	1	SB—100 No.1 19、20 K—2 No.2、17	6	口辺部を失うが、区画文と新道系文様が組み合わさったものである。			
		2	SB—100	6	縦区画文　幅の狭い区画の中に条線やキャタピラ文が見える。			
		3	K—2 No.649	6	無文の小型深鉢			
		4	K—2 No.550 619、581	6	浅鉢　４単位の波頂部をもつ			
		5	K—2 No.6	7	井戸尻式期に属する。口唇部の波頂部にヘビ文が付く。			
		6	K—2 No.627、640	6	台付土器の脚部か？　異形土器			
		7		8	曽利式期の口辺部			

S—Ⅲ区　井戸尻式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
43	112	14	SB—09 No.14 16、X—9 No.23 24、26、33、37	8	浅鉢　撚糸文LのR巻きを施している。	29.8	23.3	
		16	SB—09		底部			
		1	SB—27 No.1、5	7	底部　曲折底の部分			
		2	SB—27 No.3	7	底部			
	113	51	SB—29—2	7	底部　縄文０段３条のRLを施している。			
		52	SB—29 No.16、27、40	7	浅鉢　口縁部に指頭圧痕をもった隆帯をめぐらしている。			
	115	30	SB—33 No.6、25、53	7	底部　曲折底の曲折部に楕円区画帯をもったもの、縄文は０段３条のRLである。	18.8		
		31	SB—33 No.10 20、25、74	7	底部　曲折底、縄文は０段３条	21.0		

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	115	32	SB—33	7	0段3条のRLを地文とし、ゆわいるゾウリ虫文を施している。			
		33	SB—33	7	深鉢　縄文は0段3条のRLと思われる。			
			No.2、87					
		34	SB—33 No.28	7	深鉢の底部			
		35	SB—33 No.4	7	縄文地RLに円形磨消を加えている。			
		37	SB—33 No.8	7	有孔鍔付土器　小型の有孔鍔付土器である。			
		38	SB—33 No.41	7	曲折口縁			
		39	SB—33 No.19	7	底部			
		40	SB—33	7	口縁部に波状隆帯をめぐらしている。			
		41	SB—33 No.12	7	曲折底			
		48	SB—33 No.25	8	曽利新式の口辺部			
		49	SB—33 No.21	8	これもおそらく曽利新式の口辺部			
		53	SB—33 No.5	8	ミニチュア　無文地に沈線文を施している。			
44	117	40	SB—35 No.34	7	深鉢　やや外反する円筒形の器形に4単位の突起をもつものである。文様帯	48.0		
			37、38、60		が胴上半に集中し、胴下部は無文帯となる。			
		41	SB—35	7	深鉢　40と類似した文様帯構成をもつ。	38.7	12	
			No.28、30、35					
		42	SB—35 pit11	7	底部　胴上半部と下半部を分ける隆帯が残る。			
		43	SB—35	7	深鉢　無文化した口辺部に隆帯が付き、胴下半は縦の縄文に磨消を加えてい	23.5		
			SK—15		る。			
		44	SB—35	7	小型深鉢　円筒形の上半部に文様帯が集中する。関東系土器	20.9		
			SK—13					
		45	SB—35 No.46	7	〃　44と類似した器形と文様である。			
		46	SB—35 No.71	7	深鉢　円筒形土器の口辺部			
		47	SB—35	7	壺形土器、湾曲した胴部に彫刻文を施した文様帯を付けている。			
			SK—12					
			pit 6 No.70					
		48	SB—35	7	これも47と同様な器形、文様である。			
			No.35、69					
		49	SB—35 No.49	7	小型土器			
		50	SB—35	7	浅鉢　口唇部に文様が施される。			
			SK—12					
		51	SB—35	7	深鉢　無文の深鉢	21.8	2.3	
			No.36、41、60					
44	119	1	SB—36	7	大甕　大甕の胴部を利用した埋甕炉、円文を中心に手のモチーフが加わる。	27.0		
			埋甕炉		胴中央部に楕円区画帯がめぐる。			
		2	SB—36 M—6	7	キャリパー口辺、曲折底の褶曲文土器、胎土、器形ともに、井戸尻式土器と	33.0		
			No.1　M—7		は異なる。異系統土器、信州系土器といっている。			
		3	SB—36 No.12	7	曲折口辺、曲折底の深鉢、口辺部と胴下部に文様が集中する。縄文地に隆帯			
			M—6　N—Ⅲ		を貼り付けている。施文順序の判明する良好な資料			
			Q—20					
		4	SB—36 No.1	7	曲折口辺、曲折底の深鉢、口辺部と胴下部に文様が集中する。3のように縄	62.4		
			M—6　M—7		文は用いず、無文地となっている。			
		5	SB—36	7	小型深鉢、口唇部から隆帯が下がり、縄文はLR	12.0		
		6	SB—36	7	台形土器、孔は1孔4単位、接地面が片減りしている。			
		7	SB—36	7	台形土器、孔は2孔4単位、接地面は片減りしている。			
45	121	1	SB—48 No.43	7	深鉢、やや外反する口辺に4単位の突起がつく。文様帯は胴上半部に集中す			
					る。			
		2	SB—48 No.3	7	深鉢、口縁部は無文で外反し、口縁下で楕円区画文がめぐっている。胴下半	17.3		
					は0段3条のRL			

写　真	図	図　No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
	121	3	SB—48 No.1	7	曲折口縁、曲折底の小型深鉢、口辺部はキャタピラ文と波状沈線で文様を描いている。			
		4	SB—48 No.43、47	7 or 6	浅鉢、口辺部に楕円区画がめぐる。			
		5	SB—48 No.1	7	深鉢　無文地に隆帯文を施している。			
		6	SB—48 No.43	7	深鉢　無文地に三叉文と大きな楕円区画が見える。			
		7	SB—48 SK—09	7	台形土器　SK—09に一部が出土している。下面におそらく4単位の刻目があったのであろう。脚部が磨滅している。			
		8	SB—48 No.25	7	台形土器			
		9	SB—48 No.26 33、35、36	7	浅鉢　口縁部が肥厚している。			
		10	SB—48 No.55	7	ミニチュア　口辺部に波状隆帯がめぐる。			
		11	SB—48 No.32	7	深鉢　縄文地0段3条のＲＬに、綾杉隆帯が垂下する。			

S—Ⅲ区　曽利式期の住居址出土土器

写　真	図	図　No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
45	124	8	SB—04 No.7、8	8	4単位の波状口辺深鉢、波頂部下に渦巻文、他は楕円文の口辺部文様帯をもつ。胴部は櫛歯状工具による波状沈線文			
		9	SB—04 No.21	8	小型深鉢　口辺部に沈線がめぐり、胴部は垂下する平行沈線と波状沈線、無文地である。			
		10	SB—04 No.14	9	深鉢　加曽利Ｅ$_3$式に比定される胴下部			
		11	SB—04 No.4	9	深鉢　加曽利Ｅ$_3$式に比定、口辺部、文様帯と体部文様帯の区分が失なわれつつある。縄文ＲＬ	22.2	2.4	
		12	SB—04 No.12	9	深鉢　底部　縄文ＲＬを施文している。			
	125	1	SB—05 No.493	8	深鉢　口辺部文様帯はマド区画、胴部は低隆帯による大区画をもち、そこに波線を垂下させる。			
		2	SB—05 No.284	8	深鉢　これもほぼ同様の文様構成をとるが、胴部は平行沈線を垂下させている。	21.8		
		3	SB—05 No.274	8	深鉢　2の文様構とほぼ同じである。			
		4	SB—05 No.336 337、338	8	深鉢　実側の位置が45°ずれている。口縁部をめぐる沈線から2本の沈線を垂下させて、冂区画をつくろうとしているが、不規則	27.3		
		5	SB—05 No.291 294、298、302 338、480	8	甕、口辺部を欠損している。胴部に垂下する2本の沈線が見える。	49.2		
46		6	SB—05 No.286 287、448	8	X把手付大甕、X把手を継ぐ隆帯は2本であるが、胴部の渦巻文は1本である。	41.3		
		7	SB—05 No.277	8	吊手土器　吊手土器特有の出土状況である炉の北側から出土、懸垂孔を両脇に備えている。	20.0		
		8	SB—05 No.335	8	底部　低隆帯モチーフが見える。	22.1		
		9	SB—05	8	鉢形土器　通常この種の土器はX把手が付くが、本例はX把手も、充填条線もない			
		10	SB—05	8	底部			
	126	11	SB—05 No.985	8	X把手付鉢、頸部に楕円文帯とX把手が付く。			
		12	SB—05 No.524 K—3	8	小型深鉢　口辺部に沈線がめぐり、波状沈線が垂下する。	14.7		
		13	SB—05 No.985	8	〃　垂下する2本の平行沈線がみえる。			
		14	SB—05 No.506	8	〃　無文土器			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	126	15	SB—05 No.280 282、283	9	深鉢　口辺部にマド区画、垂下する半隆帯、やや曽利的な土器	19.3		
47		16	SB—05 No.297 322、489、510 534 SB—37	9	深鉢　口辺部にマド区画、頸部は無文帯、胴部に2本隆帯による渦巻文を施している。縄文はRL　曽利と大木の影響を受けた土器	41.0		
		17	SB—05 No.567					
		18	SB—05 No.319 331、469	9	深鉢　関東地方の加曽利E式の搬入品と思われる。RL	31.2		
		19	SB—05 No.321		小型土器			
	129	2	SB—07 埋甕	8	曽利新式第1段階　SB—07の埋甕ではない。肥厚口辺土器で、円文およびS字状文を肥厚口辺に施文し、胴部に大きな渦巻文	28.5	5.0	
	130	1	SB—17 埋甕	9	深鉢　加曽利E$_4$式、波状口縁、一部に把手、胴部に渦巻を施し、渦巻文は沈線で区画している。この住居に伴うものではなかろう。		4.4	
		18	SB—21 埋甕	8	長胴甕の胴部、竹管修形隆帯によってU字状のモチーフを描き、その脇に粘土紐を貼り付けている。条線は充填	31.8		
		19	SB—21 No.1	8	深鉢、肥厚口辺土器、口縁部にS字状渦巻文、胴部にやや変形の渦巻文	20.0		
	131	4	SB—22 No.2、4	9	深鉢、加曽利E$_4$式、微隆帯で区画を描いている。薄い縄文が見える。	21.9		
		13	SB—24 No.24	9	ミニチュア　縄文がある。			
		14	SB—24 埋甕	9	深鉢　RLの縄文地の上に粘土紐を貼付している。	22.0		
	132	1	SB—29—3 埋甕炉	8	長胴甕　胴部にU字状の隆線を貼り付け、竹管で結節している。この種の土器は頸部の施文が最初である。条線の上に指紋が残る。	22.4		
		2	SB—29—3 Y—8 No.8	8	小型の長胴甕、頸部に波状隆帯を施している。	21.0		
		27	SB—29—3 No.22		台形土器　孔は不明			
48	133	1	SB—30 No.1 R—6 No.1	8	X把手付大甕、主要モチーフは竹管修形隆帯で描く、その数は3本である。粘土紐の貼付は条線施文後である。	53.8		
	134	1	SB—64 埋甕	8	長胴甕、口縁部は失なわれているが、外反状に直立したものである。頸部はふくらみをもち、無文地に隆帯で渦巻文を施している。胴部は頸部から3本の隆帯を垂下させ、その間にU字隆帯がある。逆位底部穿孔埋甕	75.0	62.4	
		2	SB—34 埋甕炉	8	長胴甕の口辺部、頸部に刻目隆帯がある。	16.2		
		3	SB—34—64 No.49	8	小型の長胴甕の口辺部、頸部に刻目隆帯がある。			
		4	SB—34—64	8	台形土器　無孔　接地面は磨耗			
		5	SB—34—64 No.40 K—12 No.9	8	台形土器　無孔　接地面は磨耗			
		6	SB—34—64	8	台形土器　鍔部に刻目、孔は1孔4単位			
		11	SB—34—64 No.42	8	小型土器　胴部に沈線文と条線がみえる。			
		20	SB—34—64 No.59	9	小型深鉢RLの縄文が見える。			
	135	1	SB—37 No.27	8	深鉢、口縁部に弧状マド区画を隆帯で施し、波頂部下より垂下平行沈線があり、その間に波状沈線を施す。	43.0		
		2	SB—37 埋甕1	8	逆位底部穿孔埋甕　口辺部にやや変形した2重弧のマド区画をもち、その下に低隆帯の懸垂文が付く。一部の懸垂は渦巻状となっている。			
		3	SB—37 No.10、13	8	小型深鉢、4単位の波状口縁、口辺部に1条の沈線と波頂下から、垂下沈線で4区画をし、その区画の中央に波状垂下沈線	17.5	0.8	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	135	4	SB—37 No.1、3	8	深鉢、4単位の波状口縁、波頂部に渦巻沈線と波頂下に3本の垂下沈線で大区画をなし、その中央に波状垂下沈線を施す。地文は櫛歯状工具の刺突文である。	26.7	4.5	
49		5	SB—37 No.6、16	8	深鉢、口辺部に1条の沈線をめぐらす。その下に隆帯でマド区画をなす。マド接合部から、1本の隆帯線が垂下する。それによって、4区画された中央に波状沈線が垂下する。	33.0		
		6	SB—37 No.17	8	特殊な縄文L、やや硬質の紐状のrを2本撚り合せて、Lとしたもの、2本のrとrの間が節のようになる。これは繊維の方向が見えないからL$\frac{0}{0}$か			
		7	SB—37 No.23	8	深鉢、口辺部に1条の低隆帯をめぐらし、そこから4単位の2本低隆帯が垂下する。条線は横位で、そこに波状線がある。	51.8		
		8	SB—37	8	網代底			
		9	SB—37 No.2 4、13	8	底部			
		10	SB—37 No.27	8	深鉢			
		11	SB—37	8	深鉢、4単位の大区画、区画間に渦巻文、大区画の中央に波状沈線が垂下する。			
		12	SB—37 埋甕2	8	深鉢、条線のみの土器　逆位底部穿孔甕			
		13	SB—37	8	浅鉢、口辺部に一条の沈線			
	136	1	SB—39 埋甕	8	X把手付甕　重弧文土器　重弧文もX把手も竹管修形隆帯で主文様を描く。	20.5		
		2	SB—39 No.3 K—3 M—7 M—7 No.10	8	口辺部を欠く、垂下する半隆帯で従区画した中を櫛歯状工具による沈線と波状垂下沈線で埋めている。			
		3	SB—39 No.9	8	口辺部と底部を欠く、体部はH字状垂下隆帯の退化したもので縦区画し、その中を半截竹管による沈線と垂下沈線で埋めている。			
		4	SB—39 No.9	8	体部に渦巻状文様を描く類である。渦巻文は隆帯で描かれ、その間を沈線で埋めている。			
		5	SB—39 No.2 SB—71 No.2、7	8	体部に渦巻状文様を描く類、渦巻文は隆帯で、その間を集合沈線で埋めている。			
	138	10	SB—40 No.51 SB—43 No.74	8 8	口辺部に2重のつなぎ弧文をもち、垂下文は2重で2ケ所において渦巻がある。その間を集合沈線で埋め、波状沈線を垂下する。なお、口辺部の一部はSB—43から出土している。	49.9		
		11	SB—40 No.91		冂状区画の中にハの字状沈線で埋めている。			
		12	SB—40		体部に短沈線で埋めている。			
		13	SB—40 No.52		斜縄文で器面全体を埋めている。			
50	140	40	SB—41 No.40	8	重弧文土器　竹管修形半隆起線による重弧文			
		41	SB—41 No.29 30、31	8	X把手付大甕、低隆帯で渦巻文を描く、隆帯の上にワラビ手状沈線を施す。肥厚口辺系土器に属するものである。	60.5		
		42	SB—41 No.106		縄文地RLに波状沈線を垂下させる。			
		43	SB—41	8	体部全体に渦巻文を描く類、一般には口唇下に一条の沈線をめぐらすが、これでは、ワラビ手状、短沈線となっている。			
		44	SB—41 No.31 R—2 No.11、12 R—3 No.3	8	肥厚口辺系土器、口辺部を肥厚させ、波頂部に渦巻沈線と楕円文、体部は垂下する沈線で区画し、その間を、集合沈線で埋め、その上に波状沈線を垂下させる。			
		45	SB—41 No.28	8	肥厚口辺系土器、口辺部を肥厚させ、体部は半截竹管による沈線とモチーフを描く沈線が見られる。			
		46	SB—41 〃 SB—33	8	口縁から波状沈線が垂下する。無文地であるが、一部に短沈線が見られる。	39.6	10.6	
		47	SB—41 No.106	8	口辺部と底部を欠く、X把手付甕、低隆帯による渦巻文を描く、渦巻文の先端がまた渦を描くところから肥厚口辺系土器	24.5		

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	141	1	SB—42 V—3,5 V—5	8	体部に低隆帯による渦巻文を描く、その間を半截竹管による沈線で埋めている。本来X把手が付くものであろう。			
		1	SB—43 No.43、51	8	X把手付大甕　竹管修形隆帯により半渦巻文を描き、その脇に波状粘土紐を貼り付けている。			
		2	SB—43 No.59 105 M—6	8	X把手付大甕　これも竹管修形隆帯で主モチーフを描いている。			
		3	SB—43 No.105	8	X把手			
		4	SB—43 No.95	8	X把手			
		5	SB—43 No.87	8	X把手			
		6	SB—43 No. 9	8	大甕の口辺部			
	142	7	SB—43 埋甕	8	口辺部を欠く、H字状垂下文で縦区画Lの間を矢羽状の沈線で埋め、沈線の中央に波状沈線が垂下する。			
		8	SB—43 No.107	8	加曽利E的なマド区画を口辺部にもつ。体部には、垂下する2本沈線が4単位あり、他を集合沈線で埋めている。			
		9	SB—43 No.109	8	8と同様な口辺部破片			
		10	SB—43 No.32 L—6 No.7、59	8	口縁下に1条の沈線をめぐらし、その下に楕円文と渦巻文を描き、渦巻文から垂下する隆線がある。その間を縦の集合沈線で埋め、その上に波状沈線を施す。			
		11	SB—43 L—6	8	口縁下に1条の沈線と、その下に楕円文帯をめぐらす。			
		12	SB—43 No.79 8、9、11	8	鉢形土器で、あるいはX把手が付く、頸部に楕円文帯を施す。			
		13	SB—43 No.56	8	口縁部に1条の沈線をめぐらし、体部は縦の条線、その上に波状沈線を施す。	20		
		14	SB—43 No.36	8	これも13と同様なものであろう。	18.3		
		15	SB—43 No.69、83 M—7 No.24 L—7 L—10		縄文地（RL）に口辺部につなぎ弧文（本来的には懸垂文が適切）を沈線で描いている。			
		16	SB—43		器面に逆U字状沈線で区画した中に条線を施こし、その上に波状沈線を施す。			
		17	SB—43 No.86		浅鉢で口縁下に1条の沈線をめぐらす。			
51	144	1	SB—44 (SB—34) No.1、65 K—8 No.4、5、16 21 L—8 No.5	8	X把手付甕、X把手と体部の渦巻文は分離してた段階のもの。条線ではなく、列点で充填している。	28.9		
		2	SB—44 (SB—34) K—8 No.14 N—Ⅲ V—20	8	肥厚口辺系土器　肥厚口辺に円文が連続する。時には口唇部から、S字状文となっている。体部は渦巻文が連なり、その間を条線で埋め、さらにその上に波状沈線を施すものもある。	32.4		
		3	SB—44 (SB—34) No.34、36、37、38	8	斜行沈線文土器　沈線の上に粘土紐で頸部を区切り、体部は小渦巻と波状文を粘土紐で付けている。	27.5	4.3	
		4	SB—44 (SB—34) No.3、6、15、16、 53、55 SK—90 K—8 No.16 L—8 No.2	8	口辺部に2重のつなぎ弧文を隆帯で付け、体部は沈線で渦巻文等を描いている。そして器面全体に列点で充填している。	21.5		
		5	SB—44 埋甕	8	口辺部を欠く、頸部に刻目隆帯をめぐらし、地文の縄文はLR	19.5	2.8	
		6	SB—44 (SB—34) L—10 No.3、5	8	肥厚口辺系土器　口辺部に円文が付く、波頂部では渦巻文となっている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		7	SB—44 (SB—34) No.6、33 L—8 K—8	8	浅鉢	25.1		
52		8	SB—44 (SB—34) No.55	8	全縄文の土器、RL			
	146	1	SB—46 埋甕	8	口辺部文様帯はほとんど退化し、ワラビ手状になっている。2本沈線で区画した中も、矢羽状に1本沈線で埋め、その中央に波状沈線を施している。	24.4	5.1	
		2	SB—46 No.27	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、体部には太く浅い沈線文を施している。	18.0		
		3	SB—46 No.15、23 K—9	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、つなぎ弧文と渦巻文を付け、そこから垂下する隆帯も体部中央で渦巻文をもっている。条線は縦位	28.8		
		4	SB—46 No.7	8	つなぎ弧文と垂下隆帯が1本で連続的に表出される。			
		5	SB—46 No.2	8	器面全体に1本沈線による矢羽状条線を施こし、その中央に波状沈線を垂下させている。	30.0		
		6	SB—46 No.53	8	これもまた口辺部文様帯はない。2本1単位の垂下沈線とその間に矢羽状1本沈線による条線	16.0		
		7	SB—46 No.20、28、40、57	8	口辺部に1条沈線をめぐらし、体部は縦位の条線			
		8	SB—46 No.33	8	口辺部を欠く、垂下する隆線とその間に矢羽状条線とその中央に波状沈線を施す。			
	148	10	SB—57 No.4	8	頸部に竹管修形の半隆線をめぐらし、体部も同様な隆線でモチーフを描く、条線は縦位、図版の貼り誤り。			
		11	SB—50～58 No.27 No.5	8	頸部に竹管修形の半隆線をめぐらし、体部にU字状モチーフを描き、その脇に波状粘土紐を付ける。またU字状の中央にも波状粘土紐が付く。	16.8		
		12	SB—50～58 No.47、46	8	頸部にタガ状の中空把手が付いており、一部は口辺部まで伸びて、水煙把手をなすものと思われる。	17.8		
		13	SB—50～58 No.62	8	U字状モチーフに波状粘土紐が付いている。			
	149	46	SB—50～58	8	逆U字状区画の中に条状と沈線が付く。			
		47	SB—50～58 No.8	8	器形は異地域のもの、頸部に数条の沈線、体部は条線			
	151	21	SB—55 No.1～7	8	おそらく斜行沈線文土器、頸部に波状粘土紐を付け、体部は条線地に波状粘土紐を垂下させる。一部はカギ状となっている。	27.8		
		27	SB—55 No.11、18、16 X—6 X—7 X—6 No.1 V—6	9	非常に大型土器である。体部に隆帯で渦巻文を描く。縄文はLR			
	152	19	SB—57		双環把手の付いた小型土器			
	153	29	SB—57 No.9～11 I—7	8	口辺部に楕円文帯をもち、そこから垂下する隆帯はH字状隆帯の退化したもので、他に波状垂線もある。	38.4		
		30	SB—57 埋甕	8	体部文様帯のみ、体部に2本隆帯で渦巻文を描く。口縁下にわずからに沈線がめぐる。			
		31	SB—57 No.31、18	8	口辺部に縦の沈線を施し、体部はワラビ手状の沈線を垂下させ、その間を斜位の条線で埋めている。			
		32	SB—57 No.30 I—7 H—7	8	口辺部に沈線をめぐらし、体部に縦位の条線の地文に波状沈線を垂下させている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
53	153	33	SB—57 No.14	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、体部は縦位の条線	23.8		
		34	SB—57 No.38、43 I—8	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、体部に縦位の条線			
		35	SB—57 J—8 No.4 I—8	8	頸部に楕円文帯をめぐらし、体部に条線を施す。			
		36	SB—57 No.25 I—6	8	口辺部			
		38	SB—57 No.7、13、20 29、31、46 I—7	8	肥厚口辺系土器、頸部は無文帯となり、体部に渦巻文を施す。			
		39	SB—57 No.5	8	肥厚口辺系土器の把手付鉢			
		40	SB—57 No.4、46	8	X把付鉢			
		41	SB—57 No.6、43	8	X把付甕　体部に渦巻文を施す。			
		42	SB—57 No.29、50 I—7	8	X把手付甕　体部に1本隆帯で渦巻文を描く。			
		43	SB—57 No.15、16	8	浅鉢			
		44	SB—57 No.4、16、18、29	8	器全面に条線を施す。			
	155	7	SB—59 埋甕	8	口辺部をめぐる1条の沈線は4単位で渦巻をなす。逆U字状区画の中に矢羽状条線を施こし、その中央部に波状沈線を垂下させる。	24.8	3.9	
		11	SB—60 埋甕	8	口辺部に楕円文帯と渦巻文をもち、体部は垂下沈線と波状沈線がある。条線は斜位である。	27.7	4.3	
	157	30	SB—62 No.8、11 M—8 N—10	8	大甕　口辺部は無文、頸部は隆帯と条線でなし、体部は縦位の条線に波状粘土紐を垂下させている。			
	158	39	SB—62 No.4	8	肥厚口辺系土器　波状部は3単位で波頂部で円文とコの字状沈線文がある。H字状垂下隆帯で縦区画をなし、その間を矢羽状条線を施こしている。	29.5		
		40	SB—62 No.3	8	肥厚口辺系土器　口辺部に円文帯と渦巻文を施す。体部に渦巻文を施す。その間を条線を縦位で施し、さらにその上に波状沈線を施す。	24.5	4.7	
		41	SB—62 No.1 M—8	8	小型土器、縦位の沈線と斜位の条線を施す。	12.5	0.5	
		42	SB—62 No.10 M—8 No.5 M—9	8	井戸尻式終末の土器、楕円文の中に無節縄文地に縦の沈線を施こしている。	9.3		
		43	SB—62 M—9	8	肥厚口辺系土器			
		44	SB—62 No.13	8	逆U字状区画の中に横位の条線を施こしている。			
		45	SB—62 No.11 M—8 No.2 M—9	8	口縁下に1条の沈線を施こし、体部一面を文様帯としている。			
		46	SB—62 No.11 M—8 No.2 M—9	8				
54	159	1	SB—63	8	大甕の無文口辺			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	159	27	SB—66 埋甕	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、その下につなぎ弧文を付し、体部は変形したH字状垂下文と斜位または矢羽状条線の中央に波状沈線を施す。	28		
		28	SB—66 No.56	8	口辺部を欠く、小型土器　垂下文と斜位の条線が見られる。	12.6		
	160	16	SB—69 埋甕1	8	口縁を欠く、頸部に波状隆帯文帯をなし、4単位の垂下文は3条の刻目隆帯文で、条線は縦位			
		17	SB—69 埋甕2	8	大型長胴甕、頸部は3段の刻目、体部のU字状モチーフは分節的で古い様相を示す。	35.0		
		18	SB—69 埋甕	8	無文の体部で時期不詳だがおそらく曽利式			
	161	7	SB—68 W—6	8	口縁に1条の沈線をめぐらし、4単位の垂下文は口辺部で渦巻化して垂下する。その間に縦位の条線地に波状沈線を施す。	34.5		
		5	SB—70 埋甕	8	おそらくX把手付大甕の底部、モチーフの一部が見える条線は縦位	21.8		
	163	56	SB—71 No.32	8	口辺部文様帯は単に沈線と化し、4単位で渦巻文化している。体部は縦位の条線である。	24.5	4.2	
		57	SB—71 No.18	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、渦巻つなぎ弧文から、垂下文が付く。			
		58	SB—71 No.4	8				
		59	SB—71	8	小型土器	10.2		
		60	SB—71 No.13、29	8	口辺部に数条の沈線がめぐり、体部は縦位の条線となる。			
		61	SB—71 埋甕	8	体部に条線のみを施している口辺部は不詳			
		62	SB—71 No.6、31、32	8	口辺部に1条の隆帯がめぐり、体部はまばらな条線となっている。	28.6		
		63	SB—71 No.28、29、37	8	口辺部に1条の沈線がめぐる。体部は縦位の条線にわずかに波状沈線が見られる。	21.1		
		64	SB—71 No.2、4	8	口辺部を欠く、体部に大きな渦巻文を施している。			
		65	SB—71 No.15	8	垂下文も条線地に波状沈線が見える。			
			SB—43 No.35	8				
55		66	SB—71	8	垂下隆帯がみえる底部			
		67	SB—71 No.11	8	体部に条線が見える。			
		68	SB—71 No.11	8	底部			
		69	SB—71 No.12	8	底部			
		70	SB—71 No.25	8	底部			
		71	SB—71 No.13、14	8	壺形土器、1本の低隆帯が渦巻文を描き、その間を条線で埋めている。	19.8	2.0	
		72	SB—71 No.26	8	壺形土器、71とほぼ同様、S—Ⅳ区SB—55でも同様の個体がやはり2個体出土している。実に対照的である。	17.0		
		73	SB—71 No.28、33、38 N—9 No.10	8	X把手付大甕、口辺部を欠く、体部に渦巻文を描く、条線は縦位である。	34.1		
	164	25	SB—72 No.1	8	底部			
	156	9	SB—80 No.1、3、15	8	重弧文土器の口辺部			
		12	SB—80 埋甕2	8	口辺部を欠く、おそらく肥厚口辺系土器、体部全面に渦巻文を展開させる。条線は縦位である。	24.5	3.9	
		13	SB—80 埋甕1	8	肥厚口辺系土器に類似した土器で、口辺部につなぎ弧文があり、弧文の中に列点が見える。体部にH字状垂下文が見える。条線地に波状沈線が見える。			
	168	16	SB—88 埋甕	8	ハの字状文をもつ底部			
	169	5	SB—92 埋甕	8	口辺部に1条の低隆帯がめぐり、口辺部4単位で渦巻沈線が垂下文となっている。その間に縦位の条線があり、その上に波状沈線を施している。SB—68の5と類似する。	29.8	6.0	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		6	SB—92 No.28	8	底部			
	170	32	SB—93 No.10 Q—3	8	4単位の波状口辺をもつ、波頂部で口縁下の沈線は波頂部で渦巻文化して垂下する。その間に矢羽状条線を施こしている。その中央に沈線を施こしている。	22	2.4	
		33	SB—93 No.34	8	口辺部文様帯と垂下文が一体化している。条線地に波状沈線がついている。			
		34	SB—93 No.7 Q—7	8	曽利新式、口辺部			
		35	SB—93 No.11 Q—4 No.88	8	底部			
		36	SB—93 No.25	8	底部			
		37	SB—93 No.30	8	小型土器			
		38	SB—93 No.3、9	8	底部、曽利新式			
		39	SB—93 No.2 Q—3	8	逆U字状の沈線区画のみの文様がある。			
		40	SB—93 Q—9 No.110	8	小型土器、低隆帯で渦巻文を描く。	10.6	0.7	
		41	SB—93 No.14	8	口辺部に2条の列点をめぐらし、体部に沈線による渦巻文を施している。			
		42	SB—93 No.31 Q—4	8	加曽利E式土器の体部			
		43	SB—93 Q—3 No.32	8	加曽利E_3式土器、これは搬入品であろうと思われる。口辺部RL、胴部LR	18		
		44	SB—93 No.16 Q—3、Q—4	8	加曽利E式的な土器、頸部無文帯下に沈線区画の中に列点帯をめぐらし、体部に磨消縄文とワラビ手状沈線を付けている。	24		
	172	55	SB—94 No.11、12、15 38、39	8	大型甕形土器の無文口辺部			
	173	83	SB—94 No.6、10	8	縄文地に竹管修形隆帯によるS字状文を施している。0段3条のRL	16.1	3.2	
56		84	SB—94 No.94 L—12	8	撚糸文地に波状粘土紐を付けている。該期の大型長胴甕形土器の小型品であろう。	19.8	1.4	
	174	10	SB—96	8	藤内式期の無文口辺部			
	175	24	SB—96 埋甕炉	8	大型長胴甕形土器の口辺部と頸部が残る。頸部に半隆起線による数条の隆帯をめぐらし、体部に垂下文が4単位付く。	22.5		
		25	SB—96 埋甕	8	斜行沈線文系土器の口辺部	48.5		
		26	SB—96 埋甕	8	口縁部に列点帯をめぐらし、撚糸文を地文とし、頸部に沈線をめぐらし、体部に渦巻文を施している。LのL巻き	19.8		
		27	SB—96 No.1 SB—105 J—11 No.184 J—12 No.6 J—13 No.105	8	頸部に沈線をめぐらすが、撚糸文地（L）に波状沈線が下る。	18.7		
		28	SB—96 No.2、104	8	おそらくX把手付鉢の頸部			
		29	SB—96 No.51 J—12 No.19 J—11 No.3	8	浅鉢、頸部に波状沈線をめぐらし、地文は条線である。この種の土器は本来的には縄文が施されるのが常である。			
		30	SB—96 No.66	8	X把手付大甕、列点文を充填している。			
	178	50	SB—97 No.13 S—2	9	加曽E式土器、搬入品であろう。RLの縄文			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	178	51	SB—97 No.21、22	8	口縁部に沈線をめぐらし、縄文地に波状沈線を垂下させている。			
56		1	SB—103 No.1	8	口辺部につなぎ弧文、体部には縦位の条線を施し、その上に波状垂線を垂下させている。			
		2	SB—103	8	吊手土器の口辺部、吊手土器の吊手の部分に人体がつくもの			
	179	14	SB—105 No.261、388 390 I—11 No.165		藤内式の胴部			
	180	30	SB—105 No.319 J—9 K—10 L—11 L—13	8	重弧文土器の口辺部、重弧文は半截竹管による沈線である。			
		31	SB—105 No.313	8	重弧文土器、口辺部に重弧文とそれを区切る縦の隆帯、頸部に波状隆帯をめぐらし、体部には縦位の条線と波状粘土紐を垂下させている。この重弧文も	24.0		
		32	SB—105 No.274	8	斜行沈線文土器の口辺部 30と同様			
		33	SB—105 No.274	8	斜行沈線文土器の体部			
		34	SB—105 No.200、300 I—11 No.189	8	肥厚口辺系土器、肥厚口辺部に円文をめぐらし、体部は沈線区画の中に列点文を施している。			
		35	SB—105 No.295 I—12 No.3	8	口辺部に2本隆帯によるつなぎ弧文が見える。			
		36	SB—105 No.205 SB—96 床面下 I—11 No.162	8	口辺部はやや肥厚したつなぎ弧文をなしている。体部に沈線モチーフがあり、その間に逆矢羽状条線をほどこしている。	16.7		
		37	SB—105 No.266、267 279	8	壺形土器で、口辺部は無文帯とし、体部は沈線区画の中に刺突文を施している。	18.2		
		38	SB—105 J—12 No.10	8	口辺部につなぎ弧文が見え、体部は垂下文と波状沈線が見える。			
		39	SB—105 No.225、335	8	口辺部に楕円文帯をめぐらし、頸部を無文帯とし、体部のモチーフは不明。			
		40	SB—105 No.256、333 I—12	8	浅鉢形土器、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部には縄文を施している。			
		41	SB—105 No.251、314 I—12 No.2、10 1—12 No.5 J—11 No.44 J—12 No.2	8	浅鉢形土器、口辺部に一条の沈線をめぐらし、体部に撚糸文を施している。			
		42	SB—105 No.226、267	8	口辺部不詳、体部に撚糸文地に連弧文を施している。			
		43	SB—105 SB—96	8	口辺部につなぎ弧文を施し、頸部に半隆起線文をめぐらし、それから4単位に垂下文を施し、体部は縄文RLが地文となっている。			
		44	SB—105	8	口辺部に1条の沈線をめぐらし、以下を条線としているが、体部不詳			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	180		SB—44 I—11 No.64、186 I—12、14 J—11		口辺部に沈線がめぐり、体部に縦位の条線			
		45	SB—105 No.137	8	浅鉢、撚糸文が施されている。			
		46	SB—105 No.398 I—11	8	井式尻式期の底部か？			
		47	SB—105 No.307 I—11 No.155 I—11 No.170	8	甕形土器の無文口辺部			
		48	SB—105 I—11 No.51 No.175	8	無文の深鉢形土器			
		49	SB—105 I—11 No.140 J—11	8	無文の小型土器			
		50	SB—105 I—11 No.186	8	台形土器　1孔4単位か			
	185	27	SB—109 No.11	8	口辺部のつなぎ弧文が楕円文帯がくずれ、垂下文と一体下している。	20.0		
		28	SB—109 No.36 埋甕	8	口辺部は不詳だが、おそらく27と同様であろう。	20.0		
		29	SB—109 No.19	8	口辺部に1条の沈線と隆帯をめぐらし、それから、隆帯の垂下文を施し、条線地に波状沈線を施している。垂下隆帯も一部で渦巻文を描くらしい。			
		30	SB—109 I—13	8	垂下隆帯と条線地波状沈線が見える。	16.0		
57		31	SB—109 I—12 No.32 I—13 J—12	8	X把手付鉢、頸部の楕円区画の中に縄文（L）が見える。	21.5		
		1	SB—113 埋甕	8	隆帯で口辺部に1条と垂下文を施し、体部は縦位の条線地に波状沈線を施している。	30.2	6.3	

S－Ⅲ区　土壙出土土器

写　真	図	図　No.	出土地点	分　類	文　様	高さcm	容量ℓ	備　考
57	186	1	SK－01	7	口縁装飾に富む。大型ミミズク把手１単位と、大型山形把手３単位、それぞれ把手基部に眼鏡状把手・環状把手がつく。把手間には、貫通孔を有する波状突起あり。内弯口縁部には文様少ないが､把手下に低平な円形隆帯がある。胴部文様は低平な隆帯により上下２段に分かれ、円形・楕円形・三角形・斜行隆帯と、隆帯間を埋める沈線文から成る。口縁装飾・器形等は櫛形文土器に似るが、文様の重なり方が全く違う。	54.3	20.7	
		2	SK－02	8－1	頸部斜格子目文→胴部５本１組竹管整形隆帯による懸垂文→胴部懸垂文に付随する貼付文、波状粘土紐→胴部、半截竹管による条線。			
	187	3	SK－03	8－1	胴下半部、半截竹管による条線。			
		4	SK－07	7	所謂櫛形文土器の胴部破片。			
		5	SK－08	7	内弯する口縁部に何らかの貼付の痕。胴部隆帯は背に綾杉刻み、三叉文等加飾される。沈線による円形文の内部は刺突列を充填している。			
		6	SK－09	8－1	頸部は半隆起線３条がめぐる。胴部は２本１組竹管整形隆帯による懸垂文、上端に逆W字状貼付あり。胴部地文縄文は磨滅して見えにくいが、RL。			
		7	SK－10	6	口唇が肥厚する小型円筒形深鉢。半截竹管半隆起線による三角形区画で器面を分割し、区画内に斜めの１本引き沈線列を充填、さらに２本の沈線を交差させる。	21.2	4.26	
58		8	SK－25	6	台付鉢であるが台部欠損。胴部は爪形刻みをもつ隆帯により４単位に分割され、うち２単位は矩形区画、２単位はひし形と三角形区画から構成される。区画内は縦・斜めの１本びき沈線列、ただしひし形区画内は交互刺突による鋸歯状文を用いる。		1.7	
		9	SK－32	6	口縁部２本の横走隆帯で画した横帯に、小波状隆帯。隆帯上はいずれも半截竹管を押引いた爪形文を施すが、磨滅が著しい。胴部縄文ＲＬ。拓本では不明瞭であるが、３本の磨消横帯（幅１cm程）が入り、上２本は磨消帯の上下に波状沈線が沿う。	31.7	4.7	
		10	SK－34 X－9 X－10	8－1	胴上半部は横走半隆起線が重なる→胴下半部は半截竹管を浅く施文した条線→胴上半部の縦方向短粘土紐と、波状粘土紐を貼付する。		約6.8 (底部 欠損)	
		11	SK－34		曽利式の無文口縁が波状を呈しているもの。波頂はおそらく６単位。口唇は内面に突出する。			
	188	12	SK－34		大型浅鉢。頸部に１本の波状粘土紐がめぐる。胴部は全面縄文RL。			
		13	SK－35	8－2	大型深鉢の底部付近。地文櫛歯条線上に、垂下沈線が見える。			
		14	SK－45 SK－345 SⅢU－2 W－3 SⅣ E－3	7	口唇直下と胴部の横走隆帯によって画された胴上半部に、大波状隆帯。隆帯はいずれもカマボコ形で､爪形刻みをもつ。大波状隆帯上方は半隆起線列で、１条おきに交互刺突による鋸歯状文を施す。胴下半部縄文ＲＬ。口辺下４cm程に補修孔１個残存。			広域接合離れたグリッド、土壙間
		15	SK－47 土壙内逆位埋設	7	４単位波状口縁。口唇に沈線がめぐる。口縁部に円形隆帯と、それをはさむ半楕円形区画。胴上半部に２本１組の隆帯が４単位垂下する。隆帯上刻み。地文は１本引き沈線。胴部中央にて打欠いている。所謂櫛形文土器の一変型であろう。			
		16	SK－47	8－2	隆帯と隆帯脇沈線による冂状区画内、地文櫛歯条線と蛇行沈線。			
		17	SK－49	7	浅鉢。口縁は内弯。連鎖状隆帯がめぐる。			
		18	SK－51		台形土器。脚部接地面はすりへらない。			
		19	SK－51	8－4	器面全面縄文ＲＬ→口縁近く粘土粒貼付は、５個残存。	27.4	6.65	
		20	SK－64	7	胴部縄文０段３条ＲＬ。			
		21	SK－72	8－2	隆帯による加曽利Ｅ式的な口縁部文様帯の上に、太い横走沈線がめぐる。マド区画内・胴部地文とも、先端の細い工具による条線。			
		22			屈折底部。縄文ＲＬ。これは図の配置ミスで、SB－84の遺物である。			

写真	図	図 No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		23	SK－90	7～8	褶曲文土器の口縁部破片。			
	189	24	SK－92		無文			
		25	SK－106	6	胴部の対向する位置に垂下隆帯。その他何らかの懸垂隆帯があったらしい。			
			SK－101・102		隆帯に沿ってキャタピラ文、三角押文、また崩れた波状沈線。地文は0段3			
			は1片のみ		条ＲＬ。			
59		26	SK－109	8－2	文様は粘土紐を貼付せず、全て半隆起線による。X把手4単位をつなぐ3条			
			SK－110は		の半隆起線、また胴部文様の4条の半隆起線は、途中に渦巻文をもつ。半隆			
			1片のみ		起線を施文後、地文櫛歯条線（櫛歯は4本1単位）。条線は密に施文。			
		27	SK－111	8－2	両耳壺頸部にX把手2単位。頸部横帯マド区画内は櫛歯状工具による条線を			
					充填。			
		28	SK－129	6	波状突起と突起下渦巻文上に爪形刻み。口縁部文様は隆帯に沿うキャタピラ			
					文と波状沈線。波状沈線から伸びる2本の短沈線が特徴的。			
		29	SK－129	6	平縁。頸部に楕円区画横帯。胴部は輪積痕・指頭圧痕を残す器面の上に、垂			
					下隆帯。隆帯に沿ってキャタピラ文、楕円区画内三角押文、胴部には波状沈			
					線。			
		30	SK－129	6	器面は4単位垂下隆帯により4分割されるが、図の側面の2単位は3本隆帯			
					が途中結びつけられる形態をとり、隆帯頂部に円形突起がつく。半截竹管に			
					よる矩形区画内は、無文か、半截竹管による斜行沈線列。隆帯上は爪形刻み・			
					綾杉刻みが加飾される。			
		31	SK－129	6	浅鉢。口縁内折部に文様。キャタピラ文と、その外側の幅狭い部分に三角押			
					文。			
		32	SK－129		小型深鉢の胴下半部～底部。縄文RL。			
		33	SK－129		大型浅鉢の胴下半部～底部と推定される。縄文ＲＬ。			
		34	SK－129	6	器面は輪積痕・指頭圧痕を残す。隆帯に沿うキャタピラ文・三角押文による			
					波状文。			
		35	SK－129	6	縦位区画文土器の底部付近、爪形刻みをもつ隆帯・半隆起線にて区画。半隆			
					起線上に爪形刻みを施す部分がある。			
		36	SK－141	8－2	大ぶりなX把手。X把手をつなぐ2本の隆帯の間の沈線はX把手裾部に至っ			
			少量O－6		て渦巻文となる。胴部文様は隆帯による大渦巻文であったろうが、付随する			
					小渦巻文のみ残存する。地文は、この種の土器には珍しく縄文、ＲＬ。地文			
					施文後に隆帯に沿って沈線。			
	190	37	SK－188		台形土器。脚部接地面がすりへる。脚部に孔が3個残存、もとは1孔4単位			
					であったらしい。ただし3個とも底面がすりへったためか、孔の下半が欠損している。			
		38	SK－188		深鉢の胴下半部。無文のため時期判別し難いが、いずれ中期中葉か後葉であ			
					ろう。			
		39	SK－190	5	小型円筒形深鉢。器壁が薄く約5ミリ。輪積痕をよく残す。	18.9	0.98	
		40	SK－190	7	内弯する口縁部に半球状突起、その直下に眼鏡状把手がつく。半球状突起上			
					に沈線による渦巻文、三叉文。把手下に連鎖状隆帯2本垂下。頸部隆帯上の			
					綾杉刻みは、途中で施文を止めている。胴部は珍しく縄文ＲＬの地文上に沈			
					線を引く。丁寧な作り。			
		41	SK－190	7	内弯する口縁部から胴部中央のくびれまで、隆帯が並んで垂下する。おそら			
					く胴下半部が張り出す器形であったろう。			
		42	SK－190		打欠いた部分をきれいに擦って、深鉢底部のみ再利用に供したもの。			
		43	SK－190		大型深鉢の底部。井戸尻式もしくは曽利式前半のものであろう。			
		44	SK－194	6	縦位区画文の土器の胴下半部～底部。半隆起線による区画内は斜格子目状沈			
					線。			
		45	SK－194	6	口唇外帯は隆帯で肥厚。その直下の太い半隆起線上には爪形文を加飾。以下、			
					細い半隆起線で矩形区画し、内部は1本引きの斜行沈線を充填する。			
		46	SK－194		浅鉢。口唇上面は平らで、内外に肥厚。右下破片に補修孔1個（半欠）残存。			
		47	SK－194	6	口唇外帯は隆帯で肥厚。その直下に沈線が沿う。以下縄文ＲＬ。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		48	SK－206	8－1	口唇やや突出する部分から隆帯垂下。隆帯上刻み。胴部地文は1本引きの条線。			
		49	SK－217	8－2	2単位の波状口縁をもつ小型土器。口縁部に横走隆帯が1本めぐり、波頂下の沈線渦巻文から隆帯垂下。地文半截竹管による斜行条線上に、2単位の蛇行沈線が垂下するが、図には表れていない。	12.0	0.3	
		50	SK－223		台形土器。接合面にて脚部が欠損している。			
		51	SK－223		深鉢の底部。			
		52	SK－230	8－2	2本1組の垂下沈線→櫛歯状工具による綾杉状条線			
		53	SK－214 少量Ⅰ－2	7	大型浅鉢。口縁は大きく開き、2単位の弧状の切れ込みをもつ。補修孔1個残存。	17.0 (ただし底部欠損)		
	191	54	SK－256	7	井戸尻式大型深鉢の胴上半部。横走隆帯にて2段に分かれ下段は楕円区画。上段は円形隆帯から二叉状に伸びる隆帯と、縦列沈線、その上に十字文。十字文内部を削る。			
		55	SK－256	7	屈折底部。屈折部まで垂下する隆帯が見える。			
		56	SK－259	6	口縁は波状もしくは何らかの口縁装飾をもつであろう。胴部は4本の隆帯が渦巻文を作るが、外2本が高く、爪形文を加飾される。渦巻文隆帯内部に半隆起線が沿う。			
		57	SK－260 SK－275 SK－289	6	頸部に楕円区画横帯、区画内キャタピラ文、三叉文、波状沈線、交互刺突を充填。胴部は垂下隆帯によって分けられた器面を、半隆起線で縦位区画。内部に沈線列、また綾杉状刺突列を充填。先端蕨手状隆帯上には交互刺突を加飾。			
		58	SK－260 SK－289	6	内弯する波状突起1個残存。外側に眼鏡状把手がつく。胴上半部は大波状隆帯により逆三角形区画4単位を作る。隆帯に沿って半隆起線がめぐり、内部は1本引きの縦列沈線を充填。胴下半部縄文0段3条RL。縄文施文の後、胴上半無文部を磨く。			
		59	SK－266	10	壺型土器。冂状に隆帯貼付→縄文LR→隆帯に沿って沈線。			
		60	SK－266	10	壺型土器。幅広く低平な隆帯上に縄文LR。また隆帯と沈線により区画された内部にも、磨滅著しいが縄文LRが見える。			
60		61	SK－266	8—2	4単位波状口縁をもつ（1単位残存）。施文は沈線文のみで簡略。波頂下に逆U字あるいは長楕円形の細長い文様。平縁部には弧線文がある。綾杉状短沈線文（「ハ」の字文）は大ぶりである。	28.8		
		62	SK－266		大型土器の底部。時期判別は困難。			
		63	SK－267		胴下半部は無文のため時期判別困難。ただし底部形態が64と似る。			
		64	SK－267		網代底。胴部は垂下沈線が残るのみ。			
		65	SK－276	8－2	口縁部横走沈線、その直下に弧線文と、弧線文を囲んで垂下する沈線を施文→地文半截竹管による条線施文。			
		66	SK－276	8－2	口縁部がわずかに外に開く深鉢の破片。口縁に無文部残し胴部4本1組の櫛歯条線。			
	192	67	SK－287	8－2	文様はいずれも半截竹管内面による。垂下沈線の他、U字あるいは縦長楕円の細長い文様で縦方向を区画し、綾杉状沈線文を入れる。底部は接合面割れ。			
		68	SK－279	8－1	横走半隆起線が重畳するが、このうち上半はらせん状に連続して、下半は輪切り状に施文を行っている→4単位、2列の短粘土紐貼付→半截竹管内面による「C」字状押引文、ただし図の右下の2列は「逆C」字となっているが、磨滅している。	23.1	2.0	
		69	SK－280		深鉢の胴下半部。無文。			
		70	SK－281		深鉢の口縁部破片。間隔の空いた（櫛歯）条線を斜方向に施文。			
		71	SK－287		両耳壺。頸部に幅広い隆帯がめぐり、特徴的な形態（糸巻き状）の把手につながる。把手は上下に貫通孔あり。頸部隆帯上に太い沈線。把手下には沈線による渦巻文3個が配される。胴部は幅広隆帯により斧先状に区画された中			

写　真	図	図　No.	出土地点	分　　類	文　　様	高さcm	容量ℓ	備　考
	192				に、縄文ＬＲを充填。			
		72	SK－290	8—2	口縁が内弯する特異な器形。口縁部文様帯は隆帯貼付による渦巻文と楕円区画がつながる。胴部は垂下隆帯８単位。口縁部区画内縦方向・胴部綾杉状に半截竹管条線。			
		73	SK－291		浅鉢の底部破片。74と同一個体の可能性あり。			
		74	SK－291	7	浅鉢、連鎖状隆帯の連結部に１乃至２個の刻み。鎖の背には短沈線。			
		75	SK－298		無文口縁が開く。内外面よく磨いている。			
		76	SK－357		深鉢の底部。			
		77	SK－360	8—2	口縁部は隆帯貼付による渦巻つなぎ弧文、沈線によるマド区画から成る。マド区画内沈線。胴部は、渦巻文下に垂下する２本１組沈線と、半截竹管による条線。			
		78	SK－371 SK－397	8—2	低平な隆帯と両脇に沿う沈線により冂状に区画、区画内は櫛歯状工具による条線の地文上に、蛇行沈線。			
		79	SK－36	7	４単位波状口縁。口唇内外に肥厚。内弯する口縁部に縦列沈線、三叉文、円形文、交互刺突など沈線主体の文様を施文。頸部のふくらんだ部分に楕円区画横帯。楕円の間に垂下隆帯・連鎖状隆帯。胴部縄文０段３条ＲＬ。屈折底。			

S—Ⅲ区　埋甕（遺構外）

写　真	図	図　No.	出土地点	分　　類	文　　様	高さcm	容量ℓ	備　考
60	193	1	X－6	5	口縁に把手１個残存、頂部欠損だが鳥頭状を呈していたか。把手下の橋状把手は剥落するがその直下に半環状隆帯が続き、鋭い刻みがつけられる。口縁部重三角区画内は、区画隆帯に沿って幅広三角押引文、幅狭三角押引文、削り出し手法による三叉文・玉抱三叉文・ワラビ手状文などを充填する。頸部素文帯は幅広三角押引文と三角押引波状文。埋甕炉かと思われたが焼土なし。			
		2	R－6	7	内弯する口縁部が大きく広がる。口縁部文様は下端を横走隆帯で画す。隆帯上刻み・交互刺突。隆帯間は沈線による渦巻文・三叉文・沈線列間交互刺突など施文する。埋甕炉かと思われたが焼土なし。			
		3	N－3	6	無文深鉢。底部全欠。正位埋甕だが住居址が確認できなかった。	19		
		4	S－7	8—1	頸部は４本の横走隆帯と波状粘土紐→胴部は３本１組隆帯による懸垂文。懸垂文先端は渦巻状となる。太くしっかりした隆帯は、竹管による整形を受けていない。→胴部地文半截竹管による条線。埋甕炉かと思われたが焼土なし。			
		5	SK－23	8—1	７単位のＸ把手をもつ大甕で、完存する。３本１組の竹管整形隆帯によりＸ把手を連結し、胴部懸垂文を形作る。懸垂文は直線的に垂下するもの３単位、渦巻となるもの３単位、逆Ｊ字状となるもの１つで、途中鉤状に屈曲したり、Ｓ字状・三つ葉状貼付が付随したりする。地文は半截竹管による条線。地文施文後、蛇行粘土紐を貼付する。底部は焼成後穿孔、径約1.7cm。集落ほぼ中央の土壙に逆位埋設。	61.4	59.9	
		6	J－6 I－5	8—2	頸部にｘ把手４単位とＸ把手をつなぐ２本の隆帯。胴部文様は隆帯と両脇の沈線による４単位大渦巻文と、付随する小渦巻文、渦巻文より垂下する隆帯。大渦巻文のうち１つは２本１組隆帯により形作られる。隆帯間の条線は半截竹管による。底部に焼成後穿孔、径1.4cm。口縁部に補修孔２単位４個あり。SB－32の埋甕とするには位置が疑問となる。逆位埋設。	52.3		
		7	H－17	9	４単位波状口縁をもつ。口縁部文様帯は沈線により楕円形と円形をつないだ形のマド区画を描出、区画内縄文ＲＬ。体部文様帯は垂下沈線により縄文帯と無文帯に分かれ、縄文ＲＬ上に蛇行沈線。充填縄文である。正位埋甕であったが住居址が確認できなかった。			
		8	N－10	9	口縁～胴上半部を打欠いている。垂下沈線に画されて縄文帯・無文帯・中央に垂下沈線が入る無文帯が順序よく並ぶ。縄文帯は12単位。縄文はＲＬを縦方向施文。充填縄文でなく磨消縄文である。SB－21埋甕のさらに南側に位置し住居址帰属不明。			
		9	N－10	8—2	口縁～胴上半部、底部を打欠いている。胴部文様は垂下沈線により画された区画内に、綾杉状短沈線によるハの字文を施文、８単位。SB－59埋甕としては位置がおかしい。			

S—Ⅲ区　土器すてばA出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
61	194	1	F－9	7	4単位の山形突起をもつ撫形文土器。口縁の内弯、胴下部の膨らみ、ともにゆるやかで器形にめりはりがない。口縁部文様帯下端は低平な横走隆帯がめぐる。円形隆帯・刻みをもつ隆帯を主モチーフとし、その余白にわずかに三叉状沈線が入る。胴上半部は突起下円形隆帯から垂下する連鎖状隆帯。胴下半部は撫形文を形作る隆帯のみ。			
		2	F－9	7	口縁部内折部より上が欠損するが、沈線文が少し残存する。内折部直下に4単位眼鏡状把手、そこから2本隆帯が垂下する。胴上半・下半部ともに1本引き沈線。			
		3	G－10	7	波状口縁1個残存。波状部内側に三叉文あり。口縁部文様帯下端は画していない。波頂部から逆J字隆帯垂下。口縁部隆帯上に綾杉刻み・交互刺突。隆帯間に縦列沈線・渦巻文・三叉文。胴上半部垂下隆帯は2単位らしい。胴下半部キャタピラ文（短沈線列）と波状沈線。	24.4		
		4	G－11	7	小型土器。波状口縁をもち、胴部がくびれる。キャタピラ文による文様の図形は不明。くびれ部にめぐるキャタピラ文のみ、施文具の幅がやや広い。			
		5	F－8	7	口唇に沿って隆帯をめぐらし、その内側脇に沈線をひき二重口縁とする。口縁部は2本1組隆帯により4単位渦巻文と弧状文。隆帯には沈線が沿う。胴部上半は、2本1組垂下隆帯4単位と、それらをつなぐ横走隆帯。口縁部・胴部の地文縄文RLは、隆帯貼付前に施文する。胴下半部のわずかな残存部は無文。文様構成が特異で口縁部文様は加曽利E式的であるが、系統は不明。井戸尻式期最終末に位置づけておく。（N－Ⅳ区土器すてばB、第577図35の土器と類似。）			
		6	E－8 F－8	8—1	4単位の大把手が欠失し、大把手間に位置する小把手が残存する。小把手は上下2段の橋状把手をつなげたものであり、粘土紐貼付により加飾され、把手の背に二重楕円形文がつく。口縁部は把手の裾をつなぐ横走隆帯が、上から2本・3本・4～5本ずつ、三段構成となる。隆帯脇に沈線。胴部は大把手下に2本1組垂下隆帯。地文は撫歯条線を後から施文。胴部が上半と下半に分かれない特異な土器。			
		7	F－11		浅鉢。口縁部は内弯したらしいが、内弯部直下の接合面にて故意に打欠いている。			
	195	8	F－8	7	垂下隆帯で文様帯を縦に分け、その間を対弧文とする、この種の土器に通有なモチーフ。隆帯は太く低平で、交互刺突をもつ。対弧文内は縦列沈線。			
		9	F—8 F—9 G—8 F—9	7	胴下半部、太い横走隆帯で文様帯下端を区切る。胴部文様は垂下隆帯・弧状隆帯（対弧文）、隆帯上交互刺突、隆帯間に沈線文。			
		10	F－9	7	胴部文様帯は連鎖状隆帯が垂下して4単位に分けられ、下端を横走隆帯で画す。区画内X字状文、ただし1ケ所は上部が扁平な円形隆帯となり、人形文を呈する。隆帯間の沈線文は、主に縦列沈線、横走沈線、また三叉文、渦巻文、鋸歯状文など。			
		11	F－10 F－11		台付土器として推定復原した。頸部に一本の隆帯がめぐる他は無文。			
		12	F－8	7	無文深鉢。			
62	196	13	G－11	7	半円形突起から隆帯が垂下して器面を4分割する。胴部文様は2段に分かれる。上段の斜行隆帯のうち2単位は扁平で幅広く、キャタピラ文で縁どりし、内部を渦巻文・三叉文等沈線文で埋める。なお半円形突起下矩形区画内は4単位とも文様が異なり、2単位は突起から隆帯が垂下し先端が渦巻く。下段は楕円区画文4単位。区画内の三角形・ひし形余白の周囲を縦列沈線で埋める。2ケ所に円形隆帯がつく。胴下半部の垂下隆帯のうち2単位はJ字形にはね上がるが2単位は不明。縄文は0段3条RL。	55.0		
		14	G－10	7	半円形突起2単位、小突起2単位、いずれも垂下隆帯がつながる。小突起下隆帯のうち1つは胴下半部まで伸びる。口縁部はやや肥厚し、縦・横交互に	33.6 突起頂	6.9	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
62					沈線列が配される。胴上半部は斜行隆帯間を、三叉文・渦巻文・縦列沈線等で埋める。胴部中央に楕円区画横帯。下端を画す横走隆帯がない。楕円区画内は縦列沈線。	まで 36.0		
		15	G－8 N—ⅢG—19	7	切れ込みをもつ突起から垂下する隆帯によって胴部文様帯は2単位に分けられる。主モチーフは隆帯による対弧状文、その一端が大きく膨らみ3つ指状となる。隆帯間は縦列沈線など沈線文で埋めるが、横走部分はペン先状工具を使い三角押文とする。			接域土器ばなグド広合すてはたれリッ
	197	16	F－8 G－8	7	4単位塔状把手のうち2つ残存。把手頂部に貫通孔を有するタル形把手を戴く。口縁内折部の端に深い切れ込みがつけられる。口縁部文様はU字状隆帯・渦巻隆帯と、隆帯に沿う沈線文。U字状隆帯先端が手指状に膨らむ部分あり。内折部直下に刻み目をもつ隆帯があり、この部分に眼鏡状把手がつく。胴部くびれ部に横走隆帯がめぐり、胴上半部は垂下隆帯、下半部は縄文0段3条RL上に、4単位の低平な隆帯をつける。			
		17	G－10	7	大把手（おそらくミミズク把手）1個残存するが欠失部多い。貫通孔も1個残存し、その右側は三叉文がつく。文様帯は上下2段。下段は楕円区画横帯、上段は自由なモチーフをとる隆帯と沈線文による構成となろう。胴部縄文は0段3条RL。屈折底。			
		18	F－10	7	4単位山形突起の裾部は眼鏡状把手となる。口縁部文様は把手を中心にして左右に半楕円形区画を作り、区画内に縦列沈線・渦巻文・三叉文。また内折部直上部分の隆帯上に刻み。内折部直下に幅狭い無文帯あり、無造作な横走沈線をはさんで、以下全面撚糸文。Lの縄をL巻き。			
		19	G－8	7	内弯口縁のごく一部が残存。把手の痕跡あり、その直下に眼鏡状把手がつき、横走隆帯とつながる。胴部垂下隆帯の先端はJ字状にはね上がる。隆帯上刻み、J字部分に三叉文がつく。胴部地文撚糸文、Lの縄をR巻き。屈折底をもつ。			
		20	G－9 G－10		深鉢の胴～底部。全面撚糸文Lの縄をR巻き。内面横方向に丁寧に調整している。			
	198	21	F－8 G－8	7～8	口縁部欠損するが、低平な隆帯と、渦巻文など沈線文による半肉彫的文様は、井戸尻式のもの。一方、頸部横走隆帯にはさまれた波状隆帯、同一手法による胴部懸垂文4単位、途中U字状に屈曲する垂下隆帯4単位、また1本引き条線など、頸・胴部の形制は曽利式と認定できる。			
		22	F－9	8—1	膨らみをもつ胴部のみ残存。頸部に横走隆帯、胴部に2本1組垂下隆帯4単位。隆帯上刻み。胴部は半截竹管による縦方向条線。			
		23	F－9	8—1	胴下半部の2／3が残る。4本1組隆帯垂下、途中U字状に屈曲する。隆帯上刻み、あとから櫛歯条線（5本1組）を施文。			
63		24	E－7	8—1	口縁・底部欠損。頸部は刻み目をもつ横走隆帯にはさまれた波状隆帯2本。胴部は2～3本1組隆帯による逆J字状懸垂文と、1本引き沈線による条線。			
		25	E－7	8—1	内弯する無文口縁が約1／2残る。頸部に横走隆帯、隆帯上刻み。			
		26	E－8 Q－8	8—1	円筒形でくびれのない器形。口唇は平ら。口唇から4本1組の隆帯が4単位垂下し、胴部懸垂文とつながるが、うち2単位は4本隆帯の中間に大きく突出する短隆帯をもつ。頸部に2本の横走隆帯。胴部は逆J字状懸垂文・渦巻文・図の右側面に4本1組垂下隆帯（途中両側にW字状に屈曲する）がある。最後に1本引き条線を施文。			接域土器ばなグド広合すてはたれリッ
		27	G－10	8—1	円筒形の器形、口縁やや外反。口縁部に無文帯。横走沈線を上端として、胴部は1本引き条線。条線は細い。	27.8		
		28	F－10 F－11	7	口縁部に肥厚する無文帯あり、横方向調整痕がよく残る。胴部は扁平な連鎖状隆帯が3本残存し、その間は、上方の渦巻文と、縦方向（やや斜行するものも含めて）沈線列を施文する。この土器は諏訪湖盆～八ケ岳西南麓の在地の井戸尻式の一種。			
	199	29	F－9	8—1	頸部の横走半隆起線5条→口縁部半隆起線による重弧文、胴部の縦方向条線			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
					を施文→口縁部・頸部下端の、波状粘土紐を貼付。			
	199	30	F－9 G－7	8－1	頸部横走半隆起線→口縁部半隆起線による重弧文、胴部に3本1組竹管整形隆帯による、横S字文→胴部地文半截竹管による条線→波状粘土紐を貼付。復原器形は不適当で、もっと口縁が広がり胴部がすぼまるはずである。			
		31	F－7 D－8 E－9	8－1	口縁部斜行半隆起線、胴部半截竹管による条線施文→頸部を横になでる→頸部波状粘土紐・胴部懸垂文貼付。なお口唇部端に粘土をつぎ足し2本沈線をめぐらせる。			
		32	F－9 F－8	8－1	頸部横走半隆起線と、それに上下をはさまれた、先の細い工具による鋸歯状文→胴部地文1本引き条線→頸部・胴部波状粘土紐貼付。			
		33	F－9 F－10	8－1	頸部は横走半隆起線。胴部は3本1組の竹管整形隆帯により「v」字文とそれをとり囲む「u」字文2単位、その2単位間は縦の懸垂文で分けられる。主モチーフの懸垂文に付して小貼付文が各所につけられる。→胴部地文半截竹管によるしっかりした条線→頸部波状粘土紐。			
		34	D－4	8－1	頸部に8単位のX把手。X把手側面から4本1組の竹管整形隆帯が垂下し懸垂文となる。4単位は縦に垂下し、4単位は逆J字形となる。隆帯は途中鉤状に屈曲したり、上下に鉤状に分岐したりする。隆帯貼付の後、地文の半截竹管による条線を施文。			
		35	D－4	8－2	胴部に沈線による大渦巻文が2単位残存するが、全体で3単位となろう。渦巻文から2本の沈線が垂下。→櫛歯状工具による綾杉状条線→蛇行沈線。			
		36	E－7 E－8 S－Ⅳ A－5		口縁やや外反する器形。地文櫛歯状工具（歯は6本）による条線→口縁部に波状粘土紐貼付→胴部に上下2段の弧線文、弧線文は2本1組沈線による。下段は弧線でなく山形状となる部分あり。弧線文系土器の一種であろうが、特異な土器である。			接器ばなグド域土てはなれたリッ広合すとれ
		37	G－7	8－2	口縁部隆帯貼付による渦巻つなぎ弧文。不明瞭ながらマド区画沈線と区画内縦列沈線を描いている。胴部は渦巻文下の垂下隆帯と、1本引き条線、蛇行沈線。			
64	200	38	F－9 F－10 F－11		内弯する口縁部の上に無文口唇が直立する。口縁部文様帯は2本1組横走隆帯で上下を画す。文様は基本的に2本1組隆帯にて、横S字文・渦巻文・U字状文など複雑に組合せる。口縁・胴部とも地文撚糸文、Lの縄をR巻き。撚糸施文が最初に行われる。なお図示しなかったが胴部と思われる破片があり、胴上半部に横走隆帯に上下をはさまれた波状隆帯がめぐり、それを横切って3本1組隆帯が垂下する。しかし胴部の器形、全体の構成は不明である。加曽利E1式平行の他地域の土器であろうか。			
		39	E－10		深鉢の胴部。地文撚糸文Lの縄をL巻き。おそらく地文を先に施文している。文様は3本1組竹管整形隆帯による、3単位横S字文の左右が連絡して左半分が波状となったもの。残存部上端の隆帯とつながっている。特異な文様をもち系統は不明。			
		40	F－7 F－8 G－7	8－1	4単位のX把手。胴部主モチーフはX把手右裾から伸びる、3本1組竹管整形隆帯による逆S字状懸垂文。隆帯は途中上下に鉤状に分岐する箇所あり、また各種小貼付文が付随し、先端には剣先状文がつく。胴部地文はLの縄の撚糸文だが胴部下半の一部で櫛歯条線にかえている。順序は主モチーフの懸垂文→地文→剣先状文等貼付文。			
	201	41	F－9 G－9 F－7 F－8	8－4	口縁部に隆帯により渦巻文と矩形のマド区画を作る。マド区画内半截竹管による縦列沈線→胴部地文縄文RL。RLのLを途中直前段結節していると思われる。→半截竹管による4本1組沈線が胴上半部で垂下→くびれ部で横走→胴下半部で垂下。			
		42	D－4		浅鉢。胴部縄文LR→頸部に半截竹管を使って3本の横走沈線。			
		43	E－9 E－10 F－10	8－4	地文縄文RL→縦長のひし形を呈する変形渦巻三叉文と蛇行沈線、本来は5または6単位であったろう。→口縁部に上下2列の刺突文がめぐる。			

写　真	図	図　No.	出土地点	分　　類	文　　様	高さcm	容量ℓ	備　考
	201	44	D－6		小型円筒形深鉢。全面撚糸文、Lの縄をR巻き。図は誤りで、上端は口唇である。	16.0	0.8	
		45	F－10		口縁部欠損。縄文RL。			
		46	E－8 F－8	8	細い施文具で描かれた蛇行沈線が5本残存し、この時期には珍しく縄文が0段3条RLである。			
		47	D－7		器外面の磨耗著しいが、無節縄文Lを縦にころがしているのが見える。			
		48	E－7		胴部縄文RL。胴下半部内面にスス付着による黒色部めぐる。			
64		49	D－9	9	4単位波状口縁下が橋状把手（図の正面では欠損）となり口縁部文様帯下端の横走隆帯とつながる。口縁部文様帯は橋状把手により4単位矩形区画に分けられ、区画内は半截竹管を用いた縦列沈線。波状部、把手部の内外に、縦列沈線・渦巻文等が加飾される。波頂下また把手の背に貫通孔。なお口唇内折部は幅広く、隆帯・沈線めぐらし三重口縁を呈す。胴上半部無文。胴部文様帯は上端の横走隆帯→半截竹管による条線→下側の横走隆帯と蛇行隆帯の順。胴部を縄文にすれば東関東の加曽利E式。			

S－Ⅲ区　グリッド出土土器

写　真	図	図No.	出土地点	分　類	文　様	高さcm	容量ℓ	備　考
64	202	1	Y－2	3	口唇直下に縄文帯。その下に幅広沈線と隆帯上縄文帯が交互に２本ずつ入りその２本の縄文帯の間に橋状把手を渡し、把手上にも縄文がつく。いずれもＲＬ。胴部文様は把手下の垂下隆帯で分割され、まず縄文ＲＬ、さらに結節を縦方向にころがす。胴上半部は２本１組横走沈線の間に、円形竹管の先を交互刺突した鋸歯状文が施される。五領ヶ台Ⅱａ式とする。			
		2	Ⅰ－2	5	口縁部は重三角区画横帯。区画内は隆帯に沿って幅広三角押引文、その内部を三叉文とそれをとりまく幅狭三角押引文で充填する。頸部素文帯をはさんで、胴部は幅広い横帯となる。隆帯の連結部が突出する。胴部は隆帯に沿ってキャタピラ文、区画内は三角押引文と三叉文で充填する。底部直上は楕円区画横帯となり、隆帯に沿って幅広三角押引文。なお素文帯には三角押引波状文がめぐる。ペン先状工具は一種類である。			
		3	D－11	5	口縁部に無文帯あり、その下に重三角区画横帯、素文帯と重なる。隆帯に沿ってキャタピラ文、三角押引文がめぐり半円形区画内は三角押引文列で充填される。三角押引に沿って刺突が入る部分あり。素文帯には、ペン先状工具を上下に交互に押圧する手法による波状文がめぐる。			
65		4	P－15 1片のみ Ⅰ－3	5	円筒形器形の口縁上端に縄文帯、その下に幅広沈線、波状沈線がめぐる。胴上半部が重三角区画横帯となり、隆帯に沿ってキャタピラ文、角押文がめぐり、半円形区画内は角押文列で充填される。			広域合接離れたグリッド間
		5	Y－4	5	口縁は朝顔形に大きく開く。口縁肥厚帯の下に楕円区画横帯がめぐる。胴下半部に断面三角形隆帯による何らかの懸垂文がある。胴部下端に横走隆帯が２本めぐる。隆帯の他は全く無文。			
		6	G－3	6	椀形土器。内外面に赤彩が残る。１単位の把手は欠損するがミミズク把手であったらしい。口唇外帯に刻み目。胴部は半隆起線にて下方が開く矩形区画を並べている。			
		7	Q－6		縄文ＲＬ。胴上半部を打欠いて再利用に供している。			
		8	E－6 F－6 SB－72 SB－84	6	円筒形深鉢。肥厚口唇と横走隆帯に上下を画された横帯があり、その幅いっぱいに波状隆帯が入る。隆帯上爪形文刻み。胴部は輪積痕を残し指頭圧痕がめぐる。			広域合土器すてば住と居址
		9	W－6	8	大型浅鉢の胴部。残存部上端に横走隆帯が残っている。胴部全面縄文ＲＬ。きれいに縦にころがしている部分と、横にころがしている部分とがある。			
		10	F－4 SB－95	8	全面に縄文ＲＬ。残存部上端に横走沈線１本が見える。			
		11	Y－8 Y－9	8	内面全体に赤彩よく残る。外面も口縁部・胴部ふくらみ部分にやや残る。	13.9		
		12	Y－6		椀形土器。乳白色がかった胎土が異質である。外面に赤彩が残る。内外面底部が黒色化するが二次焼成によるスス付着かどうか判別できない。	5.8		
		13	Y－4	6	深鉢の胴下部～底部。円筒形を呈する深鉢か。			
		14	C－8	7	浅鉢。口縁部がゆるやかに内弯し口唇が内外に肥厚する。	22.2		
	203	15	U－2	6	屈折底を持つ深鉢。４単位の隆帯によるモチーフの全体は不明。隆帯と屈折部に沿ってキャタピラ文、キャタピラ文に沿って波状沈線。			
		16	K－3	7	屈折底部。所謂櫛形文土器の胴部くびれ部にて打欠いたものと思われる。文様は縦方向の沈線列。			
		17	T－6	7	４単位の山形突起のうち、２単位から連鎖状隆帯が垂下し、２単位は突起下の環状隆帯から隆帯が垂下したはずだが剥落している。キャタピラ文に沿う沈線は、実は先端の細いペン先状工具を用いた連続三角刺突文からなり、胴上半部に抽象的な文様図形を描いている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
65	203	18	R－11	7	1単位残存する中空眼鏡状大把手は、上方にもう1つ小眼鏡状把手をのせ、頂部は渦巻文で装飾される。無文口縁部の下、頸部は刻みをもつ隆帯にはさまれた波状隆帯がめぐる。胴部は断面三角形隆帯2本をつなげてU字状懸垂文とし、懸垂文下端を橋状把手でつなぎ、先端に上向きのU字状突起をつける。断面三角形隆帯の背に波状隆帯を重ね、波間を交互に刻んでいる。胴部地文は縦方向に1本引きの沈線列。			
		19	S－1 S－2	7	文様は上下2段の横帯からなり、上段は口縁部2単位の円形隆帯から垂下する各2本の隆帯と、口唇上端から垂下する2単位の隆帯により区画される。円形隆帯の内部に円すい状突起あり。下段は楕円形区画がくずれ斜行隆帯がめだつ。いずれも隆帯上に刻み、隆帯間に沈線による三叉文・渦巻文。図の点線は隆帯の剥落痕。			
		20	U－3 V－3	7	大型深鉢で残存高77cmを計る。口縁部欠。胴部の幅広い文様は垂下隆帯により4または5単位に分けられ、区画内の対弧状隆帯を主モチーフとする。隆帯は連鎖状となる部分もある。図の正面は対弧状隆帯の上下に扁平な円形隆帯がつき、人形を思わせる。隆帯にはキャタピラ文、さらに三角押文が沿うが、大雑把な施文である。三角押文は先端が丸みを帯び、列点文風である。			
66	204	21	N－2 M－2	7	内弯する無文口縁をもつ。頸部に眼鏡状把手あり、その上方のなんらかの装飾は剥落している。胴部文様は横走隆帯により上下2段に分かれ、円形隆帯・斜行隆帯等と、その間を埋める沈線列・渦巻文・三叉文からなる。			
		22	U－2 V－3	7	内弯する無文口縁に1対の円すい形突起があり、突起上に沈線渦巻文がつく。突起より隆帯が垂下し、頸部眼鏡状把手につながる。胴部は4単位の隆帯を貼付→縦の条線→横の短沈線列→横の短沈線列の中央を区切る縦の沈線、という順序らしい。			
		23	出土地点不明	7	所謂櫛形文土器の胴下半部～底部でソロバン玉状を呈する。隆帯と、隆帯間の沈線渦巻文・三叉文など彫刻的な文様をもつ。矩形区画内の縦列沈線は半截竹管を用いる。			
		24	V－3	7	所謂櫛形文土器の胴下半部～底部。胴部くびれ部に刻みをもつ横走隆帯がめぐり、胴上半部に4単位の隆帯が垂下する。内面に著しくスス・オコゲ付着。			
		25	V－3	7	胴部くびれ部に横走隆帯、胴上半部4単位の連鎖状隆帯垂下、胴下半部は隆帯により、櫛形文を作出。隆帯上は綾杉状・交互の刻み。櫛形文内に沈線文。			
		26	D－2	8－2	浅鉢。内傾する部分に残る文様はマド区画と区画内条線の一部であろう。			
		27	V－3	7	諏訪湖盆に典型的な土器。頸部4単位の小眼鏡状把手から胴上半部に2本1組の隆帯が垂下し、器面を4単位に分ける。2単位にW字状隆帯、2単位に山形状隆帯が入り、隆帯上に沈線が引かれる。隆帯間に沈線渦巻文・三叉文が入る。なお2本1組垂下隆帯上に、横方向に短い粘土紐を何本も被せて、結果的に刻み目状に見せる手法をもつ。（諏訪系土器と仮称）			
		28	M－2 N－2 G－9	8－1	口縁部に粘土紐貼付による褶曲文。この褶曲文は上下の幅が長い。口唇端部は無文。頸部は横走隆帯に上下をはさまれた波状隆帯。なお頸部に1つ小眼鏡状把手が残る。			広域合器てと接土すれば離たリッド
		29	O－2	7	口縁部から胴部くびれ部横走隆帯まで4単位の隆帯が垂下し、2単位は連鎖状である。内弯口縁部の文様帯は上端は沈線で画されるが下端は画されない。2単位は無文、2単位は低平な隆帯上に交互に三叉文を施文する手法による波状隆帯がつく。	22.2	3.7	
		30	V－4 V－3	8	浅鉢。内面には赤彩の残る箇所が全体的に広がっているが外面には残っていない。	15.9	11.4	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		31	H－3 I－3 G－3	7	小型円筒形深鉢。５本の細い横走沈線により４段の横帯とする。→横走沈線に直角に鉤状の短沈線をひく→横帯内刺突文。沈線と刺突は同じ施文具によるであろう。			
	205	32	T－6 S－6 S－7	7	小型･台付の有孔鍔付土器。頸部に鍔、胴部下端にも1本隆帯がめぐる。台部は２箇所が凹弯して開いている。	12.7	0.31	
66		33	U－2	7	４単位大把手のうち２単位残存。１つは頂部が円形・平らで貫通孔があり、１つは動物の頭を模した装飾をもつ。大把手基部はミミズク状である。口縁部の屈折部に２本の横走隆帯がめぐり、刻みをもつが、その隆帯間の４箇所に小橋状把手が渡される。口縁部文様帯は隆帯による対弧状文・円形文をはさむ斜隆帯を主モチーフとし、隆帯上は刻み・沈線。隆帯間は縦列沈線・三叉文。胴部地文撚糸文はRの縄をL巻き。			
		34	I－3	7	胴上半部が長く下半部が小さめである。４単位の把手は欠損。口縁部の屈折部端が連鎖状となる所と、深い切れ込みが入ってひだ状を呈する所とがある。口縁部文様は隆帯が鋸歯状につながる間を三叉文で埋める。胴上半部は４単位垂下隆帯と、縄文０段３条ＲＬ。くびれ部は低平な隆帯上に沈線をめぐらす。胴下半部は１本引き沈線列。			
		35	P－1	7	１つの大把手（顔面把手？）は内側から見るとミミズク状である。頂部から連鎖状隆帯が垂下して眼鏡状把手とつながるが、さらにその下に隆帯が垂下して屈折底部でＬ字状にはね上がっていたはずである。図裏側には口縁部に渦巻状円すい突起あり、その下のＬ字部分が残存し沈線渦巻文・三叉文など施される。地文縄文０段３条ＲＬ。			
67		36	W－3	7	口唇やや波状にふくらむ突起の内面に刻み。内弯口縁部に文様帯、隆帯と隆帯脇・間の沈線による文様。沈線間交互刺突、また隆帯間を刺突で埋める部分もある。胴部縄文は磨滅してわかりにくいが０段３条ＲＬであろう。			
		37	V－3 V－4 V－5	7	内弯口縁部に１つ渦巻状円すい突起あり、突起下に隆帯が垂下し、頸部に眼鏡状把手がつくが欠損している。隆帯は途中三角形に広がり三叉文が入る。図裏側には突起はないが垂下隆帯はある。頸部に横走隆帯。胴部は撚糸文、Ｌの縄を用いる。			
		38	R－1	7	屈折底部。胴下半部縄文は０段３条ＲＬ。			
	206	39	K－11	7	口縁部垂下隆帯はこの期によく見られるモチーフをとる。図ではわかりにくいが頸部に４単位の突起あり、うち２つは径１*cm*程の上下貫通孔をもつ。頸部突起間は横「の」の字状隆帯でつなぐ。胴部はＪ字状（一部逆Ｊ字状）懸垂文４単位。３本隆帯が途中結束する手法は、藤内式に盛行したもので、また懸垂文先端の「十」字状貼付は、曽利古式に見られるものである。胴部地文条線は、１本引き沈線による部分と、５本１組櫛歯状工具を用いたと思われる部分がある。			
		40	J－7 J－4 J－9 SB－37	8－1	口縁は内弯・無文。頸部は２本１組隆帯が２条横走する間を４単位の橋状把手でつなぐ。胴部は、把手から３本の隆帯が垂下し、外側２本が方形区画を作るが、これは同時期の大型深鉢によく見られる対弧状モチーフであろう。隆帯上刻み。胴部区画内条線、６～７本１組の櫛歯状工具による。			
		41	N－9	8－1	口縁が大きく開き、内弯する。頸部斜格子文→斜格子上下を画す波状粘土紐→頸部横帯直下に２本の横走隆帯、下方の隆帯は10箇所でW字状に屈曲する。胴部主モチーフは２本１組隆帯による半円形文５単位→胴部地文半截竹管による条線→垂下する波状粘土紐を貼付。隆帯は竹管修形されない。			
		42	M－6		大きく開く無文口縁。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		43	M－6 M－8	8－1	鉢形土器の胴部。文様は3本の横走隆帯による上下2段の横帯からなる。下の2本は半截竹管の連続押圧が施される。下段は隆帯渦巻文により画された区画内に、さらに細い隆帯が逆L字状に背中合わせに配され、先端渦巻く。隆帯間は、沈線による鋸歯状文と刺突文。上段の鋸歯は、逆L字状文の背中合わせ部分に対応する箇所では粘土紐で表現される。			
67	206	44	Y－8	8－1	頸部は横走隆帯にはさまれた3本の波状粘土紐だが下2本は胴部懸垂文隆帯のあと貼付された。胴部は3本1組隆帯による、おそらくU字状モチーフの懸垂文と、付随する貼付文。隆帯は途中スペード状に屈曲する。胴部半截竹管条線は最後に施文。	75.5		
		45	H－4	8－1	胴部3本1組竹管整形隆帯による懸垂文→波状粘土紐が数条垂下→半截竹管条線			
		46	I－11 J－11	8－2	胴部くびれ部に2本の隆帯（と沈線）があり、それ以下が残存する。文様は2本の隆帯と隆帯間・脇の沈線により、横につながる大渦巻文と、付随する小渦巻文を描いている。地文として棒状工具先端を利用した列点文を充填。内面はスス付着で黒色化。			
68	207	47	I－12	8－2	口縁部文様帯は2本の隆帯と隆帯間沈線により渦巻つなぎ弧文、沈線によりマド区画を作っている。マド区画内条線。胴部は3本1組垂下沈線により器面8分割。中央の沈線は途中渦巻く。区画内は綾杉状条線上に、蛇行沈線。条線はいずれも半截竹管。			
		48	U－2 U－3	8－2	口縁部は沈線で横長の矩形区画を描くらしい。中に棒状工具先端による円形刺突文が入る。胴部はU字状懸垂文と、櫛歯状工具による綾杉状条線、蛇行沈線。			
		49	J－10	8－2	胴部に5単位の垂下隆帯、そのうち対の位置の2本は、胴部中央にて渦巻文をはさんでY字状を呈していたらしい。地文櫛歯状工具による条線。底部に木の葉圧痕あり。			
		50	X－4 W－4 W－3	8－2	小型深鉢。曽利古式の、口縁部に斜行条線をもつ土器を模しているのだろうが簡略である。口唇は内側に粘土をついで突出させ、短い条線を施し1本の沈線をめぐらす。胴部くびれ部の2本の沈線をはさんで上下半とも半截竹管による斜行条線。			
		51	T－2 R－2 S－3 Q－3	8－2	4単位X把手付。2本の隆帯でX把手間をつなぐ。隆帯と隆帯に沿う沈線により把手の裾部に渦巻文。胴部文様は低平な隆帯貼付による大渦巻文。隆帯間に、半截竹管による条線をまばらに施文している。			
		52	P－5 N－6 O－11 O－5	8－2	4単位X把手を有する鉢形土器。把手をもつ頸部横帯は隆帯により8単位のマド区画を作るが、隆帯連結部に円形刺突（棒状工具か）を施す点が特異である。胴部は頸部から続いて垂下する隆帯が冂状区画を作り、区画内に大ぶりな蛇行沈線。なお頸部・胴部とも条線は8本1単位櫛歯状工具による。隆帯には沈線が沿う。口縁部欠損するが破片は残り、波状突起があり波頂下に貫通孔をもち、口唇肥厚し上端に1本沈線がめぐる、いわゆる肥厚口辺である。以下は太い沈線により、υ字形・円形・U字等の図形を全面に描くらしい。			広域合れ 接離たグ リッド間
		53	U－2 U－3 V－3	8－2	鉢形土器。頸部にX把手が2個残存している。把手は上下に貫通孔。頸部は太い隆帯で横帯を作り、把手両脇に渦巻文があるが、欠損部分多く文様の全容は不明。			
		54	H－12 I－12	8－2	口縁部横走隆帯1本は5ヶ所で渦巻文となり、隆帯上下に沈線が沿う。渦巻から隆帯が垂下して胴部を冂状に区画し、区画内5本1組櫛歯状工具による条線と、蛇行沈線。なお内面胴下半部に幅7cmの帯状にススが付着している。			
		55	P－2 O－2	8－2	器面は、上端と中央部に渦巻文をもつ2本の垂下隆帯によりおそらく4単位に分けられる。口縁直下に太い横走沈線がめぐる。地文半截竹管による条線上に、蛇行沈線。			

写　真	図	図No.	出土地点	分　類	文　様	高さcm	容量ℓ	備　考
	208	56	M－7	8－2	口径に比して底径が小さい。口縁部に横走沈線２本、沈線による冂状区画６単位、ただし４単位は幅が狭い。区画内地文３本１組櫛歯状工具による条線と、蛇行沈線。	23.2	2.8	
		57	P－5	8－2	口縁部に２本の太い横走沈線。胴部は区画なく、蛇行沈線と、１本引き沈線による綾杉状条線を粗雑に施文する。			
	208	58	W－3 X－3	8－2	口縁部は横走沈線１本、胴部は沈線で冂状区画（５単位？）。区画内櫛歯状工具による綾杉状条線。口縁横走沈線上で内外面から１個の補修孔を穿とうとしているが貫通せず。内面胴下半部に帯状にスス付着がめぐる。底部に明瞭な網代圧痕あり。	24.3	3.3	
		59	Q－3 SB－93	8－2	口縁部に２本の太い横走沈線がめぐり、その間が隆起するが隆帯か否か不明。胴部は垂下隆帯で冂状区画を作るが、冂状の区画の上端も貼付隆帯か否か不明。隆帯に沿って沈線。区画内縦方向または綾杉状条線と、蛇行沈線。条線は半截竹管によるか。			
		60	U－3 V－3 T－3	8－2	口縁部横走沈線１本。胴部は沈線による冂状区画５単位。区画内は４本１組櫛歯状工具による綾杉状条線と、蛇行沈線。底部に網代圧痕あり。	15.7	1.3	
		61	L－7	8－2	口縁部はわずかに残るが磨滅著しい。図は不適当で、２本の横走沈線らしい。胴部は垂下隆帯で区画、区画内７本１組櫛歯状工具による斜行条線と、大ぶりな蛇行沈線。			
		62	H－7	8－2	器面は上端が渦巻文となる沈線と、その左に沿う沈線、即ち２本１組垂下沈線により６単位に分かれる（図では隆帯に見えるが沈線のみである）。区画内は太い沈線による綾杉状文と蛇行沈線。綾杉の向きは通常の逆でハの字状。			
69		63	M－7 SB－28 SB－39 SB－10 炉内	8－2	沈線文のみ。口縁部に横走沈線１本。縦方向条線は５本１組櫛歯状工具による。			
		64	SB－28	8－2	沈線文のみ。冂状区画は５単位。区画内の櫛歯状条線は、横方向・縦方向に入る区画が各１単位、綾杉状条線をもつ区画が３単位。蛇行沈線は全くない。	16.9	1.07	
		65	Q－4	8－2	胴下半～底部。４単位垂下隆帯間に、６本１組櫛歯状工具を綾杉状に施文し、その上に蛇行沈線。			
		66	K－3 M－10	8－2	口縁部に横走沈線が２本めぐり、胴部は細長い逆Ｕ字状沈線を垂下させて区画し、７本１組櫛歯状条線を施文後、蛇行沈線。器形は復原実測図よりも、外傾するだろう。			広域接合離れたグリッド間
		67	Q－5	8－2	磨滅著しく文様がわかりにくいが、沈線で縦に細長く区画した中にハの字文を施文。			
		68	K－2	8－2	２本１組沈線が４単位垂下して器面を区画し、区画内は細い施文具による綾杉状のまばらな条線と、蛇行沈線。			
		69	M－5 N－5	8－2	胴部は区画せず、４本１組櫛歯状工具による縦の条線を施文後、蛇行沈線。			
		70	W－6	8－2	円筒形を呈する胴下半部。６本１組櫛歯状工具による縦の条線のみ。			
	209	71	K－12	8－4	口縁部が大きく開き、上端部分で強く内折する。口唇端部に２本の隆帯をめぐらす。口縁部文様帯下端を２本の隆帯で画す→地文縄文ＲＬを横に施文→２本の竹管整形隆帯による波状文。波状の頂部は渦巻く。文様は10単位。なお縄文施文後に口唇の外側の隆帯が竹管で整形されて両脇に沈線が沿う。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		72	N－10	9	口縁部文様帯は上端の横走隆帯と、2本の隆帯と隆帯に沿う沈線による渦巻つなぎ弧文とで、マド区画を作っている。渦巻文の頭に刺突が入る。マド区画内・胴部地文は撚糸文、Lの縄をR巻き。マド区画内の両隅は撚糸のかわりに条線としている。胴部は4本1組の沈線が垂下するが、外側2本が外折して横につながっている。			
		73	Q－7	8－4	内弯する口縁部に2本の隆帯と隆帯に沿う沈線による渦巻つなぎ弧文と、その上端をつなぐ横走隆帯。半円状の区画内は刺突文、胴部はRL縄文、胴部中央の膨らむ部分にて故意に打欠いている。			
69	209	74	R－6 R－7 SK－123	8－4	口縁部は2本1組沈線による波状文。施文順序はまず上方の波状沈線→胴部地文縄文RL、口縁部刺突文→下方の波状沈線とそれと結びついた渦巻文、三叉文と蛇行沈線。			
		75	P－5 SB－49, 50, 51		5単位の波状口縁。波頂下やや内弯。口唇は厚くなり上端に2本の粘土紐がめぐり、波頂部でワッカ状につながる。地文縄文RL。くびれ部に波状粘土紐がめぐり、上半は波頂部下に5単位、下半は10単位、波状粘土紐が垂下する。	28.6		
		76	M－2		おそらく4単位の突起の頂部に、逆の「の」の字状を呈する沈線渦巻文が入る。突起をつないで、口唇外帯に1本隆帯がめぐり、その下に2本の隆帯がやや弧状を呈して沿うが、最も下の1本は把手下で渦巻を作る。地文縄文RL。くびれ部に3条の半截竹管半隆起線がめぐり、上半は8単位の蛇行沈線垂下、下半は3本の沈線による8単位の弧線文と、弧の下に蛇行沈線が垂下。	26.5	2.8	
		77	P－5		胴部下半～底部のみ。地文縄文RL。くびれ部に半截竹管による2条の半隆起線、下半部も半截竹管を利用した蛇行沈線が数条垂下する。			
		78	N－10	8－4	地文撚糸文、Lの縄をR巻き。地文上の文様は、4本または3本1組の垂下沈線の左右に、2本1組を基本とした弧状文・渦巻文。			
		79	J－8		浅鉢。無文口縁が外反する。頸部に細い横走粘土紐と波状粘土紐が2本ずつめぐる。胴部撚糸文、磨滅してわかりにくいがLの縄を用いているらしい。			
70	210	80	Q－7		浅鉢。胴部全面撚糸文施文のあと波状粘土紐貼付。撚糸文には2種の結び目の圧痕が明瞭に現れている。途中に結節のあるLの縄をR巻きし、その両末端の結び目を軸にはさんでいる。軸の直径は約6㎜であることがわかる。	31.5	19.8	
		81	L－12		浅鉢。無文口縁が直立し胴部はやや膨らむ。頸部に波状粘土紐。胴部縄文RL。			
		82	I－11		浅鉢。外面は結節付のLR縄文を縦ころがし。口唇部から内面にかけ赤彩残る。	22.5	2.7	
		83	I－11	8－4	外面全面縄文、粒が大きく粗い縄のRL。内面胴下半部にスス付着部がめぐる。	35.0		
		84	V－7	8－4	外面全面縄文RL。			
		85	J－5	10	胴部やや膨らむタル形を呈する。横走隆帯と垂下隆帯により器面を冂状に13単位に区画し、うち6単位が縄文部分となる。縄文はLR。縄文部分は無文部分よりやや幅広い。無文部分は縦に調整。順序は隆帯貼付→縄文→隆帯に沿ってナデ。			
	211	86	M－4	8－2	4本1組（1箇所、3本）垂下沈線により器面を6単位に区画→綾杉状の列点文（ハの字文）。ほとんど水平な列点部分もある。			
		87	I－11	8－2	おそらく4単位の波状口縁を呈すると思われる。口縁に沿って横走沈線1本、以下冂状区画と区画内ハの字文。内面胴下半部にスス付着。	22.2	3.1	
		88	SB－22 L－10	8－2	2本の沈線で器面を6単位に分ける→ハの字文→区画内に1本ずつ、蛇行沈線を入れる。蛇行沈線は図の正面で不明瞭であるが、確かに存在している。SB－22の帰属としてよいと考える。			
		89	W－3 W－4	8－3	おそらく4単位の波状口縁を呈する。器形にくびれは全くないが、口縁付近でほんの少し内弯する。文様は沈線による逆U字状の中に、粗雑なハの字文を入れている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		90	N－8	8－1	吊手土器。把手は扁平だが内側がやや厚い。把手基部に眼鏡状把手がつく。体部口唇は幅広く、内側に突出する。把手の背に刻みらしきものあり、他に文様は認められない。内外面・把手ともスス付着著しく、器壁が荒れ、二次焼成の痕は明らかである。			
		91	H－12 I－12		無文深鉢。	22.8	3.1	
		92	H－7		無文深鉢。			
71	211	93	H－7		無文深鉢。			
		94	H－7		無文深鉢。胴が張る器形。			
		95	I－10		浅鉢の口縁部と底部を打ち欠いて、伏甕もしくは底部穿孔埋甕としていたらしいが、付属する遺構は検出できなかった。底部穿孔の状況は特異で、接合面にて打欠き、入念に擦って径5～6cmの孔を作る。非常に不明瞭であるが文様あり、2本1組沈線と縄文が見えるので、中期終末であろう。			
		96	U－4 X－4		無文浅鉢。図には現れていないが口縁外帯が幅3cm内外で肥厚している。	17.0	4.9	
		97	P－8 O－8		無文浅鉢。	9.5	1.3	
		98	C－5		深鉢の胴下半～底部。接合面にて打欠き、擦って再利用したものと思われる。わずかに条線が見える。木の葉底。			
		99	W－5		無文の鉢形土器。	10.6	0.8	
		100	K－2	8－2	小型深鉢。2本1組垂下沈線、3本1組垂下沈線各2単位で器面を4分割。区画内は細い沈線による綾杉条線と、蛇行沈線。4つの区画のうち1つは全く無文。			
		101	T－5 T－6		大型深鉢の胴下半～底部。			
		102	Q－5	8－2	深鉢の胴下半～底部。施文が雑で、しかも磨滅しているので文様は不明瞭だが、垂下沈線とその間のハの字文が見える。			
		103	U－2		深鉢の底部。			
		104	Y－3	11	2単位把手付浅鉢。把手は幅2.5cm程の粘土紐を外側から内側へ渡したもの。口縁下約2cmのところをめぐる断面三角形隆帯の両裾に、先端の細い工具による刺突文が沿う。隆帯並びに刺突は把手の両側の盛り上がりにつながっていく。胴部はひっかいた様な沈線により、横に連結する波形文。波の先はJ字状にまるくなる。	12.5 (15.5)	1.7	
		105	N－2		鍔なしの台形土器。脚部に孔が1つ、半分程残る。脚部接地面がすりへっている。			
		106	SB－28		脚部なしの台形土器。両面とも黒色のこびりつきがあるが特に一面はほとんど真っ黒。			
		107	Q－2		台形土器。脚部欠損している。鍔の側面に刻み文様あり。			

第9節　石器一覧表

S－Ⅲ区　住居址

住居No.	石　鏃	石　匙	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SB－01								1							
SB－02								2					ユーフレ1 ユーフレ（水晶）1	4	
SB－03			2										ユーフレ7	30	
SB－04								1	1						
SB－05	2		1		13	2	1	6	2	2		4	ユーフレ7 フレイク・スクレーパー1 溶岩2	80	2.3
SB－09					1								コア1	20.8	
SB－11					2								フレイク・スクレイパー1		
SB－13	1				1			1				1	ユーフレ3		
SB－14	5		1		1			3					ユーフレ4 スクレイパー（水晶）1 ノッチド・スクレイパー1	30	3.4
SB－16													ユーフレ3		
SB－19						1									
SB－20	1		1										ユーフレ12	73	2.5
SB－21	1		1	1	2	1		5	1				ユーフレ3	19.4	2.3
SB－22								6					角柱1		
SB－24					2	1	1								
SB－25													ユーフレ1		
SB－26	1			1				3					コア1 ユーフレ2 角柱3	8.1	
SB－28	1				5	2		2				1	ユーフレ4 角柱1	115	11.7
SB－29	4				8			9	1				ユーフレ7 スクレイパー1 丸石1 フレイス・スクレイパー1 溶岩1	105	
SB－30					1										
SB－31		1											角柱1		
SB－33			1		25	1		4	3				ユーフレ8 スクレイパー1 溶岩1 角柱1	50	
SB~~－33~~、															
SB－34					6	2		9			3	1	ユーフレ4 コア1 熔岩1	30	
SB－35	3				19	3		9		1	3	2	ユーフレ14 ユーフレ（水晶）1 角柱1 溶岩2 スクレイパー1	70	3.3
SB－36	1	1			12	2						3	ユーフレ1 丸石1		
SB－37	1				1				1				ユーフレ5 溶岩1	4	
SB－38				1									ユーフレ1	3.1	
SB－39	1				3			1	1				ユーフレ4	6.3	
SB－40					4		1	1					ユーフレ1	17.4	
SB－41					2			2		1			ユーフレ2 スクレイパー2	0.5	
SB－43	4	1	1	4	12			8	1	1		2	ユーフレ9 コア2 溶岩2	85	2.8
SB－44					2			2	1				チャート1	1.9	

住居No.	石　鏃	石・匙	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SB－45													溶岩1	10.8	
SB－46							1	3	3				ユーフレ1	18.5	
SB－47							1	6	1				ユーフレ2	10.6	
SB－48													ユーフレ9 ユーフレ(水晶)1 フレイク・スクレイパー4	15.7	
SB－49～58	1		1	2	30	1		10	3			1	角柱1 溶岩1 石錐1	27	0.9
SB－52	水晶1		1	1	8						1		ユーフレ7 フレイク、スクレイパー1		14.4
SB－55	5 ホルンス		1	1	5			3	1			1	ユーフレ15 コア1 溶岩1 石棒1	157	21.2
SB－56					2								ユーフレ1	1.2	
SB－57	3							7	1				ユーフレ5	30	0.7
SB－58	1	1											ユーフレ5	13.4	
SB－59													ユーフレ2	0.9	3.5
SB－60	1		1		3			3			1		ユーフレ5 溶岩1	15.7	
SB－61								1						5.1	
SB－62			1		2			4				1	ユーフレ3	2.1	
SB－63										1					
SB－66	1				4			2					ユーフレ2 石棒1	17.6	
SB－68													ユーフレ1	3.9	
SB－69													ユーフレ6 ユーフレ(水晶)1	23	0.4
SB－70					1									3.8	
SB－71					1	1	1	1				2	スクレイパー1	35	4.7
SB－72	1				5			4	3			3	ユーフレ5 石棒1 ユーフレ2 溶岩1 炉石1	9.3	
SB－74						1			1				ユーフレ1		
SB－75					1								ユーフレ1	22	
SB－76			1										ユーフレ2	6.5	
SB－77								2							
SB－78					1			1				1	角柱2		
SB－79					1										
SB－80	1														
SB－84	5	4	8	2	15	2		2	2	2			ユーフレ7 スクレパー2 フレイク、スクレイパー3	234	3.4
SB－85	1			1	1				2	1			溶岩1	28	9.8
SB－86					2								ユーフレ1 溶岩1	3.8	
SB－87			1					1							
SB－88				1										30	
SB－90	1				4								ユーフレ1	8.1	
SB－91								2				2	ユーフレ1		
SB－92	1													8.8	
SB－93					2			2				1	ユーフレ1	30	1.5
SB－94	4		2	3	3	1		5	1				ユーフレ1 角柱1 溶岩1 ユーフレ12	48	

住居No.	石　鏃	石　匙	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SB－95	2		2		12	3		8		1			ユーフレ7 スクレパー1 溶岩1	57	
SB－96					2			3					ユーフレ3	0.2	
SB－97									1	1			ユーフレ3	22	0.4
SB－99														6.1	
SB－100	1			1	9			3		1		1	ユーフレ4	38	
SB－101													ユーフレ1		
SB－102	2				8			6	2	3		1	ユーフレ3	22	
SB－104	4 水晶1		1		10		1	6	1				ユーフレ20 スクレパー2 溶岩2 丸石1 フレイク・スクレイパー1	98	1.3
SB－106													角柱1		
SB－108	1				1	1		9	2	2		1	ユーフレ3 ユーフレ(水晶)1 溶岩1 フレイク・スクレイパー2	57	
SB－109	2		2	1	3			1	1			1	ユーフレ10 ノッチドスクレイパー1 フレイク・スクレイパー2	50	
SB－111								1					ユーフレ2	1.6	3.3
SB－111	1		2		1	17		9	1	2	2	3	ユーフレ2 スクレイパー1 角柱1	20	
SB－112	1							3						4.9	

S－Ⅲ区　土壙

土壙No.	石　鏃	石　匙	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SK－01					2								石棒1		
SK－02									1			1	ユーフレ1	1.7	
SK－03					3			1		1			ユーフレ2	8.9	
SK－04					1										
SK－06					1										
SK－08					1			1							
SK－12														4.8	
SK－12 ～15			1										ユーフレ1	10.1	1.6
SK－13														1.3	
SK－15						1									
SK－18					6		1								
SK－19					1		1								
SK－21								1							
SK－23						1		2					コア1	7.7	
SK－24	1				4									6.3	
SK－25	1				3						1	2	ユーフレ6 フレイク・スクレイパー	45	0.5
SK－26														2.8	
SK－29		1													
SK－30					2	1									
SK－32					2									13.8	
SK－33								1			1		ユーフレ1	11.6	
SK－34					1			4					ユーフレ3 スクレイパー1	6.3	0.7
SK－35					1							1		5	

土壙No.	石　鏃	石　匙	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SK－36	1		4		5									12	5.2
SK-37、38、39													ユーフレ1		
SK－42									1						
SK－42 43													ユーフレ1		
SK－46					3			2	1					7.3	
SK－47					1										
SK－48					1										
SK－49					3			1					溶岩1、砥石1		
SK－50							1								
SK－51	1														
SK－55					1							1			
SK－56	1												ユーフレ1	4	
SK－59	1				1										
SK－63								1							
SK－65					1									5.6	
SK－66						1		2					ユーフレ2	33	
SK－67													ユーフレ1	6	
SK－73								1							
SK－74			2						1					27	
SK－75														8.3	
SK－79					3										
SK－80					1								石皿		
SK－85					1										
SK－86	1							2						6.1	
SK－88														2	
SK－89					1										
SK－90	2			1	1								ユーフレ3	3.2	
SK－92								1					ユーフレ3	13.5	
SK－94	1													3.3	
SK－98													スクレイパー1		
SK－99													ユーフレ1	14.2	0.7
SK－100			1		1	1			2				石棒1 溶岩1	2	
SK－104			1											12.7	
SK－109							1								
SK－110		1												12.8	
SK－123													ユーフレ1	0.8	
SK－126	1												ユーフレ2	15.3	0.3
SK－128													角柱1		
SK－129	2							2					ユーフレ4	37	1.2
SK－131			1		1										
SK－135						1									
SK－138														7	
SK－141								1					ユーフレ2		
SK－147					1										
SK－156										1					
SK－157														3.5	
SK－160													ユーフレ1		
SK－161														5	
SK－162						1									

住居No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SK—163	1													0.6	
SK—172														1.5	
SK—171 172、173		1													
SK—173														0.8	
SK—174					3										
SK—176													ユーフレ1 ユーフレ(水晶)1	9.6	
SK—182					1										
SK—183				1									チャート1	4.7	
SK—190			1												
SK—191															
SK—193								1					角柱1		
SK—194													角柱1	1.2	
SK—195					3									1	
SK—196														10.4	
SK—199					1										
SK—200	1				1										
SK—202														1.9	
SK—207														2.9	
SK—211					1									5	
SK—214					1									1.5	
SK—215	1													0.8	
SK—217					1										
SK—218					1								角柱1 溶岩1	5.4	
SK—221								1					ユーフレ1		
SK—224					1						1				
SK—230					1										
SK—236					1			2						4.3	
SK—247								1	1						
SK—252														12.3	
SK—259					1				1				フレイク・スクレイパー1	5.4	
SK—260					3									1.9	
SK—261	1												ユーフレ1	2.1	
SK—264														6.9	
SK—266					2								石棒1		
SK—267					8		1			1			ユーフレ3	22	
SK—276								1						5.7	
SK—277	1														
SK—280								2							
SK—287	1	1			2				1				ユーフレ1 ユーフレ(水晶)	25	25
SK—289					1	1	1						溶岩1 ユーフレ2	0.7	
SK—290															
SK—291					1					1					
SK—292														4.6	
SK—296					1										
SK—297					1									0.9	
SK—303		1					1						コア1 石棒1	4.9	
SK—305					1								ユーフレ3	3.9	
SK—307												1			
SK—311					5									1.9	

土壙No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SK—313									1						
SK—318					1										
SK—320														55	2.7
SK—327			1										ユーフレ2		
SK—328					4			1	2	4	1		溶岩1 コア1	15.8	1.5
SK—334												2			
SK—344					1								ユーフレ1	3.9	
SK—345			1		1								ユーフレ1	4.5	
SK—351														1.5	
SK—354														5.8	
SK—355					3										
SK—356					1										
SK—357	2				3								ユーフレ1	28	2.8
SK—359					4										
SK—360					5		1			1					
SK—362													角柱1		
SK—400								1	1				溶岩1		

釈S—Ⅲ　SX

No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SX—01													角柱1		
SX—04		1												56g	

石器種別一覧表　釈S—Ⅲ　グリッド

石器種別	個数	石器種別	個数	石器種別	個数
チャート	7	磨石凹石	511	軽石	1
石英	1	石棒	28	鉄滓	1 ※
コア	17	角柱	7	打斧	1,363
ピエスエスキーユ	116	溶岩	103	黒曜石石鏃	359
スクレイパー	44	石匙	40	水晶石鏃	11
ノッチドスクレイパー	1	稜磨石	47	チャート石鏃	1
ドリル	225	その他	7	ホルンフェルス石鏃	1
ユーティライズドフレイク	1,565	フレイスクレイパー	25	フレイク	9
水晶ピエスエスキーユ	5	礫器	40	水晶フレイク	2
水晶ドリル	3	ハンマー	39	安山岩石鏃	1
水晶ユーティライズドフレイク	97	丸石	9	粘板岩石鏃	1
玉石	163	砥石	5		
磨斧	141	石皿	60	計	5,056

※　鉄滓は縄文時代の遺物ではないが、集計の都合上この一覧表に入ってしまった。
石器の数量としては、これを差し引いて考えるべきである。

グリット別・種別石器一覧表

石器種別	S－Ⅲグ	S－Ⅳグ	N－Ⅲグ	N－Ⅳグ	計	石器種別	S－Ⅲグ	S－Ⅳグ	N－Ⅲグ	N－Ⅳグ	計
チャート	7		フレイク 3	フレイク 3	13	ハンマー	39	24	6	17	86
石英	1		1	1	3	丸石	9	2			11
コア	17	9	1	5	32	砥石	5	3			8
ピエスエスキーユ	116	65	21	29	231	石皿	60	37	15	31	143
スクレイパー	44	22	9	11	86	軽石	1	1		1	3
ドリル	225	(1) 84	57	54	(1) 420	打斧	1,363	732	352	784	3,231
ユーティライズドフレイク	1,565	(1) 607	268	163	(1) 2,693	黒曜石石鏃	359	213	76	109	757
水晶ピエスエスキーユ	5			2	7	水晶石鏃	11	5	1		17
水晶ドリル	3		1		4	チャート石鏃	1	2	1	1	5
水晶ユーティライズドフレイク	97	5	4		106	ホルンフェルス石鏃	1				1
玉石	163	84	33	67	347	粘板岩石鏃	1				1
磨斧	141	73	27	56	297	大型フレイク	9	(2) 42		3	(2) 54
磨石凹石	511	292	107	235	1,145	水晶フレイク	2				2
石棒	28	9	2	2	41	安山岩石鏃	1				1
角柱	7	12		5	24	ノッチドスクレイパー	1	2	2	1	6
溶岩	103	37	21	58	219	石錘		5			5
石匙	40	17	9	15	81	硅石岩石鏃		(1)			(1)
稜磨石	47	16	6	14	83	玉			1		1
その他	7	1		1	9	長石				1	1
フレイクスクレイパー	25	12	10	20	67	水晶原石				1	1
礫器	40	22	3	11	76	合計	5,056	(5) 2,441	1,037	1,704	(5) 10,240

第10節　土偶一覧表

S－III区

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第218図 1	SB－01	顔	4.5×6.2×4.4	五領ヶ台～狢沢	頭部に分割塊面あり	ダブルハの字文	沈線でダブルハの字文	
第218図 2	SB－02	顔	5.0×4.1×3.1	藤内～井戸尻	頭部に木芯痕	頭部に粘土紐で玉抱き三叉文		
第218図 3	SB－23	顔	3.1×4.1×2.4	曽利？				
第218図 4	SB－33、R－16	顔・胸	4.9×3.6×2.0		胸部に木芯痕	額に半月形文		
第218図 5	SB－36	顔	4.2×4.7×2.9	曽利？	頭部に分割塊面あり	ダブルハの字文	額に半弧状沈線	
第218図 6	SB－39	顔	4.1×3.5×2.8			文様なしの顔		
第218図 7	SB－43	顔	3.9×4.2×3.0			後頭部に隆帯で円文	隆帯で円文	
第219図 8	SB－49、50、51、56	顔	6.2×6.6×4.3	藤内～井戸尻	頭部に分割塊面あり	後頭部に双環をもち、その両脇に円文をもつ	円文を隆帯でなし、その上に刻目文、額に半月文	
第219図 9	SB－100、K－2	顔	3.1×2.9×2.8	藤内～井戸尻		後頭部に渦巻三叉文	渦巻三叉文は隆帯で表わす。	
第219図 10	SB－113埋甕	顔	3.2×3.4×2.7	曽利	頭部に分割塊面と、木芯痕			
第219図 11	SB－105 No.324	顔	4.7×6.5×3.9	新道～藤内	頭部に粘土塊面	後頭に玉抱き三叉文、三角押文で沈線を描く	玉抱き三叉文は隆帯目と口は三角押文で描く	
第219図 12	SK－25	顔	4.3×5.6×4.7	新道～藤内		後頭に双環文と変形化した玉抱き三叉文か、口は三ツ目	隆帯上に刻目	
第220図 13	SK－48	顔	6.1×6.9×4.8	藤内	頭部に分割塊面と木芯痕	額に半月文、頬にダブルハの字文、後頭部に玉抱き三叉文	玉抱き三叉文は隆帯で表わし、その上に刻目	
第220図 14	SK－291	顔	5.2×5.9×4.0	新道～藤内		額に半月文、左頬にのみダブルハの字文後頭部に玉抱き三叉文	左頬と後頭部に三角押文	
第220図 15	B－4	顔	2.3×3.5×2.6	曽利				
第220図 16	B－7	顔	8.0×8.1×5.3	井戸尻	頭部に分割塊面あり	後頭部に双環文、これを玉とした玉抱き三叉文	隆帯上に刻目、一部に交互刻目、三叉文に沈線	
第221図 17	C－3	顔	5.0×6.5×4.2	藤内～井戸尻	頭部に分割塊面	後頭部に変形玉抱き三叉文と思われる	文様は隆帯	
第221図 18	C－7	顔	4.5×5.3×2.7	曽利	頭部に分割塊面	頭頂部に刻目、ダブルハの字文	いずれも沈線	
第221図 19	D－8	顔	3.5×3.2×2.2	曽利末		左頬に渦巻文と頭部、側頭部に沈線	頭部が角状になるのが中期末の特色	
第221図 20	E－4	顔	3.8×4.3×2.2	曽利		頭頂部に沈線文	沈線文は頭髪か	
第221図 21	F－3	顔	4.9×5.7×4.2	曽利	頭部に分割塊面	後頭頂部に単環文と渦巻き文	単環は隆帯、渦巻文は沈線	
第221図 22	F－7	顔	4.9×5.1×2.6	曽利	頭部に分割塊面	頭頂部に刻目	目が稀なたれ目	
第221図 23	F－8	顔	4.0×4.3×3.9	曽利	頭部にえぐり	後頭頂部に単環文		
第222図 24	F－9	顔	9.0×8.0×6.8	井戸尻	頭部に分割塊面	頭頂部に円文、後頭頂部に双環文と後頭部は渦巻文	頭部に刻目と沈線、渦巻文に交互刻目	把手の可能性もある。
第220図 25	G－8	顔	1.6×2.3×2.3	五領ヶ台				カッパ型土偶
第222図 26	G－9	顔・腕・胸	3.7×5.1×1.9	藤内～井戸尻	胸部に分割塊面	頬にダブルハの字文正中線、後頭部にV字文	いずれも沈線文	頭部中空
第222図 27	G－10	顔	5.4×5.0×2.3					
第222図 28	J－2 No.660	顔	3.5×3.7×2.4	曽利	頭部に分割塊面と木芯痕	頭頂部に沈線文		
第223図 29	J－11	顔	3.4×4.4×3.3	曽利	頭部に分割塊面	頭頂部に刻目と後頭頂部に単環文		
第223図 30	K－2	顔	3.6×3.2×2.4	曽利？				
第223図 31	K－2 No.542	顔	5.2×6.4×4.4	藤内～井戸尻		後頭部に玉抱き三叉文	玉抱き三叉文は隆帯	
第223図 32	M－3	顔	2.3×3.6×3.1	五領ヶ台？	頭部に分割塊面	頭頂部に沈線文		カッパ型土偶
第223図 33	M－6	顔	2.7×2.7×2.2	曽利				

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第223図 34	M－6	顔	4.1×5.3×4.2	井戸尻	頸部に分割塊面	後頭部は玉抱き三叉文か？		把手の可能性も否定できない。
第223図 35	M－10	顔	3.2×3.0×2.2	曽利	頭部に粘土塊面が見える。			
第224図 36	M－12	顔	2.8×2.5×1.3	？				
第224図 37	N－1 No.40	顔	3.5×6.5×4.8	藤内～井戸尻		両耳の部分に孔が見える。		
第224図 38	N－5	顔	3.0×2.8×1.8					
第224図 39	O－1	顔	6.5×7.1×4.4	井戸尻		頭頂部に三角文、後頭部に渦巻文、その両脇に円文を二つ並べている。	後頭部文様は隆帯、アゴの部分に刻目が見られる。	
第224図 40	O－2	顔	3.6×3.2×2.6	井戸尻	頸部に木芯痕	後頭部に三角文、顔の表現なし	隆帯上刻目	
第224図 41	O－7	顔	2.8×3.4×2.4	新道～藤内		後頭部に玉抱き三叉文と菱形文	菱形文のまわりに竹管による半円文を施す。	
第224図 42	P－2	顔・両腕・胸	9.1×8.5×5.1	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面	後頭頂部に双環が付いていたと思われる。		
第225図 43	S－3	顔・胸	4.6×2.5×1.9	？				
第225図 44	U－2	顔	5.5×7.4×5.5	井戸尻		後頭頂部に双環、その下に円文	隆帯上刻目、ダブルハの字文	中空土偶
第225図 45	U－18	顔	5.6×6.0×3.9	曽利？	頸部に分割塊面	頬にダブルハの字文まつ毛の沈線頸にX文	後頭部に三叉文と渦巻文をもつ	ダブルハの字文に赤彩
第225図 46	U－18	顔	4.4×4.0×3.7	狢沢～井戸尻	頸部に木芯痕	後頭部に渦巻三叉文		
第225図 47	V－2	顔	2.6×3.4×3.5	五領ヶ台		頭縁部に刻目		カッパ型土偶あるいは把手か
第226図 48	W－6	顔	5.1×4.7×3.4	？	頸部にえぐりあり	額中央に沈線、後頭部にも沈線	額中央に沈線をもつ例は初見である。	形状も特異な土偶
第226図 49	X－4	顔	6.2×6.1×4.9	狢沢～新道	分割されない土偶	全体に角押文を粗雑に施している。	目と思われる部分のみ三角押文	板状有孔土偶とでも仮称しておく。
第226図 50	X－4	顔	2.8×4.0×4.1	五領ヶ台				カッパ型土偶
第226図 51	Y－8	顔・腕	4.3×5.1×2.7	五領ヶ台				カッパ型土偶あるいは把手。
第227図 52	表　採	顔	4.3×5.8×3.3	藤内～井戸尻		頭頂部に渦巻き三叉文	後頭の隆帯上に交互刻目文	
第227図 53	表　採	顔	5.3×6.3×4.9	曽利	頸部に分割塊面と木芯痕	頬にダブルハの字文後頭部に渦巻文	ダブルハの字文・渦巻文もいずれも沈線	
第227図 54	R－6？	顔	8.5×9.8×6.5	藤内	頸部に分割塊面と木芯痕	後頭頂部に双環、後頭部に渦巻き三叉文		
第228図 55	S B－29 Y－8	腕	2.5×5.5×2.3	曽利	付根部			
第228図 56	S B－102 No.60	腕	3.8×4.7×2.5	狢沢～井戸尻				
第228図 57	S K－66	腕	1.6×2.6×1.2					
第228図 58	C－7	腕	2.2×3.7×1.7	曽利			上面に沈線文	
第228図 59	C－8	腕	2.5×3.8×2.1	曽利			上面に沈線文	
第228図 60	C－8	腕	1.7×2.2×3.5	狢沢～井戸尻				
第228図 61	E－2	腕	3.0×4.1×1.9	狢沢～井戸尻	付根部			
第228図 62	E－6	腕	1.9×2.7×1.1					
第228図 63	E－7	腕	2.3×2.6×1.2					
第228図 64	E－7	腕	2.0×1.7×2.9	曽利				
第228図 65	F－7	腕	2.7×3.1×1.4		木芯痕が見える。			
第228図 66	F－8	腕・胸	2.6×3.1×2.3					
第228図 67	F－9	腕	1.5×3.6×1.6					
第228図 68	F－9	腕	2.2×3.2×2.2					
第228図 69	F－9	腕	3.4×4.1×2.2	曽利		手先に沈線、脇下に沈線文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第229図 70	G－8	腕	1.6×3.7×1.6			上面に沈線文		
第229図 71	G－9	腕	2.6×1.7×1.5			上面に沈線		
第229図 72	G－13	腕・胸	3.1×3.7×1.7					
第229図 73	G－16	腕	3.0×4.0×1.7					
第229図 74	H－11 No.5	腕	4.5×3.5×2.5	曽利	付根部に木芯痕と分割塊面が見える。			所謂バンザイ土偶
第229図 75	I－3 No.19	腕・胸	5.0×7.7×2.7	新道～藤内	木芯痕と腕の粘土塊が見える。			
第229図 76	I－7	腕	2.4×4.0×2.0			上面に沈線文		
第229図 77	I－11	腕・胸	3.3×4.5×2.2	狢沢～藤内	木芯痕			
第229図 78	I－11	腕	2.0×3.8×1.9		付根部に分割塊面がある。			
第229図 79	I－12	腕	1.1×2.3×1.3			上面に沈線文		
第229図 80	L－5	腕	1.6×2.0×1.1					
第229図 81	L－11	腕	1.7×3.0×1.7					
第229図 82	M－12	腕	3.6×3.2×1.8	曽利		上面に沈線文		
第230図 83	N－4	腕	1.5×2.5×1.4					
第230図 84	P－2	腕	2.8×4.1×2.0	狢沢～井戸尻	腕の粘土塊面が見える。木芯痕もあり			
第230図 85	P－5	腕	1.8×2.7×1.3					
第230図 86	P－11	腕	3.2×5.3×1.3	狢沢～藤内	付根に分割塊面あり、また木芯痕もある。			
第230図 87	S－1	腕	2.0×3.7×1.7					
第230図 88	S－3	腕	2.5×3.4×2.0		付根部に分割塊面	腕先に沈線文		動作を表現した土偶
第230図 89	T－2	腕	2.4×3.5×1.9					
第230図 90	T－3	腕	2.5×3.4×1.8	曽利		脇下から続く沈線文		
第230図 91	T－20	腕	3.6×5.0×2.7					
第230図 92	U－2	腕	3.0×5.0×2.0					
第230図 93	U－2	腕	1.6×3.1×1.4		付根部に分割塊面あり			
第230図 94	X－4	腕	3.8×6.0×3.4					
第230図 95	X－7	腕	3.3×5.6×2.2					
第230図 96	表　採	腕	2.7×4.8×2.0	新道		三角押文による沈線文		
第230図 97	S－III	腕	2.0×3.5×1.8	曽利		上面に沈線文		
第231図 98	SB－01	胸	4.5×5.3×2.5	曽利				バンザイ土偶
第230図 99	SB－05 No.477	胸	4.6×4.5×1.4	曽利	(No.155と接合)			接合 バンザイ土偶
第231図100	SB－29	胸	4.3×7.4×3.5	新道～藤内	腕部と胴部に分割塊面あり			胸部はソケット接合法、動作をした土偶
第231図101	SB－33 No.42	胸	3.5×4.6×3.2	狢沢～新道	胸上面に腕部とのネガティブな分割塊面あり	正中線 脇腹部に角押文		
第231図102	SB－43 No.109	胸・胴	4.2×2.6×1.2	曽利		背部に沈線文		小型粗像土偶
第231図103	SB－43 ベルト内	胸	3.2×3.3×2.0	曽利	胴中央部にネガティブな分割塊面			バンザイ土偶
第231図104	SB－46	胸・腕	3.8×3.3×1.4	曽利				小型粗像土偶
第232図105	SB－46	胸	5.8×5.5×2.2	曽利	頸部に木芯痕	上腹部、脇下（側腹部）背部から肩部にかけて曽利式特有の文様がある。		
第232図106	W－6 SK－03	胸・腕	2.8×8.9×2.2	新道～井戸尻	頸部と胸部に分割塊面	両腕に沈線文		
第232図107	SK－64	胸	4.7×5.5×3.2	新道～井戸尻	頸部と胸部に分割塊面			

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第232図108	ＳＫ－129	胸・腕	5.7×3.5×3.0	新道	腕の付根部	肩部に竹管による半円文	黒駒の土偶の肩部と同様な施文手法	動作土偶 黒駒の土偶を思わせる。
第232図109	ＳＫ－173	胸	3.9×2.8×2.8		胸部			
第232図110	Ｂ－5	胸	3.2×3.9×2.7	曽利	腕の付根部			
第233図111	Ｄ－11	胸	4.4×6.1×2.7	曽利	頸部から腹部にかけて木芯痕			
第233図112	Ｅ－4	腹	2.9×3.7×2.7		腹部にネガティブな分割塊面	正中線		
第233図113	Ｅ－10　表採	胸・胴	7.3×6.4×2.2	曽利	頸部ソケット接合法（Ｓ－Ⅳ区　No.2と接合）	正中線、ブラ文、紋付文		接合 バンザイ土偶
第233図114	Ｆ－4	胸・胴	5.4×6.0×2.5	曽利	腹部に木芯痕	正中線、ブラ文、紋付文		バンザイ土偶
第233図115	Ｆ－5	胸	4.0×2.5×2.4	曽利	頸部に分割塊面	側腹部に沈線文		バンザイ土偶
第234図116	Ｆ－8	胸・腕	4.6×8.8×2.0	曽利		正中線、ブラ文、側腹部にブラ文		バンザイ土偶
第234図117	Ｆ－9	胸	5.5×6.5×2.5	曽利	頸部ソケット接合法	正中線、ブラ文、肩部にタスキ文		
第234図118	Ｆ－9	胸	7.0×6.9×2.2	新道	頸部に木芯痕	正中線を三角押文	正中線と乳房のまわりに三角押文	
第235図119	Ｇ－9	腹	2.8×3.5×2.4	曽利	下腹部に分割塊面		沈線文	
第235図120	Ｇ－9	腹	3.0×6.8×2.2	狢沢～井戸尻	頸部と胸部に分割塊面と木芯痕			
第235図121	Ｇ－10	腹	5.5×4.4×2.6		頸部に分割塊面			
第235図122	Ｈ－5	胸・腕	3.7×6.2×1.6					
第235図123	Ｈ－12	胸	2.7×3.7×1.7		頸部に分割塊面と木芯痕			
第235図124	Ｈ－13	胸	3.5×5.5×2.9	曽利	頸部に分割塊面	正中線、ブラ文	沈線	バンザイ土偶
第235図125	Ｉ－4	上半身	6.1×7.0×2.0	藤内～井戸尻		胸部に沈線文		
第235図126	Ｉ－12	胸	5.1×4.7×2.1	曽利	頸部に分割塊面	正中線、ブラ文		
第235図127	Ｊ－11	胸	3.8×4.5×2.1	曽利？		肩部に沈線文、頭部省略		粗像土偶？
第236図128	Ｊ－12	胸	4.0×4.1×2.1	曽利	頸部ソケット接合法と木芯痕			
第236図129	Ｋ－4	胸・腕	3.3×4.5×2.4	狢沢～新道	腕の付根部	腕先を刻み手を表現		
第236図130	Ｌ－6	胸・腰	5.8×4.9×2.1	曽利		正中線、ブラ文、タスキ文	沈線	バンザイ土偶
第236図131	Ｍ－2	胴	6.9×3.9×3.8	新道～藤内	胴中央に木芯痕	側腹部に三角押文	三角押文	
第236図132	Ｏ－8	胴	5.0×6.1×2.6	曽利		脇下に沈線文	沈線	
第236図133	Ｐ－3	胸	5.7×5.4×3.1	新道～藤内	胸の中央に木芯痕	肩部に三角押文、背部にも三角押文	三角押文	
第237図134	Ｑ－2	胸・腕	2.5×4.8×1.5	藤内～井戸尻				
第237図135	Ｑ－2	胸	2.4×3.2×2.0					
第237図136	Ｒ－2	胸・胴	4.7×3.2×1.6	曽利	胴部に分割塊面	沈線を文様を描くが、あるいは前・後が逆か？	類例ない文様	
第237図137	Ｓ－5	胸～脚	5.5×4.2×3.5	曽利		胸部と腹部が肥大している。		脚を省略した立像型土偶
第237図138	Ｓ－5	胸・腕	3.8×5.0×2.3	狢沢～藤内	頸部に分割塊面、胸中央に木芯痕			
第237図139	Ｓ－11	胸	3.8×2.6×1.4					小型粗像土偶
第237図140	Ｔ－4	胸	4.3×5.5×2.6	曽利		正中線、ブラ文	沈線	バンザイ土偶
第237図141	Ｕ－2	胸・腕	1.5×5.6×1.3	新道～井戸尻	胸部に分割塊面、頸部の分割塊面は明確でない。			
第238図142	Ｕ－2	胸	6.4×9.4×4.8	井戸尻	左腕の部分に多少粘土塊面が見える。	正中線、背中にＶ字文		所謂壺を抱く土偶
第237図143	Ｕ－4	胸	4.1×4.5×1.5	曽利				尖石形態土偶

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第238図144	U－4 No.1	胸	6.8×5.9×2.2	曽利	頸部ソケット接合法と分割塊面、胴中央部にも分割塊面	正中線、側腹部に沈線文、紋付文		バンザイ土偶
第238図145	U－19	胸・腕	2.6×5.5×1.3	藤内～井戸尻		腕部に沈線文		
第238図146	V－3	胸・腕	2.4×4.2×1.4	藤内～井戸尻				
第239図147	V－5	胸・腹	6.2×4.9×3.8	井戸尻？	脚部に粘土塊面	手先を刻み指を表現		妊娠した腹をかかえる土偶 尖石形態に類似
第239図148	V－7	胸・腕	2.5×5.9×1.9	藤内～井戸尻	頸部と胸部に分割塊面			
第239図148	V－7	胸	5.2×9.8×2.5	曽利	胸部に分割塊面と木芯痕	側腹部に沈線文、紋付文		
第239図150	W－3	胸・腕	4.0×4.7×2.2	狢沢～藤内		腕に貫通孔		
第239図151	W－5	胸	4.9×6.0×2.9	曽利？	胸部に分割塊面			
第240図152	X－4	胸	3.9×2.7×2.2					
第240図153	Y－2	胸	3.5×7.0×2.8	曽利	頸部に分割塊面	正中線、ブラ文		バンザイ土偶
第240図154	Y－3	胸	3.0×6.9×2.4	狢沢～井戸尻	頸部と胸部に分割塊面がある。頸部を掘り込んだソケット接合法			
第240図155	SB－05 No.477	胴・脚	7.5×3.7×2.7	曽利	(No.99と接合)	正中線と側腹部の沈線文		バンザイ土偶
第240図156	SB－05	胴	4.8×4.6×5.1					中空土偶
第241図157	SB－37	腹	4.6×3.8×2.4	井戸尻～		正中線 対称弧刻文		中空土偶
第241図158	SB－43	臀・脚	3.7×2.7×2.4					
第241図159	SB－46	胸～脚	8.5×6.7×6.3	曽利	頸部に分割塊面	正中線、対称沈線文、側腹部に沈線文	沈線、刻目	脚省略の立像土偶
第241図160	SB－79 Y－9	臀	4.2×2.8×2.1	狢沢～新道		側腹部に角押文	角押文	
第241回161	SB－84	臀	3.4×3.3×2.2	新道～藤内		側腹部に三角押文	三角押文	
第241図162	SB－91	胴	5.7×4.2×3.6	曽利		側腹部に渦巻文など		
第242図163	SB－93	胴～脚	3.9×4.0×4.2	井戸尻		膝部に刻目		座産の土偶
第242図164	SB－97	臀	2.8×2.0×3.1					
第242図165	SB－112	臀	4.1×3.1×2.5	曽利		腹部に弧線文、側腹部に円文・弧線文など	沈線	中空円錐形土偶　橿原形態土偶
第242図166	SK－01	胸～臀	2.9×3.9×3.3	曽利？	臀部に分割塊面	側腹部に沈線文と乳房のまわりに沈線文		
第242図167	SK－60	胴	4.7×4.9×4.2	新道～狢沢	胸部に分割塊面	側腹部に三角押文、対称弧刻文		
第242図168	SK－110	臀・脚	6.2×8.0×4.2	曽利	脚付根部に分割塊面	下腹部に沈線文、一部に三角押文	沈線文	
第243図169	SK－143	臀・脚	3.9×2.6×3.3					
第243図170	SK－201	臀	4.5×3.1×4.8	曽利	下腹部に粘土塊面	下腹部と臀部に沈線文	沈線文	
第243図171	B－5	臀	3.9×4.5×2.8	井戸尻～		側腹部に交互刻目、臀部を沈線文	彫刻文と沈線文	
第243図172	B－10	臀	2.8×3.8×3.8	曽利		側腹部に渦巻文、臀部を弧線文		
第243図173	D－9	臀	3.1×2.8×3.5	曽利？				
第243図174	E－5	臀	4.0×4.9×1.8		一部分に分割塊			
第243図175	E－7	臀	5.1×4.8×3.0	曽利？				
第244図176	E－8	臀	5.0×4.0×5.7	狢沢			角押文	中実円錘形土偶
第244図177	E－8	胴・臀	8.0×6.8×5.5	曽利		正中線、側腹部に渦巻文、弧線文、臀部を沈線文	沈線文	
第244図178	E－9	胴・臀	5.5×4.0×3.2	曽利		正中線、側腹部の文様、臀部を沈線文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第245図179	E－9	胴・臀	6.3×5.4×4.5	曽利	（181と接合）胸部に分割塊面	側腹部に沈線文		
第245図180	F－2	臀	4.4×4.1×1.8			無文		
第245図181	F－5	胴・臀	7.3×3.3×3.6	曽利	頸部と胸部分割塊面（179と接合）と木芯痕	側腹部に沈線文	沈線文	
第245図182	F－8	胴・臀	8.1×4.3×4.3	井戸尻～	胴部と脚付根部に分割塊面、脚付根部にソケット接合法	側腹部に三叉文と渦巻文等	沈線文、彫刻文	
第246図183	F－11	胴・臀	8.7×6.9×4.0	曽利	頸部と臀部に木芯痕	側腹部に沈線文		腹部は中空
第246図184	G－7	臀	2.7×3.9×1.6		ネガティブな分割塊面			
第246図185	G－8	胴	5.8×5.8×3.2	井戸尻～	頸部と脚付根部に分割塊面と木芯痕	正中線、側腹部と背部に沈線文	沈線文	
第246図186	I－11	臀	3.9×4.4×1.7		臀部のネガティブな分割塊面			
第246図187	K－2	臀	3.8×3.4×6.9	曽利？		側腹部に渦巻文		中実円錐形土偶　B2
第247図188	K－2 No.59	臀	5.0×5.0×5.0	新道～	脚付根部に分割塊面	側腹部に三角押文	三角押文	
第247図189	K－2 No.642	臀	8.2×4.3×4.8	新道～		対称弧刻文、側腹部に三角押文で渦巻と三角陰刻文	三角押文と三叉文	
第247図190	K－2 No.574	臀	5.8×6.8×3.3	新道～藤内	頸部と脚付根部に分割塊面と木芯痕	対称弧刻文、側腹部に沈線文と三角陰刻文	沈線文と陰刻文	
第247図191	K－6	胴	3.0×3.5×2.4		胴中央部に木芯痕			
第248図192	L－2	臀	9.8×7.4×5.6	井戸尻～		側腹部に沈線文と三叉文	沈線文	中空土偶中をくり貫いている。
第248図193	L－12 No.12	胸～脚	4.5×3.2×2.4	曽利		正中線と臀部に沈線文、紋付文		
第248図194	L－12	臀	3.5×4.1×2.2	曽利		正中線、下腹部に沈線文		
第248図195	M－2 No.86	胴	5.2×4.5×4.6	井戸尻	胴部に粘土塊面、頸部に分割塊面			橿原形態土偶
第248図196	M－7	臀	2.5×2.1×3.0	曽利		側腹部に沈線文		
第248図197	M－8	臀	3.5×2.2×2.8	曽利	臀中央に木芯痕	側腹部に半隆起線文と沈線文		中実円錐形土偶　B2
第249図198	N－2	臀	5.7×4.4×1.9	新道		側腹部に三角押文	三角押文	
第249図199	O－1	臀	7.0×7.6×2.0	曽利	臀部にネガティブな分割塊面	臀部を沈線文		
第249図200	O－2	臀	5.5×3.4×3.4	狢沢～		側腹部に角押文	角押文	
第249図201	P－1	臀	6.6×5.5×4.1	井戸尻	頸部と脚付根部に分割塊面	対称弧刻文、側腹部に沈線文	沈線と半隆起線文	何らかの動作をした土偶か
第250図202	P－2	臀	5.6×4.0×3.4	藤内～井戸尻	臀部片側に分割塊面	対称弧刻文、側腹部に沈線文と交互刻目文	沈線文と交互刻目	
第250図203	P－6	臀	4.3×9.6×5.6	井戸尻	（中空部の指頭圧痕が見える）	半隆起線により、臀部を表出、側腹部に三角文	半隆起線文と三角陰刻文	大型中空土偶
第250図204	Q－16	臀	6.8×5.2×4.3	新道～藤内		側腹部に三角押文による渦巻文と三叉文	三角押文	
第250図205	R－1	臀	3.9×3.3×3.0	新道～藤内	臀部片側に分割塊面	側腹部に三角押文と三叉文		
第251図206	S－1	胴	4.1×4.4×3.8		頸部に分割塊面と木芯痕、臀部は中空	正中線、側腹部は沈線文と渦巻文	沈線文	中空土偶
第251図207	S－4	胴	3.5×3.5×2.1	曽利	臀部に分割塊面	正中線		
第251図208	S－6	胴	3.6×3.9×2.4	曽利	脚付根部に分割塊面、頸部に木芯痕	腹部と側腹部に沈線文	沈線	
第251図209	T－4	臀	4.5×3.9×1.4			正面に変形した玉抱き三叉文	沈線	形状としては土偶として変である。
第251図210	T－4	全身（胸～脚）	5.1×5.9×4.3		頸部に分割塊面	背中と底部に沈線文		
第251図211	T－5 No.1	全身（胸～脚）	6.0×4.3×3.5	曽利	分割されない土偶	正面に逆三角文、側面に渦巻文	沈線文	三角錐形土偶

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第252図212	T－8	臀	4 6×5.6×4.2	新道～藤内	腕の接合部に分割塊、臀部は中空になると思われる。	側腹部に三角押文	三角押文	中空土偶
第252図213	T－8	臀	9.1×5.2×3.9	曽利	頸部と腕接合部に分割塊面	正中線、臀部を沈線文で表出		
第252図214	U－2	臀	5.9×7.1×6.1	井戸尻～曽利		臀部を半隆起線文で表出し、三叉文を加える	三叉文は三角陰刻文	
第252図215	U－3	臀	2.8×2.7×3.5		腕接合部に分割塊面	側腹部に沈線文		
第253図216	U－3	臀	4.0×4.6×5.1	曽利	臀部に分割塊面	臀部の下線を沈線文と集合沈線文		
第253図217	U－4	胴～脚	6.6×4.9×4.7	曽利	頸部に分割塊面	正中線と側腹部に沈線文		底部にえぐり円錐形土偶
第253図218	U－4	臀	3.8×4.2×3.0	曽利		腹部は縦横の沈線文、臀部を沈線で表出		足を研磨している。
第253図219	V－2	臀	3.2×2.7×3.0	新道～藤内	臀部にネガティブな分割塊面			
第253図220	V－3	臀	4.7×3.4×1.9	曽利		側腹部に沈線文		
第253図221	V－4 No8	臀	3.3×2.2×2.9	曽利		側腹部に弧線文	沈線	
第254図222	V－5	臀	4.9×4.8×4.3	新道～藤内		三角押文と三角陰刻文で玉抱三叉文	三角押文、三角陰刻文	異形土偶
第254図223	V－6	臀	3.9×3.3×4.2	曽利		半隆起線で臀部を表出		
第254図224	W－3	胴・臀	4.1×3.5×2.9		頸部と脚付根部に分割塊面	正中線		肥大した腹部妊娠土偶
第254図225	W－3	胴	2.0×5.3×3.5		胴中央に分割塊面	胴部に沈線文		
第254図226	W－5	臀	4.1×4.6×3.1	狢沢～新道		側腹部に角押文	角押文	中実円錐形土偶
第254図227	Y－3	胴	3.7×3.8×2.2	曽利	胴中央部に分割塊面	正中線と側腹部に三条の沈線文	沈線文	
第255図228	Y－3	臀	4.9×3.2×4.8	狢沢～新道	臀部の片側に分割塊面	対称弧刻文、側腹部に三角押文	三角押文	
第255図229	Y－6	臀	7.6×7.4×3.2	曽利	臀部にネガティブ、ポジティブの分割塊面	臀部を半隆起線文で表出		
第255図230	Y－8	臀	4.4×4.8×5.4	曽利		臀部を半隆起線文で表出		
第255図231	表　採	臀	5.9×6.6×5.3	曽利		正中線と側腹部に渦巻文と股下に集合沈線文	股下は集合沈線が施されるのがこの時期の特色	
第256図232	SB－05	脚	5.0×3.5×4.0	曽利		膝を半隆起線による渦巻文で表出		
第256図233	SB－21 Pi＋6	脚	6.3×4.2×8.2					
第256図234	SB－28	脚	3.9×4.6×4.4					
第256図235	SB－29	脚	4.5×3.3×4.5		脚付根部と右脚との接合部に分割塊面	脚外側に弧線文	沈線	
第256図236	SB－37	脚	5.4×4.1×3.8					
第257図237	SB－41 No116	脚	5.1×2.6×3.7			足首に沈線文		
第257図238	SB－49～51. 56.58付近	脚	3.2×2.1×2.2		付根部			
第257図239	SB－71	脚	1.8×3.8×4.6					
第257図240	SB－91	脚	4.7×3.2×5.0	曽利		足首に沈線文と短沈線		
第257図241	SB－94	脚	3.3×3.8×2.3		付根部に分割塊面			
第257図242	SB－100 南北セクション、K－2	脚	5.8×3.4×2.4		左足との接合部に分割塊面、木芯痕			
第257図243	SB－102	脚	3.0×2.7×2.8	新道～藤内		足首に三角押文		
第257図244	SB－109 No15	脚	5.0×4.1×5.8	曽利？		脚側面に弧線文	沈線文	臀部は中空土偶
第258図245	W－6 SK－03	脚	6.0×5.0×7.0					

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第258図246	ＳＫ－284 No.96	脚	3.1×2.7×3.7	曽利	付根部に分割塊面があり、別の粘土塊のネガティブな面がある。	弧線文	沈線	
第258図247	ＳＫ－287	脚	2.1×2.4×4.0	曽利		足に沈線文		中空土偶
第258図248	ＳＫ－391	脚	6.5×4.1×4.1		脚付根部と左足との接合部に分割塊面			
第258図249	Ａ－4	脚	3.9×5.4×4.7					
第259図250	Ａ－4	脚	2.2×3.4×4.5			足の指を刻目で表出		
第259図251	Ｂ－4	脚	3.7×2.9×2.5	曽利		短沈線		
第259図252	Ｄ－4	脚	3.0×4.2×4.7					
第259図253	Ｄ－6	脚	4.1×4.0×3.9					
第259図254	Ｄ－10	脚	2.0×3.1×5.4					
第259図255	Ｅ－7	脚	3.3×2.3×2.7			短沈線		
第259図256	Ｅ－8	脚	4.5×4.7×5.8		左足との接合部に分割塊面			
第260図257	Ｅ－8	脚(左)	5.5×3.4×6.4		付根部と右足との接合部に分割塊面（Ｓ－Ⅴ区 No.4と接合）			赤彩あり
第260図258	Ｅ－9	脚	4.1×3.0×3.9					
第260図259	Ｅ－10	脚	5.2×4.7×2.0	曽利		脚上部に沈線文		
第260図260	Ｆ－3	脚	4.3×4.7×5.4	新道～藤内	足先に分割塊面、かかとに粘土塊面			
第261図261	Ｆ－4	脚(左)	3.6×4.3×4.3		（No. 267と接合）			
第261図262	Ｆ－8	脚	4.0×3.0×4.4	曽利		足首に沈線文		
第261図263	Ｆ－8	脚	4.6×3.2×5.4	曽利	脚接合部に分割塊面、ソケット接合法	足首に沈線文		
第261図264	Ｆ－8	脚	2.8×4.1×3.6					
第261図265	Ｆ－9	脚	3.4×3.4×3.9			足首に沈線文		
第262図266	Ｆ－10 No.1	脚	9.5×9.2×10.4	井戸尻		かかとに渦巻文と三叉文		中空大型土偶の足
第262図267	Ｆ－11	脚	2.0×3.9×4.5		（No.261と接合）			
第262図268	Ｆ－12	脚	4.3×3.3×4.4	曽利		足首に沈線と短集合沈線		
第262図269	Ｆ－12	脚	3.1×2.8×4.3					
第263図270	Ｆ－14	脚	6.5×5.1×6.7	新道～藤内	脚接合部に分割塊面	三角押文による渦巻文を前後に配す	三角押文	
第263図271	Ｇ－1	脚	4.1×2.3×4.8		右足との接合部に分割塊面	膝を円文で表出	沈線文	
第263図272	Ｇ－3	脚	2.4×2.0×1.7					
第263図273	Ｇ－6	脚	1.8×3.6×4.5					
第263図274	Ｇ－7	脚	4.8×3.4×3.6					
第264図275	Ｇ－9	脚(右)	1.9×4.5×7.4		左足との接合部に分割塊面、脚との接合部に木芯痕（276と接合）	足指を刻目で表出	5本指	
第264図276	Ｇ－9	脚(左)	2.1×4.8×7.4		右足と脚との接合部に分割塊面（275と接合）	足指を刻目で表出	5本指	
第264図277	Ｇ－10	脚	3.6×4.5×7.3					
第264図278	Ｉ－11	脚	3.4×1.8×2.5	曽利	臀部との接合部に分割塊面	足首に沈線文、後に渦巻文	短沈線と渦巻文	
第264図279	Ｉ－4	脚	3.8×3.1×5.1			足の裏に網代痕	1本越え1本替り	網代痕の例は稀少
第265図280	Ｉ－8	脚	3.8×2.3×3.1					
第265図281	Ｉ－10	脚	3.6×3.8×7.3	曽利		足首に沈線文		
第265図282	Ｉ－10	脚	1.6×4.1×3.3					
第265図283	Ｉ－10	脚	3.7×3.2×4.1			足首に沈線文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第265図284	I－11	脚	2.2×4.0×4.4					
第265図285	I－12	脚	2.8×3.1×2.8					
第265図286	I－12	脚	3.5×4.0×9.2					
第266図287	J－12	脚	3.9×2.9×3.8		右足と臀部との接合部に分割塊面			
第266図288	K－4	脚	1.9×2.1×2.4					
第266図289	K－8	脚	4.1×2.8×3.2					
第266図290	M－2	脚	3.3×2.9×2.9					
第266図291	M－6	脚	1.7×3.5×4.9				5本指	
第266図292	M－9	脚	6.5×3.7×5.6	曽利	足の後に粘土塊面、臀部との接合部に分割塊面	足首に沈線文と弧線文		
第266図293	N－2	脚	4.3×3.4×5.0	新道～藤内	左足との接合部に分割塊面	三角押文による沈線文		
第266図294	N－2	脚	1.9×5.4×3.5		脚との接合部、ソケット接合法			
第267図295	N－3	脚	4.8×3.9×4.2	狢沢～新道	臀部との接合部に分割塊面	足首に三角押文をめぐらす。	三角押文・角押文	
第267図296	N－5	脚	3.0×3.0×5.8					
第267図297	N－12	脚	3.0×3.9×5.0					
第267図298	O－6	脚	4.1×3.9×3.9		臀部との接合部に分割塊面、ソケット接合法			
第268図299	P－5	脚	3.3×5.6×7.8			足の甲に沈線文		
第268図300	P－5	脚	2.9×2.8×4.3			足先に刻目	5本指？	
第268図301	P－7	脚	5.6×5.6×6.4					
第268図302	Q－2	脚	3.5×3.5×3.9		臀部との接合部に分割塊面と木芯痕			
第269図303	Q－3	脚	6.6×4.9×3.3	曽利	脚付根部に分割塊面、ソケット接合法、足先に粘土塊面	足首に沈線文、弧線文	沈線文	
第269図304	R－1	脚	2.5×2.5×2.8	新道～藤内	脚接合部に分割塊面	足首に三角押文がめぐる。	三角押文	
第269図305	R－2	脚	6.0×4.1×6.5	新道～藤内	脚付根部に分割塊面	足首に三角押文がめぐる。		
第269図306	R－5	脚	3.4×4.6×1.6					疑問のある資料
第269図307	R－7 サブトレンチ内	脚	1.4×1.7×1.7					
第269図308	R－9	脚	2.6×3.5×2.6					
第269図309	S－2	脚	2.7×2.6×2.9					
第269図310	T－2	脚	5.0×4.2×4.1	新道～藤内		足首に三角押文		
第270図311	T－3	脚	6.0×4.5×8.5	井戸尻～曽利		膝に渦巻文、側面に渦巻文	半隆起線文と沈線文	
第270図312	T－5	脚	1.7×3.7×4.0					
第270図313	U－3	脚	4.3×2.3×3.1	曽利	脚付根部に分割塊面			
第270図314	U－4	脚	3.0×2.4×3.7					
第270図315	U－4	脚	3.4×2.4×2.5		付根部に木芯痕			
第270図316	U－5	脚	3.0×3.0×3.3			足首に沈線文		
第270図317	U－6	脚	4.5×3.7×4.6					
第271図318	U－19	脚	3.3×3.2×3.5					
第271図319	U－19	脚	5.5×4.5×6.2	新道～藤内	付根部に分割塊面	足首に三角押文がめぐる。		
第271図320	V－2 No.15	脚(左)	6.9×3.7×3.9	狢沢～藤内	付根部に分割塊面、ソケット接合法（S－Ⅳ区233と接合）	足首に沈線文		S－Ⅳ区No.233
第271図321	W－6	脚	1.6×3.2×3.0		左足との接合部に分割塊面			

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第271図322	W－6	脚	2.8×3.5×4.2					
第272図323	W－7	脚	6.1×5.2×5.2		付根部に分割塊面			
第272図324	W－19	脚	4.9×4.2×8.0	曽利		足首に沈線めぐらし、渦巻文も付す。	沈線文	
第272図325	X－6	脚	3.2×2.2×3.1	曽利		足首に短沈線、足先に刻目	5本指	
第273図326	X－7	脚	6.8×6.9×6.8			足の底をえぐっている。		
第273図327	×－8	脚	3.7×4.0×3.2		付根部に分割塊面			
第273図328	X－11	脚	4.6×4.1×4.5		付根部に分割塊面と木芯痕			
第273図329	Y－4	脚	3.6×3.5×3.5	曽利	足先に粘土塊面	足首に沈線文がめぐる。		
第273図330	Y－9	脚	1.1×1.2×2.3					
第273図331	Y－17	脚	4.8×4.8×6.7		付根部に木芯痕、左足との接合部に分割塊面			
第273図332		脚	4.6×3.0×3.8	曽利		足首に沈線文がめぐる。	沈線	
第274図333		脚	4.2×5.9×6.5		付根部に分割塊面			
第274図334		脚	4.7×3.3×2.9					
第274図335		脚	2.0×2.5×2.1					
第274図336		脚	4.0×4.2×7.2		付根部と右足との接合部に分割塊面	足の甲に沈線文、足の裏にも短沈線	沈線	
第274図337		脚	5.2×2.4×3.0	曽利		足首に沈線文がめぐる。	沈線文と短沈線文	

第11節　土製円盤一覧表

S—Ⅲ区土製円盤一覧表

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	A—17	4.1	1.4	28			47	E—9　3層	3.2	0.7	10		
2	B—5　2層	4.2	1.1	23			48	E—9	3.7	1.1	11		
3	B—6	3.9	1.3	28			49	E—9	3.2	0.7	20		
4	C—1　2層	2.8	1.3	12			50	E—10	3.8	1.1	20		
5	C—2　No.1	5.4	1.0	38			51	E—10　フク土	3.5	0.8	11		
6	C—7	4.0	1.0	21			52	E—10	3.2	1.0	10		
7	C—8　3層	3.6	1.0	18			53	E—11　3層	2.8	0.9	0.8		
8	C—8　3層	5.9	1.7	84			54	E—11　3層	1.8	1.2	0.4		
9	C—8　3層	4.4	1.4	34		ミニチュア土器の底部	55	F—3　1層	4.0	0.9	2.0		
10	D—4　1層	2.9	0.8	9			56	F—4　2層	3.6	1.2	2.0		
11	D—5　2層	2.4	0.7	6			57	F—7	3.4	1.1	1.8		
12	D—7	3.3	1.3	18			58	F—7	3.0	1.2	1.8		
13	D—7	3.6	1.3	19			59	F—7	2.4	1.4	1.4		
14	D—7	3.8	0.8	19			60	F—7	3.6	1.0	1.5		
15	D—7	3.4	1.5	22			61	F—7	3.8	1.3	1.9		
16	D—7　3層	1.8	1.2	5			62	F—7	4.4	1.0	2.4		
17	D—7　3層	4.0	1.5	30			63	F—8　3層	1.9	1.2	0.6		
18	D—8　No.6	3.6	1.2	17			64	F—8　3層	2.8	0.9	0.9		
19	D—8　3層	3.3	1.1	18			65	F—8　3層	2.9	1.0	1.2		
20	D—8　3層	4.8	1.4	42			66	F—8　No.1	3.7	1.3	2.5		
21	D—9　2層	5.3	1.4	43			67	F—8　3層	4.3	0.9	1.8		
22	D—9　2層	4.0	0.8	19			68	F—8　3層	3.1	1.5	1.8		
23	D—9　3層	3.3	1.3	15			69	F—8　3層	4.0	1.3	2.9		
24	D—10　2層	3.2	1.2	16			70	F—8　3層	2.3	1.1	7		
25	D—10　2層	3.6	1.7	26			71	F—9　3層	4.2	1.1	26		
26	E—1　1層	3.8	1.3	23			72	F—9　3層	3.6	1.1	19		
27	E—1　2層	3.0	1.0	15			73	F—9　3層	4.1	1.2	26		
28	E—5　3層	2.7	0.9	10			74	F—9　3層	2.8	1.0	10		
29	E—5　3層	2.9	1.0	11			75	F—9　3層	4.0	1.6	32		
30	E—7	3.7	1.2	25			76	F—9　3層	4.2	1.1	25		
31	E—7　2層	3.9	0.9	20			77	F—9　3層	3.1	1.2	10		
32	E—7	2.5	0.9	8			78	F—9　SB—01	3.0	1.0	14		
33	E—7　3層	3.4	1.3	19			79	F—9	2.7	0.9	9		
34	E—8　2層	3.3	1.0	16			80	F—9　3層	2.4	1.2	10		
35	E—8　3層	4.1	1.1	24			81	F—10　2層	3.2	1.2	14		
36	E—8　3層	3.8	1.3	25			82	F—11	3.9	1.0	22		
37	E—8　3層	3.3	1.2	18			83	F—11　3層 No.5	5.5	1.2	49		
38	E—8　3層	2.9	1.0	13			84	F—11　3層上	6.7	1.2	62		
39	E—8	5.2	1.0	34			85	F—11　3層	2.1	1.0	5		
40	E—8　3層	3.7	1.0	15			86	F—11	5.4	1.0	24		
41	E—8　2層	3.2	1.2	16			87	F—11　3層	2.8	0.9	21		
42	E—8　3層	3.6	1.1	19			88	F—11	2.1	1.0	6		
43	E—8　3層	3.2	1.3	11			89	F—12	2.4	0.9	6		
44	E—9　3層	3.1	1.0	11			90	F—13　2層	3.6	1.2	20		
45	E—9　3層	3.2	1.4	17			91	F—13　第2層下	3.2	1.1	14		
46	E—9　2層	2.9	0.9	10			92	F—14　2層	2.9	1.1	13		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
93	F—16　2層	3.1	1.0	13		
94	G—3	3.8	1.1	21		
95	G—3	3.6	0.9	14		
96	G—3　1層	3.5	1.6	23		
97	G—3	2.7	1.1	20		
98	G—5　3層	3.9	0.9	14		
99	G—6	3.9	0.9	21		
100	G—7　1層	3.5	1.5	11		
101	G—8　3層	4.5	1.1	30		
102	G—8　3層	3.7	1.2	24		
103	G—9　3層	4.1	0.9	20		
104	G—9	3.4	1.5	21		
105	G—10	3.9	1.1	13		
106	G—10　3層	4.2	1.7	30		
107	G—10	2.5	1.1	9		
108	G—11	3.4	1.0	16		
109	G—11	3.0	1.1	14		
110	G—12　1層	2.8	0.7	9		
111	H—3	4.0	1.2	25		
112	H—4	3.5	1.0	16		
113	H—4	2.8	0.7	9		
114	H—4	5.6	1.0	26		
115	H—4	4.3	0.7	15		
116	H—4	4.9	1.3	42		
117	H—9	3.1	1.3	18		
118	H—11　No.4	4.9	1.2	35		
119	H—12	3.4	0.8	13		
120	H—12　No.40	3.3	0.8	14		
121	H—13	4.0	1.0	24		
122	H—15　3層上	3.9	1.3	26		
123	I—3　1層	3.8	1.2	21		
124	I—3　1層	2.3	0.9	5		
125	I—3	2.5	1.0	8		
126	I—3　1層	4.1	1.8	41		
127	I—3　No.142	6.0	1.0	56		
128	I—3	4.0	1.0	20		
129	I—3	2.7	0.9	8		
130	I—4　1層	2.6	1.1	11		
131	I—4　1層	4.2	1.5	32		
132	I—4	4.1	1.2	26		
133	I—4	3.1	0.9	10		
134	I—5	3.3	1.0	14		
135	I—5	2.9	1.0	14		
136	I—6　3層	2.8	1.3	15		
137	I—6　3層	2.8	0.8	9		
138	I—7	2.8	1.3	10		
139	I—7　3層	5.3	1.0	40		
140	I—7　3層	4.5	1.5	29		
141	I—10	3.1	1.1	15		
142	I—11　2層	4.2	1.7	27		
143	I—11	4.5	1.5	34		
144	I—11	4.1	1.3	26		
145	I—11　3層上	2.9	1.0	22		
146	I—12	4.6	1.1	25		
147	I—12	3.0	0.9	10		
148	I—12	3.7	0.8	16		
149	I—12	4.0	1.3	27		
150	I—15　2層	4.3	1.6	29		
151	I—15　2層	3.8	1.4	23		
152	I—16　2層	4.1	1.3	29		
153	J—2　No.668	5.0	1.2	37		
154	J—2	2.9	1.1	11		
155	J—8　3層	3.4	1.2	18		
156	J—8　3層	3.9	1.3	26		
157	J—11　3層	3.0	1.0	10		
158	J—11　No.25	3.2	0.8	11		
159	J—11	2.6	1.1	7		
160	J—11　3層上	3.8	1.0	18		
161	J—12	2.4	0.8	6		
162	J—12　No.12	4.0	1.6	34		
163	J—12	3.3	0.9	12		
164	J—13	3.8	1.5	28		
165	K—2　フクド	4.0	1.1	24		
166	K—2　3層	4.1	1.4	30		
167	K—2　No.—592	3.4	1.1	17		
168	K—2	3.5	1.2	17		
169	K—2	3.0	1.0	9		
170	K—2　3層	3.3	1.3	14		
171	K—3　フクド	4.7	1.3	28		
172	K—3	2.2	0.7	4		
173	K—9　3層	3.6	1.2	18		
174	K—11	2.1	1.3	24		
175	L—5　1層	4.0	1.1	15		
176	L—6	4.0	1.0	11		
177	L—7　2層	3.5	1.4	24		
178	L—7　3層	3.5	1.1	18		
179	L—7　3層	3.5	0.9	15		
180	L—7	4.1	1.3	28		
181	L—8　サブトレ26	3.3	1.4	19		
182	L—8　1層下	2.6	0.7	7		
183	L—10	4.6	1.0	27		
184	L—12	3.5	1.5	19		
185	L—12	3.8	1.4	22		
186	L—16　2層	3.9	1.7	20		
187	M—3	2.7	1.3	9		
188	M—4	3.3	1.4	17		
189	M—5	3.4	1.2	19		
190		3.3	1.2			

番号	出土地	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	土器片の時期	備考
191	M—6 1層	2.7	1.3	14			240	P—5	3.2	1.1	15		
192	M—7 No.32	3.2	1.1	17			241	P—5	3.2	0.9	12		
193	M—7	3.1	1.3	19			242	P—12	4.0	1.3	29		
194	M—10	4.0	1.4	15			243	Q—1	3.2	1.3	18		
195	M—10 3層	2.8	1.2	12			244	Q—2 3層	2.8	1.4	16		
196	M—11 3層	4.0	0.7	16			245	Q—2 3層	3.4	0.7	8		
197	M—11 3層	3.5	0.7	14			246	Q—3 No.1	2.5	1.2	11		
198	N—2	3.3	1.1	16			247	Q—4 No.61	2.7	0.8	10		
199	N—2	3.2	1.1	18			248	Q—4 No.62	3.0	1.1	16		
200	N—4 3層	2.9	0.9	10			249	Q—7	3.3	1.3	17		
201	N—4	4.8	1.1	25			250	R—2 2層	3.6	1.2	21		
202	N—4	3.4	1.1	17			251	R—3	5.0	1.3	42		
203	N—4 2層	3.7	1.0	16			252	R—3 2層	3.6	1.1	19		
204	N—4	4.1	1.7	33			253	R—3 2層	2.9	0.9	10		
205	N—5	2.9	0.9	10			254	R—4	5.6	0.8	23		
206	N—8	5.3	1.0	29			255	R—5	2.6	1.2	11		
207	N—9	3.4	0.9	14			256	R—6 1層	3.7	1.7	30		
208	N—10	3.4	0.9	15			257	R—7 1層	3.4	0.7	11		
209	N—16 2層	4.6	1.1	28			258	R—7 42 43土壙	2.7	0.8	9		
210	O—1 2層	3.2	1.0	16			259	R—7	5.1	1.2	36		
211	O—2	3.3	1.2	17			260	R—7 1層	2.5	0.8	7		
212	O—2	4.8	1.2	32			261	R—7	2.5	1.1	10		
213	O—2	2.9	0.9	12			262	R—7	4.3	1.1	25		
214	O—2	3.4	1.3	16			263	R—7	3.0	1.3	17		
215	O—2	2.8	0.8	9			264	R—8	3.5	1.2	20		
216	O—3	4.3	1.1	19			265	S—2	4.7	1.2	28		
217	O—3	3.0	1.3	16			266	S—2 3層	5.2	1.4	47		
218	O—4 1層	2.8	1.0	11			267	S—3	4.0	1.1	20		
219	O—5 3層	3.7	1.0	18			268	S—3 3層	3.9	1.2	24		
220	O—5	4.0	1.5	25			269	S—3 No.29	1.6	0.6	0.2		
221	O—7 2層	4.2	1.1	24			270	S—5 1層F	3.1	1.1	12		
222	O—10 3層下	2.8	1.5	11			271	T—2 2層	2.4	1.0	7		
223	P—1	4.2	0.9	23			272	T—2 No.24	4.8	1.1	32		
224	P—2 No.156	5.0	1.0	20			273	T—2	3.1	1.0	14		
225	P—2	3.2	1.2	15			274	T—2 1層	3.6	1.3	22		
226	P—2	3.4	1.3	20			275	T—2	2.8	1.2	14		
227	P—2 No.158	3.9	1.3	18			276	T—3	3.4	0.9	13		
228	P—2	4.5	1.1	26			277	T—3	2.9	1.3	14		
229	P—2	3.9	1.0	21			278	T—3	4.0	1.0	19		
230	P—3	2.5	0.7	8			279	T—3 3層	3.4	0.9	14		
231	P—3	3.5	0.8	11			280	T—4	4.3	1.3	35		
232	P—3	3.0	1.0	12			281	T—4 1層	5.2	1.3	40		裏に赤色有り
233	P—3	3.8	1.3	24			282	T—6 No.26	3.2	0.8	11		
234	P—3 3層	2.3	0.8	6			283	T—8	3.7	0.7	15		
235	P—3 No.11	2.6	1.1	11			284	T—14	2.9	1.1	13		
236	P—3	3.4	1.5	21			285	U—2	4.2	0.9	20		
237	P—4 3層	4.9	1.3	39			286	U—2	3.2	1.1	13		
238	P—4	4.5	1.2	30			287	U—2 1層	2.9	1.1	9		
239	P—5	3.3	1.2	17			288	U—2 No.20	3.7	1.0	19		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
289	U—2	2.6	1.0	10		
290	U—2	3.0	0.8	8		
291	U—3	3.7	0.9	15		
292	U—3 3層	5.0	0.8～1.2	25		
293	U—3	2.5	1.1	11		
294	U—3	3.3	1.0	15		
295	U—3	3.6	1.0	18		
296	U—3 3層	3.5	1.1	16		
297	U—3	4.1	1.1	25		
298	U—3 3層	4.5	1.2	32		
299	U—3	3.7	0.7	15		
300	U—4	3.8	1.1	22		
301	U—4	5.8	1.6	68		
302	U—4	3.2	0.8	10		
303	U—4	4.3	1.2	24		
304	U—4	3.7	1.1	14		
305	U—4	3.3	1.5	19		
306	U—4	3.3	1.2	15		
307	U—4	3.2	0.8	10		
308	U—4	4.0	1.0～1.3	24		
309	U—4	3.2	1.0	12		
310	U—4	3.4	0.9	14		
311	U—4	3.9	0.7	13		
312	U—4	4.4	1.5	17		
313	U—5	2.4	1.3	8		
314	U—6	3.3	1.1	15		
315	U—8 1層	3.2	1.3	17		
316	V—2	4.1	1.1	24		
317	V—2	3.3	1.1	15		
318	V—2	4.1	0.9	17		
319	V—2 3層	4.9	1.1～1.4	36		
320	V—3	3.4	1.2	17		
321	V—3	3.3	1.1	18		
322	V—3	3.1	0.7～1.3	12		
323	V—3 3層	2.9	1.1	10		
324	V—3 2層	2.8	1.1	12		
325	V—3 3層	2.8	1.2	13		
326	V—3	3.9	1.1	18		
327	V—3	3.8	1.4	25		
328	V—3 3層	4.0	1.3	25		
329	V—3	3.6	1.3	21		
330	V—3	3.6	1.3	21		
331	V—3	3.1	0.9	11		
332	V—3 №77	3.6	1.1	19		
333	V—3	2.2	0.9	6		
334	V—3	2.6	1.1	9		
335	V—3	3.2	1.0	11		
336	V—3	5.7	1.2	44		
337	V—3 3層	4.2	1.2	22		中心に穴をあけようとした跡有り
338	V—4	3.7	1.1	20		
339	V—4	4.0	1.0	19		
340	V—4	3.0	1.1	14		
341	V—5	5.3	1.1	30		
342	V—5	3.1	0.9	11		
343	V—5	3.4	1.4	18		
344	V—5	3.8	1.2	20		
345	V—5	3.0	0.7	10		
346	V—5	3.4	1.3	18		
347	V—6	4.2	1.3	25		
348	V—6	4.3	1.2	25		
349	V—7	3.4	1.0	16		
350	V—7	3.5	1.2	20		
351	V—7	3.5	1.1	18		
352	V—8	3.3	1.0	10		
353	W—2	2.8	1.0	10		
354	W—2 3層	4.4	1.2	30		
355	W—3 3層	3.7	0.9	15		
356	W—3 3層	3.5	1.0	15		
357	W—3	3.1	1.1	13		
358	W—3	4.3	1.2	22		
359	W—3	2.7	1.2	10		
360	W—3 3層	2.9	1.2	14		
361	W—4	3.4	0.9	15		
362	W—5	2.9	1.0	11		
363	W—5	4.1	1.1	20		
364	W—6	3.8	1.4	21		
365	W—6	4.0	1.1	11		
366	W—6	4.6	1.0	27		
367	W—7	2.8	1.2	12		
368	W—7	4.5	0.9	24		
369	W—10	3.1	0.8	10		
370	W—10	5.2	1.2	40		
371	X—3	3.1	1.1	13		
372	X—3	3.9	1.1	22		
373	X—3	5.0	1.0	30		
374	X—5	3.0	0.8	9		
375	X—8	4.3	0.9	20		
376	X—8	3.1	1.0	12		
377	X—9	4.1	1.3	27		
378	X—9	3.1	1.0	15		
379	X—9 №17	4.4	1.2	18		
380	X—9	3.4	1.4	20		
381	X—9 №82	3.2	0.9	14		
382	X—9 №6	2.6	1.0	9		
383	X—9	2.9	1.3	14		
384	X—12 表採	3.7	1.2	19		
385	Y—3	4.5	0.9	24		
386	Y—3	3.0	1.6	16		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
387	Y—3	2.9	0.9	11			394	Y—9	5.8	1.3	53		
388	Y—4　2層	3.3	1.0	13			395	Y—10	3.2	0.9	11		
389	Y—4	3.4	0.9	15			396	不明	3.2	1.2	17		
390	Y—5	3.2	1.4	15			397	不明	2.3	1.3	10		
391	Y—5	4.1	1.1	20			398	表採	3.5	1.2	18		
392	Y—6	4.2	1.3	28			399	不明	3.4	1.4	22		
393	Y—9	2.6	0.9	9									

釈S—Ⅲ区　土製円盤　土壙出土

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	SK—36　P3	3.1	1.1	15			13	SK—206No.2	3.9	0.9	19		
2	SK—62	3.7	1.2	20			14	SK—217	4.5	1.8	45		
3	SK—99	6.0	1.1	51			15	SK—243	2.8	0.9	10		
4	SK—101, 102 10110 2号土壙	4.4	1.0	25			16	SK—243	4.7	1.3	29		
5	SK—110　No.7	2.9	1.0	10			17	SK—248	3.2	1.3	16		
6	SK—129	4.6	0.7	18			18	SK—252	4.0	1.2	22		
7	SK—129	4.3	1.1	24			19	SK—256	5.1	1.1	31		
8	SK—129	3.4	1.0	15			20	SK—267 P No.18	2.9	1.2	15		
9	SK—139	3.4	1.4	19			21	SK—287	4.1	1.1	20		
10	SK—169	4.9	1.3	41			22	SK—298 P24	3.5	1.0	16		
11	SK—174	4.0	0.9～1.6	20			23	SK—328	2.9	1.0	10		
12	SK—189	2.9	1.0	10									

釈S—Ⅲ区　土製円盤　住居址出土

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	SB—01	4.3	1.0	20			36	SB—41 No.111	3.4	1.3	18		
2	SB—02	3.6	0.9	15			37	SB—41	2.9	1.1	10		
3	SB—02	2.9	0.9	10			38	SB—41	2.5	1.1	10		
4	SB—3 No.5	2.8	1.0	10			39	SB—43 No.71	4.8	0.8	24		
5	SB—05	3.8	0.9	20			40	SB—43	2.8	0.9	10		
6	SB—05	4.9	1.0	30			41	SB—43 ベルト内	3.5	1.1	19		
7	SB—20	4.3	1.0	23			42	SB—43～64	3.8	1.0	20		
8	SB—21	4.5	1.1	28			43	SB—44	3.0	1.4	15		
9	SB—21	4.1	1.0	24			44	SB—44	3.4	1.2	15		
10	SB—25 炉内	3.0	1.4	18			45	SB—45	5.0	1.2	30		
11	SB—26	4.2	1.0	21			46	SB—45	2.5	1.0	7		
12	SB—26	3.1	1.1	15			47	SB—49・50・51・56・58 pit18	3.6	0.8	13		
13	SB—28	3.1	0.7	10			48	SB—53 No.88	4.7	1.1	28		
14	SB—28	3.2	0.7	11			49	SB—57	3.3	1.0	15		
15	SB—28	5.1	1.6	50			50	SB—61付近 P8	3.6	1.3	24		
16	SB—28	3.4	1.1	15			51	SB—61 P—4	3.8	1.2	18		
17	SB—28	4.1	1.2	25			52	SB—62	3.5	1.2	15		
18	SB—29 P41	4.1	3.4	17			53	SB—66	2.7	1.1	11		
19	SB—29	4.1	1.1	20			54	SB—80 206号	3.8	1.3	16		
20	SB—29	3.5	1.4	22			55	SB—84 一括	2.7	0.9	6		
21	SB—29	3.4	0.8	12			56	SB—84 No.80	3.5	0.9	15		
22	SB—34 No.47	3.4	0.7	11			57	SB—84	2.7	0.9	10		
23	SB—34	4.4	1.2	30			58	SB—84 P11	4.4	1.1	29		
24	SB—34	3.5	1.2	11			59	SB—84	3.0	1.2	9		
25	SB—34	3.9	1.1	20			60	SB—94 P10	3.8	1.3	25		
26	SB—34	3.7	0.9	13			61	SB—94	4.0	1.0	22		
27	SB—35 No.29	4.7	1.1	30			62	SB—94	4.3	1.2	25		
28	SB—35 No.47	3.6	1.4	25			63	SB—94	3.2	1.3	16		
29	SB—35 No.68	2.8	0.9	10			64	SB—94 L12	4.3	1.0	21		
30	SB—35 P No.73	3.7	1.1	19			65	SB—94 L12	3.3	0.8	15		
31	SB—37	2.8	1.1	11			66	SB—94 L12	2.7	1.4	15		
32	SB—39	2.9	0.8	9			67	SB—95 P28	5.4	15	58		
33	SB—39 No.17	4.7	1.3	35			68	SB—95 P102	3.6	1.1	18		
34	SB—39	4.2	1.6	36			69	SB—105 P258	3.7	1.3	18		
35	SB—40	2.6	0.7	5			70	SB—105	2.7	9	9		

第12節　土製品一覧表

A　S—Ⅲ区　把手

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	212	1	F—9	把手	何を抽象化したものか不明だが、坂井遺跡、北堀遺跡に類例がある。			
		2	M—2 No.30	把手	ヘビと思われる把手。			
			G—8 No. 6					
		3	G—11 No. 4	把手	おそらく、土偶様のものが付くと思われる。	10.8		
		4	G—9 No.10	把手	イノシシ把手			
	213	5	U—3	把手	ヘビ把手			
		6	F—10 No.16	把手	ヘビ把手			
90								
87		7	F—10	人面把手	井戸尻式期の口辺部に人面把手が付く。			
		8	M—6	把手	筒状の把手			
	214	9	S—Ⅳ区	把手	井戸尻式期のイノシシ、ヘビ合成把手。			
			D—13					
		10	S—Ⅲ区	把手	井戸尻式期の把手。			
			K—13					
			No.169					
	215	11	9—1 No. 9	把手	井戸尻式期のミミズク把手。			
		12	N—Ⅲ区	把手				
			Q—20					
		13	S—Ⅲ	把手	曽利式期の把手、住居址内のピットに埋没			
			SB—21					
			pit 7					
91		14	S—Ⅲ	把手	曽利式期の把手。			
			U—7 No.51—					
90	216	1	P—1	顔面把手	目は切り目	7.2		
		2	E—11	顔面把手	目の部分がもりあがっている。口は省略	6.5		
			No.11					
		3	G—10	顔面把手	顔の部分がない。	5.3		
		4	E—4	顔面把手				
		5	G—10	把手	顔の部分は不明	6.0		
		6	U—4	把手	おそらく人面を表わした把手と思われる。対三角面把手と表現する。人面把手か。			
		7	S—6	把手				
		8	U—5	把手	対三角面把手			
		9	T—4	把手	212図1と同様な把手			
		10	I—12	把手	人面把手か。？	2.5		
	217	11	Y—4	把手	ヘビ把手か。			
		12	E—8	ヘビ把手				
		13	E—11	ヘビ把手				
		14	X—2	ヘビ把手				
		15	T—8	イノシシ把手				
		16	G—9	イノシシ把手				
		17	SB—93	イノシシ				
			周溝	把手				
		18	O—1	把手	キメラ様の把手正面からも下からも顔にみえる。			
		19	Q—3	把手	カエル状の把手			
			No. 1					

B　耳飾など

写真	図	図No.	出土地点	分類	材料	記事	大きさ	備考
89	291	1	S—Ⅲ区 SB—29	耳栓	土		2.0×2.0×2.0	
		2	SB—49～56	耳栓			2.1×2.1×1.9	
		3	SB—46	耳栓		赤彩　曽利新第4段階	1.9×2.2×2.2	
		4	SB—95 No.30	耳栓		新道式期	2.5×2.5×1.8	
		5	SB—95	玦状耳飾		新道式期	4.4×4.4×1.3	
		6	SK—100	耳栓		曽利古～新式期	2.5×2.6×1.6	
		7	D—7	耳栓			3.8×3.8×2.1	
		8	F—9	耳栓			1.5×1.6×1.6	
		9	G—3	耳栓			1.8×1.7×1.6	
		10	R—4	耳栓			1.8×1.6×1.8	
		11	W—3	耳栓			1.7×1.6×1.3	
		12	W—7	耳栓			2.6×2.6×1.7	
		13	X—12	耳栓			2.5×2.3×1.3	
		14	S—Ⅳ SB—18	耳栓		井戸尻式期？	2.8×2.8×1.5	
		15	SB—32 No.61	耳栓		藤内式期	2.6×2.7×1.8	
		16	H—3	耳栓			2.6×2.6×2.2	
		17	表採	耳栓			2.5×2.5×1.7	
		18	N—Ⅲ R—19				1.8×1.8×1.8	
		19	R—19	耳栓			1.8×1.8×1.7	
		20	N—Ⅳ B—19	耳栓			3.4×3.4×1.5	
		21	N—Ⅳ F—17	耳栓			3.2×3.3×2.4	
		22	D—19	耳栓			2.0×2.0×1.5	
		23	D—17	耳栓			2.5×2.4×1.7	
		24	E—20	耳栓			1.8×1.9×1.3	
	292	25	F—19	耳栓			1.9×1.9×1.7	
		26	N—Ⅳ H—20	耳栓			1.8×1.7×1.9	
		27	三口神平表採	耳栓			1.5×1.6×1.6	
		28	三口神平表採	耳栓			1.6×1.7×1.5	
		29	三口神平表採	耳栓			1.2×1.2×1.2	
		30	三口神平表採	耳栓			2.9×2.9×2.0	
		31	三口神平表採	耳栓			2.7×2.5×2.0	
		32	S—Ⅱ区 SB—04 No.59	玦状耳飾		「釈迦堂Ⅰ」未報告分　五領ヶ式期	3.9×3.9×1.2	

写真	図	図No.	出土地点	分類	材料	記事	大きさ	備考
	292	33	N—19	玦状耳飾	土	「釈迦堂Ⅰ」未報告分	4.2×4.3×1.3	
		34	K—21	玦状耳飾	土	「釈迦堂Ⅰ」未報告分	3.8×3.7×0.9	
		35	L—22	玦状耳飾	土	「釈迦堂Ⅰ」未報告分	3.4×3.4×1.1	
		36	L—22	玦状耳飾	土	「釈迦堂Ⅰ」未報告分	1.8×1.9×0.7	

C　有孔薄円盤一覧表

写真	図	図No.	出土地点	分類	材料	記事	大きさ	備考
	293	1	S—Ⅲ C—11	有孔薄円盤	土		2.7×2.4×0.8	
		2	F—9	有孔薄円盤	土		3.8×3.2×0.8	
		3	G—8	有孔薄円盤	土		2.6×2.6×0.5	
		4	J—9	有孔薄円盤	土		2.7×2.3×1.0	
		5	J—4	有孔薄円盤	土		3.8×3.1×0.8	
		6	T—10	有孔薄円盤	土		3.7×3.6×0.8	
		7	W—7	有孔薄円盤	土		2.6×2.3×0.6	
		8	Y—3	有孔薄円盤	土		2.5×2.4×0.6	
		9	S—Ⅳ SK—78	有孔薄円盤	土	周縁部に刻目	3.2×3.0×0.7	
		10	I—2	有孔薄円盤	土	沈線文と刺突文あり	3.2×2.9×0.9	
		11	C—6	有孔薄円盤	土		2.5×2.4×0.4	
		12	SB—20 炉址中	有孔薄円盤	土		2.8×2.4×0.3	
		13	N—Ⅲ J—18	有孔薄円盤	土		2.8×2.7×1.2	
		14	N— E—18	有孔薄円盤	土	短沈線文あり	2.6×2.2×1.2	
		15	不明	有孔薄円盤	土		3.6×3.2×0.5	
		16	S—Ⅱ R—21	有孔薄円盤			3.2×3.1×1.0	
		17	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤	土 土		3.0×2.9×0.8	
		18	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕				2.9×3.0×0.9	
		19	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤	土		3.0×3.2×0.8	
		20	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤	土		3.1×3.2×0.9	
		21	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤	土		2.4×2.4×0.8	
		22	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤	土		2.6×2.7×0.8	

写真	図	図No.	出土地点	分類	材料	記事	大きさ	備考
	293	23	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤			2.7×2.6×0.8	
		24	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤			3.0×3.1×0.7	
		25	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤			2.6×2.6×0.8	
		26	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	有孔薄円盤			2.3×2.5×0.8	
		27	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	土製円盤	土器片利用			
		28	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	土製円盤	土器片利用			
		29	S—Ⅳ区 B—5 底部穿孔埋甕	土製円盤				

土鈴

写真	図	図No.	出土地点	分類	記事	大きさ	備考
89	294	1	SB—34	土鈴	曽利式期	4.2× 4.5× 4.5	
		2	SB—43	土鈴	曽利式期　これは孔がある。	4.1× 4.1× 4.3	
		3	SB—72	土鈴	曽利式期	3.9× 4.0× 3.7	
		4	SB—93 床直	土鈴	曽利式期	3.3× 3.5× 2.0	
		5	SB—93	土鈴	曽利式期		
		6	P—5 No.3	土鈴	曽利式期	3.1× 4.1× 2.3	
		7	H—4		曽利式期	5.1× 4.9× 4.8	
		8	N—Ⅲ区 U—19	土鈴	曽利式期	4.1× 2.5× 2.7	
		9	W—20	土鈴			
89	295	10	S—Ⅳ区 SB—40	土鈴	曽利式期	5.1× 2.9× 3.0	
		11	SB—63	土鈴		3.0× 3.2× 1.5	
		12	SB—63	土鈴	曽利式期		
		13	A—5	土鈴	曽利式期	3.6× 3.9× 3.0	
		14	F—9	土鈴	曽利式期		
		15	H—3	土鈴		5.2× 4.0× 2.2	
		16	H—3	土鈴	15と同一個体か？		
		17	B—10	土鈴	SB—04のものと思われる。	5.5× 5.8× 5.8	
		18	N—Ⅳ F—18	土鈴		4.8× 4.9× 2.5	

E　その他

写真	図	図No.	出土地点	分　類	材　料	記　事	備考
	296	1	S—Ⅲ区	?	土		
			F—7				
		2	S—Ⅳ区				
			D—7				
			SK—166				
		3	N—Ⅳ区				
			D—19			あるいは男根状土製品か？	
		4	S—Ⅳ区				
			SB—53				
		5	S—Ⅲ区				
			1—4				
		6	S—Ⅰ区	有孔球状土製品		「釈迦堂Ⅰ」未報告　有孔球状土製品	
			U—20				
		7	S—Ⅲ区	有孔球状土製品		「釈迦堂Ⅰ」未報告　有孔球状土製品	
			R—4				
		8	L—12	有孔球状土製品		「釈迦堂Ⅰ」未報告　有孔球状土製品	
		9	N—Ⅲ	土球			
			R—19				
		10	S—Ⅳ区	有孔球状土製品			
			F—3				
		11	H—2	有孔球状土製品			
		12	SB—84	土球			
			No.49				
		13	M—2	土球			
		14	N—Ⅳ区	土球			
			D—18				
		15	S—Ⅲ区	土錘			
		16	S—3	土錘			
		17	N—Ⅳ区	?			
			G—18				
		18	S—Ⅲ区	?			
			E—8				
	297	19	D—2	土器片錘			
		20	SB—29	土器片錘		釈迦堂遺跡群で3例にとどまる。	
		21	SⅢ—区	土器片錘			
		22	U—2	浮子	軽　石		
		23	X—5	浮子	軽　石	貫通孔あり	
	298	1	M—6	原石	黒曜石	3箇まとまって出土したものである。石器一覧表でコアとしたものも、この原石を	
		2	M—6	原石	黒曜石	含んでおり、特に分別しなかった。	
		3	M—6	原石	黒曜石		

第13節　粘土塊一覧表

釈迦堂Ｓ—Ⅲ区　粘土塊

No.	出土地点	重さ(g)	備考	No.	出土地点	重さ(g)	備考
1	E—10　3層	43		24	T—10　3層	5	
2	F—5	116	文様有	25	T—10	210	指痕
3	F—8　3層	10		26	U—3	25	
4	F—9	15		27	V—3	12	握ったもの
5	F—10	488	指痕、アジロ	28	V—3	38	握ったもの
6	G—9	140	指痕	29	V—3	30	
7	I—2	155	指痕	30	V—7	55	握ったもの
8	I—10	45		31	X—5	32	
9	N—2	14		32	不明	9	
10	N—11	212		33	Y—10　3層	85	アジロ
11	O—3	31		34	F—10　3層	72	アジロ
12	R—1	120	指痕	35	F—8　No.2	605	指痕
13	R—11　3層	20		36	F—10　No.18	310	アジロ
14	R—11	15		37	SB—01	29	指痕、アジロ
15	R—11	4		38	SB—35	8	アジロ
16	S—6　1層	31	指痕、握ったもの	39	SB—46　No.66	70	
17	T—2	12	指痕	40	SB—65	40	
18	T—2	34		41	SB—94	11	アジロ
19	T—1	29	指痕、握ったもの	42	SB—94	9	
20	T—10　3層	100	指痕	43	SB—94	6	
21	T—10	6					
22	T—10	1		44	SK—88　No.1	30	
23	T—10	2					

第14節　有孔鍔付土器一覧表

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　　様	備　　考
1	A－3	頸	外　孔			
2	C－8.9　3層	頸	内　孔			
3	D－7	口　辺				穴が開いていない
4	D－9　3層		外　孔	有、内・外		
5	E－2	頸				
6	E－7	頸	内　孔			
7	E－7	口　辺	内　孔			
8	E－8　3層	頸	外　孔			
9	E－8　3層	頸				
10	E－9　3層	頸				
11	E－9　3層	頸	内　孔			
12	E－12	頸	内　孔			
13	E－12	頸	内　孔			
14	F－7	頸				
15	F－8	口　辺	外　孔	有、内側		
16	F－8　杭	頸				
17	F－8　2層	頸	内　孔	有、内側		
18	F－10　3層	頸	内　孔			
19	F－10　3層	頸	内　孔			
20	F－11	頸	内　孔	有、内側		F－12（810727）と接合
21	F－11	頸	内　孔	有、内側		F－12（810727）と同一
22	F－12	口　辺	内　孔			
23	F－12	頸	内　孔			
24	F－12	頸	内　孔			F－11（810505）と接合
25	F－16　2層	頸	内　孔			
26	G－9　2層	頸	内　孔			I－4　1層　L－12（810527）と接合
27	G－9　3層	口　辺	内　孔			
28	G－9　3層	口　辺	内　孔			
29	G－15	口　辺	内　孔			
30	H－10	頸	内　孔		縄文	
31	I－3	口　辺	内　孔			
32	I－4　1層	頸				L－12（810527）と接合
33	I－11　No.182	口　辺	外　孔		低い隆帯、沈線	I－12（810728）と同一
34	I－11	頸		有、内側	沈線文	
35	I－12	頸	外　孔		刺突文	
36	I－12	口　辺				
37	I－12	口　辺	外　孔		刺突文・沈線文	接合
38	I－12	口　辺	内　孔			
39	J－4	頸	内　孔			L－12（810527）と同一
40	J－12　3層	口　辺				
41	K－3	頸	外　孔			
42	L－2	口　辺	内　孔		口縁部水平に隆帯に爪形文	
43	L－12	頸				G－9　2層と接合
44	L－12	口　辺	内　孔			
45	M－2	口　辺	内　孔			
46	M－3	口　辺				
47	M－7	口　辺	内　孔			

※　内孔は器壁を貫通する孔のことをいい、外孔は鍔を貫通する孔のこととした。

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　　様	備　　考
48	M－8　2層	口　辺			浅い沈線文	
49	M－9　3層	頸			浅い沈線文	
50	N－2　No.2	口　辺	外　孔			
51	N－2	脚付底部				
52	N－2	頸			縄文	N－Ⅲ　P－20と同一？
53	N－5	口　辺	内　孔			
54	O－2	頸		有、内・外		
55	O－3	口　辺	内　孔			
56	P－1	脚付底部				
57	P－5	口　辺	内　孔			
58	P－8	口　辺				
59	P－8　2層	口　辺	内　孔			
60	Q－3	頸	内　孔	有、内・外		
61	Q－5	頸	内　孔			
62	Q－5	口　辺				
63	R－2　No.9	頸	内　孔			
64	R－7	頸				
65	S－10　2層	頸	内　孔			
66	T－5	頸	内　孔	有、内・外		
67	U－2	頸	内　孔			
68	U－3	頸	内　孔			
69	U－3	頸	内　孔			
70	U－5	頸	内　孔	有、外側	鍔の部分に刻みのある把手	
71	V－1	口　辺	内　孔			
72	V－2	頸	内　孔			
73	V－3	頸	内　孔			
74	V－4	口　辺	内　孔			
75	V－4	口　辺	内　孔			
76	V－4	口　辺	内　孔			
77	V－6	頸	内　孔			
78	W－3	口　辺	内　孔	有、内・外	隆帯2本	V－2、W－5一括と接合
79	W－5	頸	内　孔			
80	W－7	頸				
81	X－1　3層	口　辺	内　孔			
82	X－3	頸	外　孔			
83	X－3	口　辺	内　孔			
84	Y－3	口　辺	内　孔			
85	Y－4	口　辺	内　孔			
86	Y－7	口　辺	内　孔		縄文	2片あり
87	B－2　No.9	口　辺	外　孔	有、内・外	浅い沈線文	B－1一括、S－Ⅲ 表採と同一
88	不明	口　辺	内　孔			
89	O－7	口　辺				P－8と同一
90	SB－44	口　辺	内　孔			
91	SB－55	頸	内　孔	有、内側		
92	SB－66	口　辺	内　孔			
93	SK－23　B	口　辺	内　孔			
94	SK－141	頸	内　孔			
95	SK－328		内　孔			

第15節　台形土器一覧表

No.	出土地点	名称	部　位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大　き　さ	備　考
1	A－4　1層	鍔　付	受面十鍔		凹				
2	C－7	鍔　付	鍔		平		鍔に連続コ字文		
3	C－8　3層	鍔　付	鍔		凹				
4	D－7	鍔　付	脚				沈線又は刺突		
5	D－8	鍔　付	脚	脚に孔					同一
6	E－9　3層	鍔　付	脚	脚に孔					
7	F－6	鍔　付	脚	脚に孔					
8	E－8	鍔　付	脚	脚に孔					接地面磨耗
9	E－10　3層	鍔　付	鍔		凹				
10	F－9　3層	？	盤						
11	F－11	鍔　付	受面＋鍔＋脚		平				接地面磨耗
12	F－11　3層	鍔　付	鍔						
13	G－8　3層	鍔　付	鍔		平				
14	G－8　3層	鍔　付	脚						S－Ⅲ　J－31層(80.10.31)接合
15	G－9　3層	鍔なし	受　面		平				
16	G－9　3層	鍔　付	鍔		平				
17	G－9	鍔　付	脚						
18	G－9　3層	鍔　付	受面十鍔		凹				
19	G－9　1層	鍔　付	鍔		平		鍔に縦きざみ有		
20	H－9	鍔なし	受　面		平				
21	I－2	鍔　付	受面＋鍔＋脚	脚上部に孔	凹				
22	I－3	鍔　付	鍔		平				
23	I－3　1層	鍔なし	受　面		平				
24	I－10　2層	鍔　付	鍔						
25	I－12	鍔　付	鍔						
26	M－11	鍔　付	鍔						
27	N－3	鍔　付	鍔						
28	N－5	？	盤						
29	O－7	？	盤						
30	P－5	鍔　付	脚	脚の中心に孔					S－Ⅲ　P－5（81.3 3.）＋S－Ⅲ　R－4（81.2.20）接合
31	P－5	鍔　付	鍔				鍔に縦きざみ有		
32	S－1　1層	鍔　付	受面＋鍔						
33	S－4	？	盤						
34	S－13	鍔　付	鍔						
35	T－1	鍔　付	鍔						
36	T－2	鍔なし	受面＋脚	脚下部に孔有	平		脚下部隆帯爪形押文、孔の囲り隆帯		S－Ⅲ　N－2同一 N－Ⅲ　W－19 No2（81.5.8）同一？
37	T－2	鍔　付	鍔						S－Ⅲ　S41層接合
38	T－？	鍔　付	鍔						
39	U－2	鍔　付	受面＋鍔		平				
40	U－3	鍔　付	受面＋鍔		平				
41	U－3	？	盤		平				
42	U－3	鍔　付	受面＋鍔		凹				
43	U－3	？	盤						
44	U－4	？	盤						
45	V－1	鍔　付	受面＋鍔		凸				

No.	出土地点	名称	部　位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大　き　さ	備　　考
46	V－1	鍔　付	鍔						
47	V－7	鍔　付	鍔						
48	W－3	鍔　付	受面＋鍔		平				
49	W－6	鍔　付	受面＋鍔＋脚		平				接地面磨耗
50	W－7	鍔　付	鍔						
51	W－？	鍔　付	鍔						
52	Y－6　3層	鍔　付	鍔						
53	Y－6　3層	？	盤						
54	D－7　No.20	鍔　付	受面＋鍔		平				
55	F－7　No.32	鍔　付	受面＋鍔		凹				
56	F－10　No.9	鍔　付	受面＋鍔＋脚		凹		鍔に縦きざみ有	(145)×(88)×57 (164)×(124)×42	N－2 No.139 (81.4.20) 同一、接地面磨耗
57	K－12　No.09	鍔　付	受面＋鍔＋脚		凹			(164)×(124)×42	接地面磨耗
58	L－7　No.8	鍔　付	鍔		凹				L－7 一括接合
59	N－1　No.31	鍔　付	受面＋鍔		平				方形｝同一
60	N－1　No.32	鍔　付	受面＋鍔		平				N－1 方形｝一括同一
61	N－2　No.3	鍔無し	受面＋脚	脚の中心に孔	凹			(160)×(148)×39	裏面焼けただれ
62	N－2　No.95	？	鍔		平				
63	N－2　No.139	鍔　付	鍔		凹		鍔に縦きざみ有		F－10　No.9 (81.3.10) 同一
64	P－2　No.2	鍔　付	受面＋鍔		凹				鍔上面広がる
65	P－2　No.5	鍔　付	受面＋鍔		凹				
66	Q－2　No.137	鍔　付	受面＋鍔		凹		鍔に縦きざみ有		
67	R－1　No.2		脚		脚		孔の囲り隆帯		
68	U－3　No.047	鍔　付	鍔		平				
69	U－4　No.42		盤	盤に孔	平				指を入れる孔
70	V－3　No.55	鍔　付	受面＋鍔		凹				
71	E－10　No.？	鍔　付	受面＋鍔		凹				
72	SB－13	鍔　付	鍔			裏表全体にオコゲ有			
73	SB－28	盤　状	完　形					187×181×22	
74	SB－34　No.1	鍔　付	完　形	脚の中心に孔有　4コ	凹		鍔に縦きざみ有	212×212×(72)	接地面磨耗
75	SB－34　No.3	鍔　付	完　形		凸			204×204×(74)	接地面磨耗
76	SB－34　No.40	鍔　付	受面＋鍔＋脚		凹			(173)×(87)×(40)	接地面磨耗　S-ⅢK-12　No.9 (81.6.19)同一
77	SB－36	鍔　付	受面＋鍔＋脚	脚の上部に孔有　4コ	平	全体にオコゲ有		226×228×(46)	接地面磨耗
78	SB－36　No.1	鍔　付	受面＋鍔＋脚	脚の中心に孔有　6コ	平			203×200×(50)	脚かけている
79	SB－48　No.25	鍔　付	受面＋鍔		平	受面にオコゲ有		(207)×(114)×(36)	
80	SB－97	鍔　付	鍔						
81	SB－105 No.360	鍔　付	受面＋鍔＋脚	脚の上部に孔有	凹				
82	SK－09	鍔　付	受面＋鍔		平	受面に一部オコゲ	鍔の裏面三本刻交互刺突	270×(260)×24	S－Ⅲ　SB－48 No.8＋SⅢN　S－Ⅲ M43層接合
83	SK－47	？	盤						
84	SK－51	鍔　付	受面＋鍔＋脚		平			222×(189)×66	裏面焼けている
85	SK－64	鍔　付	脚						
86	SK－177 No.9	？	盤						
87	SK－188	鍔　付	受面＋鍔＋脚	脚の下部に孔有	凹			210×(146)×(66)	接地面磨耗
88	SK－223	鍔　付	受面＋鍔					191×(168)×(22)	裏面焼けている

第 3 章　S—Ⅳ区

第 1 節　　縄文時代前期の住居と出土遺物

SB—57

B—1に位置する。プラン不明。床面と若干の遺物を検出している。焼土の堆積は住居の中央部ではなく、隅に検出されている。柱穴と確定できるものはほとんどない。

時期的には下吉井式期にあたる釈迦堂Z 2式が出土している。石器はドリル1、ピエス1、打斧4、稜磨石1、磨石7、石皿1、礫器1、フレイク・スクレイパー1、ユーフレ7、黒曜石28.9である。

SB—54

B—4に位置する。壁の一部を検出したのみで、プランは不明。柱穴と思われる小ピットが壁近くをめぐる。ただし、中期の攪乱が著しく全体像は不明。出土遺物も特にない。

SB—59

A—4に位置する。SB—54に接して、住居址の壁の一部を確認したが、全体像は不明。壁の近くをめぐる柱穴列も6箇所検出している。ただし炉址の位置は確定できなかった。この住居址もまた、壁の掘り込み、柱穴列等から前期初頭の住居と考えた。

第 2 節　　縄文時代中期の住居と出土遺物

SB—47、49

B—8に位置する。ここはSB—20、40等の住居址の重複の下に、五領ケ台式期の埋甕炉が検出されたもので、いくつかの焼土ブロックもあり、これも地床炉の一部とも考えられたが、重複が著しくプラン不明な状況では、埋甕炉をもって、住居址と考えざるを得ない。そこで、焼土と埋甕炉から住居址番号を付した。SB—47とSB—49は同じ焼土の中に別個体の埋甕炉をもつもので、別個の住居址番号を付したが、五領ケ台式期の埋甕の調査例からすれば、同一住居とした方がよいと思われる。

SB—48

B—8に位置する。焼土は埋甕炉の中に検出されている。五領ケ台式の口辺部を利用した埋甕炉である。

SB—51

B—8に位置する。これもまた五領ケ台式土器の口辺部を利用した埋甕炉で何故か口辺部を欠いて、波状口縁状にしている。焼土は埋甕炉の中に検出された。

SB—73

H—1に位置する。長径560cm、短径420cmの楕円形プランをなし、炉は埋甕炉で、狢沢式土器の口辺部を利用している。柱穴はP_1、P_2、P_5、P_6、P_7の5柱穴と思われる。柱穴をつなぐ小ピット列が並んでいる。掘り込みも約70cmと深い。

出土遺物は非常に豊富で、床面にほぼ接したかたちで、床全面に出土した。狢沢式土器の新しい部分の一括資料として貴重な例である。なお、注目すべきは、(366図—94～95)の平井出3類Aがある。甲府盆地では八ケ岳南麓を除いて、稀有な例である。

石鏃6、ドリル4、打斧27、稜磨石1、磨石1、ユーフレ10、黒曜石220g、水晶8gである。

SB—06

A—11に位置する。焼土と埋甕が検出された。埋甕は無文の胴部であるが、時期決定に苦しむが、胎土等から、狢沢式土器と思われる。

SB—53

F—1に位置する。長径630cm、短径520cmの楕円形プランをなす。北側に張り出しが付いている。柱穴はP_8、P_{10}、P_{12}、P_{13}、P_{14}、P_3、P_2、P_5、P_7がそれにあたる。また壁にそって小ピット列がめぐる。炉址は埋甕炉で、新道式土器の口頸部を利用している。この口辺部はP_1の底にあり、その上に石皿が置かれ、さらにその上に盤状の自然石があり、さらにその上に口辺部が並んでいた。そして頸部を埋甕炉として利用していた。

住居址の堆積土は、写真図版と断面図にスクリーントーンで図示したように黒色土の1層があり、三角堆積土としては、黄色砂質土がⅡ層として堆積していた。このような明瞭な堆積層は稀有な例で、歴然と時間差が想定され、1層の遺物を№1からナンバーリングし、2層を№1,000からナンバーリングしたが、これらは接合関係があり、この住居はほぼ同時期に堆積したと考えられる。

なお、土器すてばBは、このSB—53の埋没完了後、形成されたものである。よって、(375図95、96)は土器すてばBに属するものである。

石器は石鏃15、石ヒ5、ドリル2、ピエス2、打斧212、磨斧9、稜磨石2、磨石23、石皿7、礫器6、玉石6、角柱2、砥石2、溶岩2、フレイク・スクレイパー7、コア1、黒曜石1303g、水晶17gである。

SB—68

G—1に位置する。南側の壁の掘り込み部のみを検出した住居址で、SB—69に切り込まれ、覆土がわずかに残った住居址で、わずかの土器片から新道式期の住居址と認定した。

SB—69

G—1に位置する。SB—80の上に貼り床された住居址で、柱穴と考えられるものは、P_{15}、P_{30}、P_{27}、P_{42}、P_2、P_5であるが、SB—68に伴う柱穴もあり、またSB—68ないしSB—72に伴うと思われるものもあり、確定はできない。

埋甕炉は(38図—31)でこの直上に32が乗っていた。時期的は新道式期に比定されるものである。石器は石ヒ1、打斧32、磨斧10、礫器2、角柱1、フレイク・スクレイパー2、溶岩1、ユーフレ3、黒曜石70gである。

SB—80

G—1に位置する。SB—69の炉の下にさらに炉が検出されたので、SB—69の床面を剥がすと、SB—69より小型の長径 400cm、短径 340cmの円形プランの住居址が検出された。これをSB—80とした。炉址は新道式土器の破片を利用した埋甕炉である。柱穴はいくつかあるが確定できなかった。石器は打斧1である。

SB—81

G—1に位置する。SB—80の下部に検出された住居で、柱穴は確定できなかったが、6柱穴と思われる。埋甕炉は2個体分の土器を用いている。この中で、（380図—2）は、隣りのSB—53の第1次堆積層（Ⅱ層）と第2次堆積層（Ⅰ層）から出土したものと接合するという事実がある。このことは、SB—53とSB—81では、SB—81が新しいか、少なくともSB—53と同時期ということを事実として示している。つまり住居址が貼り床されて、次々と構築されていることから、SB—53→81→80→69→68ということになる。

SB—32

D—6に位置する。長径620cm、短径520cmの大型プランの住居址である。柱穴は6柱穴で、出入口部施設に伴うと思われるピットが2穴ある。炉址は5角形石囲炉で、北側が開口している。盤状石皿と磨石が、出入口部側に置かれていた。出土遺物は多く、ほぼ床直上に集中していた。この中で（386図—115）は、床直上であるが、まったく別時期のものであるので、別個の土壙が重複していたのではないかと考えられる。

石器は石鏃9、石ヒ3、ドリル12、ピエス5、打斧53、磨斧4、稜磨石1、磨石6、石皿1、礫器1、ハンマー1、玉石2、フレク・スクレイパー2、コア1、ユーフレ57、黒曜石360g、水晶4.2gである。

SB—52

D—2に位置する。長径425cm、短径420cmの円形プランである。炉址は全壊し、窪みと焼土が残る。柱穴はP_2、P_6、P_7、P_{10}がそれである。出土遺物は小片が多く、まとまったものは少ない。

時期的には藤内式期に属するものであろう。石器は礫器9、ドリル3、打斧37、磨斧1、磨石11、石皿2、礫器2、玉石、窪石1、フレイク・スクレイパー2、コア1、ユーフレ9、黒曜石245gである。

SB—18

B—6に位置する。南側の掘り込み部のみを検出したもので、プラン不明。曽利式期のSB—10を調査中。SB—18の石囲炉を検出したものである。石囲炉は5角形で完存し、北側が開口している。柱穴はP_1、P_3、P_7、P_{10}がそれにあたると考えられる。この住居址もまたいくつかの住居址と切り合い関係をもつもので、柱穴の中には別個の遺構に伴うものがいくつかある。

出土土器と炉形態から時期的には、藤内式期～井戸尻式期の時に位置付けられる。石器は石鏃2、打斧4、磨斧1、磨石2、石皿2、礫器1、スクレイパー1、ユーフレ24、黒曜石20gである。

SB—34

D—11に位置する。SB—21と重複関係をもつ住居址である。東側の周溝の一部を確認している。柱穴と思われるものは2個確認できるが、他は不明である。埋甕は井戸尻式期の長胴甕の胴部を利用したもので、他の遺物も含めて、井戸尻式期の住居である。

石器は石鏃2、ピエス1、打斧2、磨石2、ユーフレ1、黒曜石90g、水晶1.9gである。

SB—40

Y—8に位置する。南東側のプランのみ検出している。炉址も不明で、柱穴も確定できなかった。出土遺物も極く少ない。

石器は石鏃1、打斧1、磨石1、ユーフレ1、黒曜石40gである。

SB—60

D—3に位置する。長径450cm、短径380cmの楕円形プランをなす。自然礫の露頭の中に構築された住居址で、炉

址は地床炉のようであるが、一部に石皿を用いている。柱穴は細く小さく浅く、一見前期初頭の柱穴のようである。石器はドリル１、打斧10、稜磨石２、石皿３、溶岩３、ユーフレ２、フレイク・スクレイパー１、黒曜石74９である。

SB—83

Ｊ—４に位置する。長径（425）cm、短径415cmの円形プランである。五角形の石囲炉をもつ。柱穴は３穴は確認できたが、他は不明である。火災住居と思われ、炭化材や炭化物が異常に多かった。

なおＰ$_1$の中に大型の台形土器が埋置されていた。時期的には井戸尻式期に位置づけられよう。ただし、曽利式土器も数点見られたので、あるいは、このSB—83の上に曽利新式第２段階の何らかの遺構があったかとも思われる。

SB—01

Ｂ—６に位置する。方形石囲炉と埋甕２個体を検出している。プランは不明。石囲炉の東北側に両耳壺の埋甕２があり、南西側の出入口部に正位の埋甕が埋設されていた。

出土遺物は炉址の付近から出土したもので、少量である。時期的にも曽利新式第４段階に属するものであろう。石器は石鏃１、打斧１、溶岩１、フレイク・スクレイパー１、ユーフレ25、黒曜石107９である。

SB—02

Ｂ—９に位置する。石囲炉が半壊したものをもって、SB—02とした。炉址の周辺からの出土遺物があるが、時期決定の資料としては不十分である。炉形態から曽利式の終末期に位置するものではないかと考えられる。

石ヒ１、打斧６、磨斧１がある。

SB—03

Ｂ—９に位置する。石囲炉が完存している。出土遺物はやはり時期決定の資料に乏しいが、炉形態が平石を置く、Ｓ—Ⅲ区SB—94と類似するので、曽利古式期の時間的位置が与えられよう。

SB—04

Ｂ—９に位置する。石囲炉が完存する。この石囲炉は平石をたて、石の間に立石をもつもので、時期的にはやはり曽利古式第３段階の時期が与えられよう。また出入口部に（404図—26、27）の埋甕の埋設されていた。26は逆位底部穿孔埋甕で、調査中では胴下半部は空洞であった。また27は正位の埋甕でＸ把手が１ケ所だけ付いている。

石器は石鏃２、ドリル４、打斧１、稜磨石１、磨石１、角柱１、ユーフレ26（水晶１）、黒曜石95９である。

SB—05

Ｂ—６に位置する。五角形の石囲炉で、平石をたてた状態で構築されている。時期は不明であるが、炉形態から曽利古式期の位置が与えられよう。

SB—07

Ｂ—５に位置する。プランは不明だが、石囲炉と柱穴Ｐ$_1$、Ｐ$_2$、ＰＰ$_3$、Ｐ$_7$を確認している。炉址は平石を置く形態のものである。埋甕は浅鉢を正位に埋設したものである。この地区の住居址では炉奥壁部に柱穴痕を確認できないものが多い。曽利古式第３段階。

出土遺物に特殊なものが多い。有孔鍔付土器（406図—９）および土鈴である。

SB—09

A—5に位置する。焼土と石列の一部を検出し、炉址と確定して住居址番号を付したものである。

SB—08

A—5に位置する。SB—09近接して自然礫にそって構築された石囲炉の残欠である。

SB—10

A—5に位置する。長径620cm、短径520cmの楕円形プランである。炉址は埋甕炉で曽利式の長胴甕の口辺部を利用したものである。柱穴はP_1、P_2、P_3、P_5、P_6、P_7が考えられるが、プランと整合しない。

時期的には曽利古式第2段階の位置が与えられよう。土器に長胴甕の破片が多いという特色をもっている。石器は、打斧5、稜磨石1、磨石2、ハンマー1、フレイク・スクレイパー2、ユーフレ8、黒曜石35.9である。

SB—11

A—8に位置する。長径約（570）cm、短径約（440）cmの楕円形プランである。南側をめぐる壁溝からおよそのプランを推定できる。炉址は石囲埋甕炉である。この炉形態はS—Ⅲ区SB—96と類似する。柱穴は4柱穴と思われる。出土土器は曽利古式第2段階のもので、（409図—2）は大木8b式の影響下に作られた土器であるが、撚系文地の部分が大木式土器とは大きく異なるところである。

石器は打斧5、磨石1である。

なお、この住居址にかかわって、2つの壁溝が検出されており、少なくとも2つの住居址が想定されるが、炉址が検出されなかったため、住居址番号を付さなかった。

SB—12

C—9に位置する。少なくともSB—21、24、25と重複する。SB—12は炉石が一部失なわれているが、全形の判明するものである。柱穴は不明である。埋甕（412図—30）は小型のもので、位置的に炉址と近い位置にある。平面図を構成してみれば、これはむしろSB—24に伴う埋甕と考えておいた方がよいかもしれない。

出土遺物は重複関係を示すかのように、時間的な差異が著しい。炉形態からすれば、曽利古式期に置きたいと考える。石器は磨石1、石皿1、溶岩1である。

なお、SB—12の炉の下に逆位底部穿孔埋甕が埋設されていた。

SB—14

B—4に位置する。炉石の残欠とこれに近接した埋甕をもって、住居址番号を付した。これらは位置的に共存するものではなかろう。

SB—17

B—5に位置する。SB—10、18、23、27と重複する。315図に示したように、重複が著しい。SB—17は炉石のみを検出した住居址で、炉奥壁部の石が三角頭状を示し、一段と高いものである。柱穴は確認できなかった。

石器は打斧4、磨石1である。時期的には曽利古式第2段階に位置する。

SB—20

C—7に位置する。長径500cm、短径420cmである。奥壁部には壁にそって石が置かれていた。石囲炉は奥壁側が抜き去られているが、ほぼ形状が判明する。柱穴は確認できなかった。埋甕は、加曽利E系土器である。時期的には曽利新式第1段階の位置に置かれよう。

石器は石鏃4、ドリル1、打斧5、磨石3、ユーフレ46、黒曜石240g、水晶1.6gである。

SB—21

D—10に位置する。石囲炉と壁溝の一部を確認している。石囲炉は平石を置くタイプのもので、炉石を一つ失っている。柱穴はP_1、P_5、P_4、P_3がそれにあたると思われるが、炉址東部のものは不明。埋甕は2個体検出している。曽利式のものが、このSB—21に伴うものと思われる。連弧文土器のものは、別個の住居址に伴うものであろうが、炉址、柱穴とも不詳である。また炉址の東部の別個の壁溝の中に埋甕があり、これは農道によって失なわれた別の住居址の存在を示している。SB—12の炉の下で検出された逆位底部穿孔埋甕もまた別個の住居址の存在を示している。曽利古式第2段階。

石器はドリル1、ピエス1、打斧1、磨石3、玉石1、ユーフレ10、黒曜石50gである。

SB—23

C—5に位置する。方形大型石囲炉が完存する。プラン不明、SB—17、27とも重複する住居址である。位置的に出入口部と思われる部分に埋甕と思われる土器が埋設されていた。ただし、通常の埋甕が、ほぼ形を保って遺存しているのに対して、この埋甕は破損された状態で検出された。あるいは、埋甕とは別個のものの可能性も考えられる。

時期的には、曽利古式期の位置が与えられよう。

SB—24

B—9に位置する。半壊した炉石のみを検出している。SB—12の項でも説明したように重複が著しく、その時期決定に苦しむものである。SB—12の埋甕としたものが、SB—24に帰属する可能性があることを留意しておきたい。時期不詳である。この埋甕をSB—24に帰属するものとすれば、曽利Ⅳ式前後の位置が与えられよう。

SB—25

C—9に位置する。先述したSB—12、24などと重複した住居である。石囲炉の全壊した痕跡を検出したのみである。時期的な判断の根拠となる資料はない。

SB—27

C—5に位置する。石囲炉の全壊した炉址の痕跡のみを検出したものである。SB—7、23などと重複した住居址である。なお、SB—10のプランの中で検出された逆位底部穿孔埋甕（459図—3）は、このSB—27に帰属する可能性があるものである。ただし位置関係のみで、プランや柱穴等の関係が稀薄なため可能性にとどまる。

SB—28・30

D—9に位置する。住居址のほとんどを農道によって失なわれている。南側の壁と壁溝2本、北東側に壁溝を検出している。壁溝が2本あるため、住居址番号を28、30とした。

外側の住居址をSB—28とする。埋甕は壁溝の外側にあり、柱穴はP_1、P_2が認められる。他は不明である。内側の住居址の壁溝の一部が検出されている。柱穴はP_5のみが検出されている。

時期的にはSB—28は曽利古式の時期におかれよう。

SB—33

E—8に位置する。長径（580）cm、短径（530）cmの円形プランをなす。壁溝は南側にめぐる。また一部に壁溝の一部がある。柱穴はP_1、P_2、P_4、P_5などがこれにあたる。炉址は石囲炉が半壊している。なおSK—46とした

ものが、あるいはこの住居址に伴う埋甕であるかもしれない。

時期的に確定できる資料は少ないが、炉形態等も含めて検討すれば、曽利古式第２段階の位置が与えられよう。石斧は打斧２、磨斧１、磨石１、石皿２、ハンマー１、玉石１、黒曜石58ｇである。

なお、このSB—33とほとんど床面のレベルが同じ、五領ヶ台式期のSB—41がある。これは埋甕炉２個体が埋設されている。

SB—41

Ｆ—８に位置する。五領ヶ台式期の埋甕炉２個体をもって、住居址とした。SB—33と床面がほぼ同一面であったため、覆土はまったく失なわれ、柱穴も確定できない。

SB—44

Ｅ—６に位置する。焼土を炉址の痕跡をもって、住居址番号を付した。出土遺物は炉址の周辺に集中し、時期的な判断に足る資料は少ないが、形状を復元できる連弧文土器を考えれば、曽利新式第３段階の位置に置かれよう。ドリル１、打斧２、磨石３、礫器１、黒曜石16ｇである。

SB—50

Ｅ—11に位置する。農道によって半壊した住居址であるが、径約　　ｍの円形プランで、壁溝が全周するらしい。柱穴はＰ１が確定できるのみである。この住居にSK—53、128という遺物の充満した土壙が重なっている。

出土遺物は多様であるが、時期的には曽利古式第２段階の位置が与えられよう。石器は石鏃３、打斧５、稜磨石１、磨石４、玉石１、角柱１、黒曜石92ｇである。

SB—55

Ｐ—３に位置する。長径585cm、短径460cmの円形プランをなす。壁溝は全周し、埋甕はない。柱穴はＰ１、Ｐ２またはＰ３、Ｐ５がこれにあたる。炉址は全壊し、炉石は全部抜き取られている。

出土遺物は非常に豊富で、肥厚口辺土器が多い。特に（430図32、33）は壺形土器で、２個体同時に出土している点は、Ｓ—Ⅲ区SB—71と好対照をみせる。時期的には曽利新式第１段階に位置しよう。石器は石鏃３、ドリル１、打斧11、磨石２、礫器１、ハンマー１、玉石１、ユーフレ１、黒曜石65ｇである。

SB—56

Ｃ—１に位置する。長辺560cm、短辺550cmの隅丸方形プランをなす。この時期の住居址としてはプランが特殊である。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ６、Ｐ４がこれにあたり、Ｐ３、Ｐ５は袋状をなすので、貯蔵穴であると考えられる。炉址は全壊し、炉石はほとんど抜き取られている。壁溝は出入口部を除いて、全周する。出入口部にやや張り出したピットも認められる。埋甕は正位底部穿孔埋甕で、釈迦堂遺跡群では唯一の例である。

出土遺物は非常に豊富で、肥厚口辺系土器や（435図102、103）のようなゆわいる弧線文系土器の出土がある。時期的には曽利新式第１段階に位置しよう。石器は石鏃４、打斧13、磨斧２、磨石13、石皿３、ハンマー３、溶岩１、フレイク・スクレイパー４、ユーフレ47、黒曜石56ｇ、水晶1.8ｇである。

SB—61

Ｇ—３に位置する。大きな焼土の範囲と石列を検出した。住居址の炉としてはやや大きいが、住居址番号を付した。時期不詳である。

SB—62

H—8に位置する。長径525cm、短径430cmの楕円形プランをなす。炉址は失なわれており、住居址の北隅に焼土がある。壁溝は住居址の南西側にめぐる。柱穴はP1、P2がこれにあたり、他は不明である。時期的に曽利式期の終末に位置しよう。石器は打斧1である。

SB—63

G—1に位置する。SB—68、69の項でも、触れたように、重複が著しいため、プランが不明確であり、出土遺物にも、SB—68、69、80、81等が混入している。炉址はほぼ完存し、埋甕はない。壁溝もない。

時期的には曽利古式第3段階の位置が与えられよう。石器は打斧17、磨斧2、磨石6、ハンマー2、玉石1、ユーフレ1、黒曜石89.9である。

SB—64

H—2に位置する。長径600cmの楕円形プランをなすと思われる。石囲炉は完存し、これは平石を置くタイプのものである。柱穴はP7、P5、P13、P14が確認できる。埋甕は2個体並んで検出され、その中に骨片が認められた。ここで問題となるのは、埋甕の位置がSB—64のそれとしては位置にあまり1炉に近い位置にある点と、調査後の床面の精査で判明したSB—64と重複する壁溝があり、位置的には、この壁溝とこれらの埋甕は位置に合致するように思われる。ただし、この壁溝のみの住居址には、住居址番号を付していない。仮にSB—64-2としておきたい。

時期的には曽利古式第1段階に位置すると思われる。石器は打斧10、磨斧1、磨石2、ハンマー2、玉石1、ユーフレ1、黒曜石89.9である。

SB—65

G—1に位置する。SB—63とほぼ同時期の重複がありこれにSB—73、SB—81、80、68、69とも重複しているため、柱穴は不確定である。炉址は完存し、これは石をたてるタイプのものである。埋甕・壁溝は検出されていない。この住居址の床面には写真図版で示したように、焼土の中に頭蓋骨が検出された。ただし骨はほとんど風化しており、取り上げ後は小片に帰している。一種の廃屋墓と考えられる。

時期的には曽利古式第2段階に位置するものと思われる。石器はドリル3、ピエス1、打斧10、磨石2、ハンマー1、角柱1、黒曜石36.9である。

SB—66

H—2に位置する。プラン不明、炉石のみを検出して、住居址番号を付した。若干の焼土が認められた。時期不詳。

SB—67

H—3に位置する。長径620cm、短径推定610cmの楕円形の大型プランをなす。炉址は半壊している。柱穴はP4、P6、P7、P11、P15、P19の6穴が考えられるが、壁溝も2本認められることから、建て替えが考えられる。壁溝は2本ともほぼ全周するらしい。

出土遺物は意外と少なく、時期決定の資料に足るものはないが、曽利古式の位置に置かれよう。石器は石鏃3、石ヒ1、ドリル1、打斧33、磨斧3、稜磨石1、磨石3、石皿1、玉石1、フレク・スクレイパー1、スレイパー1、ユーフレ5、黒曜石152.9である。

SB—70

H—1に位置する。SB—65のセクションベルトの中に検出された埋甕と、これと位置的にもレベル的にも合致する炉址の残欠をもって、SB—70とした。時期的には曽利古式第1段階に位置しよう。

SB—71

I—2に位置する。石囲炉の残欠を検出したのみである。焼土は特に検出されなかった。なお、この炉址の南西に埋甕が2個体直列して検出されたが、この住居址とは異時期のものである。

SB—72

H—2に位置する。これも石囲炉の残欠を検出したのみに留まっている。この周辺にはSB—66、70、71、72と石囲炉の残欠がいくつか認められた。

SB—74

F—8に位置する。焼土と炉石の抜き取り痕をもって、住居址番号を付した。時期不詳。

SB—75

F—2に位置する。SB—67、64、68、69等と重複関係にある。出入口部に曽利古式と思われる長胴甕の口頸部を利用した埋甕をもつ。柱穴は確定できなかったが、SB—67、64の中に、この住居址と対応する柱穴があり、4～5柱穴と思われる。壁溝はSB—67の中にその痕跡が認められる。

時期的には曽利古式第1段階としてよいと思われる。石器は打斧6、磨斧1、石皿1、ユーフレ1がある。

SB—76

E—7に位置する。E—7にある焼土の範囲をもって、炉址と確定し、住居址番号を付した。いずれにしても攪乱の著しい部分でもあり、不確定要素が多い。時期不詳。

SB—77

G—10に位置する。長径440cm、短径315cmの楕円形でプランをなす。炉址と思われる部分はなく、住居址の北隅に焼土の範囲が認められた。柱穴と思われるものはP_1、P_2、P_3、P_4である。焼土はあるもの、炉址が未確なので、住居址としての根拠は薄いものと思われる。

SB—78

G—7に位置する。長径（425）cm、短径415cmの円形プランをなす。方形石囲炉が完存する。柱穴はP_1、P_2、P_3、P_7、P_5およびP_6が考えられる。この住居址の出入口部には立石と石蓋のある加曽利E_3式の埋甕が検出された。立石のある住居址は、先に述べたS—Ⅲ区SB—72があるのみである。また石蓋のある埋甕は長野県方面にはよく見られるものの山梨県内では初めての発見である。ただ長野県内のものが鉄壁石の薄板状の石を用いるのに対して、これは花崗岩のやや厚い平石を用いている。これらの立石、石蓋、埋甕という要素が重なった住居址は、釈迦堂遺跡群のみならず県下の該期の住居址としても、特異なものである。

また、S—Ⅲ区SB—72の立石にやや問題はあるものの、集落の両端に、立石をもつ特異な住居址が存在することは、注目しておきたい。

時期的には、曽利新式第4段階の新しい部分に位置しよう。石器はピエス1打斧3、磨斧1、磨石1、石皿2、玉石1、ユーフレ1、フレイク・スクレイパー1、スクレイパー4、黒曜石27.9である。

SB—77—B

F—8に位置する。焼土の範囲と炉石の抜き取り痕および、まわりの柱穴群から、住居址の存在を確定した。時期不詳であるが、おそらく曽利式期に属するものであろう。

SB—82

G—8に位置する。長径370cm、短径350cmの小型円形プランをなす。炉址と思われる焼の範囲と石列の残存は、住居址プランに比べて、やや大きい。また柱穴はP_1、P_2、P_3、P_5がそれにあたるが、住居址プランと、よく対応しない。時期的にも不確定である。石器は、打斧2、磨石1、黒曜石38gである。

なお、この住居址と重なって、壁溝の一部と思われる溝状の掘り込みもあり、なお、また別個の住居址の存在を想定させる。

第3節　埋甕と不明遺構

埋甕

B—7に位置する埋甕は（459図—1）および（335図）は井戸尻式の埋甕で、焼土は検出できなかったものの、埋甕炉ではないかと思われる。なおこの埋甕とほぼ位置を同じくして、頸部に格子目文を持つ曽利式の埋甕の残欠が存在したが、これは図化していない。これらを総合すれば、ここに新たに井戸尻式期の住居址と曽利式期の埋甕に対応する炉址はないものの、都合2軒の住居址の存在を想定できる。

A—7に位置する埋甕は（334図）と（460図—13）である。これもまた曽利式期の埋甕の一種と考えられるが、これに対応する炉址の検出はなく、とりあえず単独の埋甕と考えておく。

F—6に位置する埋甕は（334図）と（460図—11）である。逆位の埋甕である。この埋甕とほぼ対応する焼土の範囲も図化した。柱穴等の要素に欠けるが、これは住居址と考えてよいもの考えるが、焼土と埋甕の位置関係が逆転しており、住居址と認定するに至ってない。

G—5に位置する直列する2個体の埋甕（460図6、7）および（334図）は、これも住居址と考えてよいものであるが、対応する炉址がない。この地区は、土質の関係上住居址の検出が進まず、この他にも、新道式期の新しい部分の土器がまとまって検出されており、何らかの遺構の存在が想定された。

H—1に位置する直列する2個体の埋甕（460図14、15）および（331図）は、これも住居址に伴うものと考えられるが、対応する炉址は検出されていない。

なお、この他に図化してないがA—17で五領台式期の埋甕炉2基を検出している。

SX—01

A—3に位置する。敷石住居址の一部であろう。敷石と縁石が検出されている。縁石の一部に石棒片が利用されている。規模がやや小さい点からすればS—1区SX—01と近似する遺構で、住居址とは別の存在となる。

SX—03

E—5に位置する。これもまた柄鏡形敷石住居址の一部である。おそらく出入口部である柄部のみ敷石したものであろう。一部空白部があるのは、あるいは何らかの施設とも考えられる。

第 4 節　土器すてばC

土器すてばC

初めG—8に土器片が集中し、住居址覆土上層部のものと判断し、住居址番号を付し、土器を取り上げたが、調査を進めるに従って、土器片の分布範囲は広く、下層に何らの遺構もなく、住居址は認定できず、土器すてばCとすることにした。

各々の土器すてばの性格については別に触れるが、この土器すてばCは他の土器すてばと違い、中期の後半の部分のほぼ復元でき得るものが多いと言える。また土器すてばの範囲も極く狭い範囲である点、特の土器すてばと大きく異なる。

なお、この土器すてばに伴って、石列がみられるが、これが、何らかの遺構であるとは確定できなかった。

第５節　住居址一覧表

Ｓ—Ⅳ区　住居址一覧表

ＳＢNo.	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
ＳＢ—01	Ｂ—６			方形石囲炉	完存	正位２	土偶	炉の北と出入口部に埋甕
ＳＢ—02	Ｂ—９			石囲炉	側石を欠く			
ＳＢ—03	Ｂ—９			長方形石囲炉	完存		土偶	
ＳＢ—04	Ｂ—９			方形石囲炉	完存	逆位底部穿孔・正位		逆位と正位の埋甕が直列
ＳＢ—05	Ｂ—６			五角形石囲炉	完存			
ＳＢ—06	Ａ—11			埋甕炉	完存			下層の同期の埋甕炉を切っている。
ＳＢ—07	Ｂ—５	(520)×(480)		方形石囲炉	完存	正位	土鈴・土偶	浅鉢の埋甕
ＳＢ—08	Ａ—５			石囲炉	側石のみ			
ＳＢ—09	Ａ—５			石囲炉	全壊			
ＳＢ—10	Ａ—５	620 × 520		埋甕炉	完存		土偶	
ＳＢ—11	Ａ—８	(570)×(440)		石囲埋甕炉	完存		大木系土器・土偶	
ＳＢ—12	Ｃ—９			石囲炉	前石の一部を欠く	正位	土偶	あるいはＳＢ—24の埋甕か
ＳＢ—13	◎							
ＳＢ—14	Ｂ—４			石囲炉	側石のみ	正位		別個の遺構に伴うものであろう。
ＳＢ—15	◎							Ｂ—４に落ち込みはあったが住居址ではなかろう。
ＳＢ—16	◎							Ｇ—８を中心とした土器すてば
ＳＢ—17	Ｂ—５			石囲炉	完存		土偶	奥石が三角頭状に高い
ＳＢ—18	Ｂ—６			五角形石囲炉	完存		土偶	
ＳＢ—19	◎							
ＳＢ—20	Ｃ—７	500 × 420		方形石囲炉	奥石を欠く	正位	土偶	
ＳＢ—21	Ｄ—10	(580)×(520)		方形石囲炉	側石を欠く	正位２	土偶	連弧文土器の埋甕は別個の住居址のもの
ＳＢ—22	◎							
ＳＢ—23	Ｃ—５			方形石囲炉	完存	不明		埋甕とは疑問もある。
ＳＢ—24	Ｂ—９			石囲炉	側石を欠く			ＳＢ—12の埋甕が当住居址のものか
ＳＢ—25	Ｂ—９			石囲炉	全壊			
ＳＢ—26	◎							
ＳＢ—27	Ｃ—５	600 × 510		石囲炉	全壊			
ＳＢ—28	Ｄ—９			不明	農道で壊滅	正位		
ＳＢ—29	◎							
ＳＢ—30	Ｄ—９							ＳＢ—28の中にある住居址
ＳＢ—31	Ｃ—８	620 × 520		不明	全壊			
ＳＢ—32	Ｃ—５	(580)×(530)	楕円形	五角形石囲炉	完存		土偶	
ＳＢ—33	Ｅ—８	(470)×(450)	円形	石囲炉	奥側石を欠く		土偶	
ＳＢ—34	Ｄ—11			埋甕炉	完存		土偶	
ＳＢ—35	◎							
ＳＢ—36	◎							
ＳＢ—37	◎							
ＳＢ—38	◎							
ＳＢ—39	◎							
ＳＢ—40	Ｙ—８						土偶	
ＳＢ—41	Ｆ—８			埋甕炉	完存			ＳＢ—33と重複した２個体の埋甕炉
ＳＢ—42	◎							

SBNo.	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—43	◎							
SB—44	E—6			石囲炉	全壊		土偶	
SB—45	◎							
SB—46	◎							
SB—47	B—8			埋甕炉				SB—49とは同一住居であろう。あるいはSB—47、48、49、51は同一住居か
SB—48	B—8			埋甕炉				
SB—49	B—8	480 ×(440)		埋甕炉				
SB—50	E—11		円形	方形石囲炉	農道で半壊		土偶	
SB—51	B—8	425 × 420		埋甕炉				
SB—52	D—2	630 × 520	円形	石囲炉	全壊		土偶	
SB—53	F—1			埋甕炉			土偶	最深の住居址
SB—54	B—4						土偶	ほぼ全壊した前期頭の住居址
		485 × 460						
SB—55	P—3	560 × 550	円形	石囲炉	全壊			
SB—56	C—1	(430)×(350)	隅丸方形	石囲炉	全壊	正位底部穿孔	土偶	
SB—57	B—1		楕円形	地床炉				前期初頭の住居址
SB—58	◎							
SB—59	A—4							前期初頭
SB—60	D—3	450 ×(380)					土偶	炉に石皿を利用
SB—61	G—3							
SB—62	H—8	525 × 430	楕円形	不明				
SB—63	G—1	(510)×(550)	楕円形	石囲炉	側石の一部を失う。		土偶	
SB—64	H—2	600 ×(550)	楕円形	石囲炉	完存	正位2		2個体直列して検出
SB—65	G—1	(530)× 440	楕円形	石囲炉	完存		土偶	
SB—66	H—2			石囲炉	形状不明			
SB—67	H—3	620 ×(610)	円形	石囲炉	側・奥石を欠く		土偶	
SB—68	G—1	(550)× 520						
SB—69	G—1	(420)×(420)	楕円形	埋甕炉	完存		土偶	
SB—70	H—1			石囲炉	前石のみ残存	正位		
SB—71	I—2			石囲炉	側・奥石を欠く			
SB—72	H—2			石囲炉	側石のみ残存			
SB—73	H—1	560 × 420		埋甕炉				
SB—74	F—8			石囲炉				
SB—75	F—2			不明		正位	土偶	
SB—76	E—7			不明				
SB—77	G—10	440 × 315	楕円形	不明				
SB—78	G—7	(425)× 415	円形	方形石囲炉	完存	正位		立石・石蓋・埋甕あり。
SB—79				石囲炉	全壊			
SB—80	G—1			埋甕炉				
SB—81	G—1			埋甕炉			土偶	
SB—82	G—8	370 × 350	円形	石囲炉				
SB—83	J—4	(425)× 415	円形	五角形石囲炉	完存		土偶	ピットに台形土器

第6節　土壙一覧表

S—Ⅳ区

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－01	Y、A－9		曽利式土器、稜磨石	曽利式土器	
	SK－02	A－5、B－5	×　×19	曽利式土器、溶岩	曽利式土器	
	SK－03		×　×33			
	SK－04	◎				
	SK－05	B－6、C－6	109×75×	曽利式土器3	曽利式土器3	
	SK－06	E－9	×　×65	曽利式土器、打斧	曽利式土器	
	SK－07	F－10	132×124×30			
	SK－08	F－10	×　×30	曽利式土器、台形土器、打斧	曽利式土器、台形土器	
	SK－58	◎				
	SK－59	F－11	95×71×			
	SK－60	F－11	77×61×62	打斧		
	SK－61	F－11	×　×27			
	SK－62	F－11	×　×41			
	SK－63	F－11	×　×15			
	SK－64	F－11				
	SK－65	G－11	173×115×40	粘土塊		
	SK－66	G－11	79×64×			
	SK－67	G－11	133×76×			
	SK－68	G－11				
	SK－69	G－11	50×50×			
	SK－70	◎				
	SK－71	◎				
	SK－72	G－11	82×71×	打斧		
	SK－73	G－11	108×70×33			
	SK－74					
	SK－75	C－5	×　×105	打斧2、曽利式土器、ユーフレ2	曽利式土器	
	SK－76	B－10	×　×48	石鏃		
	SK－77	B－10	×　×26			
	SK－78	E－9	213×96×78	焼土、有孔薄円盤、曽利式土器、打斧1、磨石1	曽利式土器	
	SK－79	◎				
	SK－80	○		土製円盤	土製円盤	
	SK－81	B－10	×　×61	焼土、打斧2、磨石1		
	SK－82					
	SK－83	C－7、C－8	110×77×63	井戸尻式土器、ミニチュア、土製円盤	井戸尻式土器、ミニチュア、土製円盤	
	SK－84	◎				
	SK－85	B－7	70×45×32			
	SK－86			打斧1		
	SK－87、88	E－6		曽利式土器、磨石、礫器	曽利式土器	
	SK－89	A－3	97×91×45			
	SK－90	A－3	193×111×21	ユーフレ		
	SK－91	A－3	65×63×16	土製円盤	土製円盤	
	SK－92	C－7	56×50×			
	SK－93	B－7、C－7	104×83×66			
	SK－94	C－7	80×77×50			
	SK－95	D－7	60×42×	石ヒ		
	SK－96	C－7	52×40×			

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－97	C－7	76×47×	打斧		
	SK－98	C－7	58×38×			
	SK－99	C－7				
	SK－100	C－7	46×30×			
	SK－101	C－7	×　×45			
	SK－102	C－7	×　×43			
	SK－103	C－7	×　×52			
	SK－104	◎				
	SK－105	A－4	×　×32			
	SK－106	A－4	×　×16			
	SK－107	A－2	76×69×			
	SK－108	A－2	×　×22	玉石		
	SK－109	A－2	×　×25			
	SK－110		×　×24			
	SK－111	A－2	×　×14			
	SK－112	◎				
	SK－113	A－3	×　×24			
	SK－114	A－2	84×76×79	骨片、狢沢式土器、石鏃、ドリル、打斧、磨石、石皿、玉石、ユーフレ	狢沢式土器	
	SK－115	F－6	×　×28			
	SK－116	F－6	×　×29			
	SK－117					
	SK－118	E－5	×　×42			
	SK－119	A－1	114×94×24	炭化物焼土、石鏃		
	SK－120	B－7、C－7	×　×47			
	SK－121		158×120×48			
	SK－122	B－1	×　×85			
	SK－123	E－7	95×91×19			
	SK－124	B－1	47×32×11			
	SK－125	B－1	64×50×38			
	SK－126	B－1	95×73×16			
	SK－127	B－4	113×103×27	台形土器、打斧、磨石		
	SK－128	E－11	105×90×41	曽利式土器7個体以上、打斧	曽利式土器7個体	
	SK－128－2	F－4	142×125×61			
	SK－129	E－11	148×112×68			
	SK－130	◎				
	SK－131	F－4	×　×82			
	SK－132	F－4	×　×75	曽利式土器	曽利式土器	
	SK－133	F－4	110×99×			
	SK－134	◎				
	SK－135	F－4	100×76×50	生粘土、水煙把手、打斧、石ヒ		
	SK－136	D－4	103×86×73			
	SK－137	D－4	96×72×23	藤内式土器、フレイク・スクレイパー	藤内式土器	
	SK－138	D－5	87×68×48	曽利式土器、有孔鍔付土器	曽利式土器、口辺	
	SK－139	E－2	195×150×43	井戸尻式土器、土偶、粘土塊、フレイク・スクレイパー1、溶岩、打斧2	井戸尻土器	
	SK－140	D－3	104×101×37	スクレイパー		
	SK－141	D－4	97×61×15	土製円盤	土製円盤	
	SK－142	C－3	128×115×44	打斧、土製円盤	土製円盤	

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－143	C－3	75×70×20			
	SK－144	C－3、C－4	169×151×30			
	SK－145	E－5	×　×46			
	SK－146	G－1	168×102×	耳栓、打斧3、磨斧、稜磨石、磨石3、土製円盤	耳栓、土製円盤	
	SK－147	H－3				
	SK－148	H－4	65×63×	打斧、石皿		
	SK－149	H－4	39×26×			
	SK－150	H－4	46×44×			
	SK－151	H－4	84×75×			
	SK－152	H－4	144×132×			
	SK－153	H－5	60×39×			
	SK－154	H－4	75×43×			
	SK－155			磨斧、砥石		
	SK－156	G－4	76×	石鏃2、土偶、打斧	土偶	
	SK－157	G－4	134×112×83	焼土、石ヒ		
	SK－158	G－4	×　×19	打斧1		
	SK－159	F－4、G－4	×　×60	曽利式土器、有孔鍔付土器		
	SK－160	F－4	×　×48	打斧4、磨石		
	SK－161	G－1	91×83×129			
	SK－162	F－8	90×51×42	骨片多量		
	SK－163	G－4	51×42×63			
	SK－164	G－4	×　×54			
	SK－165	G－4	×　×59			
	SK－166	G－4		石鏃		
	SK－167	G－4		磨斧、ハンマー、ユーフレ		
	SK－167－2	H－1	112×107×	焼土		
	SK－168	H－1、H－2	95×70×	石皿		
	SK－169	G－4	94×62×	打斧		
	SK－170					
	SK－171	C－4	143×135×112	石鏃、石ヒ、打斧4、磨石2、ユーフレ		
	SK－171－2	N－Ⅳ G－20				
	SK－172	H－1	65×57×			
	SK－173	H－10	116×95×	石鏃		
	SK－174	H－10	131×124×	打斧		
	SK－175	F－1、G－1	×　×70	石ヒ、新道式土器、ミニチュア、磨石、石皿		
	SK－176	G－1	×　×109			
	SK－177					
	SK－178	G－5	115×48×	石皿、新道式土器、土偶、台形土器、土製円盤	新道式土器、土製円盤	
	SK－179	◎				
	SK－180	◎				
	SK－181	◎				
	SK－182	◎				
	SK－183	G－5	106×85×	打斧5、土製円盤	土製円盤	
	SK－184	G－5	88×75×	台形土器		
	SK－185	H－3、H－4	234×145×	打斧、土製円盤	土製円盤	
	SK－186	H－4	75×65×	打斧		

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－187	H－3				
	SK－188	E－1	77×55×31	打斧6、コア、土製円盤	土製円盤	
	SK－188－2	I－4				
	SK－189	E－1	×　×52			
	SK－189－2	I－4	101×101×			
	SK－190	E－1	×　×73	有孔鍔付土器、打斧		
	SK－190－2	I－4	58×42×			
	SK－191	E－1				
	SK－191－2	I－4	43×40×			
	SK－192	E－1		有孔鍔付土器		
	SK－192－2	I－4	55×54×			
	SK－193	I－4	49×42×			
	SK－193－2	G－1	129×55×			
	SK－194	I－4	45×35×			
	SK－195	H－2	105×83×	打斧2		
	SK－196	H－2	53×52×	角柱		
	SK－197	I－3	110×96×	打斧		
	SK－198	I－3		新道式土器、打斧、磨石	新道式土器	
	SK－199	I－3		粘土塊		
	SK－200	I－3		打斧2、石皿		
	SK－201	I－3	67×66×	打斧2		
	SK－202	I－3	76×58×			
	SK－203	I－3				
	SK－203－2	I－3	53×49×			
	SK－204	I－3				
	SK－205	I－3				
	SK－206	J－3		打斧、磨石		
	SK－207	J－3				
	SK－208	J－3				
	SK－209	J－3				
	SK－210	I－2				
	SK－211	I－2、I－3				
	SK－212	I－2		土製円盤	土製円盤	
	SK－213	I－3	95×43×	土偶	土偶	
	SK－214	I－2				
	SK－215	I－2				
	SK－216	J－3				
	SK－217	I－2	47×45×			
	SK－218	I－2	107×84×			
	SK－219	I－2	51×41×			
	SK－220	I－2	73×59×			
	SK－221	I－2	53×39×			
	SK－222	I－2	68×46×			
	SK－223	I－2	94×66×			
	SK－224	I－2	100×68×			
	SK－225	J－2	88×78×	打斧2、磨石、石皿		
	SK－226	J－2		新道式土器	新道式土器	
	SK－226－2	H－3				
	SK－227	J－2	98×95×			
	SK－227－2	H－3				

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－228	J－2	78×67×			
	SK－228－2	H－3				
	SK－229	J－2	105×97×			
	SK－230	J－2	45×40×			
	SK－231	I－1	78×77×			
	SK－232	J－1	106×99×	曽利式土器	曽利式土器	
	SK－233	J－1				
	SK－234	J－1				
	SK－235	J－1	96×83×			
	SK－236	G－11				
	SK－237	G－11		石鏃2、磨石、ハンマー		
	SK－238	F－11				
	SK－239	F－11		コア		
	SK－240	F－11				
	SK－241	C－3	85×83×			
	SK－242	C－3		石鏃		
	SK－243	B－3、B－4				
	SK－344	H－5	×　×58	曽利式土器、石鏃、打斧2、磨石2、石皿、溶岩	曽利式土器	※　100番欠落
	SK－345	F－5	95×87×	磨斧		
	SK－345－2	F－5				
	SK－346	F－5				
	SK－347	F－5	65×50×			
	SK－348	F－5	88×65×	土偶の手		
	SK－349	F－5、6	83×73×			
	SK－350	E－6				
	SK－351	F－6				
	SK－351－6	F－6				
	SK－351－2	F－7	39×32×			
	SK－352	F－7	36×31×			
	SK－353	F－7	88×65×			
	SK－354	F－7		曽利式土器	曽利式土器	
	SK－355	F－7	33×30×	磨石		
	SK－356	E－7、F－7				
	SK－357	E－7、F－7	53×43×			
	SK－358	E－6、F－6	112×78×			
	SK－359	E－6	75×62×			
	SK－360	E－6、7	129×102×			
	SK－361	E－7	138×126×	磨石		
	SK－362	E－7	131×110×	焼土		
	SK－362－2	S－Ⅲ Y－2				
	SK－363	E－7	73×60×			
	SK－364	E－7	72×41×			
	SK－365	E－7	100×67×			
	SK－366	E－7	76×73×			
	SK－367	E－7		曽利式土器	曽利式土器	
	SK－368		78×59×			
	SK－369	D－7	38×28×			
	SK－370	D－7				
	SK－371	D－7	84×63×			

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK－372	E－7		曽利式土器、打斧、磨石	曽利式土器	
	SK－373	D－7	37×34×			
	SK－374	D－7	33×28×			
	SK－375	D－7	38×32×			
	SK－376	F－1	100×92×	土製円盤	土製円盤	
	SK－377	E－11	72×68×	ユーフレ		
	SK－378	H－5				
	SK－379	E－6	68×54×			
	SK－380	G－6				
	SK－381	G－6				
	SK－382	G－6	82×80×	ユーフレ2		
	SK－383	G－6	109×83×			
	SK－384	G－6				
	SK－384－2	G－6				
	SK－385	F－6、G－6				
	SK－386	G－6	×　×20			
	SK－387	G－7、8	67×54×15			
	SK－388	G－7	78×74×17			
	SK－389	G－7	80×49×35			
	SK－390	G－7	37×28×	打斧		
	SK－391	G－7	42×32×			
	SK－392	H－5		石鏃		
	SK－393	F－7	35×32×			
	SK－394	◎				
	SK－395	F－6		曽利式土器、石鏃、磨石、石皿4、ユーフレ1、(チャート)1、土製円盤	曽利式土器、土製円盤	
	SK－395a	E－7	×　×66			
	SK－395b	E－7	×　×97			
	SK－395c	E－7	125×103×98			
	SK－396	H－6	90×85×			
	SK－397	E－7				
	SK－398	E－6	75×70×	ユーフレ		
	SK－399		×　×38			

第7節　土器一覧表

五領ケ台式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
118	359	1	SB−41 埋甕炉	3	波状口辺と口唇部に爪形文を施し、体部は無文地に細沈線でモチーフを描いている。　No.115＋117＋188			
		2	SB−41 埋甕炉	3	深鉢の体部、縄文地に隆帯が見える。			
		1	SB−48 No.9．19．15 12．10．11 C−8　No.8 C−7　No.11 埋甕炉	3	SB−41と同様であるが、口縁部に縦位の細沈線文を施し、体部は無文地に細沈線のモチーフを描く。			
		1	SB−51 埋甕炉	3	本来波状口辺ではないが、口辺部を割り取って、波状としている。口線部を縄文帯とし、頸部の湾曲部に縄文地に沈線で逆U字状のモチーフを描く。			

狢沢式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	360	1	SB−06 埋甕炉	4	胴部　無文の胴部破片胎土や成形痕から狢沢式と思われる。			
118		1	SB−73 埋甕炉	4	角押文　口辺部に3段の楕円区画帯をもつ土器である。 口辺部の楕円区画がやや3角形状をなし、SB−53の埋甕炉に近似。			
		2	SB−73 P．No.44	4	角押文　口辺部に3段の楕円区画、胴部にクランク文が付く。 この時期の典型的な土器。			
		3	SB−73 No.161	4	角押文　口辺部に3段の楕円文とこれから下がるクランク隆帯 口唇部に刻目突起が4単位付く。			
		4	SB−73	4	角押文　口辺部に阿玉台式土器にも近似するような把手が付く。 口辺部に1帯胴上部に3帯の楕円文帯が付き、下はクランク文。			
		5	SB−73 No.124 No.137．145 161．171． 198	4	角押文　口辺部に3段の楕円文帯が付き、体部下部では2本のL字状逆L字状隆帯がつく。			
119	361	6	SB−73 No.227 228．236	4	角押文　口辺部に3段の楕円文帯が付く。口辺部の把手はX字状をなし人体のようである。体下部の垂下文は脇に角押文が付く。			
		7	SB−73	4	角押文　やはり口辺部に楕円文、頸部に細長楕円文、体部の楕円文の形状は不詳。			
		8	SB−73 P．226	4	角押文　口辺部に楕円文帯をめぐらし、体部上半また楕円文帯を重ねている。			
		9	SB−73 P．141 No.18	4	角押文　口辺部に一帯と頸部に一帯楕円文帯をつけ、体部に沈線で長方形区画をし、その中にT字状文を付けている。体部に垂下文が付かない類である。			
		10	SB−73 No.13．112 113．161 162．166 178	4	角押文、口辺部に一帯楕円をめぐらし、体部に沈線で方形区画を施し、中には角押文となっている部分もある。			
		11	SB−73	4	角押文、浅鉢形土器　口辺部に楕円文帯を角押文で表出している。			
		12	SB−73 No.217	4	角押文　器形と施文法はやや古い印象を与える。口辺部にのの字状隆帯と、角押文を施している。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
			No.198					
		13	SB－73	4	角押文　小型鉢、J字状隆帯が見え、器面を角押文で埋め、間を三叉状陰刻文を施している。一般に角押文と陰刻文はあまり併用されない。			
		14	SB－73 No.106. 152 No.154. 181	4	角押文－狢沢系新道式土器　口辺部に三角区画帯、体部に楕円文帯を付ける。			
	362	15	SB－73	4	三角押文、波状口辺部に三角区画帯、体部に楕円文帯と三角区画帯と垂下文がつく。三角押文の使用は少ない。新道式土器。			
	362	16	SB－73	4	口辺部に三角区画状隆帯とキャタピラ文が付く。縄文はRLで地文となっている。			
		17	SB－73	4	口辺部にC字状隆帯がつく。口縁下に1条の角押文、以下を縄文KLがつく。			
		18	SB－73 No.171	4	角押文　口辺部を4単位に割り、角押文で埋める部分と格子目文で埋める部分に分れる。体部は細沈線で文様を施す。			
120		19	SB－73 No.161	4	口縁部に前期末以来の伝統的な波状隆帯が付き、体部は細沈線で文様を施し、部分的に裁刻がある。			
		20	SB－73	4	粗製土器　阿玉台式という意見もある。口辺部に1帯、頸部に1帯楕円文を隆帯で描き、以下に垂下文を付けている。			
		21	SB－73 No.163	4	口辺部不詳、体部上半に楕円文帯があり、それに垂下文が付く。			
		22	SB－73 No.151	4	無文土器　口辺部に弧状の隆帯がつく。			
		23	SB－73 No.22	4	無文土器　口縁部に波状隆帯が付く。			
		24	SB－73 No.137	4	無文土器　口辺部に2条4単位の隆帯が付く。			
		25	SB－73 No.155	4	無文土器　口辺部に1条4単位の隆帯が付く。			
		26	SB－73 No.116. 158 176. 178 209	4	無文土器　口縁部に4単位突起がつく。			
	363	27	SB－73 No.158. 108	4	無文土器　口縁部に4単位の突起がついている。			
		28	SB－73 No.277	4	無文土器　住居の中央部に逆位に置かれていった土器。口縁部に4単位の粘隆帯が付く。			
		29	SB－73 No.154	4	体部の破片、角押文が4条みえる。			
		30	SB－73 No.127	4	口辺部不詳　体部上半に楕円文帯とクランク状垂下文が下がる。角押文と一部三角押文も見える。			
		31	SB－73 No.167. 187 170	4	体部下部　垂下文とクランク状垂下文があり、脇に角押文を施す。			
		32	SB－73 No.149. 140	4	体部下部　楕円文帯とJ字状の垂下文が見える。			
		33	SB－73 No.186	4	体部に垂下隆帯がある。			
		34	SB－73 No.214. 120	4	体部下部　9．10の体部と同様に沈線の方形区画が見える。			
		35	SB－73 P．158	4	体部下部　垂下隆帯			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		36	SB－73 No.268	4	体部下部　垂下隆帯と角押文が見える。			
		37	SB－73 No.183. 182	4	体部下部　垂下隆帯			
	363	38	SB－73 No.104	4	脇付の底部　おそらく有孔鍔付土器であろう。			
		39	SB－73 No.243	4	小型の台付土器の脚部			
	364	40	SB－73 No.35　42 No.51　116	4	浅鉢形土器　口辺部内側に楕円文と角押文が見える。五領ケ台式の浅鉢からの伝統であろう。			
		41	SB－73 No.87　108	4	41,42,43の口辺部は口唇部から短隆帯が垂下し、その脇に角押文を施すものである。阿台式とやや関連があろう。			
		42	SB－73 No.41　205 SB－73 No.118	4	体部は微隆帯による楕円文帯となっている。			
		43	S－Ⅳ SB－73 No.61　60 No.58　215 250	4	口辺部文様は42と類似する。			
		44	SB－73 炉火止No.3 E－19　No.1 E－18　No.1	4	楕円文帯が重なるものであろう。この土器では口縁下の角押文列が途中で逆転した内側作管文となっている。こうした逆転が体部では主流となっている。			
		45	SB－73 No.43 36 37 H－20 G－19 G－20	4～5	猿沢系新道式土器　口辺部、体部ともに三角区画帯が見え、下部はクランク状垂下文および、体部の一部に割込み区画がみえる。口唇部の円形突起等に新道式の特徴が見える。ただし三角押文は使用せず、角押文のみを使用。			
		46	SB－73 No.33　26	4～5	新道式土器であろう。口唇部に波状粘土紐、口辺部に三角区画帯の中にキャタピラ文、三角押文が見える。体部に円文が見える。			
		47	SB－73 No.136	4	口辺部無文で、体部上半に楕円文帯が見える。			
		48	SB－73 No.198　No.3	4	口唇部に4単位の突起があり、そこから垂下文あり、体部は横位の沈線文で埋めている。			

新道式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
121	369	1	SB－53 No.53 132 154 162 191 197 200 278 279 300 1,074	5	口辺部に三角区画帯、体部は縄文帯としている。三角区画帯の脇にキャタピラ文、三角押文、区画の接点にヒネリを付け、新道式の特徴をよくあらわしている。体部の縄文はRLで五領ケ台式の縄文と類似。			
		2	〃 No.75 107 152 153 185 188 195 198 1,064 1,065 2層	5	1．とほぼ同様の構造を取る。体部に縄文ではなく、短隆帯を配列する。			
		3	〃 No.14 46 84 144 151 267 276 2層	5	これも1とほぼ同様の構造、口唇部に4単位の突起と三叉文がある。口辺部三角区画帯の中にも三角陰刻がある。三角区画脇のヒネリが顕著になっている。			
		4	〃 No.128 2層 No.104 282 283 284 77土	5	新道式としては、特異な文様構造をもつが、文様要素は新道式の特徴をもつ。特異な土器で胎土も赤レンガ状で他の土器とは異なる。			
		5	〃 No.117 256 298 306 313 315 323 1,104 77土 2層	5	口辺部、三角区画帯、頸部三角区画帯、以下無文帯、楕円文帯、格子目文帯としている。各文様帯脇にキャタピラ文、三角押文を施す。			
		6	〃 77土 2層	5	口辺部文様帯は楕円文の変形、頸部無文帯、楕円文帯、無文帯、楕円文帯とし、それに垂下文がつく、底部からの逆じ字状のモチーフがある。やはりキャタピラ文、三角押文が多用されている。			
	370	7	〃 No.29 62 200	5	口辺部三角区画帯、体部には楕円文帯が見える。			
		8	〃 H－3 2層 No.1,103	5	口辺部の三角区画帯が見える。三角区画帯の中に角押文の充填がある。			
		9	〃 No.1,042 1,047 1,049 2層	5	口辺部三角区画帯、体部に縦位の刻目短隆帯がある。2と同じ構造			
		10	〃 No.297 2層	5	口辺部に三角区画帯			
		11	〃 No.64	5	口辺部の無文部の幅がやや広く、縄文地に三角区画帯、隆帯脇に三角押文が見られる。口縁裏に三叉文が見える。			
		12	〃 E－2	5	口辺部三角区画帯体部にも三角区画帯で隆帯脇にキャタピラ文、角押文が見える。			
		13	〃 No.239 2層 No.46 E－2	5	11と同様に縄文地三角区画帯が重壇する。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	370	14	SB－53 No.121 2層	5	口辺部楕円文帯、頸部にも楕円文帯、体部に三角区画帯が見える。隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施す。			
		15	〃 No.243	5	口辺部に楕円文帯がつく。			
		16	〃 No.241	5	口辺部は不詳、縄文地に隆帯で区画帯を付け、隆帯脇にキャタピラ文と三角押文が見える。			
	371	17	〃 No.1，27，46，50 E－2	5	口辺部不詳、体部に楕円区画帯、三角区画帯、方形区画帯、三角区画帯と続く。隆帯脇にはキャタピラ文と三角押文が付く。			
		18	〃 No.87 168，309 2層	5	口辺部楕円区画帯、方形区画帯、三角区画帯と続く、隆帯脇にキャタピラ文、三角押文が付く。			
		19	〃 No.321，322 77土 2層	5	楕円文帯か重壇する隆帯脇にはキャタピラ文は角押文に近い、一部にキャタピラ文、三角押文がある。			
		20	〃	5	小型浅鉢、縄文地、口縁部に一条の三角押文がある。			
		21	〃 No.25，151	5	浅鉢、口辺部に半楕円区画帯、隆帯脇に角押文を施し、口縁下にも一条の角押文、型式的に狢沢式に位置しよう。			
		22	〃 No.80 141，268 77土 2層	5	口辺部に楕円文帯を2段、体部に縄文地に大きな三角区画文を描くらしい。隆帯脇にはキャタピラ文と三角押文が見える。			
		23	〃 No.118 2層	5	口辺部不詳、体部に三角区画帯、本来無文帯部に縄文が見え、体部下端に楕円文帯がめぐる。体部下端楕円文帯は当住居址では少数			
		24	〃 No.137 2層 E－17	5	所謂抽象文土器、口辺部不詳だが、抽象文土器としては最も古いものの一例であろう。			
		25	〃 No.245 SK－188	5	体部破片で、楕円区画帯と三角区画帯が見える。隆帯脇に三角押文のみ使用している。			
		26	S－Ⅳ SB－53	5	体部下端に楕円文帯がめぐる。			
		27	S－Ⅳ SB－53 No.137	5	体部に楕円文帯とそれからクランク状の垂下文がある。			
		28	〃 No.161 199，204	5	口辺部無文帯とし、体部に方形区画をめぐらす。隆帯脇にキャタピラ文を施す。			
		29	〃 2層	5	体部下端に楕円文帯をめぐらす。			
		30	〃 No.137 258 2層 E－2	5	縦区文土器、区画の脇に截刻を施す。			
		31	〃 No.116 77土	5	縦区画文土器、縄文地に半截竹管内側で区画文を描く。			
		32	〃 2層 G－1 No.3 No.1031	5	縦区画文土器、縦区画文といっても、体部で横帯に区切る手法が用いられる。これはこの3例とも共通した手法と思われる。			
		33	〃 No.51 52，53	5	無文土器、器面全体にヒダのような指頭圧痕が付く。			
		34	〃 No.88 163，109 164，98	5	無文土器、33と類似			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	371	35	〃 No.120 1,028		無文土器、33と同様だが口辺部不詳			
		36	〃		湾曲した体部で壺形土器の体部であろうか、9のような刻目短隆帯がある。			
		37	〃 No.60 139 SK－175		無文土器、体部に2と同様な短隆帯が付く。			
	372	38	No.33 SB－53 No.100，111 127，150 154 S－Ⅳ SB－57 No.264		無文土器、口唇部に渦状に巻き、三叉文も付けている。体部には指頭圧痕文が見える。			
		39	No.68 SB－53 No.301，299 67，201，50		無文土器、口縁部に1条の沈線がめぐる。			
		40	SB－53 No.254，312 1,003，293 2層		無文土器			
123		41	〃 No.303		〃			
		42	〃 No.252 15		〃			
		43	〃 No.7 5，14		〃			
		44	〃 77土 2層		〃　体部には指頭圧痕がある。			
		45	〃 No.140 2層 No.266		〃			
		46	〃 2層		有孔鍔付土器、赤彩されている。			
		47	〃 〃		ミニチュア			
		48	〃 No.59 151 2層		浅鉢、口唇部に指頭圧痕により波状にし、一ケ所円文が見える。			
		49	〃 No.111		浅鉢、口縁部に4単位2対づつ突起がある。口縁部に三角押文が施される。			
		50	〃 No.31		浅鉢			
		51	〃 No.272		底部			
		52	〃		底部			
		53	〃 No.44 82，274 269		浅鉢、口唇部に渦巻状隆帯、口縁部に同様の隆帯が付く。 体部に縄文を施している。			
		54	〃 C－8					

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
123	375	95	SB－53 No.7，8 9，34 〃 216，217 E－2 N－Ⅳ SB－53 F－20 〃 F－20 No.7，8，9	7	これは、上層に出土し、土器すてばBに属すべき土器である。おそらく1a層は土器すてばの層である。井戸尻式に属する。口唇部に大きなミミズク把手を付け、口辺部文様帯、体部文様帯と続き、曲折底となっている。			
		96	SB－53 No.35.	8	これも土器すてばBに属する土器であろう。曽利式期の条線文土器である。			
124	376	97	〃 埋甕炉	5	SB－73の埋甕と同様な文様構成を取る。口辺部は三角に近い楕円区画帯である。ただし施文具はキャタピラ文と三角押文を用いている。			
		98	〃 No.1,085 2層下	5	口辺部に楕円区画帯、頸部にも楕円区画帯とし、体部は不詳。			
		99	〃 No.119 74，1,033 SB－81 埋甕炉	5	口辺部に楕円文帯を3段めぐらし、体部は縦に2分割し、指頭圧痕部と格子目文部に分れる。隆帯脇にはキャタピラ文と三角押文。			
		100	〃 No.1,084 1,098 2層	5	口辺部に楕円文帯、頸部に方形区画帯とし体部は不詳。18と同様な文様構造であろうか。			
		101	〃 No.1,033	5	口辺部三角区画帯、体部は不詳だが、三角区画かあるいは渦状をなすと思われる。口辺部は隆帯脇を三角押文、中に玉抱き三叉文。			
		102	〃 No.1,023 1,103 2層	5	埋甕炉脇にあった土器で、口辺部三角区画帯、頸部に方形区画、体部に縄文			
		103	SB－53 No.1,027 1,083，1,089 2層	5	体部破片、体部に大三角区画帯をめぐらし、隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施す。			
		104	〃 No.1,025 1,048	5	全体の文様構成は不詳。口辺部に楕円文、体部に楕円文帯をめぐらす。隆帯脇にキャタピラ文と三角押文が見られる。			
		105	〃 No.186 1,072	5	口辺部に三角区画帯といっても懸垂状隆帯が見える。隆帯脇にキャタピラ文。			
		106	〃 No.1,046	5	体部下部にクランク状隆帯が見える。隆帯脇にキャタピラ文。			
		107	〃 No.1,060 1,102 2層	5	体部下部に大三角区画帯、隆帯脇にキャタピラ文。			
		108	〃 No.1,001	5	無文土器			
		109	〃 No.171 1,022，1,029 1,042	5	浅鉢、口辺部半楕円状の区画帯に三角押文。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	377	110	〃 2層	5	浅鉢、口唇部に三角押文と一部キャタピラ文が見える。 埋甕炉の直上に正位にあった土器。			
		111	SB－42 SK－1 〃 SK－115 No.2 〃 SK－175 No.2 SB－53 No.90, 1,013 1,020, 1,066 1,067, 1,075 1,099 2次層	5	浅鉢、口唇部に三角押文4単位2対の突起がある。			
		112	SB－53 No.1,044	5	浅鉢無文。			
		113	〃 No.1,026	5	底部。			
		114	〃 No.1,047	5	底部。			
124		115	〃 No.177 302, 1,018 1,022, 1,080 1,095, 1,103	5	阿玉台系土器、一般に阿玉台式土器の研究者は、阿玉台式に素直に含めないが、胎土成形法ともに、当地の手法ではない。阿玉台Ⅱa式に比定されよう。			
125	380	31	〃 No.3 埋甕炉	5	口辺部三角区画帯、頸部無文帯、体部不詳。口辺部三角区画帯脇には2条の三角押文、現存では三角押文のみ。			
		32	〃 No.1 2, 4 5, 30	5	体部に大きな区画帯をつくり、その中に三叉状陰刻文を施している。 下端は平行四辺形区画帯をめぐらしている。			
		33	〃 No.13	5				
		34	〃	5				
		35	SB－69 No.11	5	底部。			
		36	〃 Pit3	5	小型土器、縄文施文の丸底。			
		37	〃 G－1 No.8	5	底部、縄文施文。			
		1	SB－80 埋甕炉	5	体部のみ、平行四辺形帯をめぐらし、それから垂下文を付けている。 隆帯脇には、キャタピラ文と三角押文を施している。			
		1	SB－81 埋甕炉 〃 C－19 ベルト内	5	口辺部に三角区画帯をめぐらすが、重三角文となるが、三角が長く、SB－53埋甕炉等の口辺部からの変化を伺わせる。			
	380	2	SB－81 埋甕 SB－53 No.119, 174 1,033, 1,034 2層	5	SB－81の埋甕炉として、1と一緒に用いられた。口辺部はSB－53の第1次と第2次層から出土している。			

藤内式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
125	381	1	SB－32 No.176	6	縦区画文土器、頸部に本来ない文様帯である楕円文帯が入る。区画文土器としては、後出のものとして理解される。	39		
		2	SB－32 No.201	6	抽象文土器、いわゆるサンショウ魚文が付く。頸部に楕円文帯、体部にサンショウ魚文が付く。いずれの文様もキャタピラ文で加飾される。	38.6	9.5ℓ	
		3	SB－32 No.88	6	小型土器、頸部にキャタピラ文と波状押引沈線、体部は指頭圧痕文。	11.6		
		4	SB－32 No.135, 157 193	6	3と同様な文様構成を取る。補修孔がある。	25.8		
		5	SB－32 No.112	6	これは無文内湾口縁をもつが、3，4とほぼ同様な構成を取るらしい。ただし頸部から体部に何らかの文様帯が付くものと思われる。			
		6	SB－32 No.152, 159 185	6	楕円文土器、頸部に一帯の楕円文帯が付く。ただ体部に至る垂下隆帯がある。あるいは口唇部に把手が付くものと思われる。	25.3		
		7	SB－32 No.77, 180 197, 207	6	楕円文土器、口唇部に双環把手の付いたものである。頸部に一帯の楕円文帯が付く。			
		8	SB－32 No.96	6	楕円文土器、該期の一つの特色である楕円文の重だんが見られる。			
		9	SB－32 No.69 C－6 No.3	6	浅鉢、口辺部曲折部に指頭圧痕状の凹文帯がめぐる。	29.5		
		10	SB－32 No.186, 187	6	小型土器、器面に指頭圧痕が施される。			
		11	172, 179 166, 183 184, 223	6	浅鉢、口辺部に円文や菱形文をつけ、時には4単位の突起となる。隆帯上にはキャタピラ文、隆帯脇には三角押文が施される。			
		12	92, 95, 106 126, 216	6	浅鉢、口縁部の突起は2単位、口辺部に楕円文帯がめぐる。			
126	382	13	SB－32 No.94	6	口辺部に隆帯で大三角文を描き、その間に円文を埋める。いずれも隆帯上は綾杉刻目、体部に楕円文帯、下部は縄文地に無文隆帯が下がる。	35		
		14	SB－32 No.217	6	口縁部に1つの突起をもつ。突起には渦巻き三叉文があり、体部はLRの縄文。	44.8		
		15	SB－32 No.76	6	口辺部に1箇所の円文、口縁下に2条の波状沈線、体部は0段3条の縄文。			
		16	SB－32 No.91	6	口縁部に突起、突起の内側に半渦巻き隆帯がつく。器面に縄文が全面施文。			
		17	SB－32 No.75, 73, 98 34, 47, 125	6	口縁部に波状沈線が2条、体部は縄文が全面施文。	43.5		
		18	SB－32 No.94, 153, 154	6	口縁部に1条の沈線、体部に縄文。			
		19	SB－32 No.92, 210	6	小型土器、全面縄文。			
		20	SB－32 No.134, 178	6	全面縄文。			
		21	SB－32	6	口縁部に波状沈線、体部に縄文。			
		22	SB－32	6	口縁部に突起が付くらしい。体部は縄文地に円形磨消文と体部中央に1周する磨消帯。	24.2	1.3ℓ	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		23	ＳＢ－32 No.106, 152	6	浅鉢、口縁部に２条の半隆帯文をめぐらす。半隆帯上には爪形文が施される。体部は縄文。			
		24	ＳＢ－32 No.176	6	底部。			
126	386	115	ＳＢ－32 No.128	7	当住居址とはまったく異なる時期のもの。住居址覆土内の土壙であろうか。口辺部に沈線文帯、体部に三角文帯、楕円文帯と続く。	50.2	23.0	
127	389	57	ＳＢ－52	6	口縁下に爪形文をめぐらし、縄文地にいわゆるゲジゲジ文が付く。			
		58	ＳＢ－52 No.95	6	楕円文帯が３段重なるが、下段は変型している。隆帯脇にはキャタピラ文と波状沈線が付き、やや古い様相を示す。			
		59	ＳＢ－52 No.89, 92, 94	6	口縁下に１条沈線がめぐり、体部上半に縦区画文、下半に縄文縦区画の中は半隆起線の脇にキャタピラ文時には三角押文を施す。			
		60	ＳＢ－52 No.28 ロ－１	6	縦区画文土器。			
		61	ＳＢ－52 No.21	6	縦区画文土器のミミズク把手。			
		62	ＳＢ－52	6	縦区画文土器。			
		63	ＳＢ－52	6	小型土器、口唇部に円文を付け、体部には短隆帯が付く。			
		64	ＳＢ－52 No.31	6	底部、体部下端に三角区画帯。			
		65	ＳＢ－52	6	底部、体部下端に楕円文帯。			
		66	ＳＢ－52	6	底部、縦区画文土器。			
		67	ＳＢ－32 No.48	6	底部。			
		68	ＳＢ－52	6	無文地に隆帯彫刻文を付ける。			
		69	ＳＢ－52 No.86, 96, 99	6	X把手付大甕片、ＳＢ－56に属するものであろう。			
		70	ＳＢ－52 No.69, 71, 78	6	浅鉢、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部は縄文。			
		71	ＳＢ－52 No.83	6	浅鉢、縄文が付き、底部に網代。			

井戸尻式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	393	7	SB－18	6				
		8	SB－18	6				
		9	SB－18	6	小型土器、無文。			
			B－5 No.2					
		10	B－6 B－7	6	台形土器、台部と脚部の接合部がはめ込み式となっている。			
			B－9					
		13	SB－18	6				
			No.2					
127	394	21	SB－34	6	口辺部と底部不詳、体部は現存では3段の文様帯をなし、各個の文様は半肉			
			埋甕炉		彫刻文で飾られる。			
	395	10	SB－40	6	口唇部に大きな把手が付く。ミミズク把手が内側を向き、口辺部に隆帯と彫			
					刻文で文様帯をめぐらせ、体部は0段3条の			
	399	30	SB－83	6	口唇部からJ字状隆帯が下がり、口辺部は角押文2条でコの字状に施し、頸			
			No.21		部体部に楕円文帯が付く。異時期の混入。			
		31	SB－83	6	縦区画文土器の底部。			
			No.6					
		32	SB－83	6	〃			
			No.34					
		33	SB－83		浅鉢、口唇部に刻目がある。おそらく狢沢式に属するものであろう。			
			No.80					
		34	SB－83 No.46	6				
			SK－83					
			SB－44					
			C－3					
		35	SB－83	6	小型土器、沈線文を施す。			
		36	SB－83	6	有孔鍔付土器、底部に4単位の刻目、赤彩あり。			
			No.29					
		37	SB－83	6	台形土器、住居址床面下に掘られた浅いピットに逆位に入っていたもの、大			
					型の台形土器である。			
		38	SB－83	6	浅鉢、4単位の波状口縁。			
			No.44					
		39	SB－83	6	縄文地、に磨消円文と沈線文を加えている。			
		40	SB－83		口縁部に1条の沈線、体部は縄文が付く。			
			No.5					
			SK－188					
			J－4 I－4					
			I－4 No.16					
			No.11					
			SK－203					
		41	SB－83	6	小型土器、器面全体に縄文が施される。			
			No.81A, B, C					
		42	SB－83	6	底部、縄文が施される。			
			No.36					
		43	SB－83	6				
			No.12					
		44	SB－83	6				
			No.10 I－4					

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		45	ＳＢ－83 No.6	6	大甕の無文口辺。			
		46	ＳＢ－83 No.2 Ｊ－4	6	口辺部不詳、体部に底隆帯で渦巻文を展開させ、その間を条線で埋めている。			
		47	ＳＢ－83 No.2 Ｊ－4	6	口辺部つなぎ弧文、つなぎ部からＨ字状隆帯が下がる。その間に矢羽状条線を施し、中央に波状沈線を加える。			
		48	ＳＢ－83 No.3 Ｉ－4	6	くびれ口辺の浅鉢、体部上半に沈線で楕円文をめぐらせ、その中に刺突文を施す。			
		49	ＳＢ－83	6	口縁下に１条の沈線、体部は縦位の条線地に波状沈線を垂下させている。			

曽利式期の住居址出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
128	401	38	ＳＢ－01 埋甕出入口部	8	口縁部不詳、体部に縦位の条線に波状沈線を下げる。			
		39	ＳＢ－01 埋甕炉の比	9	把手付壺逆Ｕ字状の沈線区画の中に縄文ＲＬとその間にワラビ手状沈線、両耳把手が特色的	23.7	4.1	
	404	26	ＳＢ－04 逆位底部 穿孔埋甕	8	斜沈線文土器、口辺部斜行沈線、頸部沈状粘土紐、体部は条線を地文として粘土紐でモチーフを描く。27と並んだ逆位底部穿孔埋甕。	42.9	21.5	
		27	〃 正位埋甕	8	口辺部無文、頸部沈線文にX把手が１ケ所付く。 体部は縄文ＲＬ。	23.0	3.0	
	406	9	ＳＢ－07 Ａ－４ 3層下 Ａ－５ Ａ－５ No.15 ２層 Ｂ－５ ＳＢ－７ 床面	8	台付有孔鍔付土器、孔は内孔であり、おそらく２孔２単位、鍔下の体部に沈線で渦巻文を描く。	21.0	2.9	
		10	ＳＢ－07 正位埋甕	8	浅鉢、頸部に沈線文、体部に縄文ＲＬ。	28.6	24.5	
		11	〃 Ａ－４ 床面		口辺部に縄文。			
		13	〃 炉					
		34	ＳＢ－10 No.48					
	408	39	〃 埋甕炉	8	大型長胴甕の口辺部、口辺部無文、頸部に沈状粘土紐を付ける。			
		40	ＳＢ－10 No.62 Ｂ－６ No.１，２，23 33，56，57 60，62	8	大型長胴甕、頸部に沈線文の上に粘土紐を貼り、格子目状とする。体部は主モチーフを竹管修形隆線で描き、その脇に波状粘土紐を貼付し、やや太い条線を加えている。			
		41	ＳＢ－10 Ｂ－５ No.７ Ｃ－５ No.５	8	大型長胴甕、頸部に格子目状粘土紐がみられる。			
		42	ＳＢ－10 No.55		大型長胴甕、頸部に大波状の竹管修形隆線で描いている。			
		43	ＳＢ－10 No.51	8	大型長胴甕の頸部。			
		45	ＳＢ－10 No.49	8	大型長胴甕の口辺。			
		46	ＳＢ－10 No.52	8	口辺部不詳、体部に縄文を施し、粘土紐を貼付している。			
		47	ＳＢ－10 No.54	8	大型長胴甕の口辺。			
		48	ＳＢ－10 ＳＢ－01 Ｂ－４，５ １－３ Ｅ－２	8	撚糸文地に口辺部に弧状沈線文を描き、その中に刺突文を加えている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	408	49	SB－10 No.47 B－5 B－6 No.25, 23, 22	8	大型長銅甕の口辺部。			
	409	1	SB－11 埋甕炉（石囲）	8	大型長銅甕、口辺部無文、頸部に水平粘土紐の上に波状粘土紐を加え、体部は粘土紐の上に波状粘土紐を加えて、主モチーフを描き、空間を条線で埋めている。			
		2	SB－11 No.30, 31, 39 46, 47, 48, 55	8	大木8b系土器、口辺部の細く沈線を加えた把手は大木式のものである。体部は撚糸文地に半隆帯で垂下隆帯とU字状モチーフを描く、一部剣先状である。当地の大木系土器は撚糸文地となり加曽利E1式のフィルターを通過したものと思われる。RRRのL巻き。			
		3	SB－11 No.2， 3	8	台形土器。			
		4	N－Ⅲ O－18 No.25 P－19 T－19 V－18 No.15, 35 V－19 No.1 S－Ⅲ Y－10 S－Ⅳ SB－11 No.1， 9， 44	8	大型長銅甕の体部、頸部と体部のモチーフを波状粘土紐で描いている工芸的にすぐれたもので、図化した。			
	410	28	SB－11 No.42 SB－41 No.33, 41 SB－42 No.42	8	頸部に波状粘土紐を貼付、この種の頸部は井戸尻式から曽利1式にかけて見られる。			
		29	SB－11 No.9	7	浅鉢、頸部に楕円沈線文と綾杉状隆帯がみえる。			
	412	23	SB－12 No.21, 23, 41	8	重弧文土器の口辺部。			
		24	SB－12 No.38	8	大甕の口辺。			
		25	SB－12 No.8 C－9	8	条線地に波状粘土紐を貼付。			
		26	SB－12 No.17	8	大甕の無文口辺。			
		27	SB－12 No.20	8	条線地に竹管修形隆線でU字状のモチーフを描き、その脇に波状粘土紐を貼付。			
		28	SB－12 No.17 C－3	8	27と同一個体であろう。			
		29	SB－12 No.5 E－17 No.1 C－9， 10 E－6	8	条線地に波状粘土紐を貼付。			
		30	SB－12 正位埋甕	8	口辺部につなぎ弧文の隆帯を付け、弧文の中に縦の沈線を加えている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	412	31	SB－12 No. 7	8	体部文様帯のみの土器で、低隆帯で渦巻状のモチーフを描く。			
129		32	SB－12 No.26, 43 C－10	8	大甕の体部下部、竹管修形隆帯でU字状モチーフに下からつきあげる逆U字状モチーフが見える。			
		33	SB－12 P. No. 2	8	体部のみ、矢羽状条線に波状沈線を垂下させる。			
		34	SB－12 No. 4, 24 C－9, 10	8	浅鉢、頸部に沈線で細長い楕円文を描く。	21.8	15.0	
		35	SB－12 No. 6	8	浅鉢、頸部に沈線モチーフとハの字状沈線文がみえる。			
		36	SB－12 No.25 赤彩	8	口縁下に沈線をめぐらせ、条線地に連弧状モチーフを施す。			
		37	SB－12 No.46	8	縄文地に口縁部に沈線文を施し、頸部にも1～2条沈線をめぐらす。			
	414	47	SB－17 No.30 E－5 土壌 E－3 E－4	8	斜行沈線文土器の頸部。			
		48	SB－17 C－5	8	斜行沈線文土器の頸部。			
	415	49	SB－17 No.26 C－5 No.12, 13 C－6	8	大甕、頸部に沈線地に粘土紐貼付の格子目文帯をめぐらせ、体部は主要モチーフを竹管形隆帯で描き、脇に波状粘土紐を貼付している。			
		50	SB－17 No.29	8	X把手付大甕。			
		51	SB－17 C－5 C－6	8				
		52	SB－17	8				
		53	SB－17 No.26 C－5 No.12 C－6 No.12	9	加曽利E式土器、胎土成形ともに曽利式とは異なる。縄文RL。			
		54	SB－17	8	浅鉢、口辺部不詳、条線のみ。			
		55	SB－17 B－5 C－6 C－5 No.15, 16, 17	8	縄文地に口辺部に連弧状波線を描き、体部に波状沈線を垂下させる。			
		56	SB－17 B－4 B－5	8	小型土器、55と同様な文様を描く。RL。			
		57	SB－17 C－4 No.12, 13 C－5 No.18～23 D－17, E－16	8	深鉢、全体に撚糸文を地文とし、口辺部につなぎ弧文状の沈線を描き、つなぎ部に渦巻き三叉状モチーフを描く、口辺部に刺突文を施す。この種の土器は当遺跡では類例は多い。			
	416	1	SB－20		底部。			
		2	SB－20		口辺部。			
		3	SB－20		口辺部。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	416	4	SB−20 No.10, 20	8	頸部に刻目隆帯。			
		5	SB−20 No.9	8	摺曲文土器の口辺部。			
		6	SB−20 C−7	8	体部破片、条線地に波状粘土紐を貼付。			
		7	SB−20 C−7	8	〃 〃			
130		8	SB−20 No.3	8	肥大口縁とつなぎ弧文を合せたような口辺部文様帯、頸部無文帯とし、体部は条線地に渦巻文を描く。	19.4	1.6	
		9	SB−20 C−7	8	つなぎ弧文状に隆帯で口辺部文様帯をなし、体部は縄文地に沈線で垂下文を描く。	14.5	1.0	
		10	SB−20 No.13	8	体部下部に斜位の条線と垂下隆帯が見える。			
		11	SB−20 No.6 C−7	8	浅鉢であるが、口頸部がくびれて壺のようでもある。頸部につなぎ弧文様のモチーフを描き、中をハの字文で埋め、つなぎ弧文から垂下する沈線もある。浅い条線が見える。			
		12	SB−20	8	大甕の口辺部。			
		13	SB−20 C−7	8	浅鉢、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部は条線である。			
		14	SB−20	8	浅鉢、頸部に隆帯をめぐらし、その上に爪形文を施している。			
		15	SB−20 No.11	8	浅鉢、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部は縄文である。			
		16	SB−20 No.5	8	浅鉢、頸部に刻目隆帯をめぐらし、体部は縄文RL。			
		17	SB−20 埋甕	8	縄文地に田の字状区画沈線を施す。撚糸文L。	15.4	2.0	
	419	82	SB−20 No.4 C−7 C−8	8	縄文地に口辺部は弧文状隆帯、頸部に隆線をめぐらし、それから隆線を垂下させている。			
		83	SB−20 C−5 C−7	8	口辺部不詳、体部に連弧状の隆沈線を施している。RL。			
		84	SB−20 No.20 B−2 C−3 C−4 C−7	8	器面全体に縄文施文し、その上に連弧文を描く。			
		85	SB−20 C−7 C−8	8	口辺部に沈線をめぐらし、体部に逆U字状区画を沈線で描き、縄文を施し、その上に波状沈線を加えている。			
		86	SB−20	8				
		87	SB−20	8				
		23	SB−21 No.87, 26, 45 SB−12 No.32 C−9 C−10	8	重弧文土器の口辺部。			
130	421	24	SB−21 No.4, 7 SB−12 No.20 C−10 D−10	8	重弧文土器の口辺部。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	421	25	SB－21 埋甕	8	頸部に半隆起線を施し、部分的に刻目を施している。体部は条線地に波状粘土紐を貼付。			
		26	SB－21 No.1	8	大型長銅甕の体部、竹管修形隆線でU字状モチーフを描き、波状粘土紐を加えている。			
		27	SB－21 No.9，11 C－8 C－10	、8	大型長銅甕、頸部に沈線地に粘土紐貼付の格子目帯とし、体部はU字状モチーフを竹管修形隆線で描き、波状粘土紐を加えている。			
		28	SB－21 No.13	8	口辺部。			
		29	SB－21 No.25	8	X把手付大甕。			
		30	SB－21 SB－02 E－6 F－7 I－6 SK－367	8	口辺部に低隆帯と垂下隆帯があり、矢羽状条線地に波状沈線を垂下させている。			
		31	SB－21 J－3 No.22	8	4単位の波状口辺をもち、波状にそって沈線を数条めぐらす。体部に条線を施す。口辺部に一部粘土紐が付く。			
		32	SB－21 No.22 SB－12 C－10	8	4単位の波状口辺、縄文地に波頂部から粘土紐が波状に垂下する。			
		33	SB－21 No.18 C－10 D－10	8	縄文地に結節縄文が見える。当遺跡では結節縄文は稀少である。			
		34	SB－21 埋甕	8	連弧文土器、胎土成形等から搬入品であろう。			
		35	SB－21 SB－12 No.11	8	浅鉢、無文。			
		36	SB－21	8	後期の土器、称名寺式の終末か。			
	422	8	SB－23	8	斜行沈線文系土器。			
		9	SB－23 No.1 N－Ⅲ Y－19	8	大甕の体部。			
		12	SB－23 埋甕	9	ピットの中は破片の状態であったので埋甕としては妙である。口辺部に隆帯のつなぎ弧文、頸部無文帯とし、体部に垂下沈線と波状沈線を施す。			
130	423	22	SB－28 埋甕 SB－26 SB－21 No.5 SB－20 SB－30 B－5 C－9 C－10	8	X把手付浅鉢、口辺部にX把手と体部に縦位の条線			
	425	10	SB－44 D－8 No.5 6，10	9	連弧文土器、口縁下に3条の沈線を施し、その間に刻目を施す。体部は撚糸文地に連弧文を施している。搬入品か？			
	427	30	SB－50 No.2，9，19	8	本来大型長銅甕の文様構成であろう。頸部に沈線をめぐらし、体部にU字状モチーフをなし、一部に波状粘土紐を付けている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	427	31	SB－50 No.18	8	斜行沈線文土器の口辺部。			
		32	SB－50 炉の中 E－11 No.14 55	8	甕形土器の口辺部、頸部に波状粘土紐がある。			
		33	SB－50 No. 1	8	大甕の体部、竹管修形隆帯のU字状モチーフがある。			
		34	SB－50 No.11, 31	8	大甕の体部。			
		35		8	大甕の口辺部。			
		36		8	X把手付大甕の口辺部。			
		37	SB－50 No.60 F－9	8	小型土器、縦位の条線がある。			
		38	SB－50	8	X把手付大甕、隆線が低く幅広くなっている。			
		39	SB－50 No.59 SK－129	8	X把手付大甕。			
131		40	SK－53, 64 37 SK－129 E－11	8	浅鉢無文、頸部がくびれ口辺が外反。			
		41	SB－50 No.43, 66 SK－53 No.46, 56 E－3, 8, 11 F－9 H－5	8	浅鉢無文、口縁部がやや肥大する口辺が内湾。			
		42	SB－50	8	台形土器、無孔、脚部の磨耗が著しい。			
	429	20	SB－55 No. 2, 4, 7 8, 9, 15 49, 60, 66 E－3 No. 6, 21, 65 66, 67	8	肥大口辺系土器、口辺部にS字状沈線文と円文がある。頸部に無文帯、体部に大きな渦巻文を展開する。条線は縦位で一部に波状沈線が垂下する。			
		21	SB－55 No.59	8	肥大口辺系土器、口辺部に円文がならぶ、体部は垂下隆帯と縦位の条線があり、波状沈線も加えている。			
		22	SB－69, 70	8	肥大口辺系土器、口辺部に円文がならぶ、体部は口辺からつながる低隆帯が大きな渦巻文を展開する。			
		23	SB－55 No.55, 81, 97	8	肥大口辺系土器、口辺部に円文とS字文がある。			
		24	SB－55 No.27, 78 F－3	8	つなぎ弧文の口辺と肥大口辺の折中的である。体部は低隆帯でモチーフを描き、条線は斜位で埋めている。			
		25	SB－55 F－6 No.6	8	SB－56の103に類例がある。隆沈線で弧文や円文を描き、その中を条線で埋めている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	429	26	SB－55 No.29, 91, 86	8	大甕の口辺。			
		27	SB－55 No.30, 84 E－2 No.7 E－3 No.8 12, 47	8	大甕の体部、垂下隆帯と条線地に波状沈線がみえる。			
131		28	SB－55 No.23 E－2 F－4	8	おそらく器面全体を大きなモチーフを描くものであろう。大きな渦巻文を展開し、縦位の条線で埋めている。			
	430	29	SB－55 No.52	8	浅鉢、頸部に中を条線で埋めた楕円文と渦巻文が並ぶ。			
		30	SB－55 No.91	8	浅鉢、29と同様であるが、渦巻ではなくS字文となっている。			
		31	SB－55 No.23, 25 F－3 No.50	8	X把手付浅鉢、頸部に中を条線で埋めた楕円文帯と半隆起線による渦巻文がある。			
		32	SB－55 No.42, 51	8	壺形土器、無文で直立した口辺は失われている。体部に2本の半隆起線による渦巻文を展開させ、これにそって条線を施している。			
		33	SB－55 No.81	8	壺形土器、32とほぼ同様である。S－Ⅲ区のSB－72においても同様な箇体が2つあり、対照的である。			
		34	SB－55 No.69, 70 E－9	8	大甕の底部、体部に半隆起線による渦巻文があり、条線は渦巻にそう部分が見られる。さらに条線の上に波状粘土紐を加えている。			
		35	SB－55 No.69, 90	8	甕の底部、垂下隆帯が2本見られ、縦位の条線の上に波状沈線が見られる。			
		36	SB－55 No.38	8	深鉢の体部、沈線区画の中に条線と刺突文が見える。			
		37	SB－55 No.74	8	底部。			
		38	SB－55 No.41 F－3 No.47	8	底部、条線がある。			
		39	SB－55 No.80	8	底部、条線。			
		40	SB－55 No.20	8	底部。			
		41	SB－55	9	深鉢の体部、縄文地LRに垂下沈線がある。			
	434	87	SB－56 C－2, 3		小型の重弧文土器。			
		88	SB－56 No.75, 76 156, 40, 96	8	肥大口辺系土器、口辺部に円文が並び一部S字状沈線がある。体部は低隆帯に渦巻沈線を加えたモチーフと横位の条線が施される。			
		89		8	口辺部に1本隆帯によるつなぎ弧文を施し、弧の中に沈線を加え、垂下隆帯が2本下がる。			
		90	SB－56 No.19, 148 161	8	体部全体に渦巻文が展開するもの、体部文様帯のみ。			
		91	SB－56 B－2 No.19	8	これも体部文様帯のみの大区画に条線。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	434	92	SB−56 No.39 A−?	8	口辺部につなぎ弧文。			
		94	SB−56 No.115, 110	8	X把手付大甕、頸部にX把手、体部に渦巻文が展開し、3本の渦巻隆帯にそって条線が施される。			
		95		8	X把手付甕、頸部にX把手、体部に2本隆帯による渦巻文が展開し、条線は縦位に施される。	50.8	35.8	
		97	SB−56 No.43	8				
		98	SB−56 No.16	8				
		99	SB−56 No.102	8				
		101	SB−56 No.42	8				
133	435	102	SB−56 No.158 SB−58 C−2 E−4 G−4 H−4, 5 I−4	?	口縁部に沈線をめぐらし、体部に条線を施し、頸部に沈線を3条めぐらし、体部に連弧状沈線を施している。			
		103	SB−56 No.36, 162 B−1 No.6	?	口頸部にRの撚文と体部の縄文はLRで異なる。口辺部は変形した連弧状である。体部もまた同様である。			
		104	SB−56 正位埋甕 炉の中	8	口辺部不詳、体部に縄文RL、底部に網代、底部穿孔の正位埋甕は本例のみ。			
		105	SB−56 No.157	8	全縄文。			
		106	SB−56 No.35 B−1	8	X把手付浅鉢、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部に縄文がある。			
		107	SB−56 No.35, 50 154, 160 SB−58 B−1	8	X把手付浅鉢、頸部に波状粘土紐をめぐらし、体部に縄文Lがある。			
		108	SB−56 No.169, 163	8	全体に縄文が施され、口辺部に弧状沈線、体部に逆弧状沈線が施される。			
		109	SB−56 No.140	8	浅鉢の底部が縄文である。底部が磨耗している。			
		110	SB−56 No.152	8	小型浅鉢。	8.4	1.0	
	436	3	SB−62 SB−16 G−8 No.1 G−9 D−9 3層	8	4単位の波状口縁をもつ深鉢、全面に刺突文を施し、波線で文様を描く。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	436	1	SB－63 No.2，12，13 14，18，29，69 SB－64 No.4	5	下層のSB－68か80の土器であろう。口辺部の三角区画帯は失われ、頸部を無文帯とし、体部に三角区画帯がめぐる。隆帯にそったキャタピラ文と三角押文が特徴的である。			
		2	SB－63 No.5，15	5	口辺部無文で開く、体部の文様は不明だがキャタピラ文と三角押文が見える。			
		3	SB－63 No.96	5	浅鉢、口縁下に指頭圧痕隆帯がある。			
		4	SB－63 No.62	6	小型土器、縄文地RLに刻目隆帯があり、その脇にキャタピラ文が見える。			
		5	SB－63 No.9，69，72	5	底部。			
		6	SB－63 No.50	5	無文の小型円筒形土器、粗製土器。			
		7	SB－63 No.5	5	底部文様帯とし、三角区画帯が見え、隆帯脇にキャタピラ文。			
		8	SB－63 No.20	5	〃			
	439	62	SB－63 SB－64 G－1 G－2 No.9，12	8	カゴ目文口辺土器、貼付粘土紐が失われ、斜行沈線文土器と同様になってしまう。頸部に粘土紐をめぐらせ、体部にも波状粘土紐が垂下する。この種の土器としては小型品である。			
		63	SB－63 No.82，92，93	8	斜沈線文土器の口辺。			
		64	SB－63 (M－9，10) 3層	8	大甕の口辺。			
		65	SB－63 No.10，77	8	X把手付大甕の体部。			
		66	SB－63 No.1 SB－69	8	口辺部文様帯は、つなぎ弧文があり、弧文の中に沈線がある。体部は大きな文様帯となり、肥大口辺系土器と類似。	17.1	1.5	
		67	SB－63 No.12	8	口辺部につなぎ弧文、頸部無文地に弧状沈線を連続させている。			
		68	SB－63 SB－69	8	口辺部不詳、体部に縄文地に垂下隆帯と波状隆帯を垂下させている。RL。			
	441	41	SB－64 No.47 G－2 No.3，1	8	大型長銅甕の口辺部、頸部に沈線がある。			
134		42	SB－64 No.16 SB－67 No.4 H－2 No.5 G－2 N－Ⅳ E－17 No.8	8	曲折口辺の口頸部、頸部に長楕円文カ竹管修形隆線で区画され、部分的に刻目を施している。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	441	43	SB－64 No.19	8	浅鉢、無文。			
		44	埋甕	8	大型長銅甕の体部。			
		45	埋甕	8	大型長銅甕の口頸部、頸部に波状隆線がある。			
	442	26	SB－65 P－66	8	小型土器、頸部に沈線地に粘土紐を貼り付けたカゴ目文があり、体部にU字状の粘土紐が貼り付けられる。	19.0	1.0	
		27	SB－65 No.79 H－1	8	小型土器、口辺部無文、頸部に波状粘土紐がめぐるらしい。また、やや伸びたS字状粘土紐も同時に施され、体部に2本の垂下隆帯があり、条線地に波状粘土紐がある。	17.8	3.4	
		28	SB－65 No.52 E－17 No.7 F－18 No.8	?	口縁下に粘土紐と波状粘土紐を付け、体部全体に無節縄文Lがあり、U字状の粘土紐と波状粘土紐が見られる。			
		29		8	深鉢の体部、縦位の条線がある。			
		30	SB－65 No.87	8	浅鉢、口縁部に粘土紐で折り返し状に貼付している。該期の浅鉢としては数少ない例である。			
		31	SB－65 No.47		台形土器、無孔有脚。			
134	445	1	SB－71 G－1 No.27, 28 別の住居のウメガメ	8	大型長銅甕、頸部に水平粘土紐を貼り付け、さらに波状粘土紐を加えている。体部には3本の刻目隆帯が垂下し、この期としては稀な櫛歯状工具で条線を施し、さらにやや太い波状粘土紐を施している。			
		1	SB－71 No.37 炉内	8				
		2	SB－71 No.11	8				
		1	SB－75 正位埋甕	8	口縁部を欠く、大型長銅甕、頸部をめぐる2本の刻目隆帯が垂下文に連なり、十字文となり3本隆帯となって下がる。体部は条線で埋めている。			
		2	SB－75 No.11	8	曲折口縁浅鉢、頸部に竹管修形隆線と刻目があり、4単位に円文を付けるらしい。			
		3	SB－75 Pit No.1	8	大甕の口辺。			
		4	SB－75 No.1	8	大甕の口辺。			
		5	SB－75 No.1	8	小型無文土器。			
	447	1	SB－78	8	大甕の口辺部。			
		2	SB－78	8	口縁下に2条の沈線をめぐらし、そこから垂下沈線を4単位おろす。その中を矢羽状条線で埋め、そこに波状沈線を施す。			
		3	SB－78	8	X把手付甕、床直出土である。X把手が4単位付き、体部の渦巻文は1本隆帯となり、渦巻隆帯にそった条線もみられ、体部下部は横位の条線である。			
		4	SB－78 G－6 No.8, 27 G－7 No.15 G－8	8	口辺部に円文と楕円文の沈線をめぐらせ、垂下沈線はワラビ手状と長楕円文になり、体部をハの字文で埋めている。			
		5	SB－78 No.2 G－6	8	体部に渦巻状垂下隆帯がみられ、ハの字文で埋めている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	447	6	SB−78 G−6 G−7	8	沈線で4単位にコの字状大区画をなし、その中をハの字文で埋めている。			
		7	SB−78 正位埋甕	9	加曽利E式土器、4単位の突起をもつ、口辺部に沈線による楕円文帯をめぐらし、そこに縄文が施され、頸部無文帯とし、頸部下に指先圧痕による刻目帯をめぐらし、体部に逆U字状区画の中に縄文を施し、さらに波状沈線を加えている。さらに区画の間にワラビ手沈線がある。			
		8	SB−78 G−3，6 7，8	9	把手付小型甕、口縁部は失われている。体部の文様帯は7とほぼ同様である。			

S—Ⅳ区　土壙出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
135	449	1	SK—01	7	5本1単位櫛歯状工具による条線のみ。内面胴下半部にスス付着し、器壁の荒れ・ヒビ割れの著しい部分が幅10cmほどでめぐっている。外面は胴中半部にスス付着による黒色部著しい。	59.8		
		2	SK—04	8—1	頸部4本の横走隆帯上は半截竹管内側による刻み。頸部隆帯直下に半截竹管による2本沈線がめぐる。胴部は隆帯貼付による懸垂文が少し残り、地文は半截竹管条線。			
		3	SK—08	8—1	おそらく4単位のx把手をもつ。胴部文様は2本隆帯と隆帯間・脇の沈線による大渦巻文と、付随する小渦巻文。地文は細い半截竹管による縦・斜め方向条線。			
		4	SK—08		台形土器。台部がぶあつい。脚部接地面は非常に擦り減っている。	6.1		
136		5	SK—05	8—1	まず頸部と胴部の境を一本の横走隆帯で画す。頸部は斜めの集合半隆起線→2本1組の斜めの隆帯→上端の波状粘土紐→下端の隆帯の上方に沿う横走隆帯→半截竹管内側を押圧して刻みを施す、という順序をとる。胴部は3、4本1組竹管整形隆帯により主モチーフ「Ψ」状文＋直線垂下文各3単位を作る→波状粘土紐→地文半截竹管による条線。主モチーフ貼付後いずれかの段階にて頸部と同じ刻みを施す。	73.2	60.9	
	450	6	SK—05 E—11	8—1	頸部横走粘土紐、波状粘土紐→胴部3本1組竹管整形隆帯による主モチーフ、逆「J」字の先端が渦巻いているか、あるいは「U」字の中に渦巻が入るか。直線垂下文は途中四つ足状に屈曲する→地文半截竹管による条線→波状粘土紐。	83.3	83.1	
		7	SK—05		頸部4本の横走隆帯と波状隆帯→胴部は3本1組隆帯による「Ψ」状文2単位とJ字文と直線垂下文。「Ψ」状を作る隆帯はところどころ短い隆帯に横切られる。J字文の先端に花びら状に波状粘土紐がつく。隆帯上端に渦巻状粘土紐におおわれた円すい状突起あり。→半截竹管による条線。5・6番に比べ、胴部懸垂文の作り方などやや古い感じがある。以上3個体は、破片にされてから同一土壙に埋置されたと思われる。器体にゆがみを持っており、製作上成功したとは言えないものであろう。			
	451	8	SK—06 SK—377	8—2	文様がすべて沈線で表現される。胴部文様は2～3本1組沈線による大渦巻文4単位、また蛇行沈線が2単位垂下する。胴部地文は棒状工具を用いた斜条線、蛇行沈線の周囲は条線は綾杉状となる。施文順序はX把手をつなぐ沈線・胴部渦巻文→条線→一部の沈線の引き直し・蛇行沈線である。			
		9	SK—06		X把手欠損。X把手をつなぐ2本隆帯、把手裾に渦巻文→胴部条線は半截竹管によるが、一部その背を使った？1本引きとなる。→隆帯に沿って沈線、蛇行沈線。			
		10	SK—06		X把手の部分の破片。細い半截竹管による条線。			
		11	SK—06 E—9	8—1	胴部破片。2本1組垂下沈線→3本1単位櫛歯状工具による条線→蛇行沈線。			
		12	SK—06 E—9		口縁部に2本の横走沈線→胴部地文、5本1単位櫛歯状工具による条線→胴部2本1組の垂下沈線4単位。沈線の間の条線を磨消している→蛇行沈線。			
		13	SK—06 D—2		口縁部に太い横走沈線が1本めぐる→胴部条線。6～7本1組の櫛歯状工具によると思われる。			
		14	SK—11	6	胴部全面地文、縄文0段3条RL。くっきりと整った施文。無文口縁が内弯する。			
		15	SK—33	6	深鉢の胴下半部を、接合面にて切り、そこを擦って再利用に供したのであろう。全面縄文RL。			
		16	SK—40 F—8 F—2 F—9 I—4 E—8	8—2	4単位の山形突起がつく。口縁部に横走隆帯が1本めぐる。胴部文様は隆帯により小渦巻文と、それをつないで展開する文様を作っている。地文は半截竹管によるまばらな条線。SK—40（F—8グリッド）破片を中心に、比較的大きな接合破片が広域に散らばっている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		17	SK—46		胴部に縄文RLを持つ浅鉢。			
137	452	18	SK—52	8—1	4単位大把手にやや欠損部分が目立つ他はほぼ完形である。把手は対向する2単位ずつが類似。輪にした粘土を組合せて造形し、全体に半截竹管による半隆起線を幾重にも加飾する。把手の間に対応する位置の頸部に4単位のX把手がつく。胴部は2～4本1組の竹管整形隆帯（ただし隆帯間は棒状工具で整形しなおしていると思われる）により懸垂文を作る。大把手下から垂下する逆J字状懸垂文4単位のうち2単位が先端二又に分れ一方が渦巻き一方がさらに垂下する。懸垂文の先端は渦巻くが、その部分が特徴的に盛り上がる。胴部地文は5本1単位櫛歯状工具による条線。土壙内に横倒しでつぶれた状態で遺存した。おそらく横位に埋設したものであろう。	55.4 把手頂まで 71.0	36.8	
		19	SK—53	8—2	貫通孔を有する3単位の把手のうち1単位と、小突起3単位はいずれも頂部に渦巻文を持つ。口唇上面には渦巻を結ぶ沈線がめぐる。口縁部文様帯は隆帯を用いて、渦巻文をはさむ特異なマド区画を作る。区画内は半截竹管を用いた縦列沈線。この口縁部文様帯は曽利式の肥厚口辺が崩れて低平になり、加曽利E式の口縁部のマド区画を採用してできたものと説明できる。胴部は垂下隆帯6単位により冂状に区画されるが、隆帯の位置に規則性なし。半截竹管による縦方向条線上に、大ぶりな蛇行沈線。	34.6	7.4	
		20	SK—53 SB—50	8—2	口縁部に無文帯が存在し、その下が2本隆帯渦巻つなぎ弧文の口縁部文様帯となる。隆帯は全体に低平で、沈線が沿う。半円形のマド区画内は半截竹管による沈線。胴部は渦巻から垂下する隆帯により冂状に区画され、区画内は半截竹管による綾杉状条線と蛇行沈線。文様は6単位。			
	453	21	SK—53 E—8 E—11 F—8、土器すてばC	8—2	口縁を打欠き、擦って再利用したものであろう。胴部は低平な隆帯上に沈線を引いて隆帯を2本に見せる手法で、大渦巻文を作っている。条線は1本ずつ、ただし半截竹管を使う部分もある。			
		22	SK—53 E—11 SB—50	8—2	無文口縁部が長く、直立気味である。X把手4単位。胴部は2本隆帯による大渦巻文をもつらしい→地文半截竹管による条線→隆帯に沿って沈線（なで）。			
		23	SK—53 SB—78 SB—22 E—11 F—9 S—Ⅲ表採	曽(4)(5)	頸部4単位X把手と、X把手をつなぐ隆帯。胴部は1本の幅広隆帯による大渦巻文、隆帯両脇に沈線が沿う。頸部隆帯と胴部隆帯の連結部に沈線渦巻文が入る所がある。胴部地文6本1単位櫛歯状工具による条線。			接域土はなグド広合とれたリッ
		24	SK—53		X把手付の甕の口縁～頸部破片。			
		25	SK—53	8—2	大型土器おそらくX把手付大甕の胴部破片。2本隆帯とそれに沿う沈線による大渦巻文。地文は櫛歯状工具による縦・斜方向条線。			
		26	SK—53	8—2	両耳把手は欠損するがX把手であったらしい。頸部横帯は隆帯で区画を作り、区画内は隆帯に沿う沈線と半截竹管による沈線列。区画間に沈線によるS字文。			
	454	27	SK—48	6	口縁無文帯は断面三角形状に肥厚、1単位の環状把手がつく。胴部文様帯は、2単位の垂下隆帯と2単位の逆J字隆帯で器面を分け、半截竹管半隆起線で縦長の矩形区画を作る。区画内は縦・横・斜めの沈線列を基本に、沈線列上の波状沈線、三角押引文列などバラエティがある。	27.0 把手頂まで 30.6		
		28	SK—75	8—1	X把手付大甕の胴部破片。3本1組竹管整形隆帯は、外側2本がワッカ状に閉じている。地文は1本引きの細かい条線。			
		29	SK—78 SB—48 E—8	8—2	頸部横帯はしっかりした隆帯で上下端を画し、細い隆帯による渦巻文とU字を交互に配す。その間の地文として1本引きの沈線列を施文する。	27.0	15.0	

写真	図	図No.	出土地点	分　類	文　様	高さcm	容量ℓ	備考
138	454	30	SK—78	8—5	口縁4単位の山形に盛上る部分は、粘土を貼付して三角すい状に突出させ、その上に沈線を深くえぐる様に施文して横S字文・円形文を描出している。口縁部文様帯は2本隆帯による弧状文・隆帯間沈線は弧の連結部にて渦巻く。口唇上面に1本の太い沈線がめぐる。胴部文様帯は口縁部から斜めにおりる太い沈線による渦巻文4単位。沈線の小渦巻文が沿う所もある。口縁区画内・胴部、地文は棒状工具先端による列点文。胎土・色調も含め異質な土器であり搬入品と考える。			
		31	SK—78	8—5	櫛歯状工具による条線→3本1組沈線による連弧文、くびれ部は横走。			
		32	SK—86		無文口縁が直立し肩がやや張出す。最も突出する部分に隆帯をめぐらし、その上方に3本の沈線を横走させる。			
		33	SK—83	7	深鉢の胴部を切り離して胴下半部のみ再利用に供したものであろうが、切り口はよく調整され本来的な口縁部と言っても遜色ない。その擬似口縁部分に隆帯がめぐり、4単位3つずつの刻みがある。以下全面縄文0段3条RL。	13.2	1.7	
		34	SK—87、88　E—6	8—1	頸部文様帯は2本の横走隆帯にはさまれた波状隆帯。胴部文様帯は3本1組隆帯によるJ字状懸垂文4単位。懸垂文先端は2本の隆帯で頸部とつながり、懸垂文下端から同じく2本隆帯が垂下する。隆帯上刻み、地文1本引き沈線による条線。			
		35	SK—87、88	8—1	頸部文様帯は横走隆帯と波状隆帯各2本ずつから成る→胴部文様帯は3本1組隆帯によるU字懸垂文、おそらく3単位。懸垂文の一端に渦巻状突起がつく→胴部地文半截竹管による浅い条線。なお内面の底から5m位のところに幅8cm程の著しい黒変部分がある。	60.0	39.7	
	455	36	SK—128	8—1	大把手2単位のうち1個残存。把手は棒状工具による円形文・渦巻文・交互刺突（沈線）などで加飾される。大把手間の頸部にX把手2単位、把手間は低平な隆帯と隆帯上・脇の4本の沈線でつながれる。胴部は把手下に隆帯によるH字状文がある。隆帯上刻み。地文は半截竹管による条線。把手装飾の仕方・頸部把手のつなぎ方・胴部懸垂文の作り方を考えると、同じ土壙の他の土器よりやや時期が古いと思われる。	40.6	7.1	
		37	SK—128	8—1	頸部の幅広い文様帯は斜めの集合半隆起線→上下を画す横走隆帯→波状隆帯という施文順序をとる。胴部文様帯は3本1組隆帯によるU字状懸垂文と、U字の中に入る特異な屈曲を持つ垂下隆帯。U字状文はW字状屈曲を持つ。隆帯上は半截竹管内面を用いた刻み。順序は主モチーフ→地文細い半截竹管による条線→刻み。			
139		38	SK—128 SK—147 F—3	8—1	頸部は6本の竹管整形隆帯を横走させるが、懸垂文上端部分のみ縦走とする。胴部懸垂文は竹管整形隆帯によるU字文と直線垂下文各2単位と、U字文の中に入るS字文。S字文は幅広粘土を貼付してS字を作り、さらにその上に竹管整形隆帯をのせている。胴部地文半截竹管による条線。			
		39	SK—128 SK—147 F—7 G—3	8—1	38番と酷似するが文様の作り方は違っている。頸部・胴部とも幅広隆帯を貼付し、その上に半截竹管半隆起線を引いて竹管整形隆帯に見せている。胴部懸垂文はU字文、S字文、直線垂下文2単位ずつ。直線垂下文は途中片側が三角形状に屈曲し、三角内部をけずり出して無文とする。U字文、S字文の半隆起線の中央の条は、半截竹管をコンパス文風に動かして波状文とする。	64.5	39.6	
		40	SK—128	8—1	曽利式の典型的な口縁・頸部。頸部は斜行半隆起線→斜行粘土紐→波状粘土紐。			
		41	SK—128		ずんぐりとした胴下半部の特異なラインは東海地方の土器の器形と類似する。口縁部は4単位の波状口縁を呈し、波頂下が内弯する。器全面にわたり撚糸文Lの縄をL巻きにしたものを施文する。→くびれ部に横走する波状隆帯→胴部に垂下する波状隆帯8単位を貼付する。波状隆帯以外、つまり地文・器形など曽利式にはない要素を採り入れている。	38.5	12.9	
	456	42	SK—128	8—1	大型深鉢の胴下半部～底部。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
	456	43	SK—114	4	胴部中半の楕円区画横帯をはさんで上下に幅広い区画帯が配される。胴上半部に縦長の楕円区画がある。胴下半部には先端がふくらみ五指状となる特徴的な隆帯がある。隆帯に沿って基本的に2列の角押文がめぐる。区画内は角押文による波状文が入る。角押文に沿って刺突文（截痕）が施される所がある。その刺突と隆帯上の刻みは、細い円形の竹管を用いている。			
		44	SK—132	8—4	器全面撚糸文、Lの縄をL巻きにした原体を用いる→口縁部に横長の刺突文2列。			
		45	SK—137	5	胴部最下段は平行四辺形の区画帯となり、その上段は幅の広い素文帯である。隆帯に沿ってキャタピラ文、三角押文。区画内は三角押文による斜めの波状文。			
		46	SK—137 D—7	6	口縁部は地文縄文細かいRL上に、沈線により横S字文を描く。S字の両端は円形となる。沈線には細い波状沈線が沿う。胴部は隆帯により抽象文（サンショウウオ文）を作る。隆帯にキャタピラ文、波状沈線が沿う。抽象文の枠内は、円形に施したキャタピラ文上の円形沈線文、三叉文などで埋める。縄文は口縁部と同じ。屈折底部直上に楕円区画横帯あり、区画内キャタピラ文と波状沈線。			
		47	SK—138		中型深鉢の、内弯する無文口縁。			
		48	SK—139	7	胴上半部は楕円区画横帯が2段以上重なる。区画内は隆帯に沿って半隆起線、その内部に円形刺突文、交互三叉文。横帯直下にキャタピラ文と波状沈線。胴上半部は縄文RL。			
		49	SK—155 H—3 SK—177 I—4 E—5 N—Ⅳ B—18		全面地文縄文RL→口縁・胴部くびれ部に横走する波状隆帯→縦方向に波状隆帯が垂下し、胴部の横走波状隆帯を横切る。10単位。	33.0	6.9	広域接合土壙と土器すてばとグリッド
		50	SK—156	8—1	大型深鉢の口縁部。			
	457	51	SK—159	8—1	胴部は細い1本引きの条線。			
140		52	SK—175	5	円筒形小型深鉢。上から重三角区画横帯、矩形区画横帯、そして胴下半部にひし形状区画横帯と重なる。隆帯に沿ってキャタピラ文。上段と下段はキャタピラ文にさらに三角押文が沿う。三角区画内部に施される三叉文は、三叉内部をけずり出して作る。中段の矩形区画内部は三角押文による波状文。内面胴下半部が黒色化。			
		53			52番の土器の展開図。			
		54	SK—178		台形土器。脚なし。			
		55	SK—178	5	横帯区画は上から重三角区画帯・頸部素文帯・矩形区画帯・楕円（片側のみ）区画帯・そして胴下部は隆帯貼付による懸垂文が垂下する幅広い横帯となる。懸垂文の先端が木の葉状にふくらむ部分がある。隆帯に沿ってキャタピラ文、三角押文、矩形区画内三角押文列、楕円区画内三角押文による波状文。隆帯上には部分的に刻みがある。			
		56	SK—198 SB—53 I—3 N—Ⅳ B—19 B—20 C—19 D—19 E—17	5	内弯する口縁部と膨らむ胴部をもつ大型深鉢。口縁部は重三角（三角＋半円）区画横帯、区画隆帯に沿って2列の三角押文がめぐり、内部に玉抱三叉文が入る。三叉文はけずり出している。胴部は胴上半部半隆起線による横長の矩形区画が6段にわたって並ぶ。区画内には半隆起線に沿って截痕、また最上段と3段目には三角押文による波状文が入る。横帯間に1条ずつ横走半截起線があり爪形文が施される部分がある。			広域接合土壙と住居址と土器すてば
		57	SK—225	5	胴部は2本1組の垂下隆帯2単位が下がり、胴部下端の楕円区画4単位のうち2単位とつながる。隆帯に沿ってキャタピラ文、2列の三角押引文。垂下隆帯間にはけずり出し手法による交互三叉文が縦に並ぶ。なお胴部器面には輪積痕と指頭圧痕が不明瞭ながら残る。図の真横の位置に、2列の三角押文に囲まれた交互三叉文・キャタピラ文によって縦に垂下する文様が施されている。垂下隆帯上に刻み。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		58	SK—232	7	頸部に眼鏡状把手をつける→頸部横走隆帯にはさまれた波状隆帯貼付、胴部は太く扁平な隆帯1本で懸垂文を作る→4本1単位櫛歯状工具による条線。懸垂文の作り方が特異であり、眼鏡状把手の存在も含め井戸尻式期と考える。			
		59	SK—232		深鉢の胴部。4本1単位櫛歯状工具による条線。			
	458	60	SK—344 H—2 H—3 H—4 I—2	8—2	鉢形土器。口縁部に沈線1本めぐらし、胴部は沈線で冂状に区画する。区画内はハの字文。	21.7	6.2	
		61	SK—345 E—6 F—6 SB—43 SK—351	7	底部近くまで垂下する2本1組隆帯により器面が分けられる。幅広く低平な横走隆帯で胴上半部に2段の横帯を作る。横帯内は同様の隆帯により円形文を横S字状につなぐ。隆帯の背が5本1単位櫛歯状工具による条線で粗く加飾されるのは特異である。			
		62	SK—367	8—1	口縁部に集合半隆帯線（斜行線文）、頸部に波状粘土紐。			
		63	SK—367 E—8 E—7	8—4	全面撚糸文、Lの縄をL巻きにしている。厚手でしっかりした感じがする。	16.6	1.6	
		64	SK—372	8—2	口縁部に隆帯を貼付し、沈線で囲んでマド区画を作る。区画内半截竹管による縦の沈線。内面に赤彩が残っている。	17.6	9.3	
		65	SK—376 SB—75 SB—63 SB—53 N—Ⅳ E—20	5	口縁に4単位の耳状突起。口縁部の横帯は重三角区画から成る。三角形区画内は隆帯に沿ってキャタピラ文と2列の三角押文、半円形区画内は隆帯に沿って半截竹管半隆起線と三角押文、内部に三角押文列を充填。以下は全く別の文様となる。半隆起線により横位（1段）・縦位に区画がなされる。1ケ所、縦の区画内に縦長楕円区画がつながって入り余白をけずり出している部分がある。半隆起線には截痕が沿う。			
		66	SK—395 SK—351 SK—345	7	円筒形を呈する深鉢の把手。頂部の渦巻文その他の沈線文で加飾される。把手基部に小眼鏡状把手がつく。内面に深くえぐった穴とそれを囲む三叉文がある。胴部は横走沈線で画した横帯を小円形刺突でびっしり埋める。横帯を横切る短沈線がある。			
		67	SK—395 E—6	7	全面に櫛歯状工具による条線を粗雑に施文。			
		68	SK—396	8—1	頸部に6本1組の竹管整形隆帯を横走させる→胴部3本1組竹管整形隆帯により懸垂文を作る。モチーフは「Ψ」状文と直線垂下文各3単位。→「Ω」状貼付→波状粘土紐→懸垂文上端の「U」状貼付→7本1単位櫛歯状工具による条線。なお頸部の隆帯上に1ケ所のみ半截竹管内面による刻みを施しているが、これはすぐに施文を諦めたらしい。			

S—Ⅳ区　埋甕（遺構外）

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
141	459	1	B—7 埋甕 B—6 A—7 A—8 C—12	7	円筒形の器形。口縁部に無文帯をとり、横走隆帯と大波状隆帯、胴下半部に縄文RL。波形は10単位。隆帯上綾杉状刻み。また横走隆帯上に交互刻みがあり、一部は刻みが半円形に結ばれている。口唇上端は平らである。			
		′2	SK—28	8—1	逆位底部穿孔（欠損とするべきかもしれない）埋甕、住居址に付属するか否か不明。頸部に2本の太い横走隆帯と、胴部に同様の隆帯によるU字状懸垂文2単位。胴部地文5本1単位櫛歯状条線の部分と1本引きの条線の部分がある。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		3	B—5	8—1	逆位底部穿孔埋甕。はじめSB—17の埋甕としていたが位置に疑問があり住居址に帰属することはしなかった。内部より土製円盤3個、有孔薄円板10個、炭化物と骨片少々が出土した。頸部4本の横走隆帯貼付→胴部3・4本1組の並走する隆帯による「⋃」状文と直線垂下文各2単位。隆帯は竹管整形せず間を棒状工具で整形する。隆帯が渦巻く部分の周りは四足状に屈曲したり、波状粘土紐で囲んだりする→地文半截竹管による条線→胴部波状粘土紐。なお隆帯上刻みは半截竹管内側による。	73.7	60.0	
		4	B—5		3番の土器を埋設したピットから出土（おそらく落込み）した大型深鉢の胴下半部～底部破片。2本の竹管整形隆帯と波状粘土紐が垂下。地文は半截竹管による条線。			
		5	C—10	8—1	逆位底部穿孔埋甕。住居址帰属を確定できなかった。口縁部を故意に打欠いている。丁寧な作りの土器。頸部斜格子目文（斜めの集合半隆起線→斜粘土紐）→胴部3・4本1組の竹管整形隆帯による「⋃」状と直線垂下文各3単位。隆帯は途中四足状・S字状に屈曲する。→地文5本1組櫛歯状工具による条線。おそらくその後に隆帯上半截竹管による刻み→頸部上下を画す波状粘土紐を貼付→懸垂文上端の「S」字文を貼付。			
	460	6	G—5	8—1	7番の土器と並んでいた。住居址帰属を確定できなかった。口縁部・底部を故意に打欠き、胴部のみ転用している。頸部に3段の横走波状粘土紐→胴部に2本1組粘土紐による4単位懸垂文を作る。「∩」状のモチーフ。→半截竹管による条線。			
		7	G—5	8—1	内傾する口唇上面に凹線がめぐり、受口状を呈するのが特徴。胴部は、半截竹管半隆起線を幾重にもめぐらす→縦に5単位の波状粘土紐貼付。上端は渦巻状。渦巻の頭をつなぐ様に横走波状粘土紐。縦の波状粘土紐間に1本ずつ垂下粘土紐。→半隆起線上に横方向刻み。上段はC字状、中・下段は逆C字状に、半截竹管による刻み→垂下粘土紐上に同様の刻み。胴下半部を故意に打欠いている。			
		8	B—4	8—1	胴部中央辺にて打欠き下半部を埋甕とする。胴上半部横走沈線、これは半截竹管を用いているらしい。→胴下半部に半截竹管による縦の条線→6単位の粘土粒と垂下する波状粘土紐を貼付。ただし6単位中4単位は、貼付の幅だけ空けて条線を施文したらしい。なお頸部横走沈線間に半截竹管内側を用いた刻み（結節）を施している。			
142		9	SK—09	8—1	単独埋甕。内部より磨石1個・黒曜石製ユーフレ1個、カコウ岩自然石1個、土器片数点が出土し、これらはみな埋甕に伴ったものと考える。土器は現存部容量82ℓをはかる大型のもので、おそらくx把手付大甕を胴部最大径付近で切って下半部を転用したものであろう。文様は5単位の渦巻状懸垂文を3本1組の竹管整形隆帯で作っている。隆帯間を整形しなおしている部分もある。→地文半截竹管による条線→渦巻文を縦につなぐ粘土紐、また鉤状に屈曲する付随貼付文を貼付する。5単位渦巻文は細部に変化があり、渦巻の先端に剣先状文や「Ω」状貼付文などがつく。			
		10	SB—21	8—2	口縁は貫通孔を有する半円形状突起と小突起が3単位ずつ交互に並ぶ。口唇に沈線がめぐる。肥厚口辺が扁平化し、文様も沈線でマド区画が崩れた様な形を描いている。胴部は半円形状突起に対応する位置に3単位垂下隆帯と、その間にY字（渦巻をはさむ）状隆帯2単位、途中渦巻状にはね上がる垂下隆帯1単位をもつ。地文8本1単位櫛歯状工具による条線。	24.1（把手頂まで27.1）	2.9	
		11	F—6	8—4	地文縄文LR→沈線で口縁部にマド区画、胴部くびれ部に2本の横走沈線、その下に3本1組沈線で弧線文を描く。文様は9単位。			
		12	B—6		無文の胴下半部～底部。大型深鉢の一部であろう。			
		13	B—7		底部・無文口縁部を打欠いて埋甕としている鉢形土器。2単位の橋状把手も打欠いている。胴部全面縄文L。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
	460	14	H—1	8	口辺部に2本の隆帯がめぐり、4単位に垂下する隆帯がある。体部にクシ歯状工具による条線地に波状沈線を施す。			
		15	H—1	8	14と並んで検出された。体部に条線と波状沈線が見える。			

S—Ⅳ区土器すてばC 出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
143	461	1	G—9 H—8	8	X把手付大甕の無文口縁部破片。			
		2	H—9 G—9	8	X把手付大甕の無文口縁部破片。			
		3	G—9 G—8 F—9	8—2	4単位X把手をもつ。X把手を結ぶ2本1組の太い隆帯、胴部文様は1本隆帯と沈線による大小渦巻の連続。地文は縦・横・斜方向の一本引き沈線による条線。			
		4	G—9 G—8	8—2	4単位の縦長のX把手はほぼ完存する。胴部は一本隆帯による大小渦巻文。地文は沈線というよりは長い列点状。			
		5	G—9 F—8 E—8	8	X把手部分の破片。図の上下は逆にするべきである。隆帯と太い沈線による小渦巻文が把手の周囲に付随する。			
		6	F—9 E—9	8—2	胴部破片。半截竹管による条線は珍しく斜方向の部分と縦方向の部分とがある。2本1組また1本のみの垂下沈線、蛇行沈線は、一部は条線のあと施文していることがわかるが、詳しい施文順序は判別できなかった。			
	461	7	E—8 E—7 F—7 F—8 F—9	8—2	胴部破片。4本1単位の櫛歯状条線のみ。歯の1本1本の幅が広い。			
	462	8	F—9	8—2	両耳把手付鉢だが、口縁部に文様帯が重なる点が特異である。曽利式のいわゆる肥厚口辺と、加曽利E式の口縁部文様帯（隆帯と沈線による渦巻文とマド区画）が共存する。口唇の突起は5単位か。			
		9	F—9	8—2	比較的小型の土器の口縁部破片。いわゆる肥厚口辺に円文が並ぶ。胴部は1本引き条線。			
		10	G—9 F—8 F—7 F—9 H—7 G—8 G—2 E—3 表採	8—2	調整が丁寧で文様も明瞭な土器。隆帯貼付により口縁部文様帯マド区画と、胴部文様帯冂状区画を、各6単位作る。→5本1単位櫛歯状工具による綾杉状条線、マド区画を作る隆帯に沿う沈線→マド区画内条線、胴部隆帯に沿って沈線→蛇行沈線。			接合すればグリッド広域土器はとれた
		11	G—9 G—8 G—11 H—8 H—9 F—9 SB—50	8—2	口縁部文様帯は隆帯と沈線によるマド区画で、その右端が4単位の波状突起下で渦巻文となる。沈線は雑な施文である。胴部は細い沈線を垂下させたり、逆U字状に施文したりして区画を作り、内部を櫛歯状条線で埋めるが、やはり施文は粗雑である。			接合すればグリッド広域土器はとれた
		12	F—9 F—8 E—9	8—2	口縁部文様帯上端は沈線、下端は弧状隆帯でマド区画を作り、端部が渦巻く。胴部は垂下隆帯により縦長の区画に分かれる。垂下隆帯は途中渦巻くものもある。マド区画内・胴部区画内5本1組櫛歯状工具による条線。			
		13	H—9 G・F—9 F—9	8—2	2単位の把手は欠損。把手は貫通孔を有し、しかも胴部上端の二叉状渦巻文の中央と橋状把手で結ばれていたようである。口縁部に2本の隆帯がめぐり、隆帯上に円形刺突文が並ぶ。胴部は1本隆帯による大渦巻文4単位と、付随する小渦巻文。最後に半截竹管による条線を比較的まばらに施文している。			
		14	G—8 G—8	9	波頂部をもつ口縁部破片。隆帯（マド区画上端のみ明らかだが他は不分明）と沈線でマド区画を作るが、区画下端の沈線は長く伸びて波頂下で渦巻く。区画内5本1単位櫛歯状工具による条線。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
144		15	G－9 G－8 F－7 F－8 F－3 F－4 SB－43	8－2	胴部上端に1本の横走隆帯、その直上に太い横走沈線がめぐるが口縁部文様帯を持たない土器と言えよう。胴部文様帯は1本隆帯による大渦巻文と、付随する小渦巻文。地文は6本1単位櫛歯状工具による条線。			接合すればグリッド広域はとれた
		16	F－9	8－2	胴部上端に横走隆帯1本、その直上に横走沈線が沿う。胴部文様帯はH字状の懸垂文が4単位垂下する。Hの中央に渦巻文。地文3本1単位櫛歯状工具による条線。			
		17	F－9	8－2	壺型土器。2本1組隆帯に沿う沈線による大渦巻文。地文半截竹管による条線。S－Ⅳ区SB－55の32、33番の土器が類例。			
	463	18	G－9	8－2	低い波状口縁を呈する。波頂下に幅広・低平な隆帯を貼付するが隆帯は下方にいくと消滅するごとく判別できなくなる。隆帯間に沈線により冂状区画を作り、区画内地文櫛歯状工具による綾杉状条線と、蛇行沈線。胴部分割が波状口縁と対応しきれなかった為か、1ケ所隆帯を省き、冂状区画がくるべきところを全て磨消して無文とするところがある。	29.2	4.7	
		19	G－8 G－6	8－2	胴下半部、底部のみ残存。胴部は垂下沈線により（おそらく冂状に）区画し、区画内半截竹管による綾杉状条線をまばらに施文。その上に大ぶりな蛇行沈線。			
		20	G－9	8－2	地文4本1単位櫛歯状工具による条線を施文→中央に渦巻文をはさむH状の懸垂隆帯、胴下半部のみのステッキ状隆帯を貼付→蛇行沈線、隆帯に沿ってナデ。なお底部に薄く網代圧痕が残っている。			
		21	H－9 SB－50	8－2	口縁部がゆるやかに内弯する浅鉢。文様は上端を1本の横走沈線を雑に施文して画し、以下体部全体に6本1単位櫛歯状工具による条線を施文する。条線は縦・斜方向に短く流れ、一部は蛇行している。			
	463	22	G－9		胴下半部に垂下隆帯と、半截竹管によるまばらな綾杉状文がある。素地はずい分赤っぽい土器であるが、内外面とも塗彩かと思われる程黒光している。			
		23	D－9 G－9	8－2	胴下半部に垂下隆帯と、半截竹管による縦方向条線が残存する。			接合すればグリッド広域はとれた
		24	G－9	8－2	大型深鉢（X把手付であろう）の胴部破片。2本隆帯とその脇をなぞる沈線による大渦巻文と、付随する小渦巻文。地文は6本1単位櫛歯状工具による条線。			
		25	H－9 H－8 G－9 SB－50	8－2	4単位の高い突起は、頂部から外面にかけてS字状に深くえぐられる。口唇には沈線がめぐる。突起のS字状文の両脇に、特徴的なC字文・円形文が付随する。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線によるマド区画8単位。胴部文様帯は沈線により全体が「田」の字状に区画される。口縁部・胴部区画内は、9本1単位櫛歯状工具による列点文。ただし胴部施文順序はおそらく列点文→沈線による区画。			接合すればグリッド広域はとれた
		26	G－8 H－8 E－7	8－2	胴下半～底部が残る。2本1組沈線が8単位垂下し、区画内は半截竹管による綾杉状短条線が入るが、「ハ」の字文に近くなっている。			
		27	G－8 G－9 F－9	8－2	2単位の大ぶりな把手はX把手の形状。口唇は内面に肥厚する。文様は横走隆帯に上下を画された横帯で、横帯内は縦の隆帯と渦巻文、「ハ」の字文。			
	464	28	G－8 G－9 I－8	8－2	口縁部に横走沈線1本、以下の胴部を沈線で冂状に5単位に区画、区画内は先端の鋭い棒状工具にて「ハ」の字文を充填。			
		29	G－8 G－9	8－2	口縁よりやや下がった位置に2本の横走沈線があるので口縁の無文部が広い。以下、縦長楕円形の垂下沈線・頂部が蕨手状となる垂下沈線の間を、「ハ」の字文で埋める。			
		30	G－8	8－2	口縁から隆帯を垂下させて器面を分割し、沈線で冂状区画を描き、区画内「ハ」			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
			F—9		の字文。器形にくびれなく、底径は小さい。			
		31	G—9	8—2	器形のくびれは失っている。波状の突起1ケ所残存。口縁直下をめぐる2本の			
			G—7		横走沈線は波頭下で屈曲してそのまま垂下し、変則的な冂状区画をつくる。そ			
			G—8		の区画内はやはり2本1組の垂下沈線で分割される。区画内は短沈線による綾			
			H—8		杉状文。もっと短い沈線でほとんど「ハ」の字文となるところもある。			
		32	G—9	8—2	文様は垂下沈線・区画沈線と区画内「ハ」の字文。区画沈線ばかりでなく垂下			
					沈線も下端がU字に閉じるものがある。			
		33	G—8	8—2	器形にくびれはない。口縁に1ケ所波状部分が残る。波頂下の渦巻文は横走沈			
					線とつながっている。基本的に2本の沈線で冂状に区画し、区画内6本1単位			
					櫛歯状工具による綾杉状条線と蛇行沈線。なお渦巻文直下・冂状区画外の余白			
					部分に縄文RLを縦にころがしているのは特異である。			
		34	H—8	9	口縁部突起の片側がふくらみ、上面がくぼんでいる。口縁部文様帯は隆帯（不			
					明瞭だが確かに盛上げている）と太い沈線によるマド区画。区画は楕円形と円			
					形をつないだ形である。区画内・胴部地文縄文LR。胴部に頂部がワラビテ状			
					となる蛇行沈線。			
		35	G—9	8—2	口縁部文様帯は沈線による横長楕円区画のみとなる。胴部文様帯は渦巻文と垂	19.3	1.6	
					下沈線を組合わせた特異な形の沈線文と、ほとんど振幅のない蛇行沈線各8単			
					位。地文縄文RL。縄文施文は蛇行地文より先だが、渦巻文＋垂下沈線の特異			
					な沈線文との先後関係は判別しかねる。内面をよくみがいている。			
		36	F—9	8—2	小型の両耳把手付壺。把手の形態は橋状。頸部に隆帯による横帯をつくり、隆	15.5	1.0	
					帯上に沈線で横長楕円を描いていている。胴部は隆帯と沈線により4単位の渦			
					巻文を描く。渦巻直下より隆帯垂下。			
	464	37	G—9	8—2	隆帯貼付による4単位渦巻文と、渦巻文下に垂下する隆帯。渦巻を横につなぐ	24.0	3.6	
			G—8		様に横走沈線を施している様だが、雑な施文なので不明瞭。			
			H—8					
		38	H—9		浅鉢の胴下半部、底部。底部周縁は粘土を貼付して盛上げ、揚底となっている。			
					胴部は低平な隆帯が放斜状に配され隆帯に沿う沈線がU字状に区画を作り、区			
					画内は5本1単位櫛歯状工具による条線がおそらく綾杉状に入ると思われる。			
		39	G—9		不明瞭ながら網代圧痕あり。			
		40	G—9		底部付近の破片。縄文RL。			
		41						

S—Ⅳ区　グリッド出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
145	465	1	C—7	3	口縁部がくの字形に張出し、胴部がすぼまり、底部が張出す。口唇はやや外傾し上端に刻み。地文縄文ＬＲを口縁部は横、胴部は縦方向に施文→横に渡す橋状把手を貼付、ひとつ残存。→口縁部に半截竹管による横走沈線を何重にも施文、上端は波状沈線とし、下端は短く途切れさせている。部分的に半截竹管を押引いて結節とする→胴部、図の正面に垂下沈線、ただしこれは１ケ所のみ。不明瞭ながら網代圧痕残る。			
		2	B—1	3	口縁の幅の狭い内接部分に文様がつく。４単位の突起のうち２単位は、両側の環状の隆帯がせり上がった間の部分に６本の短沈線を引く。２単位はｘ字状。→縄文ＲＬを施文→２本の沈線間を半截竹管で交互に刺突して作る鋸歯状文を施文。	14.5	6.5	
		3	A—4 A—3 A—5 B—3 B—4	4	口縁部の低い突起からＹ字状に隆帯が下がり縦の隆帯上に刻み。口唇直下にキャタピラ文、その下に複合鋸歯文がめぐるがこれは角押文による横線２本の間に半截竹管先端による交互刺突を施している。その下にＹ字状文が並ぶがこれも角押文による。以上口縁部文様帯の下に一段の楕円区画文。胴部には隆帯を屈曲させて作る懸垂文。			
		4	B—3 A—3	4	口唇外面が断面三角に肥厚し刻みが施される。口縁部に横長矩形区画と凸形区画の組合せの横帯一段。区画隆帯に沿って１条の角押文、矩形区画内ではそれに刺突が沿い、さらに内部を斜めの角押文列で埋める。胴部はＹ字状文からクランク状に垂下する隆帯とＷ字状文各２単位。隆帯には１条の角押文が沿い、また２条１組の角押文が単独で垂下したり山形文を作ったりする。なお器面全体に輪積痕と指頭圧痕を残す。			
		5	G—8		深鉢の胴部破片。横方向の整形痕が残っている。			
		6	G—5	5	器面は５段の横帯から成る。口縁部より重三角区画（三角＋半円）帯・三角区画帯・楕円区画帯・再び三角区画帯・矩形区画帯と重なる。上２段は区画隆帯に沿ってキャタピラ文（もしくは幅広三角押文）と２条の三角押文がめぐり下３段は幅広三角押文、三角区画内はさらに幅狭三角押文がめぐる。楕円・矩形区画内は三角押文による波状文が入る。幅広・幅狭の三角押文の施文具を別個に考える必要はない。			
		7	G—5	5	口縁部横帯は変形楕円区画、楕円の右側が逆Ｃ字状に屈曲する。垂下する短隆帯上は刻みではなく、粘土紐を横渡ししている。狭い無文帯をはさんで２段の楕円区画横帯。胴下半部の広い素文帯は無文ではなく、不明瞭ながら縄文ＲＬが残存している。最下段に再び２段の楕円区画横帯。隆帯に沿ってキャタピラ文、区画内に三角押文による波状文。			
	465	8	G—5	6	丁寧な作りの小型深鉢。４単位の垂下隆帯で器面を分割。２単位は胴部中央で渦巻き、２単位は弓状の隆帯が縦に２つ逆向きに連なる形をとる。隆帯上・隆帯側面に刻み。分割された器面を半截竹管半隆帯線による縦位区画で埋める。区画の形は基本的に縦長矩形だが変化に富む。区画内横走沈線列・格子目沈線・交互刺突文など。	22.9	2.0	
		9	C—1	6	抽象文（サンショウウオ文）の尾部のみ残る。隆帯に沿ってキャタピラ文、波状沈線。地文縄文はＲＬ。内面はいちめんにスス・タール状炭化物の付着が見られる。			
		10	G—7		台形土器。台部裏面・脚に囲まれた部分に先端の細い工具で「Ｘ」印を刻んでいる珍しい例。脚部接地面は故意に打欠いて欠損させたのであろう。			
		11	E—11		台形土器。台と脚の接合する部分が失われている。台が比較的薄い。脚部接地面は擦り減らない。			
		12	A—6 B—5 SB—12		台形土器。脚部がきれいに剥がれている。裏面中央に円形のくぼみがあるが文様か否か不明。			
	466	13	C—3	6	把手１個残存。山形を呈する把手の一辺が膨らみ中央にくぼみを持ち、他の一	36.1	4.7	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
					辺は頂点から刻みが連続し下端で渦巻隆帯となる。口縁無文部をはさんで胴部全面縄文０段３条ＲＬ。低い屈折底を持つ。			
		14	B—7 B—6 A—7	6	４単位の波状口縁をもつ。口唇外帯に低平な隆帯上に縄文施文した縄文帯がめぐり、下方の弧状縄文帯と向き合って対弧状モチーフを作る。波頂下に円形の縄文帯。胴部は波頂に対応する位置に縦に２本の短隆帯をつける。隆帯上刻み。隆帯に沿って波状沈線。文様４単位のうち図の裏側の１単位は口縁部・胴部ともに変化あり。なお縄文は全て０段３条ＲＬ。			
		15	G—5	6	小型深鉢。口縁部はおそらく４単位の波状口縁を呈し波頂下に円形貼付があったのだろうが、打欠いている。円形貼付間に、隆帯による４単位の文様。２単位は上端が渦巻文となる逆Ｓ字状文・１単位はＳ字状隆帯・１単位（図の正面）は上端の双渦巻文と垂下隆帯。渦巻は隆帯上に沈線をひいて作る。隆帯上刻み。縄文は０段３条ＲＬ。	12.8		
		16	G—5	6	小型深鉢。全面縄文０段３条ＲＬ。内面の口縁部から胴下半部まで赤彩が残る。			
146		17	B—3 C—3	6	無文口縁部が内外に肥厚する。胴上半部がふくらみ下半部が直線的にすぼまり、低い屈折底に至る。胴部全面縄文０段３条ＲＬ。	28.5	4.1	
		18	C—4 N-ⅢX-20	6	深鉢の胴部破片。縄文ＲＬ上、胴上半部に３本の横走隆帯。隆帯上刻み。			接合域グリッド土器とすれば
		19	G—6	6	胴上半部の眼鏡状把手とつながって直立する円形突起、おそらく１単位。突起頂部はくぼむ。眼鏡状把手下部にＪ字状にはね上がる隆帯。文様は沈線による対弧状モチーフを主体とするがこれは西関東の小型円筒形深鉢によくみられる。対弧状文の余白は三叉文状削り出し、沈線渦巻文、縦列刻みなどを施文。胴下半部縄文０段３条ＲＬ。	27.5	3.4	
		20	C—4 C—3		口縁部が肥厚。刻み目をもつ渦巻状隆帯による突起が残存。胴部は縄文０段３条ＲＬ上に、円形文を描いて中を磨消している。			
		21	I—4	7	胴部縄文０段３条ＲＬ。ただし縄文の代わりにペン先状工具による三角刺突列を施している部分がある。胴下半部内面にスス付着。			
		22	A—9	7	内折口唇上に、２つのワッカ状の隆帯が両側からせり上って結合してできた高い把手１単位が立ち上がる。把手の内外に渦巻文、外側の渦巻文からは隆帯が垂下しその背は連鎖状に押圧されている。把手裾の隆帯のうち片側の先端にＵ字状の貼付がつく。器全面地文縄文０段３条ＲＬ。把手下とその反対側に２個１組、その中間の位置に１個ずつ、計６個の円形磨消文が入り、磨消による幅広沈線がめぐる。			
	467	23	C—4	7	太い隆帯により三角形文・円形文を作る。隆帯上に刻み、交互刻み。三角区画内に沈線による三叉文・渦巻文・縦列沈線などを充填する。			
	467	24	C—4		隆帯の背を押圧した連鎖状隆帯をもつ胴部破片。いわゆる樋形文土器の胴上半部か。			
		25	SⅢ M-9	7	Ｓ—Ⅲ区グリッド出土土器であるが図の作製ミスでここに入る。胴上半部に縦列沈線とそれら沈線の下端を画す横走沈線。内面胴下半部にスス付着と器壁の荒れ。			
		26	NⅣA-20 B—18 A—19 SⅣ B—1	7	N—Ⅳ区土器すてばB出土土器として配置すべきだったと考える。上端は接合面にてきれいに切っている。胴部文様は幅広い隆帯を貼付して幾何学的（ひし形）文様を作り、隆帯上に半截竹管による集合隆帯線を施文、さらに部分的に一列おきに爪形刻みを施す。のちに隆帯外の無文部を丁寧にみがいている。胴下半部にわずかに横走隆帯が残り隆帯上縄文ＲＬ。珍しい文様である。			
		27	E—9	8—1	くびれのない器形。口縁より２本１組の隆帯が２単位垂下し、隆帯上に刻み。さらにその中間の位置に口縁無文帯下より２本１組隆帯が２単位垂下するが１単位は刻みを持たない。口縁無文帯と胴部を横走沈線で画す。胴部１本引きの条線。	32.3	6.0	
		28	B—8	8—1	頸部横走半隆起線→胴部竹管整形隆帯による「⋃」状文・直線垂下文各３単位を作る。「⋃」状文の下底部の渦巻文も貼付と竹管整形の手法による→逆Ｓ字状貼付→波状粘土紐→地文半截竹管による条線。			
		29	C—1		無文口縁部の破片。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		30	B—6	8—1	頸部横走半隆起線、胴部は4本組竹管整形隆帯による懸垂文→波状粘土紐→地文半截竹管による条線。			
	468	31	C—11	8—1	頸部は半截竹管による3条の半隆起線→波状粘土紐。胴部の3単位の主モチーフは「⋓」状懸垂文と直線垂下文が結びついた形と考える。いずれも3本1組竹管整形隆帯を用い波状粘土紐が沿い、「Ω」状付随貼付文をもつ。すべての施文が終了してから、地文の半截竹管による条線。	45.4	19.7	
147		32	E—3 E—6 SK—360 SK—361 NⅢ Y—17 NⅣ A—18 A—19 B—18 D—18 F—17	8—1	頸部斜行する集合半隆起線→頸部上端を波状粘土紐、下端を横走隆帯と波状粘土紐で画す。胴部は4本1組竹管整形隆帯による（おそらく逆J字状の）懸垂文。胴部文様帯上端に1ケ所竹管整形隆帯による渦巻文がある。→隆帯に沿って波状粘土紐。また懸垂文先端に三つ葉状の粘土紐装飾→細い半截竹管による縦の条線。E—3グリッドを中心に、土器すてばなど広範に破片が散らばっていたものである。			広域接合土器すてばと遠く離れたグリッド・土壙間
		33	B—5 S—4	8—1	頸部に3本の粘土紐がめぐり、下端に波状粘土紐が沿う。胴部は2本1組・4単位の垂下粘土紐とその両側に沿う波状粘土紐。→地文6本1単位櫛歯状工具による条線。粘土紐は細く剥落著しく、全体にこの時期には珍しく稚拙な作りである。			
		34	B—5 B—4	8—1	口縁部に半截竹管半隆起線による重弧文（おそらく5単位）施文→口縁部蛇行粘土紐貼付。その直下に続く2本1組垂下隆帯によって胴部器面が分割される。3本1組竹管整形隆帯による大渦巻文は、横に連結されている。→胴部地文細い半截竹管による条線→頸部くびれ部の横走波状粘土紐を貼付。			
		35	C—9 SB—12 SK—397 B—6 C—4 E—3 F—4 F—7	8—1	口縁部に半截竹管による斜行線文、頸部に同じ施文具による斜行集合半隆起線文を施文（この種の土器は必ず口縁部の施文の方が粗雑である）→胴部地文半截竹管による条線をまばらに施文。おそらくこの後に、頸部文様帯の上下を画す様な形で太い横走隆帯を貼付。さらに胴部文様帯上端にW字状・渦巻状に屈曲する隆帯がめぐる。			広域接合離れたグリッド・土壙間
		36	F—8	8—1	おそらく8単位X把手を持つ。3本1組竹管整形隆帯により把手間をつなぎ、胴部懸垂文を形作る。懸垂文は逆J字状を呈すると思われるが先端のみ残存。先端には逆ハート状文などが貼付される。胴部地文は半截竹管による条線をしっかりと施文。			
	469	37	E—8 F—8	8—1	浅鉢の胴部のみ残存。屈折部上半が文様帯となる。中央に円形文とそれをつなぐ2本1組横走隆帯がめぐる。円形文から胴下半部にかけて短い隆帯が垂下する。地文は沈線による斜格子目文。文様帯上端は隆帯、下端は沈線で画す。S—Ⅲ区グリッド43番の浅鉢と類似している。			
148	469	38	B—3 B—4 C—3	8—2	口縁部文様帯は上端が横走沈線、以下隆帯と沈線による渦巻つなぎ弧文と半円形（マド）区画2単位。区画内半截竹管による条線。胴部文様帯は2本1組垂下沈線で器面分割し、口縁区画内と同一施文具による綾杉状条線と蛇行沈線を施文。			
		39	E—8 F—8 E—5	8—2	口縁部文様帯は隆帯上にマド区画とその端部の渦巻文を沈線で描いているのだが稚拙な感じがする。渦巻文上は口縁がやや突出する。胴部文様帯は2本1組沈線をいちおう渦巻文下に垂下させるがずれている。マド区画内・胴部地文5本1単位櫛歯状条線。			
		40	F—8 F—9	8—2	口縁部は所謂肥厚口辺の表現が省略化されたものと考える。8単位の山形突起は頂部がくぼむもの・くぼまないもの各4単位が交互に配される。突起下に円形のくぼみ。また深くえぐり出した小円形文が並ぶ。胴部は垂下隆帯→半截竹管による条線→隆帯に沿う冂状区画沈線、蛇行沈線。			
		41	E—8 E—9 F—8	8—2	肥厚口辺が扁平となり簡素化する。頂部に渦巻文を冠し貫通孔を有する把手と山形状の小突起各3単位が並ぶ。口唇に沈線1本がめぐる。扁平に盛上げた口縁部には沈線による円形文・渦巻文。胴部文様帯は2本1組沈線で6単位に分割され、区画内は半截竹管による縦・斜方向条線と蛇行沈線。	27.2	2.8	
		42	E—3	8—2	口縁の4単位突起は隆帯と沈線により小渦巻を形作る。口縁部文様帯は、突起のうち2単位から隆帯が「八」の字状に垂下して区画を作る。区画内・また胴部地文は半截竹管による縦の条線。胴部の2本1組・3単位の蛇行沈線は大ぶりで粗雑である。胴下半部内面にスス付着著しい。	22.0	2.4	

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さcm	容量ℓ	備考
		43	E—3 G—3 G—4 G—8 F—3	8—2	口縁部文様帯は上端の横走隆帯とそれを基点とする1本隆帯による弧状文・弧状文右端の渦巻文からなる。いきおいマド区画渦巻文も下に垂れ気味といった感じになる。胴部は口縁部渦巻文・弧状文の下に隆帯が垂下して細長い区画を作る。隆帯に沈線が沿う。区画内半截竹管による条線と、蛇行沈線。			
		44	E—8 F—8	8—2	口縁部文様帯は上下を横走隆帯で画し、5単位の隆帯渦巻文を入れる。隆帯に沈線が沿う。胴部文様帯は口縁渦巻文下の垂下隆帯で区画を作る。口縁部・胴部地文は7本1単位櫛歯状工具による条線。胴部区画内に大ぶりな蛇行沈線。胴下半部内面にぐるりとスス付着。	27.3	4.5	
	470	45	C—9 C—8	8—2	X把手は5または6単位・胴部大渦巻文は幅広く非常に低平な隆帯を貼付しその上を3～4本の太い沈線をたどり、隆帯を2～3本に分けて見せる効果を上げる。ただし隆帯を貼付せず直接沈線を引く所もある。とにかく隆帯があまりに低平なので貼付がある否か判別が困難。X把手をつなぐのは沈線。胴部半截竹管による条線。			
		46	E—9 F—7 F—9	8—2	x把手はおそらく4単位。胴部は4単位大渦巻文と付随する小渦巻文。X把手をつなぐ隆帯を含め、隆帯はいずれも低平な隆帯を貼付した後にその上・脇に沈線を引き、2本隆帯に見せている。胴部地文半截竹管による条線は渦巻文に対し放射状である。			
		47	E-8 E-8 F-7 F-4	8—2	x把手はおそらく4単位。胴部に2本の隆帯・隆帯沿う沈線により渦巻文を描いていたと思われる。地文は1本引きの条線を大雑把に施文。			
		48	D—3 1片のみ E—3	8—2	X把手は4単位。X把手をつなぐ隆帯・胴部大渦巻文とも低平で幅広な隆帯を貼付し、隆帯上に太い沈線を引いて2本隆帯に見せる。胴部地文の半截竹管による条線を非常にきっちりと施文して、その後に隆帯脇を沈線でなぞる。			
		49	E—7 F—8		無文の口縁部破片。X把手付大甕のものか。			
		50	H—8 G—9 H—9 G—8	8—2	X把手は4単位。2本1組隆帯が把手をつなぐ。胴部は1本隆帯による大渦巻文。隆帯に沿って沈線。地文は櫛歯状工具による条線。			
	471	51	H—8 H—9 G—9 F—9	8—2	X把手付の土器にしては小型で、胴部がほっそりしている。把手は4単位。1本隆帯と隆帯間沈線によって大渦巻文と付随する小渦巻文を表現する。一部、2本隆帯で文様を作るところもある。胴部地文は無文。内面胴下半部～底部の黒色化著しい。	41.2	9.4	
	471	52	E—8	8—2	X把手は2単位。X把手をつなぐ隆帯・胴部の大渦巻文ともに1本隆帯と隆帯脇の沈線により表現される。胴部渦巻は部分的に2本隆帯からなる。地文は6本1単位櫛歯状工具による条線。文様施文は全体に粗雑。無文口縁部が長めである。			
		53	E—8 E—9 D—3	8—2	胴下半部にいくつかの懸垂隆帯が残る。2本1組の弧状隆帯から太い隆帯が垂下する他、先端が渦巻くJ字状隆帯、単なる垂下隆帯がある。隆帯に沈線が沿う。斜めの条線は半截竹管による。			
		54			この図は誤り。実は前頁の47番の土器の胴下半部と同一。			
		55	E—2 E—3	8—2	X把手は4単位。X把手をつなぐ隆帯と胴部の大渦巻文は低平な1本の隆帯による。地文のまばらな条線は竹管の背状の施文具で1本ずつ引いている。			
149		56	F—9	8—2	両耳把手付鉢。把手はX把手の背が上向きに平にされ、太い沈線で渦巻文が施されるもの。把手を下方から見るとその沈線が把手下部の貫通孔の周囲をめぐり、いわゆる肥厚口辺の把手と同じ作り方であることがわかる。文様帯は上下を横走隆帯で画し、間の渦巻文で区画を作る。区画内4本1単位櫛歯状条線→区画隆帯に沿う沈線。			
		57	C—7・8 F—8	8—2	4単位のX把手をもつ鉢。X把手の上下をそれぞれ横走隆帯でつなぎ、その部分が横帯となり、把手横に渦巻隆帯。胴部は1本隆帯による大渦巻文。隆帯は両脇をなでつけてはりつけるだけで形も整えない。また4本1単位櫛歯状工具による条線を施す部分があり、全体に粗雑な施文をしている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	472	58	G－9 H－8	8－2	口縁部に横走沈線1本。その下の隆帯は不規則で、途中隆帯渦巻文をはさんで連結し、また隆帯上に沈線で小渦巻文（「c」字状）を描く所もある。その横走隆帯から下がる垂下隆帯の位置も不規則で、胴部区画の幅も形もまちまちである。隆帯に沿って沈線。区画内は櫛歯状工具による綾杉状条線と、蛇行沈線。			
		59	G－4 F－4	8－2	口縁部はおそらく4単位の波状部分をもつ。口縁部文様帯は波頂下の渦巻文と、くずれたマド区画の表現。横走沈線をはさんで胴部文様帯は、2本1組垂下沈線と6本1単位櫛歯状工具による条線。			
		60	C－7 C－8	8－2	胴部文様帯は横走隆帯と垂下隆帯により冂状区画5単位を作る。区画内半截竹管による綾杉状条線と蛇行沈線。ただし1つだけ非常に狭い区画があり蛇行沈線もない。	29.0	4.6	
		61	G－9 G－8 H－8	8－2	口縁部がゆるやかに内弯する器形は珍しい。口縁部に横走沈線1本、胴部に垂下する蛇行沈線9単位。胴部地文は8本1単位櫛歯状工具による条線だが方向は不規則。	25.0	2.8	
		62	H－4	8－2	胴下半部に2本1組沈線が6単位垂下→6本1単位櫛歯状工具による綾杉状条線→蛇行沈線。			
		63	E－3	8－2	胴部に6本の垂下隆帯。間に4本1単位櫛歯状工具による条線と蛇行沈線。			
		64	E－6	8－2	口縁部に横走沈線1本、やはり沈線で胴部に冂状区画を描く。口縁部に渦巻文が入ったであろう。区画内6本1単位櫛歯状工具による条線→蛇行沈線。			
		65	B－3	8－2	胴部2本1組垂下沈線→半截竹管による綾杉状条線→蛇行沈線。			
		66	E－7	8－2	口縁部に横走沈線2本、胴部に2本1組垂下沈線おそらく4単位。→区画内に1本ずつ蛇行沈線が施されるが、垂下沈線のすぐ隣にくる部分がある。→半截竹管による横・斜方向条線。			
		67	A－6	8－2	横走隆帯と6単位の垂下隆帯により冂状区画を作る。区画内は半截竹管による条線を斜方向に無雑作に施文。1ヶ所だけ蛇行沈線が入る。	24.8	3.6	
		68	F－9 E－9	8－2	口縁部に横走沈線1本、胴部に沈線による冂状区画。区画内は6本1単位櫛歯状工具による縦方向条線のみ。			
		69	F－9	8－2	口縁部に幅広い横走沈線1本→胴部地文半截竹管による縦方向条線→胴部に蛇行沈線が数本垂下する。			
		70	F－8 E－8	8－2	口縁部に幅広い横走沈線1本→胴部地文4本1単位櫛歯状工具による条線→2本1組垂下沈線。			
		71	F－9	8－2	胴下半部に2本1組垂下沈線→半截竹管による綾杉状条線→蛇行沈線。内面に明瞭にスス付着。			
150	473	72	E－7 E－6	8－2	口縁部に横走沈線1本。櫛歯状工具による縦の条線と蛇行沈線。	22.6		
		73	E－9 F－9	8－2	口縁部に横走沈線2本、うち下の1本は胴部条線施文のあと・蛇行沈線施文の前に引いている。胴部は半截竹管による斜めの条線と9単位の蛇行沈線。			
		74	F－8 E－9	8－2	口縁部にまがりくねった横走沈線1本。胴部は4本1単位櫛歯状工具による条線上に、不規則な間隔で蛇行沈線。			
		75	C－4	8－2	4単位の波状口縁をもつ。口縁直下に横走沈線を雑に引いているが条線より後の施文。胴部地文7本1単位櫛歯状工具による横方向の条線→蛇行沈線。			
		76	J－11 I－11	8－2	1本の横走沈線と、胴部に櫛歯状工具による条線。			
		77	F－9	8－2	胴部全面に縦方向のまばらな条線を1本ずつ施文。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	473	78	G－6 F－6，F－7 F－8，H－7	8－2	横走沈線1本と、5本1単位櫛歯状工具による条線。	16.1	3.5	
		79	B－6		表面の磨滅著しく、不明瞭ながら全面に縄文RLを施していると思われる。内面は胴下半部を中心にスス付着、器壁の荒れが甚だしい。	22.5	3.5	
		80	E－9	8－2	胴部文様は沈線によるY字状文3単位、Y字の三叉部分に渦巻文（もともと渦巻文のくる所であろうがC字・円形となっている）が入る。1ヶ所だけ2本1組の垂下沈線がある。地文は細い半截竹管による条線。			
		81	B－7 SB－78 B－5	8－2	文様は非常に粗雑で、形が崩れている。横走沈線1本で胴部を分け、上半は2～3本1組沈線で弧状文、斜沈線文。下半は2本1組沈線で逆U字文。沈線文の間隙にまばらに半截竹管による条線を施文。横と縦が重なる所も、斜方向も、綾杉状となる所もある。			
		82	E－7	8－2	胴部に垂下隆帯5単位。地文は櫛歯状工具による条線。			
		83	E－8	8－2	垂下沈線と、先端の鋭い工具による綾杉条線と、蛇行沈線。内面に著しくスス付着し、一部にオコゲが残っている。			
		84	E－9	8－2	小型深鉢。胴部に隆帯貼付による大渦巻文。地文は3本1単位櫛歯状工具による条線。木の葉底。	12.7	0.7	
		85	E－9	8－2	口縁部に横走隆帯1本、以下隆帯貼付による大渦巻文とそれに付随する小渦巻文→半截竹管による条線→隆帯に沿ってナデ。	17.8	1.6	
		86	D－3	8－2	沈線のみで文様を描く。口唇は内面に肥厚。口縁部に横走沈線1本、以下通常は低平な隆帯と沈線による文様を、3本1組の沈線で表現している。半截竹管による条線も、珍しく横方向に流れている。沈線→条線の順序であろう。	21.5	3.4	
	474	87	E－9	8－2	底面に沈線で渦巻文を描く特異な土器である。胴部は隆帯貼付による大渦巻文3単位→半截竹管による条線→隆帯に沿ってナデ。			
		88	D－3	8－2	低平な隆帯と隆帯脇・間の沈線により文様を作るが、沈線が太くしっかりしているので隆帯がえぐり出されている様な感じを受ける。口縁部に横走沈線1本、胴部に大渦巻文。おそらく半截竹管による条線。	26.4	7.6	
		89	D－8 D－7 C－7	8－2	隆帯で大渦巻文を作る。隆帯に沿って太い沈線。半截竹管による条線。			
		90	H－1	8－2	口縁部に横走沈線1本、その直下に4単位あるいは5単位の渦巻文とそれをつなぐ横走沈線。胴部文様帯は基本的に3本1組沈線により方形に区画。ただし下半は方形区画の数が多く縦長である。この下半の縦長方形区画は角が丸味を帯びる傾向がある。沈線は浅く施文。胴部区画内はハの字文。			
		91	D－6	8－2	沈線で区画し、1本引きの綾杉状文を施文。			
		92	G－8 G－7，F－8	8－2	口縁部に長楕円形区画、その合い間の位置の胴部に縦長楕円区画を施す。胴部の区画の間隙にハの字文。	14.8	3.2	
151		93	B－7 C－7	8－2	7単位の波状口縁をもつ浅鉢。浅鉢の口縁が内折し、その上に上向きに面を形成する波状口縁が作られている。波頂間に両端に渦巻文をもつ沈線と、それに沿う沈線を施文する。内面全体から口縁の上向き面まで朱彩が残っている。	14.5		
		94	F－8 F－9	8－2	口縁部に横走沈線1本。内外面とも口縁部近くにわずかに朱彩が残る。	19.2		
		95	E－3 F－3	8－2	口縁部に横走沈線1本のみ。胴部無文。			
		96	D－2 E－2，G－2	8－2	口縁部文様帯は2本の横走隆帯の間に円形隆帯を並べる。胴部地文は縄文RL、ただし1ヶ所、器周の1/6程度はLの縄をころがす。いず	31.8		

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	474				れも縦ころがし。縄文地文上に沈線を垂下させるが、沈線は細長い逆U字状文を呈している。			
		97	SB－30 C－7 SK－46	8－1	眼鏡状把手をもつ鉢であるが把手の単位は不明。把手は上下左右とも貫通しない。把手から横に半截竹管による半隆起線2本1組が伸びて横帯をつくる。横帯内は半截竹管内面の両端を用いた2個1対の刺突文を入れる。胴部は縄文RL、ただしころがす方向は不規則。縄文→半隆起線の順序が読みとれるが全体としては横帯の方が先であろう。			
	475	98	C－4	8－4	口唇は内面に肥厚し、上面に1本沈線をめぐらして二重口縁とする。全面地文撚糸文、Lの縄を左巻にした原体を用いるらしい。口縁部文様帯は2本1組隆帯による渦巻つなぎ弧文、ただし厳密には渦巻ではなく逆S字状の屈曲である。隆帯に沿って沈線、その沈線で半円形区画を描いている所もある。			
		99	H－1	9	大木式によく似た形態の浅鉢がある。口縁部の2ヶ所の山形突起は位置が偏っており、本来3単位を目標としていたと思われる。口唇に沈線がめぐり二重口縁を呈す。口縁部文様帯は地文縄文RL上に、2本1組隆帯による渦巻文とそれを連結して伸びる弧線文。また2ヶ所に蛇行粘土紐がつく。隆帯には沈線が沿う。	12.0	1.2	
		100	H－4 I－4	8－4	口唇上面に1本沈線がめぐる。全面地文撚糸文、Lの縄を左巻きした原体を使う。口縁部文様帯は2本隆帯による渦巻つなぎ弧文6単位。胴部文様帯はくびれ部やや下の2本の横走沈線と、それ以下に展開する沈線文。横S字状の渦巻文が横につながる。			
		101	A－7		胴下半部のみ残存。地文撚糸文はLの縄を右巻きにした原体を用いる→2本1組沈線による波状文。			
		102	B－5 B－6		口縁部無文、胴部全面縄文LR。			
		103	I－4 G－3 H－4，I－2		頸部くびれ部に横走隆帯がめぐる。以下胴部全面縄文RL。			
152		104	A－4 A－3 A－5	8－4	胴部全面地文縄文RL→粘土粒を貼付し、その下に波状粘土紐を垂下させる。			
		105	H－3	8－4	全面地文RL→口縁部に2列の刺突文がめぐる。口唇が内傾。内面胴下半部にスス付着、黒色化。同じ位置の外面は器壁の荒れが甚だしい。			
		106	E－8 E－7 SK－367	8－4	全面地文撚糸文、Lの縄を左巻きにした原体を用いる。内面胴下半部のふくらむ部分を境に、その上部がスス付着により黒色化。	16.5	1.7	
		107	C－7 E－8，C－3 C－6，D－7 N－Ⅳ　C－19	8－4	胴上半部くびれ部の内面の稜がはっきりしている。全面地文縄文LRを施文の後、おそらく6単位、口縁から結節をころがしている。	24.0		広域接合 土器すてば と離れたグリッド
		108	E－9	8－4	全面縄文RL。口縁におそらく7単位の突起が存在したであろう。口唇が内側に突出し、その上面に1本の沈線がめぐる。			
		109	A－4 A－5 SB－07	8－4	胴部地文縄文は特殊な縄に見えるが R{ℓ(太)＋ℓ(細) / ℓ(太)＋ℓ(細)} と考えた。			
	476	110	E－9 F－9	8－4	全面縄文RL。非常に粒の大きい縄である。内面胴下半部にスス付着が明瞭。	23.3	3.3	
		111	G－8	10	全面地文縄文LRを縦に施文→沈線で縦長の逆U字文を施文。逆U字			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	476		G－7，H－6 土器すてばC		区画の内外とも磨消した痕跡はないが、1ヶ所細長い区画の内部に縄文の見えない部分がある。			
		112	E－9		無文	11.4	1.8	
		113	F－3		ミニチュアの無文深鉢。	7.1	0.05	
		114	G－8	8－5	脚付の深鉢だが脚部は欠損している。口縁部は1ヶ所波状部分が残存するが2単位であったか。文様は沈線のみ。波頂下に渦巻文、口縁部にそれとつながった横走沈線。胴部文様は4単位のY字状文と、その間隙に入る渦巻文。器形・文様ともに特異な土器。内面底部～胴下半部に著しく、また外面胴上半～口縁部にスス付着。	17.8 (脚欠損)	0.7	
		115	G－8	12	2単位の波状口縁をもつ。口唇に沿って高い隆帯をめぐらし、隆帯上刻み。波頂下に垂下隆帯、隆帯上は竹管による円形刺突。口縁に沿う形で2本1組の弧状沈線、頸部くびれ部に2本の横走沈線。胴部文様は、4単位の粘土粒を貼付し、それを中心に2本1組沈線による渦巻文と、その間に入る山形文を施文する。粘土粒の上に円形刺突を施すが粒自体が形をなさず半分つぶれた様な所もある。沈線施文も全体に粗雑。堀之内1式と考える。			
		116	E－2 E－3 H－2	12	口唇内側に沈線が1本めぐる。口縁にひねり状の把手2単位（1個は欠）、把手裾部に円形刺突。胴部は幅広い文様帯となり、中央部に4単位の貼付文がつく。うち1単位は円形刺突を弧線でつなぐ堀之内期の特徴的な文様が入るが、あと3単位は半欠または剥落。胴部沈線による文様のモチーフはおそらくJ字文であろう。			
		117	C－11	8－1	胴下半部に2本1組の太い隆帯による懸垂文が2単位残る。隆帯上はヘラ状工具による刻み。条線は5本1単位櫛歯状工具による。内面に著しくスス付着。			
		118	出土位置不明	8－2	口縁部に1本隆帯がめぐるが、隆帯下に沿う沈線の方が目立っている。その隆帯から胴部に垂下する隆帯7単位。隆帯脇に沈線。区画内3本1単位櫛歯状工具による条線。			
		119	B－3　B－4		無文。外面ほぼ全体が黒色化。	9.8	0.9	
		120	E－7 E－6		台形土器			

第8節　石器一覧表

S—Ⅳ区　SB住居址

住居No.	石　鏃	石　匕	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SB—01	1				2								溶岩1 フレイク・スクレイパー1 ユーフレ25	107	
SB—02		1			6	1									
SB—04	2		4		1		1	1					角柱1 ユーフレ(水晶)1、ユーフレ25	95	
SB—10					5		1	2			1		フレイク・スクレイパー2 ユーフレ8	35	
SB—11					5			1							
SB—12								5	1				溶岩1		
SB—13(欠)	1		2		2					1			フレイク・スクレイパー1 ユーフレ5	57	
SB—15	1											2	ユーフレ9	30	
SB—16(欠)	1		2	1	10			8	2			1	溶岩1 フレイク・スクレイパー1 ユーフレ14	72	
SB—17					4			1							
SB—18	2				4	1		2	2	1			スクレイパー1 ユーフレ14	20	
SB—20	4		1		5			3					ユーフレ46	240	1.6
SB—21			1	1	1			3				1	ユーフレ10	53	
SB—22(欠)	1												ユーフレ1	16	9.2
SB—23					2			2					ユーフレ3	8	
SB—26(欠)								1					ユーフレ4	18	
SB—28			2					1					ユーフレ4	20	
SB—29(欠)					1			1	1				スクレイパー1		
SB—30					4							1			
SB—32	9	3	12	5	53	4	1	6	1	2	1	2	フレイク・スクレイパー2 コア1 ユーフレ57	360	4.2
SB—33					2	1		1	2		1	1		58	
SB—34	2			2	2			2					鉄滓1 ユーフレ1	90	1.9
SB—35(欠)					7			2					多孔石1 溶岩1 フレイク・スクレイパー1	47	
SB—36(欠)					2				1						
SB—37	1							1					ユーフレ3 スクレイパー1	13	
SB—38(欠)													フレイク・スクレイパー1		
SB—40	1				1			1					ユーフレ1	40	
SB—41	3				1						2			5.6	
SB—42(欠)	1													161	1.5
SB—43(欠)					2									16	
SB—44			1		2			3		1				27	
SB—44・47	3		5	2	6								スクレイパー1 ユーフレ7	182	2.9
SB—45(欠)	1		2											45	
SB—46(欠)					2			2							

住居No.	石　鏃	石　匕	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SB—48														4.9	
SB—50	3				5		1	4				3	角柱1	92	
SB—52	9		3		37	1		11	2	2		1	溶岩1 フレイク・スクレイパー2 コア1 ユーフレ9	245	
SB—53	15	5	2	1	212	9		23	7	6		7	角柱2 砥石1 溶岩2 その他1 フレイク・スクレイパー1 コア1	1303	
SB—54													その他		
SB—55	3		1		11			2		1	1	1	ユーフレ1	65	
SB—56	4				13	2		13	3		3		溶岩1 フレイク・スクレイパー4 ユーフレ27	56	1.8
SB—57			1	1	4		1	7	1	1			フレイク・スクレイパー1 ユーフレ7	28	
SB—58 (欠)					6							1	溶岩2	46	
SB—59													ユーフレ1	2.2	
SB—60			1		10		1	2	3				溶岩3 ユーフレ2 フレイク・スクレイパー1	74	
SB—62					1										
SB—63					17	2		6			2	1	ユーフレ1	89	
SB—64					10	1		2						24	
SB—65	1		3	2	24	1	1	2	1		1		フレイク・スクレイパー1 角柱2	43	
SB—67	3	1	1		33	3	1	3	1			1	フレイク・スクレイパー1 スクレイパー1 ユーフレ5	152	
SB—69		1			134	10				2			角柱1 フレイク・スクレイパー2 溶岩1 ユーフレ3	70	
SB-69、80					1										
SB—71					2							1			
SB—73	6		4		45		1	9	2				ユーフレ10	220	8
SB—75					6	1			1				ユーフレ1		
SB—78				1	3	1		4	2			1	フレイク・スクレイパー1 スクレイパー	27	
SB—81	2				4								ユーフレ1	18	
SB—82					2			1						38	
SB—83	1	1	1		11	2		8					溶岩2 フレイク・スクレイパー2 コア1	70	2.5

S—Ⅳ　SX

No.	石　鏃	石　匕	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SX—01													石棒1		

S—Ⅳ区　SK土壙

土壙No.	石　鏃	石　匕	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SK—01							1								
SK—02													溶岩1		
SK—06					1										
SK—08					2										
SK—09								1					ユーフレ1	1.4	
SK—11					2			1	1						
SK—12															
SK—17					1										
SK-22、23	2			1									スクレイパー1	28	0.3
SK—27					1										
SK—32								2							
SK—35	1													10.9	
SK—38					1	1									
SK—40					1										
SK—41		1			1										
SK—42					3								ユーフレ4	35	
SK—43					1							1		4.3	
SK—45					1										
SK—46							1								
SK—47					2									10.2	
SK—49					1										
SK—53								1					溶岩1	18.3	
SK—55														1.8	
SK—60					1									15.2	
SK—72					1										
SK—75					2								ユーフレ2	13.3	
SK—76	1														
SK—77														14.7	
SK—78					1			1						3.7	
SK—81					2			1							
SK—86					1										
SK-87、88								1		1					
SK—90													ユーフレ1		
SK—91														6.6	
SK—95		1													
SK—97					1										
SK—108												1			
SK—114	1		1		2			1	1			1	ユーフレ1	28.5	
SK—119	1													2.5	58
SK—127					1			1					その他（石英）	1.3	
SK—128					1										
SK—133														1.2	
SK—135		1			2									1.5	
SK—136														5.1	
SK—137													フレイク・スクレイパー1		
SK—139					2								フレイク・スクレイパー1 溶岩1		
SK—140													スクレイパー1	6.4	

土壙No.	石　鏃	石　匕	ドリル	ピエス	打　斧	磨　斧	稜磨石	磨　石	石　皿	礫　器	ハンマー	玉　石	その他	黒曜石g	水　晶g
SK—141														9.1	3.6
SK—142					1										
SK—146					3	1	1	3							
SK—148					1				1						
SK—155						1							砥石1		
SK—156	2				1										
SK—157		1													
SK—158					1									6.1	
SK—160					4			1							
SK—166	1													5.3	
SK—167						1					1			7.2	
SK—168									1				ユーフレ1		
SK—169					1										
SK—171	1	1			4			2					ユーフレ1	34	
SK—173	1														
SK—175					1										
SK—178		1						1	1						
SK—183					5										
SK—184					1										
SK—185					1										
SK—188					6								コア1		
SK—190					1										
SK—195					2										
SK—196													角柱1		
SK—197					1									8.4	
SK—198					1			2							
SK—200					2				1					5.4	
SK—201					2										
SK—203														5.9	
SK—206					1			1							
SK—207														30	
SK—225					2			1	1					6	
SK—226														12.8	
SK—237	2							1	1		1				
SK—239													コア1		
SK—242	1														
SK—344	1				2			2	2				溶岩1		
SK—345						1									
SK—355								1	1					1.7	
SK—361								1	1						
SK—372					1			1	1						
SK—375					5										
SK—377													ユーフレ1		
SK—380														3.9	
SK—382													ユーフレ2	10.3	
SK—386														4.8	
SK—390					1										
SK—391														0.5	
SK—392	1													20.9	
SK—395	1							1	1				ユーフレ1 〃（チャート）1	2.4	

土壙No.	石鏃	石匕	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SK—397														4.3	
SK—398													ユーフレ1	0.3	
不明SK(B—5)					2									20.5	
不明SK(B—6)	1														

石器種別一覧表　釈S—Ⅳ区グリッド

石器種別	個数	石器種別	個数	石器種別	個数
スクレイパー	22	ハンマー	24	その他	1
ドリル	84	角柱	12	溶岩	37
コア	9	礫器	22	磨石凹石	292
ピエスエスキーユ	65	稜磨石	16	打斧	732
ノッチドスクレイパー	2	石棒	9	黒曜石石鏃	213
ユーティライズドフレイク	607	フレイクスクレイパー	12	水晶石鏃	5
水晶ユーティライズドフレイク	5	石錘	5	チャート石鏃	2
石匙	17	丸石	2	大型フレイク	42
磨斧	73	砥石	3		
石皿	37	軽石	1		
玉石	84	鉄滓	6		
表採硅質岩石鏃	1	Pitフレイク	2		
Pitドリル	1	Pitユーティライズドフレイク	1	計	2,446

第９節　土偶一覧表

Ｓ―Ⅳ区

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第481図　1	ＳＢ－10	顔	5.5×6.2×6.4	狢沢～新道		顔の周囲から頭頂部に角押文をめぐらす。頭髪状沈線文	角押文、髪形を表出している例、後頭頂部結髪	
第481図　2	ＳＢ－13	顔	6.1×6.8×5.4	曽利	頸部に分割塊面と木芯痕（Ｓ－Ⅲ区 113と接合）	ダブルハの字文、額に弧線文、後頭部に単環	沈線文	
第481図　3	ＳＢ－20	顔	3.0×2.7×2.1					
第481図　4	ＳＢ－32	顔	5.5×5.4×3.1	曽利	頸部に分割塊面	顔の表現なし		
第482図　5	ＳＢ－32 No.126	顔	5.7×6.1×4.0	井戸尻	後頭部に粘土塊面	後頭部に円文があったと思われる。	肩と後頭部降帯文もいずれも刻目を施す。	
第482図　6	ＳＢ－34	顔	4.8×5.5×3.7	曽利		後頭部に渦巻文	沈線	
第482図　7	ＳＢ－52	顔	3.2×3.3×2.9	新道～藤内	後頭部に粘土塊面			
第482図　8	ＳＢ－53 No.5	顔	7.5×5.8×3.0	新道	分割されない土偶	対称弧刻文、側腹部に三角押文、中央部の孔は貫通する。		類例Ｓ－Ⅲ区 49 Ｓ－Ⅳ区 17
第482図　9	ＳＢ－53 No.13	顔	4.9×5.8×5.0	狢沢～井戸尻	頭部に粘土塊面	顔の表現なし		
第483図　10	ＳＢ－53 No.14	顔	4.0×4.9×3.8	狢沢～井戸尻	頭部に粘土塊面	後頭部は降帯による主抱き三叉文となる。貫通孔３つ		
第483図　11	ＳＢ－53 No.18	顔	2.6×2.4×2.4	五領ヶ台～狢沢				
第483図　12	ＳＢ－53 No.19	顔	3.4×4.2×3.2	狢沢～井戸尻	頸部に分割塊面、後頭部に分割塊面	後頭部に円と三角文、目と頭に爪形文		
第483図　13	ＳＢ－53 No.114	顔	6.5×6.6×5.6	新道～井戸尻		後頭部に渦巻文	降帯文、後頭部に貫通孔三つ	
第483図　14	ＳＢ－53 No.114	顔	4.4×7.0×6.1	新道		後頭部に爪形文と円粒が３個		カッパ型の頭
第484図　15	ＳＢ－53	顔	4.5×2.8×3.0	新道	頸部に分割塊面と木芯痕（Ｓ－Ⅳ　No.90と接合）	目に三角押文、頭部に貫通孔３個		カッパ型土偶 整理中紛失
第484図　16	ＳＢ－60	顔	3.3×3.6×2.1					
第484図　17	ＳＢ－63 No.26	上半身（頭～胴）	4.5×3.3×1.6	新道	分割されない土偶であると考えられるか	前面に沈線文、後面貫通孔がある。あるいは前後通		
第484図　18	ＳＢ－81 Pit 住中	顔	3.0×4.0×3.4	狢沢～藤内	頭部に分割塊面、頭部に粘土塊面			
第484図　19	ＳＫ－47	顔	4.6×4.7×2.8	狢沢～井戸尻	頭部に粘土塊面			
第484図　20	ＳＢ－52 土坑	顔	5.0×4.7×3.9	曽利	頭部に木芯痕	後頭部に単環、まつ毛あり、11の下にハの字文	沈線	
第485図　21	ＳＫ－178 No.27	顔	8.3×8.8×6.2	藤内～井戸尻		後頭部に降帯による渦巻三叉文、貫通孔５個		
第５図　22	Ｃ－９　土坑	顔(左)	5.8×4.2×5.3	藤内～井戸尻	（Ｓ－Ⅳ区　No.26と接合）	後頭部を半降帯による渦巻三叉文か	半降帯に交互刻目を加える。	中空頭部の製作法がわかる資料
第485図　23	Ｃ－９　土坑	顔	3.0×2.9×2.7	曽利	頭部に分割塊面はないが、刻みがあり、土器の粘土紐接合部と類似	後頭部に弧線文		
第485図　24	Ａ－３	顔	2.3×4.3×4.0	五領ヶ台～狢沢		側頭部に刺突と沈線、顔に沈線文		カッパ型土偶
第485図　25	Ａ－４	顔	3.7×3.0×3.6	曽利末	頭部に分割塊面	後頭部に単環、まつ毛		
第486図　26	Ｃ－３	顔	5.8×6.0×5.8	藤内～井戸尻	頭部に木芯痕		半降起帯に交互刻目文	
第486図　27	Ｃ－３	顔	7.2×6.0×4.5	新道～藤内	頭部に木芯痕（Ｓ－Ⅳ　No.22と接合）	孔３個	降線と三角押文	
第486図　28	Ｃ－４	顔	6.2×6.2×3.7	新道～井戸尻	頭部に分割塊面	後頭部に２つの円文孔２個		
第486図　29	Ｃ－８	頭	3.3×3.4×2.9	五領ヶ台～狢沢	頭部に木芯痕	頭頂部に刺突文		カッパ型土偶

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第487図 30	D－1	顔	4.8×5.4×4.1	新道～井戸尻	頸部に木芯痕	後頭部は渦巻三叉文	隆帯	
第487図 31	D－4	顔	7.6×7.7×5.4	新道～井戸尻		後頭部変形玉抱き三叉文	隆帯	
第487図 32	D－9	顔	3.0×3.3×5.2			ダブルハの字文		
第487図 33	E－9	顔	4.3×5.0×4.8	猪沢～新道	頸部に分割塊面	目に角押文、頭部に貫通孔3個		カッパ型土偶
第488図 34	E－9	顔	5.5×5.2×2.8	曽利	頸部に分割塊面	後頭部双環、目にまつ毛、口にトリプル三角文		
第488図 35	E－9	顔	4.2×3.7×2.2	曽利末？	頭部に粘土塊面			
第488図 36	F－2	顔	3.8×4.5×1.8					あるいは把手か
第488図 37	G－1	顔	4.2×2.9×4.3	猪沢～新道		目に角押文		
第488図 38	G－19	顔	3.0×4.2×4.3	五領ケ台～新道		貫通孔1個確認		カッパ型土偶
第488図 39	H－4	上半身（顔～胴）	4.9×4.7×2.3	曽利末	左手付根部に分割塊面	紋付文と背部に沈線文		
第489図 40	I－3	顔	6.5×5.8×3.4	新道～井戸尻	頸部に分割塊面	頭部に渦巻き三叉文、ダブルハの字文	隆帯、沈線	
第489図 41	J－2	顔・胸・腕	7.8×7.5×2.4	曽利		頭部に単環、頭頂部に沈線		バンザイ土偶
第489図 42	L－1	顔・腕	8.8×9.5×6.6	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面とソケット接合法	頭頂部に双環		鳴る土偶
第490図 43	O－3	顔	5.9×6.6×3.7	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面	後頭部に渦巻三叉文	渦巻三叉文を隆帯でその上に刻目	
第490図 44	P－3 No.10	顔	4.5×3.2×2.3					
第490図 45	R－7	顔	5.0×5.1×3.4	曽利	頭部に粘土塊面	頭頂部に刻目、ダブルハの字文		
第490図 46	S－Ⅳ	顔	7.7×9.0×6.0	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面と木芯痕	後頭頂部に双環と変形三叉文	隆帯と三角陰刻文	
第490図 47	SB－20	腕	2.0×3.0×2.0					
第490図 48	SB－33 No.3	腕	2.6×3.5×1.5					
第490図 49	SB－50	腕	1.9×3.3×1.5	曽利	付根部に分割塊面			
第491図 50	SB－53 No.23	腕・胸	3.4×4.2×1.9	猪沢～新道	腹部との接合部に分割塊面	手先に三角押文、裏は刻目	三角押文	
第491図 51	SB－56	腕	1.2×3.5×1.2					
第491図 52	SB－83 No.28	腕	2.4×2.7×1.4			LRの縄文		土偶には稀な縄文
第491図 53	SK－139	腕	2.2×3.1×1.9					
第491図 54	A－1	腕	1.7×3.9×2.1					
第491図 55	A－12	腕	2.8×2.6×1.9					
第491図 56	B－3	腕	2.6×2.8×1.8					
第491図 57	C－6	腕	3.1×4.3×2.3	新道～藤内		手先に刻目		
第491図 58	C－6	腕	2.0×4.0×1.9					
第491図 59	C－6	腕	1.8×2.8×1.6					
第491図 60	C－10	腕・胸	2.8×5.1×3.0					
第491図 61	C－10	腕	1.4×2.5×1.4					
第491図 62	C－11	腕	2.3×3.4×1.8					
第491図 63	D－4	腕	2.4×5.4×2.6		付根部に木芯痕と全体に粘土塊面			
第492図 64	E－1	腕	3.2×6.4×3.1	曽利	付根部に分割塊面			
第492図 65	E－6	腕	2.9×5.3×2.5					
第492図 66	E－6	腕	2.0×2.8×1.6					
第492図 67	F－3	腕	2.3×3.8×1.9					
第492図 68	F－5	腕	1.5×2.2×1.4					

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第492図 69	F－8	腕	2.1×4.6×1.5	曽利				
第492図 70	G－4	腕	2.0×4.6×2.0					
第492図 71	G－4	腕	2.4×4.7×1.8			手先に渦巻文		
第492図 72	G－7	腕	2.6×4.2×2.1					
第492図 73	H－8	腕	2.8×4.6×2.3					
第492図 74	I－8	腕	1.4×3.0×1.3					
第492図 75	J－2	腕	2.1×3.4×2.0					
第492図 76	M－8	腕	2.0×4.2×1.7					
第493図 77	SB－07	胸	2.3×5.6×1.9	狢沢～井戸尻	腹部との接合部に分割塊面			
第493図 78	SB－12	胸	4.8×5.8×3.0	狢沢～藤内	腕部と腹部との接合部に分割塊面	側腹部に三角押文	三角押文による沈線	
第493図 79		胸	5.4×4.6×1.6					不明な土製品だが土偶として扱った。
第493図 80	土器すてばC	胸・腕	3.5×4.4×1.6	狢沢～藤内	腹部との接合部			
第493図 81	SB－20	胸	3.1×5.0×2.6	狢沢～藤内	腕部と腹部との接合部に分割塊面と木芯痕			
第493図 82	SB－32	腕	5.3×3.2×2.0	新道～藤内		三角押文		
第493図 83	SB－33 No.1	胸	4.3×2.3×2.3	曽利		脇下に沈線文、紋付文		
第493図 84	SB－53 No.21	胸・腕(右)	4.8×7.0×2.2	狢沢～藤内	腕部に分割塊面(S－Ⅳ区　No.85と接合)	正中線	沈線	
第494図 85	SB－53 No.22	胸・腕(左)	4.5×5.5×2.1	狢沢～藤内	胸部に分割塊面(S－Ⅳ区　No.84と接合)			
第494図 86	SB－53	胸・腕	3.0×7.2×3.6	狢沢～藤内				
第494図 87	SB－53	胸・胴	4.3×5.2×2.8	新道～藤内	頸部と腕部との接合部に分割塊面	側腹部に三角押文、背部にV字状隆帯	V字状隆帯、沈線は該期の特色	
第494図 88	SB－53	胸	3.7×3.9×4.0	新道	胸部に粘土塊面			
第494図 89	SB－53	胸	2.3×1.8×2.9	狢沢～新道	粘土塊面			
第494図 90	SB－60 No.9	胸・胴	6.3×5.8×3.7	新道	(S－Ⅳ区　No.15と接合)	乳房と正中線	沈線	整理中紛失
第495図 91	SB－65	胸	4.7×3.7×2.2	狢沢～新道		胸部に角押文	角押文による沈線文	SB－73の上層
第495図 92	SB－65	胸	3.1×4.0×1.8	狢沢～新道	腹部との接合部に分割塊面と木芯痕	角押文による弧線文	角押文	SB－73の上層
第495図 93	SB－67	胸・腕	3.0×8.1×1.8	狢沢～藤内	頸部と腹部との接合部に分割塊面	正中線		
第495図 94	SB－67	胸・胴	6.9×6.4×2.4	曽利	頸部に分割塊面	正中線と背部にタスキ文など		
第495図 95	SB－75	胸	3.2×4.5×2.9	新道	付根部に分割塊面	肩部に円形竹管文	円形竹管文	黒駒の土偶と類似する。
第495図 96	SB－83 No.19	胸	3.4×5.8×1.6	曽利		正中線、脇部に沈線		
第495図 97	SK－53	胸	1.9×2.1×3.3		木芯痕	沈線		
第496図 98	B－2	胸	3.9×4.7×1.4	曽利？				小型粗製土偶
第496図 99	B－4	胸・腕	3.8×4.9×2.8	狢沢～新道	頸部と腹部との接合部に分割塊面			
第496図100	C－1	胸・胴	5.4×3.9×3.1	藤内～井戸尻	臀部との接合部に分割塊面	正中線、側腹部に彫刻的沈線文		
第496図101	C－4	胸	4.6×4.9×2.2	曽利		紋付文	沈線文	バンザイ土偶
第496図102	C－4	胸	1.9×3.9×3.0		腹部との接合部に分割塊面			
第496図103	C－8	胸	4.2×2.7×3.2		木芯痕			
第496図104	C－9	胸・腕	4.8×4.5×2.0	曽利	腕部に分割塊面、頸部に接合用刻目	脇部に沈線文		
第496図105	D－1	胸	3.5×3.0×1.8					
第496図106	D－3	胸	4.0×4.6×2.2	曽利		脇部に沈線文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第496図107	D－10	胴(胸)	2.6×4.3×2.3		木芯痕			
第496図108	D－10	胸	3.8×3.2×2.7		頸部との接合部に分割塊面			
第497図109	E－6.7	胸	3.0×4.5×3.0		頸部、腹部との接合部に分割塊面			
第497図110	E－7	胸	4.8×5.9×3.2					
第497図111	E－8	脇	3.1×4.6×2.9	新道～藤内		RLの縄文と三角押文	縄文と三角押文	
第497図112	E－9	胸・腕	4.3×5.4×1.6	曽利		正中線		バンザイ土偶
第497図113	E－16	胸	4.6×4.6×2.9			正中線		
第497図114	F－2	胸・腕・胴	3.9×3.6×1.9	曽利		正中線がない。紋付文とタスキ文がある。		小型粗製土偶
第498図115	F－5	胸	4.3×2.3×2.7		木芯痕			
第498図116	F－8	胸・胴	4.7×3.4×1.9	曽利	頸部に分割塊面	胴部に沈線文		
第498図117	F－9	胸	3.5×3.6×2.2		胸部に木芯痕	正中線	角押文	
第498図118	F－9	胸・腕	3.4×5.5×1.9	狢沢～井戸尻				
第498図119	G－1	胸・腕	4.1×10.1×2.8	狢沢～藤内	頸部と腹部の接合部に分割塊面	手先に刻目		
第498図120	G－5	胸・腕	2.2×5.1×1.8	狢沢～井戸尻	頸部に分割塊面			
第498図121	H－7	胸	3.5×2.7×1.6	曽利	胸部に分割塊面	脇下に沈線文		
第498図122	I－8 No.14	胸	6.6×6.5×2.6	曽利	頸部と腕部の接合部に分割塊面と木芯痕	バンザイ土偶に特徴的な沈線文		
第499図123	N－16	胸	4.0×3.5×2.6	曽利		助骨状文		白色の胎土
第499図124	T－5	胸	4.1×4.6×1.8			胸部に半隆帯で表出		
第499図125	S－Ⅳ	胸・胴・脚	6.5×2.8×2.5	曽利		背部に沈線文	沈線文	
第499図126	SB－03 No.38	臀	5.6×6.9×4.3			側臀部に渦巻文	沈線文	赤彩
第499図127	SB－10	臀	4.9×2.7×4.0	曽利？		側臀部に渦巻文	沈線	底にえぐり
第500図128	SB－11 No.50	臀	5.1×3.6×5.7	井戸尻～曽利	脚部との接合部に分割塊面	臀部を半隆帯で表出		
第500図129	SB－18	臀	6.0×7.2×5.1	新道～藤内	脚部との接合部に分割塊面	対称弧刻文、正中線を刻目隆帯、三角押文による渦巻文	三角押文による渦巻文と一部で単なる沈線となっている。	
第500図130	SB－20	臀	3.8×2.3×3.3	曽利		側臀部に渦巻文	沈線	
第500図131	SB－20	臀	9.4×3.8×4.3	曽利	胴腹臀部片側に分割塊面、曽利式に特徴的な分割塊面	側臀部に沈線文		
第501図132	SB－21	臀	9.8×3.4×4.5	曽利	胴腹臀部片側に分割塊面	側臀部に沈線文	一部に円文がある。	赤彩
第501図133	SB－32	臀	7.4×7.1×4.4					
第501図134	SB－34	臀	4.3×2.7×2.5	曽利	臀部片側との間に分割塊面	側臀部に沈線文		
第502図135	SB－46	臀	8.5×7.5×4.2	藤内～井戸尻	右脚部は明らかな分割塊面は見えないが分割塊面(No.225と接合の脚部)	対称弧刻文、側臀部に玉抱き三叉文	半隆起線と三叉状陰刻文	
第502図136	SB－52 No.52. 54	臀・脚	7.4×4.5×5.5	新道～藤内				臀部は中空となる。
第502図137	SB－53	臀	4.9×2.0×3.1	狢沢～新道		側臀部に角押文	角押文	
第502図138	SB－53	腰	5.0×3.3×2.7		脚部との接合部に分割塊面			
第502図139	SB－53 No.20	臀	7.3×7.0×4.6	新道～藤内	頸部と脚部に分割塊面	対称弧刻文、逆三角文、正中線、側腹部に三角押文と三角陰刻文	三角押文と三角陰刻文	
第503図140	SB－53	臀	3.2×5.4×4.5	狢沢～新道		角押文		中空土偶
第503図141	SB－53	臀	6.4×4.1×2.9	新道～井戸尻	頸部、片側臀部に分割塊面、頸部に木芯痕	側腹部に沈線文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第503図142	ＳＢ－53	胴	4.6×4.8×2.5	新道	脚部に木芯痕と分割塊面			
第503図143	ＳＢ－53	臀	6.0×4.1×5.0	新道				えぐりあり
第503図144	ＳＢ－55	胴	6.8×5.2×2.0	新道～井戸尻	特殊な製作法である塑像法で縄の圧痕が残る。	正中線、対称弧刻文Ｌ字文と渦巻文	陰刻文	
第504図145	ＳＢ－60	臀	4.1×2.9×2.9	新道～藤内	腹部に分割塊面	側腹部に三角押文と三角陰刻文	三角押文と陰刻文	
第504図146	ＳＢ－69	臀	5.0×3.9×4.6	狢沢～新道		対称弧刻文、角押文による沈線文	角押文	
第504図147	ＳＢ－69	腰	3.9×2.4×2.8	新道～藤内		側臀部に三角押文		
第504図148	ＳＫ－156 No.1	臀	5.0×3.6×3.0	狢沢～新道	腹部に分割塊面	側臀部に角押文		
第504図149	ＳＫ－212 Ｉ－3	臀	3.3×1.6×4.2	狢沢～新道		側臀部に三角押文		
第504図150	Ａ－1	胴・臀	5.6×5.2×3.8		脚部に分割塊面、右足はソケット接合法			
第504図151	Ａ－3	臀・脚	6.6×5.5×2.5	藤内～井戸尻		変形対称弧刻文		
第504図152	Ａ－4	腰	4.9×2.9×3.6	曽利	腹部に分割塊面	側腹部に沈線文		
第505図153	Ｂ－3	胴・脚	5.6×5.6×3.7	新道～藤内	腕部に分割塊面	対称弧刻文、側腹部に三角押文による沈線		脚省略
第505図154	Ｂ－6	臀	4.6×2.9×2.9		臀部片側に分割塊面	臀部に沈線文		
第505図155	Ｂ－6	臀	3.0×2.0×4.0			臀部に渦巻文	沈線	
第505図156	Ｂ－8	腹	3.4×2.6×3.0		木芯痕			
第505図157	Ｂ－9	臀	5.0×3.2×2.7			側臀部に沈線文		
第505図158	Ｃ－2	腹	3.9×3.2×2.5			沈線文		中空腹部
第505図159	Ｃ－3	臀	5.6×3.0×5.8	井戸尻		側臀部に半隆起線文と刻目	半隆起線による三角文	えぐり
第505図160	Ｃ－3	臀	3.0×3.8×4.1			側臀部に短沈線		
第506図161	Ｃ－3	臀	5.1×3.0×3.7	曽利	臀部片側に分割塊面	側臀部に渦巻状集合沈線	集合沈線	
第506図162	Ｃ－3	腰	2.9×3.1×2.8					
第506図163	Ｃ－4	臀	7.0×7.3×2.3	曽利		側臀部に三角文、円文を沈線で描く		
第506図164	Ｃ－6	胴	4.0×3.9×2.3	曽利		正中線、側臀部に渦巻文		
第506図165	Ｃ－6	臀	4.0×3.1×4.8	井戸尻～曽利		側臀部に玉抱き三叉状沈線文	沈線文	臀部は中空
第506図166	Ｃ－6	臀	4.7×1.8×3.1		臀部に分割塊面			
第506図167	Ｃ－6	腰	3.0×3.4×2.8			正中線、ブラ文		
第507図168	Ｃ－7	臀・脚	9.8×6.8×4.3	新道～井戸尻	腹部に木芯痕	正中線	対称弧刻文は変形しており、削り取った痕がある。	
第507図169	Ｃ－7	胴	2.7×4.1×2.4	新道～藤内	腕部との接合部に分割塊面	正中線、側腹部に三角押文	正中線は沈線	
第507図170	Ｃ－8	臀	3.2×3.1×2.6	曽利	片側臀部と腹部との接合部に分割塊面	側臀部に沈線文	沈線	
第507図171	Ｅ－4	腰	4.6×2.5×3.6			側臀部に渦巻文	沈線	
第507図172	Ｅ－7　No.16	胴	3.6×3.9×3.4	曽利		正中線、側臀部に渦巻文		
第507図173	Ｅ－8	臀	4.5×4.1×2.4	曽利		側臀部に渦巻文	沈線	図面の正面の位置に誤りがある。
第507図174	Ｅ－8	臀	5.0×3.5×2.6					
第508図175	Ｅ－8	胴	9.5×6.7×3.2	曽利	頸部に分割塊面	側臀部に沈線文		ヘソと背中を敲打している。
第508図176	Ｅ－9	臀	5.6×3.5×6.2	曽利		正中線、腹部、側臀部、三角状、弧状、沈線		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第508図177	E－9	臀	5.8×6.5×5.1	曽利		腹部に刻目沈線、側腹部に蔓状沈線		腹部中空 S－Ⅲ区208に類した文様
第509図178	F－1	腹	3.4×3.6×2.4			正中線とヘソを中心とした三角状沈線		
第509図179	F－8	臀	3.0×5.3×2.7	曽利		臀部を沈線文を表出		
第509図180	F－8	臀	8.2×6.1×4.4	藤内	頸部と臀部と腹部に分割塊面	正中線、対称弧刻文逆三角文、側腹部にキャタピラ文と渦巻三叉文	渦巻文は三角押文、三叉文は陰刻文	
第509図181	F－9　No.3	臀	2.8×2.8×2.5	曽利	側臀部に分割塊面	側臀部に渦巻三叉状沈線文	沈線	
第509図182	F－9	臀	3.6×3.2×2.5	曽利		正中線、股にV字状沈線文		
第509図183	G－1	臀	2.6×3.3×3.4	新道～藤内		正中線と側後臀部に三角陰刻文	正中線に半隆帯と三角押文	臀部は中空となる。円錐形中空土偶
第510図184	G－2	臀	5.1×6.2×5.1	曽利			刻目文と沈線文	脚を省略した土偶
第510図185	G－4	胴	3.0×2.4×3.4					中空土偶
第510図186	G－4	臀	2.8×1.6×1.9	曽利		正中線、側腹部に沈線文		
第510図187	G－4	胴	4.5×4.3×3.0	狢沢～新道			円形竹管文と角押文	
第510図188	G－5	臀	4.0×3.4×2.9	曽利			沈線文と集合沈線文（擦痕）	
第510図189	G－6	胴	4.6×5.0×3.0	曽利		胴部と側胴部に沈線文		
第510図190	G－7	胴・臀	4.1×2.6×2.2	井戸尻～曽利		正中線、変形対称弧刻文とその脇にJIL文、キャタピラ文と蔓状文	沈線文とキャタピラ文	
第510図191	G－8	脚	1.8×2.0×3.3		粘土塊面			
第510図192	G－9	臀	3.3×3.1×3.0		腹部に分割塊面	沈線化した対称弧刻文、側腹部に蔓状沈線	沈線で文様を描く	
第511図193	H－6	腰	3.5×3.5×3.1	狢沢～新道	腕部に分割塊面	側腹部に角押文と円形竹管文	角押文と円形竹管文が組み合されることが多い。	
第511図194	I－3	臀	6.7×4.6×5.0	曽利	臀部片側に分割塊面	側臀部に渦巻文と集合沈線	沈線文	
第511図195	I－4	胴	3.2×4.8×3.4	曽利		腹部に刻目沈線による方形文と側腹部に蔓状沈線		
第511図196	I－7	臀	7.5×3.9×2.9	新道～藤内	腕部と臀部に分割塊面	正中線、対称弧刻文、側腹部に三角文	三角文は三角押文で描く	
第511図197	J－2	胴	3.8×3.9×2.7	曽利		正中線、沈線化した対称弧刻文		
第511図198	V－10	臀	3.7×3.3×3.2	新道～藤内		側臀部に三角押文と渦巻文		
第512図199	表　採	胴	5.8×4.2×1.8			正中線	隆帯による正中線	
第512図200	SB－01	脚	3.0×2.5×2.7				沈線文	
第512図201	SB－17	脚	4.5×4.0×4.5	曽利		足首に沈線文		
第512図202	SB－17 No.4	脚	3.9×4.6×4.9		付根部に分割塊面と木芯痕			
		脚	1.6×3.3×2.3					
第512図204	SB－29 No.4 内	脚	4.9×3.7×5.7					
第513図205	SB－32 No.122	脚	7.6×4.8×6.9					
第513図206	SB－40	脚	2.8×4.7×5.8					
第513図207	SB－44	脚	2.6×3.0×2.7					
第513図208	SB－50	脚	3.4×3.2×4.8					
第513図209	SB－52	脚	2.9×2.6×3.4					

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第514図210	ＳＢ－53 No.1010	脚	7.6×5.0×6.9					
第514図211	ＳＢ－53 土偶15	脚(右)	5.6×4.9×3.6	新道	付根部に分割塊面	足首に三角押文		接合
第514図212	ＳＢ－53 土偶15	脚(左)	5.8×4.2×3.7	新道	付根部に分割塊面			接合
第515図213	ＳＢ－53	脚	2.4×3.7×4.1		付根部に分割塊面			
第515図214	ＳＢ－53	脚	3.6×2.5×2.6		粘土塊面			
第515図215	ＳＢ－55	脚	4.4×3.6×3.6					
第515図216	ＳＢ－55	脚	2.2×3.1×4.2	曽利		足首に平行沈線間斜行短沈線	沈線文	
第515図217	ＳＢ－56	脚	4.9×3.5×4.7					
第515図218	ＳＢ－60	脚	7.2×3.6×5.1		付根部に分割塊面	脚裏側に渦巻文	沈線	
第516図219	ＳＢ－67	脚	6.0×3.1×3.5					
第516図220	ＳＫ－49 No.47　Ｄ－11	脚	3.1×3.3×4.5		付根部に分割塊面と木芯痕			
第516図221	Ａ－8	脚	8.0×4.3×6.5	曽利		側臀部に渦巻文	沈線	臀部中空土偶
第516図222	Ｂ－2	脚	4.6×3.8×5.2			足首に沈線文		脚部えぐり
第516図223	Ｂ－2	脚	2.0×2.2×3.3					
第517図224	Ｂ－2	脚	4.3×2.9×4.5		付根部に分割塊面と木芯痕（ソケット接合法）			
第517図225	Ｂ－3	脚	3.2×3.6×4.0		左足との接合部に分割塊面			
第517図226	Ｂ－3	脚	3.2×3.3×3.2		付根部は分割塊面は観察できないが、分割面？（Ｓ－Ⅳ区　135と接合）			
第517図227	Ｂ－4　No.1	脚	2.7×2.8×3.3					
第517図228	Ｂ－5	脚	4.5×4.1×4.8			足首に沈線文		
第517図229	Ｂ－6	脚	2.1×4.0×4.8			足の甲に沈線文		
第517図230	Ｂ－9	脚	2.1×2.4×2.4					
第517図231	Ｃ－2	脚	3.2×5.0×3.5					
第518図232	Ｃ－5	脚	3.6×2.5×5.7		木芯痕が貫通している。			
第518図233	Ｃ－6　No.6	脚	6.6×3.9×2.7	曽利	(右)	つま先と足首に沈線文		
第518図234	Ｃ－7	脚	2.7×2.0×2.1					
第518図235	Ｃ－7	脚	4.2×3.0×3.3					
第518図236	Ｃ－8	脚	2.8×1.9×2.1					
第518図237	Ｄ－1	脚	4.1×4.0×2.6					
第518図238	Ｄ－3	脚	7.4×4.2×4.5	曽利	付根部に分割塊面	脚部に蔓状沈線文と集合沈線	膝は渦巻沈線で表出	
第518図239	Ｄ－6	脚	2.1×4.3×4.5					
第519図240	Ｄ－10	脚	2.9×3.9×2.6					
第519図241	Ｄ－10	脚	4.6×4.0×4.4	曽利		足首に平行沈線間刺突文をなすと思われる。		
第519図242	Ｄ－11　表採	脚	5.7×4.2×5.4					
第519図243	Ｅ－2	脚	4.6×3.9×4.9		左足との接合部に分割塊面			
第519図244	Ｅ－3	脚	2.3×3.1×3.2					
第519図245	Ｅ－3	脚	2.2×2.0×4.3					
第520図246	Ｅ－4	脚	3.2×3.2×4.5		左足との接合部に分割塊面			
第520図247	Ｅ－7	脚	5.1×4.3×5.5		付根部に分割塊面（ソケット接合法）			
第520図248	Ｅ－8	脚	2.2×2.2×3.3					

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第520図249	E－9	脚	3.3×4.7×5.0			つま先に刻目		
第520図250	F－1	脚	2.2×1.7×2.1		付根部に分割塊面と木芯痕			
第520図251	F－2	脚	2.2×3.9×4.7			足の甲に沈線文		
第520図252	F－2	脚	4.2×3.6×4.5		左足との接合部に分割塊面			
第521図253	F－2	脚	4.6×3.6×5.1	曽利	足裏に粘土塊面	足首に平行沈線間、単沈線		
第521図254	F－4	脚	4.4×1.9×2.2		付根部に分割塊面（ソケット接合法）			
第521図255	F－8	脚	1.8×3.2×3.4			つま先に刻目で足の指を表現		
第521図256	F－9　No.1	脚	1.5×2.9×3.2					
第521図257	G－1	脚	4.3×3.3×7.6		足首に粘土塊面			
第521図258	G－4	脚	2.0×3.0×1.9		脚との接合部に分割塊面と木芯痕			
第521図259	G－5	脚	1.4×2.6×2.8					
第521図260	G－6	脚	1.7×3.3×4.7		右足との接合部に分割塊面	つま先に刻目		
第521図261	G－8	脚	3.3×2.4×3.1	曽利		足首に平行沈線間、刺突文		
第522図262	H－4	脚	5.8×4.6×4.9			足首に沈線文		
第522図263	H－4	脚	2.8×1.9×3.4	新道～藤内		足首に三角押文		
第522図264	H－4	脚	3.1×3.1×3.6	曽利	右半身との接合部に分割塊面			足を省略した土偶
第522図265	I－2	脚	4.6×3.9×5.2			足首に沈線		足底にえぐり
第522図266	I－2	脚	9.5×6.2×6.5		付根部に分割塊面、他は粘土塊面			
第523図267	I－3	脚	5.5×5.2×5.4		木芯痕			足底にえぐり
第523図268	I－4	脚	3.6×3.0×3.6		足裏に粘土塊面	膝を突出させている		
第523図269	J－2	脚	5.0×2.8×3.0			足首に短沈線		
第523図270	J－2	脚	4.5×4.0×2.5					
第523図271	J－4	脚	3.5×6.6×4.8					
第523図272	R－20	脚	2.6×3.2×4.3					
第523図273	S－18	脚	5.0×3.3×4.4			足首に沈線		
第 94 図1	S—ⅣB—5	全身	2.2×6.1×2.5			腹に沈線		土動物土偶
第524図 2	S—ⅣB—6	全身	1.9×3.1×1.6					イノシシ
第524図 3	S—ⅣJ—2	全身	4.4×7.3×3.3			耳と口と表現		〃
第524図 4	S—ⅣH—2	全身	12.6×5.0×3.1			石斧を人形様に加工したもの		？
								〃
								イノシシ
								右偶か？

第10節　土製円盤一覧表

S—Ⅳ区土製円盤一覧表

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	A—1	1.9	0.8	3			49	B—6	2.5	0.8	5		
2	A—1	2.8	1.1	11			50	B—6	3.1	0.9	10		
3	A—1　3層	3.5	0.7	11			51	B—6	4.4	1.1	24		
4	A—1	1.8	0.9	4			52	B—6	4.9	1.8	44		
5	A—3	2.3	1.1	8			53	B—6	3.4	1.0	14		
6	A—3	3.0	1.2	14			54	B—7	2.9	0.7	7		有孔土製円盤
7	A—3	4.5	0.9	15			55	B—7	2.9	1.2	11		
8	A—3	3.9	1.2	11			56	B—7	4.1	1.0	24		
9	A—4	3.2	1.0	14			57	B—7　Pit1	4.4	1.5	25		
10	A—4	2.3	1.1	6			58	B—7　Pit1	4.1	1.1	20		
11	A—4	3.8	1.0	16			59	B—8	4.1	1.3	21		
12	A—5　2層	3.7	0.8	15			60	B—8	3.9	0.8	26		
13	A—6	3.8	0.7	14			61	B—8	2.8	0.8	9		
14	A—6　フク土	2.4	0.8	6			62	B—8	2.9	1.1	11		
15	A—7	3.7	0.8	14			63	B—8　Pit1	3.5	0.9	19		
16	A—7	3.6	1.0	18			64	B—8　1層	3.8	1.3	20		
17	A—7	3.4	1.0	16			65	B—8　3層	4.6	1.1	32		
18	A—7	2.4	1.2	9			66	B—10	3.2	0.9	15		
19	A—7	3.1	0.9	10			67	B—10	4.4	1.2	2-		
20	A—9	5.7	1.0	32			68	B—12	3.5	1.1	16		
21	A—9	4.3	1.0	24		口縁部付近	69	B—12	4.9	1.1	28		
22	A—12	4.0	1.1	21			70	B—12　2層	3.2	0.9	10		
23	A—12	2.5	0.7	6			71	C—1	4.8	1.2	20		
24	B—1	4.4	1.0	22			72	C—1	2.8	0.9	10		
25	B—1	3.5	1.3	18			73	C—1	3.8	1.0	15		
26	B—1	3.4	1.2	17			74	C—2	4.6	1.2	33		
27	B—1	3.4	1.0	14			75	C—2	4.5	1.2	27		
28	B—1	5.2	1.1	45			76	C—2	3.3	1.2	15		
29	B—1	4.0	1.3	25			77	C—2	3.4	1.0	18		
30	B—1	3.4	0.7	10			78	C—3	3.5	0.9	14		
31	B—2	3.7	1.3	18			79	C—3	3.6	1.4	23		
32	B—2	4.8	1.0	23			80	C—3　メンコ	4.3	1.1	20		
33	B—2	5.6	1.2	44			81	C—4　No.22	3.4	1.0	18		
34	B—2	3.0	0.8	9			82	C—4	3.8	1.3	24		
35	B—2	4.7	0.9	25			83	C—4	3.8	0.9	17		
36	B—2	4.0	1.2	22			84	C—4	2.2	1.0	6		
37	B—2	3.2	1.1	15			85	C—4	3.1	1.0	14		
38	B—3	4.6	1.3	35			86	C—4	3.6	1.0	20		
39	B—3	3.9	1.2	18			87	C—5　P—1	4.1	1.0	22		
40	B—3	3.3	0.9	9			88	C—5　P No. 7	3.0	0.9	11		
41	B—3	4.0	1.1	18			89	C—5	3.3	1.3	19		
42	B—3	3.1	1.0	12			90	C—6	5.8	1.5	71		
43	B—4	3.6	1.1	20			91	C—6	3.4	1.0	15		
44	B—4	3.6	1.0～1.7	21			92	C—6	4.6	0.9	25		
45	B—5	4.2	1.0	22			93	C—6	3.7	0.9	16		
46	B—6　1層	4.2	1.3	26			94	C—6	3.6	1.2	18		
47	B—6　No.68	4.6	1.0	29			95	C—6	5.3	1.4	46		
48	B—6	5.0	1.2	41			96	C—6	4.2	1.0	22		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
97	C—7	3.7	1.0	20			146	E—3	3.0	1.0	6		
98	C—7 2層	3.1	1.2	10			147	E—3	3.4	0.9	12		
99	C—7 2層下	3.8	0.5	11			148	E—3	3.2	1.2	14		
100	C—7 2層下	5.2	1.0	37			149	E—3	3.5	1.0	13		
101	C—8 2層	3.4	0.8	11			150	E—3	4.4	1.3	37		
102	C—8 2層	3.8	0.9	16			151	E—3	3.0	0.6～1.0	9		
103	C—9 ベルト	4.4	1.0	30			152	E—3	4.2	0.8	20		
104	C—10 3層	3.8	1.0	20			153	E—4	4.0	1.1	21		
105	C—10	4.6	1.3	39			154	E—4	3.4	0.8	12		
106	C—	4.3	1.1	18			155	E—4 3層	3.0	1.0	13		
107	D—2	4.3	1.1	30			156	E—6	3.0	0.9	10		
108	D—2	3.5	1.0	14			157	E—6	2.9	1.2	13		
109	D—2	2.6	0.7	7			158	E—6	2.6	1.4	13		
110	D—2	4.5	1.1～1.6	35			159	E—6	7.8	1.1	69		
111	D—3	4.4	1.7	29			160	E—7 No.20	3.0	1.1	13		
112	D—3	3.5	1.1	16			161	E—7	3.8	0.9	21		
113	D—3	2.2	1.1	8			162	E—8 No.4	3.8	1.4	26		
114	D—3	3.3	1.1	16			163	E—8	3.2	1.5	20		
115	D—3	3.7	1.1	23			164	E—8	2.6	0.9	9		
116	D—4	5.4	0.7	25			165	E—8	3.7	1.0～1.3	19		
117	D—4	3.8	0.9	15			166	E—8	3.9	1.0	20		
118	D—7	4.3	0.7	20			167	E—8	3.3	1.5	20		
119	D—8 2層	2.9	1.3	11			168	E—9	4.4	1.0	20		
120	D—9	3.4	1.7	20			169	E—9	3.1	0.9	10		
121	D—10	4.0	1.0	18			170	E—9	3.7	0.7	13		
122	D—10	3.5	1.4	20			171	F—2	3.8	0.9	15		
123	D—11 3層	3.4	1.2	17			172	F—2	3.0	0.8	10		
124	E—1	3.8	1.1	20			173	F—2	4.3	1.0	25		
125	E—1	2.5	1.1	10			174	F—2	3.8	1.2	25		
126	E—1	3.6	0.9	14			175	F—2	2.4	1.0	9		
127	E—1	3.4	0.5	6			176	F—2	5.4	1.2	4.0		
128	E—1	4.4	1.0	23			177	F—2	4.2	1.6	35		
129	E—1	5.4	1.2	42			178	F—2	2.8	0.7	8		
130	E—1	3.7	1.0	15			179	F—2	4.3	0.9	20		
131	E—1	5.2	1.1	34			180	F—2	3.7	0.8	14		
132	E—2	3.0	1.1	9			181	F—3	4.8	0.9	23		
133	E—2	4.9	1.0	31			182	F—3	3.4	1.5	23		
134	E—2	3.0	1.2	11			183	F—3	3.5	1.0	17		
135	E—2	3.4	0.7	14			184	F—3	3.7	1.1	19		
136	E—2	4.2	0.8	18			185	F—3	3.7	1.0	18		
137	E—2	3.2	1.0	14			186	F—3	3.3	1.2	18		
138	E—2	3.5	0.9	14			187	F—4	2.5	0.8	6		
139	E—2	3.6	0.7	14			188	F—4	4.2	0.9	16		
140	E—2	3.4	0.8	11			189	F—5	2.0	0.8	5		
141	E—3	4.1	1.0	17			190	F—6	3.3	1.2	12		
142	E—3 3層	5.8	1.1	32			191	F—6	4.1	0.9	20		
143	E—3	3.3	1.0	14			192	F—6	4.3	0.8	20		
144	E—3	3.8	1.2	24			193	F—6	5.8	1.1	50		
145	E—3	3.1	1.1	12			194	F—6	3.3	1.0	15		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
195	F—7 No.3	2.9	0.8	10			244	G—3	4.6	1.3	38		
196	F—7	4.4	1.3	29			245	G—3	5.8	0.8	31		
197	F—7	3.0	1.0	10			246	G—3	4.8	1.5	36		
198	F—7	2.9	1.0	11			247	G—3	2.6	1.3	11		
199	F—7	3.3	0.8	11			248	G—3	3.2	1.2	16		
200	F—7	3.9	1.2	20			249	G—3	3.6	1.4	20		
201	F—7	5.3	0.9	34			250	G—3	3.5	1.0	15		
202	F—8 No.1	2.5	1.0	10			251	G—3	3.3	1.3	18		
203	F—8 No.5	3.0	1.1	14			252	G—3	4.1	1.1	25		
204	F—8	3.5	0.8	15			253	G—3	4.1	1.5	29		
205	F—8	3.4	1.1	15			254	G—4	4.7	1.4	30		
206	F—8	4.0	1.0	20			255	G—4	3.7	1.1	20		
207	F—8	4.1	0.8	19			256	G—4	3.2	1.1	15		
208	F—9	4.3	1.1	24			257	G—4	3.2	0.7	10		
209	F—9	5.3	1.1	31			258	G—4	3.0	1.2	14		
210	F—9	3.6	1.0	17			259	G—4	3.5	0.9	15		
211	F—9 No.2	2.3	1.0	7			260	G—4	3.8	0.7	15		
212	F—10 3層	2.9	0.8	9			261	G—4	2.6	1.1	10		
213	F—10 3層	3.5	1.1	17			262	G—5	3.5	1.1	17		
214	G—1	5.1	0.7	26			263	G—5	3.2	1.0	12		
215	G—1	4.7	1.2	33			264	G—5	3.1	1.2	9		
216	G—1	4.4	1.3	27			265	G—5	2.9	1.1	10		
217	G—1	4.5	0.8	20			266	G—5	2.3	0.8	5		
218	G—1	5.6	1.2	34			267	G—6 No.2	4.5	1.1	30		
219	G—1	4.5	0.8	22			268	G—6 No.1	4.1	1.0	21		
220	G—1	3.6	1.6	22			269	G—6	4.2	0.7	19		
221	G—1	3.5	1.2	19			270	G—7	3.2	0.9	14		
222	G—1	3.6	1.3	21			271	G—7	3.1	0.7	10		
223	G—1	3.3	1.2	19			272	G—7	4.1	0.9	20		
224	G—1	3.0	0.8	10			273	G—7	4.3	1.1	24		
225	G—1	3.7	1.1	20			274	G—7 4層	5.6	1.1	42		
226	G—1	3.2	1.0	17			275	G—8	3.5	1.2	17		
227	G—1	3.2	1.5	18			276	G—8	3.8	1.3	20		
228	G—2 No.42	3.5	1.0	18			277	G—8	3.8	1.3	20		
229	G—2 No.42	3.7	1.1	20			278	G—8 耕作土中	2.5	1.1	10		
230	G—2	3.6	0.6	10			279	G—8 2層	4.5	1.2	27		
231	G—2	3.5	1.1	20			280	G—8 4層	3.3	1.0	18		
232	G—2	2.5	1.1	10			281	G—9 No.4	3.2	1.1	15		
233	G—2	5.3	0.6～1.2	54			282	G—9	2.7	1.2	10		
234	G—2	2.9	0.7	8			283	G—9	3.5	0.8	15		
235	G—2	4.7	1.4	40			284	G—9	3.8	1.0	20		
236	G—2	4.1	1.3	21			285	G—9 3層	3.1	1.1	14		
237	G—2 1層	2.8	1.1	11			286	G—11 2層上	3.2	1.2	20		
238	G—3	3.4	1.2	18			287	H—1	2.4	1.0	6		
239	G—3	2.6	0.8	9			288	H—1	3.1	1.5	15		
240	G—3	4.4	1.2	20			289	H—2	4.1	0.8	19		
241	G—3	3.3	0.8	11			290	H—2	2.2	1.1	7		
242	G—3	3.9	1.0	19			291	H—2	2.9	1.0	11		
243	G—3	4.0	1.6	27			292	H—2	3.4	0.9	13		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
293	H—2	3.9	0.9	19			320	H—8	3.8	1.6	26		
294	H—2	3.5	1.2	19			321	H—8	2.9	1.1	8		
295	H—3	2.1	1.1	5			322	H—8	2.9	1.0	11		
296	H—3	3.7	0.7	14			323	H—8	3.9	1.2	20		
297	H—3	2.8	0.8	9			324	I—2	3.4	1.3	20		
298	H—3	2.7	1.2	11			325	I—3	4.0	1.2	24		
299	H—3	3.4	1.0	16			326	I—3	3.0	1.2	14		
300	H—3	3.8	1.2	21			327	I—4	3.4	1.0	15		
301	H—3	4.2	1.4	35			328	I—4	3.4	0.9	16		
302	H—3	4.9	1.1	35			329	I—4	3.1	1.1	12		
303	H—4	2.9	1.1	12			330	I—4	2.8	0.8	9		
304	H—4	3.0	1.2	14			331	I—4	3.9	1.2	25		
305	H—4	2.9	1.3	14			332	I—4	3.7	1.3	22		
306	H—4	2.8	0.9	9			333	I—4	3.7	1.3	20		
307	H—4	3.6	1.2	17			334	I—5	3.5	1.0	18		
308	H—5	3.3	0.9	10			336	I—7 Pit 7	2.8	0.9	10		
309	H—5	3.7	1.2	15			337	J—1 No. 1	3.4	0.8	13		
310	H—5	3.0	0.8	10			337	J—2	5.8	0.7	30		
311	H—5	4.1	1.1	22			338	J—3	6.0	1.1～1.7	60		
312	H—5	6.1	1.2	40			339	J—3	3.5	0.9	15		
313	H—5	4.7	1.1	30			340	J—7	4.0	1.5	30		
314	H—5	4.8	1.0	30			342	J—18	4.5	1.0	24		
315	H—5	2.8	1.1	10			343	J—20	3.5	1.2	18		
316	H—6	3.9	0.9	14			344	J—20	3.2	0.9	12		
317	H—6	4.3	1.2	20			345	S—4 No.50	4.1	0.9	18		
318	H—7	3.5	1.4	20			346	X—1	4.6	1.0	18		
319	H—7	.8	1.1	20									

S—Ⅳ区　土製円盤一覧表

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	SB—02	6.2	1.0～1.3	35			49	SB—53	3.1	1.3	15		
2	SB—02	5.1	1.2	40			50	SB—53 No.7	3.0	1.0	11		
3	SB—02	4.0	1.1	20			51	SB—53 No.11	3.0	0.8	9		
4	SB—03	4.8	1.3	23			52	SB—53 No.14	3.5	1.0	15		
5	SB—04	2.7	1.3	7			53	SB—53 No.20	3.6	1.2	19		
6	SB—10	2.8	1.0	8			54	SB—53 No.237	3.5	1.3	17		
7	SB—11 No.56	2.9	1.0	11			55	SB—53 No.1005	3.9	1.3	23		
8	SB—15	3.3	1.2	16			56	SB—53 No.1055	5.8	1.0	36		
9	SB—15	3.7	0.9	15			57	SB—53 No.1057	4.8	1.2	27		
10	SB—16	3.7	1.4	18			58	SB—53 No.1105	4.9	1.8	40		
11	SB—16	4.4	1.1	26			59	SB—53 No.1106	4.1	0.9	18		
12	SB—17	7.2	1.0	52			60	SB—53 No.287	3.1	1.1	13		
13	SB—20	3.7	1.2	21			61	SB—53 No.316	3.6	1.3	20		
14	SB—20	3.2	1.0	14			62	SB—53 No.1099	5.1	1.5	45		
15	SB—20	2.7	1.0～1.4	10			63	SB—53	4.7	0.9	20		
16	SB—20	2.7	1.2	13			64	SB—55	3.3	1.0～1.2	11		
17	SB—21	3.6	1.1	18			65	SB—55	3.4	1.0	15		
18	SB—26	4.6	1.7	37			66	SB—55	3.7	1.4	22		
19	SB—32	4.0	1.1	18			67	SB—55	3.2	1.2	12		
20	SB—32	3.2	0.9	12			68	SB—55	3.5	1.0	13		
21	SB—32 No.54	2.6	1.0	11			69	SB—55	3.4	0.9～1.5	10		
22	SB—32 No.171	3.0	1.1	14			70	SB—55	3.0	1.1	14		
23	SB—37	3.6	0.7	15			71	SB—55	3.7	1.5	17		
24	SB—40	3.9	1.1	20			72	SB—55	3.2	0.8	10		
25	SB—50	3.8	1.4	22			73	SB—55	3.5	0.8～1.1	10		
26	SB—50 No.38	4.2	1.2	25			74	SB—55	3.0	0.9	10		
27	SB—50 No.44	3.2	1.1	14			75	SB—55	3.1	1.5	17		
28	SB—52	4.8	1.0	22			76	SB—55	3.5	0.9	13		
29	SB—52	3.4	1.0	15			77	SB—55	2.2	1.1	7		
30	SB—52	3.7	1.1	19			78	SB—55	3.5	1.3	11		
31	SB—52	4.2	1.5	26			79	SB—55	3.0	1.0	10		
32	SB—52	4.6	1.2	29			80	SB—56 No.117	3.2	1.4	20		
33	SB—52	3.9	1.0	20			81	SB—56 No.143	3.3	1.2	18		
34	SB—53	2.1	1.0	6			82	SB—56	2.3	1.3	11		
35	SB—53	3.4	1.0	15			83	SB—57	2.5	1.1	10		
36	SB—53	3.3	1.0～1.2	13			84	SB—63 No.2	3.5	1.1	17		
37	SB—53	2.7	1.3	10			85	SB—63	2.5	1.0	8		
38	SB—53	3.0	1.1	13			86	SB—63	3.4	0.9	13		
39	SB—53	3.2	1.0	14			87	SB—63	2.9	1.0	10		
40	SB—53	3.3	1.0	7			88	SB—63	3.7	1.1～1.3	20		
41	SB—53 2次層	3.0	1.2～1.5	16			89	SB—63	4.0	1.3	23		
42	SB—53 2次層	3.3	0.9～1.1	13			90	SB—63	4.5	1.2	10		
43	SB—53 2次層	6.5	0.9	42			91	SB—63	4.3	1.0	23		
44	SB—53 2次層	5.0	1.1	30			92	SB—63	4.0		20		
45	SB—53 2次層	2.8	1.0	10			93	SB—63	3.2	0.8～1.1	14		
46	SB—53 2次層	2.9	1.0	10			94	SB—64	3.4	0.9	14		
47	SB—53	3.2	1.0	12			95	SB—64	4.0	1.3	25		
48	SB—53	2.9	1.1	11			96	SB—64 Pit 8	4.8	1.3	39		

S—Ⅳ区　土製円盤

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
97	SB—64	4.3	1.5	22			119	SB—69	4.9	1.5	42		
98	SB—65	3.5	1.2	14			120	SB—69 No.1	3.6	1.0	15		
99	SB—65	4.0	0.9	20			121	SB—69 フク土	2.8	0.7	7		
100	SB—65	3.8	0.8	15			122	SB—69 No.17	3.0	1.2	13		
101	SB—65	3.4	0.7	10			123	SB—73	3.1	1.9	20		
102	SB—65	3.3	0.9	15			124	SB—73	3.1	0.8	9		
103	SB—65	3.7	1.1	8			125	SB—73	3.7	1.1	19		
104	SB—65	4.0	1.1	18			126	SB—73	3.9	1.3	19		
105	SB—65 No.40	4.2	1.1	22			127	SB—73	3.7	1.7	21		
106	SB—65 No.58	3.3	1.3	14			128	SB—73	4.5	1.3	26		
107	SB—65 フク土	4.9	1.4	35			129	SB—73	3.7	1.2	17		
108	SB—65 フク土	3.3	1.2	16			130	SB—73	3.3	1.2	15		
109	SB—65 フク土	5.4	1.4	43			131	SB—73 No.4	2.7	0.7	8		
110	SB—67	3.5	1.5	17			132	SB—73 No.5	4.0	1.0	19		
111	SB—67	3.9	1.6	25			133	SB—73 No.6	3.0	1.2	13		
112	SB—67	3.8	1.2	21			134	SB—73 No.7	4.1	1.3	19		
113	SB—67 フク土	2.5	1.3	9			135	SB—81 No.2	3.2	0.9	7		
114	SB—67二次周溝	3.2	1.2	15			136	SB—82	3.0	1.1	13		
115	SB—69	3.3	1.4	17			137	SB—82 No.2	4.2	1.5	26		
116	SB—69	3.0	0.7	9			138	SB	4.7	1.5	36		
117	SB—69	3.3	1.0	14			139	SB	3.0	1.3	14		
118	SB—69	4.8	1.0	17									

S—Ⅳ区　土製円盤　土壙出土

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	SK－29 No.10	3.4	0.8	8		
2	C－7 SK－83 No.46	3.3	1.0	6		
3	A－3 SK－91	2.6	1.0～1.5	10		
4	SK－141	3.5	1.0	14		
5	C－3 SK－142	3.5	0.7～1.1	16		
6	SK－164	3.1	1.1	13		
7	SK－178	3.5	1.1	6		
8	SK－183	2.5	1.0	22		
9	SK－183	4.3	1.0	22		
10	SK－185	4.0	1.2	22		
11	SK－188	3.9	0.8	15		
12	SK－212	2.8	1.2	11		
13	SK－376	2.7	0.9	9		
14	SK－395	3.0	1.3	16		
15	SK－80 No.46	3.3	1.0	7		

第11節　土製品一覧表Ａ把手

Ｓ—Ⅳ区　把手

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	477	1	ＳＢ—53 ベルト	人面把手		3.1		
		2	ＳＢ—53	人面把手		3.2		
		3	ＳＢ—52 No.55	把手	対三角面把手、これらの把手は狢沢～新道式期にみられる。			
		4	ＳＢ—53 No.126、1008	把手	玉抱き三し叉文を陰刻した把手			
		5	ＳＢ—69 No.13 pit内	把手	対三角面把手			
	478	6	ＳＢ—73	把手	対三角面把手			
		7	ＳＢ—73	把手	対三角面把手			
		8	ＳＢ—53	把手	ねじれた把手であり、一部阿玉台式の影響があると思われる。			
		9	ＳＢ—44～47	把手	対三角面把手			
		10	Ｃ—8	把手	対三角面把手			
	479	11	Ｇ—1 No.13	把手	五領ケ台式期の浅鉢につく把手。			
		12	Ｆ—2	把手	有孔鍔付土器につく把手である。			
		13	Ｈ—4	把手	対三角面把手	3.7		
		14	Ｃ—3	イノシシ把手	14と15は同一個体と思われる。			
		15	Ｃ—3	イノシシ把手				
		16	ＳＢ—49、50、51	イノシシ把手	五領ケ台式期浅鉢の把手（出土地はＳ—Ⅲ区）			
		17	Ｒ—5	トリ把手	トリの把手であろう。(カワセミ)			
	480	18	Ｔ—2	イノシシ把手	井戸尻式期			
		19	Ｅ—2	イノシシ把手	井戸尻式期			
		20	Ｆ—9	ヘビ把手	井戸尻式期			
		21	Ｂ—8	ヘビ把手	井戸尻式期			
		22	ＳＢ—53	把手	井戸尻式期			
		23	Ｃ—4	ヘビ把手	井戸尻式期			
		24	Ｉ—4	把手	井戸尻式期			
		25	Ｃ—6	ヘビ把手	井戸尻式期			
		26	Ｃ—6	ヘビ把手	井戸尻式期			

第12節　粘土塊一覧表

S—Ⅳ区　　粘 土 塊

No.	出 土 地 点	重 さ g	備　　考	No.	出 土 地 点	重 さ g	備　　考
1	A—3	143 g	指　痕	19	F—3	9 g	
2	A—4	16 g		20	F—3	20 g	
3	A—4　2層	25 g		21	F—7	82 g	土偶足？
4	A—5	43 g	指痕・指紋	22	F—7	983 g	溝有り、刺突
5	A—11	14 g		23	F—9　3層	99 g	
6	A—11	20 g		24	F—9	72 g	指　痕
7	B—1	48 g		25	F—10	37 g	
8	B—2	18 g		26	G—1	27 g	
9	B—3	12 g	指紋？	27	G—5	38 g	指痕・細い線
10	B—5底部穿孔ピット	240 g	指　痕	28	G—5	18 g	
11	B—7	25 g		29	G—5	37 g	
12	B—9	27 g		30	G—5	15 g	
13	C—6	61 g		31	G—8	169 g	
14	C—7	90 g		32	H—2	22 g	
15	C—8　2層	15 g	握ったもの	33	H—6	15 g	
16	E—3	24 g		34	I—4	20 g	
17	E—6　E—7	88 g	手のひら大、平盤	35	J—3	164 g	指　痕
18	E—8	93 g	指　痕				

S—Ⅳ区　粘土塊住居址・土壙出土

No.	出 土 地 点	重 さ g	備　　考	No.	出 土 地 点	重 さ g	備　　考
1	SB—15	67 g	指　痕	17	SB—67　ベルト	14 g	
2	SB—20	6 g	握ったもの、なめらか	18	SB—67	38 g	
3	SB—32	24 g	指痕、細かい穴数個 指紋	19	SB—73	18 g	
				20	SB—53　2次層	26 g	
4	SB—32	135 g	アジロ	21	SB—53	32 g	
5	SB—32	12 g		22	SB—53	15 g	
6	SB—32	19 g		23	SB—53	45 g	
7	SB—32	32 g		24	SB—55	8 g	穴あり
8	SB—32	14 g		25	SB—55	76 g	
9	SB—32	6 g		26	SB—33・35	25 g	
10	SB—34　No.38	164 g		27	SB—33・35	4 g	
11	SB—35	36 g	アジロ				
12	SB—53　2次層	18 g	指　痕	28	SK—65	33 g	
13	SB—53　2次層	13 g	握ったもの	29	SK—139	117 g	指　痕
14	SB—53　No.146	302 g	指痕・握った手の跡	30	SK—199	64 g	指　痕
15	SB—53　No.173	135 g	全体になめらか				
16	SB—60	13 g					

第13節　有孔鍔付土器一覧表

S－Ⅳ区　有孔鍔付土器

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　様	備　考
1	A－1	頸　部	内　孔	内・外有		
2	A－1	頸　部	外　孔	内・外有	鍔の下に縄文	
3	A－3	頸　部	外　孔	内・外有		
4	A－4、5　B－5	頸　部				
5	A－6	頸　部	内　孔			
6	A－7　No.2	頸部から胴	内　孔		隆帯有	
7	B－1	頸　部		内　有		
8	B－2	口　辺	内　孔			B－3と同一
9	B－3	口　辺	内　孔			B－2と同一
10	B－4	頸　部	内　孔			
11	B－4	口　辺	内　孔			
12	B－4	口　辺	内　孔			
13	B－5	口　辺	内　孔			
14	B－7	口　辺	内　孔			
15	B－8	頸　部	内　孔			
16	B－8	頸　部	内　孔			
17	B－9	頸　部	内　孔			
18	B－20	口辺から胴				
19	C－2	頸　部	外　孔			
20	C－2	頸　部	外　孔	内・外有		
21	C－3　No.4	頸部から胴				C－5と接合
22	C－3　3層下	頸　部				
23	C－3	口　辺				
24	C－3	口　辺	内　孔		鍔の下に縄文	N－Ⅳ　E－20　2層（81・8・17）接合
25	C－4　No.4	口辺から胴	内　孔		鍔の下に縄文	No.4＋No.3＋C－3＋C－4－No.30－No.7－C－1－C－5－C－3同一個体
26	C－4	頸　部	外　孔			
27	C－5	頸　部	内　孔			
28	C－5	頸　部	内　孔	内・外有		
29	C－6	頸　部	内　孔　突きぬけない穴も有			
30	C－6	頸部から胴		内・外有		
31	C－7	頸　部	内　孔			
32	C－7	頸　部	内　孔	外　有		
33	C－8　2層	頸　部	外　孔			
34	C－8　2層下	頸　部	外　孔			
35	C－8　2層下	頸　部	外　孔			
36	C－8　2層下	頸　部				〃 同一
37	C－8　2層	頸　部	内　孔	内・外有		
38	C－8	口　辺	内　孔			
39	C－10	頸　部		内・外有		
40	D－1　2層	口　辺	内　孔			D－1（810905）と接合
41	D－2	口　辺	内　孔	内・外有		
42	D－2	口　辺	内　孔	内・外有	〃 同一	
43	D－2	頸　部	内　孔		鍔の下に縄文	
44	D－3	口　辺	内　孔	内・外有		D－2口辺と同一、E－2（81092）と接合
45	D－3	頸　部	内　孔	内・外有		D－2口辺と同一、E－2（81092）と接合
46	D－3	口　辺	内　孔			
47	D－6	口　辺	内　孔			
48	E－1	頸　部	内　孔	外　有		
49	E－1	脚付底部		内・外有		E－1（810916）と接合

S—Ⅳ区　有孔鍔付土器

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　様	備　考
50	E—2	口　辺	内　孔	内・外有		
51	E—2	頸　部	内　孔			D—3と接合
52	E—2	頸　部	外　孔	内・外有		F—7 (81・3・26)＋G－7 (81・4・3) 接合
53	E—3	頸　部	外　孔	外　有		F—9 (81・3・13) 接合F－4同一(81・9・17)
54	E—3	頸　部		外　有		
55	E—4　3層	頸　部	内　孔			
56	E—4	頸　部				
57	E—9	頸　部	外　孔	内・外有	沈線の文様有	
58	E—11	頸　部	外　孔		条線の文様有	ミニチュア
59	E—11　3層	頸　部	内　孔	内　有		
60	F—1	頸　部	内　孔			
61	F—4	頸　部	外　孔			F—9と同一
62	F—7	頸　部	外　孔	内・外有		E—2 (810311) 接合
63	F—9	頸　部	外　孔	外　有		E—3 (810903) 接合F 4同一
64	F—16	頸　部		外　有		
65	G—2	頸　部	外　孔	内　有	沈線の文様有	N—ⅣB—17　No.3 (810821) 同一
66	G—2	頸　部				
67	G—4	頸　部	内　孔			
68	G—5　No.50	口　辺	内　孔			G—5　No.68 (811023) 同一? SK—178 (811004) 接合
69	G—5　No.68	口　辺	内　孔	内　有		G—5　No.50同一?
70	G—7	頸　部	外　孔	内・外有		E—2 (810311) 接合
71	G—9	頸　部				
72	H—1	頸　部				
73	H—1	頸　部	内　孔			
74	H—4	頸　部	外　孔			
75	H—4	口　辺		内　有		
76	H—4	頸　部	外　孔		沈線の文様有	H—6　No.6と同一
77	H—5	頸　部	外　孔		沈線の文様有	H—6　No.6と接合
78	H—5	頸　部	内　孔		鍔の下に条線有	
79	H—5	頸　部	外　孔		沈線の文様有	H—4 (810904) と接合
80	H—6　No.6	頸　部	外　孔		沈線の文様有	H—5 (810112) と接合
81	I—4	頸　部	外　孔		沈線の文様有	
82	J—4	頸　部		外　有	沈線の文様有	
83	J—19	頸　部	内　孔		鍔の下に縄文	

S—Ⅳ区 住居址出土有孔鍔付土器

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　様	備　考
SB— 1	05　炉内	頸から胴	外　孔		曽利新の文様	
SB— 2	10	口　辺	内　孔			
SB— 3	21	頸　部	内　孔			
SB— 4	22	頸　部	外　孔	内・外有		
SB— 5	26	頸　部	内　孔		鍔の下に沈線	
SB— 6	32　No.85	口辺から胴	内　孔			SB—32 (810819) 接合
SB— 7	32	頸　部	内　孔	内・外有		
SB— 8	52	頸　部	外　孔	内　有	鍔の下に縄文	
SB— 9	53	口　辺	内　孔		隆　帯	
SB—10	53　フク土	頸　部	内　孔			
SB—11	53	頸　部	内　孔			
SB—12	53　2次層	頸　部	内　孔			
SB—13	53　2次層	頸　部	内　孔			

No.	出土地点	部　位	内孔・外孔	赤彩の有無	文　様	備　考
SB—14	56　No.142	口辺から胴下	内　孔	内・外有		
SB—15	56	頸　部	外　孔		曽Ⅲ Ⅳ文様	
SB—16	67　Pit 3	頸　部	内　孔			
SB—17	80　フク土	口　辺	内　孔	内・外有		ミニチュア
SB—18	SB—65	頸　部		内・外有		
		頸　部		内・外有		
SB—19	SK—138	口　辺	内　孔			
SB—20	SK—159	頸　部	内　孔			
SB—21	SK—190	口　辺	内　孔			
SB—22	SK—192	口　辺	外　孔	内　有		

第14節　台形土器一覧表

S—Ⅳ区　台形土器

No.	出土地点	名称	部位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大きさ	備考
1	A—2	鍔付	鍔		平				
2	A—6	?	盤		平				接合、SB—12接合
3	A—6　3層	?	盤		平				
4	A—7	鍔付	鍔＋受け面		平				
5	A—8	鍔ナシ	受け面＋脚		平		線に縦きざみ有		
6	A—9	鍔付	鍔＋脚				鍔になめのきざみ		
7	B—2	盤状	受け面		平			(76)×(144)×22	
8	B—3	鍔ナシ	受け面	脚に孔有	平				
9	B—4	鍔付	鍔＋受け面		平				
10	B—5	鍔付	鍔		平	コゲ　有			B—7同一(810305)
11	B—5	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平				
12	B—5	鍔付	鍔＋受け面		平				
13	B—5	?	盤		平				
14	B—5	鍔付	鍔		平				
15	B—6	鍔付	鍔＋脚＋受け面		平				接地面、磨耗
16	B—7	鍔付	鍔		平	コゲ　有			B—5と同一
17	B—7	?	盤		平				
18	B—8	盤状	受け面		凹				
19	B—8	鍔ナシ	受け面＋脚		平				
20	C—2	鍔付	脚				脚に三角押文		
21	C—3	鍔付	脚	脚に孔有					
22	C—5	?	盤		平				
23	C—7　2層	?	盤		平				
24	C—7	鍔付	鍔		平				
25	C—10	盤状	受け面		平				
26	C—10	鍔付	脚						
27	D—1　2層	盤状	受け面		平				
28	D—2	?	盤		平				
29	D—3	鍔付	受け面＋脚		平				
30	D—10	盤状	受け面		凹				赤彩　有
31	E—1	鍔付	鍔		平				
32	E—1	鍔付	脚	脚に孔有					
33	E—2　3層	鍔付	脚	脚に孔有					
34	E—2	盤状	受け面		平				
35	E—2	鍔付	鍔		平				
36	E—2	鍔付	鍔		平				
37	E—8	鍔付	脚	脚に孔有					
38	E—11　No.3	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平			221×221×57	
39	F—4	鍔付	脚						
40	F—4	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平				接地面、磨耗
41	F—5	鍔付	鍔		平				
42	F—5	鍔付	鍔		平				
43	F—5	鍔ナシ	受け面		凹				
44	F—6	鍔ナシ	受け面＋脚	脚に孔有	平	オコゲ　有	オコゲ　有		
45	F—6	鍔ナシ	脚	脚に孔有					
46	F—6	鍔付	鍔＋受け面		平				
47	F—7　3層	?	盤		平				
48	F—7	鍔付	鍔＋受け面		平				
49	F—7	鍔付	鍔＋受け面		平				

No.	出土地点	名称	部位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大きさ	備考
50	F—8	鍔付	受け面		凹				
51	F—9	鍔付	受け面＋脚		平				
52	F—9	鍔付	鍔		平		鍔に縦にきざみ有		
53	G—1	鍔付	脚	脚に孔有					
54	G—2	?	盤		平				
55	G—3	?	盤		平				
56	G—3	鍔付	鍔＋受け面		平				
57	G—4	鍔付	鍔		平				
58	G—7 No.23	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平		裏面に×文様		
59	H—2	鍔付	鍔		平	オコゲ 有			
60	H—4	鍔付	鍔		平				
61	H—4	鍔付	鍔		平				
62	H—11	盤状	受け面		平				
63	J—6	?	盤						
64	J—18	鍔付	鍔		平				
65	B—3 No.1	鍔ナシ	受け面＋脚	脚に孔有	平				B—3 No.2と同一
66	B—3 No.2	鍔ナシ	受け面＋脚	脚に孔有	平				B—3 No.1と同一
67	E—2 No.33	鍔付	鍔						
68	G—5 No.12	?	盤		平				SK—178 No.26接合
69	G—5 No.13	盤状	受け面		平				SK—178 No.26接合
70	G—6 No.43	盤状	受け面		平				SK—178 No.26接合

S—Ⅳ区 住居址

No.	出土地点	名称	部位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大きさ	備考
1	SB—11 No.2	鍔付	鍔＋受け面＋脚		凹	オコゲ 有			
2	SB—11 No.3	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平	オコゲ 有			┤ 接合 253×(130)×(64)
3	SB—12	鍔付	鍔＋受け面		平				A—6.3層＋A—6接合
4	SB—12	盤状	受け面		平		盤に沈線の文様		
5	SB—13	?	盤		平				
6	SB—16 No.44	鍔ナシ	受け面＋脚	脚に孔有	平				接地面、磨耗
7	SB—16トレンチ	鍔ナシ	受け面		凹				
8	SB—17	?	盤		平				裏面が磨かれている
9	SB—18	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平	受け面にオコゲ			接地面、磨耗
10	SB—21	鍔付	鍔		平				
11	SB—32	鍔付	鍔＋受け面		凹				受け面赤彩有
12	SB—32	盤状	受け面		平				
13	SB—32 No.25	盤状	受け面		平				
14	SB—32 No.52	鍔付	鍔＋受け面＋脚		凹				脚の内側に赤彩
15	SB—32 No.82	盤状	受け面		凹				
16	SB—32	鍔付	鍔		平				
17	SB—50 No.32	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平	受け面にオコゲ			接地面、磨耗 受け面に赤彩有
18	SB—53 2次層	盤状	受け面		平				
19	SB—60	鍔付	鍔＋受け面		平		鍔に沈線の文様		
20	SB—63 No.8	盤状	受け面		凸				
21	SB—67	盤状	受け面		凹	受け面にオコゲ			
22	SB—78 No.1	鍔付	鍔＋受け面＋脚		平				接地面、磨耗
23	SB—78	?	盤		平				

No.	出土地点	名称	部　位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大きさ	備　考
24	SB—83　No.51	鍔　付	鍔＋受け面＋脚		平	受け面、裏面オコゲ			接地面、磨耗
25	SK—8	鍔　付	鍔＋受け面＋脚		凸	受け面オコゲ			接地面、磨耗
26	SK—53	鍔ナシ	受け面＋脚		平				接地面、磨耗
27	SK—127	鍔ナシ	受け面＋脚		凹				裏に赤彩有
28	SK—178　No.26	盤　状	受　け　面		平	受け面オコゲ			G—5　No.12、13（81、11、4）接 G—6 No.43（81、10、2）接

第 4 章　N—Ⅲ区

第 1 節　縄文時代中期の住居と出土遺物

SB—01

M—18に位置する。柄鏡形住居であろう。柄部の敷石部と埋甕と炉址を検出している。住居址の出入口部の方向が南を向いている。この時期の主軸方向は統一性がないことも一つの特色である。埋甕は柄の部分ではなく、鏡部のプランの中で検出されており、釈迦堂の柄鏡形住居址では唯一の例だけに注目される。時期的には曽利新第４段階に位置しよう。他に加曽利Ｅ$_4$式の破片もいくつか見られる。石器は石鏃１、打斧１、磨石１、玉石１、黒曜石17ｇである。

SB—02

H—19に位置する。長径550ｍ、短径480ｍの円形プランである。炉址は全壊している。柱穴はＰ$_1$、Ｐ$_3$、Ｐ$_9$、Ｐ$_{11}$がこれにあたるが、炉の奥壁の柱穴は検出できなかった。壁溝は南側の出入口部周辺のみにある。

出土遺物はほとんどなく、小片のみで、時期判定には苦しむ。石器は石鏃１、打斧２、磨斧１、黒曜石40ｇ、水晶８ｇである。

SB—03

Ｉ—20に位置する。長径520ｍ、短径470ｍの円形プランをなす。炉址は全壊しており、柱穴はＰ$_1$、Ｐ$_2$、Ｐ$_4$、Ｐ$_6$がそれにあたるが、まだ検出できないものもある。

出土遺物も少なく、時期的判断に苦しむものである。石器は磨石３、ハンマー１、砥石１、黒曜石1.2ｇ、水晶3.3ｇである。

第 2 節　土器すてばＢ

N—Ⅲ区　土器すてばＢ

N—Ⅲ区の土器すてばは、土器すてばＢのうち大半の面積を有する。N—Ⅳ区と同じように直径12ｍの円形ブロックをなしている。ただし、N—Ⅳ区のように濃密ではない。またＶ列のグリッドより西側は散漫な状況の土器すてばとなり、これらもあるいはブロックを形成するものであろうか。

なお、土器すてばも細かく見れば、小さなブロックの集合といえる。ただし、これらの小さなブロックごとの説明は省略せざるを得なかった。

ところで、N—Ⅲ区土器すてばＢでは、Ｖ—19でSK—05とした逆位の底部欠損の埋甕が検出されており、何か特殊な遺構のように思われる。いずれにしても、屋外埋甕の特殊例である。

出土遺物はN—Ⅳ区に比べると、格段と少ない。これはN—Ⅲ区の土器すてばに小片が多かったという理由と、復元作業が作業の手順上から進まなかったという理由以外に、このN—Ⅲ区の土器すてばの一つの性格といえよう。

第3節　住居址一覧表

N—Ⅲ区　住居址

SB№	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—01	M—18		柄鏡形	方形石囲炉	一部欠落	正位	土偶	柄鏡形住居址
SB—02	I—20	550 × 480	楕円形	石囲炉	全壊			
SB—03	H—19	520 × 470	不定形	石囲炉	全壊		土偶	

第4節　土壙一覧表

整理番号	土壙番号	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK—01		131× 109× 38			
	SK—02		150× 137× 109			
	SK—03	L—18	× × 39	磨石	曽利新式土器	SB—01に伴うものか。
	SK—04					集石土壙
	SK—05	不明			加E	土壙の掘り込みは認められなかった。

第5節　土器一覧表

N—Ⅲ区　埋甕

写真	図	図№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
173	545	20	埋甕	8	口辺部文様帯が失なわれ、その残影から、4単位の懸垂状沈線が下る。体部はクジ歯状工具による条線と沈線文がある。			
	547	31		8	体部全体に沈線による文様を描く、異質な土器である。			

N—Ⅲ区　土壙出土土器

写真	図版	挿図№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
173	548	1.	SK−03		2（または4？）単位把手付壺。頸部に2本の隆帯がめぐり隆帯上に把手が立ち上がる。隆帯間に太い沈線。胴部は隆帯による三角形状（斧先状）区画と渦巻文。隆帯に沈線が沿う。区画内（外にも少し）5本1組櫛歯状工具を斜めに刺突した並列刺突文。			
		2.	SK−03	8−3	塊状の胴部の下に続いていた台部はほとんど欠失。胴部は2本1組の垂下沈線で器面を分けてはいるが、本来の無文部にも施文する所あり。ハの字文が崩れた、いいかげんな列点文。内面はススで真っ黒。			
		3.	SK−03		ミニチュア土器。	6	0.8	
		4.	SK−03	8−2	口縁部に横走沈線1本。胴部は縦長の逆U字状懸垂文で器面を分割し、その間に上端に沈線の楕円文、以下は綾杉状沈線文と、その上に蛇行沈線が垂下。	40.2	16.8	
		5.	V−19 （SK−05） 土器すてば B内の逆位 埋甕		胴部くびれ部・底部接合面にて故意に打欠き、理甕に転用した。胴部地文縄文→くびれ部に半截竹管による2条の半隆起線（つまり3本の沈線）がめぐる→胴下半部に2条の半隆起線が8単位垂下。土器すてば内に埋設されていた唯一の例。			

N－Ⅲ区　土器すてばB　出土土器

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	549	1	X－18 Y－18 X－10 Y－17 S－Ⅳ SB－53	3	内弯口縁と球胴形胴部をもつ。口縁部に渦巻隆帯1箇所残存。口唇直下2本の沈線、沈線に沿って5～6個1組の刺突文（円形竹管先端）。その下にY字形刻文。胴部はY字形隆帯が垂下。胴部上半に6本の横走沈線がめぐり、下半は2本1組沈線が垂下するが、沈線が連続弧状に垂下するバラエティあり。地文縄文RL、口縁部は横にころがし、胴部は縦が基本だが横もある。今村氏編年によれば五領ヶ台直後、大石式。			
		2	Y－20		ミニチュア土器。胴部に2箇所、横S字状隆帯の先を半隆起線で伸ばした特異な文様がある。口唇に半隆起線がめぐり、隆帯・半隆起線上刻み。	10.2	0.15	
		3	Y－18 Y－19	5	4単位の突起は、逆「C」字形と木の葉形が左右に結合した形状を呈する。口縁部文様帯は隆帯により4単位の半円形区画と逆台形区画を作る。区画内キャタピラ文、三角押引文、斜格子状沈線文、削り出しによる陰刻三叉文。三角押引文に刺突（截痕）が沿う所あり。胴部は逆U字状懸垂隆帯2単位により分割される。隆帯は途中屈曲して先端が象の鼻状にふくらむ。胴部は上半の横位構成・下半の縦位構成に分かれるがいずれも半隆起線による区画から成り、区画の間隙を削り出す。半隆起線には截痕が沿う。上半は3段の横長楕円・横長矩形区画、下半は北陸系「B字状文」。区画内は横走・斜行三角押引文、斜格子状沈線文、交互に配される陰刻三叉文。	42.7	13.7	
		4	N－18 N－19	6	口縁部は幅広い肥厚帯をなし、その下端の横走沈線1本の他は全面縄文RL。			
		5	Q－20	7	無文口縁が開き胴部が円筒形を呈する。胴部は縦の隆帯で4単位に分かれ、U字状隆帯・渦巻隆帯などの間を沈線による渦巻文・三叉文で埋める。図の左側のU字状隆帯内は中央に隆帯が垂下し下部の扁平な円形隆帯とつながり、左右の渦巻沈線とあわせて人面を思わせるモチーフである。			
174	550	6，7	X－20 X－19	7	内折口縁上に1単位の環状大把手がつき、頂部に蛇頭状装飾をのせ隆帯が垂下する。把手内側は十字に貫通。大把手反対側に三角に突出する突起があり、その裾部は渦巻文となる。胴上半部地文縄文0段3条RL。弧状・円形磨消文また突起下隆帯に沿って三叉状の磨消文がある。胴部くびれ部に横走隆帯、以下楕円形区画横帯となる。			
		8	P－20 Q－20	7	所謂椀形文土器の上半部。4単位大把手はいずれも欠損。口縁部は内折部をはさんで上下に半肉彫的文様が施される。図の正面、大把手欠損部直下に位置する円形のふくらみは眉・口の表現あり顔面把手である。図の側面の同じ位置には眼鏡状把手。			
		9	R－19 R－7	7	小型円筒形深鉢。2本1組の隆帯とそれに沿う沈線により2段の横帯に分けるが下端は限らない。横帯は交互の三叉文から成り三叉文内をきれいにけずる。1ヶ所、三叉文の先が渦巻となり内部に円形文を抱く様なモチーフがある。	22.2	2.2	
		10		7	所謂椀形文土器の胴下半部、底部。胴下半部文様帯は円形隆帯とそれをつなぐ斜行隆帯、隆帯間縦列沈線・渦巻文・三叉文から成るが、これは楕円区画の変形とみるべきであろう。隆帯上は数条の沈線が横走し、各所に刻みがつく。			
		11	P－20	7	埦形土器。波状口縁の波頂部がいずれも欠損。波頂部が二叉状になっていたかあるいは波頂下に貫通孔があったらしい。口縁に沿って太い弧状沈線。内外面全体にわたって、赤彩の痕がよく残る。	7.2	0.5	
		12	N－Ⅲ Y－18 N－Ⅳ B－19 A－19 B－18 C－17 C－18	7	沈線渦巻文をもつ円形隆帯またはU字状隆帯から垂下する隆帯により4単位に分けられ、うち2単位は文様帯下端を隆帯で画す。鋸歯状隆帯・先端が蛇頭状となる斜行隆帯などの間隙を渦巻文・三叉文などの沈線文で埋める。	39.0		広域接合土器すてば内

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	550	13	R－20		鍔が欠損する台形土器。脚部接地面が擦り減っている。			
		14	P－19		台形土器。脚部底面が擦り減っている。			
		15			台形土器。脚部底面が擦り減っている。受け面は凹弯する。裏面の脚部に囲まれた部分に沈線列が描かれる。			
175		16	O－18	8－1	口縁部は半隆起線による褶曲文（重弧文）を施文後に波状粘土紐垂下。頸部は4条の横走半隆起線と下に沿う波状粘土紐。胴部は3～5本竹管整形隆帯による懸垂文が逆U字状に残存するがモチーフ不明。波状粘土紐垂下。地文は半截竹管による条線。			
	551	17	Q－20 21	8－1	外反する口縁部と膨らむ頸部の境に横走隆帯1本。胴部は2～3本1組垂下隆帯と、2本1組隆帯による対U字状文。いずれも隆帯は太く、刻みをもつ。胴部地文縦方向条線は1本ずつひいている。			
		18	T－19 T－11 S－19	8－1	頸部は3本の隆帯を横走させているが胴部懸垂文が下がる部分で途切れる。胴部懸垂文は3本1組隆帯による逆J字文4単位。隆帯はいずれも竹管整形に似るが、実際は棒状工具で隆帯間に沈線をひいているものであろう。隆帯を短沈線で区切っている所がある。地文は縦方向1本引き沈線による条線。			
		19	Y－20	8－1	円筒形の小型深鉢。口縁部のU字状貼付から垂下する2本1組隆帯による逆·J字状懸垂文と、図の裏側は2本1組垂下隆帯。隆帯上いずれも刻み。胴部地文1本引き沈線による条線。口縁の無文部はやや肥厚する。			
		20	R－20 R－19	8－1	小型深鉢。頸部2本横走隆帯、胴部は2本1組または1本の垂下隆帯。隆帯上は不明瞭ながら半截竹管による刻みをもつ。胴部地文撚糸文はLの縄をR巻きしている。撚糸文と隆帯の先後関係は不明。			
		21	X－20		胴部地文撚糸文、Lの縄をR巻きする。→胴部中半部に楕円形突起、突起下に逆U字状に3本隆帯が垂下する。隆帯上刻み、特にまん中の1本は交互の刻み。隆帯に沿って半截竹管による沈線。→突起をつなぐ様に、同じく沈線3本による弧線文。文様は4単位。 時期が異なると思われる要素が共存し時期決定が難しい。			
		22	X－19		壺形土器。無文口縁が外反し、胴部下半がふくらむ。地文撚糸文、Lの縄をR巻き。→頸部に1本の波状粘土紐を貼付。胴部は2本1組の沈線を連弧状に、その下に横走させて、施文している。	21.2	3.1	
		23	P－18 P－19	8－4	地文撚糸文、Lの縄をL巻き。→胴部中央に2本の横走沈線、口縁部・胴下半部に2本1組沈線による弧線文。口縁部弧線の連結部に渦巻文とその下に三叉文が入る。→口縁部弧線文内、棒状工具先端による刺突文。	27.3	7.6	

第6節　石器一覧表

N—Ⅲ区　住居址

住居No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SB—01	1				1			1				1		17	
SB—02	1				2	1								40	8
SB—03								3			1		砥石1	1.2	3.3

N—Ⅲ区　土壙

土壙No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SK—03								2						7.4	

石器種別一覧表　釈N—Ⅲ区　グリット

石器種別	個数	石器種別	個数	石器種別	個数
チャート（フレイク）	3	石皿	15	ハンマー	6
石英	1	磨石凹石	107	石棒	2
コア	1	玉石	33	玉	1
ピエスエスキーユ	21	溶岩	21	黒曜石石鏃	76
スクレイパー	9	磨斧	27	水晶石鏃	1
ノッチドスクレイパー	2	打斧	352	チャート石鏃	1
ドリル	57	石匙	9		
ユーティライズドフレイク	268	フレイクスクレイパー	10		
水晶ユーティライズド	4	礫器	3		
水晶ドリル	1	稜磨石	6	計	1,037

第７節　土偶一覧表

Ｎ－Ⅲ区

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第553図 1	K－19	顔	4.4×3.8×3.0	曽利末	粘土塊面	耳の表現あり	耳は中期末から独立する。	
第553図 2	M－19	顔	4.7×4.7×3.5	狢沢～井戸尻	頸部に分割塊面	後頭部に変形玉抱き三叉文をなすと思われる。	隆帯文、貫通孔３個	
第553図 3	N－19	顔	5.1×5.8×5.5	狢沢～井戸尻	頸部に木芯痕	後頭部に玉抱き三叉文	隆帯文、貫通孔４個	
第553図 4	U－19	顔	4.1×4.8×2.1	曽利		頭部に渦巻文	渦巻隆帯上に刻目を施す。	
第553図 5	U－19	顔(台)	2.7×1.8×2.0	藤内～井戸尻	木芯痕	後頭部は玉抱き三叉文と思われる。	三角隆帯上に刻目を施す。	
第553図 6	X－19	顔	4.8×5.6×4.7	五領ケ台～新道	頸部に分割塊面と木芯痕	頬にダブルハの字文ではなくシングルハの字文		
第554図 7	X－19 No.8	顔	5.1×4.9×3.5	曽利		目にまつ毛、後頭部単環、口の下にハの字文	貫通孔３個	（S－Ⅳ区20と双子の土偶だが胎土がまったく別）
第554図 8	X－20	顔	4.8×3.7×3.1	曽利	木芯痕	頭頂部に刻目隆帯		
第554図 9	Y－19	顔	4.9×4.7×2.9	藤内～井戸尻		後頭部に渦巻文、目にまつ毛	渦巻文は隆帯	
第554図10	Y－19	顔	4.5×5.3×3.8	新道～井戸尻	頸部に分割塊面と木芯痕	後頭部に変形玉抱き三叉文、ダブルハの字文	変形玉抱き三叉文は隆帯、貫通孔３個	
第555図11	N－Ⅲ	顔	8.0×8.9×6.9	新道～井戸尻	頸部に分割塊面	額に玉抱き三叉文、後頭部に双環	隆帯上刻目	
第555図12	R－20	腕・胸	6.0×8.2×3.0	新道～藤内	腹部との接合部に分割塊面	腕のまわりにキャタピラ文と波状沈線	キャタピラ文と波状沈線	
第555図13	W－19	腕	2.9×4.5×2.0					
第555図14	X－18	腕	2.4×3.5×2.7					
第555図15	X－19	腕	3.2×4.8×3.5					
第555図16	X－19	腕	1.9×4.3×1.7		付根部に分割塊面と木芯痕			
第555図17	X－20	腕	2.2×3.6×1.7					
第556図18	Y－19	腕	1.6×2.7×1.5					
第556図19	N－18	胸	4.8×4.0×2.3	新道～藤内	腕部との接合部に分割塊面			
第556図20	N－18	胸	3.9×4.9×1.6					中期では珍らしく手が下がる。
第556図21	O－20	胸～臀	8.7×4.2×3.1	曽利	頸部と左右半身、脚部に分割塊面	胸部にブラ文と側臀部に渦巻文		曽利式肥口辺土器と施文手法が同じである。
第556図22	P－19	胸・腕	3.0×5.7×3.3		頸部と胸部の接合部に分割塊面			
第556図23	T－20	胸	2.4×2.4×1.5			正中線		
第556図24	V－19	胸	4.3×7.1×3.1					
第557図25	W－18	胸・胴	7.3×6.7×3.1	曽利		正中線、ブラ文が渦巻文化	沈線	
第557図26	W－19	胸	4.3×3.5×2.5		木芯痕			
第557図27	Y－18	胸・腕	2.3×3.7×3.2		頸部に分割塊面、胸部に木芯痕			
第557図28	Y－19	胸～臀	6.8×2.4×3.0	曽利	左半身との接合部に分割塊面、頸部に木芯痕	ブラ文、臀部に擦痕	沈線	バンザイ土偶の典型的な製作法
第557図29	Y－19	胸	4.1×4.1×1.9	曽利				
第557図30	M－18	腹	4.5×4.6×3.1			沈線文		
第557図31	N－19	胴	3.1×3.0×4.3	新道～藤内		側臀部に三角押文		
第558図32	N－19	胴	3.6×4.0×5.5	曽利		下腹部沈線に刻目		腹部と臀部中空
第558図33	O－19	臀	5.3×4.2×4.3		粘土塊面			
第558図34	P－20	腹	3.0×3.7×2.4	曽利	腕部に分割塊面	肥大した腹部に沈線文		（S－Ⅳ区178に類似）

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第558図35	R－20	胴	4.2×4.4×3.0	新道～藤内	腕部に分割塊面と木芯痕	側腹部に三角押文		
第558図36	U－19	臀	7.9×6.3×3.3	藤内～井戸尻	臀部に分割塊面			
第554図37	V－19	臀	3.8×2.4×1.7	狢沢～新道		側臀部に角押文		
第559図38	V－19	臀	6.4×6.4×4.5	藤内～井戸尻		正中線、対称弧刻文側腹部に渦巻文や三叉状文	沈線文	腹部中空
第559図39	W－18	臀	2.7×4.4×2.4					
第559図40	W－19	臀	4.6×3.1×4.5		腹部に分割塊面		沈線文	
第559図41	X－18	臀	4.6×4.0×4.7			側臀部に渦巻文	沈線	
第559図42	X－18	臀	2.5×2.5×2.0				沈線文	
第559図43	X－20	臀	3.7×1.8×4.2				沈線文	
第560図44	Y－17	臀	6.3×5.3×3.4	曽利	片側臀部に分割塊面			
第560図45	Y－18	臀	5.8×3.0×5.4			臀部に円文と変形三叉文	沈線	中空円錐形土偶、樽原形態の土偶
第560図46	Y－18　No.12	臀	5.6×3.9×4.5		片側臀部に分割塊面			
第560図47	Y－19	臀	4.3×3.2×2.1			側臀部に渦巻三叉文		
第561図48	Y－19	臀	6.7×2.8×4.2	曽利		側臀部に渦巻文と刻目沈線		
第561図49	Y－20	臀	5.2×4.0×5.6		片側臀部に分割塊面			
第561図50	K－19　No.4	脚	5.6×4.9×3.5		木芯痕			
第561図51	Q－20	脚	2.5×3.6×4.8			足の甲に沈線文		
第561図52	Q－20	脚	2.0×4.4×4.3		脚付根部に分割塊面			
第561図53	R－18	脚	2.6×2.9×4.4		木芯痕			
第561図54	R－19	脚	3.2×2.3×2.6		木芯痕			
第561図55	R－20	脚	2.6×2.3×4.1					底にえぐり
第562図56	S－19	脚	2.4×3.8×3.5		胴部に分割塊面	正中線、逆三角文、平行沈線間角押文	沈線、角押文	
第562図57	S－20	脚	5.8×3.9×5.9	新道～藤内	付根部に分割塊面（ソケット接合法）他は粘土塊面			
第562図58	T－20	脚	2.3×2.2×2.7		粘土塊面			
第562図59	T－20	脚	4.3×4.0×5.9	井戸尻	付根部、左足との接合部に分割塊面			
第562図60	U－19	脚	3.9×2.5×3.0					
第562図61	U－20	脚	1.8×3.6×3.9			爪先に沈線文		
第562図62	U－20	脚	4.1×3.3×4.3					
第563図63	V－19　No.16	脚	6.0×5.5×5.6		付根部に分割塊面			足に貫通孔あり
第563図64	V－20	脚	3.1×3.7×3.5			足首に平行線間刻目文		
第563図65	X－18	脚	1.8×4.2×4.8		木芯痕			
第563図66	X－19	脚	2.9×2.8×4.6					
第563図67	X－19	脚	3.0×1.9×2.9		付根部に分割塊面			
第563図68	X－20	脚	2.2×3.9×4.3					
第563図69	Y－17	脚	3.0×3.9×5.8			爪先に刻目４本	５本指	
第564図70	Y－17	脚	4.6×3.4×4.3					
第564図71	Y－17	脚	3.8×5.1×5.7		付根部に粘土塊面			
第564図72	Y－19	脚	2.5×2.3×2.1			足に刻目沈線		
第564図73	Y－19	脚	3.6×4.5×7.3	井戸尻	付根部に分割塊面	足首に刻目隆帯、足の甲に沈線文	沈線は指を表出か	
第564図74	Y－19	脚	3.0×2.7×4.2					
第564図75	Y－19	脚	3.1×2.8×3.3					

第8節　土製円盤一覧表

N—Ⅲ区土製円盤一覧表

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	E—19	3.0	0.8	5			47	R—20　2層	4.5	1.0	27		
2	E—19	3.9	1.3	20			48	R—20　3層	3.9	1.3	25		
3	E—20	4.1	1.2	22			49	R—20　2層	4.2	1.2	25		
4	E—20	3.9	1.3	19			50	S—18　2層	3.0	1.6	17		
5	F—19	3.5	1.3	15			51	S—19　3層サブトレ	3.3	0.8	13		
6	F—19	3.0	0.9	11			52	S—19　2層	2.7	1.0	10		
7	F—19	3.9	0.9	17			53	S—19	4.8	1.2～1.4	35		
8	K—19	3.5	1.3	15			54	S—20　2層	3.7	1.0	18		
9	K—19	3.5	1.4	22			55	S—20　2層	3.8	0.8～1.0	17		
10	K—19	2.7	1.5	12			56	T—18	3.8	1.5	22		
11	L—19　1層	3.5	0.9	10			57	T—18	3.0	1.4	13		
12	L—19　1層	3.9	1.1	16			58	T—18	2.7	1.0	8		
13	N—18	3.1	1.0	12			59	T—19　3層	3.1	0.8～1.0	8		
14	N—18　2層	3.8	0.9	14			60	T—19	5.9	1.3	39		
15	N—18	3.0	0.9	10			61	T—20　3層	3.0	1.2	12		
16	N—19　2層	4.3	1.1	23			62	U—18	4.8	1.2～1.5	32		
17	N—19　2層	4.5	1.1	26			63	U—18	4.8	1.5	36		
18	N—19　2層	3.4	1.2	15			64	U—18	4.3	1.6	29		
19	N—19　2層	2.9	1.2	13			65	U—19	3.6	1.1	18		
20	N—19　2層	4.5	0.7～1.3	20			66	U—19	3.7	1.1	16		
21	N—19　3層	3.5	1.2	19			67	U—19	2.3	1.1	9		
22	N—19　2層	5.2	1.0	35			68	U—19	3.7	1.1	18		
23	O—19　3層	4.8	1.2	22			69	U—19　No.15	5.7	1.6～1.8	60		
24	O—19	4.7	0.8～1.0	23			70	U—19　2層	3.1	0.8	12		
25	O—19	4.6	1.2	24			71	V—17	3.5	1.3	16		
26	O—19	2.9	1.3	12			72	V—17	3.7	1.2	21		
27	O—19　サブトレ	5.0	1.3	30			73	V—18	4.0	1.4	25		
28	O—20	4.2	1.0～1.3	28			74	V—18	4.3	1.0	22		
29	O—20	3.5	1.1～1.5	17			75	V—19	3.6	1.0～1.2	18		
30	O—20	3.7	1.1	16			76	V—19　1層	3.3	1.2～1.5	18		
31	P—16　1層	4.7	1.4	32			77	V—20	4.3	1.2	27		
32	P—18　3層	3.6	0.9	13			78	V—20	5.0	1.4	35		
33	P—19	3.4	1.0	12			79	V—20	4.6	1.5	35		
34	P—19	3.1	0.9	11			80	W—17　3層	3.6	1.1	14		
35	P—19	2.2	1.0	5			81	W—18　3層	5.0	1.1	31		
36	P—19　2層 No.2	3.4	1.5	18			82	W—19	4.0	0.9～1.2	23		
37	Q—19	3.1	1.0～1.2	14			83	W—19	4.8	1.4	40		
38	Q—19　3層	3.0	1.0	13			84	W—20	3.6	1.1	20		
39	Q—20　2層	4.4	1.0	24			85	W—20	2.7	1.5	15		
40	Q—20　2層	3.4	1.2	17			86	W—20　一括	3.5	1.0	16		
41	Q—20　3層	3.5	1.2	17			87	X—17	4.7	1.7	22		
42	Q—20　2層	3.3	1.3	16			88	X—17　2層	4.2	1.2	25		
43	Q—20　3層	3.7	1.1	18			89	X—18	4.3	1.2～1.5	26		
44	R—19　3層	3.2	0.8	9			90	X—18	2.8	1.0	10		
45	R—19　2層	3.9	1.1	20			91	X—18	3.4	1.3	21		
46	R—20　2層	3.4	1.0	11			92	X—18	4.3	1.2	29		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
93	X—19	4.6	0.8	18			120	Y—18	2.7	1.0	9		
94	X—19	4.3	1.0	24			121	Y—18	2.9	1.3	12		
95	X—19　3層	4.2	1.4	30			122	Y—18	2.7	0.9	9		
96	X—19　No.4	4.2	1.4	28			123	Y—18	4.4	1.2	24		
97	X—19	3.3	1.2	15			124	Y—18	3.5	1.4	20		
98	X—19	3.4	1.3	20			125	Y—18	3.7	1.0	10		
99	X—19	4.4	1.1～1.5	28			126	Y—18	5.6	1.2～1.4	48		
100	X—19	3.4	1.3	18			127	Y—18	3.2	1.3	15		
101	X—19	3.3	1.8	17			128	Y—18	2.9	1.2	11		
102	X—19	3.0	1.0	12			129	Y—19	5.9	1.2	53		
103	X—19	2.9	1.5	15			130	Y—19　3層	3.7	1.0	14		
104	X—19	3.6	1.1	18			131	Y—19	3.7	1.2	20		
105	X—19	2.8	1.2～1.4	15			132	Y—19	3.5	1.1	16		
106	X—19　3層	3.0	1.0	10			133	Y—19　3層	2.7	0.8	8		
107	X—19	3.8	1.0～1.2	17			134	Y—19	2.2	1.0	6		
108	X—19	4.2	1.1～1.4	24			135	Y—19	5.8	1.2	34		
109	X—19	3.5	1.0	17			136	Y—19	3.8	1.1	15		
110	X—20	6.6	1.5	73			137	Y—19	4.5	1.3	22		
111	X—20　3層	4.5	1.7	42			138	Y—20	3.6	0.9	16		
112	X—20	4.6	1.3	32			139	Y—20	3.5	0.8	17		
113	X—20　2層	2.7	1.2	13			140	Y—20　3層	3.1	1.1	13		
114	X—20　3層	4.3	0.9～1.1	22			141	表採	3.6	1.2～1.5	22		
115	X—20　一括	3.0	1.3	15			142	釈？　N—9	2.5	1.2	10		
116	X—20	3.2	1.0～1.4	15			143	不明	4.7	1.2	31		
117	X—20　3層	3.4	1.0	15			144	不明	4.4	1.1	21		
118	X—20	3.3	1.2	16			145	SB—01	3.1	1.3	18		
119	Y—17　一括	3.7	1.5	23			146	SB—01	3.9	1.5	26		

第9節　土製品一覧表

N—Ⅲ区　把手

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		1	N—19	人面把手		10.0		
		2	T—19	人面把手	目の下の部分から残っている。			
		3	Y—20	人面把手		4.5		
	552	4	X—20	把手	口の部分が強調されている。			
		5	X—20	イノシシ把手	おそらく五領ケ台式か？			
		6	Y—18	ヘビ把手				

第10節　粘土塊一覧表

N—Ⅲ区　有孔鍔付土器

No.	出土地点	重さ(g)	備考	No.	出土地点	重さ(g)	備考
1	N－18　2層	30		4	U－18	75	指痕
2	N－19　2層	70	指痕	5	Y－19	120	指痕
3	R－20　2層	25	指痕、丸形				

第11節　有孔鍔付土器一覧表

N—Ⅲ区　粘土塊

No.	出土地点	部位	内孔・外孔	赤彩の有無	文様	備考
1	N－18　2層	頸部			曽利の文様	
2	P－20	頸部	内孔		鍔の下に縄文あり	
3	Q－19　2層	頸部	内孔			
4	R－19　No.3	足付底				
5	R－20　2層	頸部	内孔			
6	R－20　3層	頸部	内孔			
7	W－18	口辺部	内孔		鍔の下に藤内式区画の文様	
8	W－18	口辺部				
9	X－18　No.2	頸部から胴部	外孔		沈線の文様あり	
10	X－18	口辺部	内孔			
11	X－19　3層	頸部	外孔		鍔の下に縄文あり	
12	Y－19　No.8	頸部	外孔			

第12節　台形土器一覧表

N—Ⅲ区　台形土器

No.	出土地点	名称	部　位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大　き　さ	備　　考
	P—19　2層	鍔　付	受面＋鍔＋脚		凹			242×(103)×(47)	S—Ⅳ　G—8 (811003) 接合 N—Ⅲ　P—19 同一接地面磨耗
2	P—20　3層	鍔　付	鍔						
3	Q—19	鍔　付	受面＋鍔		平				
4	R—7	鍔　付	脚	脚中心に孔4コ					N—Ⅲ　R—20 接合
5	R—19　3層	鍔　付	鍔						
6	S—19　2層	?	盤						
7	S—19	?	盤						
8	S—20　3層	鍔　付	受面＋鍔＋脚						脚完全磨耗
9	U—18	鍔　付	鍔						
10	W—19　No.2	鍔なし	受面＋脚	脚中心に孔有	平		孔の囲りに隆帯		S—Ⅲ　T—2 (810205) 同一？
11	X—18	?	盤		平				足跡？
12	Y—19　No.1	鍔　付	受面＋鍔＋脚						脚完全磨耗
13	不　明	鍔　付	鍔				鍔に縦きざみ有		接地面磨耗、鍔全体がとれている
14	R—20	鍔　付	受面＋脚						
15	SB—01	鍔　付	受面＋鍔		凹				N—Ⅲ　018接合
16	不　明	鍔　付	受面＋鍔＋脚		凹		裏面に沈線		(223)×(146) (55)

第 5 章　N—Ⅳ区

第 1 節　縄文時代中期の住居と出土遺物

N—Ⅳ区

SB—01

H—18に位置する。半壊した石囲炉を検出している。炉付近から台形土器が出土している。

SB—02

H—19に位置する。これも半壊した石囲炉のみを検出している。時期不詳である。

SB—03

J—19に位置する。おそらく柄鏡形住居址の柄の部分の敷石部と思われる。時期的には中期終末に位置するものであろう。

第 2 節　土器すてばB

N—Ⅳ区　土器すてばB

N—Ⅲ区から続く土器すてばBのは全体図を作成してみれば、2つの大きなブロックから構成されている。このうち、N—Ⅳ区に最も大きなブロックとなっている。大きく見れば、直径約20mのブロックである。残念ながら、このブロックの中央を農道が走っていた。N—Ⅳ区の土器すてばの出土量は異常であり、図化したものでも99個を数えている。挿図41から挿図47に大まかな型式別に数値を示したように4㎡にグリッドから、相当量の土器が出土している。

また土器の外、土偶、土製円板の出土量も他の地区をはるかに越えている。

F—17では、一つの集石があり、ほとんど遺構らしきものを持たない土器すてばにあって、特殊例といえる。この集石は土器すてば形成以前に構築されており、土器すてば形成時をとおして、ケルン状になっていたと思われる。

第3節　住居址一覧表

SB№	グリッド	長軸×短軸	住居形態	炉形態	炉石の残存	埋甕	特殊遺物	備考
SB—01	H—18		柄鏡形	石囲炉	半壊		台形土器	
02	H—19			石囲炉	半壊			
03	J—19			不明				

第4節　土壙一覧表

整理番号	土壙番号	グリッド	直径×短径×深さ(cm)	出土遺物	図化した遺物	備考
	SK—01		156×99×	石鏃、ユーフレ	新道式	
	SK—02		×　×63	石ヒ、打斧	新道式	
	SK—03		×　×35			
	SK—04			磨石、ハンマー		
	SK—05				藤内式	?
	SK—06		97×85×		曽利古式	
	SK—07		107×95×			
	SK—08		109×96×			
	SK—09		132×90×			
	SK—10					

第5節　土器一覧表

N－Ⅳ区　土壙出土土器

写　真	図	図No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
184	572	1.	SK－01	5	胴部中央に三角区画横帯あり、区画内キャタピラ文と三叉文。その上下に縄文RLを地文とする素文帯があり、中央に波状沈線がめぐる。最下段は楕円区画横帯で、区画内はキャタピラ文、一部は粘土で押しつぶされた様に無文となっている。			
		2.	SK－05 一部分 SK－02	5	口唇に爪形刻みをもつ隆帯がめぐる。口縁部文様帯の波状隆帯は特異な流れ方をする。貼付で盛上げた上で隆帯がS字状にねじれる。やはり爪形刻み。地文は半截竹管による縦の沈線。胴部は半截竹管半隆起線による方形区画が並ぶ。方形区画したあと縄文地文、見えにくいがRLらしい。			
		3.	SK－04	5	口縁部に7単位の耳状突起がつく。体部の横帯は上から口縁部重三角区画帯（半円形＋三角区画）、頸部素文帯、胴部幅広い文様帯、幅狭い無文帯をはさんで最下部に扁平な重三角区画帯と重なる。隆帯に沿ってキャタピラ文・三角押引文、または先端が丸味を帯びた三角押引文が1～2本めぐる。口縁区画内は玉抱三叉文または縦列角押引文。胴部幅広い文様帯の隆帯先端にU字状突起がつく。	28.0	4.3	
		4.	SK－06	8－1	無文の頸部が内弯し、欠損するが口縁の形状は図の様になるはず。胴部は隆帯にはさまれた波状隆帯が垂下して器面を4分割し、3本1組隆帯による対弧文を配す。隆帯上刻み。波状隆帯の頂部と中央部に円形貼付。胴部地文条線は1本引き沈線による。単独の逆位（おそらく底部穿孔）理甕。			
		5.	SB－03 B－19 F－17		台形土器。鍔部はやや突出するのみである。接地面は擦り減る。2孔一対、おそらく5単位の孔はすべて下部が欠損している。			

N－Ⅳ区　土器すてばB出土土器

写　真	図	図No.	出土地点	分　類	文　様	高　さ	容量ℓ	備　考
184	573	1.	B－19 B－20 C－20	3	円筒形の胴部と大きく開く内弯口縁をもつ。胴部無文。口縁部は太いねじり状隆帯が垂下。口唇直下の2本の横走沈線間を竹管先端で交互刺突。その下に三叉状陰刻と細い沈線によるY字文。			
		2.	B－18 A－17	4	口縁部は幅広く外に張り出し横帯をなし、4単位の貼付文をもつ。うち2単位は、ハート形の粘土板を貼付し、盛り上がる鼻、沈線による目・口を表現した顔面装飾。他に残存する1単位は三角形に粘土を貼付し中を三叉文状に陰刻している。			
		3.	B－20 B－19 B－18	4	外に開く口縁部に低い隆帯で横長の楕円区画を作る。隆帯に沿って1条の角押文、また口唇上にも1条の角押文がめぐる。胴上半は図の正面で欠けるがY字状文貼付。胴部中央に2本の隆帯にはさまれた楕円区画が並ぶが、その端は折れ曲って垂下する。やはり角押文が沿う。器面には輪積痕と指頭圧痕を残すがあまり明瞭ではない。	22.8		
		4.	C－17 C－18 F－17	5	4単位波状口縁下に眼鏡状把手がつく。口縁部文様帯は刻み目をもつ隆帯により、ひし形状区画と台形状区画各4単位ずつに区画され、隆帯に沿うキャタピラ文と、三角押引文。胴部の幅広い文様帯は、1本隆帯による抽象文とその左上に楕円文、各2単位から成る。キャタピラ文と波状沈線が沿う。抽象文左端は三角形区画とする。			
		5.	B－19 C－17	5	口縁部重三角区画横帯。隆帯に沿ってキャタピラ文、三角押引文、半円区画内部に三角押引文による波状文。半円区画を作る隆帯上には刻み。胴部の幅広い文様帯では、隆帯の先が突出し、中央にくぼむ円形文となり、その先に扁平な三角形貼付文がつく。素文帯には三角押引文による波状文がめぐっている。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		6.	C－19 C－18 F－17 D－18	5	口縁はおそらく4単位の突起をもち、2単位は直下に眼鏡状把手がつく。胴部の幅広い文様帯はキャタピラ文で無文口縁部と画される。主モチーフは2本の隆帯を用いた抽象文2単位で、一端は三つ指状を呈し、そのつなぎ目の山形の隆帯が図の正面となる。隆帯に沿ってキャタピラ文と波状沈線。			
185	573	7.	C－18 C－19 D－19	5	円筒形の胴部が、現存部分だけで6段の横帯に分けられる。最上段は隆帯で何らかのモチーフを表現する。中段のひし形区画はX字状の隆帯で作られるが器面を4単位に分けて2単位は横長のXひとつから成る。その下の素文帯のみ、キャタピラ文に沿う波状沈線が同一工具を押引いた三角押文による波状文となる。以下長方形区画横帯と三角形区画横帯。内面胴下半部に明瞭にスス付着。			
		8.	E－18	5	土器の上半分を切って、切り口を擦って再利用に供したと思われる。下2段が横長楕円区画横帯、その上が三角区画横帯、その上は素文帯であったろう。隆帯に沿ってキャタピラ文または三角押文。最下段に三角押文による波状文。			
		9.	D－18 B－17 B－19 A－19	5	小型深鉢。口縁肥厚。4単位の短隆帯が垂下し隆帯上に横に粘土をかぶせる。胴部は輪積痕と指頭よりも細い工具を用いた密接した圧痕を残している。			
	574	10.	J－18 C－18 C－19	6	小型深鉢。器面に3段にわたって短隆帯を貼付する（ゲジゲジ文）。隆帯上に刻み。	16.5		
		11.	E－18		浅鉢。口縁内面が肥厚。	15.8	5.7	
		12.	E－18		小型のわん形土器。半截竹管による文様がつく。	4.3	0.13	
		13.	B－17 B－18		全面縄文。RLの縄を縦にころがす。木の葉底らしい。	18.6	1.6	
		14.	不明	6	胴部に2単位の抽象文がつくがモチーフは異なる。1本の隆帯で抽象文の枠を作っている。胴部上方に楕円区画が少し残っている。隆帯に沿ってキャタピラ文・波状沈線。地文はRL縄文。また一方の抽象文の隆帯上にも同じ縄をころがす。			
		15.	C－19 D－19 E－18		無文深鉢。	32.5	8.9	
		16.	C－17		底部に網代圧痕。			
		17.	E－19 E－20 E－16 B－19		大型浅鉢。口縁が肥厚・直立。内外面とも口縁部に赤彩残り、器壁の荒れが著しい。	20.4	28.1	
		18.	E－20	7	半円形突起、小突起2単位ずつ、いずれも突起下に隆帯垂下。口縁部肥厚帯上に沈線文。胴部の2段の横帯のうち上段は2単位に円形隆帯を抱く斜行隆帯が入り、下段は楕円区画が崩れて三角形隆帯が目立つ。隆帯間の余白部分に沈線渦巻文・三叉文。隆帯上に交互・綾杉状の刻み。			
186		19.	F－18 F－19 E－18	7	口縁部に無文帯。胴部上半に幅広い文様帯があり、太く高い垂下隆帯、円形・渦巻・斜行隆帯が入る。隆帯上刻み、図の正面の垂下隆帯の背は指先？で押圧する。隆帯間の余白部分は粗雑な施文の沈線文で埋める。			
		20.	E－17 E－18	7	胴部残存部分は2段の横帯から成る。垂下隆帯が胴部下半まで延びて器面を分割する。文様はほとんど隆帯から成り、大渦巻文に大ぶりな波状隆帯が沿う。隆帯余白部の沈線文は少なく、縦列沈線を施している所がある。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	575	21.	E－18 F－19 E－19 F－18	7	口縁の4単位小突起から隆帯が垂下し、2単位は隆帯が三叉に聞いて一端にU字状貼付がつき、手指状モチーフになる。2単位は円形隆帯につながり、円形内部に円すい状突起がつく。隆帯間を沈線渦巻文・三叉文等で埋める。胴部文様下段は5単位の楕円区画。区画内縦列沈線。			
186	575	22.	E－19 F－19	7	口縁部に2単位、やや盛上る矩形の突起の両端から隆帯が垂下して胴部上半で渦巻く。また2単位の小突起から垂下する隆帯は胴部下半に達して渦巻く。胴部文様は上下2段から成り下段は楕円区画横帯。沈線文は渦巻文・三叉文・縦列沈線など。なお内面底部～胴下半部は著しく黒変し、外面胴下半部は褐色化し器壁が荒れている。	66.5	41.8	
		23.	F－18 D－19	7	曽利式と同じ器形をもつ大型深鉢。頸部に一本の横走隆帯、胴部は2本1組の垂下隆帯4単位が器面を分割。胴部文様は低平な隆帯による大渦巻文とそれを連結する斜行隆帯、さらに隆帯間の余白器面に渦巻文・三叉文・縦列沈線などをびっしり充填する。隆帯上刻み。また渦巻隆帯の背には沈線が入る。胴部文様帯下端は横走隆帯を渡していちおう区切っている。	80.0	69.3	
		24.	B－19 A－19	7	貫通孔を有する4単位の把手、うち2単位の背に蛇頭状装飾がつく。内折口縁上方の口縁部文様は沈線渦巻文、三叉文。内折部は連鎖状隆帯と、4単位把手の間に位置する、上下に貫通する環状装飾。内折部直下とくびれ部に横走隆帯、胴部上半に4単位の垂下隆帯、いずれも隆帯上刻み。胴部下半は珍しく上下逆の楕形文とU字文。	32.8	6.1	
		25.	B－18 B－19 B－20	7	井戸尻式の器形だが文様の構成は曽利式になっている。2単位、2本1組の垂下隆帯は、口縁部で片方がS字状に大きく屈曲する。頸部に1本の隆帯がめぐり上下に沈線が沿う。胴部地文1本引き沈線による条線。			
	576	26.	E－19 E－20 E－18 D－20	7	口縁装飾に富む。2単位大把手のうち1単位は蛇頭状装飾を頂部に冠する。1単位はミミズク把手の頭部が扁平・扇状に広がる。大把手間は中央に環状把手をおき両脇に円形突起と波状突起がつく。把手下内弯口縁部の4単位の円形隆帯は、胴上半部の連鎖状隆帯と結びついて人形を連想させる。口縁部文様は太い斜行・垂下隆帯を貼付し隆帯上を刻みや数条の細い沈線で加飾する。胴部くびれ部に横走隆帯1本、隆帯上にキャタピラ状刻み。胴下半部は無文となる。	51.4 (55.5)	18.0	
		27.	F－18	7	4単位の大把手のうち図の正面と裏面の2単位は外側に突き出し、獣面を思わせる。口縁部文様は内折部をはさみ上方の沈線文と、下方の縦列短隆帯（隆帯間を沈線でなでつける）からなる。内折部端は連鎖状隆帯・深い切れ込みで加飾される。			
		28.	D－20	7	口縁部4単位大把手が欠損する。口縁部文様は、連鎖状隆帯のつく内折部分をはさんで上下にめぐる。低平な隆帯と沈線による三叉文・円形文・渦巻文・交互沈線など。なお直立する口唇部内面に沈線がめぐり把手部で三叉文となる。胴部はくびれ部の横走隆帯をはさんで上半は垂下隆帯と1本引きの条線、下半は沈線文が少し残存する。			
	577	29.	D－20	7	所謂楕形文土器の胴下半～底部。胴部くびれ部で切って再利用に供したと思われる。			
		30.	D－17 C－17	7	胴部上端にひさし状突帯をめぐらす特徴をもち八ヶ岳西南麓～諏訪湖地方の類型である。胎土・色調に特に差異は認められない。胴部2単位の懸垂文のモチーフもこの類型独特のもの。懸垂文内に縦の沈線、地文は撚糸文、Lの縄を用いる。			
		31.	E－19 E－20	7	口縁部文様は器形の内折部分より上方で、4単位の垂下隆帯（2単位は連鎖状隆帯で、頂部に小さな耳状突起をもつ）で分けられる。円形隆帯を抱く斜行隆帯4単位、うち1単位に隆帯上刻み。隆帯に沿う三角形状刺突文と内折部に沿うキャタピラ文は同一施文具による。胴部隆帯はねじり状となり、刻みを持つ隆帯が沿う。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	577	32.	F－18	7	口縁部は強く内折するが胴部のくびれ・ふくらみはゆるやかである。口縁部・胴部上半は2本1組垂下隆帯により4単位に分かれる。胴部くびれ部のやや下に横走隆帯がつく。口縁部文様は「ノ」の字状隆帯、沈線による渦巻文、そして特徴的なのが隆帯に沿ったり単独でつけられたりする刺突文である。31・32の様な刺突文は長野県域によく見られる結節沈線を模している可能性がある。	24.8	4.3	
		33.	D－20 D－19 C－20	7	八ヶ岳西南麓～諏訪湖盆の井戸尻式の特徴をよく備える。口縁は波状となる部分わずかに残存。口縁部文様の細い粘土紐を用いた人形文（対弧文）は長野県域に通有なモチーフ。また口縁部・胴部（2単位）の三つ編み状垂下隆帯も長野県域の手法である。胴部地文1本引きの条線。			
		34.	C－17 B－18	7	口縁部文様は規則性に乏しく、文様帯下端を画す2本の沈線がある所とない所がある。波頂部中央から隆帯が垂下し2単位は円形文、2単位は渦巻文となるらしい。波頂部両側から垂下する隆帯は弯曲して楕円形を呈し、円形文・渦巻文を囲い込む。楕円形の内部は縦の沈線。胴上半部は2本1組垂下隆帯4単位。胴部くびれ部やや下の横走隆帯は扁平な楕円形を呈する。波頂部中央から垂下する隆帯に横に数本の粘土紐をかぶせる。胴部くびれ部の小眼鏡状把手など、長野県域の特徴を持っている。	32.0 (38.4)	6.3	
188		35.	B－19 B－18 A－18 A－19 B－17 D－19		井戸尻式終末から曽利式初頭に位置づけたが、特異な土器である。口唇に粘土紐をはりつけ二重口縁とする。キャリパー型を呈する口縁部には、2本1組隆帯による横に展開する文様があり、文様先端は渦巻文・棘状となる。口縁部文様帯下端を区切る2本の横走隆帯の他、その下にも同様の隆帯がめぐる。胴部下半は張り出すであろう。全面に縦の条線、1本引きである。			広域接合土器すてば内
		36.	E－19 E－20	7	口縁が肥厚。口縁から断面三角形隆帯が2単位垂下する。薄手で明るい色。			
	578	37.	B－19	7	図の裏側の口縁部に、環状把手に両側をはさまれた大把手が存在したであろうが欠失している。図の正面には内折部直下に眼鏡状把手があり三叉文に囲まれている。2単位の把手下に垂下隆帯。胴部縄文は0段3条RL。			
		38.	D－18 D－19 D－20 C－17 C－19 E－19	7	頸部の横帯は楕円区画と三角区画が不規則に並び、耳状突起で3または4単位に分かれている。三角区画内に三角押文、楕円区画内に縦列沈線が入る。耳状突起下の胴部に隆帯が垂下し、脇に半隆起線が沿う。隆帯上爪形刻み。縄文は0段3条RL。			
		39.	E－4	6	円筒形深鉢。器全面地文撚糸文、Lの縄文を使う。非常にくっきりした撚糸文→口縁部におそらく2単位の特徴的な貼付文、ヘビを模したものか。→胴上半部に磨消による横帯、横帯の上下に波状沈線が沿う。口縁直下に円形磨消文も一つ残存。	25.6	3.4	
		40.	F－17 G－17	7	小型円筒形深鉢。胴部上半に3本1組沈線により上下を画される横帯を作る。横帯内地文無節縄文Lを縦方向にころがした後、縦方向の交互沈線・渦巻文など沈線文を施文する。胴部下半は全周の½弱に横帯内と同じ垂下する短沈線が入る。			
		41.	B－18 D－18	7	無文浅鉢。口縁部から内面にかけてスス付着による黒色部分がめだつ。	17.0	10.2	
		42.	B－18 B－19 B－17	7	無文浅鉢。口縁部やや外反しながら立ち、頸部が「く」の字形に張出す。	20.6	14.2	
		43.	E－17		皿形を呈する特異な土器。図の様に推定復元した。	4.2		
		44.	D－19		脚部のつかない台形土器。			
		45.	F－19		鍔の側面に刻み。脚部の孔は4単位らしい。脚部接地面は擦れていない。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	578	46.	J－20		脚部接地面は擦り減っている。受け面は中央が赤く、周囲が黒くススがついている。			
189	579	47.	D－18 C－18 C－17 C－19 D－19	8－1	無文口縁が外反し頸部がふくらむ大型深鉢。頸部に隆帯と沈線による大渦巻文4単位が配され、大渦巻文は刻みをもつ高い隆帯に囲まれる。胴部は2本隆帯にはさまれた蛇行隆帯で4単位に分かれ、その間に3～4本1組隆帯による対弧状文が入る。対弧状の隆帯上には、不明瞭な所もあるが全て刻みが施される。地文は棒状工具による1本引きの条線。			広域接合土器すてば内
		48.	D－19 D－18	8－1	無文口縁が外反し頸部がふくらむ大型深鉢。口縁部と頸部の境2本の隆帯は断面三角。頸部に2本1組隆帯による4単位渦巻文と、それをつなぐ波状文。胴部は、上端に3本の横走隆帯、以下4単位の垂下隆帯と大きな弧状隆帯、いずれも2本1組。おそらく胴下半部にも弧状隆帯がつき対弧状のモチーフとなったであろう。隆帯上刻み。胴部地文は半截竹管による条線。なお垂下隆帯途中に円形貼付がつく。			
		49.	F－17 F－18 E－17 E－18	8－1	頸部は3本の横走隆帯間を、弧状隆帯で縦に区切る手法をもつ。弧の向きは上・下段で逆である。隆帯は高く断面三角形状である。胴部は3本1組隆帯が垂下して器面を分け、4本1組隆帯による対弧状文が施される。弧の頂部に円形貼付、蛇行短隆帯が各2単位つく。隆帯上刻み。隆帯はつながる傾向にある。胴部地文細い工具にて1本引きの条線。非常に数多くの小破片から成る大型土器。			
	580	50.	E－20 E－16 E－19 G－20	8－1	口縁部に向って直線的に開く器形。口縁部は幅広い無文帯となる。口唇より3本1組隆帯が垂下し逆J字状懸垂文となる。3本の隆帯間を弧状隆帯で区切る手法をもつ。隆帯上刻み、ところどころ抜ける所あり。地文は1本引きの条線を粗雑に施文。			広域接合土器すてば内
		51.	F－17 F－18 E－17	8－1	口唇端部より4本の隆帯が4単位垂下し頸部横走隆帯とつながる。頸部は上下2本ずつの隆帯にはさまれた波状隆帯。胴部は5本1組隆帯とその間に入る2本の波状隆帯によるU字文、7本隆帯と2本波状隆帯による垂下文、各2単位。U字文右端と垂下文途中に、渦巻状粘土紐が密集する。なおU字文の中央に2本隆帯が立ち上がるがモチーフは不明。胴部地文は1本引き沈線による条線。			
		52.	E－18 E－17 F－17 F－18	8－1	内弯する無文口縁と円筒形の胴部をもつが胴部はややふくらむ。頸部横帯は2本の隆帯にはさまれた波状隆帯。胴部懸垂文は4本隆帯によるU字文で2単位で先端渦巻文となる。隆帯間を弧状隆帯で区切る手法をもつ。またU字文内外に、2本1組隆帯が4単位垂下し、途中2ヶ所で十字状に広がる。隆帯上刻み。胴部地文は細い工具にて1本引きの条線。53の土器と酷似。			
		53.	F－18 F－17 F－20	8－1	52と全く同じ構成・モチーフだが53のU字文の中に入る2本1組垂下隆帯は1ヶ所で十字状となる。また52と比べて全体に隆帯が太く、器形もやや差がある。胴部条線は同一施文具を用いているであろう。52と53は出土範囲が一部重なるが、脈絡のある出土状態は示さない。			
	581	54.	C－18	8－1	頸部に3本の横走隆帯、そのうち下の1本が屈曲する形で胴部懸垂文とつながる。懸垂文は3単位のJ字文で、2単位は先端ワラビテ状（渦巻状）となる→隆帯上刻み。懸垂文の2本隆帯と頸部の下2本は同時に刻みをつけているらしく、刻みがつながっている所がある。→胴部地文6本1組櫛歯状工具による条線。			
		55.	D－20	8－1	直立口縁から隆帯が垂下し4単位懸垂文となる。2単位はまっすぐ垂下し、2単位は逆J字状。いずれも2本隆帯だが逆J字状文は口縁部では3本となっている。隆帯上刻み。口縁部と胴部の境は2本の横走沈線で、上1本は屈曲して隆帯に沿い口唇に至る。胴部1本引きの条線。			
		56.	B－18 E－17	8－1	頸部に3本の横走隆帯。下2本の切れ目から垂下する胴部懸垂文は2本1組隆帯による逆J字文、おそらく2単位。懸垂文先端は円形貼付を取囲む三つ葉状となる。→胴部半截竹管による条線→隆帯上刻み。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	581	57.	F－18	8－1	無文口縁部の幅が狭い。胴部は3本1組垂下隆帯により4分割し、それぞれに2本1組隆帯による渦巻懸垂文が入る。垂下隆帯間を、弧状隆帯で区切る手法をもつ。また垂下隆帯上端は並列U字状・半円形を呈する。→櫛歯状工具による条線→刻み。			
190		58.	E－19 E－18 E－17 F－17	8－1	胴部2本1組垂下隆帯貼付→頸部に2本の横走沈線と、列点文→胴部地文4本1組の櫛歯状工具による条線。隆帯上刻み。頸部に隆帯を貼付しないのは非常に稀である。			
		59.	D－18 D－17	8－1	4単位波状口縁をもつ小型深鉢。口唇やや外側に突出。波頂下に1本ずつ垂下隆帯。→4本1組櫛歯状工具による不明瞭な条線。→隆帯上刻み。			
		60.	F－18	8－1	胴部のみ残存。2本1組・4単位の垂下隆帯は下端がU字状に閉じる。また2単位は途中隆帯間を弧状に区切り連環状とする。→1本引き沈線による条線→刻み。			
	582	61.	B－18 B－17 C－17	8－1	大把手4単位のうち1個残存。把手全体が隆帯と隆帯間沈線により同心円状・渦巻状に加飾される。把手間の頸部にX把手がつき、やはり隆帯で加飾され裾部が渦巻く。胴部懸垂文は大把手下とX把手下を結ぶJ字文4単位。4本並列の太い隆帯によるが内側2本は連環状となる。隆帯間を棒状工具でしっかりとなぞる。外側隆帯は、W字状・U字状に屈曲する部分をもつ。→半截竹管条線。	68.5 把手頂まで 86.6	54.6	
		62.	E－17 F－18	8－1	3個の貫通孔を有する把手おそらく2単位のうち1単位が残存する。口縁把手と頸部X把手は橋状把手（ジョッキ型）でつながれる。把手上はいずれも半截竹管を用いて加飾される。頸部斜格子状文→X把手おそらく10単位・頸部上端の横走隆帯を貼付→胴部2本1組隆帯による懸垂文貼付、モチーフ不明→胴部半截竹管による条線。諏訪市荒神山遺跡に類例あり。			
		63.	E－19 D－18 C－17 D－19 E－17 E－18	8－1	胴部は上端の円形貼付から垂下する4本1組の隆帯、4単位。隆帯は太く隆帯間は太い沈線で調整する。胴部中半に4本1組の横走隆帯が残るが、胴部懸垂文のモチーフは不明。地文は半截竹管によるしっかりした条線。			
	583	64.	E－18 E－19	8－1	口唇部が直立する。口縁部文様帯として半隆起線による重弧文をもつが、重弧文が左右につながって展開せず、U字状に閉じているのが特徴。→波状粘土紐貼付。			
		65.	C－17 C－18 D－17	8－1	口縁部半截竹管による斜行線文→胴部2本1組隆帯貼付による懸垂文、上端に粘土粒→胴部縦の条線、半截竹管を用いて浅く施文。1本引き沈線による部分もある。→頸部横方向、胴部縦方向の波状粘土紐を貼付。			
		66.	E－18 E－20	8－1	口縁部半截竹管による斜行線文（→この先後関係は不明瞭）胴部の全ての懸垂文を貼付。主モチーフは2本1組隆帯が右上方で渦巻き、その直下で右に長く伸びて先端が剣先状となる。4単位。→胴部地文縦方向条線、半截竹管で浅く施文。	44.0	29	
		67.	D－17 D－16 E－17	8－1	胴部のふくらむ部分接合面にて打欠き、擦って再利用したと思われる。2本1組隆帯貼付による、渦巻文・W字状屈曲をもつ懸垂文、5単位→半截竹管による条線→2本ずつ、計10本の波状粘土紐を貼付。			
		68.	E－17 F－17 E－16	8－1	X把手（7または8単位）付大型深鉢。胴部文様はX把手裾から垂下する3本1組並走（棒状工具調整）隆帯による懸垂文、モチーフはおそらく逆J字状。懸垂文先端に剣先状の貼付あり、これは土器すてばA出土の40番の土器と似る。胴部地文半截竹管による条線。			
		69.	D－17	8－2	横走隆帯を境として胴上半部は無文らしい。胴下半部は1本の隆帯で渦巻文5単位、うち4つは2つずつ横S字に連なる。渦巻文外は1本引きの条線、内部は列点文。			

写真	図	図№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	583	70.	A－18 B－18	8－1	胴部ややくびれる部分に、横走隆帯にはさまれた鋸歯状沈線があり、間隙に刺突文が入る。土器すてばAの32番・S－Ⅲ区グリッドの43番に同じ文様がある。胴下半部は櫛歯状工具による条線。			
		71.	D－17	8－1	小型深鉢。頸部に1本の波状粘土紐のみ。			
191	584	72.	D－16 E－17 D－18 D－16 C－19	8－1	X把手付大甕であるが小破片から成り立っている。3本1組の竹管整形隆帯により渦巻状・クランク状懸垂文を作る。懸垂文は各所で屈曲し、また付随貼付文が沿う。胴部地文は半截竹管による細くしっかりした条線。			
		73.	D－18	8－1	器形・文様ともX把手付大甕に似るが把手がつかない。頸部は波状粘土紐1本だけ。胴部は太くしっかりした竹管整形隆帯で逆「の」の字状、また図側面は横S字状のモチーフを作る。隆帯間は棒状工具で再調整したらしい。→胴部地文半截竹管による条線→胴部波状粘土紐垂下。	56.0	52.0	
		74.	E－16 E－17	8－2	加曽利E式と同様の口縁を持つ。即ち隆帯貼付のあと沈線で弧線文・渦巻文・マド区画を作る。胴部は口縁部とつながった低平な隆帯と、隆帯上・脇の沈線による小渦巻文を主体とする文様。隆帯間と、口縁部マド区画内は、半截竹管を用いた条線。			
	585	75.	E－19 D－19 F－19	8—1	口唇は平坦で内面に突出する。器全面縦・斜方向条線。条線は粗雑な施文で重複著しく間隔もバラバラ。			
		76.	D－19 C－17 D－17 D－18	8－1	浅鉢とした。口唇上端が平らで内面に突出する。胴部は半截竹管による条線のみ。			
		77.	B－19 B－18	8－1	浅鉢。内弯口縁部に太く高い2本の隆帯がめぐる。内面全体に非常によく赤彩が残る。外面は口縁部には残るが胴部には認められない。	11.3		
		78.	B－18 B－19		無文。	20.0		
		79.	F－18		無文。	20.3	2.0	
		80.	E－18		無文。図の口縁部に見られるのは整形痕。	20.5	1.9	
		81.	E－18 F－18 E－17 E－19		無文。口唇上面はたいら。	15.5	1.4	
192		82.	E－16		無文浅鉢。内外面とも丁寧にみがいている。内面にうっすらとスス付着。	20.0		
		83.	D－20 E－18 F－18 G－18 B－19	7	頸部に太い横走隆帯、胴部に2本1組垂下隆帯は途中弧状の隆帯に区切られる。隆帯上刻み。胴部地文縄文RL。	27.4		
		84.	D－19 D－20 D－18 C－17 E－17	8－1	頸部に4本の横走隆帯がめぐり、隆帯間を弧状隆帯で区切る手法を持つことことから曽利式初頭におく。最下段の隆帯はW字状に屈曲する。なお図の裏側の一部分に縄文を施文する（拓本）。不明瞭であるがLRらしい。			
		85.	E－19 D－18 E－18	7	頸部に高い横走隆帯が1本めぐる。隆帯上の刻みはまばらである。胴部全面地文縄文RL。隆帯と刻みの様子から井戸尻式終末～曽利式初頭の時期とした。			

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	585	86.	E－19 E－18	7	頸部・胴部隆帯貼付。胴部は2本隆帯が2単位垂下し、おそらくそれが屈曲して、図の正面のU字状貼付につながるのだろう。→縄文RL。器形と文様帯構成は曽利式と同じだが、縄文・貼付文の作り方などから井戸尻式と考えておく。			
		87.	B－19 B－18 C－17 C－18	8－1	口縁部に横走隆帯にはさまれた波状隆帯。胴部全面縄文RL。時期決定に迷ったが、波状隆帯の感じが曽利式初頭に似る。	20.9	2.5	
	586	88.	D－18	8－4	口縁部に2本隆帯による渦巻つなぎ弧文。口唇にも隆帯をまわし二重口縁としている。→口縁部・胴部縄文RL。口縁部は縦方向にころがし、胴部は方向をかえて羽状とする部分がある。→胴部3本沈線による格子状文。交差部分に小さい渦巻文が入る。沈線は稚拙な感じがする。			
		89.	B－17 B－18 D－19	8－4	胴部地文縄文RL→2本1組隆帯を8単位垂下させる→隆帯間に半截竹管で渦巻文を描く。隆帯間に渦巻文を2個配す場合、渦巻文間に2条1組の半隆起線を垂下させる。図の5単位の垂下のうち正面と両側の3単位が半隆起線、それにはさまれた2単位が隆帯である。			
		90.	D－17		91と類似した形態の有孔鍔付土器と思われるが孔は残存していない。胴部は縄文RL施文→2～3条1組の半截竹管半隆起線により横S字文を描く。横S字文と言っても独立せず横に連結されている。小渦巻文が付随する。時期は半截竹管の使用・縄文地文などから曽利古式段階と考える。			
		91.	C－17 D－17		有孔鍔付土器。鍔を上下に貫通する孔が2つずつ、対向する位置に2単位存在する。胴部にRの縄を用いる撚糸文施文→2本1組隆帯で横S字文4単位を作る。隆帯間・脇に沈線。器内外面に赤彩がうっすらと残る。この土器は全体に黒っぽく、撚糸文や隆帯の作り方などを含めて、S－Ⅳ区SB－11の2番の土器と酷似する。その把手は大木式の把手と考えられるが、全体の構成は大木式とは言い切れない。いずれにせよ両者とも搬入されたものであろう。			
		92.	B－17 B－18 A－18 A－19	8－4	地文全面撚糸文、Lの縄を左巻きにしている→口縁部に2本沈線による弧線文、弧線文間に渦巻文と、それを囲む縦長三叉文。弧線の内部に円形の刺突文。また胴部はくびれ部に2本の横走沈線と、その直下に弧線文。	25.5	8.8	
		93.	D－17 E－16 E－17 F－19 C－17 I－18 H－20	8－4	全面に地文撚糸文、Lの縄を用いる→口縁部にC字状貼付。貼付下に細い施文具による蛇行沈線。角ばっている。蛇行沈線上端は貼付を巻き込んで弯曲する。また貼付の中間にあたる位置の口縁部に、沈線による剣先状文がある。			広域接合土器すてば内
		94.	E－17	8－4	全面につぶの大きい縄文RLを施文。	32.5	10.8	
193		95.	E－17 D－17 D－19	8－4	4単位の波状口縁をもつ小型深鉢。全面撚糸文、Lの縄を左巻き。縦方向に施文するが、口縁に沿って一部横方向に施文している。底部に木の葉圧痕。	15.7	0.8	
		96.	B－18		小型の両耳壺。2単位の細い橋状把手がつく。胴部縄文RL。底部木の葉圧痕は一度動いている。			
		97.	S－Ⅲ X－9		胴部は器面の乾燥が進んでからLの縄を用いた撚糸文を施文するが、磨滅して見えにくい。(なおこの土器はS—Ⅲ区出土で、図の配置ミスである。)			
		98.	D－18		縄文RLを口縁部、胴上半部に比較的まばらに施文。内面全体に赤彩が残り、おそらく文様を描いたのであろう。			
		99.	E－16		胴部全面縄文RL、縦方向ころがし。	25.7	17.8	

第6節　石器一覧表

N－Ⅳ区　住居址

住居址No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SB—03					2	4	1	1	1				ユーフレ1 石棒1	7	

N—Ⅳ区　土壙

土壙No.	石鏃	石匙	ドリル	ピエス	打斧	磨斧	稜磨石	磨石	石皿	礫器	ハンマー	玉石	その他	黒曜石g	水晶g
SK—01	1												ユーフレ1	12.8	
SK—02		1			3										
SK—04								1			1				

石器種別一覧表　N—Ⅲ区　グリット

石器種別	個数	石器種別	個数	石器種別	個数
チャート（フレイク）	3	礫器	11	ビエスエスキーユ	29
石英	1	石匙	15	スクレイパー	11
長石	1	ハンマー	17	ノッチドスクレイパー	1
磨石凹石	235	フレイクスクレイパー	20	ユーティライズドフレイク	163
鉄滓	3	磨斧	56	水晶ビエスエスキーユ	2
ドリル	54	溶岩	58	大型フレイク	3
その他	1	玉石	67	水晶原石	1
角柱	5	打斧	784	軽石	1
石棒	2	黒曜石石鏃	109		
石皿	31	チャート石鏃	1		
稜磨石	14	コア	5	計	1,704

第7節　土偶一覧表

N—Ⅳ区　土偶一覧表

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第589図 1	SB－65	頭	3.2×3.2×3.2	五領ヶ台～猪沢	頸部に粘土塊面	頭部に貫通孔3個のうち2個確認		カッパ型土偶（S－Ⅳ区SB－65である）
第589図 2	B－18	顔	6.0×5.7×4.1	新道～井戸尻	頸部に分割塊面	後頭部に玉抱き三叉文	隆帯、一部に隆帯上刻目	
第589図 3	B－18	顔	4.2×2.5×3.0		頸部に分割塊面、頭部に粘土塊面			
第589図 4	B－19	顔	5.3×7.6×3.8			ダブルハの字文		
第589図 5	B－20	顔	2.5×2.1×1.8		頸部に分割塊面			
第590図 6	C－17	顔	4.0×3.3×3.6	猪沢	頸部に分割塊面と木芯痕	目に角押文	頭部に貫通孔3個のうち2個確認	カッパ型土偶
第590図 7	C－17	顔	4.7×3.6×3.3	五領ヶ台～新道	頸部に分割塊面			カッパ型土偶
第590図 8	C－19	顔	4.0×4.2×3.2	猪沢～井戸尻	頸部に分割塊面			
第590図 9	D－18	顔	5.1×4.0×4.1		頸部に分割塊面と木芯痕	後頭部に沈線文		
第590図 10	D－18	顔	4.0×4.1×3.0	曽利	頸部に分割塊面のポジとネガと木芯痕	ダブルハの字文、頭頂部隆帯刻目	沈線	
第591図 11	D－18	顔	5.5×6.1×5.4	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面と木芯痕	後頭部に玉抱き三叉文を隆帯で表出	貫通孔3個のうち2個確認	
第591図 12	D－18	顔	5.9×6.0×5.2	藤内～井戸尻	頸部に木芯痕	頬と頭に沈線文、後頸部にV字状隆帯	V字状隆帯は刻目を施す。	頭部中空
第591図 13	D－18	顔	3.1×3.8×3.1	五領ヶ台～猪沢	頸部に分割塊面	顔は指でつまんで表現している。		
第591図 14	D－18	顔	2.7×2.5×2.7	新道～井戸尻	頭部に粘土塊面	後頭部は玉抱き三叉文であるらしい。	貫通孔1個	
第592図 15	D－18	顔	7.6×7.4×4.5	新道～藤内	頸部に分割塊面と木芯痕	後頭部に玉抱き三叉文、目に三角押文、後頸部に半円竹管文	三角押文、半円竹管文、後頸部は黒駒土偶に類似	
第592図 16	D－19	顔・腕・胸	5.7×6.9×3.0	藤内	胸部に分割塊面と木芯痕	後頭部に玉抱き三叉文、ダブルハの字文		
第592図 17	D－19	全身	5.7×4.2×3.0	猪沢～井戸尻	分割されない土偶	後頭部変形玉抱き三叉文、胴部に三角陰刻文と沈線文		S－Ⅲ区19 S－Ⅳ区8と同類
第592図 18	D－19	顔	3.5×3.6×3.1	新道～藤内	頸部に分割塊面と木芯痕、頭部に粘土塊面			
第592図 19	D－20	顔	5.3×4.9×3.9	猪沢	頭部に粘土塊面	後頭部に玉抱き三叉文	貫通孔3個のうち2個現存	
第593図 20	E－17	顔	4.0×3.9×3.5	猪沢～井戸尻	頸部に分割塊面、頭部に粘土塊面	後頭部に玉抱き三叉文	貫通孔1個確認	
第593図 21	E－18	顔	3.8×3.3×2.8	猪沢～井戸尻	頭部に粘土塊面	後頭部に玉抱き三叉文を施すと思われる。	隆帯	
第593図 22	E－18	顔	4.6×5.1×3.7	猪沢～井戸尻	頸部に分割塊面	後頭部に渦巻隆帯文		
第593図 23	F－17	顔	2.3×3.4×4.0	五領ヶ台～猪沢	頸部に分割塊面と木芯痕			カッパ型土偶
第593図 24	F－18	頭	5.0×6.0×4.6	新道～井戸尻	頭部に粘土塊面			該期の把手の可能性もある。
第594図 25	F－20	顔	4.6×4.7×4.8	猪沢～新道		目と口に角押文、後頭部に玉抱き三叉文	角押文と隆帯文と三叉状陰刻文	
第594図 26	G－18	顔	4.5×5.4×4.2	藤内～井戸尻	頸部はソケット接合法か？	ダブルハの字文		
第594図 27	G－20	顔	2.8×3.9×3.0	五領ヶ台～猪沢	頸部に木芯痕			カッパ型土偶
第594図 28	H－18	顔	5.0×4.0×3.9		頸部に分割塊面	後頸部に沈線文		あるいはカッパ型土偶の一種か
第594図 29	H－20	顔	3.9×3.5×3.6	五領ヶ台～猪沢	頸部に分割塊面			カッパ型土偶
第595図 30	I－18	顔	8.0×7.2×5.6	藤内～井戸尻	頸部に分割塊面	額に三叉文と半月文、後頭頂部に双環、円文と渦巻三叉文	陰刻文、隆帯文、貫通孔2個	
第595図 31	I－18	顔	3.4×5.5×4.1	五領ヶ台～新道		後頭部、側頭部に円文が3個、目に角押文	円文は隆帯、角押文、貫通孔3個のうち2個	カッパ型土偶

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第595図 32	Ｉ－18	顔	5.8×6.3×4.8	藤内～井戸尻		額に円文、後頭部は玉抱き三叉文、珍らしく三ツ口	円文や玉抱き三叉文は隆帯に刻目や円形刺突文を加飾	
第595図 33	Ｊ－18	顔	4 1×5.2×3.7	新道	頸部に木芯痕	渦巻隆帯にキャタピラ文、円形竹管文	隆帯に刻目を施している。	顔の表現なし
第596図 34	Ａ－18	腕	2.5×4.3×2.2					
第596図 35	Ａ－20	腕	3.6×4.0×2.3					
第596図 36	Ｂ－17	腕・胸	3.2×3.9×2.2	曽利		脇下に沈線文		バンザイ土偶の手
第596図 37	Ｂ－20	腕	1.0×2.5×1.2					
第596図 38	Ｃ－17	腕	2.6×3.2×2.1		付根部に分割塊面			
第596図 39	Ｄ－19	腕	7.4×6.0×3.0	新道	頸部に分割塊面と木芯痕	腕に半円竹管文		黒駒の土偶のようなポーズ
第596図 40	Ｄ－19	腕	1.8×3.8×2.6					
第596図 41	Ｅ－17	腕	2.3×3.3×1.4					
第596図 42	Ｅ－18	腕	1.6×3.1×1.5			腕に円形竹管文		
第596図 43	Ｅ－18	腕	2.0×3.7×1.9					
第596図 44	Ｆ－18	腕	2.1×2.9×1.6					
第596図 45	Ｆ－18	腕	1.9×4.0×2.0					
第596図 46	Ｉ－18	腕	3.5×4.0×2.4	狢沢～藤内		手先に刻目文		
第597図 47	ＳＢ－01	胸・腕	5.1×6.4×3.6	曽利				バンザイ土偶
第597図 48	ＳＢ－03	胸	5.2×5.0×3.0		頸部と腕部に分割塊面			
第597図 49	ＳＫ－02 No.7	胸・腕	4.1×5.0×2.4		付根部に木芯痕	手先に刻目		
第597図 50	Ｂ－18	胸	4.5×5.0×2.7	曽利	木芯痕	正中線		バンザイ土偶
第597図 51	Ｂ－18	胸・腕	7.7×8.4×2.9	新道～藤内	木芯痕			
第598図 52	Ｂ－18	胸・両腕	6.7×10.2×2.5	新道～藤内	頸部に分割塊面と木芯痕	正中線	沈線	
第598図 53	Ｂ－19	胸・両腕	2.6×3.9×1.8		頸部に木芯痕			
第598図 54	Ｃ－17	胸・両腕	4.8×4.9×3.0		頸部に分割塊面と木芯痕	正中線		
第598図 55	Ｃ－17	胸・腕(左)	5.3×10.0×3.2	新道～藤内	頸部に分割塊面と木芯痕（ソケット接合法）			
第598図 56	Ｃ－17	胸(肩)	3.0×3.5×2.9			肩部にＲＬの縄文		
第599図 57	Ｃ－18	胸	6.0×7.5×3.0	曽利		側腹部に沈線文、背中は爪形文か		
第599図 58	Ｄ－17	胸(左)	3.5×3.3×2.1	狢沢～新道		乳房のまわりに角押文		
第599図 59	Ｄ－17	胸	5.2×5.7×2.9	新道～藤内		胸から腕に三角押文、正中線は沈線	三角文も前後にめぐる	
第599図 60	Ｄ－18	胸・胴	5.7×6.4×2.9	曽利		側腹部に沈線文、紋付文		バンザイ土偶
第599図 61	Ｄ－18	胸	4.0×3.1×1.5					
第599図 62	Ｄ－19	胸	4.4×5.1×2.9	狢沢～新道	腕部との接合部に分割塊面			
第599図 63	Ｄ－19	胸	4.4×5.0×2.1		臀部との接合部に分割塊面			
第600図 64	Ｄ－20	胸	3.9×4.0×2.2	曽利		側腹部に沈線文、紋付文、正中線		
第600図 65	Ｄ－20	胸・腕	4.4×5.0×2.4	狢沢～井戸尻	頸部に分割塊面（ソケット接合法）			
第600図 66	Ｅ－18	胸	3.0×5.9×1.5	狢沢～井戸尻	腹部との接合部に分割塊面			
第600図 67	Ｅ－18	胸	5.5×7.2×2.7					
第600図 68	Ｅ－18	胸	4.4×6.3×1.8	曽利	頸部に分割塊面と木芯痕	正中線、紋付文		
第600図 69	Ｅ－18	胸・腕	3.2×5.3×2.1		頸部と腹部に分割塊面			

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第600図 70	E－18	胸・胴	6.3×5.2×3.3	曽利	腹部に粘土接合面			中空土偶 N－Ⅳ区 136と同一個体
第600図 71	E－19	胸	3.0×3.4×2.5		木芯痕			
第600図 72	F－18	胸	4.5×6.2×1.7	狢沢～新道	頸部に分割塊面と木芯痕	乳房のまわりに三角押文	三角押文	
第601図 73	F－18	胸・胴	5.0×4.8×2.9		頸部に分割塊面	正中線	沈線	
第601図 74	G－17	胸・腕	3.6×6.5×2.5	狢沢～新道	頸部と腹部に分割塊面	正中線を角押文、手先を刻目を指を表出		
第601図 75	G－18	胸・胴	5.7×5.4×3.3	新道～藤内	頸部に木芯痕	側腹部に三角押文		
第601図 76	G－18	胸・腕	4.5×4.7×1.8	狢沢～新道	頸部と腹部に分割塊面、頸部に木芯痕			
第601図 77	G－19	胸・腕	3.2×4.1×2.1	狢沢～新道	頸部と腹部に分割塊面、頸部に木芯痕	手先の前は角押文、後は沈線	角押文と沈線で指を表出	
第602図 78	G－20	胸・腕	5.0×9.2×3.1	狢沢～藤内	頸部に分割塊面、腹部に木芯痕			
第602図 79	G－20	胸・腕	3.0×5.0×2.3					
第602図 80	H－20	脇	2.6×2.6×2.7		木芯痕			
第602図 81	I－19	胸	4.7×6.8×2.9	曽利		正中線、紋付文、側腹部、沈線		
第602図 82	SB－65	臀	5.9×4.0×3.6					
第602図 83	A－17	臀	4.0×4.0×2.9		粘土塊面			臀部は中空か
第602図 84	A－18	腹	3.1×4.2×2.2		木芯痕	正中線など	沈線	
第603図 85	A－19	臀	6.1×5.5×4.0	井戸尻	片側臀部に分割塊面	側臀部に沈線文、平行沈線間刻目文、つる状沈線文	沈線と刻目	
第603図 86	B－17	臀	4.0×2.8×3.2	曽利	腹部に分割塊面	渦巻沈線の間を短沈線でうめる	沈線	
第603図 87	B－18	臀	3.3×2.0×3.3	曽利		側臀部につる状、弧状沈線文	沈線	臀部中空
第603図 88	B－18	臀	3.4×3.7×3.0	曽利		側臀部に平行沈線文		
第603図 89	B－18	臀	4.3×2.5×2.9					
第603図 90	B－18	胴	7.1×4.4×3.3	新道～藤内	腕部に分割塊面	正中線、側腹部に三角押文		臀部は中空となると思われる。
第603図 91	B－18	胴	4.7×5.3×3.8	曽利		側臀部に沈線文		
第604図 92	B－18	臀	2.6×3.3×2.5	曽利		側腹部に沈線		
第604図 93	B－18	腹	2.1×2.4×1.0					妊娠土偶
第604図 94	B－20	腹	3.0×3.9×2.8	狢沢～新道	木芯痕	腹部に角押文		妊娠土偶
第604図 95	B－21	腰	4.1×4.2×4.2	新道～藤内	臀部に分割塊面	側腰部に三角押文		
第604図 96	C－17	腰	3.2×3.0×4.0	曽利		側腹部に渦巻沈線文		
第604図 97	C－17	胴	3.6×2.0×1.9	狢沢～新道	木芯痕	側臀部に角押文		
第604図 98	C－17	臀	3.1×5.5×4.1		脚付根部に分割塊面			中空土偶
第604図 99	C－18	胴	3.0×3.6×2.7	曽利		側臀部に沈線文		中空土偶
第604図100	C－18	臀	2.8×1.8×2.5	狢沢～新道		側臀部に角押文		
第604図101	C－18	臀	3.0×2.9×2.5	新道～藤内	木芯痕	側臀部に弧線文	弧線文は三角押文	
第604図102	D－16	腹	4.7×6.2×4.7	曽利	腕部に分割塊面	腹部に三角文、渦巻文、つる状文を加えている。	沈線文	
第604図103	D－17	胴	3.2×4.3×1.7	新道		三角押文で渦巻文を表出		
第605図104	D－17	胴	4.3×5.6×3.1	新道～藤内	木芯痕	正中線、対称弧刻文、側腹部に三角押文	正中線は隆帯	
第605図105	D－17	胴	7.3×3.9×3.2	曽利	右半身に分割塊面	爪先に刻目		赤彩 底にえぐり
第605図106	D－18	腹	4.5×4.0×4.7	井戸尻		腰部に渦巻文		
第605図107	D－18	臀	4.5×3.2×3.4	狢沢～新道		側臀部に角押文と三角陰刻文		
第605図108	D－19	胴	7.5×4.8×4.6	曽利		渦巻状沈線文を施す。		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第605図109	D－19	胴	3.5×2.1×3.2	曽利		弧線文と短沈線		
第606図110	D－19	腎	6.1×3.1×5.6	新道～藤内	腕部に分割塊面	三角押文と三角陰刻文	三角陰刻文のまわりに刻目	中空土偶 楕原形態
第606図111	D－19	胴・腎	5.5×3.3×2.8					妊娠土偶
第606図112	D－19	胴・腎	7.4×4.7×4.2	曽利		正中線		
第606図113	D－20	腎	4.7×4.0×4.5	曽利		側腎部につる状文と短沈線	沈線	中空土偶
第606図114	E－17	胴・腎	8.2×6.0×4.3	曽利		正中線		
第607図115	E－17	胴～脚	2.9×3.8×3.1	新道～藤内		正中線、対称弧刻文 側腎部に三角陰刻文	三角陰刻文をキャタピラ文で加飾している。	広畑形態 座産の土偶
第607図116	E－17	下半身	4.6×5.4×4.5	井戸尻	木芯痕	側腎部に渦巻文、左手で腹をおさえている。	渦巻文は沈線	方錐形中実土偶、楕原と尖石の中間形態か
第607図117	E－17	胴	3.4×2.5×3.7	曽利				
第607図118	E－17	腎	4.8×3.2×3.3	狢沢～新道		側腎部に角押文		
第607図119	E－17	腰	4.5×2.6×3.6	曽利				
第607図120	E－18	腎	3.3×..3×2.4	曽利		パンツ状三角文を短沈線でうめている。	沈線文	
第607図121	E－18	腎	5.8×3.3×5.0	新道～藤内		対称弧刻文、側腎部に三角押文で三角文	三角押文	
第607図122	E－18	胴	3.6×4.3×3.0					
第608図123	E－19	腎	4.2×3.9×2.2	曽利				中空土偶
第608図124	E－19	腎・脚	9.0×4.2×7.1	曽利	左半身との接合部に分割塊面	腎部に沈線文による半隆起線文		
第608図125	E－19	腎	7.8×6.3×4.8	曽利	腕部、左脚部との接合部に分割塊面	側腎部に沈線文		
第608図126	E－19	腎	4.6×3.9×3.6		接合部に分割塊面（ソケット接合法）			
第608図127	E－20	胴	5.2×3.0×3.6	新道～藤内		側腎部に三角押文		
第609図128	E－20	腎	5.1×4.5×4.1	井戸尻		側腎部に渦巻文と縄文ＲＬ		
第609図129	F－16	腎	4.7×3.7×2.6	曽利		ヘソのまわりに三角形文など	沈線	
第609図130	F－17	腎	2.9×3.4×3.4		腕部との接合部に分割塊面	正中線		
第609図131	F－17	腎	6.3×3.3×5.1	狢沢～新道	腎部に分割塊面	角押文による渦巻文		
第609図132	F－17	胴	4.5×4.8×2.5	曽利	腎部との接合部に分割塊面	正中線、側腹部に沈線文		
第609図133	F－17	胴	7.8×2.8×4.8	曽利		側腹部につる状、渦巻状沈線文		
第610図134	F－17	胴	5.5×6.3×2.3	曽利	腕部との接合面			中空土偶
第610図135	F－18	胴	6.5×5.2×2.7	曽利		側腎部に渦巻状沈線文		
第610図136	F－18	胴	4.4×2.8×3.2	曽利		側腹部、背部に沈線文		Ｎ－Ⅳ区70と同一個体 中空土偶
第610図137	G－17	胴	7.6×6.4×5.3	井戸尻		正中線、三叉状陰刻文		鳴る土偶？ 楕原形態の土偶
第611図138	G－17	腎	4.1×1.9×3.3		脚部との接合部に分割塊面			中空土偶
第611図139	G－18	腎	4.9×5.6×4.9	新道～井戸尻		対称弧刻文が三角陰刻文と沈線になっている。	三角押文も側腎部に施す。	中空土偶
第611図140	G－19	胴	5.7×4.8×2.3					
第611図141	G－20	胴	4.4×4.4×4.5	曽利		腎部にパンツ状擦痕と沈線文	平行沈線間単沈線とつる状沈線	
第611図142	G－20	腰	2.8×2.7×2.9	曽利			沈線	
第611図143	H－18	胴	4.8×3.6×4.3	新道～藤内		側腎部に三角押文		

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第611図144	H－19	臀	6.2×3.7×4.0		右半身、腕部、脚部の接合部に分割塊面、左脚部にソケット接合法			
第612図145	H－20	臀	5.3×3.1×3.4		左半身との接合部に分割塊面			
第612図146	H－20	臀・脚	8.5×5.9×7.3	曽利		臀部に渦巻文などの沈線文		臀部中空土偶
第612図147	I－18	臀	9.2×5.2×5.7	猪沢		側臀部に渦巻文と三角文	渦巻文は角押文	
第613図148	I－18	臀	3.9×3.4×5.6	新道～藤内		対称弧刻文、側臀部に渦巻三叉文		橋原形態土偶
第613図149	I－20	腰	6.7×4.5×4.1	新道～藤内		側臀部に三角押文		
第613図140	J－18	胴	3.6×3.7×3.9	猪沢			角押文	
第613図151	J－18	胴	5.0×5.1×3.1	新道～藤内			三角押文	
第613図152	N－19	胴	5.3×4.5×2.3		腕部との接合部に分割塊面と木芯痕			
第613図153	SB－02	脚	4.3×3.2×5.1			足首に沈線文		
第613図154	SB－65	脚	3.0×2.1×4.1					
第613図155	SB－73 H－20	脚	4.3×3.2×4.3					
第614図156	SB－73	脚	2.8×4.0×5.2					
第614図157	A－17	脚	6.4×5.7×7.0					
第614図158	A－18	脚	4.3×2.4×2.1					
第614図159	A－18	脚	3.6×3.7×6.3					
第614図160	A－18	脚 (かかと)	1.3×2.1×1.3					
第614図161	A－19	脚	3.6×3.5×4.1			足首に沈線文		
第615図162	A－19	脚	2.8×3.2×4.3					
第615図163	A－19	脚	1.7×2.9×4.4					
第615図164	A－20	脚	2.7×1.8×2.2			足の甲に沈線文		
第615図165	A(?)－20	脚	1.8×3.8×3.5					
第615図166	B－17	脚 (かかと)	5.3×6.2×5.1					
第615図167	B－17	脚	2.5×4.3×4.2					
第615図168	B－18	脚	2.5×3.5×5.6			足の甲に沈線文		
第615図169	B－18	脚	4.2×2.8×4.5					
第615図170	B－19	脚	4.2×3.8×3.8		粘土塊面			
第615図171	B－20	脚	3.7×2.3×4.3		付根部に分割塊面	脚に縄文RL		底にえぐり
第616図172	C－17	脚	4.1×4.2×5.7		左足との接合部に分割塊面			
第616図173	C－17	脚	2.7×2.3×3.9					
第616図174	C－17	脚	3.5×3.4×3.0					
第616図175	C－17	脚	2.6×2.4×2.6					
第616図176	C－17	脚	2.1×2.4×2.5					
第616図177	C－18	脚	4.4×4.5×4.6					
第616図178	C－18	脚	2.2×2.9×4.5					
第617図179	C－18	脚	8.7×5.3×5.5		付根部に分割塊面、足部に粘土塊面	足首に沈線文		
第617図180	C－19	脚	5.3×3.5×3.9		付根部に分割塊面			
第617図181	C－19	脚	2.3×1.7×2.2		付根部に分割塊面			
第617図182	D－16	脚	2.9×2.9×4.5			足首に沈線文		
第617図183	D－18	脚	2.8×2.2×3.2					
第617図184	D－18	脚	3.3×3.0×5.2					
第618図185	D－18 No.29	脚	5.2×4.8×5.8		左脚との接合部に分割塊面、木芯痕			(N－Ⅳ区211と接合)

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第618図186	D－18	脚	3.8×4.5×5.4					
第618図187	D－18	脚	1.8×3.0×4.3		付根部に分割塊面	足先に刻目	5本指	
第618図188	D－19	脚	1.9×2.3×2.2					
第618図189	D－19	脚	4.3×3.4×3.9					
第618図190	D－19	脚	2.7×3.2×4.7		右足との接合部に分割塊面			
第618図191	D－19	脚	3.4×4.4×3.8		付根部に分割塊面と木芯痕（ソケット接合法）			
第619図192	D－20	脚	2.7×3.1×4.0		左足との接合部に分割塊面			
第619図193	D－20	脚	2.0×2.1×4.2					
第619図194	E－16	脚	2.7×3.2×3.8		木芯痕			
第619図195	E－17	脚	3.7×3.7×5.2					
第619図196	E－17	脚	3.3×1.9×2.4	曽利		足首に平行沈線間、短沈線		
第619図197	E－18	脚	3.6×4.3×4.3					
第619図198	E－18	脚	2.0×1.8×2.0					
第619図199	E－18	脚	3.6×2.3×2.3					
第620図200	E－19	脚	3.5×2.9×3.1		付根部に分割塊面			
第620図201	E－19	脚	7.0×4.0×5.2		木芯痕			
第620図202	E－20A	脚(右)	2.4×3.0×4.6			足の甲に沈線文		接合
第620図203	E－20A	脚(右)	2.4×3.1×4.4			足の甲に沈線文		接合
第620図204	E－20	脚（かかと）	2.6×3.9×3.3					
第620図205	E－20	脚	3.0×3.6×5.5		右足との接合部に分割塊面	足先に刻目	5本指	
第621図206	F－17	脚	1.2×3.4×4.2					
第621図207	F－17	脚	4.2×2.0×4.0		粘土塊面			
第621図208	F－17	脚	3.4×2.9×2.7		粘土塊面			
第621図209	F－17	脚	2.3×2.6×3.3		付根部に分割塊面			
第621図210	F－17	脚	3.8×4.1×4.6					
第621図211	F－17	脚(右)	5.0×4.4×4.3		右足との接合部に分割塊面			N－Ⅳ区185と接合
第621図212	F－17	脚	6.7×3.8×4.4	新道～藤内	付根部に分割塊面（ソケット接合法）足部粘土塊面	足首に三角押文		
第621図213	F－18	脚	4.3×4.0×6.6					
第622図214	F－18	脚	2.7×3.6×4.7					
第622図215	F－18	脚	2.9×2.6×4.0	新道～藤内	付根部に分割塊面と木芯痕	足首に三角押文		
第622図216	F－18 No.11	脚	5.9×3.8×4.9					
第622図217	F－19	脚	3.9×4.1×6.9					
第622図218		脚	2.1×2.6×2.3					
第622図219	F－19	脚	2.0×2.1×2.6		粘土塊面			
第622図220	G－20	脚	4.9×3.8×3.5			足首に三角押文		
第623図221	H－18	脚	6.7×5.6×8.3					
第623図222	H－19	脚	2.1×3.3×2.2		粘土塊面			
第623図223	J－20	脚	4.6×3.2×4.3			脚に角押文と刺突文		
第623図224	表　採	脚	4.5×3.3×4.3		付根部に分割塊面（ソケット接合法）	脚に沈線文		

S—Ⅱ・N—Ⅴ区　土偶一覧表

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第624図 1	S－Ⅱ区 表　採	臀	5.1×5.2×4.1	井戸尻	右脚付根部	対称弧刻文		
第624図 2	N－Ⅲ区 X－20	足	2.0×4.9×3.5 、	井戸尻		足の甲と爪先に沈線文		
第624図 3	S－Ⅴ区 表　採	胸・腕	5.8×14.1×3.9	藤内～ 井戸尻	頸部と腹部の付根部に分割塊面	背中にⅤ字文、腕先に刻目		
第624図 4	S－Ⅴ区 表　採	脚	4.4×3.0×3.3		脚に木芯痕			
第624図 5	S－Ⅴ区 土器すてば76	脚	5.2×3.1×5.1	井戸尻	左足との接合部に分割塊面	足外側に沈線文		S－Ⅲ区 257と接合、赤彩

表採　土偶一覧表

No.	出土地点	部位	たて×よこ×はば	時　期	分割塊の観察	部位と文様	文様と施文具	彩色など
第625図 1	三口神平地区	上半身	4.2×4.0×1.8	曽利		正中線		
第625図 2	三口神平地区	胸	3 5×3.9×2.0	曽利	頸部に分割塊面と木芯痕	側腹部に沈線文		
第625図 3	三口神平地区	胸	2.3×7.1×1.8	新道～藤内	頸部と胸部接合部に分割塊面、木芯痕	手先に刻目		
第625図 4	三口神平地区	腕	2.2×3.0×1.6	曽利				
第625図 5	三口神平地区	腕	2.7×4.2×2.1	曽利		腕に沈線文		
第625図 6	三口神平地区	臀	5.0×3.4×4.6	曽利	臀部に分割塊面	半隆起線で臀部を表出		
第625図 7		臀	4.7×4.3×2.9	曽利	腹部との接合部に分割塊面	変形した対称弧刻文と逆三角文	沈線文で表出	
第625図 8		脚	4.6×3.7×5.6					
第625図 9		脚	4.8×5.2×6.2					
第625図10		脚	4.2×2.5×2.8		付根部に分割塊面と木芯痕			
第625図11	地区外表採	顔	5.7×5.5×3.7	井戸尻	頸部に分割塊面	頭部に玉抱き三叉文の彫刻文、背中にハの字状隆帯		
第625図12	地区外表採	腹	7.3×4.7×3.2	曽利		腰部に平行線間、短沈線によるパンツ様文	沈線文	

第8節　土製円盤一覧表

N—Ⅳ区　土製円盤一覧表

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
1	A—17	3.1	0.9	10			49	B—19	3.9	0.9	14		
2	A—17	3.4	1.0	15			50	B—19	3.9	1.0	14		
3	A—17	3.9	1.0	15			51	B—19	3.3	1.1	12		
4	A—17	3.5	1.0	15			52	B—19	4.1	1.1	26		
5	A—17	3.7	1.5	20			53	B—19	5.4	0.9	21		
6	A—18	3.1	1.0	14			54	B—19	3.8	0.8	15		
7	A—18	4.3	0.7～1.0	20			55	B—19	3.4	1.0	10		
8	A—18	3.8	1.2	20			56	B—19	3.6	1.0	13		
9	A—18	3.4	1.4	20			57	B—19	3.7	0.9	17		
10	A—18	4.3	0.7～1.0	21			58	B—19	3.2	1.0	11		
11	A—18	5.6	1.1	39			59	B—19	4.2	1.1	21		
12	A—18	5.1	1.0	25			60	B—19	3.1	0.8	10		
13	A—18	2.5	0.9	6			61	B—20	4.3	0.9	20		
14	A—18	5.3	1.6	55			62	B—20	2.9	1.2	13		
15	A—18	3.4	1.1	15			63	B—20	4.1	1.1	21		
16	A—18	3.8	1.1	19			64	B—20	4.4	1.0	28		
17	A—18	3.7	1.3	20			65	C—16	5.2	0.8	28		
18	A—19	3.2	1.3	15			66	C—17	4.1	0.8	18		
19	A—19	3.3	1.4	20			67	C—17	3.6	1.3	20		
20	A—19	2.5	1.1	10			68	C—17	3.4	0.9	15		
21	A—19	2.9	1.2	15			69	C—17	3.4	1.4	18		
22	A—19	2.9	0.7	9			70	C—17	4.3	1.0	21		
23	A—19	3.9	1.2	20			71	C—17	4.2	1.0	21		
24	A—19	4.6	1.5	33			72	C—17	2.8	1.2	12		
25	A—20	3.6	0.8	13			73	C—17	3.1	1.1	11		
26	B—17	4.6	1.0	21			74	C—17	4.2	1.3	26		
27	B—17	4.2	1.4	31			75	C—17	2.8	1.3	10		
28	B—17	4.3	1.0	19			76	C—17	3.5	1.5	20		
29	B—17	4.0	1.1	20			77	C—17	4.5	1.6	32		
30	B—17	2.8	1.1	23			78	C—17	3.3	1.2	14		
31	B—17	2.6	1.0	7			79	C—17	4.0	1.6	20		
32	B—17	3.3	0.8	12			80	C—17	5.8	1.1	42		
33	B—17	3.0	1.1	11			81	C—17	3.3	1.0	13		
34	B—17	2.7	1.1	11			82	C—17	3.6	1.0	12		
35	B—17	4.5	1.3	24			83	C—17	2.7	1.0	7		
36	B—18	3.5	1.1	17			84	C—17　ベルト	3.0	0.8	7		
37	B—18	3.9	1.1	25			85	C—17　ベルト	2.8	1.0	10		
38	B—18	3.9	0.9	11			86	C—17　No.13	5.0	1.0	18		
39	B—18	3.0	1.3	11			87	C—17　No.14	2.6	1.0～1.4	10		
40	B—18	3.6	1.2	16			88	C—17　No.16	4.3	1.5	24		
41	B—18	3.0	1.1	13			89	C—17　No.17	3.1	1.6	18		
42	B—18	3.7	1.1	19			90	C—17　No.18	3.7	1.3	20		
43	B—18	2.6	1.0	11			91	C—18	2.7	1.2	10		
44	B—18	3.3	0.9	14			92	C—18	3.0	1.3	11		
45	B—19	4.0	1.2～1.6	22			93	C—18	3.4	1.0	10		
46	B—19	3.2	1.2	15			94	C—18	3.5	1.5	18		
47	B—19	3.1	1.1	12			95	C—18	2.7	1.0	10		
48	B—19	2.9	1.0	9			96	C—18	5.0	0.8	14		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
97	C—18	3.5	1.0	13			146	D—18	2.9	1.0	10		
98	C—18	3.1	1.0	11			147	D—18	3.1	1.1	11		
99	C—18	4.4	1.2	29			148	D—18	3.1	0.5～0.8	5		
100	C—19	4.0	1.5	29			149	D—18	4.4	1.4	34		
101	D—16	4.1	0.5～1.1	21			150	D—18	3.9	1.4	22		
102	D—16	3.5	0.8	6			151	D—18	3.8	0.9	17		
103	D—16	3.3	1.3	15			152	D—18	3.1	1.0	11		
104	D—16	2.5	1.0	10			153	D—18	3.4	1.0	15		
105	D—16	3.7	1.2～1.5	21			154	D—18	4.2	1.6	30		
106	D—17	5.3	1.2	40			155	D—18	4.4	1.3	27		
107	D—17	4.9	0.9	30			156	D—18	5.8	1.2	45		
108	D—17	3.4	1.1	15			157	D—18	4.2	1.2～1.4	30		
109	D—17	3.1	1.3	15			158	D—18	3.0	0.9	10		
110	D—17	4.5	1.6	30			159	D—18	3.0	1.0	11		
111	D—17	3.5	1.1	16			160	D—18	3.3	1.3	15		
112	D—17	3.0	0.9	10			161	D—18	2.8	0.9～1.5	12		
113	D—17	3.2	1.2	15			162	D—18 メンコ2	3.0	1.1	11		
114	D—17	2.8	1.0	10			163	D—18	3.8	0.9	19		
115	D—17	4.0	1.0	18			164	D—18	3.5	1.1	15		
116	D—17	4.2	0.7～1.4	25			165	D—19	3.0	1.2	14		
117	D—17	3.5	1.1	17			166	D—19	2.5	1.0	10		
118	D—17	3.0	1.0	13			167	D—19	3.8	1.6	24		
119	D—17	2.5	0.9～1.1	10			168	D—19	3.7	1.2～1.5	19		
120	D—17 メンコ2	4.2	1.0	22			169	D—19	4.5	0.9～1.4	25		
121	D—17 No.11	7.8	1.4	85			170	D—19	4.3	1.4	25		
122	D—17	3.3	1.2～1.5	19			171	D—19	4.0	1.3	20		
123	D—17	2.9	1.2	14			172	D—19	5.1	0.9～1.1	25		
124	D—17	3.7	1.2	19			173	D—19	4.1	0.9	20		
125	D—17	3.7	1.5	25			174	D—19	2.8	1.1	10		
126	D—17	3.8	1.1	18			175	D—19	3.4	1.1	17		
127	D—17	3.3	1.1	16			176	D—19	3.0	0.7～0.9	10		
128	D—18	3.6	1.1	21			177	D—19	3.0	0.8	10		
129	D—18	4.5	0.8～1.1	2.6			178	D—19	2.9	1.3	13		
130	D—18	3.7	1.6	24			179	D—19 メンコ2	3.5	1.4	20		
131	D—18	3.6	1.3	22			180	D—19 クイ	3.2	1.0	13		
132	D—18	3.4	1.2	14			181	D—19 クイ	3.5	1.4	20		
133	D—18	3.5	0.8～1.2	16			182	D—20	3.6	1.3	19		
134	D—18	3.8	1.5	29			183	D—20	3.2	1.0	10		
135	D—18	4.0	1.1～1.5	21			184	D—20	3.6	1.4	20		
136	D—18	3.0	1.2	11			185	D—20	2.9	0.9	10		
137	D—18	3.1	1.0	11			186	D—20	3.6	1.0	15		
138	D—18	3.5	1.0～1.3	16			187	D—20 2層	4.4	1.3	25		
139	D—18	3.9	1.4	23			188	D—20 メンコ1	4.6	1.0	25		
140	D—18	3.4	1.1	17			189	D—20 メンコ1	2.9	1.2	13		
141	D—18	3.8	1.5	22			190	E—16	3.6	0.9	11		
142	D—18	3.1	0.8～1.0	10			191	E—16	3.3	1.3	18		
143	D—18	4.8	1.1	31			192	E—16	5.8	1.2	37		
144	D—18	4.1	1.2	27			193	E—16	5.7	1.4	45		
145	D—18	3.6	1.2～1.4	21			194	E—16	3.4	1.1	13		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
195	E—16	2.8	0.9	8		
196	E—16	2.9	0.9	10		
197	E—16	3.4	1.0	15		
198	E—17	3.0	1.3	12		
199	E—17	2.8	0.9	9		
200	E—17	3.1	1.0	13		
201	E—17 No.4	4.2	0.9	21		
202	E—17	3.2	1.2	16		
203	E—17	3.4	1.0	15		
204	E—17	3.4	0.7	10		
205	E—17	4.0	1.2	22		
206	E—17	3.9	1.2	17		
207	E—17	3.1	0.9	12		
208	E—17	6.4	1.3～1.7	46		
209	E—17	5.4	1.0～1.3	36		
210	E—17	4.2	1.4	28		
211	E—17	3.7	1.4	13		
212	E—17	3.3	1.1	15		
213	E—17	2.6	1.0	8		
214	E—17	3.0	1.1	12		
215	E—17	3.2	0.9	10		
216	E—17	3.1	1.0	13		
217	E—17	4.0	1.1	16		
218	E—17	3.1	1.3	15		
219	E—17	3.7	1.0～1.3	13		
220	E—17	2.5	1.0	5		
221	E—17	3.6	1.1	18		
222	E—17	3.0	1.0	12		
223	E—17	3.0	1.0	13		
224	E—17	3.1	1.3	16		
225	E—18	2.7	0.7	7		
226	E—18	2.8	1.2	13		
227	E—18	3.6	1.4	18		
228	E—18	2.9	1.1	11		
229	E—18	3.4	1.0	11		
230	E—18	3.5	1.1	17		
231	E—18	3.1	1.0～1.6	15		
232	E—18	4.0	1.1	15		
233	E—18	4.0	1.3～1.6	19		
234	E—18	3.2	1.0	14		
235	E—18	3.6	0.8～1.0	16		
236	E—18	3.6	1.1	13		
237	E—18	4.1	1.1	22		
238	E—18	4.8	1.2	27		
239	E—18	3.7	1.7	25		
240	E—18	8.1	1.1～2.5	126		
241	E—18	2.8	1.0	7		
242	E—18	3.1	1.1	13		
243	E—18	4.1	1.0	19		
244	E—18	4.3	1.2	25		
245	E—18 No.6	3.0	1.3	15		
246	E—19	4.1	1.1	20		
247	E—19	2.9	0.8	8		
248	E—19	5.9	1.0	25		
249	E—19	4.3	1.2	30		
250	E—19	3.9	1.3	25		
251	E—19	3.7	1.2	19		
252	E—19	3.0	1.0	12		
253	E—19	4.2	1.0	20		
254	E—19 3層	5.9	2.0	74		
255	E—19	3.9	1.3	24		
256	E—19	4.7	1.4	35		
257	E—19	4.2	1.0	19		
258	E—19 No.1	3.7	1.2	20		
259	E—19 2層	4.2	1.2	25		
260	E—19 3層	3.4	1.4	18		
261	E—19 3層	3.3	1.0～1.3	13		
262	E—19 3層	3.7	1.3	18		
263	E—19 3層	3.8	1.4	23		
264	E—19 3層	3.3	1.3	16		
265	E—20	5.8	1.9	57		
266	E—20	4.1	1.4	27		
267	E—20	3.7	1.1	18		
268	E—20	4.4	1.2	27		
269	E—20	2.6	1.1	10		
270	E—20	2.8	1.0	10		
271	E—20	3.1	0.9	10		
272	E—20	2.7	1.1	10		
273	E—20	3.2	1.1	13		
274	E—20 2層	4.2	1.2～1.6	28		
275	F—16	4.2	1.1	23		
276	F—16	3.7	1.7	23		
277	F—16	4.4	1.1～1.6	33		
278	F—17	3.9	1.0	20		
279	F—17	3.9	0.8	17		
280	F—17	3.3	1.2	20		
281	F—17	3.3	1.2	15		
282	F—17	3.6	1.2	20		
283	F—17	4.1	1.3	23		
284	F—17	3.6	1.0～1.4	15		
285	F—17	3.3	1.5	17		
286	F—17	4.1	1.0	15		
287	F—17	4.4	1.4	20		
288	F—17	2.7	1.4	13		
289	F—17	4.4	1.3	27		
290	F—17	3.9	1.2	24		
291	F—17	3.6	1.4	20		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
293	F—17	4.0	1.3	25		
294	F—17	4.0	1.4	33		
295	F—17	4.0	1.0	21		
296	F—17	3.3	1.0	15		
297	F—17	3.1	1.0	15		
298	F—17	3.2	1.2	17		
299	F—17	3.1	0.8	10		
300	F—17	3.4	1.0	15		
301	F—17	3.2	0.5～1.3	15		
302	F—18	3.3	1.3	13		
303	F—18	3.3	0.8	10		
304	F—18	3.4	1.3	20		
305	F—18	3.6	1.0	15		
306	F—18	4.2	1.1～1.3	25		
307	F—18	3.7	1.3	20		
308	F—18	3.9	1.0	19		
309	F—18	4.5	1.0	22		
310	F—18	4.5	0.7～1.2	25		
311	F—18	4.7	0.9	27		
312	F—18	2.6	1.1	10		
313	F—18	3.2	1.0～1.2	15		
314	F—18	3.3	0.8	10		
315	F—18	3.8	1.0	17		
316	F—18	3.1	1.2	13		
317	F—18	3.3	0.6	9		
318	F—18	3.0	1.3	16		
319	F—18	4.6	1.2	31		
320	F—18	4.1	1.1	23		
321	F—18	3.7	1.2	20		
322	F—19	2.8	1.0	10		
323	F—19	2.9	0.9	7		
324	F—19	3.5	1.3	18		
325	F—19	2.9	1.0	11		
326	F—19	4.4	1.1	28		
327	F—19	3.0	0.9	10		
328	F—19	3.0	1.0	12		
329	F—19	4.3	0.8	20		
330	F—19	5.5	1.4	45		
331	F—19	3.5	1.0	18		
332	F—19	4.5	1.5	35		
333	F—19	2.9	1.2	15		
334	F—20	3.4	1.3	17		
335	F—20	2.8	1.1	12		
336	F—20	3.0	1.0	15		
337	F—20	3.4	1.0	18		
338	F—20	2.7	1.2	11		
339	F—20	3.5	1.2	17		
340	F—20	4.2	1.2	22		
341	F—20	2.7	1.5	12		
343	G—17	3.9	1.5	39		
344	G—17	3.0	1.5	16		
345	G—17	2.9	1.0	11		
346	G—17	4.5	1.1～1.5	29		
347	G—17	4.5	1.3	30		
348	G—17	4.4	1.3	30		
349	G—17	3.8	1.3	22		
350	G—17	3.7	1.2	20		
351	G—17	3.8	1.3	18		
352	G—17	3.5	1.2～1.5	20		
353	G—18	2.7	0.8	8		
354	G—18	3.6	1.1	20		
355	G—18	4.8	1.0～1.4	31		
356	G—18	3.8	0.8	15		
357	G—18	3.0	1.3	14		
358	G—18	3.3	1.3	14		
359	G—18	4.0	1.2	20		
360	G—18	3.2	1.6	19		
361	G—18	3.7	1.3	20		
362	G—19	3.6	1.6	20		
363	G—19	5.1	1.3	35		
364	G—19	4.8	1.2	32		
365	G—19	5.8	1.5～1.9	63		
366	G—20	3.6	1.2	19		
367	G—20	4.0	1.1	20		
368	G—20	3.8	1.2	20		
369	G—20	3.3	0.8	12		
370	G—20	4.0	0.9	13		
371	G—20	2.4	1.0	8		
372	G—20	2.9	1.1～1.5	15		
373	G—20	1.9	0.4～0.9	4		
374	G—20	3.2	1.0～1.3	14		
375	G—20	3.7	1.3	20		
376	G—20	3.5	1.3	16		
377	H—18	3.3	0.9	11		
378	H—18	3.3	1.3	15		
379	H—18	5.3	1.0～1.3	39		
380	H—18	3.5	1.6	21		
381	H—18	3.6	1.1	16		
382	H—18	3.8	1.1	17		
383	H—18	3.0	1.1	11		
384	H—18	3.9	1.6	26		
385	H—18	4.7	1.1	20		
386	H—18	3.5	1.0	16		
387	H—18	2.7	0.8	7		
388	H—19	4.3	1.2	23		
389	H—19	3.3	1.0	11		
390	H—19	3.7	1.1	1.0		

番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考	番号	出土地	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	土器片の時期	備考
391	H—20	3.8	1.5	25			413	I—18	5.1	1.2	32		
392	H—20	2.9	1.2	14			414	I—18	3.6	1.0	16		
393	H—20	4.9	1.2	29			415	I—19	3.5	1.0	15		
394	H—20	3.4	1.0	15			416	I—19	2.8	1.2	13		
395	H—20	3.3	1.2	17			417	I—19	4.1	1.0	25		
396	H—20	3.8	1.1～1.6	24			418	I—19	4.4	1.2	23		
397	H—20	3.7	1.2	20			419	I—19	3.8	1.1	19		
398	H—20	4.0	1.5	23			420	I—19	3.4	0.8	12		
399	H—20	4.7	0.9	16			421	I—19	2.5	1.2	7		
400	H—20	3.7	1.5	20			422	I—20	2.9	0.8～1.2	10		
401	I—18	3.3	0.8	10			423	I—20	4.1	1.0	19		
402	I—18	3.5	1.2	20			424	J—18	4.1	1.2	21		
403	I—18	3.7	0.9～1.2	19			425	J—18	3.0	0.7～1.2	10		
404	I—18	3.2	1.1	17			426	J—19	3.2	1.1～1.3	17		
405	I—18	5.5	1.0	35			427	J—19	3.7	1.1	20		
406	I—18	2.5	1.2	9			428	O—17	2.5	1.3	10		
407	I—18	2.9	1.3	11			429	V—20	5.4	1.8	80		
408	I—18	4.1	1.7	30			430	W—18	5.2	1.3	47		
409	I—18	5.1	1.1	30			431	W—18	3.3	1.0	12		
410	I—18	4.2	1.4	20			432	W—18	3.9	1.4	22		
411	I—18	4.1	1.4	30			433	不明	4.4	1.0	23		
412	I—18	3.6	1.1	15			434	不明	4.5	1.2	29		

第9節　土製品一覧表

N—Ⅳ区　把手

写真	図	図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
166	587	1	A—18	人面把手		5.4		
		2	C—19	人面把手		7.0		
		3	F—19	人面把手		4.2		
		4	D—19	人面把手		3.4		
		5	F—18	把手	形状不明			
		6	I—19	把手	黒駒の土偶の肩部に似た把手			
		7	D—19	把手	人面か	4.3		
		8	C—19	把手				
		9	F—17	把手	対三角面把手			
	588	10	R—18	把手	中空把手			
		11	B—20	把手	五領ケ台期の把手			
		12	J—18 No.34	把手	ヘビ把手か？			
		13	F—17	把手	シカのようにも見える把手。			

第10節　粘土塊一覧表

N－Ⅳ区　粘土塊

No.	出土地点	重さ(g)	備考	No.	出土地点	重さ(g)	備考
1	A－18	10		25	D－19	160	
2	B－17	90	アジロ痕	26	D－19	25	
3	B－18	35		27	D－19	60	
4	B－18	10		28	D－20	110	指痕
5	B－18	20		29	E－17	35	
6	B－19	35		30	E－19	200	アジロ痕
7	B－19	15		31	F－17	80	
8	B－19	20		32	F－17	45	指痕
9	B－20	50		33	F－18	40	アンペラ
10	C－17	250		34	F－18	30	
11	C－17ベルト	15	指痕	35	F－18	40	
12	C－18	50		36	F－19	20	指痕
13	C－18	35		37	G－18	90	
14	C－18	80		38	G－18	50	溝あり
15	C－19	90	数ケの指痕	39	G－19	20	
16	C－19	20		40	I－20	30	
17	D－17	30		41	I－20	50	
18	D－17	40		42	J－20	10	
19	D－17	25		43	J－20	10	
20	D－17	30		44	E－18	50	
21	D－18	45		45	C－17　No.5	270	
22	D－18	25		46	C－17　No.56	430	指痕、アンペラ
23	D－18	310		47	F－18　No.8	190	
24	D－18	210	指痕	48	H－20　No.2	270	指痕、アジロ痕

第11節　有孔鍔付土器一覧表

N—Ⅳ区　有孔鍔付土器

No.	出土地点	部位	内孔・外孔	赤彩の有無	文様	備考
1	A－17	頸部				
2	A－18	頸部				
3	A－18	頸部	内孔		鍔の下の隆帯に爪型文あり	
4	A－19	頸部				
5	A－20	頸部				
6	B－17　No.3	頸部	外孔			S－Ⅳ　G－2　(81.10.7) 同一
7	B－18　No.9	口辺部			曽利ⅢⅣの文様あり	
8	B－17	頸部	外孔			No.3に同一
9	B－17	頸部	外孔			No.3に同一
10	B－17	頸部	外孔			
11	B－17	頸部	内孔			
12	B－17	頸部	内孔			
13	B－17	頸部	内孔			
14	B－18	頸部				
15	B－18	頸部	外孔			
16	B－18	頸部				
17	B－18	頸部				
18	B－18	頸部	内孔			
19	B－18	頸部				
20	B－19　No.10	口辺部	内孔			
21	B－19	頸部				
22	B－19	頸部	内孔			
23	B－19	口辺部	内孔			
24	B－19	口辺部	内孔	内側赤彩あり		
25	B－19	頸部	外孔			
26	B－20	口辺部	内孔			
27	C－17	口辺部	内孔		藤内式文様（手）	底部（台付）あり
28	C－17	口辺部	内孔			
29	C－17	口辺部	内孔			
30	C－17	口辺部	内孔			
31	C－17	口辺部	内孔		縄文あり	D－19　D－17　C－17 (81.10.17) 同一
32	C－17	口辺部	内孔			
33	C－18	口辺部	内孔			
34	C－18	頸部				
35	C－18	頸部	内孔	内側にあり		
36	C－18	口辺部	内孔	表側にあり		
37	D－17　No.7	頸部				
38	D－16	頸部	内孔			
39	D－17	頸部				No.7に同一
40	D－17	口辺部	内孔		鍔下に縄文あり	
41	D－17	口辺部	内孔			
42	D－18	口辺部	内孔			
43	D－18	頸部				
44	D－18	口辺部	内孔			
45	D－18	頸部				
46	D－18	頸部	内孔			
47	D－18	口辺部	内孔	表内側にあり		

No.	出土地点	部位	内孔・外孔	赤彩の有無	文様	備考
48	D－18	頸部	内孔			
49	D－18	口辺部	内孔			
50	D－19	頸部	内孔			
51	D－19	口辺部	内孔			
52	D－19	頸部	内孔		隆帯あり	
53	D－19	口辺部	内孔			
54	D－19	頸部		表内側にあり		
55	D－19	頸部	内孔			D－17 縄文ありと同一 (81.9.11)
56	D－20	頸部				
57	E－16	頸部	外孔			胴部の同一個体3辺あり
58	E－16	口辺部	内孔	表側少々あり		
59	E－16	口辺部				同一個体
60	E－16	頸部				
61	E－16	口辺部	内孔			
62	E－16	頸部	内孔			
63	E－17	頸部	内孔			
64	E－17	頸部	内孔			
65	E－17	頸部	内孔			
66	E－18	口辺部	内孔			
67	E－18	口辺部	内孔	内側にあり		接合
68	E－18	頸部	内孔			
69	E－18	口辺部	内孔			接合
70	E－18	頸部	内孔			
71	E－19	口辺部	内孔		縄文あり	
72	E－19	口辺部	内孔			
73	E－19	口辺部	内孔			
74	E－19	頸部	内孔			
75	E－20	口辺部	内孔		縄文あり	5辺で接合、E－19に同一
76	E－20 2層	口辺部	内孔			同一 S－ⅣC－3 接合 (81.10.5)
77	E－20	頸部				
78	E－20	口辺部	内孔			
79	E－20 2層	頸部	内孔			
80	F－17 No.6	頸部	内孔			接合
81	F－18	頸部	内孔			
82	F－16	頸部	内孔	表内側にあり	鍔の下に文様あり	接合
83	F－16	頸部	内孔	表内側にあり		
84	F－17	口辺部	内孔			
85	F－18	頸部	内孔			
86	F－18	頸部	内孔			
87	F－19	口辺部	内孔			
88	F－17	頸部	内孔			
89	F－20	口辺部	内孔	表側にあり		
90	G－9 2層 No.5	口辺部	内孔	表側にあり		同一
91	G－9 3層	口辺部	内孔	表側にあり		
92	G－19	頸部	内孔	内側にあり		
93	G－19	脚付底部		表内側にあり		
94	HI－19	頸部				
95	HI－19	頸部				同一 次頁へ続く

No.	出土地点	部位	内孔・外孔	赤彩の有無	文様	備考
96	H－19	頸部				同一 前頁より
97	H－19	頸部				
98	H－19	頸部				
99	I－18	頸部	外孔			
100	I－18	頸部	内孔			
101	I－19	頸部				
102	I－19	頸部				同一
103	I－19	頸部				
104	I－19	頸部				
105	I－19	頸部				
106	J－19	口辺部	内孔			
107	D－20	脚付底部		表内にあり		

第12節　台形土器一覧表

N—Ⅳ区　台形土器

No.	出土地点	名称	部位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大きさ	備考
1	A－17	鍔付	脚						
2	A－18	鍔なし	受面		平				接地面磨耗
3	A－18	鍔付	受面＋脚		平				接地面磨耗
4	B－17	鍔付	鍔＋受面		凹				
5	B－18	鍔付	脚	有					
6	B－18	鍔付	受面		凹				
7	B－18	鍔付	鍔		平				
8	B－18	鍔付	鍔		平				
9	B－18	鍔付	鍔＋受面		平				
10	B－19	鍔なし	受面		平				
11	B－19	鍔なし	受面		平				
12	B－19	鍔付	鍔		平				C－17ベルト81102接合
13	B－20	鍔付	受面＋脚						
14	B－20	?	盤	有	平				
15	C－16	鍔なし	受面＋脚		平				
16	C－17	盤状	受面		平				
17	C－17	鍔付	鍔		平				
18	C－18　No.37	鍔付	鍔＋受面		凹				
19	C－18	盤状	受面		平				
20	C－18	鍔付	鍔		平				
21	D－17	?	盤		平				
22	D－17	鍔付	鍔＋受面		平				
23	D－18　No.17	?	盤		平				
24	D－18	?	盤		平				
25	D－18	鍔なし	受面		平				
26	D－18	鍔付	鍔		平				
27	D－19　No.9	鍔付	鍔		平				S－Ⅳ　G－2 811012　接合
28	D－19	鍔付	鍔		平				
29	D－19	鍔なし	受面		平				
30	D－19	?	盤		平				
31	D－19	?	盤		平				
32	D－19	盤状	受面		平	有		245×135×32	
33	E－17	鍔付	脚						
34	E－17	?	盤		平				
35	E－17	?	盤		平				
36	E－17	盤状	受面		平				
37	E－17	?	盤		平				
38	E－18	?	盤		平				
39	E－18	鍔付	鍔		平				
40	E－20		脚	有					孔の囲りに隆帯
41	E－20	鍔なし	脚	有					
42	E－20	鍔付	鍔						
43	E－20	鍔なし	脚						
44	E－20	?	盤						
45	F－19　No.17	鍔付	受面＋脚	有	凹		鍔に縦のキザミ有り		202×(74)×(68)
46	F－17	?	盤		平				

No.	出土地点	名称	部　位	孔の有無	受け面の形状	オコゲの有無	文様の有無	大　き　さ	備　　考
47	F－17	鍔　付	鍔		平				
48	F－17	?	盤		平				
49	F－18	鍔なし	脚	有					
50	F－18	鍔　付	脚						
51	F－18	鍔　付	脚						
52	F－18	盤　状	受　面		平				
53	F－19	?	盤		平				
54	F－20	鍔なし	脚＋受面		凹	有			
55	G－18	?	盤		平				
56	G－18	盤　状	受　面		凹				
57	G－20	鍔なし	脚＋受面		凹				
58	G－20	鍔　付	鍔		平				
59	I－18	鍔　付	鍔		凹				
60	I－18	?	脚						
61	I－18	?	脚	有					
62	J－18	?	盤		平				
63	J－20	鍔　付	脚＋受面		凹	有		(174)×(169)×(71)	接地面部磨耗
64	SB－65 No.47	鍔　付	受面＋脚		凹	有		200×200×(38)	接地面部磨耗 裏側に赤彩あり
65	SB－65	?	盤		平				
66	SB－03 No.1	鍔なし	受面＋脚	有	凹			277×240×50	S－18　F－19 接合 接地面部磨耗

第6章　ま　と　め

第１節　土器の概観

第１項　早期末の土器群

神之木台式土器は1977年に横浜市神之木台遺跡[1)]をタイプサイトとして設定された。1983年には神奈川考古同人会による該期のシンポジウム[2)]が開催され、その内容が明らかにされてきたと言える。筆者もこれに参加し、釈迦堂遺跡群のこれらの土器について考えてみる機会を与えられた。そして、これらの神之木台式土器、下吉井式土器について、若干の見解を述べたことがある[3)]。

釈迦堂遺跡群では本来の神之木台式土器に比定されるものと、これらより前後に時間差をもつものが発見されている。そこで、編年の基準となる無繊維の土器群を『釈迦堂Ⅰ』[4)]では第１群土器１～６類まで分けて説明した。そこでこれらをもとに釈迦堂遺跡群の早期の土器群を次のように型式分類した。

釈迦堂Ｓ１式は第１群土器２類である。ただしこれらの土器群もさらに内容は複雑で、編年図で釈迦堂Ｓ１式の最初の部分に示した土器群で、とくにＶ字状隆帯はあるいは神之木台式土器の範疇から逸脱するものかもしれない。とにかく釈迦堂Ｓ１式は断面三角形の隆帯に貝殻腹縁の刻目をもつもので、隆帯モチーフには前掲報告書で述べたようなものがいくつかある。

釈迦堂Ｓ２式は第１群土器１類である。これは釈迦堂Ｓ１式とほぼ同様なモチーフをもつもので、隆帯上に貝殻腹縁による刻目ではなくヘラ状工具を施文具とすることがおおきな違いである。このＳ１式とＳ２式の違いは、時間差ではなく、むしろ地域差と考えられる。貝殻腹縁を多用する地域は東海地域で、山梨県下では両方が併用されたものと思われる。

釈迦堂Ｓ３式は第１群土器３類である。これは釈迦堂Ｓ１、Ｓ２式の刻目を施すという意識が残るもので、断面三角形の隆帯に貝殻背圧痕を断続的に施すものである。

釈迦堂Ｓ４式は第１群土器４類である。ここではもう刻目の意識は失われ、貝殻背圧痕を連続的に施すもので、釈迦堂では破片が多く、一括資料にかける。

以上で、釈迦堂の早期末の編年の概要を終わる。これらの編年案は山梨ばかりでなく、他の地域で確認されなければならない。神之木台式遺跡の神之木台式土器は上記の分類編年案とはよく整合しない部分もある。というのは神之木台遺跡ではヘラ刻みのものがいくつか見られるに対して、釈迦堂では同様なモチーフにはヘラ刻みはもたないのであるが、貝殻背圧痕の手法からＳ３ないしＳ４式に位置するものと思われる。

第２項　前期初頭の土器群

前期と早期の境をどこに引くかという問題は研究者によっていくつかの意見がある。ここでは、下吉井式から前期としたい。ただし下吉井式土器の概念規定の問題があるが、筆者は釈迦堂Ｓ４式の隆帯の上の２次施文と４単位であった隆帯モチーフに多単位のものが出現してくる段階から、下吉井式土器としている。

釈迦堂Ｚ１式土器　これは第１群土器６類に相当する。これはさらにａ類とｂ類に細別される。ａ類は２次施文として貝殻腹縁を刺突している。ｂ類は２次施文として中期のような角押文を施している。微細な資料ではあるが、関東地域に散見される。このａ類とｂ類は同一型式としてとらえられるか、地域性を考慮すべきものか、検討すべき課題が残る。

釈迦堂Ｚ２式　これは釈迦堂Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－47でまとまった資料が出ている。これは隆帯上に角押文を施し、さらに器面にも角押文を施すものである。また隆帯が失われ、器面に波長の短い角押文による波状沈線を２条施すもの

と、角押文の意識がうすれた波状沈線が3条となるものもあり、ＳＢ－47で一括出土したとは言え、これらに時間差を考慮すべき余地はあるものと考える。

なお、以上早期末から前期初頭にかけての無繊維土器について述べてきたが、これと同様に含繊維土器についても編年を追わなくてはならないのであるが、これは無繊維土器に比べて変化の乏しいものが多く、編年的研究にはあまり適さないものが多い。特に平口縁で口辺にタガ状隆帯を巡らすものは変化の乏しいものではあるが、この時期に特徴的なものである。

註

1）高橋雄三・吉田哲夫　1977　「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」　『調査研究集録』

2）神奈川考古同人会縄文研究グループ編　1983　『縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』

3）小野正文　1983「縄文時代早期・前期初頭の土器について」　『研究紀要』 1

4）小野正文編　1986　「釈迦堂Ｉ」

第3項　前期後半の土器群

前期後半の黒浜式から諸磯式土器までは釈迦堂Ｓ－Ｉ区で出土しているが、他の地区では破片程度の出土例しかない。

釈迦堂Ｚ3式[1]　言うまでもなく黒浜式は関東地方の土器であり、この地域には客体的な出土状態を示すのである。この黒浜式に並行する在地の土器は先の報告で釈迦堂Ｚ3式としたもので、無繊維、薄手、内面に指圧痕、文様はほとんどなく縄文を多用、縄文には反の撚りがしばしば見られる。稀に4単位の波頂部から垂下隆帯が下がるものもある。また縄文地に一本引き沈線を加えるものもある。このような土器はすでに長野県の阿久遺跡で阿久Ⅲａ、Ⅲｂ期という時期に設定された土器である[2]。内容的にはこの阿久遺跡のものの方が、充実しており阿久Ⅲ式とした方がよいのかもしれない。ただ釈迦堂のものは阿久Ⅲｂ期に近い資料である。細分されることは、阿久遺跡でも釈迦堂遺跡でも知られているが、型式学的根拠を更に充実させる必要があると思われる。

諸磯ａ式土器　この型式の土器は先の釈迦堂Ｚ3式ほど地域差がなく、関東・中部地域のおおきな枠組みの中に入ってしまうと言える。最近では諸磯ａ式も二分して考える研究者もいる。釈迦堂でもやはり諸磯ａ式の古い部分と思われるものが、釈迦堂Ｓ－Ｉ区ＳＢ－41、42で出土している。この中で4号埋甕炉のものがこれにあたる。またＳＢ－39の覆土にも諸磯ａ式の古い部分のものがある。ほかに破片ではいくつか見られるが、ここでは資料的に恵まれていないことから、同一のものとして置きたいと思う。

諸磯ｂ式土器　この土器型式は細別案が幾人もの研究者によって、提示されている。ｂ式の3分案、4分案[3]があり、その内容も少しずつ異なる。釈迦堂では細別されたものがまとまって出土という状況である。山梨県下では大泉村天神遺跡[4]で諸磯式～五領ヶ台式までの集落が検出されており、諸磯ｂ式期47軒、諸磯ｃ式期7軒、五領ヶ台式期5軒である。常識的に考えても、4段階以上の細別が可能であろう。その中で釈迦堂Ｓ－Ｉ区ＳＢ－20は諸磯ｂ式の最も新しい部分に属するものであると思われる。

いずれにしても、諸磯ｂ式土器は山梨県下でもさらに資料の充実を待って検討すべきであろう。

註

1）小野正文編　1986　『釈迦堂Ｉ』

2）長野県教育委員会　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘報告書』　阿久遺跡

3）鈴木徳雄　1979　「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』埼玉県遺跡調査会報告書第36集
　鈴木敏昭　1980　「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷」（再考）『土曜考古』　2
　今村啓爾　「諸磯式土器」『縄文文化の研究』　3

4）新津　健・米田明訓　1985　山梨県埋蔵文化財センター　『年報』　1

第4項　中期初頭の土器

中期初頭の五領ヶ台式土器についての編年的研究は多くの先学によって試みられてきた。その中で、この山梨県地域の五領ヶ台式土器の変遷を考える上で、最も細別化した今村啓爾氏[1)]の編年案にそって、この土器を概観して見たい。

五領ヶ台Ⅰａ式土器　この型式の土器はこの地域には現在のところほとんど見られない。ただ釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＫ－155でⅠａ式の好例が見られ、他の地区でも若干の小片が見られる程度である。やはり、今村氏の言うように地域性があるのであろう。

このⅠａ式は氏の言うように東北地方の影響を強く受けたものであり、氏も地域性を考慮してⅠａ式には確定していない静岡県長井崎、神奈川県池辺第4と類似する土器群は、手法的には東海・近畿地方と関係するものと思われる。これがいわゆる踊場系土器に伴って出土している。それは上の平19号住、12号住が好例である[2)]。ここでは、34号住→19号住→12号住という前後関係が発掘によって確かめられている。つまり、34号住の炉体土器と貯蔵穴出土土器、床面直上出土土器は前期終末に位置し、覆土の土器は19号住の踊場系土器と型式学的にほぼ一致しよう。ここに、Ⅰａ式と思われる細線文系土器が伴っている。さらに、12号住の踊場系土器は19号住のそれとはやや様相を異にしており、型式学的変遷が考えられる。上の平遺跡における発掘事実の重要性は、山梨県地域の中期初頭に主体を占めると思われる踊場系の変遷をほぼ知り得ることであろう。

つまり、この地域の踊場系土器はその起源は諸磯ｃ式からであろうが、前期終末に上の平34号住の炉体土器、貯蔵穴出土土器、床面出土土器を置くことができよう。そして中期に至って次のような変遷をたどるものと思われる。

第1段階　上の平34号住覆土、19号住、金の尾39号住、およびやや新しい傾向のある釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04がこの段階である。集合沈線文の間隙を空白とするか、陰刻している。この陰刻する手法は前期末以来の伝統であり、この段階では間隙の周りを縁取りする傾向がある。

第2段階　集合沈線文土器が最も発達した時期である。釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－03、06、上の平13号住の炉体土器（同報告書第10図5）などがこの時期である。しかも、上の平13号住では炉体土器の前後関係が確かめられている。土器は集合沈線文で飾ることが多く、間隙部は発達せず、陰刻手法はほとんど用いられなくなる。

第3段階　上の平12号住（同報告書第8図10）、釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－07がこれにあたる。集合沈線文は退化傾向を示し、特徴的には頚部の無文化傾向が著しい。

さて、これらは第1段階が上の平19号住の伴出例から今村氏のⅠａ式にあたり、第3段階がⅠｂないしⅡａ式にあたると考えられる。

五ヶ台Ⅱａ式土器　この型式の土器はⅠａ式に比べて、やや多く見られる。都留市久保地29号住が好例である。今村氏は確実なメルクマールとはならないとしているが、口縁部に＜帯縄文＞をもつもので、ひとつの目安とはなろう。

これは、釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－23、釈迦堂Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－51がこれにあたる。ここで問題は釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－23は不確定な住居ではあるが、集合沈線文土器が伴出しているのである。これは集合沈線文土器の第3段階が、五領ヶ台Ⅱａ式に同時期か、近いことを示している。

ここで縄文系土器はともかく、釈迦堂Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－41、48の炉体土器または久保地29号住にも見られる波状の4単位外反口縁、湾曲した頚部、細く裾広がりの体部という器形をもち、口縁部に短沈線、文様は口頚部に集中し、体部は静岡県柏窪例では4単位に分割するらしい土器が注目される。この土器の系譜は明らかにし得ないが、胎土なども異質である。

五領ヶ台Ⅱｂ式土器　ここでは小淵沢町上平井出の土壙群出土土器が代表的な例である[3)]。これらは型式学的にも十分まとまったものである。ただし、先に3段階に変遷をおったいわゆる踊場系の系譜あるこの上平井出の土器群はⅡａ式に相当するこの系譜の土器の存在を考えなくてはならない。あるいは上の平13号住の炉体土器（同報告書第10図1）がこれにあたるのかもしれない。またこれと同時期に位置されている中道町下向山の土器は時間的にも系譜的にも検討する余地のあるものと思われる。

五領ヶ台Ⅱｃ式土器　この時期の土器はあまり好例はない、上の平22号住、塩山市安道寺12号住がある[4)]。

五領ヶ台直後式土器　これらの土器は釈迦堂でもいくつかある、現在のところ、検討にいたる十分な資料はない、また名称の問題も俄かには同調できないものがある。

註

1）今村啓爾　1985　「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』　4

2）中山誠二　1987　『上の平遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第29集

3）末木　健　1974　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』北巨摩郡小淵沢町地内

4）小林宏和　1978　『安道寺遺跡調査報告書』（概報）

第5項　狢沢式土器

山梨県地方の中期の土器の編年はその地理的環境もあって関東編年で呼ばれることもあれば、井戸尻編年で呼ばれることもある。時期によっては、関東の土器とほとんど遜色のない土器もあれば、まったく違った様相を見せることもある。それゆえ、この地方では土器型式の呼び名がやや混乱をきたす場合もある。

そこで、ここでは中期の土器を初頭は五領ヶ台式とし、後は井戸尻編年にしたがった呼称を用いることにしたいと思う。なおそこで、既製の編年では説明しきれない部分や、修正を必要とする部分については、そのつど註を加えたいと思う。なお、関東地方の研究者のなかには、(1)狢沢式から勝坂式とする意見、(2)新道式から勝坂式とする意見、(3)藤内式からとする意見と、およそ三通り意見がある。それぞれに根拠のあることであるが、『日本先史土器図譜』[1]にある勝坂式の吟味をすれば、それはおのずから、勝坂式は藤内式からと言うことになろう。ここでは繁雑な説明は避けるが、おおよそ0段3条の縄の使用をもって勝坂式とすればよいと考える。

ところで、最近様式論が盛んで、(1)～(3)のどの意見をもって勝坂式土器様式とすべきか、また意見の別れるところであるが、この中間的な枠組みもまた、本来的には一つの土器型式の吟味から出発しなければならないことは言うまでもない。

狢沢式土器は関東地方の「清水台式」、五領ヶ台上層式土器[2]に相当するもので、これらを角押文土器と呼ぶ人もいる。この土器は型式学的変化に乏しく、なかなかその推移を知ることは難しい部分もあるが、ここでは、三段階に分離した数野雅彦氏の分類編年案[3]にしたがってその変遷をおってみたいと思う。

第1段階　神谷原遺跡160号住の覆土出土土器を標準としている。五領ヶ台式土器の伝統を強く残しており、口縁部にまばらな縦位の沈線やY字状沈刻文を角押文で表出したものやこれに三叉文が加わるもの、口辺部に一帯から三帯の楕円文がある。この楕円を描く隆帯にそって一条の角押文が併走している。ただし、楕円文内を角押文で充填する手法は未発達である。この楕円帯から懸垂文があり、中にはクランク状をなすものもある。釈迦堂では釈迦堂S－Ⅳ区グリット（第465図－3）がこれにあたる。

第2段階　大石遺跡26号生活面・覆土出土資料、藤の台遺跡3号住出土資料である。楕円区画内を縦位や斜位などの角押文列で充填したり波状文を描くなど、充填手法の発達、隆帯に沿って2条の角押文を施すものもある。釈迦堂ではS－Ⅳ区グリット（第465図－4）がほぼこれに相当するものと思われる。

第3段階　神谷原遺跡10号住に代表される。この期の特徴はまず、隆帯にそって幅広の角押文と幅狭の角押文が多様される。つまり新道式に近いものとなりつつあるということである。釈迦堂ではS－Ⅳ区SB－73でまとまった資料が出土している。このなかにも検討すべき資料は多いが、第362図－15、16はすでに新道式とされるもので、狢沢式と新道式が近い位置にあることを示している。本来的に角押文と三角押文はそれほど違いのあるものではなく、角押文の施文具を使っても三角押文は施文できるのである。

註

1）山内清男　1932　『日本先史土器図譜』

2）「清水台式」・五領ヶ台上層式土器と呼ばれる土器群は、一型式として認定できる土器群があるという提案の段階に止どまっ

ており、型式学的検討がいまだ不十分といえよう。また、これと連動してこれらの土器群を「角押文土器」と呼び習わすのもいかがなものであろうか。

3）数野雅彦　1984　「角押文土器の研究」『丘陵』　10

第6項　新道式土器

新道式土器も他の土器と同じように、数段階の変遷を経ているものと思われる。現在この土器型式の細別案を提示したものを知らない。それは意外にもこの土器を出土する集落とか、墓壙の発見例が少ないからである。

幸なことに、釈迦堂ではS－Ⅳ区SB－68, 69. 80, 81が重複して検出されたのである。まず、SB－81に貼床して80があり、さらにこれに貼床して69があったのである。68は69に切られた僅かに覆土が残ったのみであった。このことから81→80→68→69という図式が描けるのである。さらにとなりにあるSB－53は深さ約130㌢という堆積状態の良好な住居であって、この一次および二次推積層の土器と81の炉体土器が接合するという好条件が整ったのである。つまり、新道式を50個体以上出土した53と81はすくなくとも53が古いか同時期ということになる。

これとは別に、地域的にまとまりのある山梨県東部地域の新道式土器や藤内式土器を出土する住居址を検討すると、いくつかの住居が上げられる。釈迦堂ではS－Ⅲ区SB－18、78、95、111があげられ、S－Ⅳ区ではSB－52、68、69、80、81がある。他の市町村では御坂町桂野平石の住居[1]、都留市中溝遺跡1号住[2]が上げられる。この中溝遺跡のような藤内式を伴うものは、塩山市町田2号住[3]がある。さらには藤内式に新道系土器が伴う例は釈迦堂S－Ⅰ区SB－10、S－Ⅳ区SB－32があり、重郎原遺跡[4]などが上げられる。さらに新しい新道系土器も存在する。この時期の土器を通した一つの手法として隆帯＋キャタピラ文があげられよう。これらの土器群の編年序列を考えるとすれば、それはおおよそ次のようになる。

第1段階　釈迦堂S－Ⅲ区SB－53の資料が好例である。深鉢形土器では口辺部に三角区画帯を施し、体部は縄文とするか、短隆帯をつけるものが見られる。また体部に区画帯を設けるものは三角、楕円、格子目とあるいずれも隆帯脇をキャタピラ文で加飾している。またその最下部に楕円区画帯を巡らす例は稀で、次の段階で盛行するものである。狢沢式土器と関連する口縁部に楕円区画帯をもつのもこの段階の特徴の一つである。すでにこの段階から抽象文土器があり、北陸系の縦区画文もまた見られる。この第1段階はSB－73と53の埋甕炉を比べても明らかなように、非常に近い位置にあることは言うまでもない。なおSB－53では阿玉台1b式土器と思われるものが出土している。釈迦堂S－Ⅰ区SB－31は藤内式土器の住居でこの下の土壙から阿玉台1b式（新）土器が出土しており、阿玉台式1b式土器は藤内式より古いということが明白となっている。

第2段階　釈迦堂ではあまり良い例はない、新道遺跡の新道式土器がこの段階である。この地域では桂野平石の一括資料が好例である。口辺部に三角区画帯、ここに玉抱き三叉文を陰刻するものが多い。体部には三角および菱形などの横帯文、体部下部に三角および楕円区画帯を巡らす、これによって底部が屈折底のように見えることも大きな特色である。

第3段階　釈迦堂S－Ⅲ区SB－95の一括資料を標準としている。この住居はSB－84に切られており、藤内式土器との前後関係が明瞭な資料である。基本的な深鉢形土器では口辺部三角区画帯の三角の形状が崩れる傾向にある。体部には抽象文などのモチーフが組み込まれたものも多くなる。抽象文土器は藤内式に伴うそれと、型式学的に区分する根拠に乏しいものが多い。文様要素ではキャタピラ文が大きく、平たいものが多用される傾向にある。

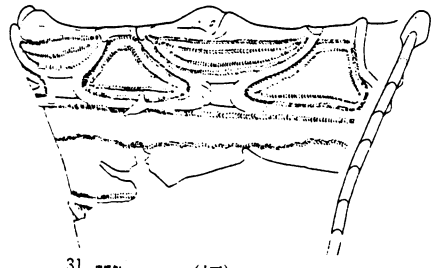
つぎに、第4段階を設定するとすれば、それはもはや藤内式土器の段階である。これは中溝や町田の資料からも言えることで、新道式の伝統は次の井戸尻式の段階まで受け継がれ、これは系統的には新道式にあるが、時期的には藤内式、井戸尻式の範疇で考えなければならない。

註

1）甲斐丘陵考古学研究会編　1979　『御坂町の埋蔵文化財』

2）都留市教育委員会編　1974　『中溝遺跡』

3）未報告



31

(炉)

SB−69

貼り床

1

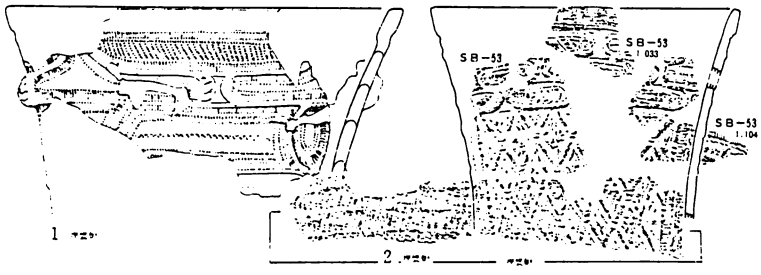
(炉)

SB−80

貼り床

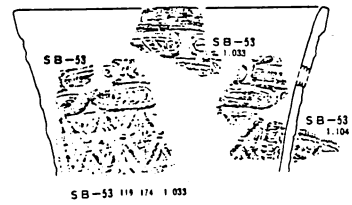
第2次堆積土層

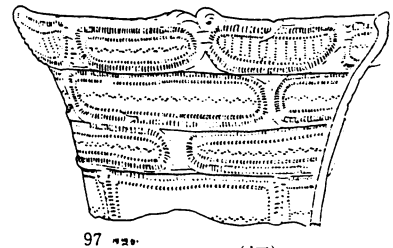
第1次堆積土層



(炉)

SB−81





97

(炉)

釈迦堂S−Ⅳ区 SB−53

挿図6　新道式土器の層位関係

第7項　藤内式土器

藤内式土器は当初の設定が藤内特殊遺構と型式学的研究によって設定されており、いくつかの土器に不可解なものを残している。それはまさに特殊遺構という出土状況に起因していると言えよう。

幸い、釈迦堂では良好な資料に恵まれて住居址ごとにその変遷がつかめそうである。藤内式期の集落がS－Ⅰ区、S－Ⅲ区、S－Ⅳ区、S－Ⅴ区でそれぞれ見られるが、ここの住居址にあたってみると、そこには時間差があることが知られる。これを仮りに二段階[1)]に分けて考えてみようと思う。

第1段階　まず、藤内式には縦区画文土器、抽象文土器、新道系土器、縄文土器、無文土器、有孔鍔付土器、浅鉢形土器などがある。釈迦堂では、藤内式期の集落がいくつか検出されているが、新道系土器を出土した中溝や町田の資料から、第1段階のものはS－Ⅰ区SB－10、S－Ⅲ区SB－84があげられる。ここには、いわゆる新道系の土器は見当たらないが、抽象文土器などには隆帯＋キャタピラ＋波状沈線が見られる。さきの遺跡と釈迦堂とのあいだに、藤内式を代表する縦区画文土器の型式学的な差異は認められないので、これらの間には時間差は存在しないと思われる。なお、縄文を施すものの中には、0段3条のものが見られるようになる。他にこの地域では境川村一の沢西遺跡11号住が好例である。

第2段階　釈迦堂S－Ⅰ区にいくつかあるが、釈迦堂S－Ⅳ区S－32が好資料である。縦区画文土器、抽象文土器、楕円文土器、縄文土器、浅鉢形土器が出土しており、新道系土器や有孔鍔付土器は見られない。ここではじめて、楕円文土器が登場してくる。この楕円文もまたその系譜をたどれば、狢沢式土器第3段階（第361図－8）、新道式土器の第1段階（第371図－19）、同第2段階の桂野平石例までも系譜の追えるが、文様帯の検討では別の系譜も考えられるもので、この藤内式土器の第2段階で発達を遂げる。この種のものは楕円が重壇するものもあれば、体部上部に楕円帯、下半は縦の縄文となるものが多い。この縄文はほとんど例外なく0段3条である。また屈折底も多く見られるようになる。重郎原では新道系土器が出土しており、口辺部の三角区画帯も崩れ、隆帯＋キャタピラ文＋波状沈線を施すが、区画内は素文のままである。区画文土器は他の文様要素である楕円区画などが組み込まれるようになる。また区画自体も大きくなる傾向にある。他にこの地域では上の原遺跡35号土壙が同時性をしめす良い例である。

註

1)『井戸尻』では藤内式土器をⅠⅡ式に別けているが、その設定の当初を吟味すれば、この区分に矛盾があることは言うまでもない。そこで、ここでは、良好な資料が得られたので、とりあえず2段階に分離して置きたいと思う。

第8項　井戸尻式土器

藤内式土器以降を井戸尻式とすれば、山梨県下では全く資料に欠けてしまう。つい2・3年前までは、この地域に井戸尻式はなかったのである。最近になってようやく住居址単位での資料が揃いつつあるという状況である。

一の沢西4号住、5号住、6号住、9号住[1)]があり、上野原5号住、7号住、8号住[2)]などがある。この中でもとくに一の沢4号住は出土遺物も豊富でこの地域の該期の資料の一指標となるものと思われる。ただ釈迦堂のものに比べると、異様に同一器種の多さに驚かされる。長沢宏昌氏はこの4号住の資料をもとに、井戸尻Ⅲ式を古、新、最新と区分している。

井戸尻式土器は当初ⅠⅡⅢ式と編年[3)]されていたが、これをⅠⅢとするという改訂案[4)]がだされた。このように井戸尻式はおおきく二分して考えるのが妥当であるとおもわれる。ところで、この井戸尻Ⅰ式についても問題がない訳でもない。井戸尻Ⅰ式の標式とされた井戸尻4号住のセットの中には、279の塔状把手付き土器[5)]や281はⅢ式に位置するものであろう。また、改定した曾利48号住は井戸尻Ⅰ式とするには疑問が残る。

釈迦堂の資料は井戸尻式に比定するとすれば、Ⅲ式のものが多く、Ⅰ式のものは、その内容がはっきりしない。

と言うのは、Ⅰ式がそのメルクマールとして中帯文をもつのに対して、釈迦堂の土器の中には中帯文をもつものはほとんど見られない。藤内Ⅱ式からの型式学的変遷として、あえて井戸尻Ⅰ式期のものを設定するとすれば、S－Ⅲ区SB－33、35、48、S－Ⅳ区SB－40、83の資料がこれに当たると思われる。Ⅲ式に相当するものは、S－Ⅲ区SB－36であろう。特に、SB－35の資料は44、45に関東の勝坂式土器独特の器形と思われる。これらは、勝坂式の終末に位置するものであろう。SB－36の資料には関東系のものは見られないが、信州系縮曲文土器がある。これとよく類似した資料は上野原8号住にある。また一の沢4号住にも類似したものが幾つかある。ここでは諏訪系の土器もある。ちなみに、SB—35の40、41や土器すてばAの13、14の土器は関東と中部をつなぐ土器と考えられるものである。このように、勝坂式期の終末の時期には地域性が顕著に現われてくるようである。つまり、信州系土器では縮曲文土器、平出3類A系土器、一の沢西4号住「報告書図19－4」のような諏訪系土器、関東系の円筒形土器、または大木系土器「一の沢西56号土壙」が見られる。ふしぎなことに、関東の勝坂式土器のそろばん玉形の浅鉢はこの地域ではほとんど見られないようである。

長沢氏は井戸尻Ⅲ式を3段階に分離した。それは「隆帯の懸垂文化」を指標としている。即ち、口縁部から垂下する懸垂文が連続するか否かが新古の分離の基準と言う。これは曽利古式の古手を念頭に置けば、充分推察でき得ることである。またこれとは別に、この地方では、一般に縄文の喪失と無文化または条線の充填化傾向が窺い知れるのである。

このうち最新とされた時期の資料はしばしば井戸尻Ⅲ式の遺構から出土するか、曽利Ⅰ式の遺構から出土する傾向がある。前者の例は一の沢西4号住、釈迦堂S－V区SB－10がある。後者のものはこの地域に曽利Ⅰ式の遺構が少ないだけに好例がない。この最終末の時期は一の沢西9号住の資料から確実に存在したことが、明白となっている。これらの土器は型式学的には体部文様帯はすでに曽利式であるのにたいして、口辺部の文様は以前として伝統的な井戸尻式なのである。この体部文様帯の下端の区画の有無もまた型式区分のメルクマールとなる。

註

1）長沢宏昌ほか　1986　『一の沢遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第16集

2）中山誠二　1987　『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第19集

3）藤森栄一編　1975　『井戸尻』

4）武藤雄六ほか　1978　『曽利』

5）このことについてはすでに長沢氏が註1）の文献で触れている。

第9項　曽利式土器[1)]

曽利式土器はこの地域の中期後半の土器としてあまりに一般的なものである。それゆえ多くの研究があると思われるが、それが意外にも研究論文が少ないことに驚かされる。

まずは『井戸尻』の報告書にはじまる。この報告によって曽利式土器の体系が立てられたのである。曽利ⅠⅡⅢⅣⅤ式のすべてが必ずしも住居址の切り合い関係で前後関係を把握されたものではない。むしろ、井戸尻編年全体をとうして見れば、藤森栄一氏の進化論的型式観によるところの方が多いように思える。この井戸尻編年はこの地域の藤森氏の後継者たちによって、さらに内容の充実がはかられている。ただここで、問題としている山梨県東部の地域の資料はいままでの曽利式土器研究の中では部分的にしか取り上げられたことはなく、遺構単位での検討は皆無である。都留市久保地の資料は部分的に紹介されてはいるが、八ヶ岳南麓地域のものと比較はされていない。我々は、釈迦堂の曽利式土器を検討するに従い、曽利式の編年には合致しないものの多いことに気づかされたのである。

なお、付け加えるとすれば、井戸尻の曽利式土器編年はその創設という理由からではあるが、一地域の土器をもって編年を組み立てた事は、重要なことだと思われる。曽利式の広域的な編年の重要性は言うまでもないが、資料の増加に伴い徒に広域に分布する土器を編年の中に組み入れることには危惧を感ぜざるを得ない。

曽利式土器は一瞥すればすぐ理解されるように曽利ⅠⅡ式土器と曽利ⅢⅣⅤ式土器は大きく異なる。前者は大型

の器形が目立ち、後者では、口辺部文様帯が特徴的である。このような口辺部文様帯は東北南部、関東、東海、北陸に共通してみられるものである。そしてこの口辺部文様帯の喪失をもって曾利式土器は終わりを告げるのである。

曾利式土器を研究するうえで、筆者なりに疑問とする点がいくつかある。それは、まず施文順序の問題である。米田明訓氏[2)]は①成型　②文様帯の区画　③モチーフの施文　④地文の施文という順序を示された。これは基本的に正しい観察である。付け加えるとすれば、頚部に文様帯のあるものは②と③の間に一工程増えるのである。この施文順序は曾利式土器の大きな特徴の一つであり、加曾利Ｅ式土器とは大きく異なる。また地文であるが、これは加曾利Ｅ式土器の縄文は①と②の工程の間に施される、下地の地文であるのに対して、曾利式の条線はモチーフの間を埋める充填文なのである。その意味ではこの地文は「特別の点を目立たせる背景をなす部分」なのである。地文と言う用法は文字の意味的には何等問題はないが、土器の地域性や系統を研究するうえでは、言葉を区別すべきであると考える。また、この施文順序について誤った見解が発表されているが、これも観察対象とした土器が、もしこのとおりだとすれば、それこそその土器の出自を示しているのである。なお、勝坂式土器にあっても、縄文が①と②の間に施されるのが通例である。

また、曾利式土器で頻繁に使用される「懸垂文」であるが、もともと懸垂とは一本の紐の両端をもって、紐を垂らすことをいうのではあるまいか。学史的にも曾利式土器でいうつなぎ弧文のことを懸垂文といっている。また数学でも懸垂線は前者の意味である。ただ井戸尻の報告以来鉄棒の懸垂とおなじような意味で使われており、これを改定することは容易ではない。筆者が早期末の土器で使用している懸垂文は前者の意味で使用しており、時期を異にして同一用語を別の意味として使用するという混乱を招いてしまっていることを断っておきたい。

ここでは、先述のような大きな特徴から、だいたい旧来の曾利Ⅰ Ⅱ式をもって曾利古とし、曾利Ⅲ Ⅳ Ⅴ式をもって曾利新として見てはどうであろうか。ちなみに、釈迦堂の整理事業ではこの方式を採用して曾利の大まかな分類と接合を行った。

曾利古式第１段階

この段階は住居址の資料としてはあまり良好なものはない。Ｓ－Ⅳ区ＳＫ－128はこの段階の指標となり得るものである。大型長胴甕は体部にＵ字、逆Ｊ字のモチーフを描き、その空間を条線で充填するものである。条線は一本引きもあれば、櫛歯状もある。水煙把手付き土器は井戸尻式塔状把手からの変化したものであろうし、これと併行して、すでに井戸尻Ⅲ式の段階で上野原や釈迦堂Ｓ－Ⅴ区に見られる。この段階の水煙把手は大把手が４単位あり、この間に小把手が４単位見られる。この傾向は一の沢西56号土壙の大木系土器や釈迦堂Ｓ－Ⅲ区土器すてばＡ（第194図６）のものにも見られる。これが曾利古第１段階になると小把手が失われると思われる。また器形も勝坂的な屈折底もなくなる。

重弧文土器の系譜である褶曲文土器もこの段階のものは資料的に貧弱である。また浅鉢形土器も好例はないが、口辺部に隆帯を巡らしたものが、おそらくこの時期のものであろう。

曾利古式第２段階

この段階の資料もＳ－Ⅳ区ＳＫ－05の３個体の大型長胴甕を指標としたい。体部の主要モチーフが前時期とは異なり竹管修形隆帯および指なで修形隆帯が用いられる。竹管修形隆帯ではしばしば竹管による爪形文が施される。またこの主要モチーフの脇に波状粘土紐を加飾することが多い。頚部の文様帯が曾利式期には珍しく発達する。ここに格子目などが多用される。重弧文も竹管修形隆帯で隆帯もしくは半隆帯として整然と描かれる。この段階から大型甕形土器の発達が見られるようになる。この形態の土器にはＸ把手がつくものが多い。Ｘ把手も４単位を基本とするが、６～８単位のものまで見られる。水煙把手もまた４単位のものも出てくる。なお比較的小型の土器で体部上半に横位の半隆起線の文様帯をもつものはこの時期以降に見られるものである。

曾利古式第３段階

この段階は遺構単位では把握されていないが、曾利古式を特徴付けた大型長胴甕や大型甕形土器などの器形が失われる段階で、斜行沈線文土器がおおく見られるようになる。この土器については重弧文土器、格子目文土器とともに語られることが多い。ここで、施文順序を検討すれば、この斜行沈線文土器は条線が加曾利Ｅ式の縄文のよう

に地文として施されるものと、曾利式本来の充填条線となっているものの二種があることに気が付く。つまり、この土器は本来的に曾利式土器ではなく、曾利式土器の周辺に位置するもので、曾利式土器に許容され、広い分布をもったものと思われる。そのことは曾利式土器の中心的な分布地域である山梨県下には、現在のところ曾利古第2段階の資料が欠け第3段階以降の資料しか見られないことからも言えよう。なお、体部モチーフの検討からこれを大木式土器と関係して考える谷井彪氏[3]の見解もある。曾利式土器における渦巻文は確かに大木式の影響であるが、剣先状のモチーフをことさら大木式と結び付けなくともよいと考えている。この種のモチーフの祖形は玉抱き三叉文で井戸尻式土器の中によく見られるものである。

曾利新式第1段階

この段階ではじめて口辺部文様帯と体部文様帯が分離したと言われている。確かに大木式土器、加曾利E式土器の影響のもとに口辺文様帯が確立する。この特徴的な土器をここでは肥厚口辺土器と呼んでいるが、この土器の3単位の波状口縁は明らかに大木8b式の影響であると思われる。また体部の渦巻き文もまた米田・谷井両氏の指摘のとおり大木式土器から取り入れたものであろう。加曽利E系とおもわれる口辺部にいわゆるつなぎ弧文をもった土器は体部にいわゆる懸垂文としてH状の半隆帯をもつものが多い。

重弧文土器や斜行沈線文土器の生き残りのものも幾つかある。またX把手付き大型甕形土器もまた体部に渦巻き文を2～3条の半隆帯で描く。この種の器形もまた小型化の傾向をたどるのである。

この時期の住居一括資料としてはS－Ⅳ区SB－56が良好である。

曾利新式第2段階

この段階で、肥厚口辺土器は口辺部につなぎ弧文をもった土器と融合を始める。またつなぎ弧文をもった土器のH状懸垂文のH字の幅が狭くなり、I字状になる傾向が窺える。X把手つきの大甕の体部渦巻き文の半隆帯は2本から1本へと数を減らして行く傾向が見られる。この第1、第2段階の加曾利E式土器は、釈迦堂ではよい伴出例がないが、恐らく頚部に無文帯のないものであろう。良好な住居址資料に恵まれていない。

曾利新式第3段階

この段階で肥厚口辺土器はつなぎ弧文土器のなかに吸収されてしまい、わずかに口辺部の肥厚した土器が見られる程度である。つなぎ弧文土器の口辺部の弧文の性格は失われ、帯状の楕円帯となる傾向がある。大形甕形土器の大部の渦巻き文は一本のものが、主体となり、二本のものはほとんど見当たらない。この段階にS－Ⅲ区SB－05に見られるように加曾利E3式土器の伴出が見られる。

曾利新式第4段階

この段階は曾利新式の特徴であった口辺部文様帯が消滅する直前の段階として理解される。口辺部に僅かに楕円文を巡らすものもあるが、口辺部の渦巻き文が体部文様帯の懸垂文のなかに組み込まれたものまで現れてくる。大形甕形土器の器形も小型化を増し、半隆帯ではなくむしろ低隆帯となり、一本で渦巻きを描くことが多い。この段階の設定に従来の編年では問題があり、多くの混乱をまねいている。

伴出する加曾利E式土器はE3式の範疇に属するもので、体部磨消縄文の間や縄文の上にワラビ手状の沈線を施すものが多い。

曾利新新式

この段階は口辺部文様帯は失われ、体部に綾杉文様帯やハの字文をほどこすものが主体となる。これが曾利式の終末の状況で、さらに段階別に分離しなければならないが、全体的には加曾利E4式に席巻されてしまうのである。こうした状況が須玉町郷蔵地[5]や境川村一の沢北[6]において住居址単位で明らかとなっている。この時期に柄鏡形の敷石住居址が多く見られる。この敷石住居と土器の関係をもって土器の型式を論ずる意見もあるが、本来的に論議の対象とはならないとおもわれる。

註

1）　曾利式土器については山形真理子が執筆する予定であったが、時間の関係上小野が説明することになった。この曾利式土器の型

式区分は山形の原案をもとに行い、文責は小野にある。いずれ近い将来山形が発表する予定である。

2）米田明訓　1978　「曾利式土器の編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』30

3）谷井　彪　1987　「塚原遺跡出土の曾利式土器について」『研究紀要』7

4）米田明訓　1987　前掲書

5）田代　孝　1987　『郷蔵地遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第31集

6）整理中

第10項　曾利式土器の縄文

結節縄文

結節縄文は言うまでもなく結んだ縄のことである。この結節縄文に関する山内清男氏[1]の説明はいたって簡単である。「縄の条のうち一方が他方を繞って結節を作る場合と、縄自身で結節を作る場合がある。結節は回転してＳ字状［22中］、又はＺ字状［22上］の連続紋を生じる［13－１、２］。散発的に種々の型式に見られ、特に特別の発達を示さないようにも見える。しかし特定の型式には屢々見られることがある。」このような説明ではなかなか理解しがたい部分が多い。

そこで結節縄文に二通りの作り方があることは山内氏が説明している通りである。このうち縄の条の一方が他方を繞って結節をつくる場合を『直前段自結』とし、縄それ自身で結節を作る場合を『同段自結』と区別してみてはどうだろうか。五領ヶ台式土器や曾利式土器のものはほとんど例外なく直前段自結の結節縄文である。

このうち直前段自結のものは、第201図－41に見られ、ＲＬの縄を用いている。また同段自結のものはやや特異な例だが、第210図－80の単軸絡条体の縄のなかに見られる。これはＬの縄文のＲ巻きであるが、その途中にＬの同段自結を加えている。一般に同段自結にすると結び目が大きくなり、回転すると２条の条が見える部分が出てくる。それゆえ、多用されなかったと思われる。

また曾利式土器の結節縄文はこの地域ではほとんど用いられず、時期決定のメルクマールとならない。結節縄文は八ヶ岳南麓の一つの地域的現象と思われる。そしてＳ字状やＺ字状に見える結節はそれぞれ結び方があるが、この点に関しては縄文土器全体を通してみて、区分することによって研究の進展は望めないのでＳ字とＺ字の区分のままで止どめておきたいと思う。

異段の縄

縄文の施された土器は厳密な意味で曽利式土器として良いものかどうか疑問がない訳でもないが、この検討は別稿に譲るとして、この地域に見られる縄文の施された土器を概観してみよう。

一般に、曾利式土器の縄文はＲＬの単節縄文[2]が多いと言われている。これにたいして加曾利Ｅ式土器の中には複節のものが見られる事があるが、曾利式土器では複節のものはほとんど見当たらない。ところが、異段の縄文がしばしば見られる。居沢尾根一号立竪穴で[3]　　姥神16号住[4]

$$R\left\{\begin{array}{l}L\left\{\begin{array}{l}R\\L\end{array}\right.\\L\end{array}\right.\qquad L\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\end{array}\right.$$

がある。居沢尾根例は異段の縄文で前前段が反の撚りとなっている。姥神例は直前段が反の撚りで、釈迦堂のＳ－Ⅲ区ＳＢ－43では全く反対のものが出ている。

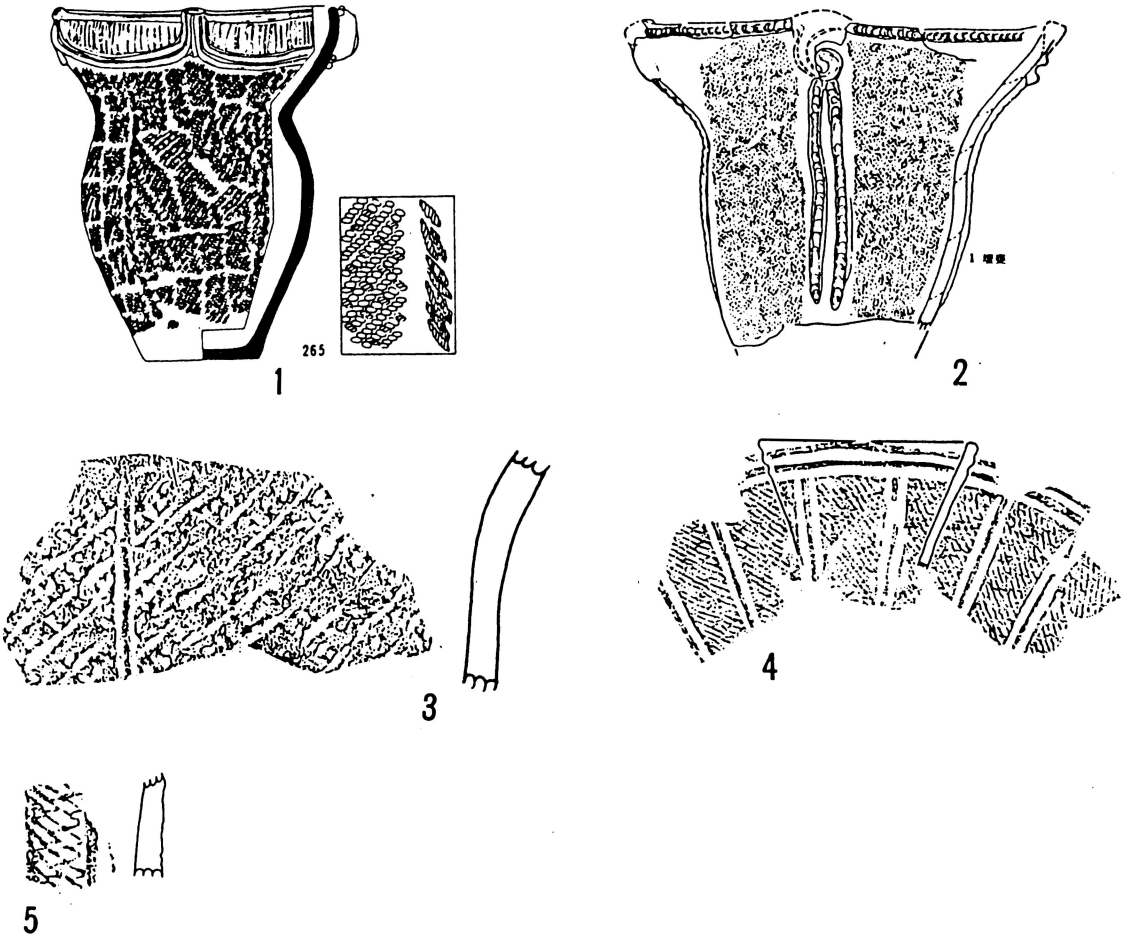
この他にはＳ－Ⅲ区ＳＢ－37（第135図－６）で『釈迦堂Ⅰ』のＳ－Ⅱ区（第47図－９）のところで特異な縄文としたものが一個体分出土しており、それは（皮）紐状の堅いものを撚りＬとしたものである。これは繊維の方向が不明だが、前期にやはり似たようなものがあるものは、粗い繊維の方向が判るものもある。

このように曾利式土器の縄文もまた加曾利Ｅ式土器とは違った様相を示しており、今後とも充分注意を払う必要がある。

註

1）山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』

2）米田明訓　1978　前掲書



1．居沢尾根１号竪穴　　2．姥神16号住
3．釈迦堂Ｓ―Ⅲ区ＳＢ―43　　4．釈迦堂Ｓ―Ⅲ区ＳＢ―37
5．釈迦堂Ｓ－Ⅱ区グリッド（1．2．4．は１：６、３は１：２、５は１：３）

挿図７　曽利式土器の縄文

3）青沼博之ほか　1981　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』－原村その４－
4）櫛原功一　1987　『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告　第５集

第２節　集　　落

第１項　各期の集落

三口神平地区の縄文集落は半月形をなしているが、これはあくまで曾利新式期の状況で他の時期ではまた別の集落形態をなす。かってこの釈迦堂の縄文集落について発表[1)]する機会に恵まれたことがあったが、整理事業の進展に伴い前回のものにいくつかの修正を加えなければならないこととなってしまったことを、あらかじめ断っておきたいと思う。

土器の概観で触れた土器型式にそって各時期の住居群の在り方を述べてみたいと思う。なお釈迦堂の場合特に曾利式期の住居にあっては、炉址のみをもって住居としたものが多く、時期決定に苦慮したものが多いのも事実である。

釈迦堂Ｚ２式期

これは関東地方でいう下吉井式期にあたる。住居址がＳ－Ⅲ区ＳＢ－47、52、102、107、108、110、112、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－54、57、59の10軒検出されている。このなかで、出土遺物も豊富なのはＳＢ－47である。これらの土器群はかならずしも、同時期ではなくおおむね二時期に分離されることは先にものべた通りである。

これらの集落の特徴はほぼ等高線にそってブロック状にまとまっていることである。なおここから約250ｍ離れた塚越北Ａ地区（Ｓ－Ⅰ区）には釈迦堂Ｚ１式とした住居が３軒以上は存在する。このＺ１式期をもってＳ－Ⅰ区の集落は終わり、この三口神平地区に移動してきたものと思われる。

五領ヶ台式期

この時期の集落として、集落景観がほぼ推定できるものはほとんど無いのではないかと思われる。筆者の知る限り大泉村天神の該期５軒というのが良い例である。これとて住居址出土の土器の細かな分析が発表前なので確定的なものではない。釈迦堂では塚越北Ａ地区で五領ヶ台Ⅱａ式のＳＢ－23と塚越北Ｂ地区（Ｓ－Ⅱ区）で五領ヶ台Ⅰ式期に相当するいわゆる踊場系土器の第１段階のものはＳＢ－04、第２段階のものはＳＢ－03、06、第３段階のものはＳＢ－07という状況である。この第３段階はあるいは五領ヶ台Ⅱａ式期と併行するものかもしれない。つぎに三口神平地区ではＳ－Ⅳ区ＳＢ－41、47、48、49、51の住居がある。このうち47、48、49、51はほぼ同一床面の近接した炉址なので、あるいは五領ヶ台式期特有の住居形態である一住居に複数の炉址という場合も考えられる。むしろこの場合はそのほうが適切かとも思われる。そうした場合であってみても、この地区では五領ヶ台Ⅱａ式期２軒ということになる。こうして見てくると五領ヶ台式期の集落というのは１～２軒が点在していたことになってしまう。もちろん調査区外に住居のある可能性は充分に残されているのは言うまでもない。

狢沢式期

この時期は山梨県下にはいままで住居の発見例はなく、その様相は断片な資料に頼らざるを得なかった。釈迦堂ではＳ－Ⅲ区でＳＢ－20、Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－06、73があるのみである。しかもこれらは、狢沢式第３段階に位置するものと思われる。これは五領ヶ台式期からの集落形態を受け継いだものであろうか。しかしながら、他の神谷原や木曾中学校では中期的な集落形態をなしているので、釈迦堂の場合も調査区外にその可能性を残している。

新道式期

新道式土器は釈迦堂の住居址別の観察によれば、おおよそ３段階に区分される。第１段階に位置するものはＳ－Ⅳ区ＳＢ－53および81である。81は同時期か新しい傾向にある。次の第２段階は桂野平石例を指標としたが、釈迦堂では資料に恵まれていない。80がおそらくこの時期であろうが、やや新しい傾向を示す。第３段階はＳ－Ⅲ区ＳＢ－95の資料を指標とした。新道式期最終末の時期でＳＢ－95のように純粋に新道式土器のみが出土する例は稀である。しかもＳＢ－84の藤内式期とは重複関係をもつものである。この集落景観もまた点在的である。第３段階に至ってＳ－Ⅲ区ＳＢ－95、111、78、18、Ｓ－Ⅳ区ないし69をくわえれば、散在的ではあるが、おおきな環状をなす。こ

こにはじめて釈迦堂に環状集落が誕生したのである。

藤内式期

藤内式の集落は三口神平地区のＳ－Ⅲ区ＳＢ－49、84、87、100、106Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－32、52がある。また、塚越北Ａ地区でＳＢ－47、51、31、01、10、40、29、04があり、野呂原地区で４、５、13、17、20号住がある。この時期は釈迦堂遺跡群全体に住居が展開した時期なのである。言うまでもなく藤内式土器は２段階に分離されるが、こうした広域間における各住居がどのような関係にあったかまた大きな問題である。

塚越北Ａ地区では『釈迦堂Ⅰ』において、ＳＢ－04、10、40、51が第１段階のもので、三口神平地区に至ればＳＢ－84、100、あるいは87で、Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－52がこれに当たろう。野呂原地区では４、５、17がこの時期であろう。もちろんこれらの中にも多少の時間差及び系統差があるように思われる。たとえば、Ｓ－Ⅰ区のＳＢ－10などは縦区画文土器が主体を占め、これに対してＳ－Ⅳ区ＳＢ－52や野呂原地区には新道式的なキャタピラ文＋波状沈線を文様要素としてもったものが多い。

つぎの第２段階のものは塚越北Ａ地区でＳＢ－01、29、31、47がある。三口神平地区でＳ－Ⅲ区ＳＢ－49、106は不明、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－32がこれにあたる。野呂原地区の13、20号住は時期決定が困難である。17と20は近接しているので一般的には別時期のものであろう。そうして見て来ると藤内式期の集落もまた３～４軒の住居が各地区に環状と言えないまでも環状様に存在していたことが知られる。

井戸尻式期

井戸尻式土器の分類の困難さについては、先にも触れた通りである。三口神平地区で該期の住居はＳ－Ⅲ区ＳＢ－36、48、33、26、35、38、09、29－2、65があり、Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－18、40、34、60、84野呂原地区では７、10、15、19、20号住がある。三口神平地区では曾利式の住居によって攪乱はされているが割合と多い数である。これらのうち、時期決定をできる住居はごく少ない。井戸尻Ⅲ式に相当するものから抽出するとＳ－Ⅲ区ＳＢ－36であろう。この資料は一の沢西４号住と近い。野呂原地区の10号住の資料は最終末のもので、曾利古１式のものをいくつか含んでいる。こうした状況は井戸尻Ⅲ式の標識資料とされた井戸尻３号住の土器群と同様である。ＳＢ－35の資料は中に関東系の円筒形土器を含んでいる。この釈迦堂では井戸尻Ⅰ式土器の典型とされた中帯文土器はほとんどないようである。その代わり、Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－35（第117図－40、41）のような土器が存在するようである。これらは関東と中部をつなぐ土器の可能性がある。

さてこの井戸尻式期の住居群をあえて２時期に分離すれば、つぎのようになる。井戸尻Ⅰ式期は三口神平地区Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－48、33、35、Ｓ－Ⅳ区40、83がこれに相当しよう。井戸尻Ⅲ式期はＳ－Ⅲ区ＳＢ－36、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－34がこれにあたる。また時期決定のできないものがＳ－Ⅲ区ＳＢ－26、09、29－2、65、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－60である。

井戸尻式については、一の沢西や上野原の調査により、その内容が知られるようになってきたが、Ⅰ式については山梨県下の資料の増加をまって検討したいと思う。

曾利式期

曾利式期の住居は123軒を上回る数である。しかも重複が著しく、その時期判別には苦慮するところが多かった。そこを敢えて判別したものも含めて、曾利式期の集落の変遷を概観してみたい。

曾利古式第１段階

Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－64、68・69、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－64、70、75の５軒がある。これらはいずれも埋甕を根拠に時期決定をしたものである。このほかに炉形態や住居形態から、この時期のものと思われるものもいくつかある。

曾利古式第２段階

この時期になるとようやく住居が増加してくる。Ｓ－Ⅲ区でＳＢ－70、39、21、50、29－3、Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－11、10、17、21、50、33、65の12軒がある。また、Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－94、99などがこれらと関係あるかも知れない。

曾利古式第３段階

この時期はＳ－Ⅲ区ＳＢ－96、30、24、Ｓ－Ⅳ区でＳＢ－04、07、63の６軒である。とくにＳ－Ⅲ区ＳＢ－96は炉体土器に曾利古式第１段階のものを使用しており、型式分類の困難性を示している。

曾利新式第1段階

この時期の住居はS－Ⅲ区SB－105、44、80、66、S－Ⅳ区SB－20、56、55の6軒である。この時期は曾利新式期として安定した時期である。

曾利新式第2段落

この時期の住居はS－Ⅲ区でSB－57、37、43、41、40、42がこれに当たり、S－Ⅳ区でSB－83上層遺物がこれに当たり、これも加えて6軒という数である。

曾利新式第3段落

この時期の住居はS－Ⅳ区SB－109、113、05、60、S－Ⅳ区でSB－44がこれにあたり、5軒となる。

曾利新式第4段階

この時期の住居はS－Ⅲ区SB－04、46、75、85、93、59、S－Ⅳ区SB－01，78、N－Ⅳ区SB－01がこれに当たり9軒となる。SB－46は、埋甕からこの時期とした。

曾利新新式期

この時期の住居はS－Ⅲ区SB－17、22、55がある。これに柄鏡形のSB－85などが加わり、3軒以上の住居が存在したのであろう。

以上、曾利式の土器編年にそって集落の変遷を追って見たが、全般を通してみれば、集落の中心に広場が存在したのであるが、個々の時期に於ける住居は広場という意識が存在したかどうか疑われる。ただ、S－Ⅲ区SB－93のように住居の出入口部が広場の方向を向いており、なんらかの意識は存在したが、広場を中心として住居群が巡るという縄文集落のイメージは薄れるようである。ただこの時期決定した住居の他に、決定し得なかった住居もあり、今後の課題とするところである。

また、曾利式期の集落も他の時期に比較して、格段と住居数が多いとは思われないので、土器型式の細別をさらに検討しなければならないことは言うまでもない。

註

1）日本考古学協会・日本考古学協会山梨大会実行委員会編　1984「シンポジウム縄文時代集落の変遷」『日本考古学協会　昭和59年度大会資料・発表要旨』

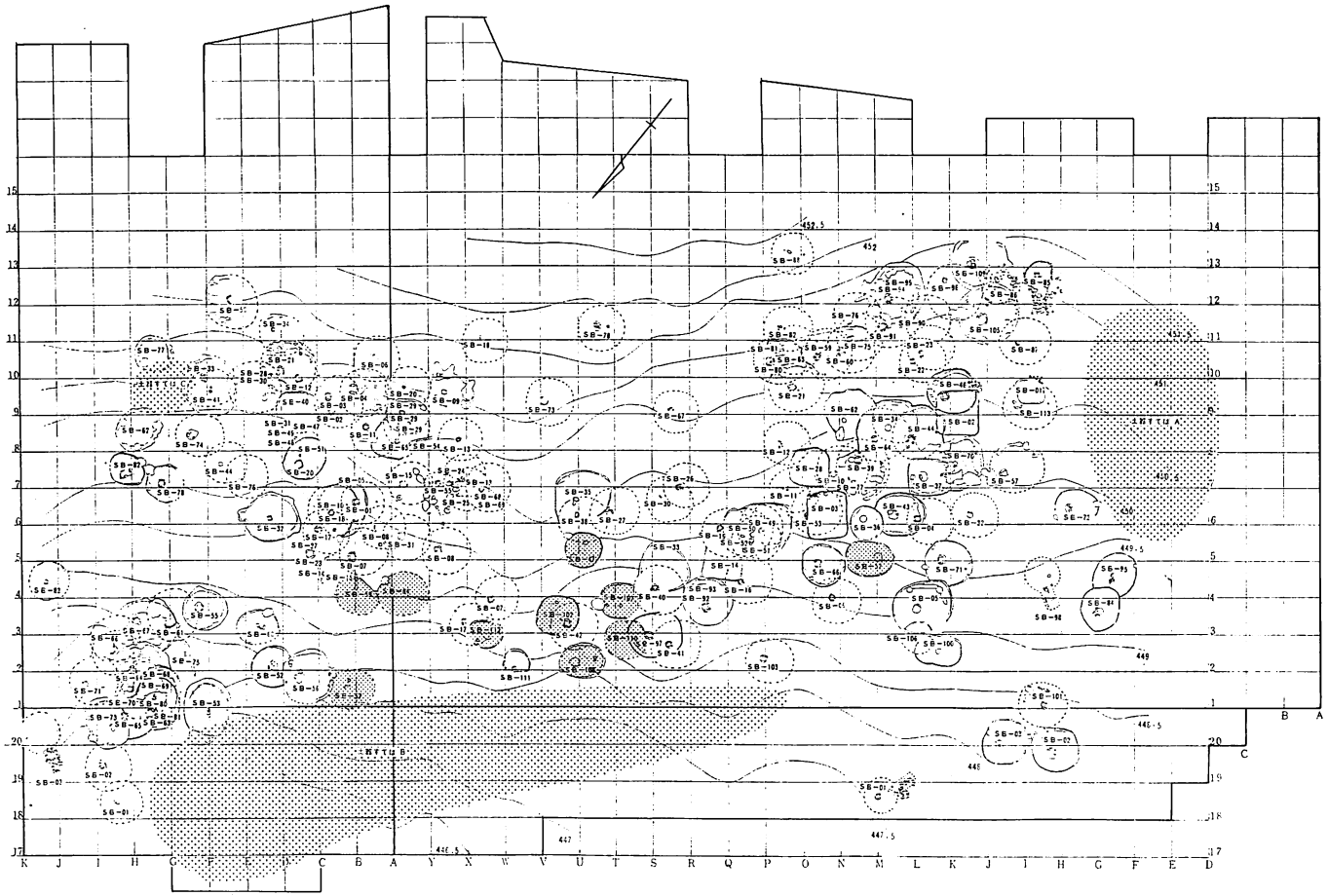
第2項　住居址について

釈迦堂ではおおくの住居址を検出している。各時期ごとにそれぞれ特徴が認められる。例えばS－Ⅳ区SB－32のような6柱穴で、五角形の炉をもつ藤内式期の代表的な住居もある。特に曾利式期に限ってみれば、ほぼ一定の住居プランを示しているように思える。それはS－Ⅲ区SB－66に見られるような5本柱穴の住居である。これは基本的に円形プランに4本柱穴があれば十分であるのに、炉址の北に1柱穴がある。該期の炉址は住居の北側に偏在し、炉址の北側の空間はすでに居住空間ではない部分に1柱穴が設置されるのである。この柱穴の意味は本来的な上屋構造を支えるための柱の穴なのか、問題の残るところである。

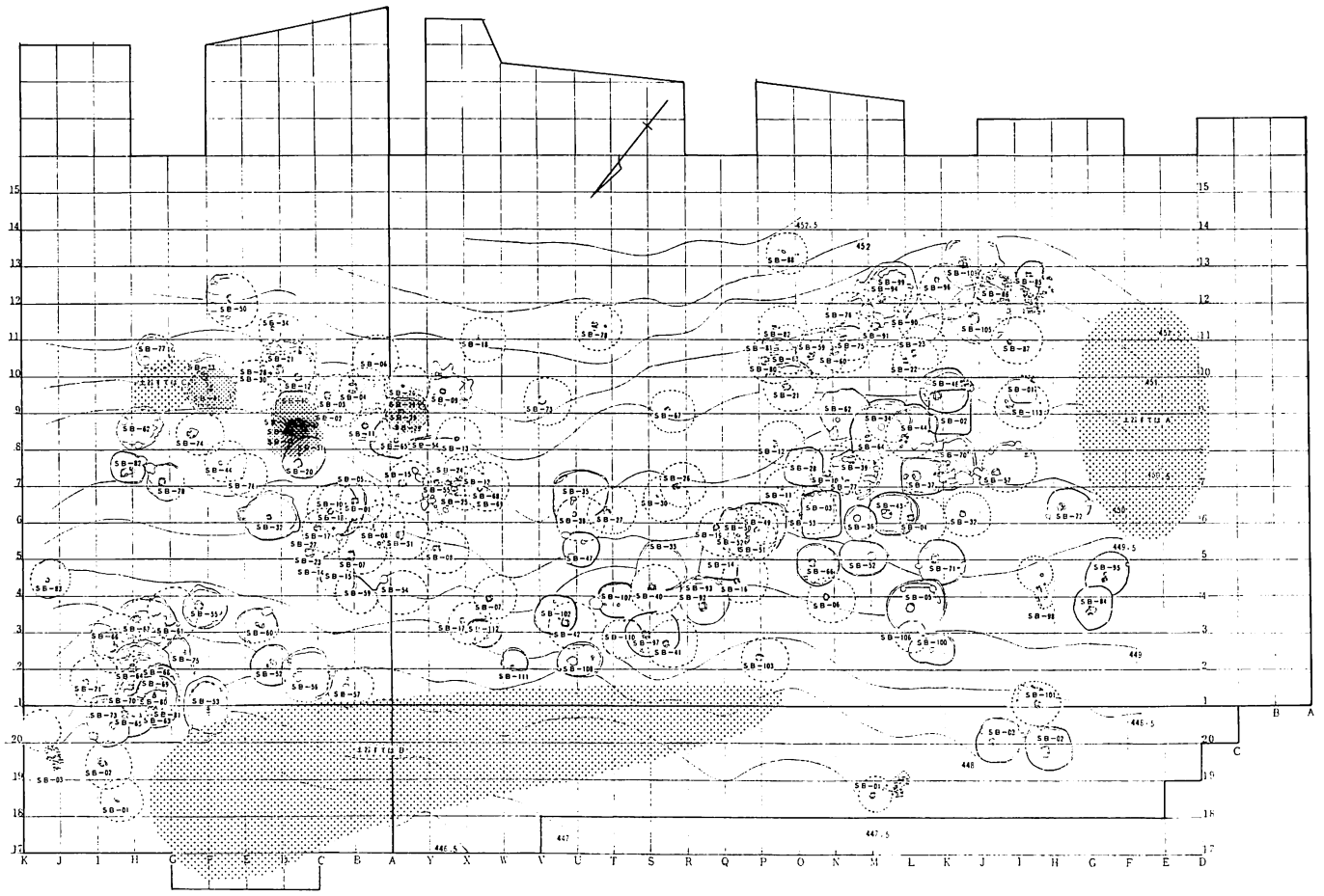
こうした観点で釈迦堂の住居址を見て行くと、いくつかの住居に5本目の柱穴のないことに気づかされる。たとえばS－Ⅱ区SB－05および、S－Ⅳ区SB－55，56，33がそうであり、SB－78もその可能性が大である。不思議なことにS－Ⅲ区ではこうした事例はみあたらない。ただSB－43および39はあるいはないかもしれないが、いずれも大事な部分に重複関係があり、明確ではない。

こうした不安定な資料は除くとして、地域的な分布の偏りと言ったものが見いだされる。時期的には曾利新式期の時期に限られるようである。

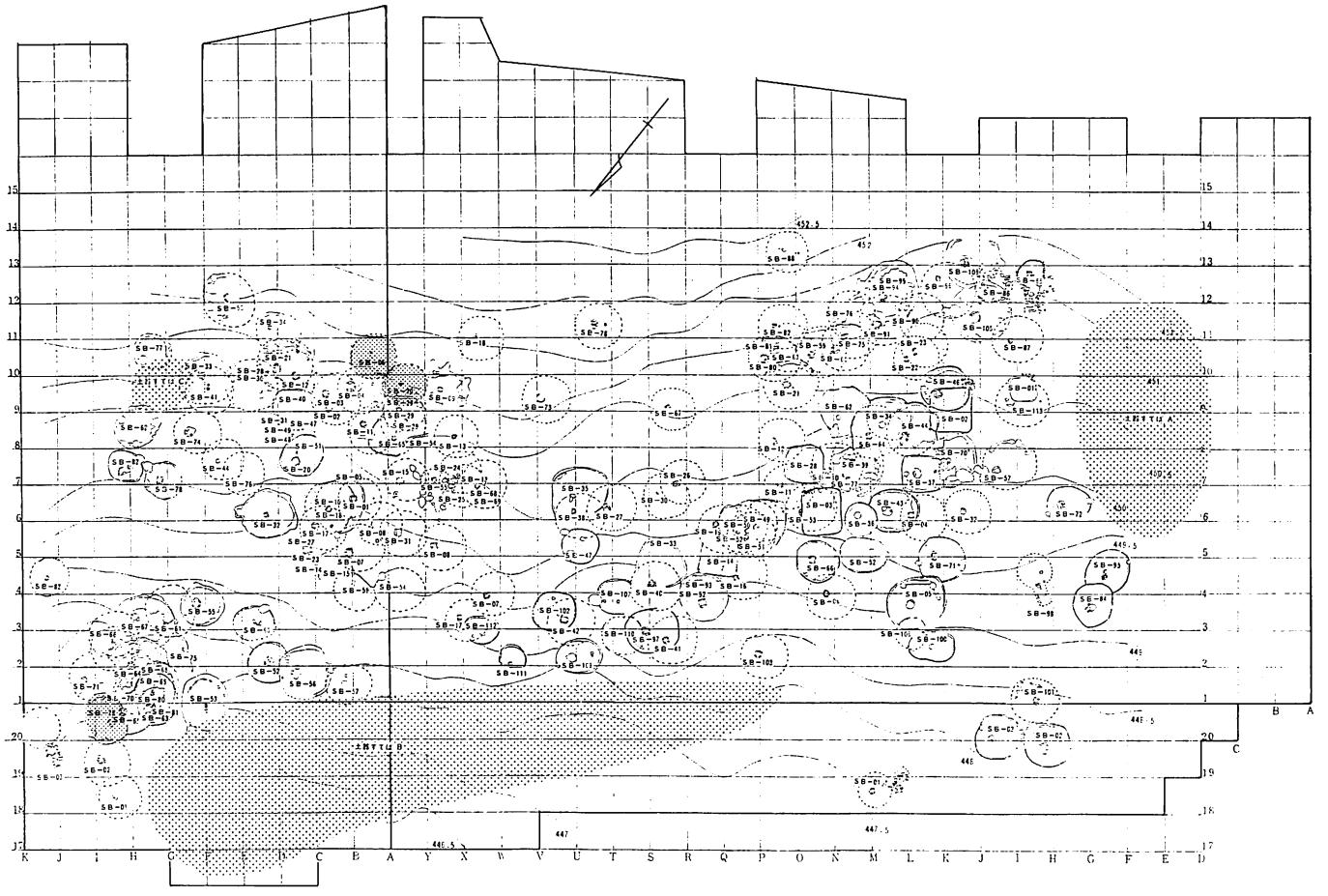
曾利式期の住居が三口神平地区において対照的な状況を呈していることについては、土器説明の部分で述べたが、住居プランについても同様なことが言えそうである。たとえばS－Ⅲ区SB－72とS－Ⅳ区SB－78の事例、S－Ⅲ区SB－71とS－Ⅳ区SB－55の関係があげられる。曾利古式期ではS－Ⅲ区SB－96とSB－11がともに石囲



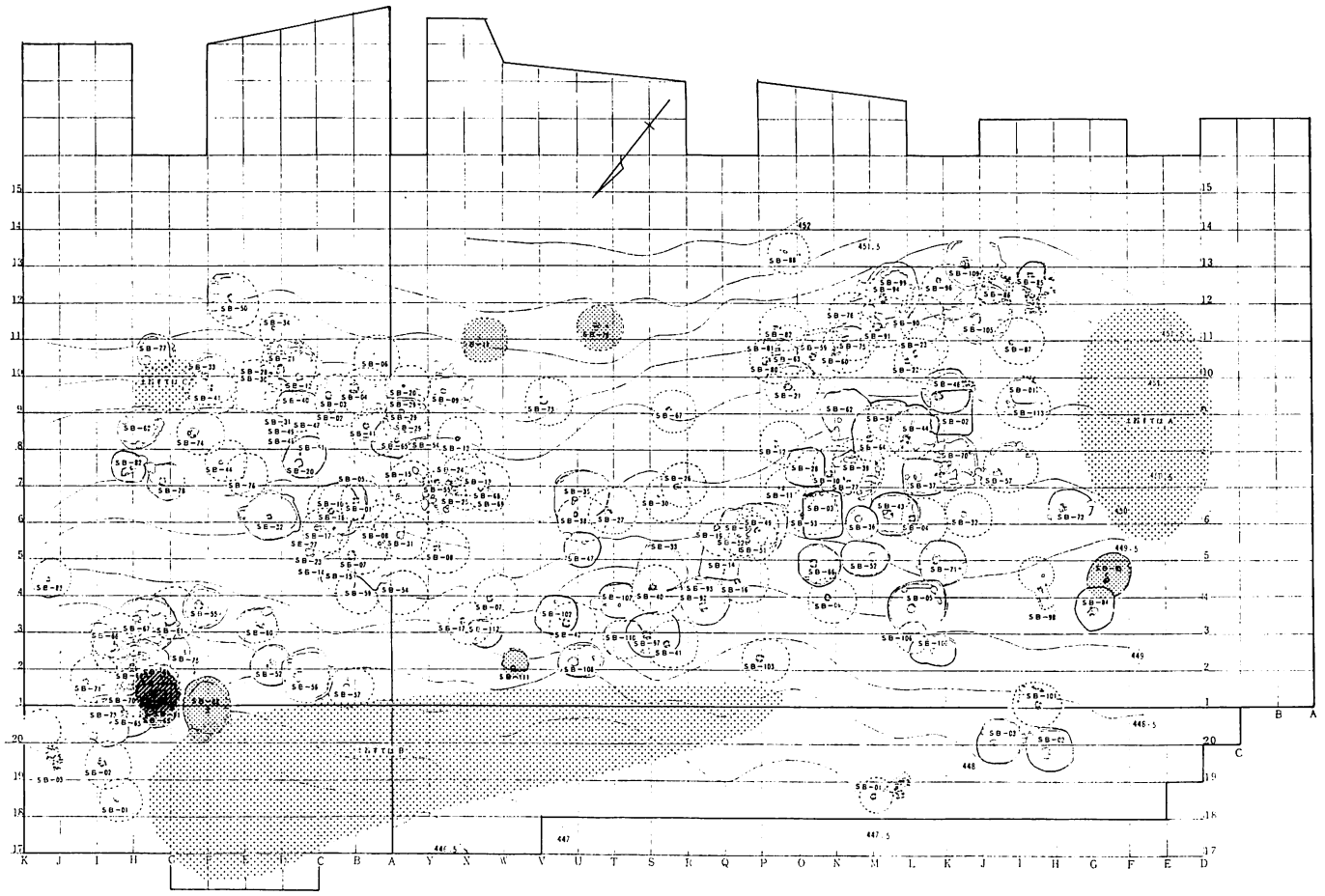
挿図８　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区釈迦堂Ｚ２式期の集落



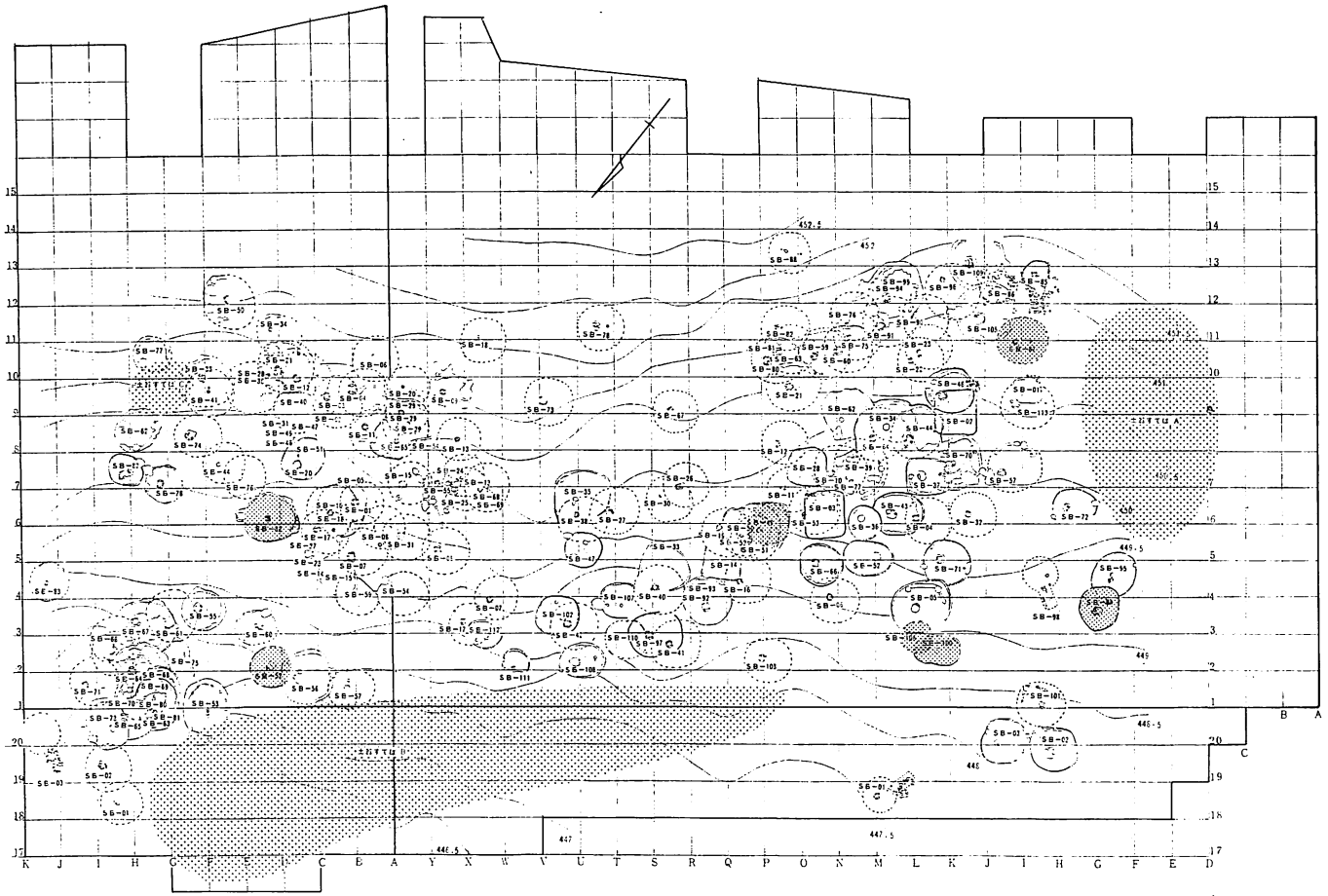
挿図９　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区五領台式期の集落



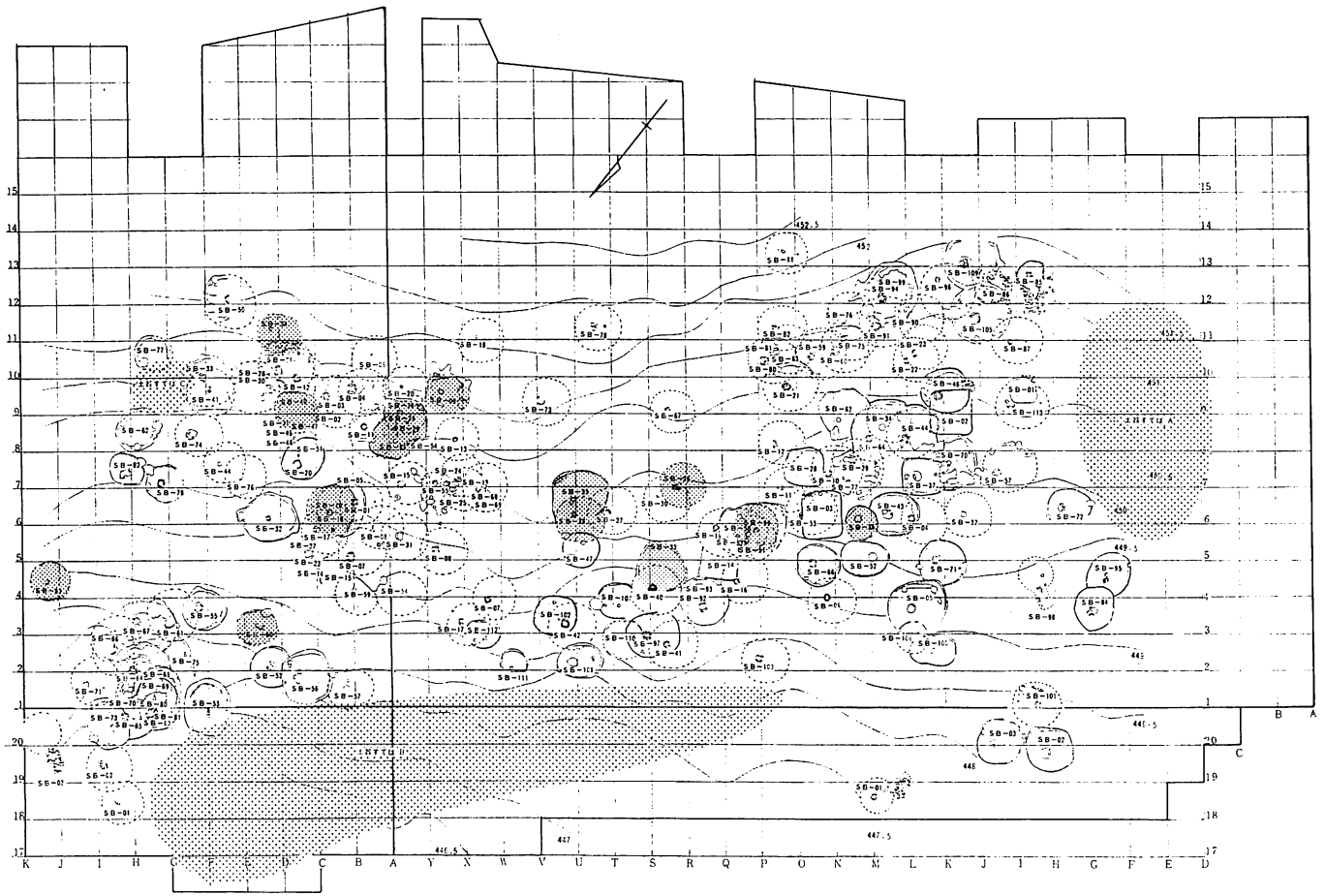
挿図10　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区猿沢式期の集落



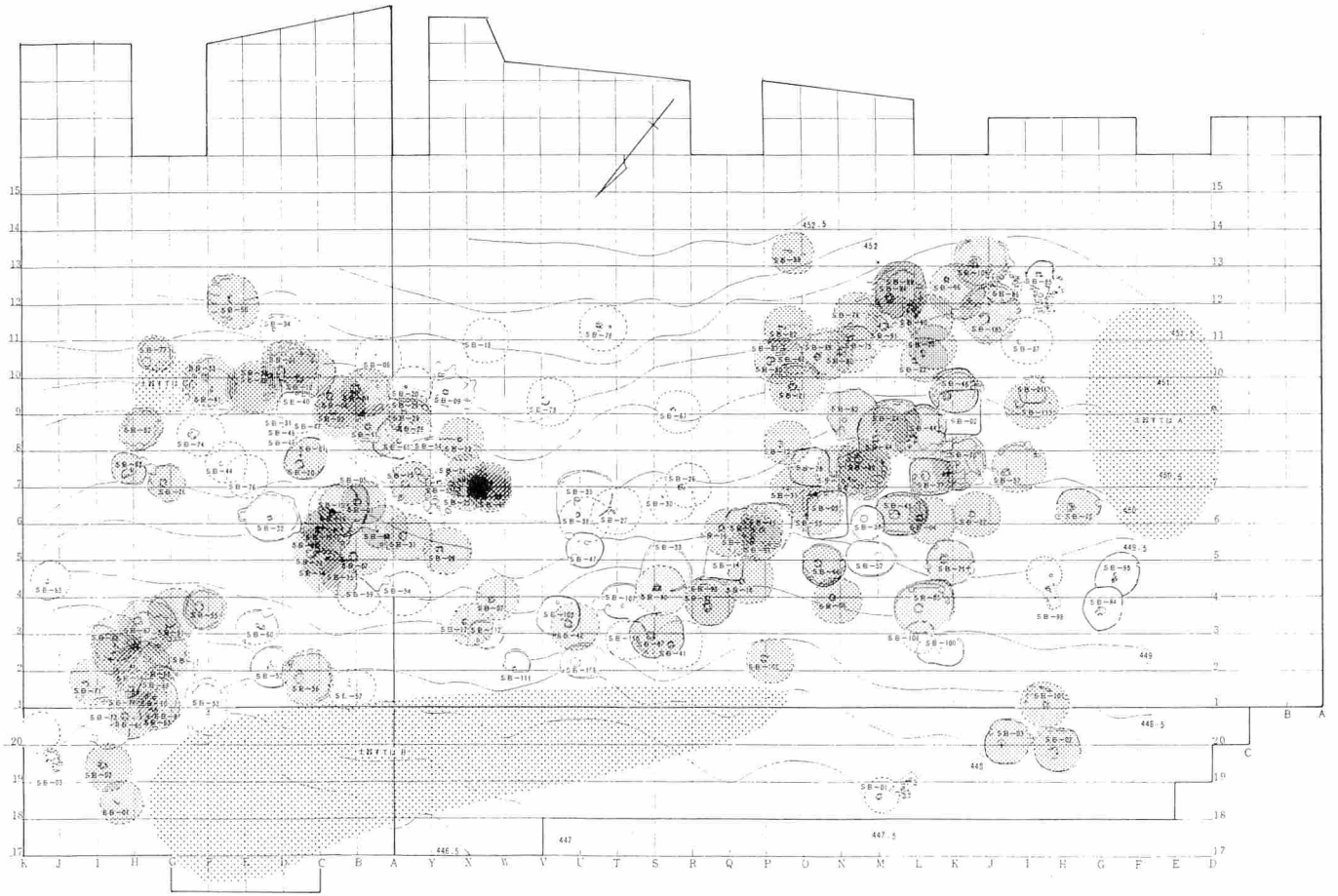
挿図11　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区新道式期の集落



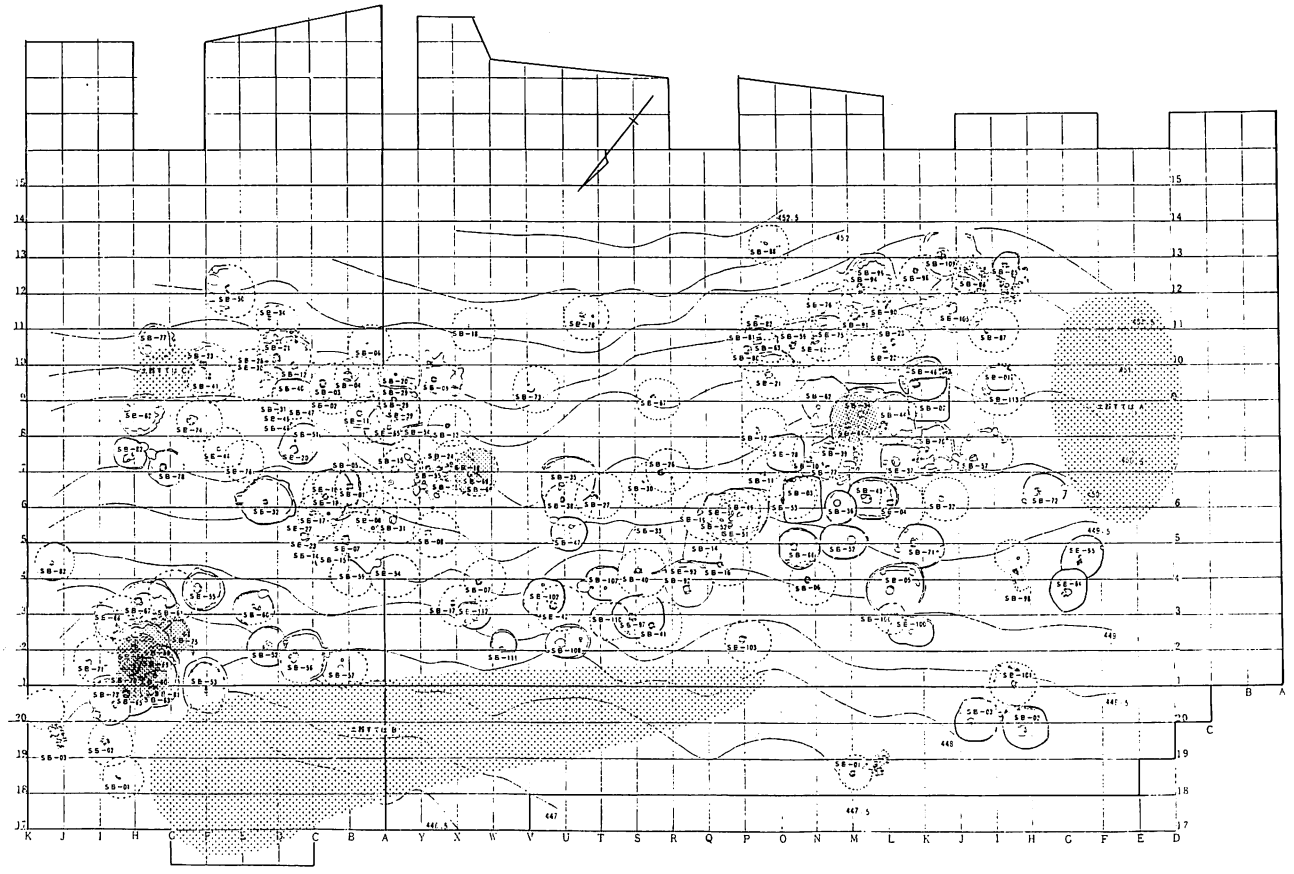
挿図12　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区藤内式期の集落



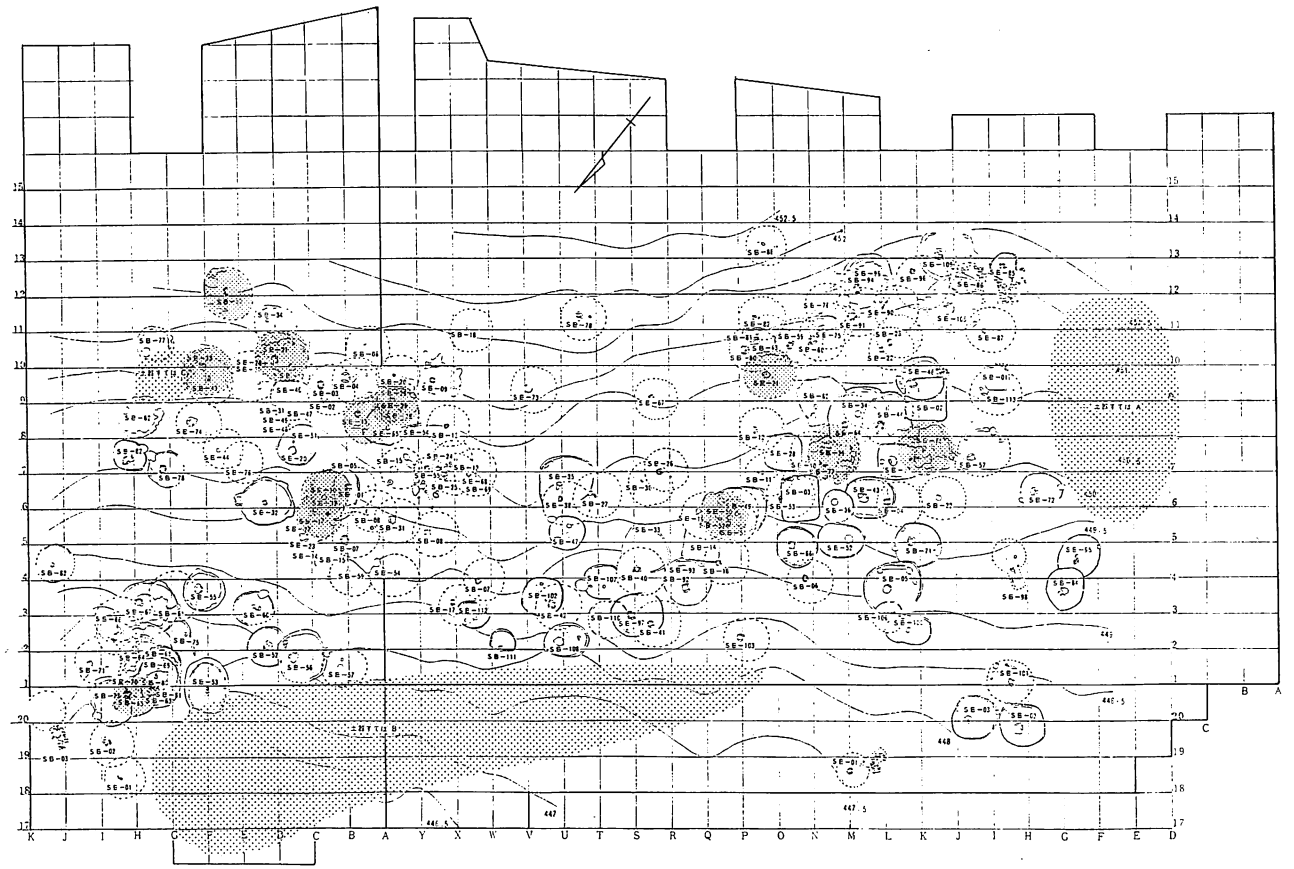
挿図13　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区井戸尻式期の集落



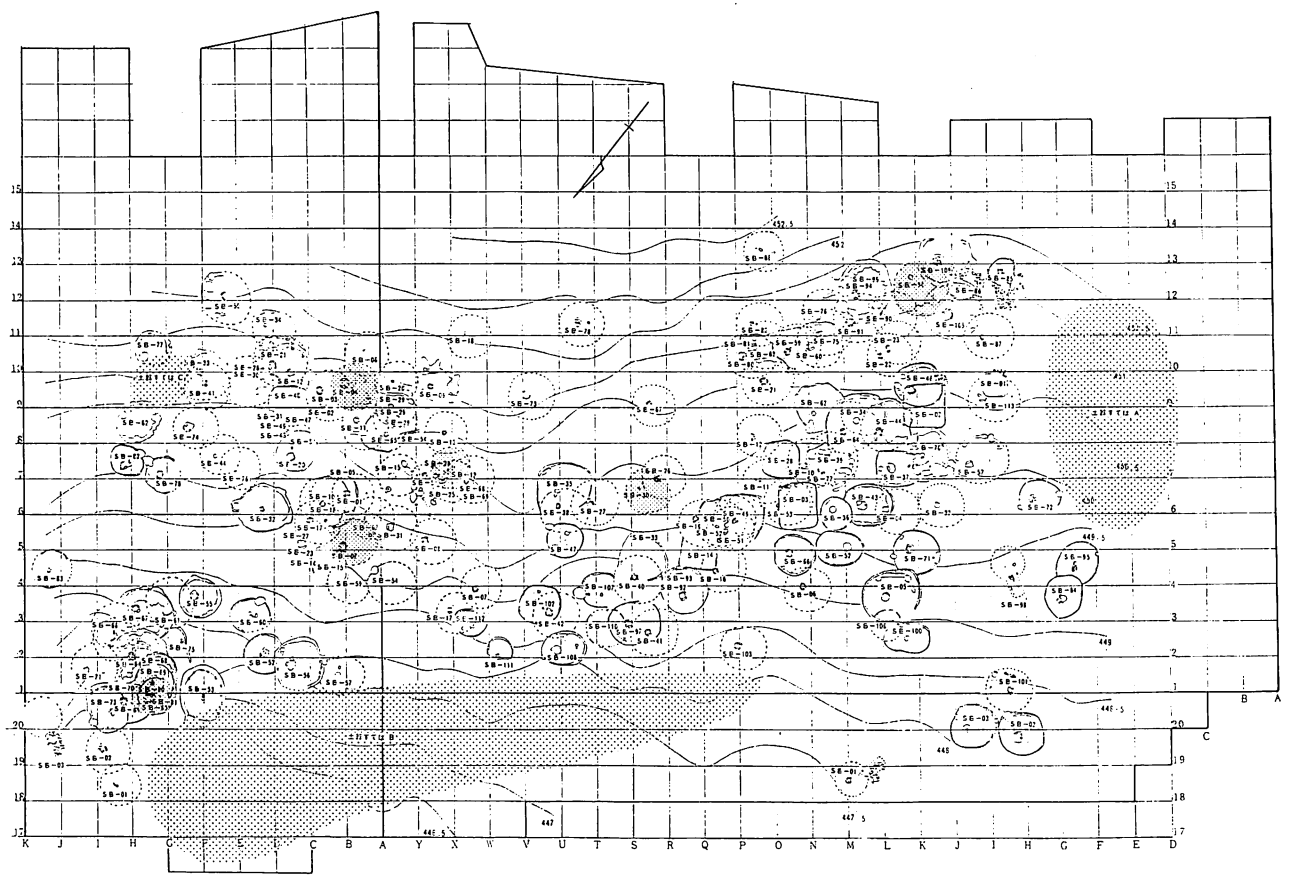
挿図14　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利式期の集落



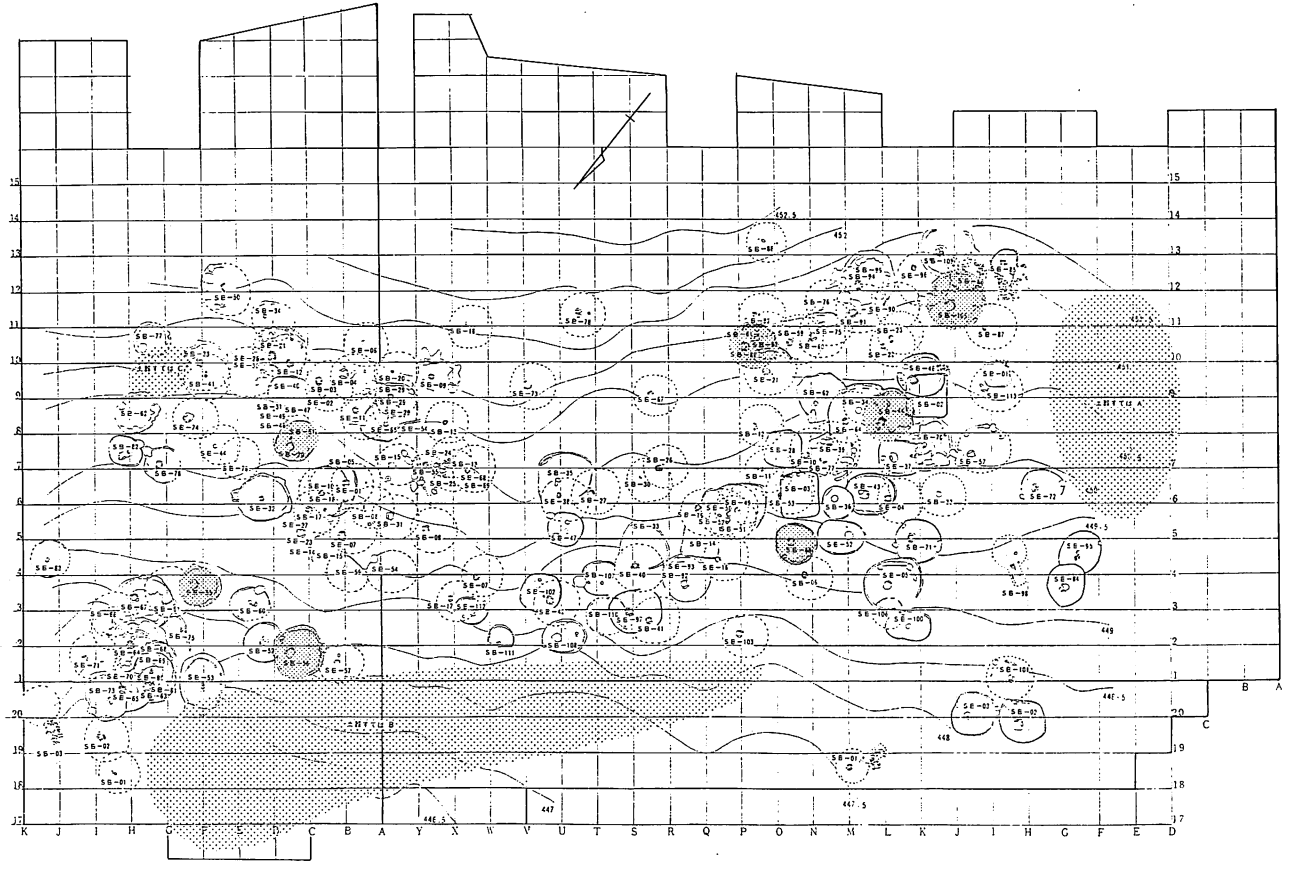
挿図15　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利古式第1段階の集落



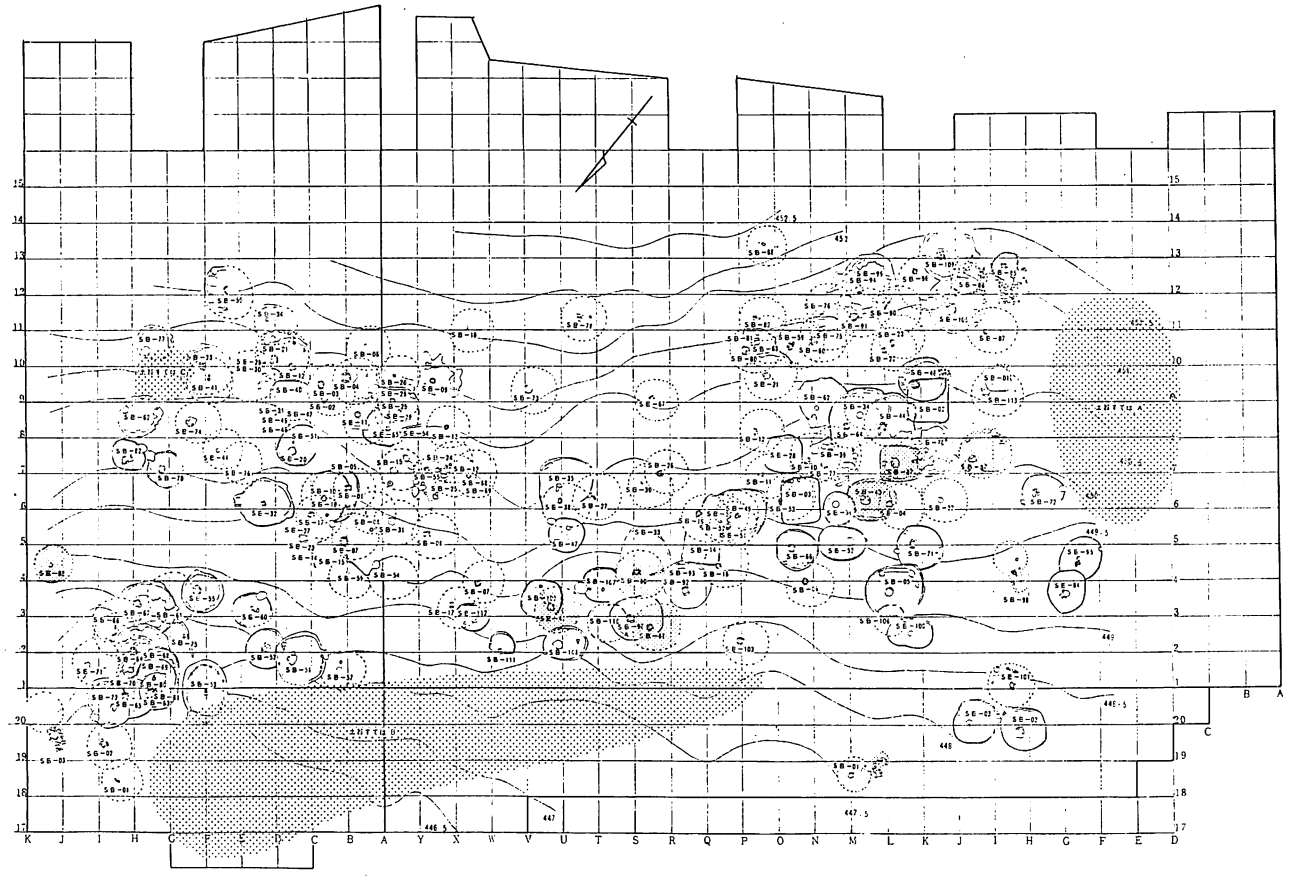
挿図16　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区・N—Ⅳ区曽利古式第2段階の集落



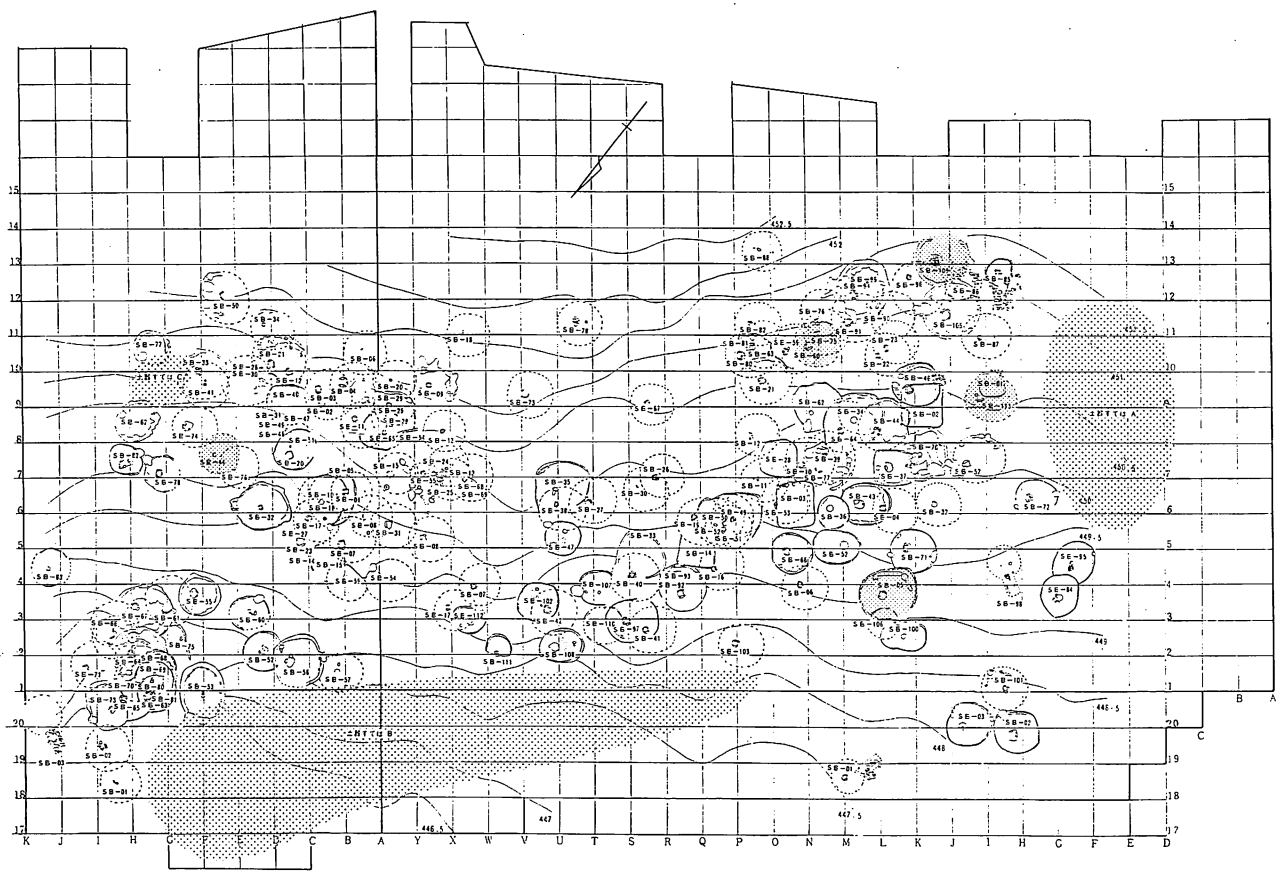
挿図17　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利古式第3段階の集落



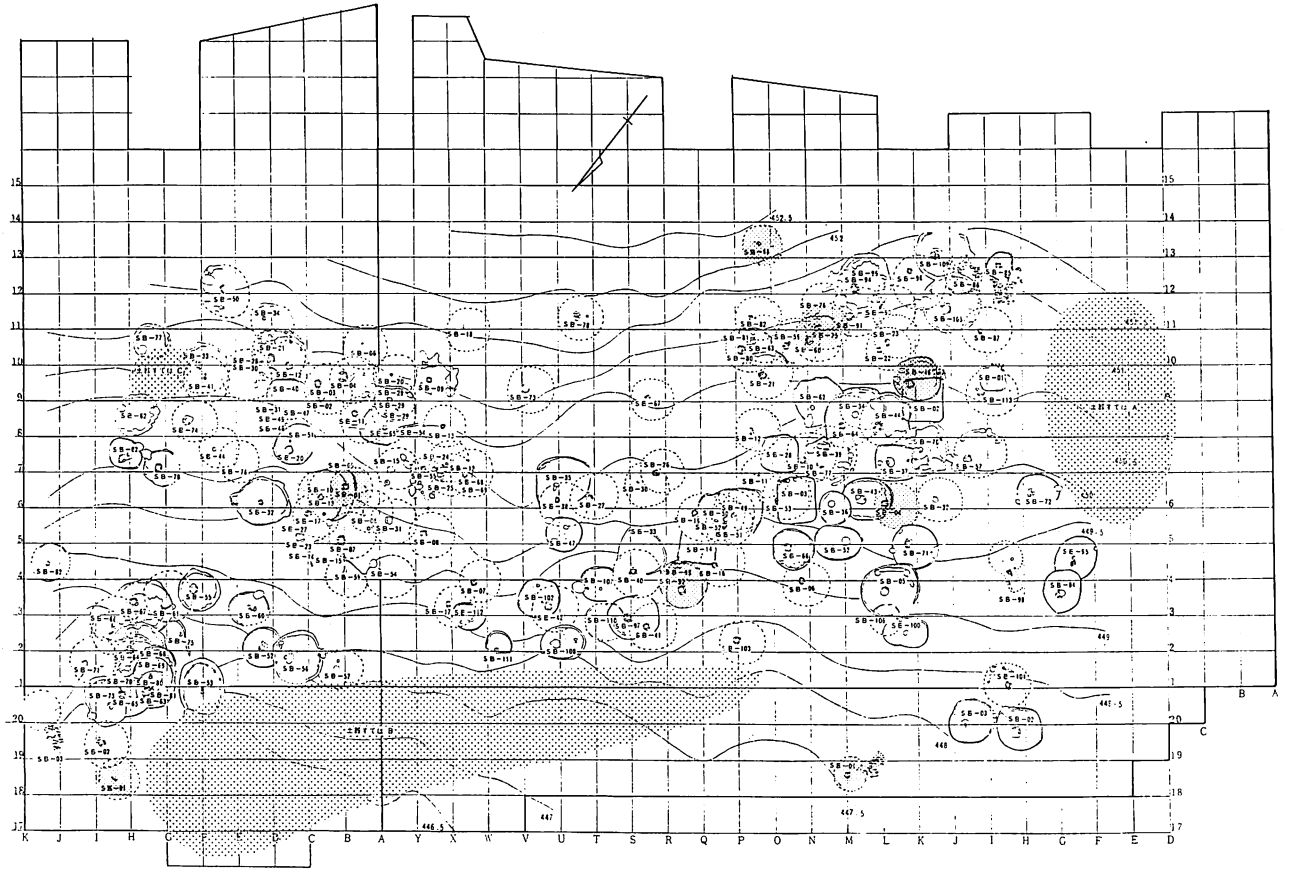
挿図18　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利新式第1段階の集落



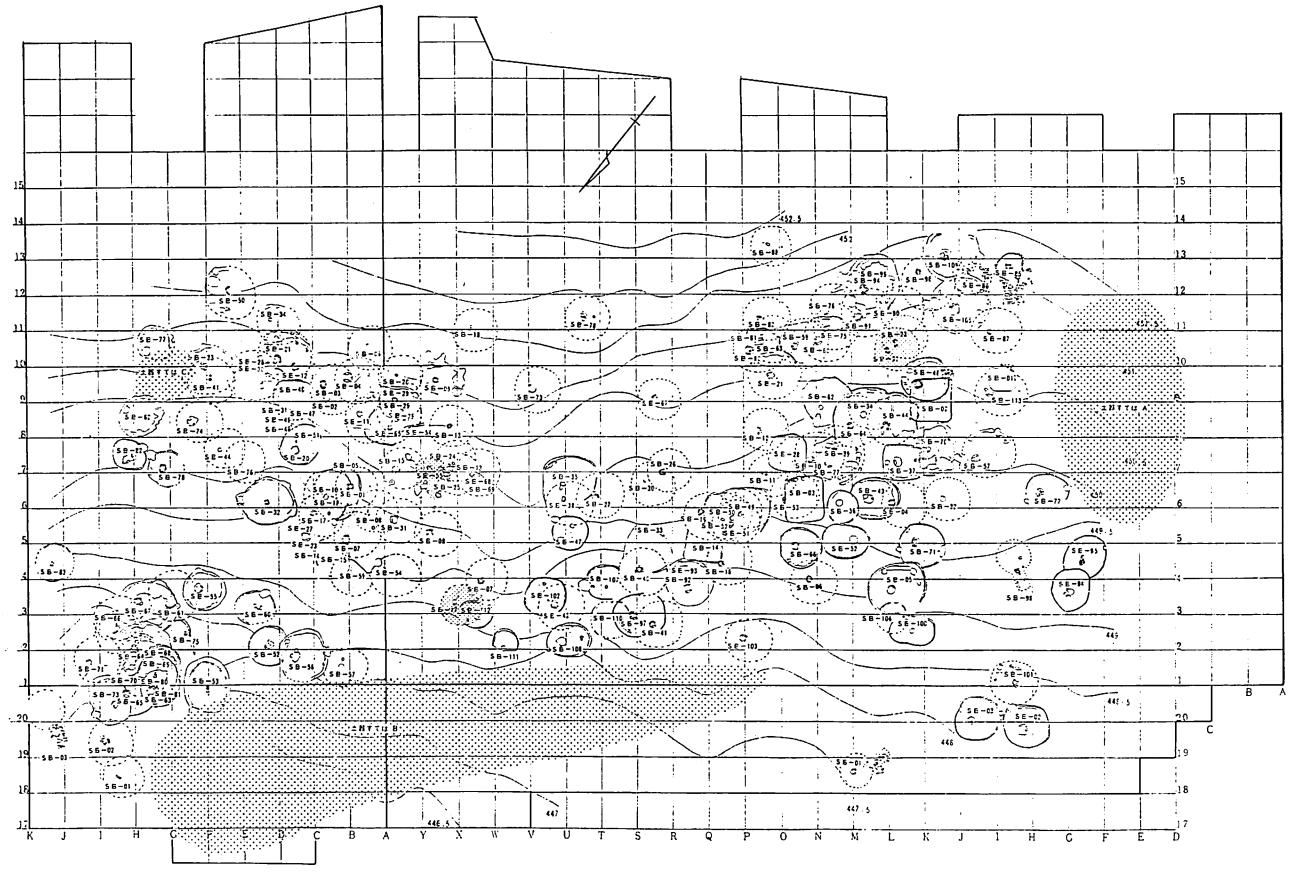
挿図19　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利新式第2段階の集落



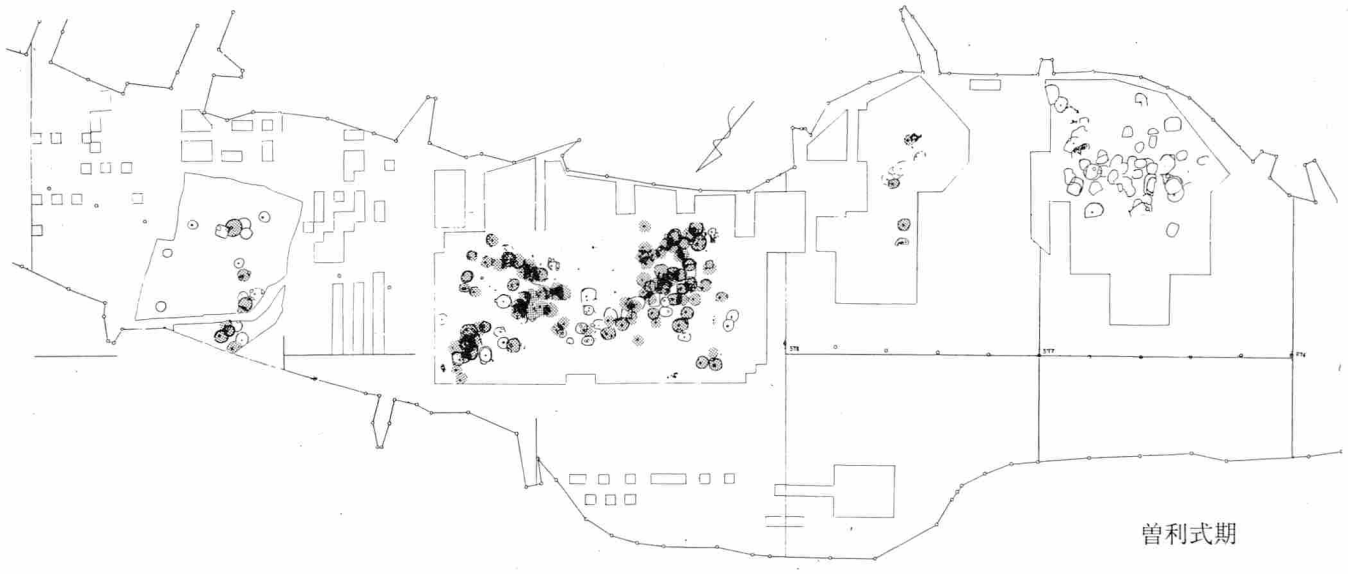
挿図20　釈迦堂Ｓ—Ⅲ区　Ｓ—Ⅳ区　Ｎ—Ⅲ区　Ｎ—Ⅳ区曽利新式第３段階の集落



挿図21　釈迦堂Ｓ―Ⅲ区　Ｓ―Ⅳ区　Ｎ―Ⅲ区　Ｎ―Ⅳ区曽利新式第４段階の集落



挿図22　釈迦堂S—Ⅲ区　S—Ⅳ区　N—Ⅲ区　N—Ⅳ区曽利新新式期の集落



挿図23　釈迦堂全区集落図

埋甕炉である。他に土鈴について見ても比較的対照的な状況を呈しているように思われる。

こうした対照的な状況が住居関係のいかなる関係を示しているのかは、集落論とあいまって考究されなければならないが、民族学で言うところの双分制[1)]の直接的な導入には、先に示した曾利式土器の細別と時期別集落からは、多くの時間を必要とする。

註

1）長崎元廣　1977　「中部地方の縄文時代集落」『考古学研究』23－4　ここで長崎氏は中期後半の集落に双分制があったことをのべている。筆者は土器型式論を基準とした同時性の住居群――集落論を何らかの方法で止揚しなければ、双分制論は論議されないものと考える。

第３項　住居の埋没について

住居の埋没過程については、吹上パターン[1)]が特に著名である。つまり、

１、住居址の廃絶。

２、廃絶された住居址の凹地に完形土器を遺棄する。

３、廃絶された住居址の凹地に貝殻を遺棄する。

４、３つの所業は土器の一型式内[2)]に於いて各々時間的に独立し、１、２、３の順序でなされる。

５、吹上パターンは縄文時代にかなり普遍性がある（前期の米島貝塚、中期の吹上貝塚）。

６、吹上パターンは単なる遺物、住居址の出土状態、埋没状態にとどまらず、縄文時代に於ける人間集団が果たした所業の一つの（型）パターンにまで止揚して認識されるべきものである。

７、吹上パターンを時間的にも追跡することによって、縄文時代のより深い理解へと進むことが可能であろう。

と説明されている。ただし石器の項では「土器が吹上パターンを示すのと対照的で、石器は吹上パターンに該当しないことを意味する。」[3)]と述べ、この吹上パターンが土器の遺棄と貝殻の遺棄を中心に設定されたことを明らかにしている。

さて釈迦堂の吹上パターンに類似する住居をあげてみると、藤内式期の住居に多く見られる傾向がある。Ｓ－Ｉ区ＳＢ－10、Ｓ－Ⅲ区ＳＢ－84、Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－32などに見られる。そのなかで、プラン確認時から吹上パターンであろうと予測して発掘を進めたＳ－Ⅳ区ＳＢ－53の事例をあげながら、釈迦堂におけるこの問題を見てみたい。というのは小林達雄氏の言うようにこの問題を抜きにしては縄文時代への理解は進まないと思うからである。

釈迦堂Ｓ－Ⅳ区ＳＢ－53は深さ約130センチという特に深い住居址であった。この住居址埋没後に土器すてばＢの対象区域となり、その時期においてもやや窪地を呈していたらしく、ＩＡ層がその層で土器第375図－95、96がここから出土している。第304図にもセクション図を示したように、Ｉ層がいわゆる第二次埋没土で黒色を呈し、Ⅱ層が第一次埋没土で黄色を呈し、壁の土層とほとんど変わらない土層であった。当初から良好な埋没状況が期待されたので、セクションベルトを傾斜方向に残し、Ｉ層のみ掘り進めるという方法をとった。従って深い住居址を円錐形に掘りくぼめる結果となり、傾斜地で作業することになり苦慮した。こうした住居内の土層を上から剥がして行く方法はＩＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆの順に進めることで調査進行時では層位の確認がなかなかむずかしい。特に土層の色調はその日の条件に左右されやすい。そこでこうした環境にも左右されない、誰の目にも明白なＩ層とⅡ層を基準にＩ層の出土遺物をＮｏ．１から付け、Ⅱ層の遺物をＮｏ．1000から付けて作業を進めた。

なお、この住居址は深さもさることながら出土遺物の面でも、土器が復元したもので54個体、土偶が27点、土製円盤が30点、石器は全体的に多いが特に打製石斧は212点を数える。こうした異様に出土遺物の多い住居址は普遍性に欠け、議論の対象としては問題も残るが、土器の接合関係をみれば、第一次埋没土と第二次埋没土の遺物は接合する。特にＳＢ－83の炉体土器（第380図－２）は炉体土器と第一次埋没土（Ⅱ層）と第二次埋没土（Ｉ層）の三つの違った出土位置のものが接合する。こうした土器の接合関係はなにを示すかと言えば、それは第一次埋没土と第二次埋没土の同時性を示すのではあるまいか。従来この第一次埋没土と第二次埋没土との関係が論議されている

が、人為推積にしろ自然推積にしろその説明はあまりに概念的で具体性に乏しいものであった。幸い釈迦堂のS－Ⅳ区SB－53では第一次埋没土中にも遺物が豊富でこれを説明できた。一般には第一次埋没土にはほとんど遺物を含まないのである。

この第一次埋没土をどう考えるかで、縄文時代の社会像は大きく異なる。この第一次埋没土を自然推積と考えた末木　健[4]は「人々は集落外、即ち移動の結果、別地域に居住していたことが想定される。吹上パターンはこの移動、及び再来という人間行為の中で理解されなければならないであろう。」と言うのである。末木氏の考えを受けた石井　寛氏[5]は港北ニュータウンの調査成果に基付いて「一土器型式でしめされる期間内においても移動行動が存在する」と言い縄文人の頻繁な移動行動を主張している。

しかし、吹上パターンに限った場合第一次埋没土が人為推積であれば、山本暉久氏[6]が強調しているように、これらの説は成り立たなくなる。先にふれた釈迦堂SB－53では明白に第一次埋没土は第二次埋没土と同時期である。即ち人為堆積ということになる。筆者もまた山本氏と同様縄文住居における周堤の存在を確信している。末木氏は最近周堤を全面否定はしていない[7]が、氏のいう周堤を想定させるような壁外柱穴というものは、住居の構造上遺構として残存しないのであろうし、また吹上パターンにおける周堤の埋め戻しを想定すれば、壁外柱穴は検出できないものと思われる。そして、この周堤こそが、第1次埋没土と考えられるのである。

周堤は縄文時代のいつごろから存在するかという問題も生じてくる。吹上パターンと周堤を合わせた考えに従えば、前期からということになろう。また周堤はこれを構築することによって、竪穴住居を掘り込んだ土の処理を容易にする。ただし周堤にはローム層のような硬化しやすい土壌を用いるものと思われる。それゆえ、住居の壁際にはしばしばロームブロックなどが見られる。さらに周堤を構築することによって住居空間を大きく広げるという効果も出てくる。結果的により深い住居を構築したことになる。

ところで、小林達雄氏によって提唱された吹上パターンは末木氏の移動の所産としての吹上パターンで新たな一段階を迎え、石井氏によってさらに積み重ねが行われた。ここに別の観点から山本氏によって別の新たな一段階が構築され、これは氏自身によって補強されている。いずれにしろ今後とも吹上パターンはつねに検証されなければならない。

小林氏によって、セトルメント・パターンA，B，C，D，E，Fの6種が示されている。このセトルメント・パターンが一定の領域のなかに存在していることが秋山[8]氏や宮崎　博[9]氏によって具体的に論じられている。こうしたことを考え合わせれば、移動をことさら強調するよりも、それは「定住」のなかで理解すべきではなかろうか。移動を繰り返す集団に果たして拠点的集落のセトルメント・パターンが存在するものであろうか。特に釈迦堂のような土器すてばをもつセトルメント・パターンAの集落は土器すてばに生活時の廃棄行為を繰り返していたのであり、こうした集落をも移動の一環とは理解しがたい。筆者は一土器型式の時間内において、このようなセトルメント・パターンがいくつもあること自体が、基本的には採集狩猟経済段階にある縄文中期の「定住」であると考えている。

註

1）小林達雄ほか　1965　『米島貝塚』
2）これは後に様式と変更されている。小林　1974　「縄文世界における土器の廃棄について」『國史學』93
3）後に石器は土器と同様に吹上パターンの中に含まれるようである。
4）末木　健　1975　「縄文時代中期の土器の廃棄について」『史綾』5
5）石井　寛　1977　「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究収録』2
6）山本暉久　1978　「縄文中期における住居址内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3
7）末木　健　1985　「土器廃棄と集落研究」『論集日本原史』　氏はここで肯定する方向に向いている。
8）秋山ほか　1985　前掲書
9）宮崎　博　1986　「土地と縄文人」『物質文化』47

第4項　埋甕について

埋甕とは言うまでもなく、縄文前期より認められる埋設された土器のことで、土器とほぼ同じ大きさに掘り込んだ中に埋設され、土壙に埋設された土器とは区別される。住居址の内側に埋設されるものを屋内埋甕、住居址外のものを屋外埋甕と呼ぶことが多い。山梨県下では現在のところ中期の五領ヶ台式期[1]から認められている。

釈迦堂では中期の藤内式期から認められ、やはり中期後半の曾利式期のものが多く、それも屋内埋甕が多い。曾利式期の住居址が123軒検出されており、その約⅓の37軒に埋甕が検出されている。その他に埋甕のみで単独に検出されたものの中にも、おそらく住居址に伴うものと思われるものもあるが、全般的に埋甕の検出率は多くはない。

ところで、埋甕は遺跡によって違いが認められ、中には埋甕をほとんど持たない集落というのもあるから、まず、埋甕の分類をすることによって、釈迦堂の集落の性格の一端を明らかにしたいと思う。

埋甕の分類基準[2]

1場所

0　不明　Ⅰ屋内出入口部　Ⅱ　屋内その他　Ⅲ　屋外

2埋甕の状態

A不明　B正位　C逆位　Dその他

3埋甕の底部の状況

0　不明　1底有　2底穿孔　3底抜　4底欠

4埋甕の口辺部の状況

a　不明　b口辺部完存　c口辺部一部欠損　d口辺部斜位欠損　e口辺部水平欠損

5石蓋の有無

0無　1有

としておきたいと思う。前回筆者が設定した時点より、口辺部の状況と山梨県下でも石蓋が、思わずも自ら調査した釈迦堂のS－Ⅳ区SB－78で検出するに及んで、石蓋をも分類に含めて考えておきたいと思う。そこで、山梨県下の地域別に主に住居址出土の埋甕について、この分類基準に従って一覧表を作成してみた。すると、八ヶ岳南麓地域とこの釈迦堂の位置する甲府盆地東部の地域では歴然とした違いがあることに気が付く。

八ヶ岳南麓地域ではここに挙げた柳坪、頭無[3]、姥神[4]、根小屋[5]、中原[6]の各遺跡において、遺跡差を越えて正位の底部欠損のものが多いのである。これに較べて釈迦堂や北堀では低い割合ながら、逆位の埋甕が見られるのである。特に住居址出入口部の底部穿孔埋甕は八ヶ岳南麓地域では現在のところ皆無である。また長野県に近いのにも拘わらず、石蓋の検出も現在のところない[7]。釈迦堂では僅か一例のみだが石蓋がある。郡内地域はといえば、逆位の埋甕がやはり比率はすくないが認められる。また久保地12号住[8]には逆位底部穿孔埋甕が認められ、住吉の2号住[9]で好資料がある。久保地33号住でははっきりとした石蓋がある。また埋甕に近接して立石、石棒類が14、23、33住で見られることは注目される。こうした例は釈迦堂では1例、八ヶ岳南麓では姥神の11号住に認められる。なお、釈迦堂では埋甕と吊手土器はS－Ⅱ区SB－05、S－Ⅲ区SB－05、SB－103、S－V区6号住でも伴出しないが、八ヶ岳南麓では、柳坪11号住[10]、柳坪B地区10号住には破片、姥神16号住の各住居で吊手土器が出土している。根小屋の1号住には埋甕がない。

以上八ヶ岳南麓と甲府盆地東部との違いに注目してきたが、埋甕分類基準の各項目を円のなかにある一定間隔で取り[11]、それらを結び付ける方法で各遺跡における「型」をみてみると、意外にもある共通した型があることに気が付く。それは頭無に代表されるⅠB4b0という型である。それは出入口部正位底部欠損の口辺部完存の石蓋なしという型である。この型は釈迦堂S－Ⅲ区でも、都留市久保地でもみられる埋甕の基本的な型であると言えよう。また、先に筆者はⅠC2という分類[12]の出入口部逆位底部穿孔埋甕を他地域との比較から甲斐型とした。これに加えて今回のⅠB4b0を「頭無型」としてみてはどうであろうか。前回の分類と項目が増え、項目増やせば増やすほどその違いが明瞭となるが、これをⅠB4と言う分類に留どめておけば、各遺跡に殆ど共通した埋甕の型と言うことができる。釈迦堂S－Ⅳ区ではこの頭無型が顕著であるが、釈迦堂S－Ⅲ区ではⅠB1、ⅠB3のそれぞれの型

もあり、いくつかの型が併存する遺跡であることを物語っている。これは事例が少ないが、北堀にも言えることである。

註

1）新津　健・米田明訓　1984　山梨県埋蔵文化財センター『年報』1

2）小野正文　1982「底部穿孔埋甕小考」『甲斐の地域史的展開』　磯貝正義先生古稀記念論文集
　ここで、筆者は同様な分類を行ったことがあるが、記号化と口辺部の分類に問題が生じたので、新たに上記のような分類を試みた。

3）末木　健編　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内

4）櫛原功一　1987　『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告第5集

5）平野　修　1985　『根小屋』

6）末木　健編　1974　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』北巨摩郡小淵沢町地内

7）須玉町の川又南遺跡の12号埋甕には石蓋があるらしいが、これは屋外埋甕である。
　山路恭之助　1986　『川又南遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第3集

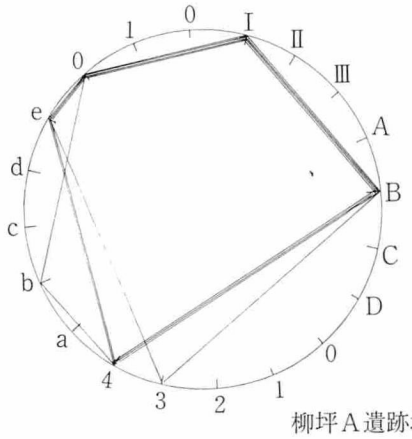
8）岡本　勇ほか　1986　『都留市史』資料編　地史・考古

9）奥　隆行編　1976　『住吉遺跡』

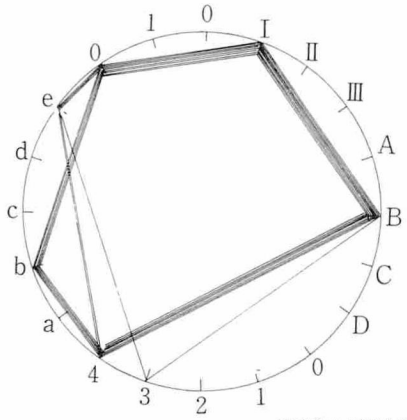
10）米田明訓編　1986　『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第13集

11）こうした図化は項目と目盛りの取り方によって違いが明白となる。

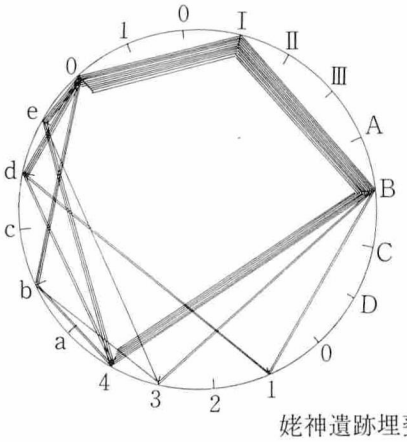
12）前回の分類ではＩＡ２である。



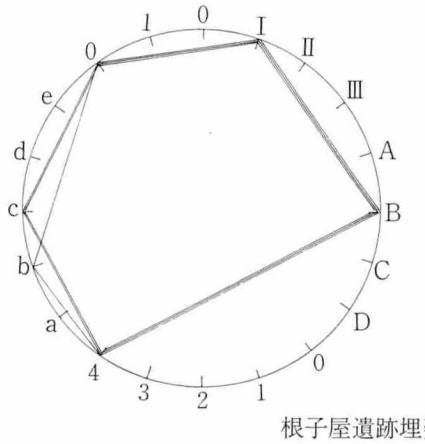
柳坪Ａ遺跡埋甕４



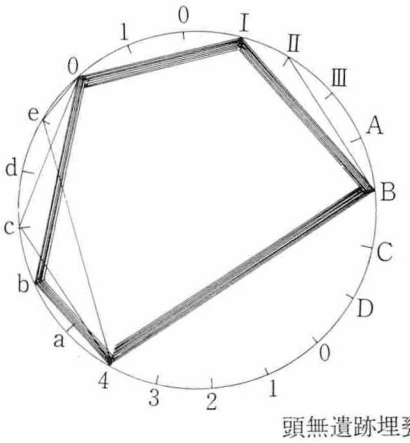
柳坪Ｂ遺跡埋甕８



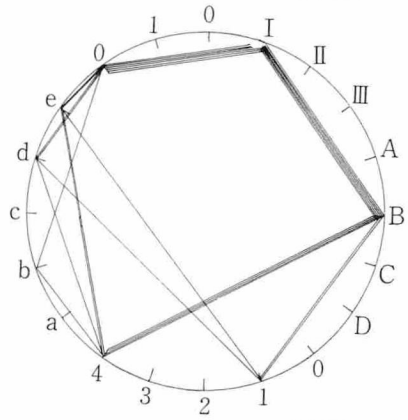
姥神遺跡埋甕11



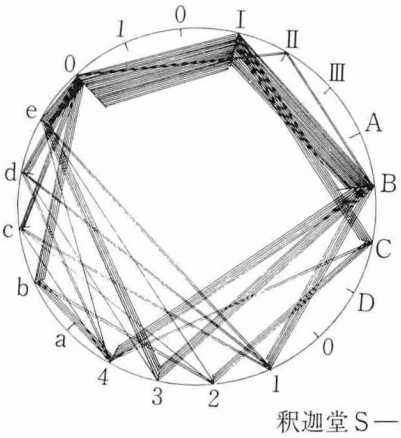
根子屋遺跡埋甕３



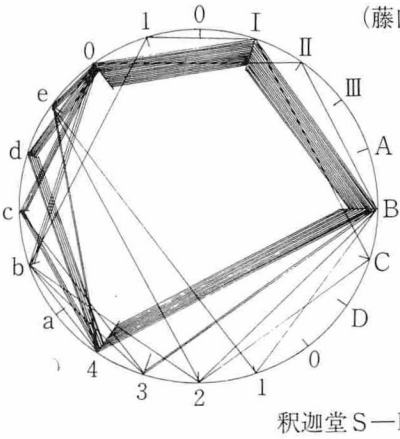
頭無遺跡埋甕８



柳坪遺跡埋甕６

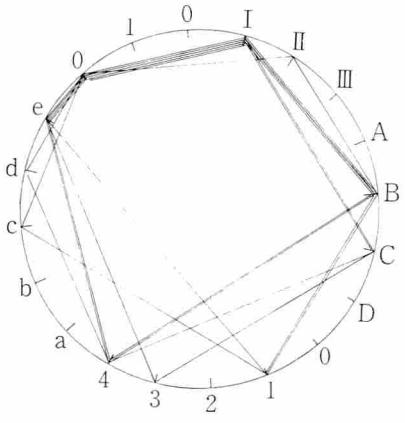


釈迦堂Ｓ—Ⅲ区埋甕23
（藤内を除く）

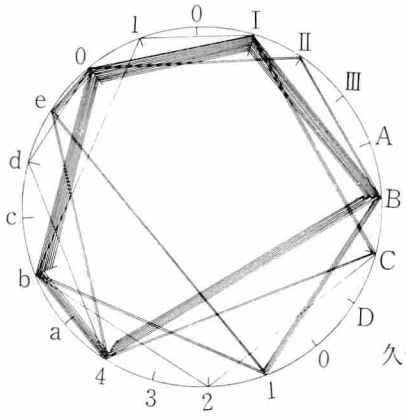


釈迦堂Ｓ—Ⅳ区埋甕17

挿図24　埋甕分類型図（１）



北堀遺跡埋甕６



久保地遺跡埋甕14

挿図25　埋甕分類型図（２）

郡内地域

No.	遺跡名	分類	時期	備考
1	都留市久保地１号住	ＩＢ４ｂ０ ＩＢ１ｅ０	曽利新 曽利新	２個体接近して
2	都留市久保地４号住	ＩＢ４ｂ０	曽利新	
3	都留市久保地５号住	ＩＢ４ｂ０ ⅡＢ１ｂ０	曽利新 曽利新	炉の北に底部のみ半埋設
4	都留市久保地６号住	ＩＢ４ｂ０？ ⅡＢ４ｂ０	曽利新 曽利新	
5	都留市久保地12号住	ＩＣ４ｂ０ ＩＣ２ｂ０ ＩＢ１ｅ１	曽利新 曽利新 曽利新	石蓋か？
6	都留市久保地13号住	ＩＢ４ｅ０	曽利新	
7	都留市久保地14号住	ＩＢ４ｅ０	曽利新	接近して小さな立石あり
8	都留市久保地23号住	ＩＣ４ｅ０	曽利新	西側に接近して石棒あり
9	都留市久保地33号住	ＩＢ１ｂ１		石蓋あり、東側に接近して、立石と角柱あり
10	住吉１号住	ＩＢ４ｅ０	曽利新	
11	住吉２号住	ＩＣ２ｃ０	曽利新	

釈迦堂埋甕一覧表

No.	遺跡名	分類	時期	備考
1	釈迦堂S—Ⅲ区SB—07	0B1c0	曽利新	SB—07に伴うものではなかろう。
2	釈迦堂S—Ⅲ区SB—17	0B4c0	加E	この住居に伴うものではなかろう。
3	釈迦堂S—Ⅲ区SB—21	IB3e0	曽利古	並んで加Eの埋甕あり。
4	釈迦堂S—Ⅲ区SB—24	ⅡB4d0	曽利古	
5	釈迦堂S—Ⅲ区SB—37	IC2b0 IC2b0	曽利新 曽利新	直列して検出
6	釈迦堂S—Ⅲ区SB—39	IB4b0	曽利古	埋甕の中にミニチュアあり
7	釈迦堂S—Ⅲ区SB—43	IB3e0	曽利新	
8	釈迦堂S—Ⅲ区SB—44	IB3e0	曽利新	
9	釈迦堂S—Ⅲ区SB—46	IB3e0	曽利新	
10	釈迦堂S—Ⅲ区SB—49	IB1b0	藤内	
11	釈迦堂S—Ⅲ区SB—57	IB1c0	曽利新	
12	釈迦堂S—Ⅲ区SB—59	IC2c0	曽利新	
13	釈迦堂S—Ⅲ区SB—60	IB1c0 ⅡB1e0	曽利新 曽利新	炉北の埋甕
14	釈迦堂S—Ⅲ区SB—64	IC2e0	曽利古	
15	釈迦堂S—Ⅲ区SB—66	IB4b0	曽利新	
16	釈迦堂S—Ⅲ区SB—68・69	IB4d0	曽利新	
17	釈迦堂S—Ⅲ区SB—80	IB3d0 IB4c0	曽利新 曽利新	土壙の中の石囲の中に埋設
18	釈迦堂S—Ⅲ区SB—84	ⅡB1e0	藤内	
19	釈迦堂S—Ⅲ区SB—87	IB1e0	藤内	
20	釈迦堂S—Ⅲ区SB—89	IB4e0	曽利新	
21	釈迦堂S—Ⅲ区SB—88	IB1e0	曽利新	
22	釈迦堂S—Ⅲ区SB—93	IB1d0	曽利新	
23	釈迦堂S—Ⅲ区SB—96	IC4b0 IC4b0	曽利古	二個体直列
24	釈迦堂S—Ⅲ区SB—109	IB3e0	曽利新	
25	釈迦堂S—Ⅲ区SB—113	IB1d0	曽利新	
26	第193図1　V—7		新道	埋甕炉であろう
27	第193図2　R—6		井戸尻	埋甕炉であろう
28	第193図3　N—3	0B4b0	藤内～井戸尻	埋甕？
29	第193図4　S—7	0B4d0	曽利古	
30	第193図5　SK—23	0C2b0	曽利古	単独埋甕か？
31	第193図6　I—5	0C2b0	曽利新	住居址に伴うものであろう。
32	第193図7　H—17	0B4b0	加E	住居址に伴うものであろう。
33	第193図8	0B4e0	加E	あるいはSB—21に伴うものか。
34	第193図9	0B4e0	曽利新	あるいはSB—59に伴うものか。
35	釈迦堂S—Ⅳ区SB—01	IB4e0 ⅡB4d0	曽利新 加E	
36	釈迦堂S—Ⅳ区SB—04	IC2b0 IB4c0	曽利古	
37	釈迦堂S—Ⅳ区SB—07	IB3c0	曽利	
38	釈迦堂S—Ⅳ区SB—12	IB4c0	曽利新	あるいはSB—24のものか。SB—24には炉北にも埋甕あり。
39	釈迦堂S—Ⅳ区SB—20	IB1e0	曽利新	
40	釈迦堂S—Ⅳ区SB—21	IB4b0 IB4d0	曽利古 加E	これはSB—21とは別の住居であろう。
41	釈迦堂S—Ⅳ区SB—23	IB4c0	加E	全壊しており通常の埋甕とは違う。
42	釈迦堂S—Ⅳ区SB—28	IB4d0	曽利古	
43	釈迦堂S—Ⅳ区SB—56	IB2e0	曽利新	

No.	遺跡名	分類	時期	備考
44	釈迦堂S—Ⅳ区SB—64	ＩＢ４ｄ０ ＩＢ４ｄ０	曽利古 曽利古	埋甕の残欠。中に骨片あり 埋甕の残欠。中に骨片あり
45	釈迦堂Ｓ—Ⅳ区ＳＢ—70	ＩＢ４ｄ０	曽利古	縦半分を失っている。
46	釈迦堂Ｓ—Ⅳ区ＳＢ—75	ＩＢ４ｅ０	曽利古	
47	釈迦堂Ｓ—Ⅳ区ＳＢ—78	ＩＢ３ｂ１	加　Ｅ	隣に立石あり。石蓋あり。
48	第459図１		井戸尻	埋甕炉であろう。
49	第459図２	０Ｃ４ｄ０	曽利古	逆位低部穿孔と埋甕の一種であろう。
50	第459図３	０Ｃ３ｃ０	曽利古	中から土製円盤３、土製薄円盤10
51	第459図４	０Ｂ１ｅ０	曽利古	
52	第459図５	０Ｃ２ｅ０	曽利古	
53	第459図６ 第459図７	０Ｂ４ｅ０ ０Ｂ４ｃ０	曽利古 曽利古	} 直列しており、住居址に伴うものであろう。
54	第459図８	０Ｂ１ｅ０	曽利新	ＳＢ—14に伴うものではなかろう。
55	第459図９　ＳＫ—09	ⅢＢ１ｅ０	曽利古	屋外埋甕であろう。
56	第459図10	０Ｂ１ｃ０	曽利新	おそらく住居址に伴うものであろう。
57	第459図11　Ｆ—６	０Ｃ４ｂ０	？	おそらく住居址に伴うものであろう。
58	第459図12	０Ｂ４ｅ０	曽　利	おそらく住居址に伴うものであろう。
59	第459図13	０Ｂ４ｄ０	〃	おそらく住居址に伴うものであろう。
60	第459図14 第459図15	０Ｂ４ｄ０ ０Ｂ１ｅ０	曽利新	おそらく住居址に伴うものであろう。
61	釈迦堂Ｎ—ⅢＳＢ—01	１Ｂ４ｅ０	曽利新	円形プランの内側にある。
62	釈迦堂Ｎ—ⅢＳＫ—05	ⅢＣ４ｅ０	加　Ｅ	土器すてばの単独埋甕
63	釈迦堂Ｎ—Ⅳ区ＳＫ—06	ⅢＣ４ｅ０	曽利古	単独の屋外埋甕

甲府盆地東部、南部

No.	遺跡名	分類	時期	備考
1	一宮町北堀44号住	ＩＢ４ｅ０ ⅡＢ１ｃ０	曽利新 曽利新	ピットに底部のみ半埋設
2	一宮町北堀58号住	ＩＢ４ｄ０	曽利新	底部の一部を欠く
3	一宮町北堀59号住	ＩＣ３ｅ４	曽利新	底の部分のみ欠損
4	一宮町北堀61号住	ＩＢ１ｅ０ ＩＣ４ｅ０	曽利新 曽利新	
5	一宮町北堀１号単独	ⅢＣ	曽利新	半壊している
6	一宮町北堀２号単独	ⅢＢ	五領ケ台	五領台式の単独埋甕？
7	境川村一の沢西	ⅢＣ４ｂ０	曽利古	
8	中道町上野原	ⅡＢ４ｅ０	井戸尻	炉址の北西にあり
9	中道町上野原１号単独	ⅢＢ１ｂ０	曽利新	中に扁平な石が突き立つ
10	中道町上野原２号単独	ⅢＢ４ｄ０	曽利新	
11	中道町上野原３号単独	ⅢＣ４ｃ０	井戸尻	
12	中道町上野原４号単独	ⅢＢ４ｅ０	井戸尻	土壙か？
13	中道町上野原５号単独	ⅢＣ４ｂ０	井戸尻	半壊している。石がかかる。
14	勝沼寺平２号住	ＩＢ１ｅ０	曽利新？	

八ケ岳南麓

No.	遺跡名	分類	時期	備考
1	長坂町柳坪A地区1号住	IB4b0	曽利古	
2	長坂町柳坪A地区2号住	IB4e0	曽利新	
3	長坂町柳坪A地区10号住	IB4e0	曽利新	
4	長坂町柳坪A地区15号住	IB3e0	曽利新	
5	長坂町柳坪B地区3号住	IB4b0	曽利新～	
6	長坂町柳坪B地区10号住	IB4b0	曽利新	
7	長坂町柳坪B地区12号住	IB4b0	曽利新新	
8	長坂町柳坪B地区14号住	IB4b0	曽利新	
9	長坂町柳坪B地区15号住	IB4e0	曽利新	
10	長坂町柳坪B地区16号住	IB4b0	曽利新	底部の一部を欠く
11	長坂町柳坪B地区23号住	IB3e0 IB4e0	曽利新 曽利新	
12	長坂町柳坪B地区24号住	?		
13	長坂町頭無2号住	IB—	曽利新新	
14	長坂町頭無3号住	IB—	曽利新	
15	長坂町頭無4号住	IB4b0	曽利新	
16	長坂町頭無5号住	IB4b0?	曽利新	
17	長坂町頭無6号住	IB4c0	曽利新	
18	長坂町頭無7号住	IB4e0 IB4b0	曽利新 曽利新	拡張前 拡張後
19	長坂町頭無10号住	IB4b0 IIB4b0	曽利新 曽利新	
20	長坂町頭無12号住	IB4b0	加E系 曽利古	
21	長坂町柳坪14号住	IB4b0 IB1d0	曽利新	
22	長坂町柳坪11号住	IB4e0 IB4e0	曽利古～新 曽利古～新	新 古
23	長坂町柳坪16号住	IB4b0?	曽利新	
24	長坂町柳坪48号住	IB1e0	曽利新	
25	大泉村姥神11号住	IB4e0	曽利新	埋甕の上に正位で入れ子状になった別個体の鉢形土器あり、近くに石棒が立つ。
26	大泉村姥神12号住	IB4e0 IB3e0 IB4b0	曽利新 曽利新 曽利新	
27	大泉村姥神13号住	IB3b0	曽利古	
28	大泉村姥神14号住	IB1d0	曽利古～新	
29	大泉村姥神16号住	IB4b0	曽利古	
30	大泉村姥神17号住	IB1d0	曽利新 曽利新	
31	大泉村姥神20号住	IB4d0 IB4d0	曽利新	古い埋甕に切られている。
32	大泉村姥神21号住	IB4e0	曽利新	
33	白州町根小屋3号住	IB4b0	曽利古～新	
34	白州町根小屋5C住	IB4c0	加 E	底部の一部を欠
35	白州町根小屋5B住	IB4c0	曽利新	
36	小淵沢町中原5J住	IB4c0	曽利新	

第 3 節　土製品

第1項　土偶の製作法

釈迦堂遺跡群を代表する遺物は土偶である。この土偶が遺跡群全体で1145点出土している。もちろんこの中には接合するもの、接合はしないが明らかに同一個体のもの、土偶とするには疑問の余地の残るものが存在する。これらを検討して文化庁の指定の個体数では1116点という数になる。いずれにしてもこの点数はいままでの土偶のイメージをはるかに越えるものである。

これだけの数になると、土偶個々の分析は不可能に近いものになってしまう。そこで、まず土偶の製作法に注目してみたいと思う。

① **分割塊製作法**　これは釈迦堂では前期の土偶から見られる製作法で個々の粘土塊を合わせて土偶を作る方法である。この合わせるときしばしば木芯が利用される。細かく見れば木芯でなく竹芯である場合もある。また個々の粘土塊をつなぐ時にソケット式に差し込む方法もある。この個々の粘土塊を合わせて１個の土偶をつくるということは、製作法としてはその途中で壊れてしまう危険の多い無理な方法である。何故このような不合理な製作法をとるかと言えば、それはあらかじめ、個々の粘土塊にそって壊すことを目的としたからである。

② **手こね法**　もっとも簡単な方法で、一つの粘土塊から頭、手、足を引き伸ばして作る方法である。主に小型粗像土偶に見られる方法である。

③ **輪積法**　中空土偶の製作法の一つで、土器と同じ要領で土偶をつくる方法である。主に大型中空土偶の製作法で釈迦堂では井戸尻式期の土偶から認められる。

④ **塑像法**　木などの芯に縄を巻き付けて、それに粘土塊をかぶせる方法で、ごく稀な製作法であると思われる。釈迦堂で僅かに１点の検出にとどまっている。

これが釈迦堂で観察された製作法である。このほかに中空土偶を作る方法として、さきの分割塊製作法に加えて、土偶をえぐる方法も見られる。なお分割塊製作法に関しては、凡例にも示したようにスクリーントーンで土偶の割れ口を図化した。おおくの土偶は衆知のように割られることが、そのもつ意義の一つであるから、土偶の観察には必ず割れ口のデータが不可欠と思われる。

第2項　土偶の形態分類

釈迦堂の中期の土偶をみて、その形態の豊富さに驚かされる。このようにいくつもの形態があるということは、そこに機能、用途の違いがあると推定するのは、それほど唐突なことではない。

まず、時期別に土偶の形態分類をする必要がある。中期の土偶は大きく、狢沢式期、新道式期、藤内式期、井戸尻式期のものと曾利式期のものに分離されよう。前者を仮に狢沢井戸尻式期としておこう。最も広い意味での勝坂式期ということもできる。しかしこれは土器型式としての勝坂式の概念と混用される恐れがあるので避けたい。

さて、筆者はすでに狢沢井戸尻式期の土偶については、坂井、楢原、広畑、尖石などその形態の出土した著名な遺跡名を冠して特徴的な土偶を形態分類してきた。ところが、釈迦堂の整理作業が進むにつれて過去に例のないものも見られるようになってきているので、図のようにアルファベット順に並べるのも一つの方法である。

A形態　坂井形態の土偶で中期の土偶としてこの地方ではあまりに一般的な土偶である。有脚立像形土偶とも呼ばれている。土偶全般の中では立つ土偶である立像形のものは意外に少ない。両手を水平に広げ、偏平な大きなお尻と短く太い足が特徴的である。なお腹部にはこの期の土偶のメルクマールである対称弧刻文がある。製作法は典型的な分割塊製作法である。

B形態　円錐形中空土偶で東京都楢原のものが典型例である。足を省略した円錐形の体部に頭部が付くもので、両手は省略されるものと、前にあてているものとがある。底は閉塞されるものと開口するものとがある。どちらの中にも中に土玉状のものを入れて土鈴のようにしたものもみられる。なおこの形態の土偶の製作法には輪積法と分

割塊製作法にえぐり法を加えたものがある。また中実の円錐形土偶はこの形態からは分離される。

C形態　いわゆるお産をする土偶として藤森栄一氏によって紹介された岡谷市広畑の土偶を典型例とした。座した様子の土偶で、手を後ろに組んだ様子まで分かるものもある。類例は誠に少ない。

D形態　尖石の壷を抱える土偶として著名なものを典型例とした。類例も少なく、形態的にもB，C形態と非常に近いものと思われる。

E形態　板状の抽象化された土偶を言う。狢沢式期、新道式期のものは、いわゆる消化器土偶のように貫通孔がある。これもまた類例の少ないものであるが、塩尻市平出の分銅形をしたものもこの系譜をひくものであろう。

F形態　小型の粗像土偶を言う。かたちとしてはA形態に近いものが多く、A形態とどこで分離するかという問題もあるが、たいがい5cm以下のものが多い。

G形態　大型の中実土偶をいう。黒駒の土偶のように現存高だけでも25cmを越えるようなものを言う。

H形態　ほとんど類例はないが、大型の中空土偶を言う。図示したものはS－Ⅲ区出土のもので足部であるが、この足から全体像を推定すれば、50cmをはるかに越える大型中空土偶であったと思われる。

この外にも先に触れたようにB形態に類似したものとして、中実の円錐形土偶およびA形態の亜種である神谷原形態などがあるように、これだけの形態分類ではたりないことは言うまでもない。

曾利式期の土偶の形態

曾利式期の土偶の形態分類はさきの狢沢井戸尻式期のものと比べて、形態的変化に乏しいだけに困難な一面も多く、土偶の分類もその基準を変える必要がありそうである。曾利式土器の編年自体はある程度共通した理解があるが、先に土器の概観でも触れたように、筆者らはこれを曾利古、新、新新と単純に分離し、それを細別する方法をとった。これは土器以外の遺物にとっては非常に有効な方法であると思われる。というのは土器の編年的研究と他の遺物の編年的研究ではその網目が土器の方が比較にならないほど細かいからである。

A形態　これは狢沢井戸尻式期のA形態から続くもので、有脚立像形の土偶である。ただ狢沢井戸尻式期のものに比較して、両手が上がり、あたかもバンザイをしているようである。この形態の土偶には文様によっていくつかの亜種があるようである。A2形態は土器の肥厚口縁土器に対応するものと思われ、A1形態のものが細い沈線で文様が施されるに対して、A2形態のものは太い沈線で描かれる。A3形態は大きさもほとんど変わらないのに、文様がほとんど施されないものを言う。これらの土偶の製作法は分割塊製作法ではあるが、狢沢井戸尻式期のそれとは異なる。

B形態　これは立像形の土偶には違いないが、足をほとんど省略してお尻に足を気持ちだけ付けたような土偶である。関東の加曾利E式土偶に近いものかも知れない。

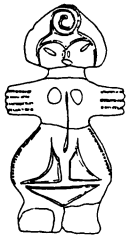
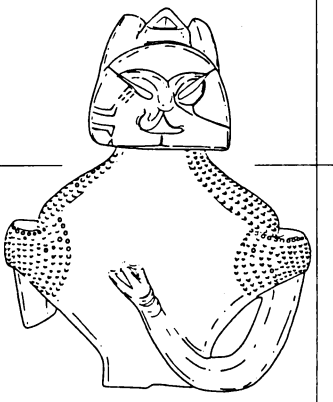
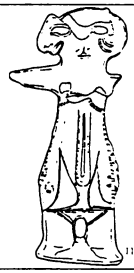
C形態　小型粗像の土偶をいう。

D形態　中空土偶をこの形態とした。類例が少なく全体像は不明。

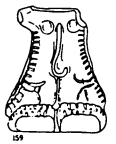
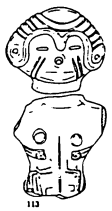
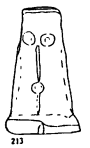
さて、このように狢沢井戸尻式期と曾利式期の土偶の形態分類をしてきたが、言うまでもなく前者の時期には土偶の形態が豊富で土偶もおおいが、後者の時期では形態的変化に乏しいことが知られる。土偶の形態分類と時期的変遷について注意を払ったのは、各集落における土偶の在り方および各集落間における土偶の在り方を考究するためである。この点に関しては『釈迦堂Ⅰ』の藤内式期の土偶の個々の住居における分有関係について触れた。また神谷原の狢沢井戸尻式期の土偶の形態分類と時期的関係について触れたこともある。この方法に基付いて、三口神平地区の各集落の土偶の在り方を考究すべきであるが、その量の多さから時間的に無理がある。しかも釈迦堂S－Ⅰ区や神谷原のようにある程度の数の土偶が住居ごとに出土している状況ではなく、住居より土器すてばに多い状況なのである。

第3項　土偶の接合関係

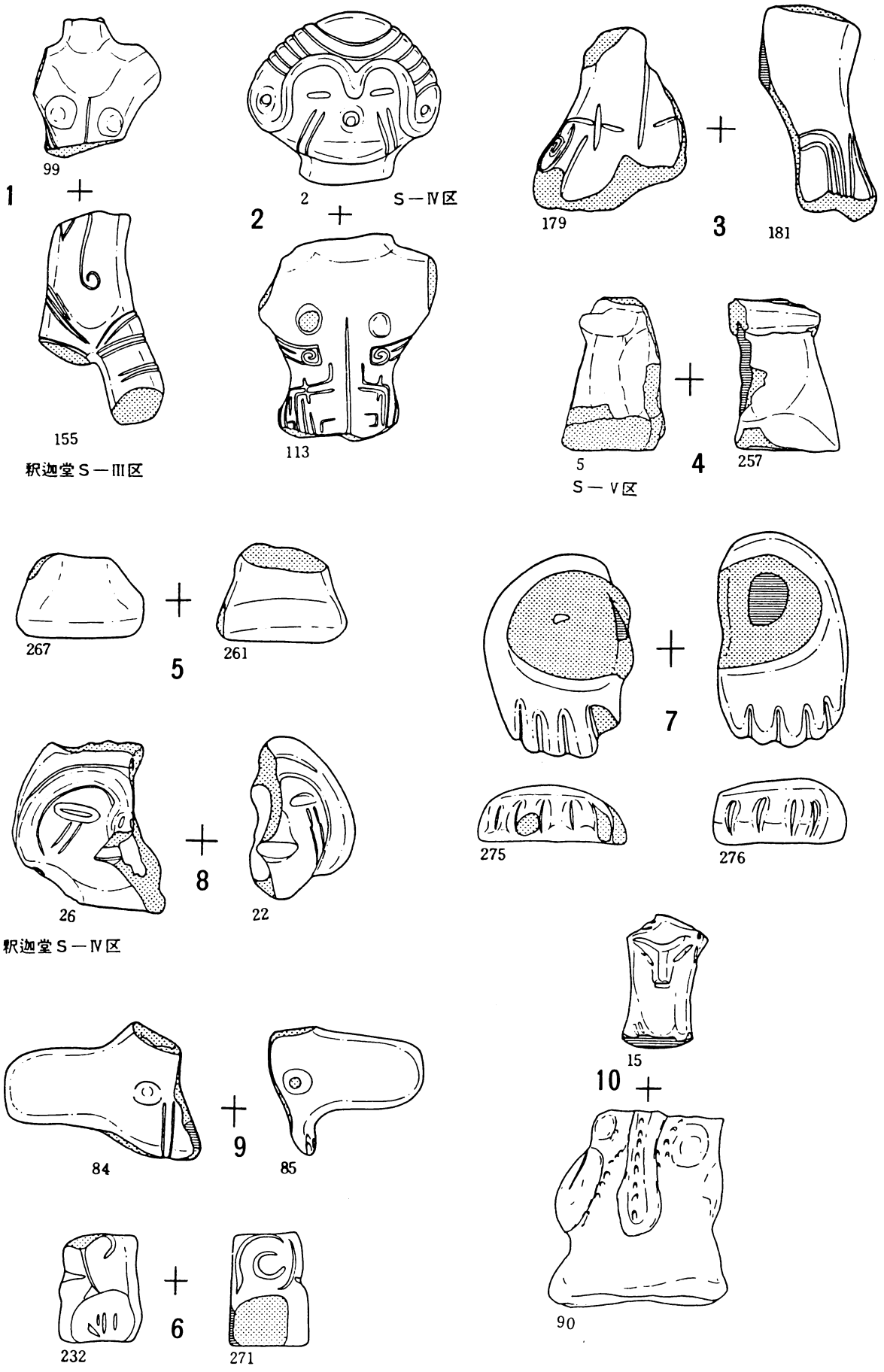
釈迦堂では土偶の出土例が多いのにも拘わらず、その接合例は少なく僅かに15例にすぎない。また同一個体と思われるものも僅かに3例のみである。

時期＼形態	A1（坂井）	A2（神谷原）	B1（栖原）	C（広畑）	D（尖石）	E	F 小型	G（大型中実）	H（大型中空）
狢沢式期									
新道式期									
藤内式期									
井戸尻式期									

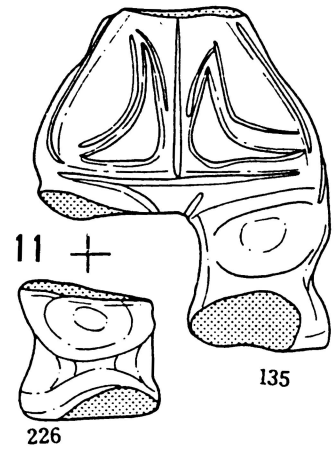
挿図26　狢沢井戸尻式期の土偶の形態分類

時期＼形態	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C	D	
曽利古式期									
曽利新式期									
曽利新新式期									

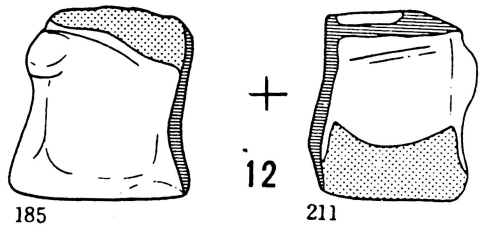
挿図27　曽利式期の土偶の形態分類


99
1
155
釈迦堂S－III区
2
2
S－IV区
113
179
3
181
5
S－V区
4
257
267
5
261
26
釈迦堂S－IV区
8
22
7
275
276
15
10
90
84
9
85
232
6
271

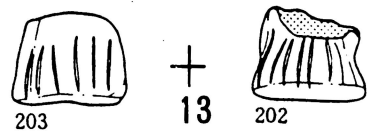
挿図28　接合土偶

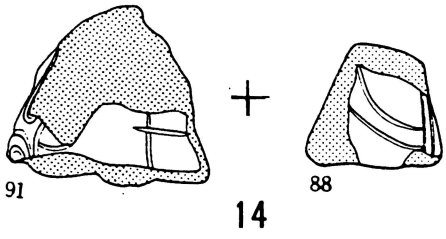


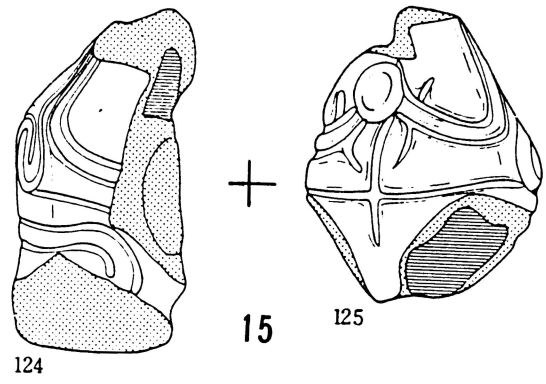
釈迦堂S－Ⅳ区

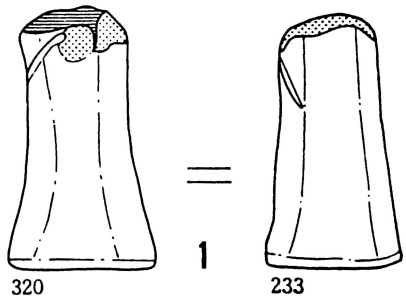


釈迦堂N－Ⅳ区

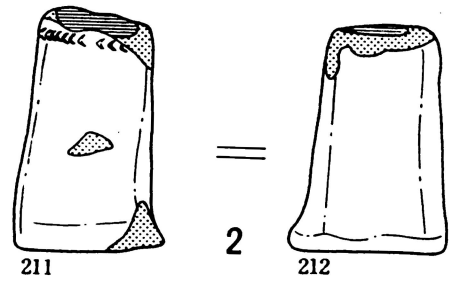


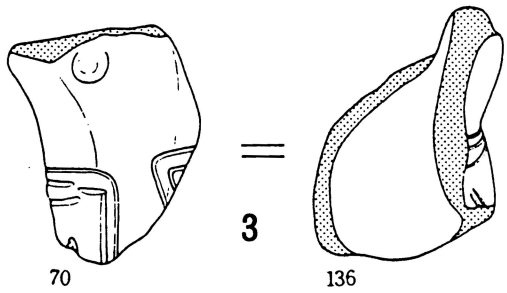






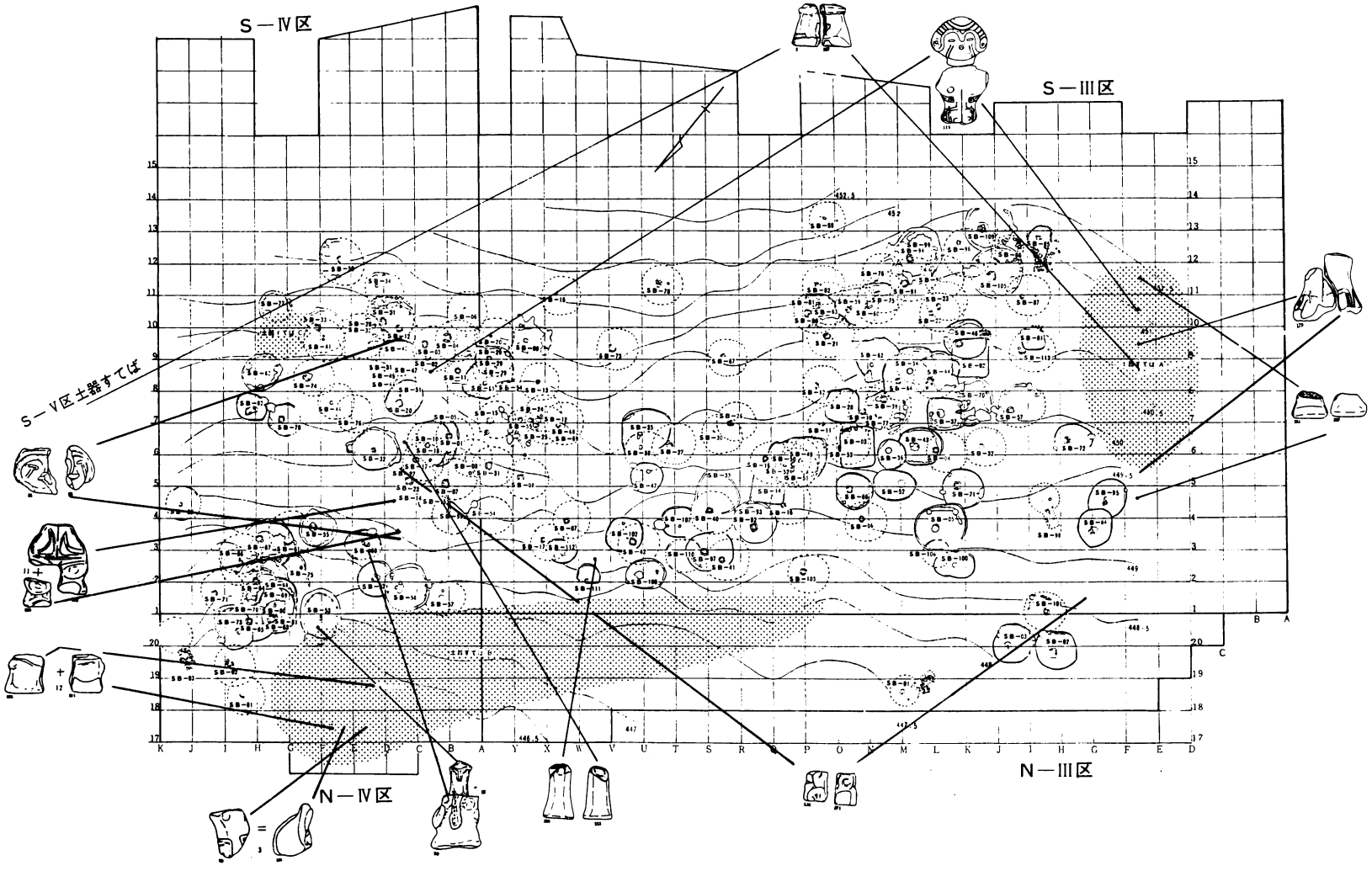
釈迦堂S－Ⅲ区　　S－Ⅳ区



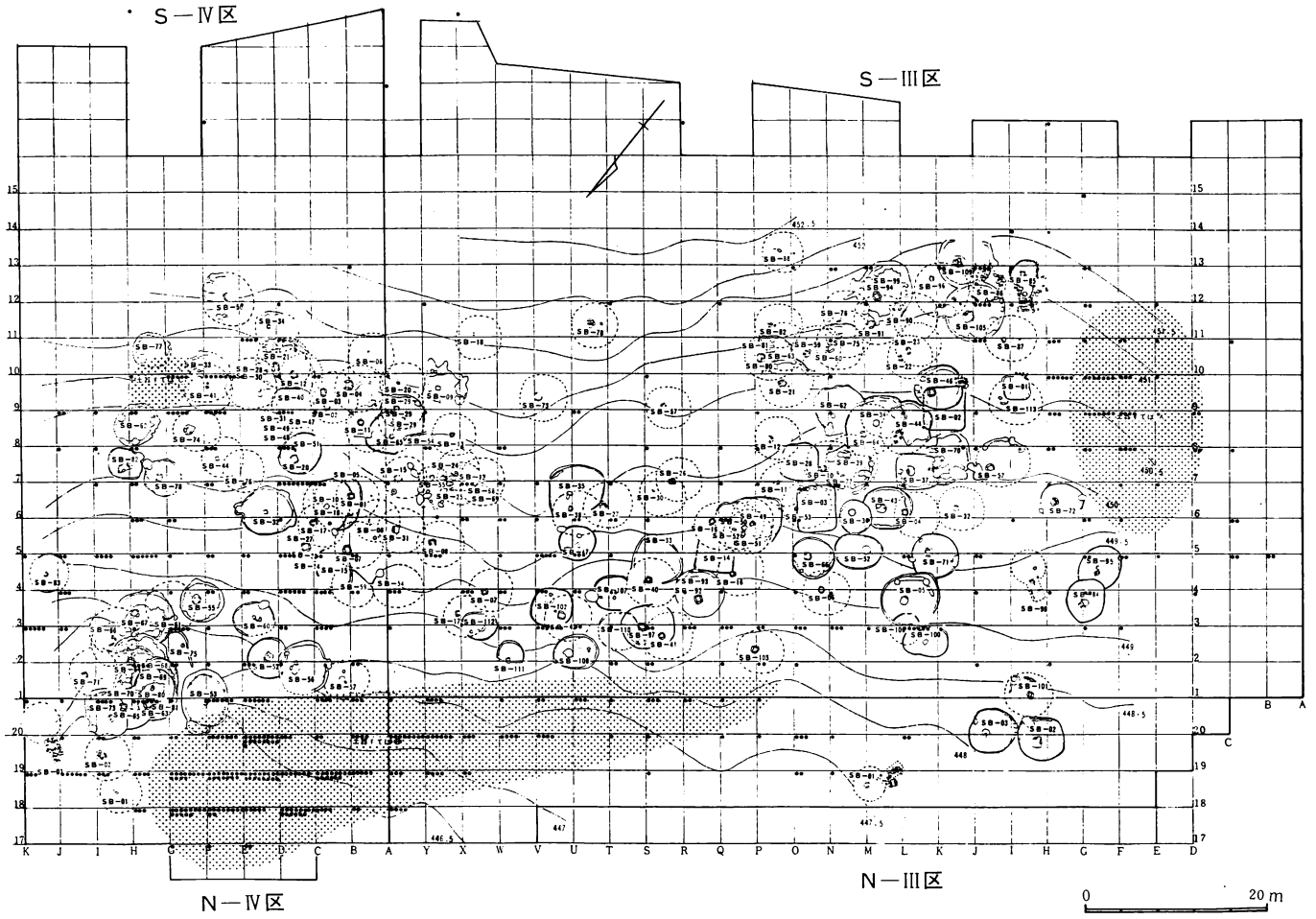


釈迦堂N－Ⅳ区

挿図29　接合・同一土偶



挿図30　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土偶接合図



挿図31　釈迦堂S－Ⅲ区S－Ⅳ区N－Ⅲ区N－Ⅳ区グリッド出土土偶分布図

接合関係

	地区　No	地区　No
1	S－Ⅲ 99	S－Ⅲ155
2	S－Ⅳ 2	S－Ⅲ113
3	S－Ⅲ179	S－Ⅲ181
4	S－Ⅲ257	S－Ⅴ 5
5	S－Ⅲ261	S－Ⅲ267
6	S－Ⅲ271	S－Ⅳ232
7	S－Ⅲ275	S－Ⅲ276
8	S－Ⅳ 26	S－Ⅳ 22
9	S－Ⅳ 84	S－Ⅳ 85
10	S－Ⅳ 15	S－Ⅳ 90
11	S－Ⅳ135	S－Ⅳ226
12	N－Ⅳ185	N－Ⅳ211
13	N－Ⅳ203	N－Ⅳ202
14	N－Ⅳ 91	N－Ⅳ 88
15	N－Ⅳ124	N－Ⅳ125

同一個体

1	S－Ⅲ320	S－Ⅳ233
2	S－Ⅳ211	S－Ⅳ212
3	N－Ⅳ 70	N－Ⅳ136

と言う状況である。この中で、とくに注目されるのは2と4の接合関係である。前者は三口神平地区の両端で検出されているのである。しかも2の113は調査直前に土器すてばAで採集しておいたものである。この接合関係は三口神平地区の曾利式期の集落が広場を中心に機能していたことを示すものと思われる。後者は三口神平地区の土器すてばAと野呂原地区（S－V区）の土器すてばの接合関係である。そのあいだの距離約230mである。このことは単に土偶の接合関係の最長不到距離という距離の問題ではなく、別個の集落の間に土偶の分有関係が存在したことを示している。それは取りも直さず、個々の集落関係を反映するものであり、単に地理的関係のみを根拠にグルーピングされていた集落関係に一つの根拠を与えるものになろう。であるから、今後は現在の発掘主体や行政の枠を越えて土偶の接合関係に注意を払う必要があると思われる。

第4項　耳　　栓

耳栓の研究は後晩期を主とした型式分類や形態分類が盛んである。この型式分類を中期のものにも援用できれば、好都合であるが、なかなか中期のものまで含めた分類はでき得ないのが現状である。

また中期の耳栓の研究は後晩期のものに比べて少ないと言える。そのなかで、高山純氏[1)]はよくデータをまとめて、耳栓の起源について論考している。そうした耳栓の起源、玦状耳飾との関係という問題もさることながら、こうした耳飾を誰が装着していたかも大きな問題である。玦状耳飾の場合は、西口陽一氏の研究[2)]で、大阪府国府遺跡例が検証されており、装着者は女性であった事が知られている。これに対して、中期になると男性も耳栓を装着していたことが僅かな例[3)]ながらも知られている。

玦状耳飾は縄文早期末から前期にかけて盛行するが、耳栓は中期に現れ、後晩期に多く見られる遺物である。さて、前期の玦状耳飾は石製のものが中部地方に、土製のものが関東地方に分布しているという違いが見られる。山梨県下ではその両方が知られる。

石製のものは、韮崎市天神遺跡[4)]と花鳥山遺跡[5)]にある。釈迦堂でも見られる。中期のものは、重郎原[6)]、日下部[7)]、釈迦堂にある。どうもこれらは、藤内式期のものであるらしい。形態的には偏平で円形のものもあるが、釣り鐘形のものが多いのである。東北地方の後期にみられるものは、この形態のものと関係があると思われる。土製のものも山梨県下にも見られる形状は円形で断面が楕円形か方形のものがある。これに対して、中期のものは断面に縁どりを持つことに特色がある。このような傾向は長野県篭畑遺跡[8)]、神奈川県十三菩堤遺跡[9)]の前期末の資料にも見られ

る傾向である。釈迦堂ではＳ－Ⅲ区ＳＢ－95にあり、新道式期まで続く傾向であるらしい。

さて、耳栓は中期に至って、出現するものである。ここでは時間の関係から型式分類と編年を棚上げして、どのような遺跡から耳栓が出土するかという問題を考えて見たい。というのは、韮崎市坂井遺跡をはじめとして、県下には耳栓のみられる遺跡が多くあるからである。例えば、中道町上野原遺跡[10]、上の平[11]、境川村一の沢西[12]、がある。中でも釈迦堂ではいくつかの地区から出土しているのである。

ここで比較研究をすべく、広域的研究の進んでいる東京都の野川流域の耳栓の分布をみると、勝坂式末から加曽利Ｅ式にかけて見られる。恋ヶ窪[13]、多喜窪[14]、貫井[15]、貫井南[16]、中山谷[17]、三鷹五中[18]に見られる。これらを秋山道生氏ら[19]の分析した≪野川流域における中期前葉～後葉の遺跡分布≫にプロットしてみると、耳栓を出土する遺跡はパターンＡないしＢの集落に位置するのではないかという傾向が見られる。また最近では、集落のパターンの再検討がされつつあるが、耳栓のように、とくに中期のものはその装着者が問題ではあるが、出土量の僅少さからもして、それが男性であっても集落の構成員のなかで、なんらかの地位をもった人物であるとは容易に推定できる。またこうした観点からも集落の分析が可能となろう。

言い換えれば、中核的な集落に耳栓装着者が存在したか埋葬されたかを示しているように思われる。

註

1）高山　純　1967　「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」　『人類学雑誌』73－4
2）西口陽一　1983　「耳飾からみた性別」　『季刊考古学』5
3）春成秀爾　1983　「抜歯習俗の成立」　『季刊考古学』5
4）志村瀧造　1970　『坂井』
5）國学院大学資料
6）上野晴朗　1972　『重郎原』
7）『日下部町誌』　1952
8）武藤雄六　1968　「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』
9）樋口清之ほか　1968　『野川南台団地埋蔵文化財調査報告　－十三菩提－』
10）中山誠二　1987　前掲書
11）＿＿＿＿　1987　前掲書
12）長沢昌宏ほか　1986　前掲書
13）国分寺市史編纂委員会　1986　「恋ヶ窪遺跡」『国分寺市史』
14）吉田　格　1973　「東京都滝窪遺跡」『関東の石器時代』
15）＿＿＿＿　1958　「東京都小金井町貫井遺跡調査報告」『武蔵野』　38－1
　　田中　豪ほか　1979　『貫井遺跡』
16）岡崎完樹ほか　1974　『貫井南』
17）＿＿＿＿　1975　『中山谷遺跡』
18）川崎義雄ほか　1966　「東京都三鷹市第５中学校校庭内遺跡調査報告」　『考古学雑誌』　52－2
　　山村貴輝　1979　『三鷹第５中学校遺跡発掘調査報告書』　三鷹市埋蔵文化財調査報告第１集
　　山村貴輝ほか　1983　『三鷹市第５中学校遺跡』　三鷹市埋蔵文化財調査報告第８集
19）秋山道生ほか　1985　「縄文時代の集落研究　野川流域中期を中心として」『東京考古』3

第 4 節　土器すてばの研究

1．は じ め に

釈迦堂遺跡群・三口神平地区（S－Ⅲ・S－Ⅳ・N－Ⅲ・N－Ⅳ区）の土器すてばを題材として行なった分析とその結果について報告する。土器すてばと認定した土器集中箇所は三つある。土器すてばA・B・Cであり、各々の概要は既に記述されている。

さて、本論に入る前に予め言及しておくべきことがある。まず、筆者の分析は三口神平地区の三つの土器すてばのうち、土器すてばA・Bを対象とする。土器すてばCは、実は住居址として整理してきたが、再考の末土器すてばとして報告することにした。ただしCは性格的にA・Bと同列に扱いかねる(1)。故に今回はA・Bのみをとり上げている。

次に、筆者はこの分析で土器のみを対象とした。一般に土器捨て場という呼称が定着し、釈迦堂でもその名を冠したが、土器のみならず石器・土製品・自然遺物なども存在することは周知の事実である。土器のみの分析では一面的だと言われざるを得ない。しかし土器すてばの遺物を土器で代表させて議論することは妥当であると考えている。なお4．項の分析においては中期のみを考えている(2)。

上記の点を含め、時間的制約から切り捨てた部分はあるが、現時点でできるだけの成果を上げるべく努めた。以下に本論に入る。

2．分析の目的と方法

所謂土器捨て場は、近年とくに調査報告事例が増加し、土器捨て場そのものを扱った論文も発表されている（中野1984）。それらの成果は、土器捨て場研究の今日的課題を明らかにしている。筆者はそれら課題を念頭に置いて釈迦堂遺跡の土器すてばの分析に臨んだ。即ちこの論稿の目的とは以下の様な点である。

1．　土器すてばの土器の分布状態を具体的に分析し、その分布を出現せしめた廃棄行動を復元する。これは従来の研究が土器捨て場を廃棄の場として認識してきたことを受けて、より細かい分析を経て論拠を得、廃棄の実態に迫ろうとするものである。

2．　土器すてばの動態を考える。釈迦堂の土器すてばは中期の全型式を含むが、その生成発展の具体像を明らかにしようとするものである。これはさらに進んで、集落全体の動態の中に土器すてばを位置づけることをも目論むものである。

前者の目的に対しては、土器すてば内・内外の接合関係を中心に土器分布状況の実態を調べることとした。後者の目的に対しては、土器の重量計算・個体数試算を行ない、集落全体と土器すてば、また土器すてばAとBの関係などを数量的に択えることとした。

各々の方法について基礎資料となったデータを若干説明する。まず、土器すてばA・Bの平面図が作られている（第91図、第544図、第571図）。発掘現場において、比較的大きな破片と顕著に集中していた破片についてはナンバーを付け、他はグリッド一括として取り上げた。よってナンバー付土器については、出土位置を平面図上に特定することが可能である。このナンバー付土器で接合関係を持つものを主に、土器すてばAの接合関係図を作った(3)（挿図32）。また調査者が現場でブロックとして認識した破片集中部分は、同じナンバーが付けられているので、その内容を調べることが可能である。

この様にナンバー付土器は資料として有効であるが、いかんせん膨大な量の破片のごく一部であるため、グリッド一括で取り上げた土器も生かしたいと考えた。幸いにも時期別にグリッド毎の土器重量を計測していたので（挿

図41～挿図46）、このデータを利用してもう一つの目的に沿った分析を行なうこととした。このデータの具体的な扱いに関しては4．項で述べる。

3．土器すてばにおける土器の分布状態について

――廃棄行動の復元――

近年の報告書は調査区域内の遺物の接合関係図を掲載することが多く、それらを見るにつけ遺物分布を出現させた諸要因の複雑さを痛感する。この節では、土器すてばの土器分布状態を、廃棄という視点から分析・解釈しようとするものである。(4)

土器すてばA内の接合関係(5)を調べる過程で、その接合関係を大まかに4つに類型化することができた。

(1) 同一土器の破片がブロックとしてまとまる

(2) 同一土器の破片が1グリッド内もしくは隣接グリッド間程度の狭い範囲で接合関係を持つ

(3) 同一土器の破片が土器すてば内の広い範囲で接合関係を持つ

(4) 土器すてば外と接合関係を持つ

この接合関係の4類型に沿って、土器分布のあり方を述べ、廃棄行動について考えてみよう。

ブロックについて

同一土器の接合関係という視点から類型(1)を設定したのだが、ブロックの内容という視点からすれば、それをも含めた別個の類型化が可能である。即ち

① 完形1個体(6)の土器から成るブロック

② 同一土器の破片から成るブロック

③ 完形土器もしくは同一土器の破片を中心に他の土器の破片若干を含むブロック

④ 全く別個の土器の破片から成るブロック

上の様なブロックについて考える際、そのブロックを「単位廃棄」（一度の廃棄）と仮定して話を進めることは有意義である(7)。無論、現場でブロックとしたものを安易に単位廃棄とすることはできないが、もとの図面を吟味して、単位廃棄と認めるに値するブロックを選んだ。即ち挿図32のA～Iである。いずれも土器すてばAの周縁部に位置するが、それは遺物の集中著しい中心部でブロックを抽出し難かったことに因る。

ブロックA～Iの大体の内容は付表1で説明している。先の①～④に照らせば

①……ブロックG

②……ブロックI

③……ブロックA・C・D・E・H

④……ブロックB・F

となる。

それでは①～④の様なブロックを生ぜしめた廃棄行動はいかがなものであったか考えてみよう。

① 集落で破損した（使用不能となった）土器1個体を、そのまま土器すてばに運んで廃棄した。

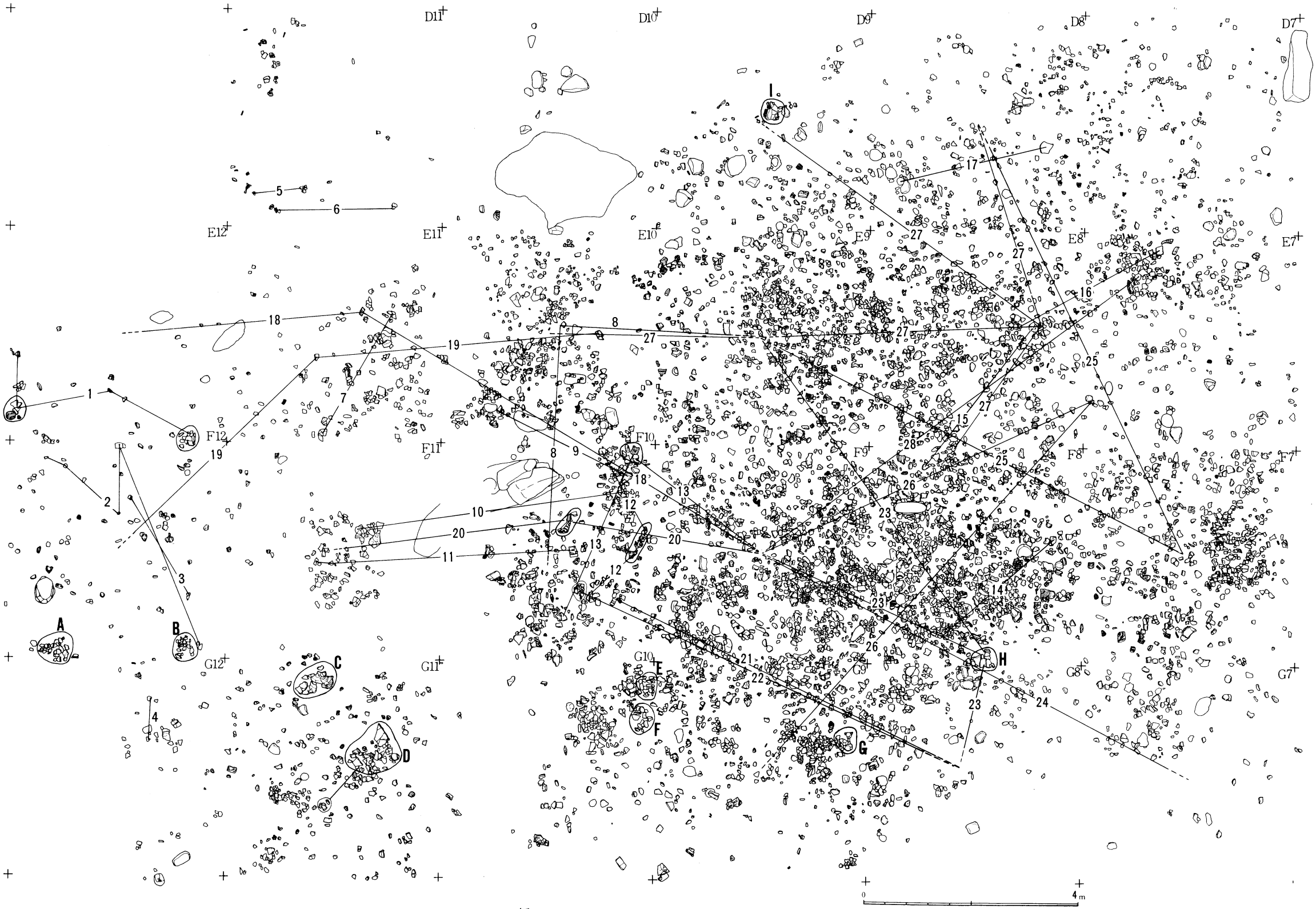
② 集落で破損した土器の破片の一部を土器すてばに廃棄した。

③ 集落で破損した土器1個体もしくはその一部を、他の破片ととりまとめて土器すてばに廃棄した。

④ 集落で破片をとりまとめて土器すてばに廃棄した。

以上が筆者の想定した廃棄行動である。重要なのは、③・④のブロックがともに別個体の破片さらには異型式の破片をも含む事実である。単位廃棄と仮定すると、この現象は土器破片のとり集め作業つまりは清掃活動を反映していると考えられる。

①～④の廃棄行動について、二つの動機を考えることができる。土器の破損と清掃である。それらはいずれもごく日常的な生活の中で生じる動機である。つまり、土器すてばは往時の日常生活の折々に、必要に応じてなされた廃棄の集積であると考えることができる。

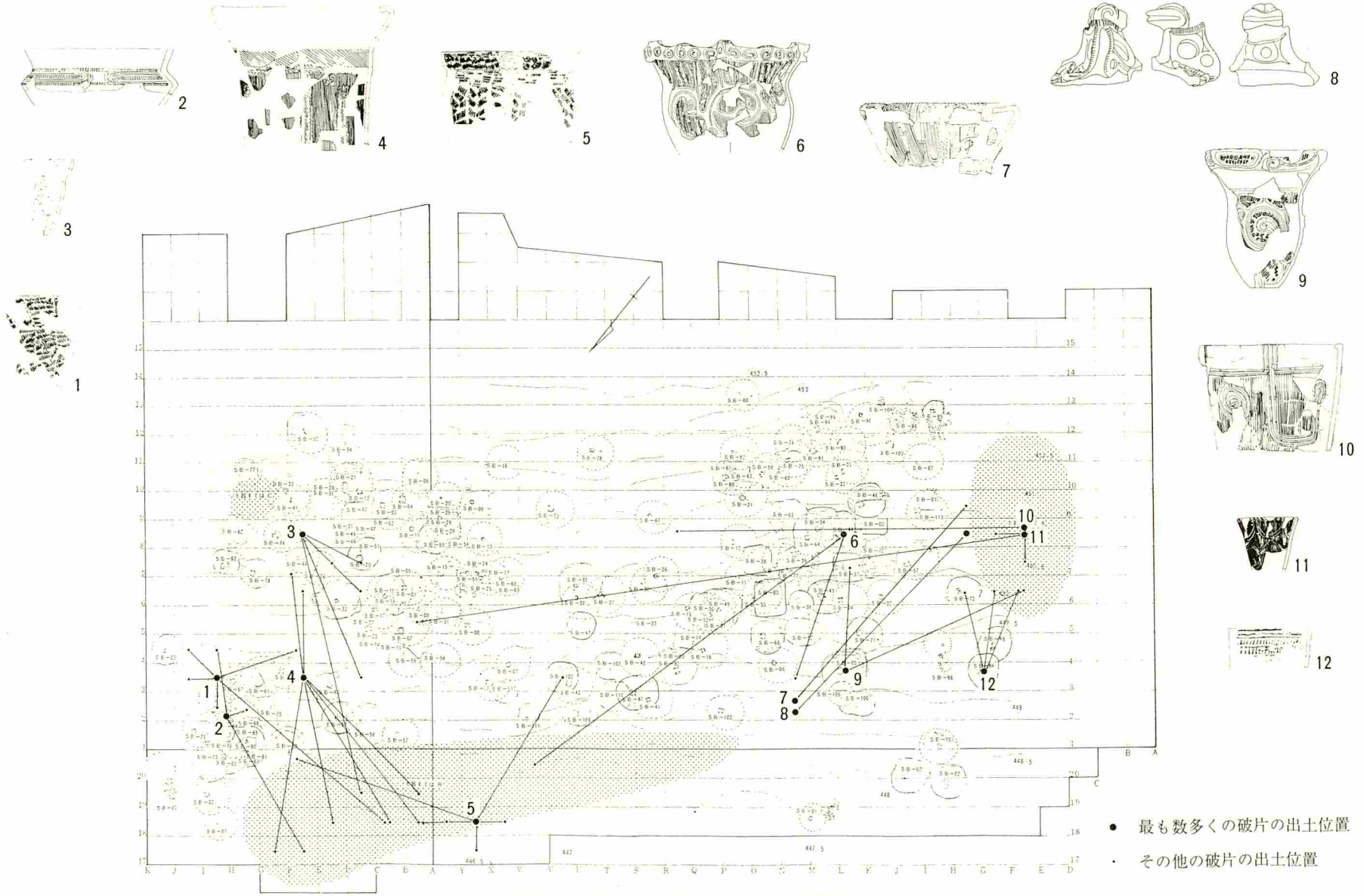


挿図32　土器すてばＡ内土器接合関係図

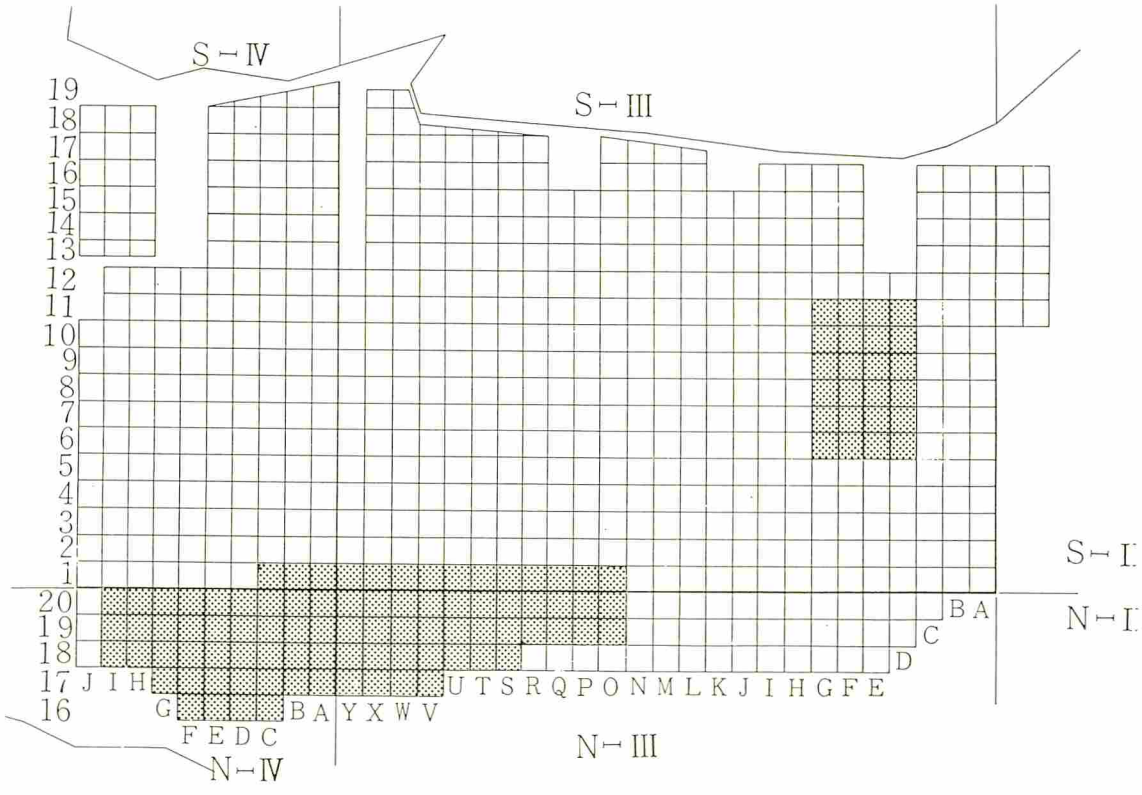
付表１．土器すてばＡ内土器接合関係図付表

接合							
接合番号	出土グリッド・土器ナンバー	概　　要	土器図版番号	接合番号	出土グリッド・土器ナンバー	概　　要	土器図版番号
1	E—12　No.2、No.3、No.7、No.11　いずれも日付は810722	曽利式の口縁部～胴部破片		15	E—8　No.1　810319 F—8　No.8　810319	曽利式初頭の土器の口縁部～胴部破片	第194図6
2	F—12、No.2　810722、No.1　810725、No.19　810722、No.3　810722、No.6　8110725	井戸尻式の胴部破片		16	E—7　No.129　810427 E—8　No.2　810312	曽利式の口縁部～胴部破片	
3	F—12　No.18　810722 No.3　810725	藤内式の口縁部～胴部破片		17	D—8　No.1　810319 No.4　810319	縄文のつく胴部～底部破片	
4	G—12　No.2　810519 No.5　810519	胴部破片		18	E11　No.4　810514 E—12、F—9	曽利式の胴部破片	
5	D—11　No.7　810519 No.13　810519	新道式の胴部破片		19	E—10　No.7　810515 E—11No.5　810512、F—12	井戸尻式の胴部破片	
6	D—11　No.8　810519 No.9　810519、No.15　810519	新道式の胴部破片		20	F—10、F—9、F—11	F—10グリッドの１ケ所に口縁部の一部が並んでいる。	第200図38
7	E—11　No.3　810514 No.15　810521			21	F—10　No.1　810319 G—8	曽利新式の胴部破片	
8	E—10　No.4　810306 E—9、F—10	曽利縄文系土器の口縁部～胴部破片	第201図43	22	F—10　No.1　810310 G—8	底部	
9	E—10　No.4　810515 F—10　No.18　810310	曽利式初頭の口縁部～胴部破片		23	F—8　No.3　810319 F—8、G—8、E—9 F—9	井戸尻式の胴下半部～底部破片	第195図9
10	F—10　No.10　810312 F—11　No.16　810515		第195図11	24	F—9、G—7	曽利式の胴部破片	第199図30
11	F—10　No.4　810310 F—11　No.7　810505 No.14　810526、No.21　810515	井戸尻式の口縁部～胴部破片	第198図28	25	F—7、D—8、E—9	曽利式の口縁部～胴部破片	第199図31
12	F—10　No.6、No.14、No.3 No.7、No.8いずれも日付は、810312	井戸尻式の口縁部～胴部破片。口縁部は１ケ所に並んでいる。	第197図18	26	E—7　No.124　810427 G—9、F—9	井戸尻式の口縁部破片	
13	F—10　No.10　810310 No.19　810310、F—9	曽利式の胴部破片	第199図33	27	E—8　No.9　810428 F—8　No.10　810319 E—9、E—10、D—8 D—9	曽利式の胴部破片	
14	F—8　No.1　810315 No.8　810315	曽利式の胴部破片		28	E—7　No.126　810427 F—9	曽利式初頭の口縁部～胴部破片	

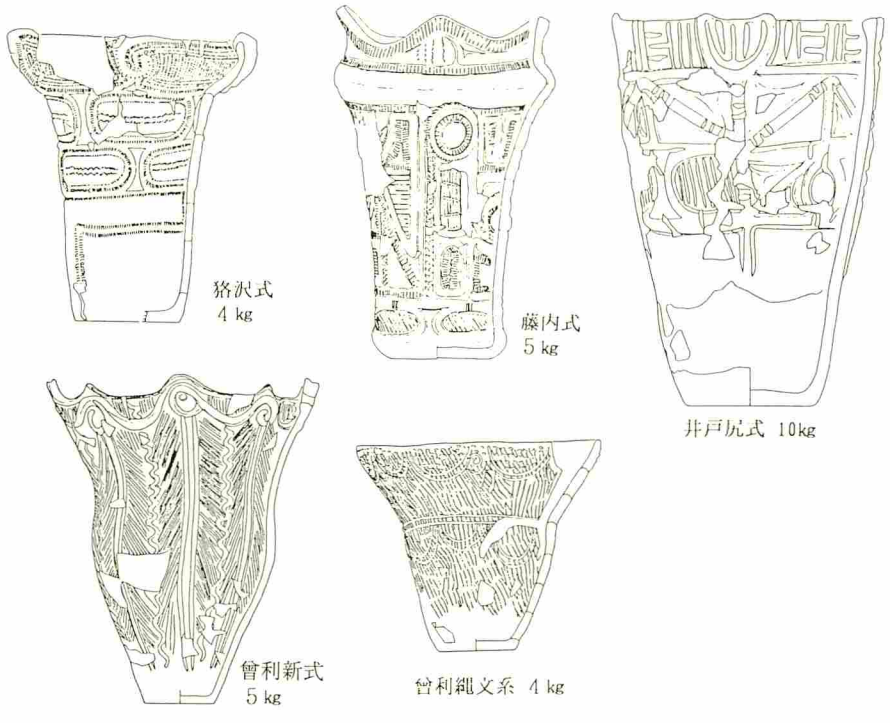
ブ　　ロ　　ッ　　ク					
ブロック番　号	出土グリッド・土器ナンバー	概　　要	ブロック番　号	出土グリッド・土器ナンバー	概　　要
A	F—12、No.17　810722	藤内式の同一土器の破片多数と、他に様々な藤内式破片	F	G—10、No.2　810309	井戸尻式の様々な口縁部・胴部破片
B	F—12、No.16　810722	藤内式の胴部破片、井戸尻式の胴部・底部破片	G	G—9、No.4　810310	井戸尻式一個体が図上でも器形が分かる程まとまっていた。残念ながら土器が行方不明となり実測図はない。
C	G—11、No.3　810508	井戸尻式の口縁部～胴部とその他の井戸尻式の口縁部数片、新道式口縁部、藤内式口縁部破片	H	F—8、No.3　810319	井戸尻式の口縁部～胴部（第195図８）。他に別個体の井戸尻式の胴下半部破片があり、それが23番の接合関係を示した（第195図９）。
D	G—11、No.10　810508	井戸尻式一個体の口縁部～胴部、底部（第196図13）。別の井戸尻式破片が図示した接合関係を持つ。他に様々な井戸尻式破片	I	D—9、No.3　810313	加曽利Ｅ式の口縁部～胴部（第201図49）。
E	G—10、No.1　810309	曽利式初頭の一個体（第198図27）の他、井戸尻式の底部、把手、胴部など様々な破片			



挿図33　土器すてば関連の広域接合関係図



挿図34　土器すてばグリッドの設定



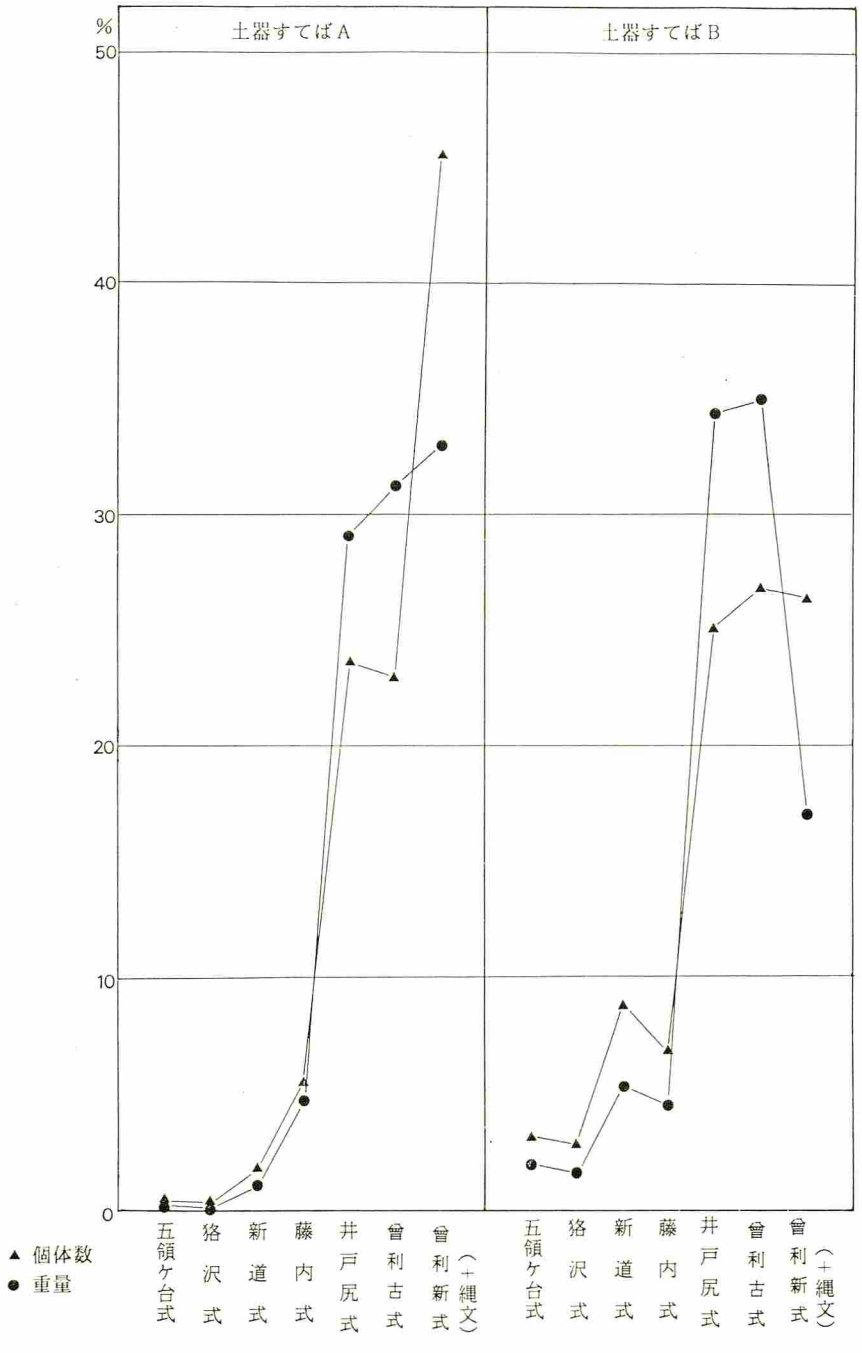
挿図35　土器の重さ

時期	グリッド層重量 g	土器すてば A+Bg	土器すてば A g	土器すてば B g	土器すてばA			土器すてばB		
					個数	図	計	個数	図	計
五領ヶ台式	238164	118778	5140	113638	1.3	0	1.3	28.4	1	29.4
狢沢式	161463	95300	4427	90873	1.1	0	1.1	22.7	3	25.7
新道式	550506	323366	22350	301016	5.6	0	5.6	75.3	5	80.3
藤内式	757568	342084	86685	255399	17.3	0	17.3	51.1	11	62.1
井戸尻式	2775497	972120	251485	720635						
無文	3185508	1507324	275330	1231994						
計	5961005	2479444	526815	1952629	52.7	22	74.7	195.3	32	227.3
曽利古式	2501095	1001990	269980	732010						
無文	2870590	1547336	295895	1251441						
計	5371685	2549326	565875	1983451	56.6	16	72.6	198.3	45	243.3
曽利新式	2746976	668780	315445	353335	63.1			70.7		
加E縄文	2011428	898868	281415	617453	70.3			154.3		
計	4758404	1567648	596860	970788	133.4	11	144.4	225	15	240.0
中期計	17798795	7575946	1808152	5667794			317.0			908.1
(堀之内)	314245	77290	45905	31385						

付表2　土器重量・個体数基礎データー覧表

	重量		個体数	
	土器すてばA	土器すてばB	土器すてばA	土器すてばB
五領ヶ台式	0.3%	2.0%	0.4%	3.2%
洛沢式	0.2	1.6	0.4	2.8
新道式	1.2	5.3	1.8	8.8
藤内式	4.8	4.5	5.5	6.8
井戸尻式	29.1	34.4	23.6	25.0
曽利古式	31.3	35.0	22.9	26.8
曽利新式	17.5	6.2		
縄文	15.6	10.9		
(新式+縄文)	(33.0)	(17.1)	(45.6)	(26.4)
計	100.0	100.0	100.0	100.0

付表3　土器すてば内時期別重量・個体数の割合



挿図36　土器すてば内重量・個体数の変遷

土器すてば内接合関係について

挿図32に線引きして示した接合関係のうち１番～17番を類型(2)（比較的狭い範囲で接合する）、18番～28番を類型(3)（比較的広い範囲で接合する）とした。挿図32は確認し得た接合関係全てを網羅した訳ではない。ごく近くの接合例、ナンバーが無いので出土地点が再確認できない破片ばかりの接合例などで省いたものがある。図の線の先を点線としたのは、グリッド一括で上げた、ナンバーの無い破片との接合を示す。

さて、接合距離の長短から二類型に分けた形となったが、想定し得る廃棄行動にも差異がある。

(2) 一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄の際に狭い範囲に散らばった。あるいは一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄後小規模な攪乱を受けた。

(3) 同一土器の破片が別の機会に廃棄された。あるいは一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄後大規模な攪乱を受けた。

主に(2)を単位廃棄、(3)を同一土器の別機会の廃棄と結びつけた。近くに散らばっていたとしても、別々の機会に廃棄された可能性を否むものではないが、ここではその別々の廃棄の意味が重要である。これは集落内において既にバラバラになっていた土器の破片が、それぞれ別個に清掃せられて、別の機会に土器すてばに運ばれたことを示すと考える。類型(2)・(3)もまた集落内の日常的な清掃活動と結びつける解釈が可能である。

攪乱についてつけ加えれば、土器すてばＡは杭の13列から７列の方向に傾斜しているが、傾斜方向の接合関係ばかりでなく直交方向のそれも多い。自然の営力による攪乱を特別に重視する必要はないと考える。一方、すてば中心部に破片の集中著しく、ブロックの認定が困難であったことは、その部分の人為的攪乱が激しかったことを示していると考える。

以上、土器すてばＡ内の接合関係を中心に考察した結果、集落内の日常的な清掃活動による廃棄を想定するに至った。既に土器捨て場をゴミ集積場として位置付けた中野修秀氏の論文があり（中野1984）、集落内における清掃行為をも考慮している。釈迦堂の土器すてばに即した筆者の解釈も、中野氏の見解を基本的に支持している。(8)

土器すてば内外の広域接合関係について

土器すてばＡ・Ｂについて類型(4)の事例（土器すてば外と接合関係を持つ）を挿図33に図示した。全ての事例を示した訳ではなく、典型的かつ顕著なものを選び出している。

出土位置の組み合わせは様々である。

・土器すてばと住居址（覆土）

挿図33の２、６、９、12番

・土器すてばと土壙（覆土）とグリッド

４番

・土器すてばとグリッド

１、３、５、７、８、10、11番

前項で述べた様な清掃活動に即して言えば、既に破損し散在していた土器破片の一部が清掃されて土器すてばに廃棄され、一部が住居址や土壙の覆土中に廃棄され（あるいは流入し）、一部は清掃されずに残った。攪乱要因まで考慮すれば、土器破損後の破片の行方はそれこそ千差万別であったことになる。

さて、土器すてば内外に亘る接合関係を調べるについては、筆者はいくつかの見通しを持っていた。まず、三口神平地区の集落の二極（半月形を呈する集落の両端部の住居址密集地）と土器すてばＡ・Ｂが、各々対応することが証明できないかと考えた。確かに土器すてばとそれに近い住居址密集地との接合関係が一般的である。しかし６番の様な例外もあり、いちがいに模式的な解釈はできない。また逆に、二つの土器すてば間で頻繁に接合して、三口神平地区集落全体が二つの土器すてばを共用したことを証明できないかとも考えた。が、接合作業の中ではその様な事例は確認し得なかった。よって、土器すてばＡ・Ｂの使い分けという点に関しては、その是非いずれも確証を持ち得なかった。

土器すてば内外に亘る広域接合関係は、予想以上に数多く接合距離も大きかった為、興味深いものであった。し

かし、土器すてばの破片と接合する土器が住居址から出ているからと言って、その土器がその住居址に帰属するものと決めつけられないのは明白なことである。よって接合関係から集落（居住区域）と土器すてばの具体的な関係を推察することは、非常に難しいことだと思われた。

4．土器すてばにおける土器の重量計算・個体数試算の結果について

――土器すてばの動態――

先述した通り、時期別・グリッド毎の土器重量計測値を利用して、土器すてば出土土器の数量的把握に努めた。土器すてばの機能の実態ならびに集落と結びついた動態を知る上で、この分析は思いの外有効であった。以下にその詳細を述べる。

基礎データ作製の過程について

基本となったのは挿図41～挿図46の数値である。膨大な量の土器破片が計測対象となった訳だか、破片を仕分けする作業の分類項目は、五領ヶ台式・狢沢式・新道式・藤内式・井戸尻式・曽利ⅠⅡ式・曽利ⅢⅣⅤ式・縄文（加曽利Ｅ式と曽利縄文系土器）・無文、とした。作業の過程では所謂井戸尻編年を使用したが、のちに曽利式については別個の体系を考えるに至った。曽利ⅠⅡ式としたものは概ね曽利古式、曽利ⅢⅣⅤ式（Ⅴは少量）は概ね曽利新式にあたるとして、以下は曽利古式・新式の呼称を用いる。

まず、土器すてばＡ・Ｂの範囲として挿図34のスクリーントーン部分を設定する。土器すてばの範囲は本来グリッド毎に一線を画すことができるものではない上に、時期による広狭も当然考えられる。しかし量的比較を行なう便宜上、妥当と思われる画一的な範囲を限定する必要があった。

続いて、土器すてばＡ・Ｂ出土土器の総重量を、時期別に算出する。なお三口神平地区全体の総重量については、実は住居址・土壙内出土土器を計測に含めていない。また全グリッドにおいて、石膏復元できるほど残りの良いものは抜き出したあとで計測している。故にこの分析の数字はスタートから限定性を帯びていることを認めざるを得ない。分析の中ではこの限定をできるだけ考慮に入れたり補正したりするべく努めた。

大量の無文破片については、井戸尻式と曽利古式の両者に、その重量比に従って振り分けた。両型式は口縁部・胴下半部などに大きく無文部を有する。加曽利Ｅ式（曽利縄文系）の縄文の破片は、曽利新式に平行するものが多いと考え、適宜、曽利新式に含めて扱う。この二点の操作は、無視できない量の無文もしくは縄文の破片を、どうにかデータとして生かそうとして行なった措置である。

土器の重量は、時期別に土器の大きさにかなりの差異がある為、単純に比較できない。そこで試みに各時期の土器すてばに含まれた土器の重量を土器個体数に置き換えて、比較の基礎とすることにした。個体数は、各型式の１個体あたり平均重量値で総重量を割れば出てくる。問題はその平均重量である。その型式に平均的な大きさで、しかもほぼ完形を保っている土器の重さを測ればよい訳だが、復元個体が千個を超えた釈迦堂においても、適格なのは数個にすぎなかった。挿図35にあげた土器の重さと、筆者の経験にもとづいて、各型式の平均的な重量を以下の様に決めた。

五領ヶ台式	4 kg	井戸尻式	10kg
狢　沢　式	4 kg	曽利古式	10kg
新　道　式	4 kg	曽利新式	5 kg
藤　内　式	5 kg	曽利縄文系	4 kg

この値はその絶対的な数字よりも、相対的な関係の方が重要であると考える。

各時期の個体数計算の際、石膏復元され報告書に図が掲載された土器について、その個数を数えて加算した。先に述べた通り、これらは最初に破片と区別され、重量計算の対象とならなかったものである。

以上の手続きを経て作製した基礎データを一覧表とした（付表２）。「個数」とは計算で出した個体数、「図」とは報告書に実測図が載っている個体数である。付表２のデータをもとに分析を行なうが、計算は四則演算の域にとどまる簡単なものである。

遺跡における土器の重量計算の重要性・可能性については小林謙一氏の論文がある（小林1983）。小林氏は数量的把握の目的としていくつかをあげているが、その３番目「遺跡内における土器の数量的な分布や、遺構ごとの土器量の把握より遺跡の空間的な利用のされ方に関するアプローチを行う。」が最も実を結ぶことができるだろうと筆者は考える。釈迦堂の土器すてばは、集落の中でいかに利用された空間であったのか。

分　　析

◦土器すてばに包含される土器の量

重量計算によれば、中期全体の（厳密には遺構外出土）総重量は17.8トンに及ぶ。うち7.6トン（42％）が二つの土器すてばに包含される。土器すてばＡとＢの中期重量比は、ほぼＡ：Ｂ＝１：３となる。ちなみにＡとＢの面積の比は18グリッド：85グリッド＝１：4.7である。

時期毎に、全体の総重量に対する土器すてば包含量（Ａ＋Ｂ）の割合をみると

五領ヶ台式	50％
狢　沢　式	59％
新　道　式	59％
藤　内　式	45％
井戸尻式	42％
曽利古式	48％
曽利新式	24％
（曽利新式＋縄文	33％）

となり、一貫して、住居址・土壙に含まれた分を除いた土器量の４割から６割が土器すてばに集中したことになる。中期の終わり、曽利新式期に割合が半減しているのが注意されるが、縄文を含めた割合の方を問題とすべきである。それにしても３分の１である。

曽利新式期の一部の時期に土器すてばＣが出現するので、それに補完される可能性がある。そこでＳ－Ⅳ区Ｇ－９グリットを中心とする９つのグリッドを土器すてばＣとして重量計算し、それを加えた土器すてば包含量の割合を出すと約38％であった。いかんせん曽利新式期に土器すてば包含量の割合が減ることは否めない様である。

◦土器すてばＡとＢの比較

土器すてばＡとＢを比較してみたらいかがであろうか。先に算出した個体数をもとに、時期別に対比させてみる。

土器すてばＡ・Ｂ　個体数の比

	Ａ	Ｂ	
五領ヶ台式	4％	96％	（１：22.6）
狢　沢　式	4	96	（１：23.4）
新　道　式	7	93	（１：14.3）
藤　内　式	22	78	（１：3.6）
井戸尻式	25	75	（１：3.0）
曽利古式	23	77	（１：3.4）
曽利新式＋縄文	38	62	（１：1.7）

パーセンテージ比と、（　）内にＡの個体数を１としてみた比を出してみたが、この結果が興味深い。同様な数値を示す三つの時期のまとまりに、分けて考えることができそうである。

・五領ヶ台式・狢沢式・新道式期

土器すてばＢに対し、Ａの割合が極端に低い。これを土器すてばの機能という語に置換えて説明すると、土器すてばＢの機能が非常に高い時期ということになる。

・藤内式・井戸尻式・曽利古式期

土器すてばＡとＢの比が１：３程度で安定している。即ち、土器すてばＡとＢが同等に機能している。

・曽利新式期

土器すてばＢの割合が半減する。即ち、土器すてばＢの機能が相対的に低下したことになる。

三つの時期とその画期を解釈してみる。五領ヶ台式・狢沢式期は土器すてばＡは存在していなかった。Ａは藤内式期に機能を確立している。Ａの出現の画期は藤内式期よりもむしろ新道式期と考えている。藤内式から曽利古式期まで、ＡとＢは同等に廃棄の対象となる。曽利新式期には、土器すてばＡの機能が高まり、相対的にＢの機能は低下する。この様に解釈することによって、土器すてばＡとＢの相対的な動態が把握できたことになる。

◦土器すてばＡ・Ｂの消長

各土器すてばの消長を、より具体的に示すことはできないであろうか。各々について、すてば全体を100として、時期毎の重量・個体数の割合を計算した結果が付表３、グラフ化したのが挿図36である。

Ａ・Ｂともに曽利古式までは同様な変遷を示すと考える。即ち、Ａ・Ｂともに新道・藤内式期に若干、次の井戸尻式期に急激に割合を増やし、曽利古式期に続く。しかし、曽利新式期に至り土器すてばＡとＢの差が顕著となる。土器すてばＡはそのまま増加し特に個体数の割合の増加が著しいが、土器すてばＢの重量の割合は半減しているのである。

先の分析で曽利新式期に土器すてばＢの相対的な機能の低下を述べたが、それと同質の結果となった。ただし、土器すてばＢ自体についてみると、重量の割合は半減するが、個体数をみるとほとんど減っていない。ということは、曽利新式期に土器すてばＢの機能は決して低下したのではなく、むしろ土器すてばＡの機能が著しく増大したという面を、強調するべきであろう。

分析結果のまとめ　　――集落の変遷と土器すてば――

釈迦堂遺跡・三口神平地区においては、中期初めの五領ヶ台式・狢沢式段階では土器すてばはＢのみであった。[9] これは住居址の位置を見ると首肯されることであって、この時期の住居は集落西側つまり土器すてばＡの近辺にはまだ存在していないのである（挿図９、挿図10）。新道式段階で始めてＳ－Ⅲ区ＳＢ－95が西側に出現し（挿図11）、廃棄の場が用意される必然性が生ずる。土器すてばＡがまさに形成され始めた時期は新道式期に求めるのがよいであろう。藤内式の段階には数棟の住居が西に伸びて、集落は二極に分かれる（挿図12）。この時期には土器すてばＡは廃棄の場として確立し十分に機能を果している。そしてこの土器すてばＡが、集落の西縁を限るものとなったことにも意義がある。

土器すてばＡ・Ｂともに、井戸尻式段階に土器量が飛躍的に増大した。これは井戸尻式・曽利古式の土器の本来的な大きさにも由来するであろうが、当該期の土器生産量・消費量の増大として考えることもできる。住居址の数も多い（挿図13～挿図17）。

曽利新式段階に至ると、土器すてばＡの機能が著しく高まる。この時期の住居は比較的集落西側に多く、東側に少ないこと（挿図18～挿図22）と関連させて説明することが可能である。さらにこの時期には土器すてばＣも存在している。

ちなみに後期・堀之内式の時期には、土器すてばＡとＢの重量は逆転している。後期について安易な言及は避けるが、土器すてばＢは中期終末に相対的に機能を減じ、後期に入っては廃棄の場としての使命を終息していたと考えられるのではないだろうか。

５．要約と展望

記述が繁雑になってしまったので、簡単に要約する。

◦釈迦堂遺跡群・三口神平地区の土器すてばＡ・Ｂについて、土器の接合関係の類型をもとに、往時の廃棄行動の復元を試みた。同一個体の土器がまとまっている場合は、土器の破損を動機とした廃棄を想定できる。単位廃棄

と認定できるブロックの内部に別個の土器さらには異型式の土器が含まれる場合は、集落内の破片の取り集め作業つまりは清掃活動を想定できる。同一個体の土器の破片が広い範囲で接合する場合は、それらが別の機会に廃棄されたであろうこと、即ち集落内で別々に清掃されたであろうことを想定できる。以上の様に筆者は、土器の破損・集落内清掃というごく普通に生じ得る動機にもとづく、ごく日常的な廃棄行動の集積が土器すてばであると考えた訳である。

・土器の重量計算・個体数試算の分析は興味深い結果をもたらしてくれた。土器すてばBが中期初頭から廃棄の場として機能していたのに対し、土器すてばAは藤内式期に土器すてばBと同等の機能を確立した。その出現の画期は前段階の新道式期に求められた。これは住居の西側への進出、つまり居住空間の拡大と関連づけられた。井戸尻式～曽利古式は土器すてばの土器量が増大し、土器すてばAとBは同等に機能している。曽利新式には土器すてばAの機能の増大著しく、相対的にBの機能が減じたが、これもまた住居が西側に多かったことに結びつけられた。以上の様に土器すてばの動態と集落の動態を関連させて論ずることができたのである。

最後に、現在までの土器捨て場の報告事例[10]に基づいて、若干のまとめと今後の方向性について述べてみたい。

土器捨て場は次の様な性格を持つ。

・異型式に属する土器が、平面的にも層位的にも混在している。

・ほとんどが破片の形で存在する。完形土器はほとんど、あるいは全く含まれない。

・破片が散在するのに対し、完形土器や大形破片は同一地点につぶれることが多い。

・破片の接合距離は大きい。

上記の特徴は筆者の管見した限りの報告例のほとんど全てに共通する。釈迦堂にも全てあてはまる。すると基本的な土器捨て場像が明らかに見えてくる。今後はこの像をきちんと把握して土器捨て場を普遍的に論ずる必要がある。この様な廃棄の場を持つ集落がいかなる性格のものであるか、定住性の問題を含めて論ずる必要がある。

従来の報告が言及した問題のいくつかを述べる。まず、土偶に代表される特殊遺物の集中を以て土器捨て場に宗教的意味を持たせる意見であるが、釈迦堂遺跡群・三口神平地区においてはそれを支持する積極的な根拠を得られなかった。土偶は土器すてばにも多いが、住居址覆土にも多い。つまり土器をはじめとする遺物が高い集中を示す所にまた土偶も集中するのであり、土偶のみに意味を持たせることはできない。ただし往時の廃棄行動が何らかの宗教的意識に裏打ちされていた可能性を否定することはできず、そういったメンタルな部分にいかにアプローチしていくか、今後の課題となる。

次に、廃棄論の最重要問題は吹上パターンの理解であろう。同じく廃棄の場としての土器捨て場と、廃絶住居のくぼみとを比較し、その異同に言及した報告例もある（細田1982、長沢1986）。三口神平地区で認識した通り吹上パターン住居の遺物と土器すてばの遺物の内容に差異がないとすれば、両者の差異を廃棄の動機（廃棄の時）の違いに求めるのも一案であろう。敢えて言えば、日常生活の必要に応じて常に廃棄の場であった土器捨て場に対し、一住居の廃絶を機縁としてその住居の什器を一括して埋め戻したのが吹上パターン（の所謂完形一括廃棄）ではなかったか。いずれにせよ吹上パターンの内容の整理を待って、さらに議論を進めるべきである。

6．おわりに

この論稿は、筆者が1987年度東京大学大学院藤本強教授の演習において発表した内容をまとめたものである。貴重な助言を与えてくださった藤本教授はじめ先輩後輩諸氏に感謝する。

註

(1) 土器すてばCは時期的に限定される土器が小規模に集中する。一方土器すてばA・Bは遺跡に存在する全型式を網羅し、規模も大きい。

(2) 三口神平地区には前期初頭・下吉井式期の住居址10棟が存在するが、五領ヶ台式までの空白期間の長さを考慮すれば、土器すてば

を中期の所産と考えてよかろう。

(3) 土器すてばBについても多数の接合関係を確認しているが、接合図を作るところまで作業を進めることができなかった。

(4) 小林達雄氏は、土器廃棄の認定は出土状況の検討により果されるとしてパターン論を展開した（小林1974）。同じ論文の中で土器廃棄の3つのケースが想定されており、そのうちケース1と3がパターンD（可児1969の平和台パターン）と結びつけられている。以後に説明する筆者の分析から導かれた廃棄行動も、小林氏の想定と共通した部分があった。小林氏の論の主眼は吹上パターンの理解にあった訳だが、廃棄の動機や時（特定の時の有無）に言及する点など筆者にとって参考になった。

(5) 直接接合しなくとも明らかに同一個体と識別した例を含む。

(6) 厳密には完形と言える土器は皆無である。口縁から底まで一通り残存し原形がわかる程度にまとまって出土したものを完形と呼ぶことにするが、この例も少ない。

(7) 所沢市高峰遺跡の報告（並木他　1984）では廃棄の同時性を認定すべきブロックについて、その内容を検討している。

(8) 集落景観の復元を重視する中野氏はかなり具体的な陳述をする。「ゴミ」の内容として生ゴミや木の葉、枯れ枝等を含めたゴミ捨て場像を構築しているが、釈迦堂における分析ではそこまで論を進めることができなかった。よってゴミという語の使用も避けた。中野氏の論で注目すべきはむしろ、一次廃棄としての住居周囲への廃棄と、二次廃棄及び多次廃棄による土器捨て場への廃棄という図式を描いたこと、後者の一環として祭祀遺物混入の意味を考えたことであろう。

(9) ただし土器すてばBの位置は五領ヶ台式期の住居とはだいぶ離れている。この時期に土器すてばBの存在を想定するには無理があることも確かである。その場合、S－Ⅳ区SB－73の出現する狢沢式期をBの初現と解釈することができる。しかしここでは叙上の様な計算結果を論拠としているため、特に五領ヶ台式と狢沢式の両期を区別することはしないでおく。

(10) 参考とした報告事例は、東京都新山遺跡（後藤1981）前田耕地遺跡（松井他1981）多摩ニュータウンNo.3遺跡（小薬1982）東寺方遺跡（山崎他1983）埼玉県増善寺遺跡（細田1982）高峰遺跡（並木他1984）神奈川県帷子峯遺跡（柴他1984）山梨県釈迦堂遺跡群野呂原地区（長沢1986）長野県扇平遺跡（会田他1974）荒神山遺跡（伴他1974）与助尾根南遺跡（鵜飼他1980）居沢尾根遺跡（青柳他1981）などである。

引用参考文献

会田　進　他　1974　『扇平遺跡』岡谷市教育委員会

青沼博之　他　1981　「居沢尾根遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――原村その4――』長野県教育委員会

鵜飼幸雄　他　1980　『与助尾根南遺跡』茅野市教育委員会

可児通宏　　1969　「住居の廃絶と土器の廃棄」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』多摩ニュータウン遺跡調査会

小薬一夫　　1982　「埋没谷における中期の遺物出土状態」『多摩ニュータウン遺跡――昭和56年度――（第5分冊）』東京都埋蔵文化財センター

後藤祥夫　　1981　「新山遺跡における遺物遺存状態の観察」『新山遺跡』東久留米市教育委員会

小林謙一　　1983　「遺跡出土の土器の量的把握に関する試論」異貌第10号

小林達雄　　1974　「縄文世界における土器の廃棄について」國史学第93号

柴　　哲　他　1984　『帷子峯遺跡』横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会

長沢宏昌　　1987　『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第22集

中野修秀　　1984　「土器捨て場考(1)」日本考古学研究所集報Ⅵ

並木　隆　他　1984　「高峰遺跡の調査」『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集　所沢市教育委員会

伴　信夫　他　1974　「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――諏訪市その3――』長野県教育委員会

細田　勝　　1982　「遺物包含層（土器捨て場）について」『増善寺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集

松井和浩　他　1981　『前田耕地Ⅲ』前田耕地遺跡調査会　秋川市教育委員会

山崎和巳　他　1983　『東寺方遺跡』多摩市教育委員会

まとめの参考文献

早期末～前期初頭の土器

渋谷昌彦　1982　「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11
　　1983　「神之木台・下吉井式土器の変遷」『小田原考古学研究会会報』11

中期前半の土器

佐藤達夫　他　1975　「勝坂式成立の問題点」『北奥古代文化』8
谷井　彪　1977　「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察（前）（後）」『信濃』29－4・6』
鈴木保彦　1981　「勝坂式土器」『縄文土器大成』2
谷井　彪　他　1982　「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財事業団
寺内隆夫　1984　「角押文を多様する土器群について」『下総考古学』7
小林謙一　1984　「中部・関東地方における勝坂阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』19
下総考古学研究会　1985　「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
鈴木保彦　1985　「勝坂式土器の展開」『日本大学芸術学部紀要』
森本伊知郎　1985　「勝坂式土器の文様構成について」『信濃』37－4
三上徹也　1986　「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51

中期後半

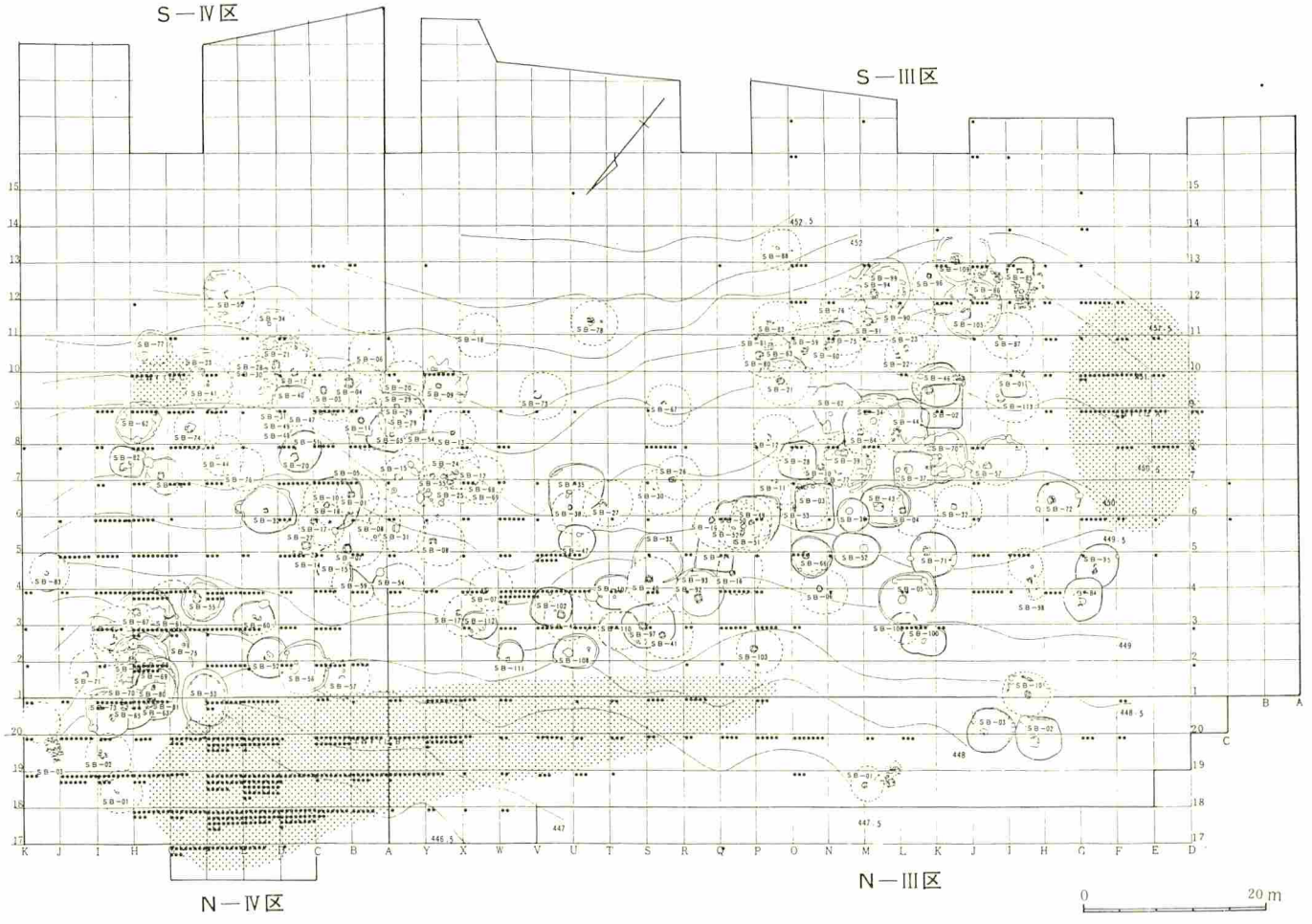
能登　健　石坂　茂　1980　「重弧文土器の系譜」『信濃』32－4
神奈川考古同人会編　1980　「縄文中期後半の諸問題－土器資料集成図集」『神奈川考古』10
米田明訓　1980　「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』17－1
神奈川考古同人会　1981　「縄文中期後半の諸問題」『神奈川考古』11
末木　健　1981　「曾利式土器」『縄文文化の研究』4
米田明訓　1986　『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第13集
長沢宏昌　1986　「曾利Ⅰ式大渦巻把手成立の一要因」『山梨県考古学論集』Ⅰ
三上徹也　1987　「唐草文土器の成立とその分布」『歴史手帳』

埋甕

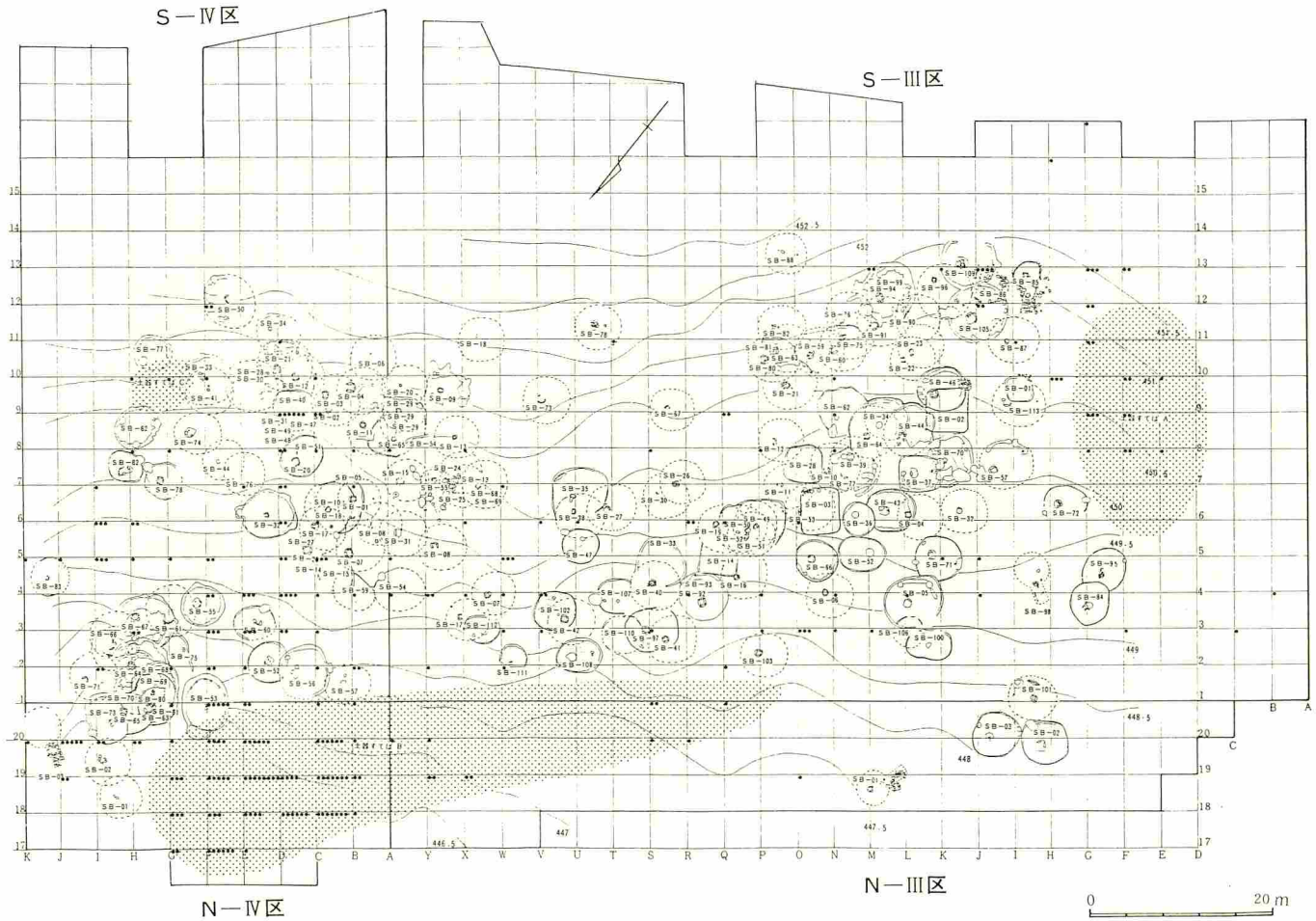
猪越公子　1973　「縄文時代の住居址内埋甕について」『下総考古』
佐藤　洋　1976　「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』27
田中　信　1982　「埋甕形態論」『土曜考古』6

耳飾り

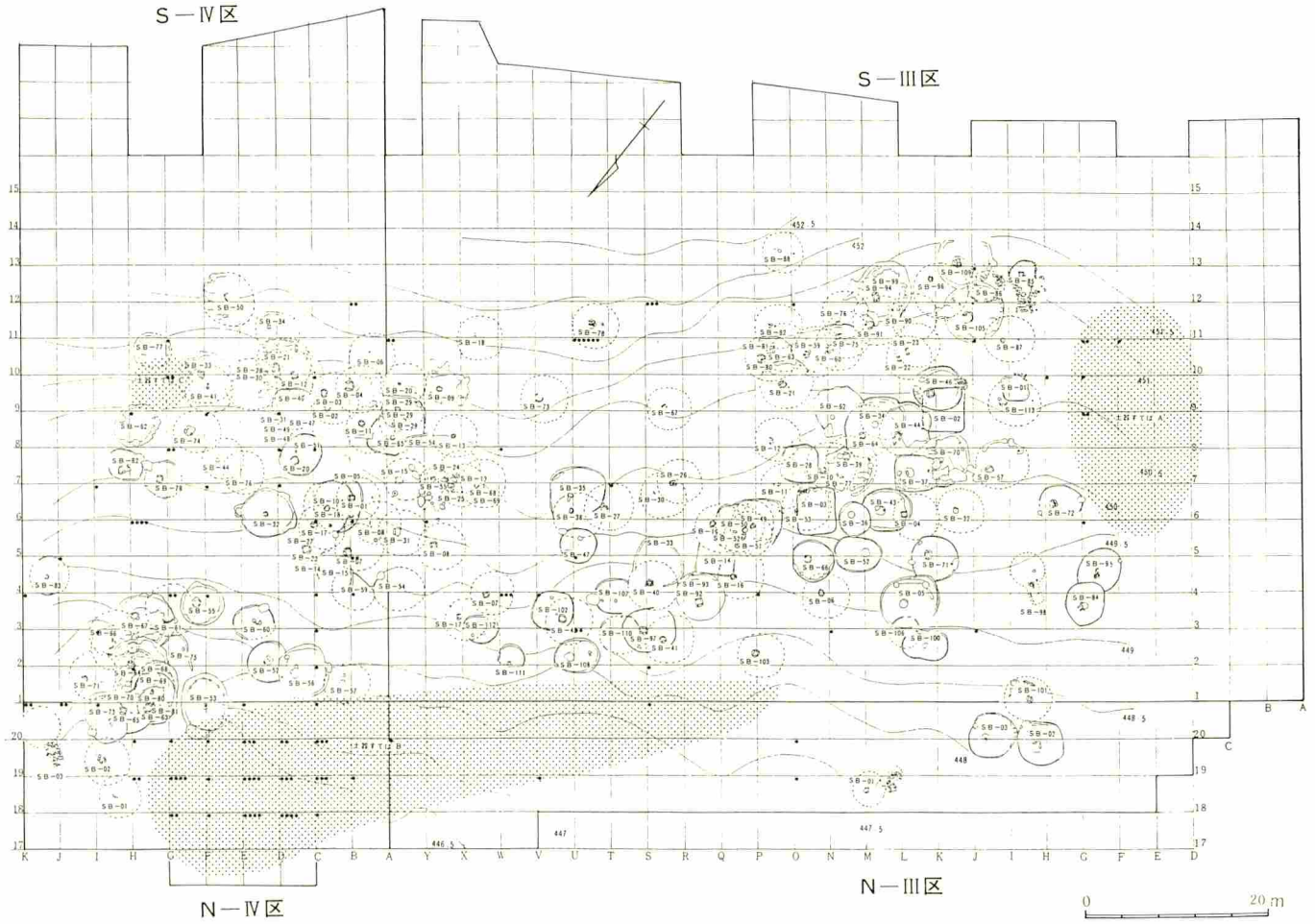
高山　純　1967　「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」『人類学雑誌』73－4
藤田富士夫　1971　「耳栓の起源について」『信濃』23－4
百瀬長秀　1979　「土製耳飾に関する諸問題」『信濃』31－4



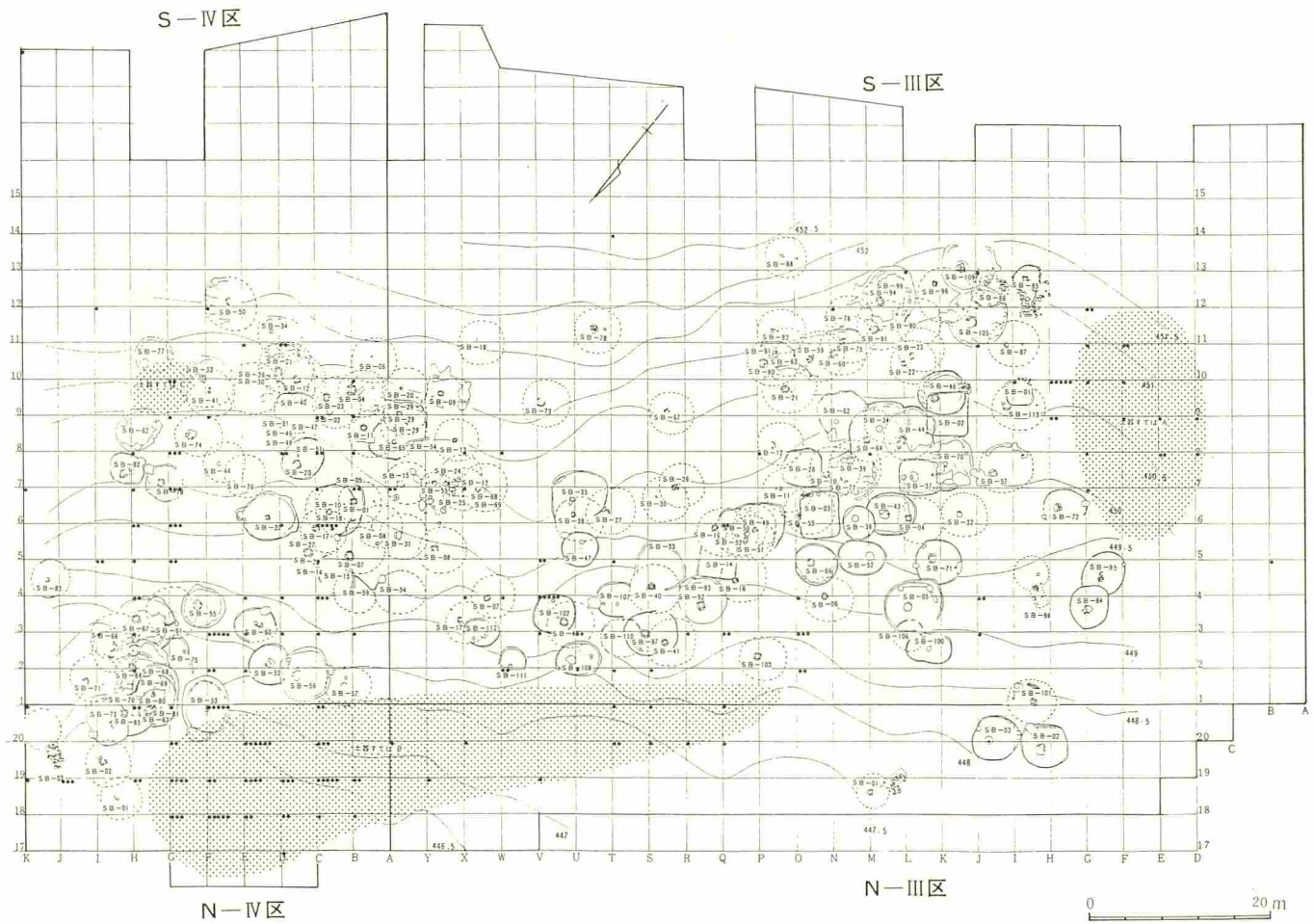
挿図37　釈迦堂S－Ⅲ区S－Ⅳ区N－Ⅲ区N－Ⅳ区土製円盤分布図



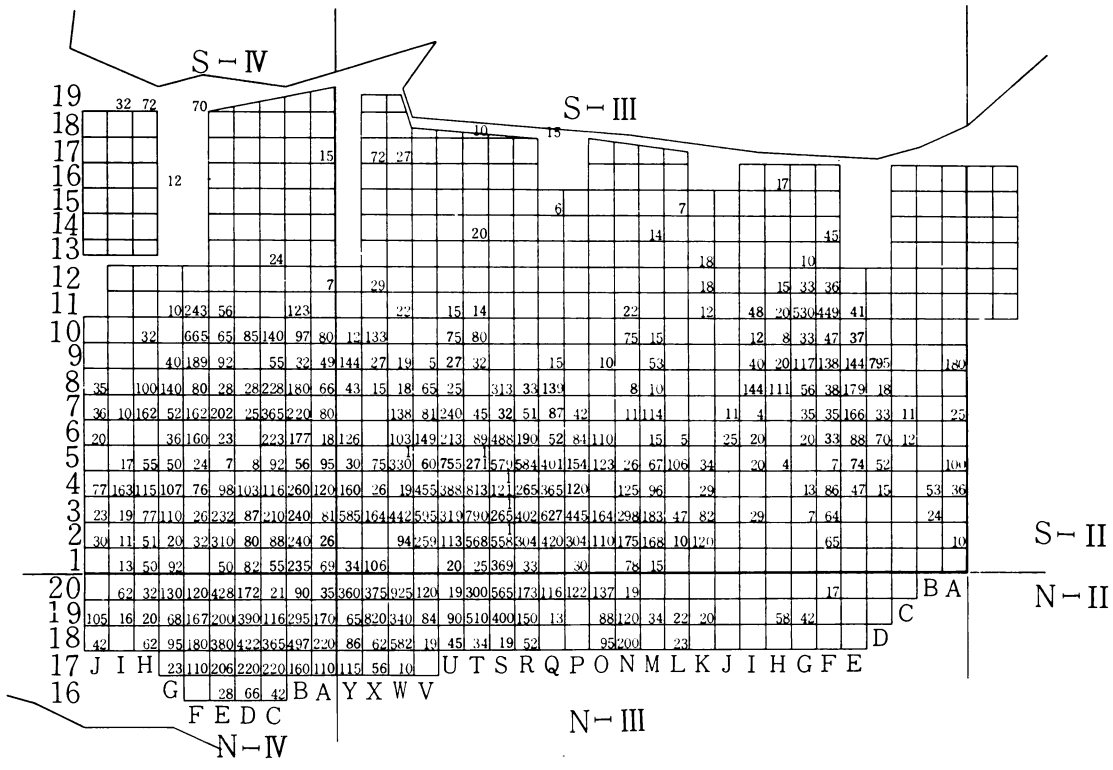
挿図38　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区有孔鍔付土器分布図



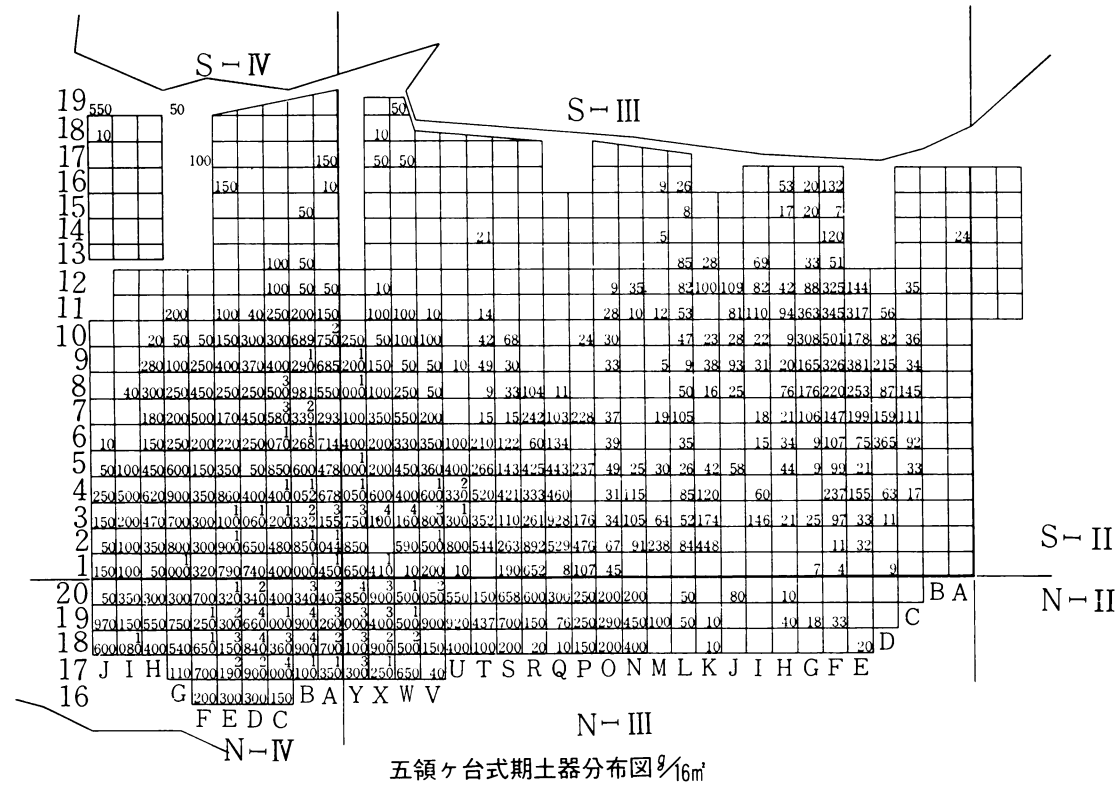
挿図39　釈迦堂S－Ⅲ区S－Ⅳ区N－Ⅲ区N－Ⅳ区粘土塊分布図



挿図40　釈迦堂S－－Ⅲ区S－Ⅳ区N－Ⅲ区N－Ⅳ区台形土器分布図

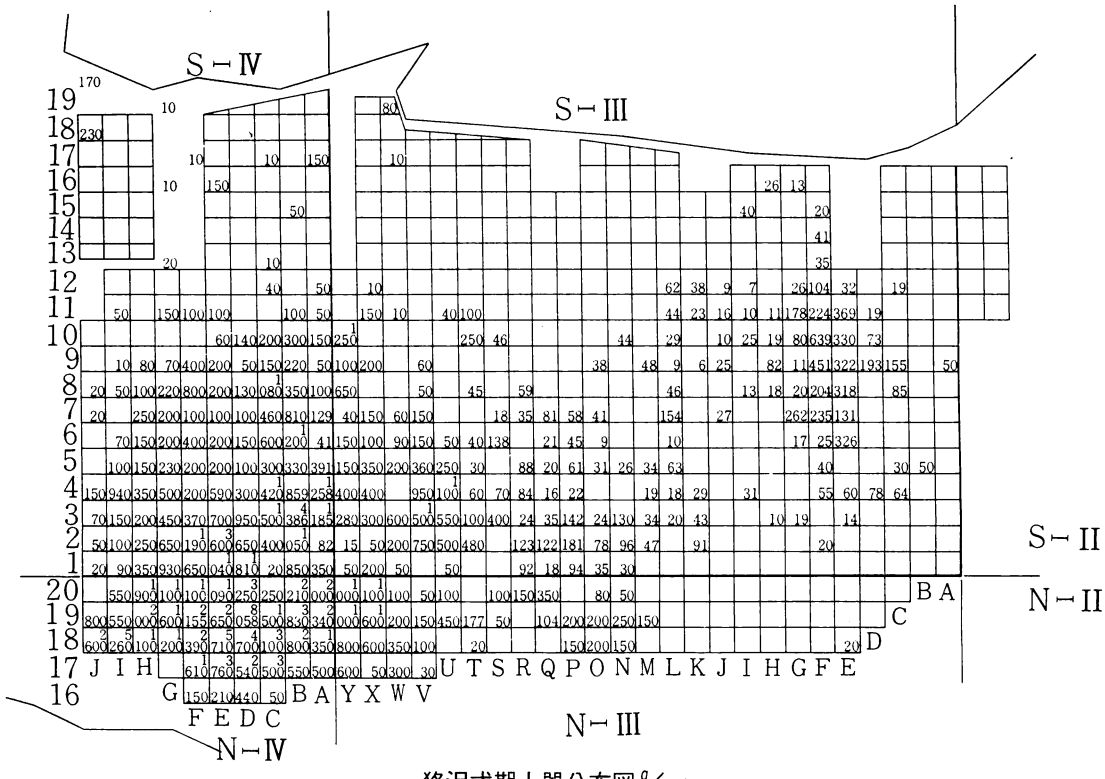


釈迦堂Ｚ２式期土器分布図 g/16㎡

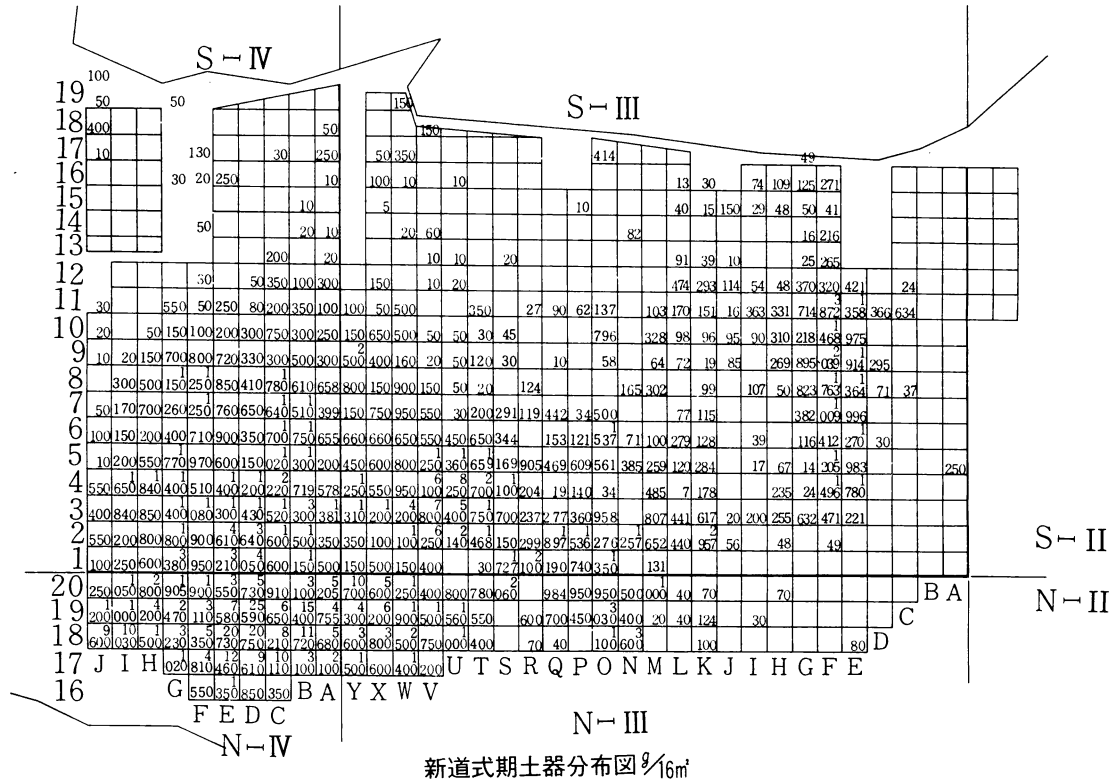


五領ヶ台式期土器分布図 g/16㎡

挿図41　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(1)

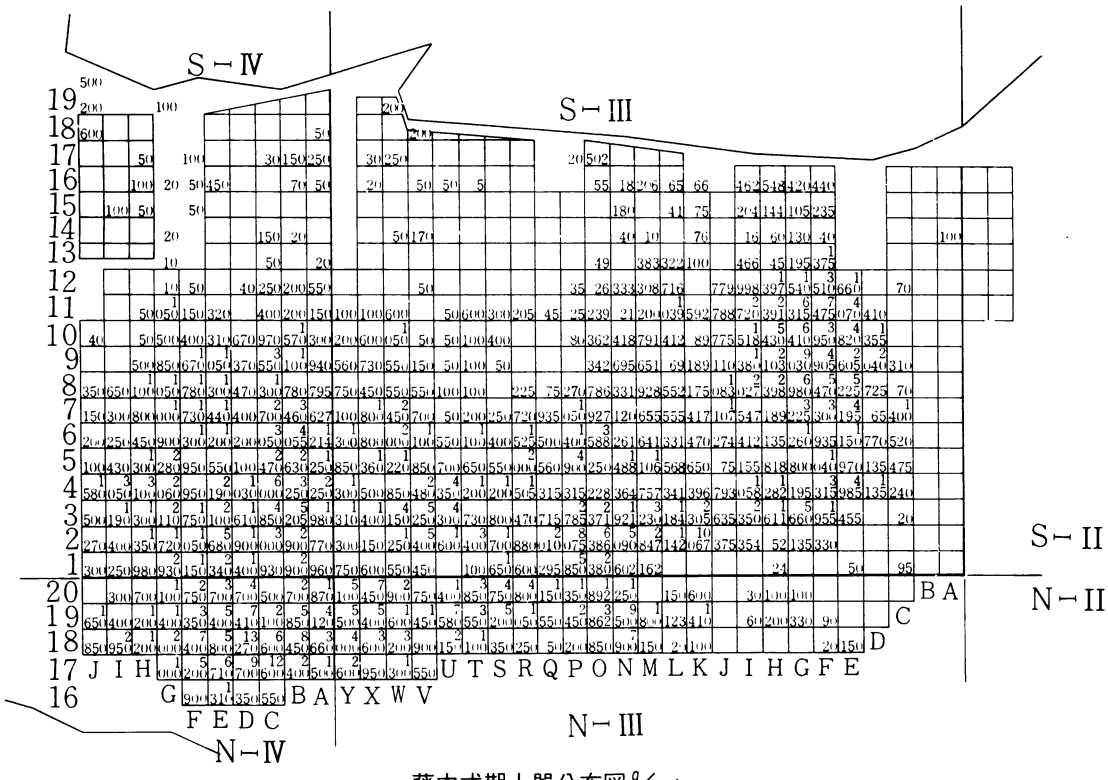


猿沢式期土器分布図 g/16㎡

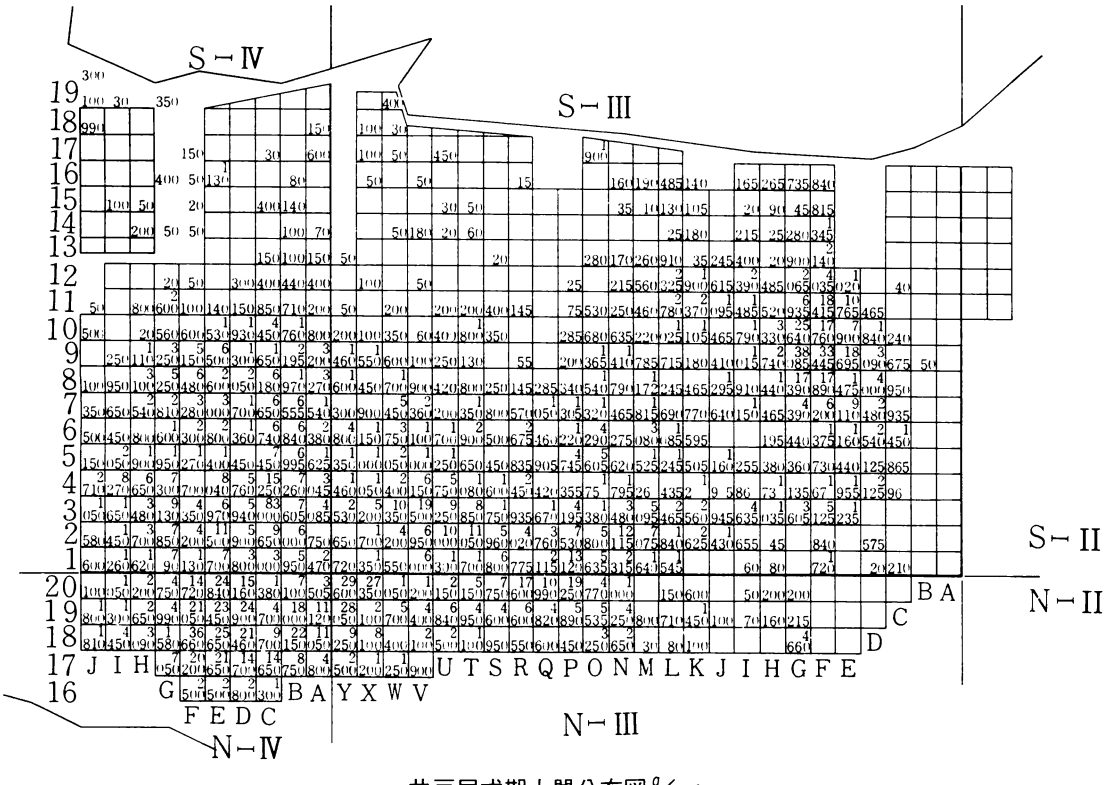


新道式期土器分布図 g/16㎡

挿図42　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(2)

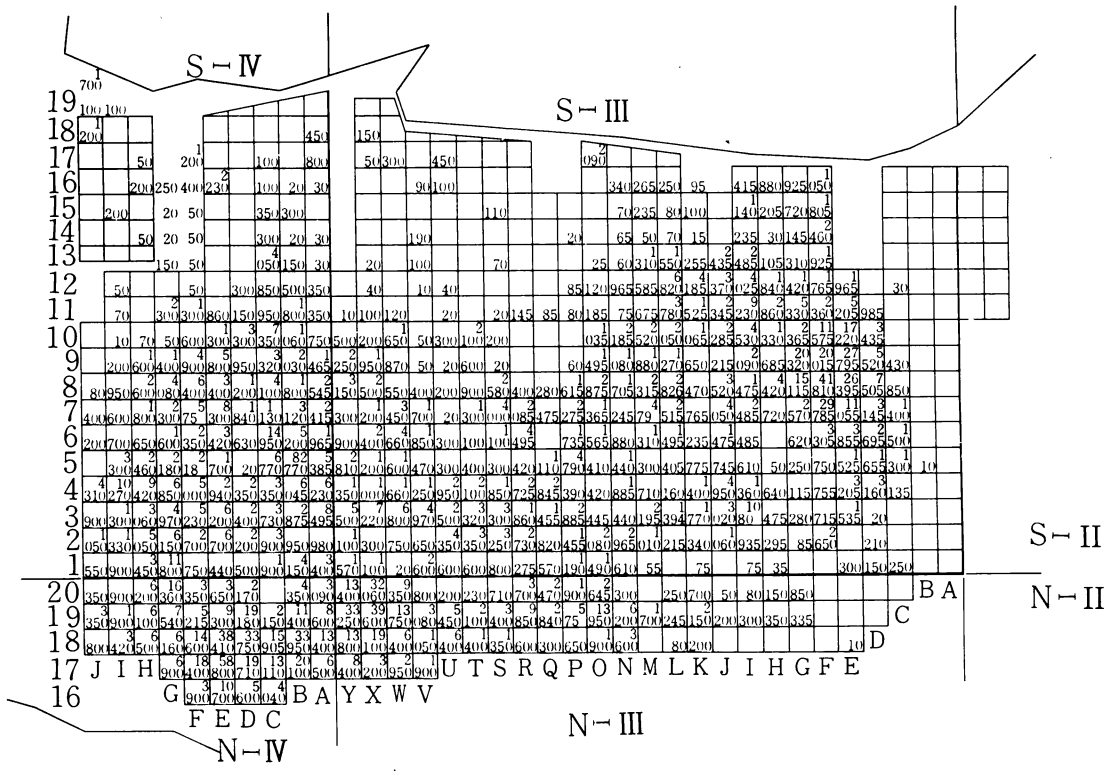


藤内式期土器分布図 9/16㎡

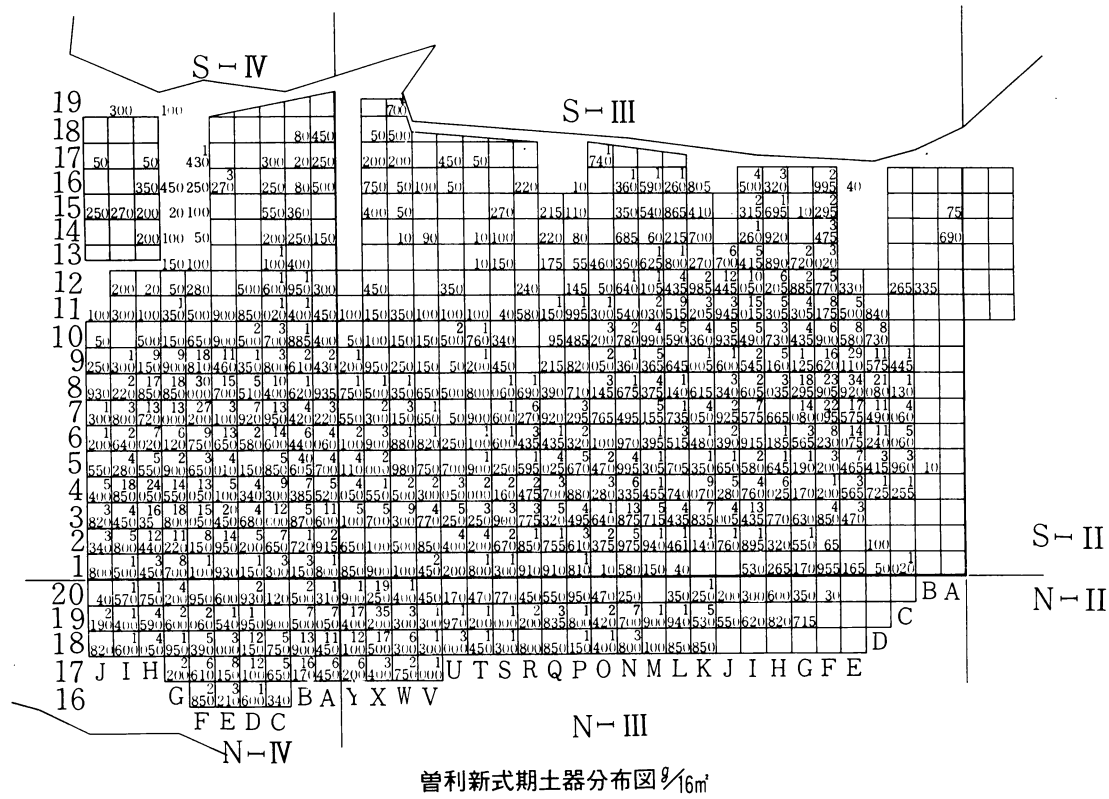


井戸尻式期土器分布図 9/16㎡

挿図43　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(3)

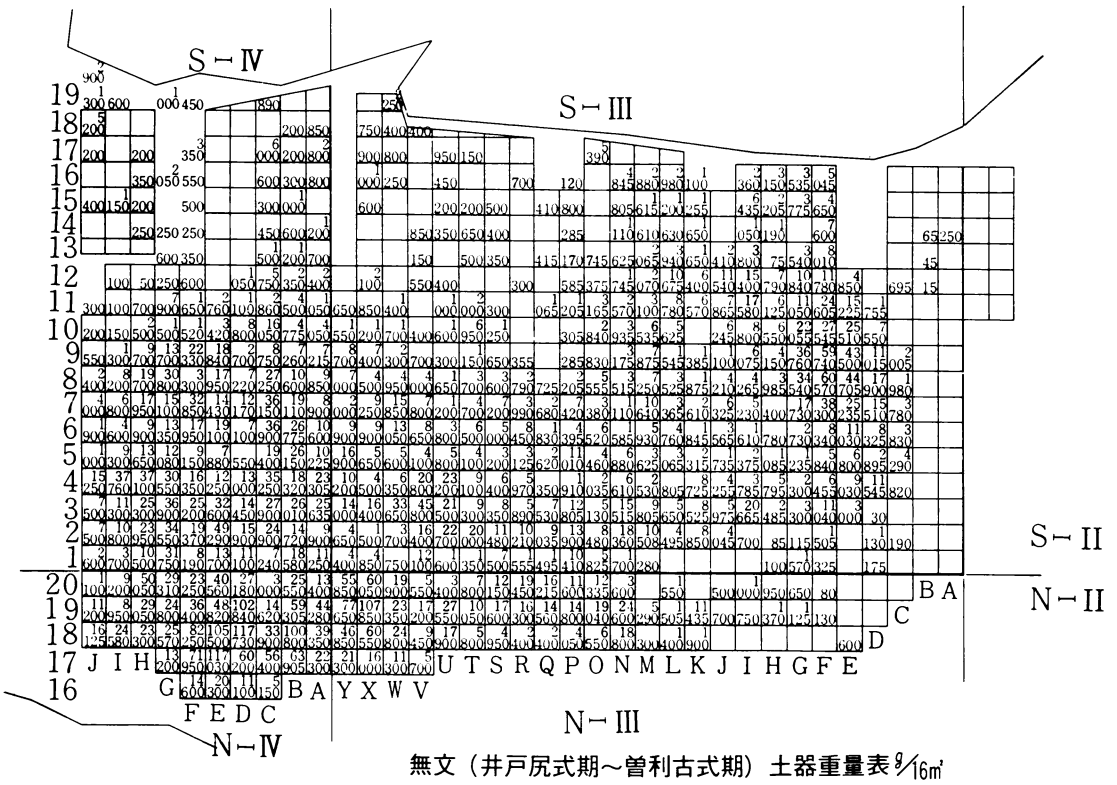


曽利古式期土器分布図 g/16㎡

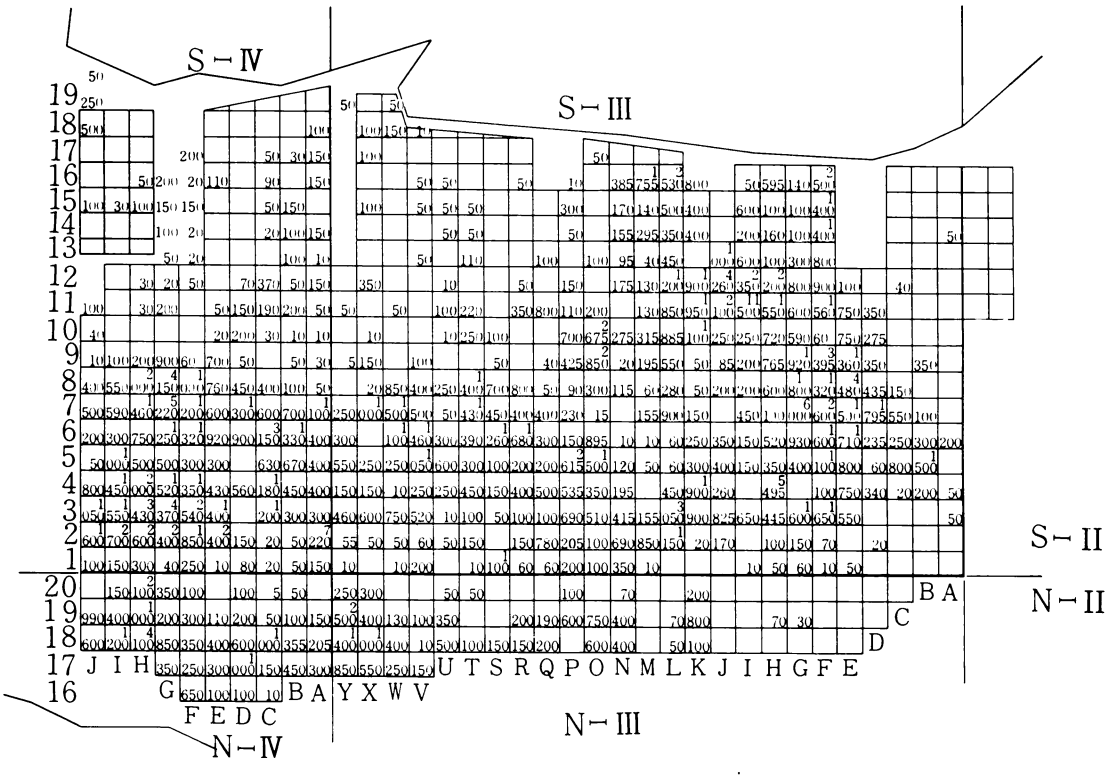


曽利新式期土器分布図 g/16㎡

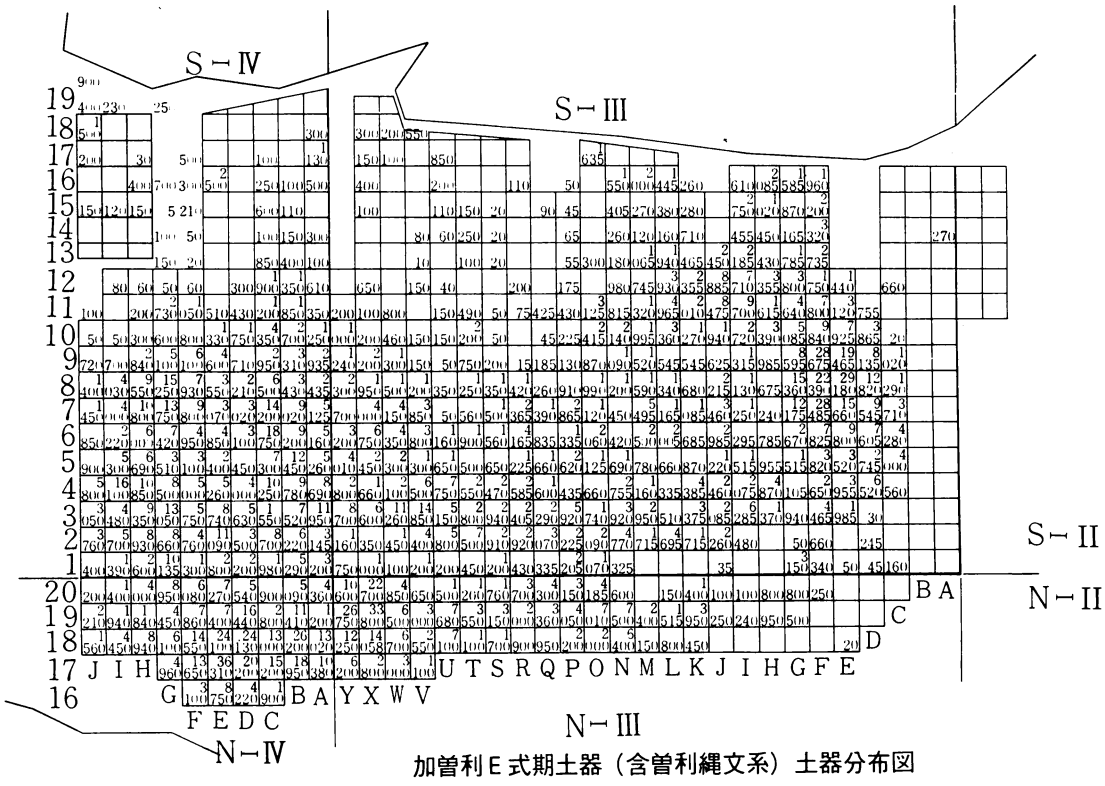
挿図44　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(4)



無文（井戸尻式期～曽利古式期）土器重量表 g/16㎡

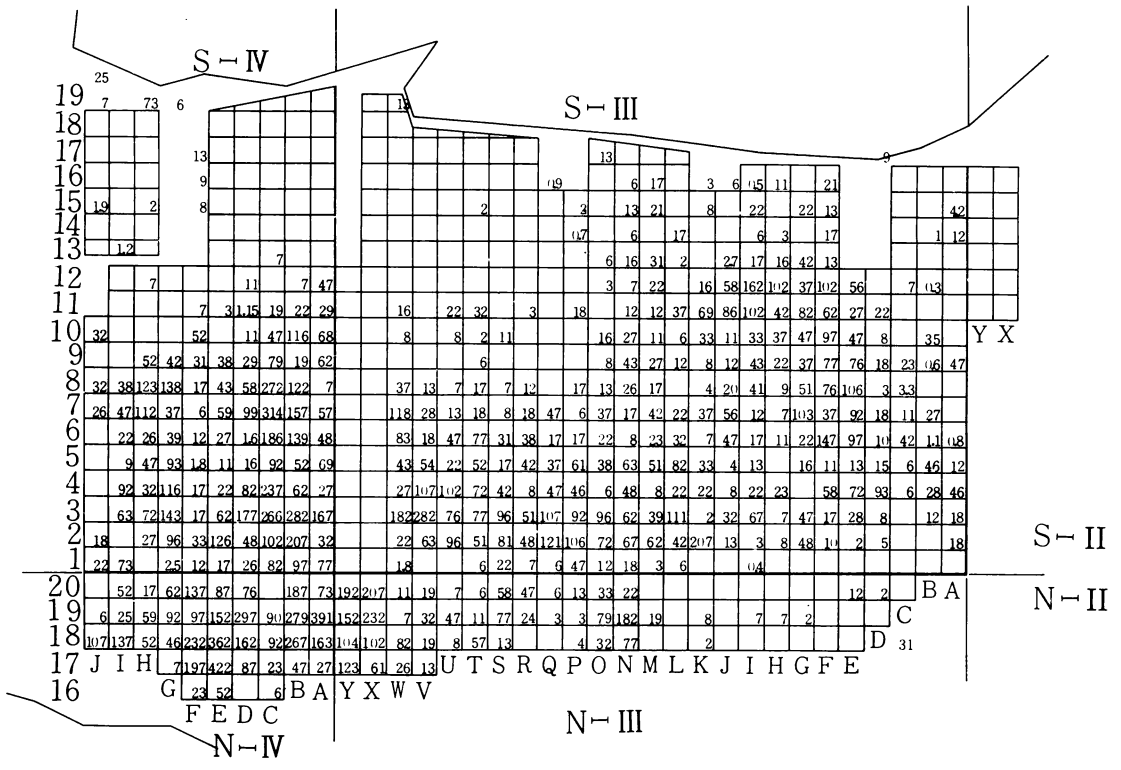


挿図45　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(5)

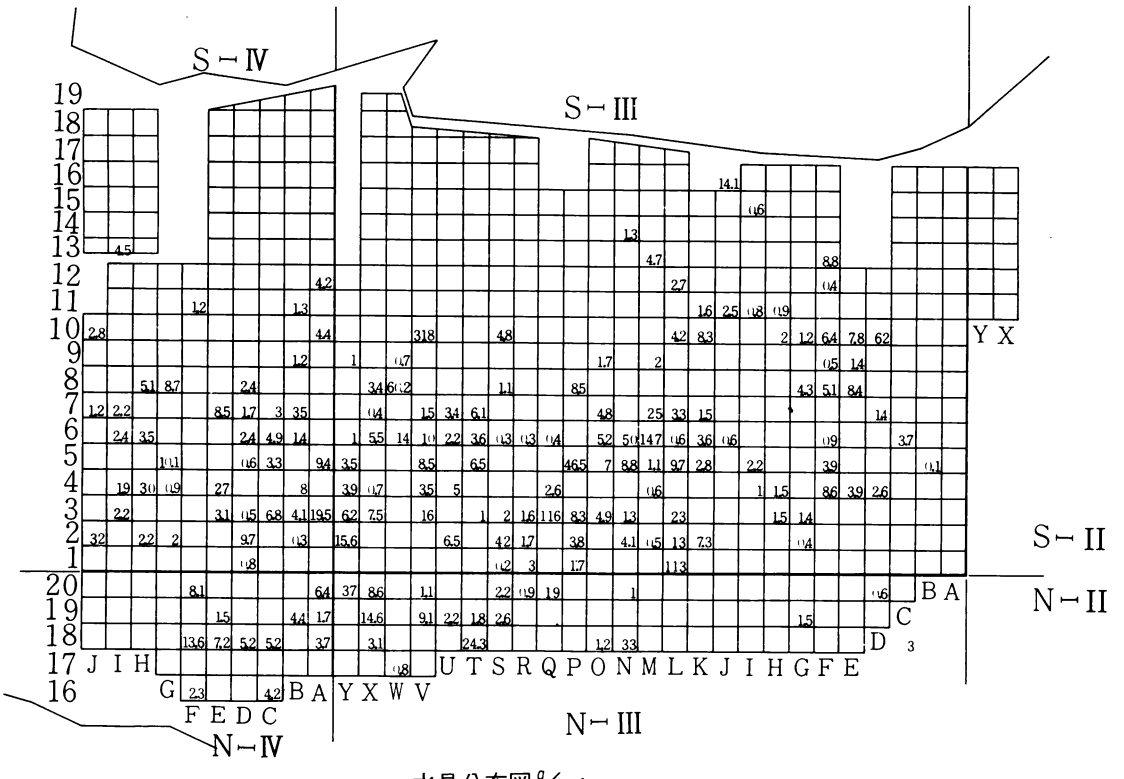


加曽利Ｅ式期土器（含曽利縄文系）土器分布図

挿図46　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区土器重量表(6)



黒曜石分布図 g/16㎡



水晶分布図 g/16㎡

挿図47　釈迦堂Ｓ－Ⅲ区Ｓ－Ⅳ区Ｎ－Ⅲ区Ｎ－Ⅳ区石材重量表

釈迦堂S1式

釈迦堂S2式

釈迦堂S3式

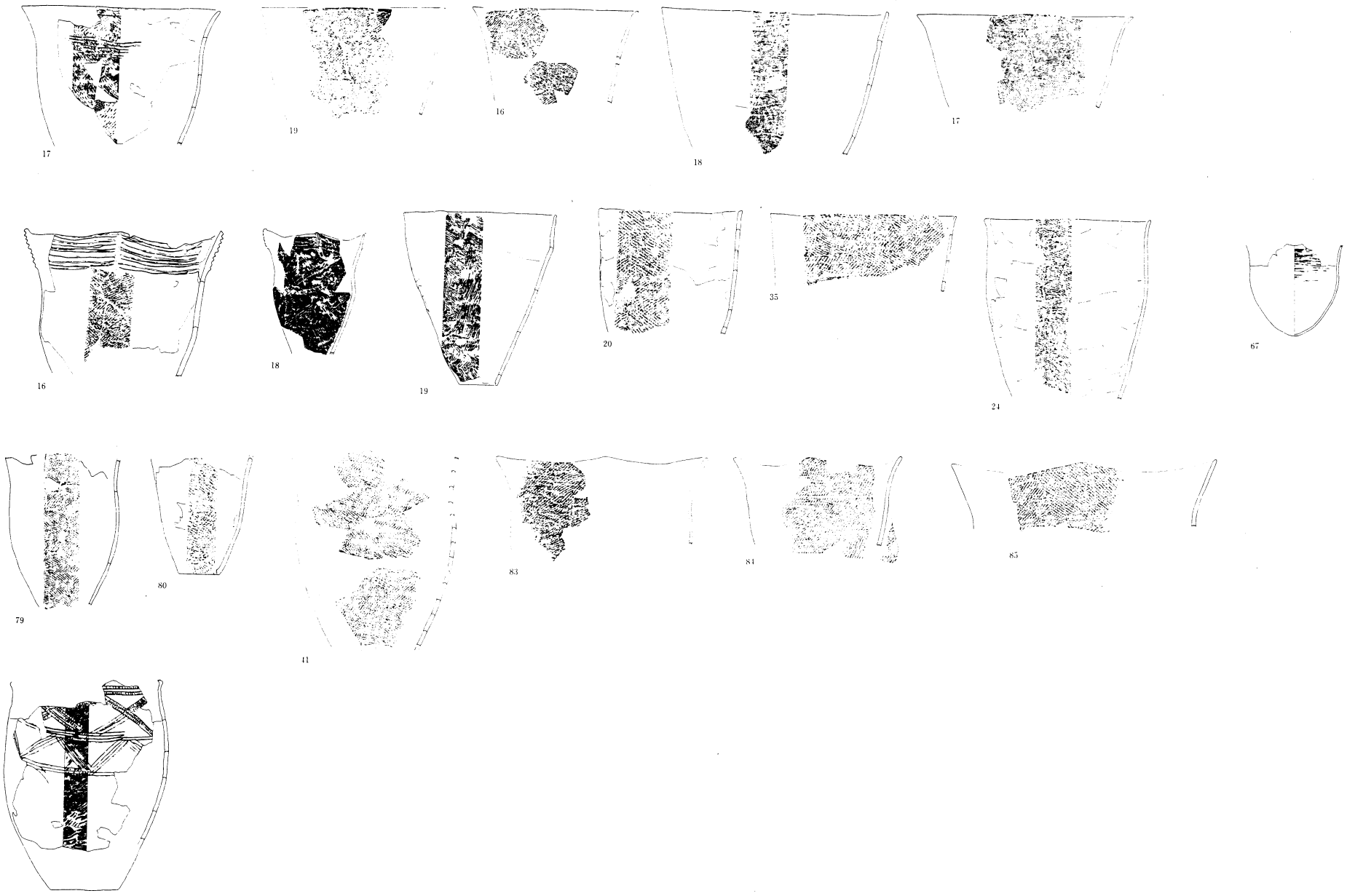
釈迦堂S4式

釈迦堂Z1式

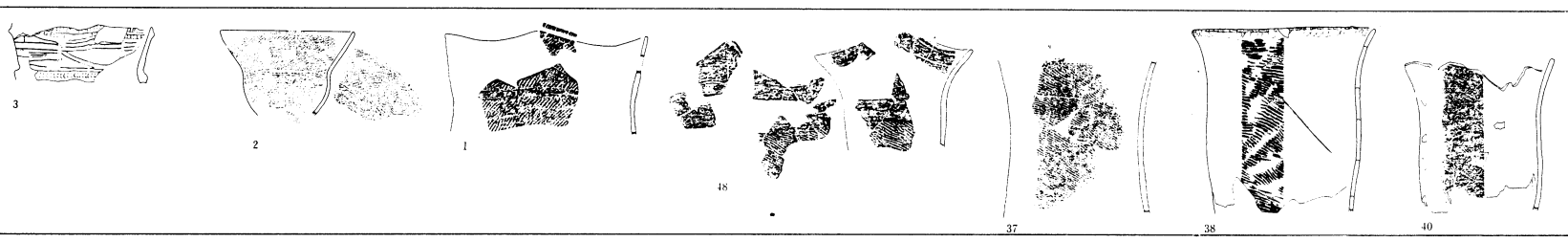
釈迦堂Z2式

挿図48　早期末～前期初頭の土器編年表

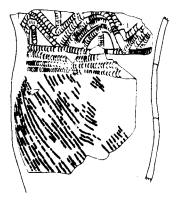
釈迦堂Z3式



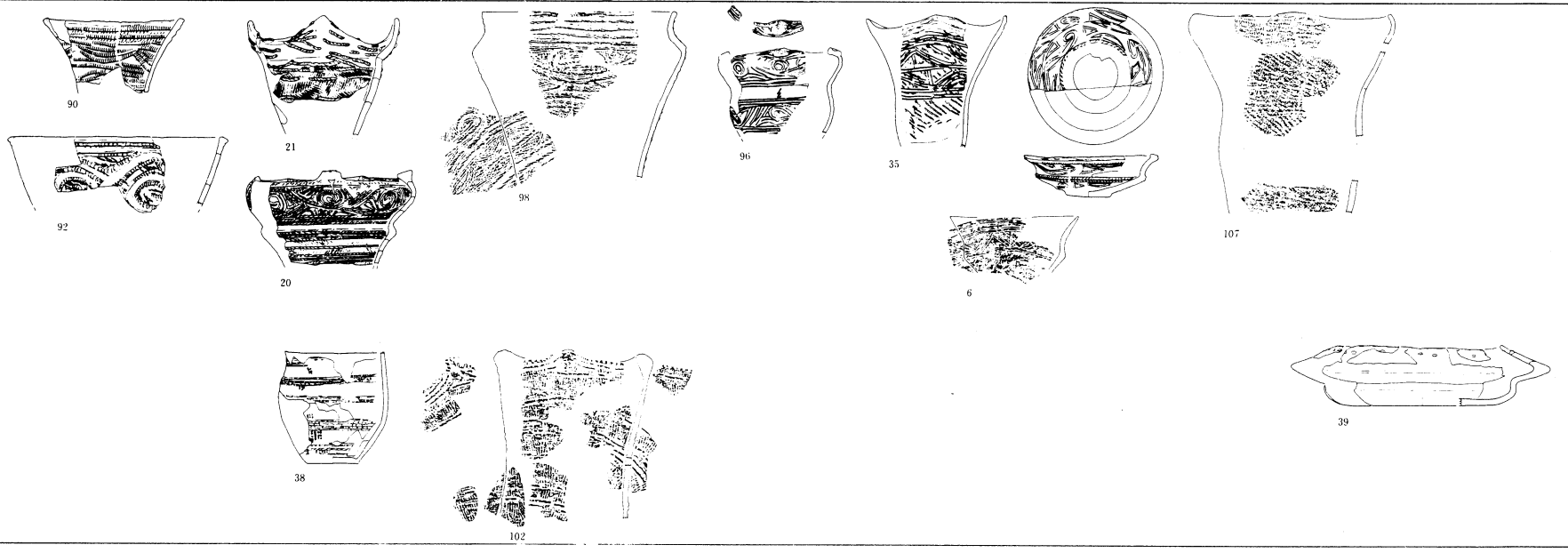
諸磯a式



諸磯b式古



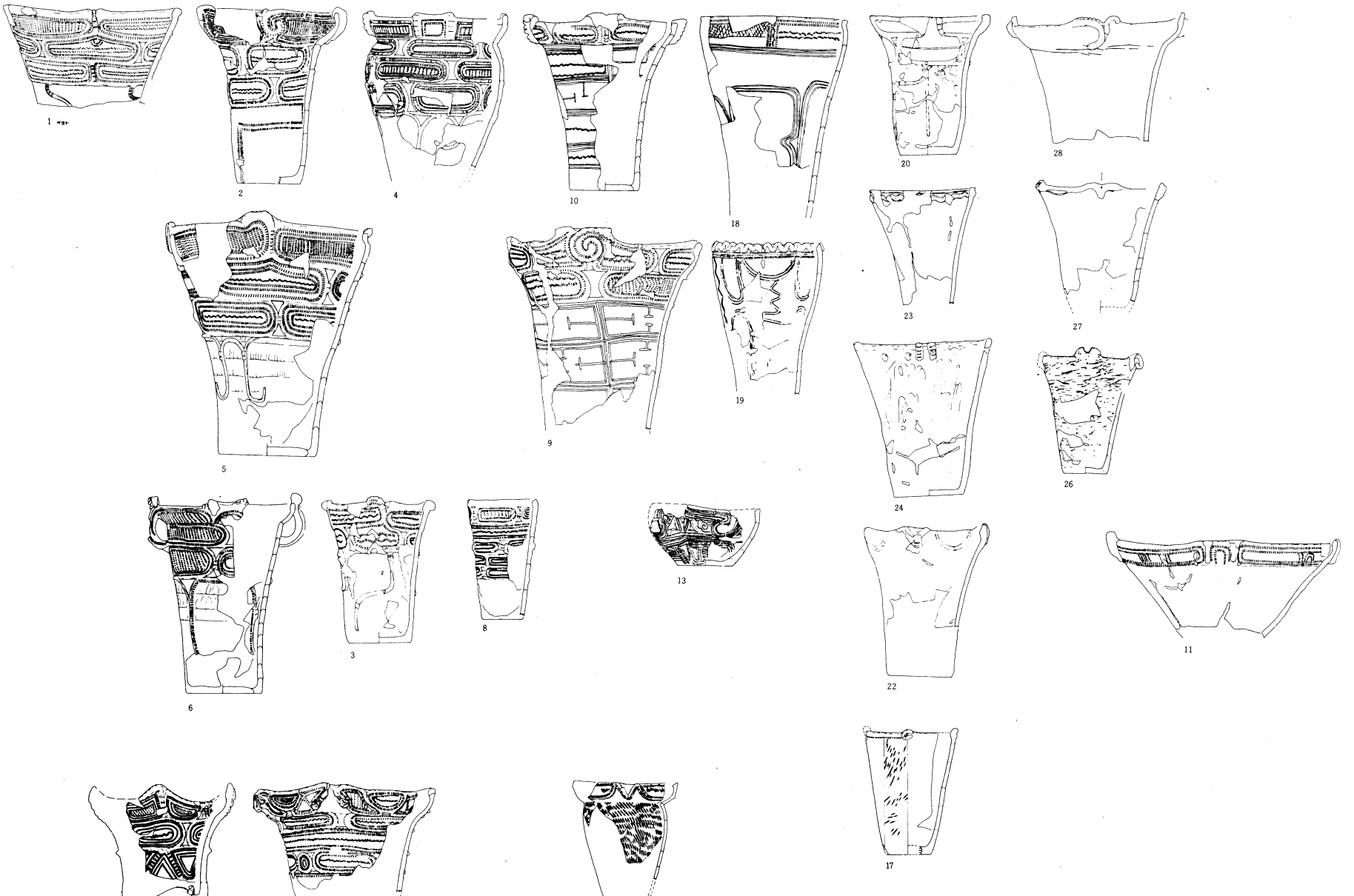
諸磯b式中



諸磯b式新

挿図49　前期の土器編年表

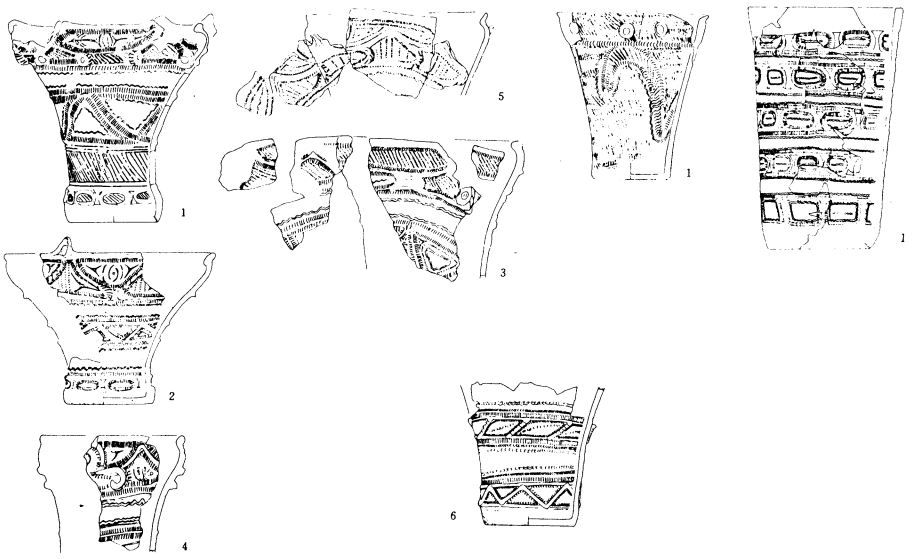
狢沢式第3段階



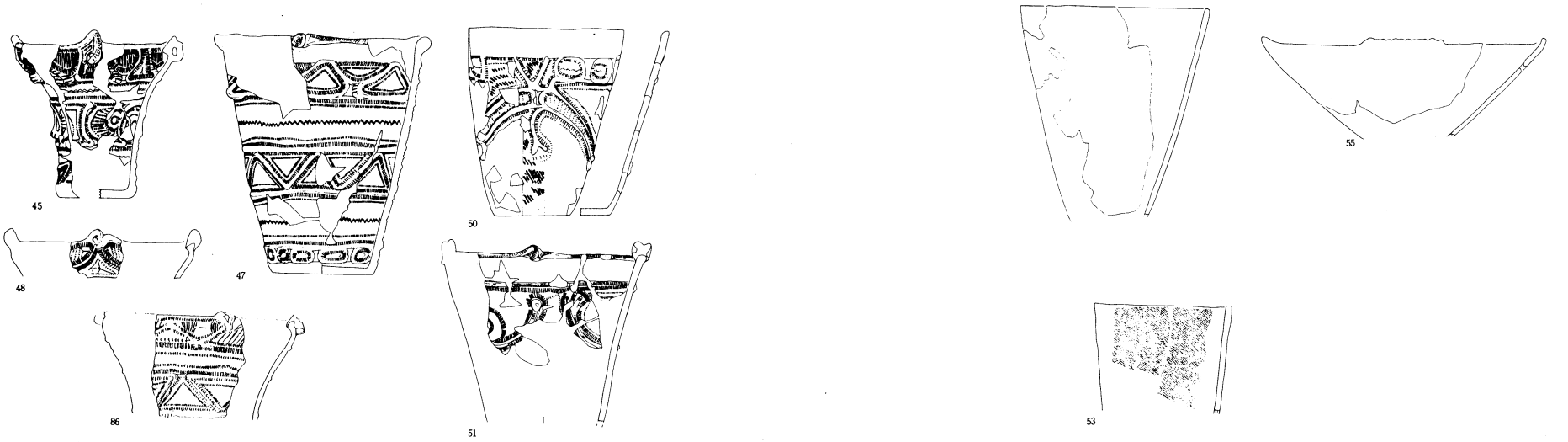
新道式第1段階

挿図50　中期の土器編年表（1）

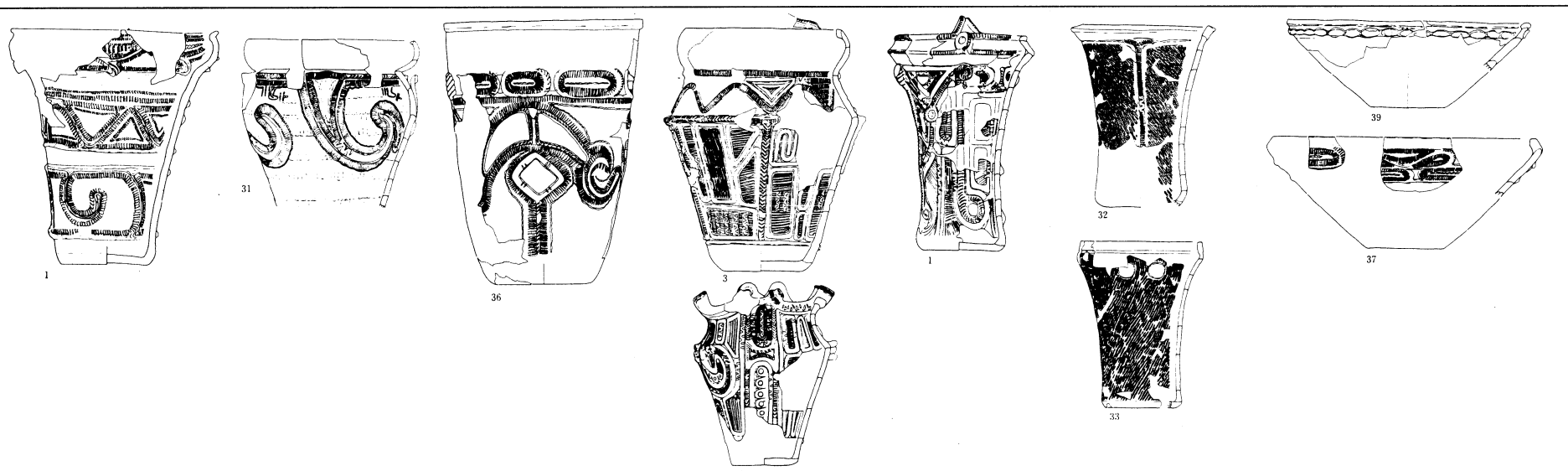
新道式第2段階



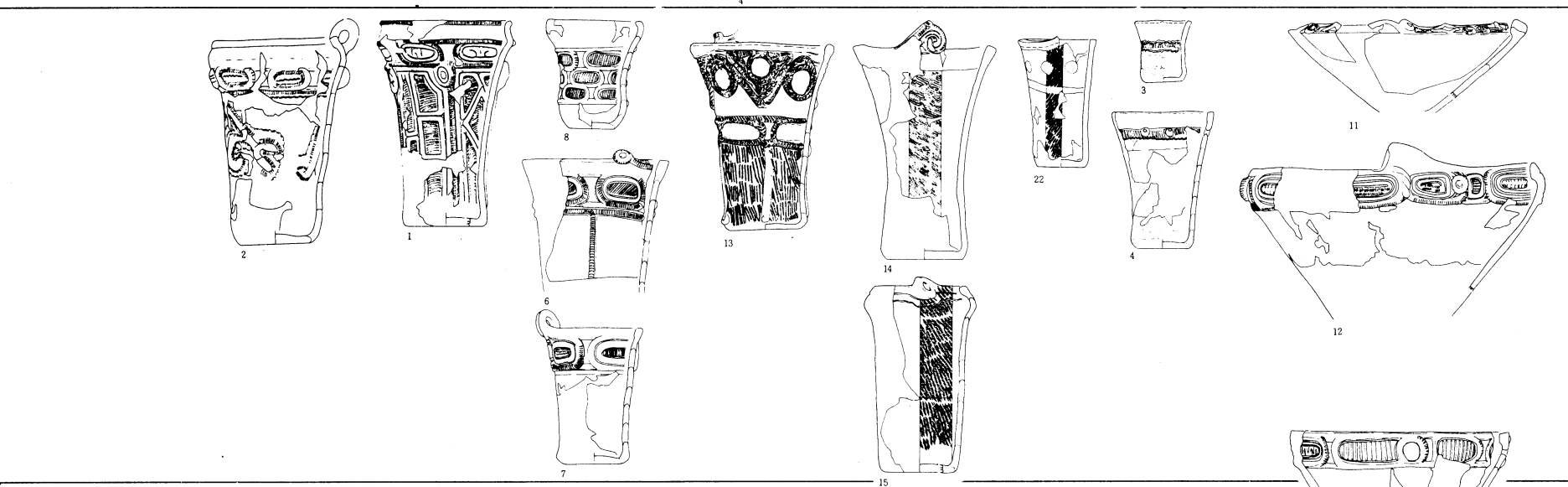
新道式第3段階



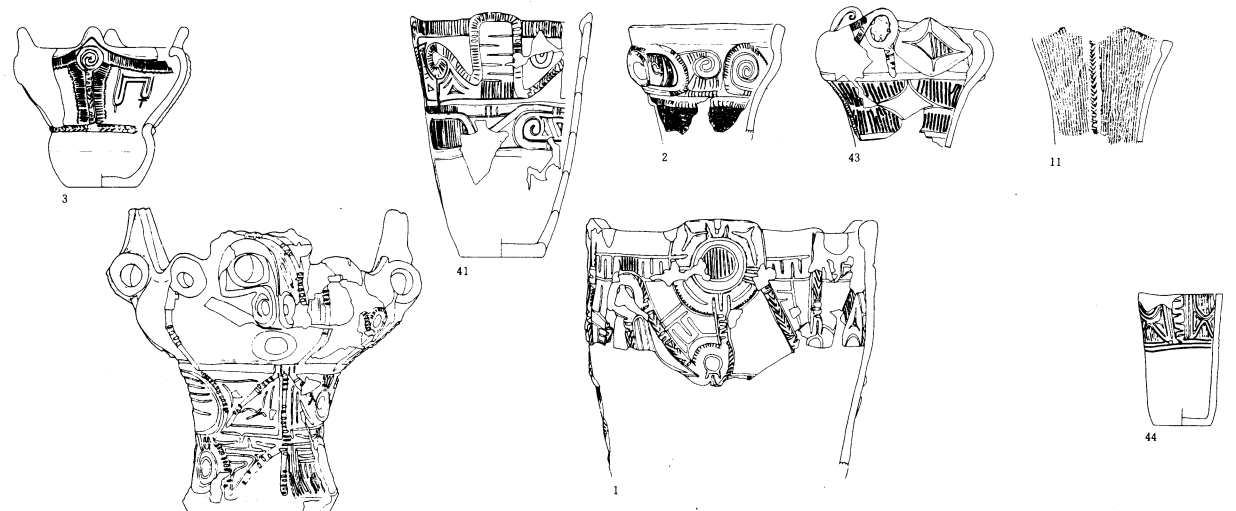
藤内式第1段階



藤内式第2段階

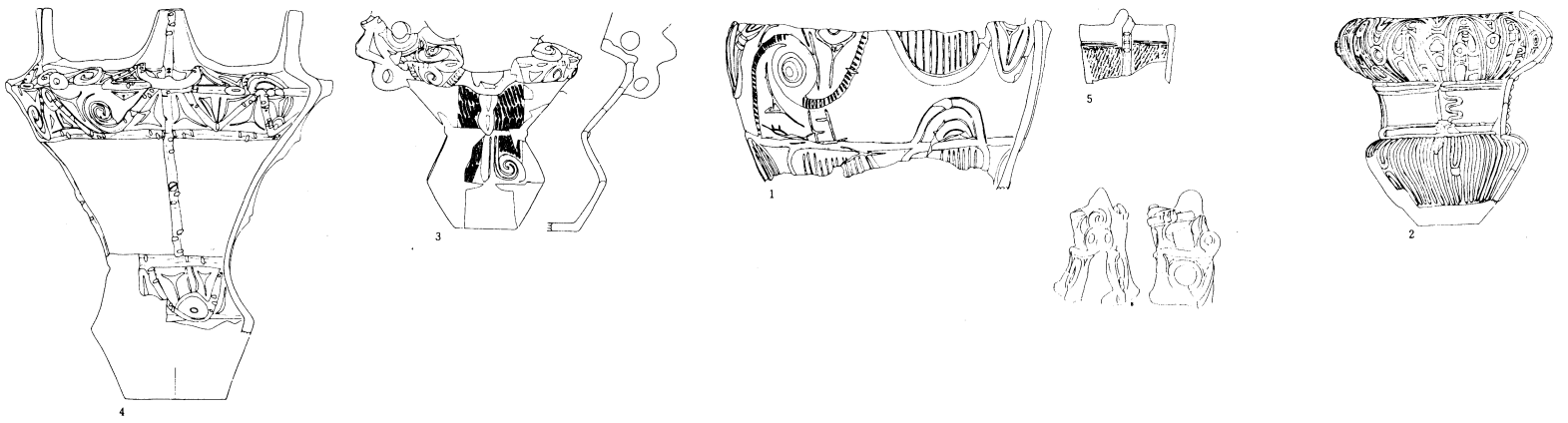


井戸尻式第1段階

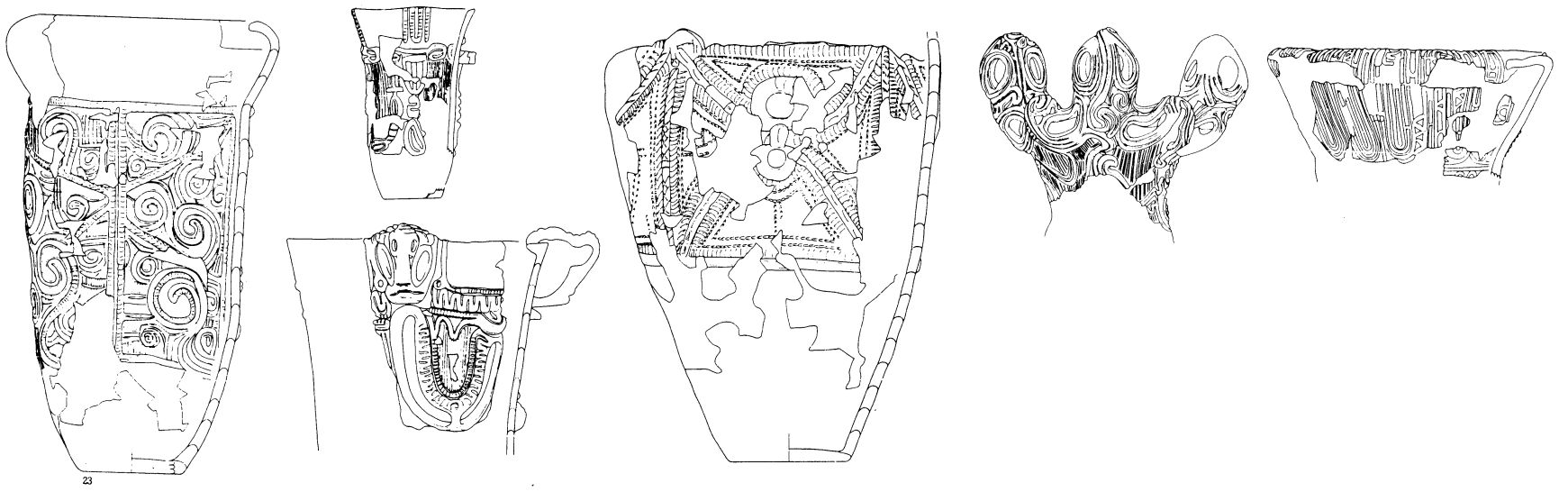


挿図51　中期の土器編年表（2）

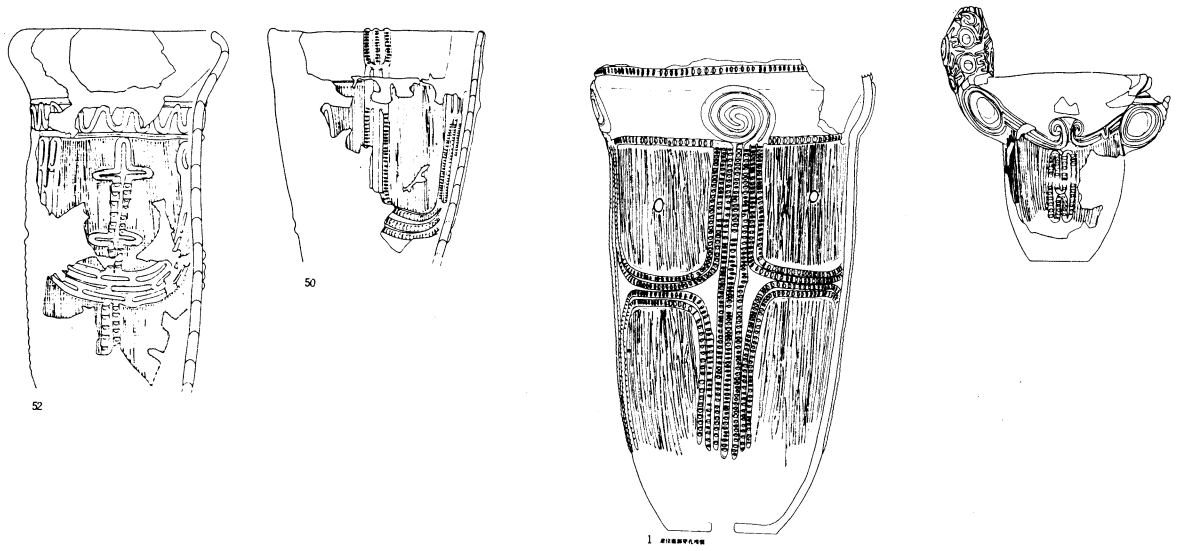
井戸尻式第2段階



井戸尻式第3段階



曽利古式第1段階



挿図52　中期の土器編年表（3）

曽利古式第1段階

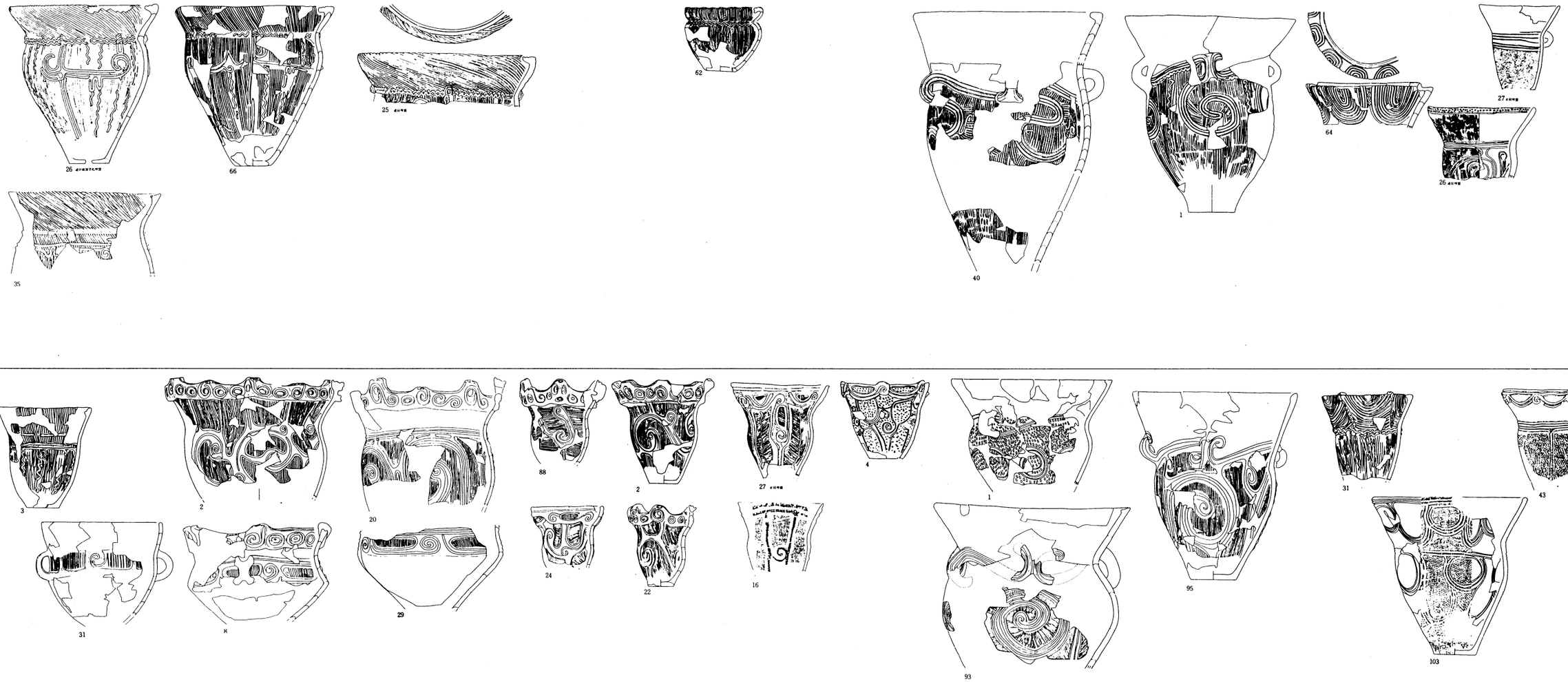
曽利古式第2段階

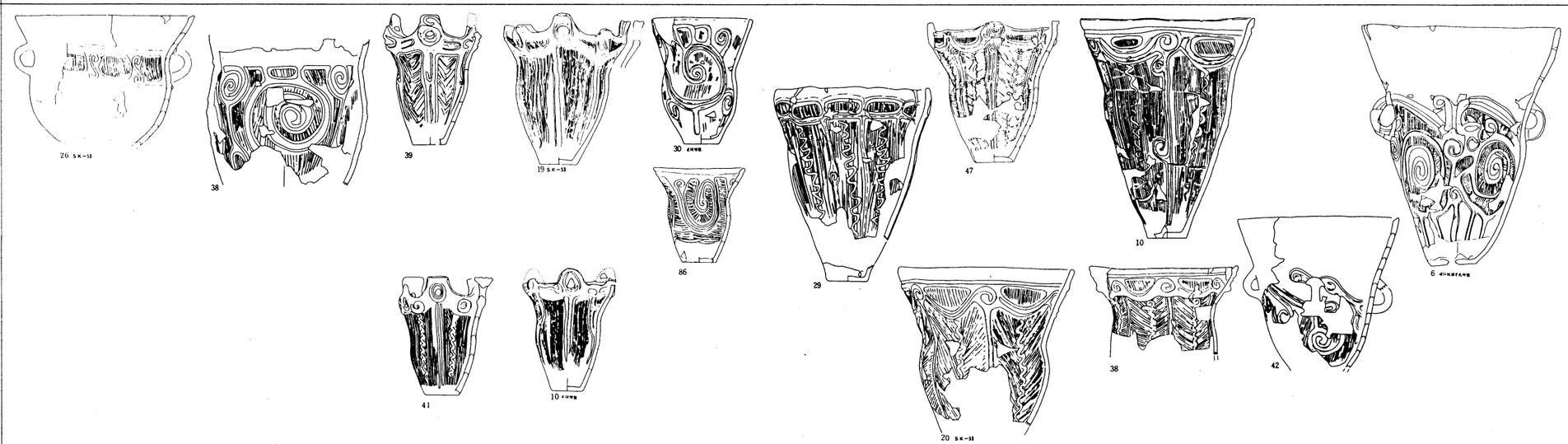
挿図53　中期の土器編年表（4）

曽利古式第3段階

曽利新式第1段階

曽利新式第2段階





挿図54　中期の土器編年表（5）

曽利新式第3段階

曽利新式第4段階

曽利新新式

挿図55　中期の土器編年表（6）

あ と が き

釈迦堂遺跡群の調査に入ったのは1980年の２月であった。桃の木とぶどう棚を取り除かれた寒々とした扇状地の中央部は、余りにも広大であったことが記憶にあたらしい。しかも歩けば土器片があちこちに散乱している状況であった。調査は22ヶ月を要した。その期間ほとんど土日のない日々が続いたが、遺跡の広大さと遺物の豊富さの緊張感が調査に向かわせた。遺跡の素晴らしさが次第に人々に知られるようになり、81年の春からは見学者が毎日訪れ、日曜日には数百人という数であった。そのためプレハブを一棟用意して、仮展示をしたほどであり、見学者用のパンフレットも7000枚を越えた。こうしたことから保存問題も持ち上がり、連日の新聞を賑わすこととなったが、調査は81年11月15日をもってようやく終了したのである。

終了後レプリカの作成もあり、81年は暮れ、82年から一宮町の旧相興農協舎屋において整理作業を開始した。そして83年の秋に旧一宮町役場庁舎に移転した。ここに移転したことによって、膨大な資料を広げる事ができ、整理作業の大幅な進展があった。こうして87年にはようやく『釈迦堂Ⅰ』を刊行することができた。この87年３月をもって整理作業は終了することとなったが、『釈迦堂Ⅱ』の報告は編集の材料がようやく整った段階であったが、センターの所長を始めとする同僚諸氏の理解の上に編集作業を進め、ここに刊行のはこびとなった。

釈迦堂に入って既に８年となる。一時は新聞の「釈放」「解釈」などの「釈」の字が、あたかもワープロの検索機能のように目に入るという精神状態が続いた。一人で膨大な資料を抱え、作業としては毎日毎日進んでも、果たしてこれをまとめることができるかどうかという危惧が頭を離れなかった。

遺跡の内容は私の能力を遥かに越え、その実態をどの程度報告できたのだろうか。例えば石器については、ようやくその数を報告できたに過ぎないし、土壙出土の土器については拓影までは完了したものの編集は断念した。20トンを越える土器は復元可能なものを報告した。土器の復元と報告はほぼできたが、グリット出土の土器は復元したもののみを報告しており、大半のものは、土器片の重量をグリット別に報告することによって、報告できない小さな土器片から縄文時代の土器の消費の一端を知ることを可能にしたに過ないと思われる。

なお、報告者の責任上「まとめ」を行ったが、これは編集が整ったこの１ヶ月で書き上げたもので、問題点の一端をあげたに過ぎず、今後に残された課題のほうが大きい。

最後に、長期にわたり、叱咤激励をいただいた方々、あたたかいお言葉をいただいた方々、研究上のアドバイスをいただいた方々、発掘、整理に御協力をいただいた方々に衷心より感謝申し上げ、筆をおく。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

釈迦堂 Ⅱ

山梨県東山梨郡勝沼町三口神平地区

印刷　1987．3．25
発行　1987．3．30

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行　山梨県教育委員会
　　日本道路公団
印刷所　合資会社　ヨネヤ印刷